真・恋姫†無双 聖フランチェスカ学園物語

西森

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真・恋姫†無双　聖フランチェスカ学園物語

【Ｎコード】
Ｎ９８８７Ｒ

【作者名】
西森

【あらすじ】
時は２０ＸＸ年、女子高である聖フランチェスカ学園は近年共学となったが、男女の差は激しかった。これはそんな学園に転校してきた男、北郷一刀の日々の記録である。（ＯＶＡの学園とは設定が少し違います）

1時間目「序章の始まり」（前書き）

初めての方ははじめまして、西森です。何だかんだ言いながら二作目は学園ものをすることに決まりました。駄作かもしれませんが頑張りますのでよろしくお願いします。

1時間目「序章の始まり」

ここは東京のどこかにある聖フランチェスカ学園。この学園は今まで女子高だったが、学園長の判断で共学となった。

そして、入学式があった次の日の翌朝

？「えっほ！えっほ！」

学園の前にそびえ立つ心臓破りの坂を走っている男がいた。

？「まったく！飛行機が一日遅れるなんてついてないぜ！おかげで入学式より一日遅く着いちまった」

男が坂を走っていると

？「へぅ～、やめてください！」

女の子の叫び声が聞こえてきた。

アニキ「いいじゃんよ！お嬢ちゃん！」

チビ「俺達と遊ぼうっす！」

デク「ンだー！」

周りの人が見てみぬふりをするなか、少女に危機が迫る。

男達が少女に近寄ろうとすると

ドカッ！

アニキ「ぐふっ！？」

アニキが突然倒れた。

？「やめなよ！嫌がってるだろ！」

男がアニキを殴ったのだ。

チビ「何をこの…」

二人は反撃しようとするが

チビ・デク『ギャー！？』

男の顔を見るなり二人は逃げていった。

月「ありがとうございます。私は董卓　月と言います、あなたは…？」

少女がお礼を言って名前を聞くと男は

一刀「俺の名は北郷一刀、それじゃまたね！」

男は去って行った。

1時間目「序章の始まり」（後書き）

細かい設定として、

各キャラの名前は基本は
性　＋　名　＋　真名　になってますが、名や真名がないキャラの場合はアニメやゲームの声優から名前をとっています。
それでも無い場合は西森が考えています。
ちなみに恋姫キャラの中に3年生はいません。（3年生はオリキャラです）
どのクラスに誰がいるかは後々説明しますが、クラス分けは西森があみだで決めました。（学年は西森の考えです）

2時間目「おとしの北郷」（前書き）

今回は話の中に小さなトラブルを入れてみました。

しばらく後書きの方にクラスのメンバーを紹介していきます。

2時間目「おとしの北郷」

聖フランチェスカ学園校舎内

一刀は2年A組の教室の前に立っていた。

一刀「（ここから俺の新しい学園生活が始まるんだな！）」

ギュー！

一刀は拳を握り締めて感動し、そして教室の引き戸に手をかける。

ガララッー！

一刀「遅くなりました！今日からこのクラスに転校してきた北郷一刀で…」

頭を下げた一刀が顔を上げると

そこには下着姿の天使達。いや、着替中の女子達がいた。

この状況で当然のごとく女子達の反応は…

女子達『キャーー！！』

みんなが騒ぎ出した。

一刀「えっ！？すいません俺はちょっと…」

一刀は弁解しようとするが

？「いいから…」

小麦色の桃色の髪の娘が一刀を睨みつけると

？「あっちに行け―！！」

ブゥン！。

女の子は細身の体のどこにそんな力があったのか机を持ち上げて一刀に放り投げた。

ドカッ！！。

一刀「ぐはっ！」

机は一刀の顔面に命中し、一刀は教室の外に飛ばされた。

そして、ガラランッ！

勢いよく扉が閉まると中から声が聞こえてきた。

？「少しの間待っていろ！！！」

声の主は机を放り投げた女の子だ。

一刀は言われた通りその場で待っていると

ガララッー！

扉が開いて制服に着替えた女子達が出てきた。

一刀「（今朝出会った子もそうだけど、この学園の女子の制服って可愛いいな）」

一刀が制服を眺めていると

？「この痴漢が！何を眺めているのだ！！！」

机を投げた女の子が怒る。

一刀「痴漢だなんてそんな！？俺は今日このクラスに転校してきた者で…」

一刀は弁解するが

？「何ふざけたことを言っている！馬鹿なことを言うなら斬るぞ！」

チャキッ！。

女の子は腰にあった剣に手を触れた。

一刀「（この現代に剣を持ってるなんて銃刀法違反じゃないの！？）」

一刀が驚いているとあることを思い出した。

一刀「待った！ちゃんと学園長からの手紙があるからさ！？」

一刀は懐から手紙を取り出すと

？「見せてみろ！」

パシッ！。

女の子は一刀から手紙を奪い取って見てみる。すると…

？「蓮華さんどうしました？」

手紙を読んでいた孫　蓮華の様子を後ろにいた娘が聞いてみると

蓮華「この手紙には確かにこいつをこの学園に転入させると書いてあるが、このクラスとは書いていないぞ！」

蓮華の一言に周りの女の子は驚いた。

それを聞いた一刀は

一刀「すいませんでした！」

ピュー！！。

みんなが止めるより早く一目散に逃げていった。

一刀が去った後蓮華は

蓮華「あいつは何しに来たんだ？」

下着姿を見られた事を忘れて首を傾げる蓮華であった。

しばらくして一刀が進んでいった先には

ボロ～ン！

今にも幽霊が出そうな教室があった。

一刀「ここかな？」

一刀は恐る恐る教室に入る。

教室の表札には『漢組』と書かれていた。

ガララッー！

一刀「今日から転入してきた北郷一刀です！よろしくお願いしま…」

頭を下げた一刀が顔を上げると

ムッサ～！

教室には男ばかりが１２人もいた。

一刀「男だらけかよここは！？」

一刀が驚いていると

？「あんたが転入生かいな？よろしく頼むわ！」

一刀に眼鏡をかけたモテなさそうにない人相の男が近寄ってきた。

一刀「誰だよお前！？」

一刀が聞くと

及川「わいの名前は及川祐(たすく)同じクラスメートやよろしくなっ！かずピー♪」

及川が人に変なあだ名を言っていると

？「済まないな、そいつも昨日転校してきたばかりなんだ！」

及川の後ろには赤髪の男が来ていた。

一刀「あんたは誰だ？」

一刀が聞くと

華佗「俺の名は華佗元化(げんか)だ！この学園には今年で2年もいるんだ」

つまり華佗は一刀達のように転入組ではなく共学となった去年から在籍していたのだ。

一刀「へぇ～、学園に関しては俺の先輩か、よろしくな華佗！」

一刀は握手を求めると

華佗「あぁよろしく！」

ガシッ！。華佗は握手を返してきた。

及川「俺もおるで！」

及川も握手に混ざってきた。

及川「あと二人来てへんけどこれで全員や！」

及川が言うと

キ～ンコ～ンカ～ンコ～ン♪

授業の鐘が鳴り出した。

バタバタッ！。

鐘が鳴り終ると同時に全員が椅子に座り出した。

華佗「一刀もどこでもいいから座っとけ！」

一刀「わかった！？」

華佗に言われて空いている席に座る一刀

そして鐘が鳴り終ると

ガララッー！

豪快に扉が開き、中に入ってきたのは物凄い筋肉質の変態であった。

変態は教壇に立つと

卑弥呼「ワシが漢組担任、巌蝉　卑弥呼である！！」

ビリリッー！！。

卑弥呼は某無敵塾長のごとく大声で叫んだ。

当然のごとく、教室内は荒れ、倒れる生徒達。

しかしそんな中卑弥呼は

卑弥呼「まだ来てないのは左慈と于吉か！」

構わず出席をとるのであった。

そんな中、

及川「先生！転入生が来てまんで！」

これを聞いた卑弥呼は

卑弥呼「おぉ！来ておったのか！ならば自己紹介を…」

卑弥呼が最後まで言おうとすると

ガララッー！

漢組の教室の扉がいきなり開いた。

？「授業中すまないが失礼する！」

入ってきたのは濃い紫色の髪で睨んだ目つきの長髪の女の子が入って来た。

？「このクラスに北郷一刀という男はいるか？」

女の子が呼ぶと

一刀「俺ですけど何か？」

スッ！

一刀が手を上げると

？「そうか、お前か…」

スッ！

女の子は腰にある剣に手を伸ばすと

？「ならば死ねー！！！」

バッ！。

いきなり斬りかかってきた。

一刀「うわっ！？」

サッ！。

一刀は何とか剣をかわす

一刀「ちょ…ちょっと待って！きみ誰？何で俺が死ななきゃならないの！？」

一刀が聞くと及川が答える。

及川「かずピー、その娘は2年C組所属の甘寧　思春はんや！？孫家のボディガードで下着はさらしと褌着用（ふんどし）。3サイズは上から…」

ドグボッ！。

及川は思春に顔面蹴りを受けた。

この情報は及川メモ、及川が集めた学園のあらゆる可愛いい女子の情報が書かれている。

一刀「その娘が俺に何の用なの！？」

一刀が聞くと思春は

思春「桂花から聞いたぞ！貴様が蓮華様に恥をかかせたとな！！！」

桂花とは蓮華と同じ2年A組所属の荀イク桂花でさっきの騒動の時にも出会っていた。

そして彼女は共学反対派の一人でもあり、男を殺すためなら平気で

嘘の情報を伝えるのだ。

思春「貴様よくも蓮華様に恥をかかし、あんなことやこんなことを！！！」

一刀「そんなことしてないから！？」

一刀は弁解しようとするが

思春「問答無用だ！殺してやるー！！！」

ブンッ！

思春は再び一刀に剣を振るった。

今度も何とか避けた一刀だが

一刀「ちょっと！？銃刀法違反じゃないの！？」

一刀は正論を言うが

華佗「一刀、言い忘れていたがこの学園は護身のため武器を持つことは有効なんだ！」

あっさりと覆(くつがえ)された。

思春「そういうことだ死ねー！！！」

ブンッ！

一刀「ひっ！？　」

一刀は襲ってくる剣を避けまくる。

及川「アカン！？助けに行きたいけど思春相手じゃ勝てへん！？　」

華佗「うちのクラスで武力に自信がある奴は…　」

二人が悩んでいると

ガララッー！。

突然教室の扉が開いて

？「何で俺が来なくちゃいけねぇんだよ！　」

？「まぁまぁ左慈、来ないと卒業できないですから　」

遅れてきた二人の男、左慈　元放と于吉　武人が入ってきた。

及川「さっちー！、うっきー！来てくれたんやな！あの喧嘩を…　」

及川がふざけたあだ名で呼ぶと

ドグボッ！

左慈に顔面蹴りを喰らってしまった。

左慈「ふざけた名で呼ぶんじゃねぇよ！！！　」

左慈が怒っていると

及川「そんなことよりも早くあいつを助けてぇな！？」

すぐに復活した及川が助けを求めると

華佗「いや、助けなくてもいいかもしれないぞ」

華佗が言うと一刀の方を指さす。すると…

華佗「一刀の奴さっきから思春の攻撃を見きって避けているんだ！」

華佗に言われて一刀を見てみると

サッ！サッ！

華佗の言う通り一刀は思春の攻撃を見きって避けていた。

及川「んなアホな！？思春の速さは学園でも五本の指に入るで！？」

及川が驚いていると

左慈「あれっ？あの戦っている奴見た事あるぞ」

左慈が思い出していると

ガララッー！！。

再び扉が開き出す。

蓮華「思春！桂花から聞いたぞ何をしているんだ！？」

入ってきたのは蓮華だった。

しかし蓮華は気付いてなかった。

この漢組は女っ気がないため女子に飢えた男が山ほどいる。

そんな中に蓮華のような美女が入ってくれば…

男達『お～ん～な～！』

ピラニアの水槽の中に入れられた豚のごとく襲われてしまうのだ。

蓮華「キャー！！」

女に飢えた男達が蓮華に襲いかかる！

思春「蓮華様！？」

蓮華の悲鳴を聞いた思春が向かおうとするが間に合わない！

そして男が蓮華の肌に触れようとした瞬間！

ドカッ！。

触れようとした男はぶっとばされた。

蓮華の近くにいたのは

一刀「大丈夫？」

いつの間に蓮華のそばに来たのか一刀が立っていた。

蓮華「すまんな、礼を言う／／／」

この時、蓮華の顔は赤くなっていた。その理由は一刀にお姫様だっこされていたからである。

しかし男達はいらついていた。

男達『北郷！邪魔するなら殺してやるー！！！』

ダダッ！

男達は全員武器を持って一刀に襲いかかる！

及川「もうアカン！早く助けな！？」

及川が慌てて職員室に向かおうとすると

左慈「待てよ！」

左慈に止められた。

左慈「あいつはあれくらいなら屁でもねぇよ」

左慈が言うと

于吉「左慈は彼を知っているのですか？」

于吉が聞いてきた。すると左慈は

左慈「あいつは相手が男と女じゃ態度が違う奴で九州では有名でな…」

左慈は日本の強い奴に詳しかった。

そして左慈が言い終わる前に

ドッコンッ！。

最後の男がぶっ飛ばされた。一刀は一人でクラスの男子１０人を相手に勝利したのである。

及川「かずピーって凄い奴なんやな！？」

及川が驚いていると

左慈「驚くのはまだ早いぜ！奴の凄いところは他にあるのさ」

倒された男達を華佗が治療していると

一刀「もう大丈夫だよ（ニコッ！）」

一刀は蓮華にスマイルをする。すると蓮華は

蓮華「ボッ！／／／／」

一瞬で茹で蛸のように顔が赤くなった。

蓮華「（一体どうしたのだ私はなぜ赤くなっているのだ！？）」

この時蓮華はこれが恋だと気付いてなかった。

左慈「あれが北郷の凄いところで本人も知らないうちに女を惚れさせることからつけられた異名が『おとしの北郷』だ！」

これより以前に一刀も知らないうちに種馬スキルを発動していた。
（本人に自覚はない）

思春「おい貴様っ！」

思春が一刀に声をかける。

思春「蓮華様を助けてくれたから今日のところは勘弁してやるが次やったら命はないと思え！」

ダッ！

思春は赤くなっている蓮華の手を引っ張りながら去って行った。

そして教室でこんな騒ぎがあったにもかかわらず担任の卑弥呼は

卑弥呼「本日、怪我で１０名が早退っと！」

平気な顔で出席日誌をつけるのであった。

こうして一刀の学園生活が始まった。

2時間目「おとしの北郷」（後書き）

クラス紹介

・漢組（おとこぐみ）

担任：巌蝉（がんせん）　卑弥呼（ひみこ）（教頭も兼任）

生徒数15人（漢組は3学年共同クラス。襟首の色で仕分けされている。1年・黄、2年・青、3年・赤）

北郷　一刀
及川　祐（たすく）
華佗　元化（げんか）
左慈　元放（げんほう）
于吉　武人（たけひと）
その他10人

・2年A組

担任：黄蓋　祭

生徒数9人

孫　蓮華
馬超　翠
張　天和
張　地和
荀イク　桂花

夏侯　秋蘭
顔良　斗詩
公孫　白蓮
華雄　郁叉（いくさ）

于吉の名はアニメの声優から、華雄は西森の前作から名前を取りました。

3時間目「黒髪の族狩り」（前書き）

前回説明し忘れていましたが、思春の髪型はＯＶＡと同じく髪を伸ばしています。
去年共学になった漢組に3年生の男子がいる理由は去年に2年として編入し、今年で3年になりました。

ちなみに漢組の2年生は
一刀、華佗、左慈、于吉、及川の5人です。（残りの１０人は3年と1年）

3時間目「黒髪の族狩り」

結局その日は生徒が5人しかいないため授業にならなくなり、今日は残りのメンバーで一刀に学園を案内することになった。

及川「かずピーのおかげで授業が潰れてくれたわ感謝するで！」

及川が喜んでいると

華佗「何を言ってるんだ?その分明日が大変になるんだぞ」

華佗の言葉を聞いた及川は

及川「そうやったー！？」

急に落ち込むのであった。

そんな中、左慈は一刀を見つめて

左慈「（北郷一刀、テメェとはいずれ決着をつけてやるぜ！）」

左慈はこう思っていたが于吉は

于吉「（左慈！？そんなに見つめてあなたは北郷の事が好きなんですか！？でもそんな左慈も私は好きですよ）」

何か勘違いをしていた。

こうして4人は一刀に学園を案内している。

華佗「ここが保健室だ　」

及川「美人で巨乳の紫苑先生がおるで！　」

途中に及川の情報も入りながら学園を案内していた。

左慈「ここが大浴場だ。男はＰＭ７：３０～８：００までしか入れないがな（女子はその時間以外なら自由）　」

及川「ここから見た方がよく覗けるで！　」

及川が大浴場にある一つの窓に近寄ると

ズボッ！

及川「ギャーー！！　」

ドスンッ！

すでに落とし穴が仕掛けられて及川は落ちてしまった。

華佗「及川（バカ）はほっておいて先に行くぞ！　」

左慈「そうだな　」

于吉「同感ですね　」

一刀「まぁいいよな　」

みんなは及川を置いて先に行ってしまった。

穴の中で及川は

及川「ここから出してえなー！！」

叫ぶのであった。

及川を置いて４人は学園案内を再開する。

そんな学園内を案内してもらう一刀であった。しばらくして、

一刀「ホントにこの学園はすごいな！？食堂、講堂、武道館、図書館、馬小屋、プール（女子専用）、学園長の銅像やら色々揃っているとは…」

一刀は驚いていた。

于吉「まぁ男子の我々にはほとんど関係ありませんがね」

実はこの学園のほとんどが女子専用の施設になっているのだ。

左慈「しかしまぁ退屈な学園だぜ」

左慈が暇そうにしていると

一刀「そういえばこの学園に部活はないのか？」

一刀が聞いてくると

華佗「あるにはあるが、この学園には今のところ武術部と乗馬部と放送部しかない。生徒会長である袁紹が仕切っているからな 」

左慈「あのバカ会長の奴め！絶対に部活創設資金で豪遊してやがるぜ！！！ 」

于吉「まぁ、その天下も後少しですから 」

４人が騒いでいると

ガササッ！

及川「やっと見付けたで！？ 」

穴から脱出した及川が現れた。

一刀「まだいたのかよ 」

及川「おるわ！！！ 」

及川は怒り出すが

及川「まぁ、今は怒っとる場合やない！時間がないからワイについて来てや！ 」

ダッ！

及川は一刀の袖を引っ張りながら走り出した。

華佗「おいっ！？どこに行くんだ？ 」

左慈「待ちやがれ！」

于吉「この先には何も無かったはずですが？」

三人も慌てて及川の後を追い掛ける。

そして着いた先は

及川「どうやら間に合ったみたいやな！？」

一刀「こんなとこに連れてきて何する気だよ？」

連れてこられた先は3年用階段の裏側だった。

及川「もうそろそろや！ワイが合図したら黙って上見てな！」

一刀達は何がなんだか分からなかったが

ジリリリッーー！！

授業終了ベルが鳴ると同時に

及川「（今や！）」

スッ！

及川から合図が送られた。

そして一刀達が上を見上げてみると…

ヒラ～！パッツン！

目の前にはたくさんのパンツが見えた。

及川「（どうや！ワイのとっておきのパンチラスポットやで！）」

及川がにやけ顔で説明すると

一刀「（及川！ＧＪ（グッジョブ）！）」

華佗「（あの娘の尻の骨格がいい形だな！）」

左慈「（俺はパンツなんて興味ねぇよ！）」

于吉「（左慈のパンツなら見たいんですが）」

５人がそれぞれ眺めていると

ドスンッ！。

５人の背後に凄い音が鳴った。

ギリリリッ…

５人がゼンマイ仕掛けの人形のごとく首を後ろに回してみるとそこには！

？「貴様ら！ここで何をしている！！！」

5人の後ろには黒髪のポニーテールの女の子が青龍偃月刀を片手に青筋をたてて仁王立ちしていた。

及川・華佗・左慈・于吉『ヤバい！この人は！？』

一刀以外の4人が驚いて

一刀「別に俺達は…！？」

一刀が言い訳を言おうとしていると

及川「逃げるでかずピー！？」

ダッ！

及川は一刀の袖を掴んで走り出した。

一刀「一体なんなんだよ！？」

一刀が聞くと

華佗「訳は逃げながら話す！今はとりあえず逃げるんだ！？」

左慈「あいつに捕まっちまったら終りだからな！？」

于吉「一刀は後ろを見張っていてください！！」

及川だけならともかく、華佗と左慈と于吉も言い出すので一刀は引っ張られながら後ろを見張っていると

？「貴様ら待たんか！！！」

ドドドッー！！。

さっきの女の子が物凄い勢いで追い掛けてきた。

一刀「及川！あの娘は誰なんだよ？」

及川の手を放し、一刀が走りながら聞くと及川は懐から及川メモを取り出して読み始めた。

及川「彼女は2年C組の関羽　愛紗ちゃん！周囲の不良からは『黒髪の族狩り』と呼ばれるほど腕っ節が強いうえに、学園では鬼の風紀委員長と呼ばれるほど規律に厳しい！3サイズは上から…」

及川が最後まで言おうとすると

ガシッ！。

及川「ひぃっ！？」

愛紗「捕まえたぞ！」

5人の中で一番足の遅い及川が捕まってしまった。

及川「くっ…！？みんな！ワイに構わへんで逃げてくれ！」

及川は自分なりにかっこいい台詞を言うが

愛紗「他の者ならすでに逃げていったぞ」

及川は見捨てられてしまった。

愛紗「まぁ私は一人でも構わないがな！！！」

愛紗は及川を睨みつける

及川「はわわ…！？優しくしてねっ！」

及川がアホなことをすると

愛紗「ふざけるなー！！！！！」

及川「ギャーー！！」

ドカッ！バキッ！ボコッ！

及川は一人愛紗のお仕置きをうけるのであった。

その頃、なんとか無事に逃げられた４人は

左慈「やっぱり捨て駒がいると逃げられるな！？」

華佗「あいつが生きてたら俺が治療してやろう」

一刀「何なんだよこの学園は！？」

４人共ハァハァ言っていると

于吉「あれっ？」

于吉が何かを見付けた。

于吉「左慈、あの制服を見たことありませんか？」

そして左慈は于吉が指さした先を見てみると

そこには黄色のバンダナをつけた男がいた。

一刀「あれっ？あのバンダナどこかで…」

一刀は朝見掛けた奴らにも同じ黄色のバンダナをしていたことを思い出す。

すると男を見た左慈は

左慈「あのバンダナは確か黄巾高校の奴だぜ」

黄巾高校

５万をこす不良生徒ばかりの高校。各地で問題を起こしまくる。

そしてその黄巾高校の男が何かを言い出した。

黄巾生徒「早くこの手紙を関羽って奴に渡さなきゃな！」

この言葉を聞いた瞬間。男達は嫌な予感を感じ、気付いた時には

ドコッ！

黄巾生徒は殴られて気絶させられていた。

華佗「こいつが言っていたのはこの手紙か？」

華佗は男の懐にあった手紙を取り出す。

一刀「ちょっと見せてくれ！」

スッ！

一刀は華佗から手紙を受け取って読み始める。

すると手紙にはあることが書かれていた。

『黒髪の族狩りへ、
貴様の義姉である劉備桃香は人質として預かった。
取り戻したければ一人で黄巾高校に来い！
黄巾高校生徒一同』

この手紙は愛紗に対する挑戦状であった。

手紙を読んだ一刀は

一刀「劉備が誰だか知らないが人質をとるなんて許さないぞ！！！」

一刀は凄く怒っていた。

そして一刀の様子を見た3人は

華佗「一刀、黄巾高校は学園の裏口を出て、右に行った先にあるぞ。
俺は愛紗にこのことを知らせに行く！」

于吉「華佗、私も同行しますよ！」

左慈「俺はとりあえずこの黄巾生を警備員に引き渡してくるぜ！」

3人がそれぞれ言った後、ほとんど同時に

華佗・左慈・于吉『暴れてこい一刀！』

一刀「わかったぜみんな！」

ダッ！

一刀は黄巾学園に向かうのであった。

そしてその頃、

愛紗「さて、残りの者を見付けねば！！！」

そんな愛紗の目の前には

ボロ～ン！

半殺しにあった及川が倒れていた。

そして愛紗の元に

華佗・于吉『愛紗～！』

華佗と于吉がやって来た。

愛紗「ほう、自ら殺られに来るとはな！」

ジャキンッ！

愛紗は華佗達に青龍偃月刀を向けた！。

華佗「待っ…待てっ！？話を聞いてくれ！」

于吉「私達はこの手紙をあなたに届けに来ただけです！？」

二人は斬られる前に用件を言い出す

それを聞いた愛紗は

愛紗「何だと！？くそっ！奴らめ卑怯な手を使いおって！」

ダッ！

愛紗は裏門めがけて走り出していった。

しかし華佗達は一ついい忘れていたことを思い出した。

于吉「そういえば一刀が向かっていったのを伝えていませんでしたね！？」

華佗「あっ！？」

すぐさま愛紗に伝えようとするがすでに愛紗の姿はなかった。

そして愛紗が黄巾高校に着いた頃

愛紗「（ここに姉上がいるのだな）」

愛紗が学園に突入しようとした時

？「何もんだテメェは！」

学園の中から声が聞こえてきた。

愛紗が門の外側から覗きこんで見ると

一刀「俺は劉備って子を助けに来たんだよ」

ジャーン！

一刀は黄巾生徒5万に囲まれていた。

張曼成「馬鹿な奴め、テメェが何者かは知らないがたった一人で乗り込んで来るとはよう！」

黄巾高校番長、張曼成。彼の手元には劉備らしき人物が縛られていた。張曼成が言うと一刀は

一刀「お前らごとき俺一人で十分なんだよ！」

この言葉に張曼成がキレた。

張曼成「ふざけやがって！野郎共、殺っちまえ！」

黄巾生徒『ウォー！！』

黄巾生徒は武器を持って一斉に一刀に襲いかかった。

その様子を見ていた愛紗も

愛紗「（あっ！危ない！？）」

すぐに中に入ろうとするが

ブォンッ！。

愛紗が中に入ろうとした時、黄巾生徒が吹き飛ばされた。

張曼成「何が起こったんだ！？」

張曼成が騒ぎの中心を見てみるとそこにいたのは

一刀「やっぱり歯応えがないな！」

元気な姿の一刀がいた。

張曼成「何もんだテメェ！？」

張曼成が慌てて聞くと

一刀「俺の名は北郷一刀だ！」

ビシッ！

名前を言った途端黄巾生徒がざわめき出した。

黄巾生徒「張曼成さん!?勝てるわけないですよ!あいつは九州じゃあ有名な『おとしの北郷』ですよ!?　」

おとしの北郷の武勇伝はもはや有名で生徒の言葉を聞いた張曼成もさすがにわかったようだ。

張曼成「『おとしの北郷』だと!?俺達が束になっても勝てる相手じゃねぇよ!?　」

この言葉は当然門の外にいた愛紗の耳にも入った。

愛紗「あいつが『おとしの北郷』だったとは…!?　」

そして一刀は張曼成の前に立つと

一刀「まだやる気?　」

ギロリッ！

張曼成を睨みつけた。

そして張曼成の反応は

張曼成「すいませんでした!!人質は返しますので勘弁してください!!　」

張曼成達黄巾生徒は人質であった桃香の縄をほどくと一目散に去って行った。

一刀「大丈夫かい？（ニコッ！）」

一刀が桃香にスマイルすると

桃香「あの…えと…ありがとうございましゅ！／／／」

一刀は顔が赤くなった桃香に対して頭に？を浮かべ

一刀「（何で顔が赤いんだろ？）」

と思うのであった。

そして門の外から見ていた愛紗は

愛紗「（北郷一刀か、いずれ手合わせしたいものだな）」

一刀をじっと見つめるのであった。

こうして一刀の学園生活１日目が終わったのだった。

3時間目「黒髪の族狩り」（後書き）

クラス紹介

・2年B組

担任：厳顔　桔梗

生徒数　9人

劉備　桃香
趙雲　星
魏延　焔耶
呂布　恋
楽進　凪
于禁　沙和
陸遜　穏（のん）
文醜　猪々子
張　人和

4時間目「覇王華琳」

聖フランチェスカ学園男子寮

男子寮は一人一部屋あるのだが、広さが畳二畳しかなく、布団がギリギリ敷けるスペースしかない。（女子寮は2、3人部屋だが広さは畳8畳分でベット付き）他に小さな台所がある。

ピリリッ！

一刀「んっー！」

昨日この部屋に引っ越して来た一刀が目を覚まし、

ピッ！

目覚ましのスイッチを押す。

そして朝食を済ませた後、一刀は鞄と昨日送ってもらった護身用の日本刀を片手に出かける。

一刀「行ってきま～す！」

誰もいないのについ言ってしまう一刀だった。

男子寮は学園から遠く、歩いて1時間以上かかるので通学バスがある。（バスを使えば10分、女子寮は寮から学園まで歩いて5分）しかし朝に3本しかないので乗り遅れると遅刻になりやすい。

一刀「何とか間に合ったな！」

一刀がバスに乗り込むと

華佗「おはよう一刀！」

左慈「転入1日目にしては間に合ったな！」

于吉「これで全員揃いましたね！」

友人になった華佗達が声をかけてくる。実は一人足りなかったのだが誰も気付いてなかった。

忘れられている及川は

及川「そのバス待ってぇな～！！」

バスに乗り遅れて一人走るのだった。

そしてバスが学園前に到着し、一刀が学園の中に入ると

ジロリッ！

他の生徒からの視線を受ける一刀

一刀「何でみんな俺を見るんだ？」

一刀が不思議がると

于吉「この学園は人数が少ないですから噂が出ればあっという間に

広がるんですよ」

どうやら昨日の一刀に対する出来事（漢組のほぼ全員をＫＯ、黄巾高校に殴り込み）はすでに学園内に広まったようだ。

そういう訳でそんな一刀を様々な視線が襲うのだった。

しばらくして、

キ～ンコ～ンカ～ンコ～ン！

昼休みのベルが鳴り、生徒のほとんどが食堂に集まる。

男「俺が先に買うんだ！」

男「いや！俺だ！」

食堂の販売口に人が詰め寄るなか、

コロロ～♪

食堂に真っ赤な絨毯が敷かれると

春蘭「華琳様のお通り～！」

黒髪長髪の女の子、夏侯　春蘭が叫ぶとそのすぐ後ろから水色の髪の女の子、夏侯　秋蘭が現れて絨毯が延びきった先に座り込む。

そして黒髪の女の子も秋蘭の反対側に座り込むと

タッタッタ

絨毯の上を骸骨の髪止めをつけた金髪ロールの女の子、曹操　華琳が通っていく。その後ろには猫耳フードの娘、荀イク　桂花が絨毯をたたんでいた。

そして華琳が進む度に混雑していた販売口が華琳を避けるように道を開けていった。

そして華琳が販売口に立つと、

販売員「これはこれは華琳様、本日は何をお食べになりますか？」

販売員が聞くと

華琳「今日はそうねぇ、焼売（シュウマイ）をお願いするわ！」

ピッ！

華琳は懐から黒色のカード（ブラックカード）を取り出して販売員に見せると

販売員「かしこまりました！！」

販売員は先に注文がきていたにもかかわらず、焼売を作る。

桂花「さすが華琳様！お金を払うなんて心が広い！タダ飯を食べるあの馬鹿よりまともですわ！」

あの馬鹿とは勿論生徒会長である麗羽のことである。彼女は生徒会

長の権限を利用して食堂でタダ飯を食べていた。

華琳「当然よ桂花、人の上に立つものならばお金くらい払わなければ、みてなさい！次の会長争奪戦では絶対に私が会長になってやるんだから！」

グッ！

華琳は拳を握って決意する。

そして華琳は出来上がった焼売を受けとり、席をとっていた夏侯姉妹の元に座り込む。

そして華琳が焼売を口に入れようとした時…

及川「かずピーの弁当美味しそうやなー！！」

及川の叫び声に華琳は驚いてしまい

ポロッ！

箸で掴んでいた焼売を落としてしまった。

春蘭「華琳様の焼売！」

ダッ！

桂花「私のものよ！」

ダッ！

二人が醜く焼売を奪い合っていると

華琳「二人共！やめなさい！」

ピタッ

華琳の一喝に二人の動きが止まった。

華琳「一体何の騒ぎかしら！」

華琳が騒ぎの元である一刀達が座る席に近寄ると

一刀「及川、あまりでかい声出すなよ！」

及川「んなこと言われてもマジでかずピーの弁当が美味そうやったから！」

この学園の学食は中華がほとんどであり、学食代が払えない時や違うものが食べたい時には自分で用意するしかないのだ。

華佗「しかしホントに美味そうだな！」

左慈「んな弁当よく作れたな！？」

于吉「作り方を教えてください！」

そういうみんなのお昼は

及川　パンの耳　タダ

華佗　野菜定食　２５０円
左慈　あんパン　１００円
于吉　梅おにぎり　１００円
であった。（男子は基本節約派）

一刀「作り方だなんて、俺はただ実家から送られた食材で弁当作っただけだしな！」

実は一刀の元に実家から日本刀だけでなく食材も送られていた。

一刀「よかったら一口食ってみるか？」

一刀が言うと

及川「マジで！？やったー！」

及川は箸を一刀の弁当に狙いをさだめて突き刺そうとするが

スッ！

及川の箸より先に別の誰かの箸が先に入った。

パクッ。

そしてその人はつまんだおかずを口の中に入れて食べた。

先に食べた人は

華琳「モグモグ。これは！？」

華琳であった。そして華琳は一口食べた後に驚き出した。

春蘭・秋蘭・桂花『華琳様、どうかなさいましたか!?』

華琳の驚いた声を聞き付けて3人が一刀達の席に近寄ってきた。

桂花「ちょっと!全身精液男共!華琳様に何を食べさしたのよ!!」

桂花が一刀達に向かって罵詈雑言していると

華琳「違うのよ桂花!」

華琳が桂花をとめると

華琳「何なのこの弁当!?美味しいわ!?」

ドォ～～ン!

華琳のこの一言に一刀を除く全員が驚いた。

一刀「何でみんな驚いてるんだ?」

一刀が聞くと

及川「そういえばかずピーは知らへんかったな!?」

そして及川は懐から及川メモを取り出すと読み始めた。

及川「彼女の名は2年C組の曹操　華琳。大会社曹操グループの社

長令嬢で味覚が厳しくその舌は『神の舌』と呼ばれている。3サイズは上から…」

ドンッ！。

華琳「説明ありがとう。でももう説明は結構よ」

及川は華琳の裏拳を顔面に喰らって倒れてしまった。

華琳「北郷一刀、あなたの噂は聞いているわ私のものになりなさい！」

ドンッ！

この華琳の言葉に食堂内がざわめき出した。

桂花「華琳様正気ですか！？汚らしい男を華琳様の側に置くのは賛成できません！」

前に説明したが桂花は共学反対派の一人で大変な男嫌いなのだ。

桂花が反対すると

春蘭「私も桂花の意見に同感です！こんな見掛けが弱そうな奴が噂通りかどうかわかりません！」

春蘭も桂花の意見に賛成しだした。

華琳「じゃあどうすればいいの？」

一刀「俺の意見は無視かよ！」

一刀の意思を無視して話を進める華琳達

春蘭「簡単なことですよ華琳様！」

すると春蘭はどこから取り出したの自分の得物である大剣・七星餓狼を取り出すと

春蘭「今、この場で私とこやつが戦い、こやつが勝てば認めましょう！」

春蘭は剣を一刀に向けながら言う。

一刀「ちょっと待てよ！俺は別に華琳のものになる気は…！？」

一刀は言うが

春蘭「問答無用だ！いくぞ『お年の北郷』！」

ブォンッ！！。

春蘭は七星餓狼を振り降ろした。

一刀「あぶねっ！？」

サッ

一刀が何とか避けると

ドッゴォーーンッ！！

振りおとされた七星餓狼が落ちた先にはクレーターが出来ていた。

春蘭「貴様！何が『お年の北郷』だ！全然避けられる程若いではないか！」

春蘭が避けた一刀に文句を言っていると

秋蘭「姉者、『お年』ではなく『おとし』だぞ」

春蘭の妹である秋蘭が説明すると春蘭は

春蘭「成程、わかったぞ『おろしの北郷』！貴様なんぞ醤油をつけて食べてやる！」

全然わかっていなかった。

春蘭はかまわず七星餓狼を振りまくり、それを見事に避け続ける一刀

華琳「春蘭！もうやめなさい！食堂を壊す気なの！」

春蘭が暴れまわるせいですでに食堂の中は崩壊し、怪我人が多数できていた。華琳が春蘭にやめるように言うが

春蘭「貴様、避けないで戦えー！！！」

春蘭の耳には華琳の声は入っていなかった。

そんな時、

グララッ…

ヒュー！

春蘭が斬りまくった食堂の瓦礫が華琳の上に落ちてきた。

秋蘭・桂花『危ない華琳様！？』

秋蘭と桂花が気付いて駆け寄るが間に合わない！

華琳「えっ！？」

華琳がようやく落ちてくる瓦礫に気付いたが避ける時間も受け止める時間もなかった。

華琳「キャッ！？」

誰もが華琳に瓦礫が直撃すると思い目を閉じた瞬間

ドンッ！

華琳の体は突き飛ばされた。

ズッシーン！

瓦礫が落ちてきてみんなが目を開けると

桂花「華琳様！？」

桂花が無事だった華琳に近寄る。

桂花「華琳様、よくご無事で！」

すると華琳は

華琳「誰かに突き飛ばされたのよ…」

そして華琳が瓦礫の方を見てみるとそこには

バッターン！

いつの間に来たのか華琳をかばい代わりに瓦礫に押し潰された一刀がそこにいた。

春蘭「貴様！いつの間に移動したのだ！！！」

春蘭が一刀に怒鳴ると

華琳「しゅ～ん～ら～ん～！！！」

ギロリッ！

華琳が春蘭を睨みつけた。

春蘭「華琳様！？」

華琳に睨みつけられたことを脅える春蘭

華佗「そんなことよりも早く一刀を救わねば！？左慈、于吉瓦礫を

退かすのを手伝ってくれ！」

華佗が言うと二人は

左慈「仕方ねぇな！」

于吉「力仕事は苦手なんですが」

グッ！

そう言いながらも二人は瓦礫を持ち上げて一刀を救出した。

華佗「頑張れよ一刀！今すぐ保健室に連れていってやるからな！」

華佗は一刀を背負って走り出した。

左慈「于吉、俺達も行くぞ！」

于吉「左慈と一緒ならどこまでも行きます！」

そして二人はのびていた及川を引きずりながら華佗の後を追って行った。

そして残された華琳達は

華琳「春蘭！あなたには後でお仕置きするわよ！」

華琳がきつく言うと

春蘭「華琳様のお仕置きならば喜んで！」

逆に喜ぶのであった。

華琳「秋蘭と桂花は怪我人の保護と被害の計算をお願い！」

秋蘭・桂花『わかりました華琳様！』

二人はすぐに行動に移った。

そして華琳は

ドクンドクンッ！

華琳「（何なのこの胸の痛みは？）」

実はさっき一刀に突き飛ばされた時に一刀は華琳に対してスマイルしていた。

華琳がこの感じを恋だと知るのはちょっと先の話である。

その頃、保健室では

華佗「一刀、お前どんな体をしてるんだ！？」

華佗は驚いていた。何故ならば…

于吉「まさか瓦礫が頭に当たったにもかかわらず大きなコブと多少の出血ですむとは凄いですね！？」

一刀はほとんど無傷で頭に絆創膏を貼るだけで済んだのだった。

一刀「昔から鍛えていたからな！」

一刀が言うと

紫苑「君はすごい体をしているのねぇ！？」

聖フランチェスカ学園校医

黄忠　紫苑　独身。

校医である彼女も一刀の体の頑丈さに驚くのだった。

及川「紫苑せんせ～い！僕も顔が痛いんです～！」

及川が気持ち悪く紫苑に言うと

紫苑「君はそれだけ元気なら大丈夫よ！」

軽く言われてしまった。

紫苑「でも無茶をしたんだから今日は安静にしてなさいよ！」

紫苑は一刀に向かって言う。

一刀「はい、すいませんでした！」

一刀も納得して頭を下げるのであった。

4時間目「覇王華琳」（後書き）

クラス紹介

・2年C組

担任：何進（かしん）　愛

生徒数　9人

関羽　愛紗
曹操　華琳
夏侯　春蘭
李典　真桜
袁紹　麗羽
張遼　霞（しあ）
甘寧　思春
陳琳　仁美
デザーン＝リー（留学生）

何進と陳琳の名はアニメの声優からとりました。
リーについては西森の前作を見てください。
何進と陳琳についてはアニメを見てください。

5時間目「生徒会長麗羽」（前書き）

今回、恋の話はありません。次回への展開に繋がります。

5時間目「生徒会長麗羽」

聖フランチェスカ学園生徒会長室

この部屋には生徒会長と副会長、会長が認めた者しか入れないという規則がある。（会長である麗羽が勝手に決めた）

そんな中、この部屋から声が聞こえてきた。

麗羽「おーほっほっほ！さて、今日も会議を始めましょうか」

聖フランチェスカ学園生徒会長　袁紹　麗羽

猪々子・斗詩『はい！麗羽様！』

副会長　顔良　斗詩

文醜　猪々子

麗羽「今日の議題はズバリ！最近の学園の噂についてですわ！」

麗羽がそれを議題に出すのは理由があった。

実はもうすぐ次期生徒会長争奪戦が始まるため、少しでも生徒が自分の噂をするのを聞いておきたいのだ。（簡単にいえば自分の評判を聞きたいため）

しかし斗詩から返ってきた返事は麗羽の予想と大きく違っていた。

斗詩「最近の学園の噂は転入生の北郷一刀についてですね」

斗詩が言うと麗羽は

麗羽「北郷一刀？それって誰ですの？」

麗羽は頭に？を浮かべた。

猪々子「知らないんすか麗羽様？最近漢組にやって来た男っすよ！」

猪々子の言葉を聞いた麗羽は

麗羽「漢組ですって～！！！」

突然怒り始めた。

実は麗羽は共学反対派の一人なのだ。（理由はブ男はいらないのこと）

斗詩「その北郷って人の噂というのが…」

斗詩は一刀の噂を読みあげる。

・漢組の男子ほぼ全員をＫＯ
・黄巾高校に殴り込み
・春蘭と引き分ける武力

斗詩「だそうです」

これらを全て聞いた麗羽の顔は

麗羽「そうですの、ケッ！」

物凄く不機嫌な顔をしていた。

猪々子「それでその北郷についての情報なんすけど！」

猪々子は斗詩がまとめあげた一刀についての情報を読みあげる。

・北郷一刀　17歳
・漢組所属の高二
・家族構成は父と母と祖父と妹
・実家は九州の鹿児島
・祖父は剣術道場の師範
・父はサラリーマン
・母は小料理店の店主
・妹は海外にいる
・中学時代は千頭(せんとう)中学
・フランチェスカ学園には学園長の推薦入学

猪々子「以上っす！」

猪々子が全てを読みあげて麗羽の方を向くと

麗羽「会長であるわたくしより目立つだなんて許しませんわよ！！！」

全然話を聞いていなかった。

麗羽「この美しい容姿！」

バァンッ！

麗羽「宝満な胸！」

ドンッ！

麗羽「輝くお尻！」

パァンッ！

麗羽「神様から愛された体を持つわたくしに足りないものなんて何もない！学園はわたくしに対する噂で溢れなければなりませんのよおーほっほっほ！」

麗羽が自画自賛しまくっていると

猪々子「（麗羽様に足りないのは頭じゃないのか？）」

斗詩「（何でそれに気付かないんだろうね？）」

二人がヒソヒソ話していると

麗羽「お二人共！何を話していますの！！！」

青筋を立てた麗羽が睨みつけてきた。

猪々子・斗詩『何でもありません！？』

二人が言うと麗羽は

麗羽「それならよろしいですわ、二人共出かけますわよ！」

会長室を出ようとする麗羽に対し、

斗詩「麗羽様、どちらに行くんですか？」

斗詩が聞くと

麗羽「決まってるじゃありませんの、漢組に行って北郷一刀がどういう男なのかわたくしが直々に見てきますのよ！」

そうして麗羽は漢組に向かっていった。

漢組の教室前

麗羽「ようやく着きましたわね」

麗羽が漢組の前に立つと

斗詩「あのぅ、麗羽様ちょっといいですか？」

麗羽「何ですの斗詩？」

すると斗詩は

斗詩「何でガスマスクしてるんですか？」

今の麗羽はガスマスクをしていてまるで顔が烏〇明のようであった。

麗羽「決まってるじゃありませんか！ブ男の空気を高貴のわたくしが吸ってしまうわけにはいきませんでしょう！」

同じ共学反対派の桂花だってそこまではしなかったが、

猪々子「静かに！中から声が聞こえてますよ」

猪々子が言うと三人はドアに耳を傾けて中の様子を聞いてみた。すると中から聞こえてきたのは…

華佗「ホントにお前の体には驚かされるよ！？」

左慈「全くだな！昨日できた大きなコブが一日で治るなんてな！？」

一刀「俺自身が驚きだぜ！？」

中から一刀達の声が聞こえてきた。

及川「ちょっとみんな！注目やで～！」

突然及川が騒ぎ出すので及川を見てみると

于吉「何の騒ぎですか？」

すると及川は

及川「見て驚くなや！友人やからこそ見せるわいのお宝写真…」

そして及川は手に持っていたポスターを広げた。

及川「学園の美女の良い部分を集めた究極の女や！」

バァ～～ン！！。

及川が広げたポスターには一人の女子生徒が描かれていた。

及川「顔はドSの華琳ちゃん、胸は巨乳の劉備ちゃん、お尻は学園一の巨尻の持ち主蓮華ちゃん、性格は優しい董卓ちゃんや！」

（容姿は想像に任せます）

本人に見せたら絶対に殺されてしまうモンタージュ写真を及川は堂々と一刀達に見せた。

華佗「お前、これ絶対に盗撮だろ！」

華佗が突っ込むと于吉があることに気付いた。

于吉「あれっ？生徒会長の麗羽の部分はないんですか？」

すると及川は

及川「うっきー、冗談はやめてや！あんな性悪会長の部分なんて何の役にも立てへんがな！」

ピキッ！

及川の一言に廊下で聞いていた麗羽に怒りがたまった。

及川「本人には言えへんがあの人は人使い荒いし、性格は最悪、胸はでかいが根性ひね曲がってるから最悪やで！」

及川が言いたい事を言いまくると

ガララーッ！！。

教室の扉が勢いよく開いて中に入ってきたのは

一刀・華佗・及川・左慈・于吉『鳥〇明！？』

ではなく、マスクを取って顔を見せると

麗羽「さっきから聞いていれば言いたいこと言ってくれますわね！！！」

そこには顔中怒りマークだらけの麗羽がいた。

及川「会長！？」

及川が驚くと

麗羽「誰が性悪ですって？誰が性格最悪ですって～！！！」

麗羽は睨みながら及川に近寄る。

及川「これは言葉の綾と言うもんで！？みんなも何とか言って―な！？」

及川は一刀達に助けを求めるよう振り向くが

斗詩「あのぅ、クラスの人なら全員いませんけど…！？」

いつの間にか漢組には及川と麗羽一行しかいなかった。

及川はクラス全員に見捨てられてしまった。

及川「（クラスメートの薄情者！？）」

及川がそう思っていると

麗羽「あなたにはお仕置きが必要ですわね！！！」

更に麗羽が睨みつけてきた。

及川「え～っと！？お仕置きなら是非、パフパフの刑で…」

及川がアホなことを言った直後、

及川「ギャーー！！！」

及川の悲鳴が聞こえてきたという。

その頃、無事に逃げ出した一刀達は

左慈「于吉、お前会長がいるのを知っててあんなことを聞いたな！」

すると于吉は

于吉「まぁ良いじゃないですか！及川が仕置を受けるのがこの小説の毎回のお約束なんですから♪」

何を言ってるのか分からないが于吉は知っていて言ったそうだ。

一刀「あんなのがこの学園の生徒会長だなんてこの学園はどうなってるんだ！？」

初めて会長を見た一刀にとってそれは不思議なことであった。

華佗「その訳は去年に原因があったんだ！？」

華佗が頭をかかえて話し始める。

ここで話は去年の聖フランチェスカ学園生徒会長争奪戦時にさかのぼる。

2、3年生に誰も会長をやりたい人がいなかったため1年生の中から選ばれることになったのだが、

麗羽「この中で誰が会長にふさわしいのですかねぇ？」

あきらかに会長をやりたそうにする麗羽に対し、他のみんなは探り合いをしていたのだが、

桃香「もう！だったら麗羽さんでいいですよ！」

早く帰りたかった桃香の一言で

麗羽「桃香さんがそこまで言うなら仕方がありませんからわたくし

が会長になってさしあげますわ。おーほっほっほ！」

しかしこれが後に間違いだったとみんなは後で気付くのだった。

それからというもの、麗羽は会長の権限を使ってやりたい放題！部活創設資金で豪遊し、我が儘を言いまくっていた。

華佗「この学園では会長が決めたことは絶対で、会長を変えるには次の会長争奪戦まで我慢しなくちゃいけないんだ」

華佗が言うと一刀は

一刀「すごい歴史だな！？」

その場で驚くしかなかった。

左慈「だが、今年は違う！みんな去年の二の舞にはなりたくないからな。嫌でも自分が会長になるしかないと考えている奴が多いぜ！」

左慈が言うと一刀は

一刀「なぁ、生徒会長って男でもできるのか？」

一刀が聞くと

華佗「まぁ仕事は行事の確認、予算分配、書類の判子押しくらいだから誰でもできるにはできるが…」

華佗が言い終えると

一刀「じゃあ俺も会長になってみようかな♪」

一刀のこの一言に三人は

華佗・左慈・于吉『えっーーー!?』

とっても驚いた。

一刀「俺はまだこの学園に来て日は浅いけど見てみればよく分かる、この学園は男女の差がありすぎる。でもそれじゃあ共学になった意味がない!だから俺が会長になって少しでも変えてやるんだ!」

良い事を言う一刀に

于吉「でも一人じゃ無理ですよ!今年は5人組の争奪戦ですからあと4人集めないと!」

今年から会長になるには5人一組のチーム（大将1人、武将2人、軍師2人）で競い合うのだ。

確かに人数が少ないと思っていたが

華佗「一刀の心意気に俺は猛烈に感動した!俺も手伝うぞ!」

ガシッ!

華佗は涙を流しながら感動し、一刀の手を握った。

一刀「華佗、ありがとよ!これで残るは3人か」

一刀が考えていると

左慈「残りは二人だぜ！」

左慈が話に加わった。

左慈「女だけじゃあ去年の二の舞になるかもしれねぇしな！」

左慈が賛成すると当然のごとく

于吉「左慈が参加するなら私も参加しますよ！」

于吉も話に乗ってきた。

一刀「これで残るは一人か…」

華佗「一刀は大将、俺と左慈は武将、于吉は軍師だから足りないのは…」

左慈「軍師が一人かよ！うちのクラスに軍師ができそうな奴いたか？」

于吉「卑弥呼先生でも入れますか？」

４人が考えていると

カツン。カツン。

杖をつくような音が聞え、やって来たのは

及川「みんなひどいやんけ～！」

ボロボロの姿になった及川がやって来た。

及川「ホンマにあの馬鹿会長！わいのお宝ポスタービリビリに破きおって腹立つわ！」

及川が麗羽に対して不満を言っていると

一刀「（ニヤリッ）」

一刀が及川に対し、ニヤリとすると

一刀「及川、俺達親友だろ！」

都合のいい時だけ親友よばわりする一刀

そして一刀達は生徒会長争奪戦に出ることを及川に話すと

及川「その話、のったで！わいも協力するわ！」

そして5人は手を重ね合うと

一刀「絶対生徒会長になるぞー！」

全員『オォーー！』

こうして5人は生徒会長争奪戦に参加することになったのだった。

5時間目「生徒会長麗羽」（後書き）

クラス紹介

・1年A組

担任：周喩　冥琳

人数　8人

許緒　季衣
典韋　流琉
郭嘉　稟
周泰　明命
呂蒙　亞莎（あーしぇ）
結本　大喬
結本　小喬
張勲　七乃（留年生）

二喬の名字はアニメからとりました。
七乃が留年生の理由は美羽と同じ学年になりたかったからです。

6時間目「生徒会長争奪戦その1」（前書き）

改めて見てみると

いつもよりセリフが多い気がする！

さて、今回より争奪戦が始まりました。果たして勝利するのは誰か！？

（大体の人は結末が想像できると思うけどね）

6時間目「生徒会長争奪戦その1」

この聖フランチェスカ学園にはクラスや学年とは違う一つの組織がある。

それが『国別』という組織で主に蜀・魏・呉・袁・董に分かれている。

それはクラスメートや同級生とは違う絆で結ばれている。

そして生徒会長争奪戦の日、

聖フランチェスカ学園講堂

陳琳「さぁ！今年も始まりました！生徒会長争奪戦に勝利し、みごと生徒会長になるのは誰なのか！実況・解説は放送部部長、陳琳仁美がお伝えします！」

ちなみに今の生徒会長に不満がない時には争奪戦は行われないがあまりにも麗羽をやめろという声が多かったので行われた。

陳琳「それでは選手入場＆紹介していきましょう！」

ジャララーン！

音楽と共に各選手が国別ごとに並んで行進してきた。ちなみにみんな服装は体操着である。（女子はブルマ着用）

陳琳「まずは蜀の劉備軍大将、最近お腹にぜい肉がついたのを気に

している劉備　桃香選手！」

桃香「なんで知ってるの！？」

ちなみに陳琳は他人の秘密を暴露したり罵倒するのが趣味である。

陳琳「続いて劉備軍武将、作る料理は破壊兵器の関羽　愛紗選手と胸はペタンコだがお腹がポンポコリンの張飛　鈴々選手！」

愛紗「破壊兵器とはなんだ！破壊兵器とは！！」

鈴々「鈴々そんなことないのだ！！」

１年Ｂ組、張飛　鈴々。桃香と愛紗と義姉妹の契りを結んだ末っ子。

陳琳「そして軍師の二人は夜な夜な漢組の男子をネタに…」

陳琳が最後まで言おうとすると

朱里・雛里『（は・あ）わわ～！！やめてくだしゃい！』

１年Ｂ組の諸葛　朱里と１年Ｃ組の鳳統　雛里。変わった趣味を持つ二人が陳琳を止めた。

陳琳「続きまして、魏の曹操軍大将、胸と身長以外は完璧超人の曹操　華琳選手！」

華琳「どういうことよそれは！！！」

陳琳「武将の二人は猪娘夏侯　春蘭選手とホントに妹なのか？夏侯

秋蘭選手！」

春蘭「誰が猪だ！！！」

秋蘭「姉者は可愛いいな！」

陳琳「軍師の二人は華琳様ラブのドM趣味の荀イク　桂花選手と何を考えているか分からない程イク　風選手！」

桂花「ドMとは何よ！」

風「ＺＺＺ～」

１年Ｃ組の程イク　風。何考えているか分からない居眠りだが実は学園１の秀才で有名。

陳琳「そして呉の孫軍大将、学園１の巨尻の持ち主であり、みんなの嫁さん孫　蓮華選手！」

蓮華「巨尻ではない腰が細いだけだ！あと誰がみんなの嫁だ！（北郷だけならともかく）」

この時、蓮華はなぜそう思ってしまったのか疑問を感じていた。

陳琳「武将は卑弥呼先生と同じ褌（ふんどし）着用、甘寧　思春選手とわがままなチビッ子の孫　小蓮選手！」

思春「同じではなく偶然だ！」

シャオ「チビッ子じゃないもん！」

1年B組の孫　小蓮（通称シャオ）。孫　蓮華の妹

陳琳「軍師は巨乳眼鏡お化けの陸遜　穏選手とゴマ団子ならトラック1台食べられる重度の恥ずかしがりやの呂蒙　亞莎（あーしぇ）選手！」

穏「巨乳眼鏡お化けはひどいです～！」

亞莎「そんなに食べられませんから！」

陳琳「そして董の董卓軍大将、最近体が成長して服が着れなくなった董卓　月選手！」

月「へぅ～！恥ずかしいよう！／／／」

顔を赤くする月に一刀は

一刀「（あれっ？あの子は転校してきた日に出会った子だ）」

そう感じていた。

陳琳「武将は天下無双の大食い呂布　恋選手と前に走るしか能がない猪のかゆかゆ選手！」

恋「…お腹空いた」

華雄「かゆかゆではない！華雄だ！」

陳琳「軍師は部屋中にはそれぞれ好きな人の隠し撮り写真が…」

陳琳が言おうとすると

詠・ねね『ちょっと待ったー！！』

二人が止めに入る。

１年Ｂ組の賈駆　詠。月の事が大好き。１年Ｃ組の陳宮　音々音（通称・ねね）。恋をこよなく愛する。

陳琳「続きまして袁の袁紹軍は文字数の都合で置いときまして！」

麗羽「ちゃんとわたくしを紹介しなさい！！！」

陳琳「その他軍大将、普通の人、公孫　白蓮選手！」

白蓮「普通って言うなー！！」

陳琳「武将および軍師は学園の人気アイドル。お菓子の食べ過ぎ張　天和選手、ツンデレわがまま張　地和選手、クールで真面目な無表情張　人和選手！」

天和「頑張るもんねー！」

地和「ツンデレって何よ！！」

人和「無表情はアイドルとして魅力です」

天和達が登場すると

男達『ウォーー！』

男達が騒ぎ出した。

一刀「すごい人気なんだな？」

及川「当たり前や！彼女達は学園のアイドルやねんで！」

及川もノリにのっていた。

陳琳「その他軍もう一人の軍師はインドからの留学生、父はかなりの親馬鹿、デザーン＝リー選手！」

リー「はぁ…！？」

前に授業参観があった時、リーの父が熱烈に応援していたのだ。

陳琳「そして最後は漢軍大将、学園最強の朴念仁。北郷　一刀選手！」

一刀「何だよその説明は！」

一刀は思わず突っ込んだ。

陳琳「武将は男に愛されている左慈　元放選手と五斗米道の…」

陳琳が最後まで言おうとすると

華佗「ちっがーう！五斗米道じゃない！ゴッドヴェイドォーだ！」

左慈「んなもんどうだっていいだろが！？」

陳琳「軍師はボーイズラブの変態。于吉　武人選手と変態眼鏡及川祐選手！」

于吉「否定はしませんよ！」

及川「わいの扱いひどない！？」

かくして、総勢２８人の全選手が出揃った。

陳琳「審判は各学年の教師達で～す！」

そして審判である教師７人も登場し、

陳琳「まずは会長候補による宣誓です！」

宣誓が始まった。

桃香「あの…えと…わっ…私が会長になったら学園内を争いのない平和にしたいと思いましゅ！」

桃香は完全にあがっていた。

華琳「この私が会長になったら可愛いい娘はみんな可愛がってあげるわよ♪」

多少おかしな事を言う華琳。

蓮華「私が会長に就任したら、武力が強い学園にしようと思う！」

固い蓮華。

月「……」

月は緊張のあまり、固まってしまった。

麗羽「わたくしが再び会長になれば…」

麗羽が続けて言おうとした時、

プッツン！

マイクの電源が切れた。

しかし麗羽は気付いておらず長々と話し続ける。

そしてようやく終りそうになった頃、

プチッ！

再び電源が入った。

麗羽「…以上でわたくしの話を終らせていただきますわおーほっほっほ！」

実はマイクの電源は放送部である陳琳によって操作されていた。

舞台の裏側

陳琳「（あの人の話しは長いしつまらないからな～！）」

白蓮「私が会長になったら生徒が怪我や事故がなく日々を過ごせる様な学園にしようと思う！」

この宣誓を聞いた時、全生徒と教師は思った。

全員『（普通だ！）』

それは同じチームである張三姉妹とリーも例外ではなかった。

そしていよいよ一刀の宣誓の番になった。

及川「かずピーしっかりやで！」

華佗「期待しているぞ！」

回りが期待する中、一刀は壇上に上がる。

一刀「え～と、男として初の代表候補の北郷一刀です！この学園は近年共学になりましたが、男女の差が激しく、共学になった意味がありません！そして俺が会長になったら学園を少しでもよくしようと思いますのでよろしくお願いします！」

そして一刀はつい、

一刀「（ニコッ！）」

スマイルしてしまった。（本人は笑顔のつもり）その結果、

ズッキュ～～ン！！

学園のほとんどの女子をとりこにしてしまった。（本人に悪気なし）

陳琳「では宣誓が終りましたところでルールと組み合わせの発表です！」

一刀達が宣誓している間にいつの間にか組み合わせが決まっていた。

一回戦

漢軍　ＶＳ　董卓軍…Ａ

蜀軍　ＶＳ　その他軍…Ｂ

二回戦

Ａの勝者　ＶＳ　呉軍…Ｃ

Ｂの勝者　ＶＳ　魏軍…Ｄ

決勝戦

袁軍　ＶＳ　Ｃ・Ｄの勝者

決勝戦は3組の戦い

・指定した道具以外を使用した場合は即失格。
・武器の使用は禁止。
・他チームの妨害、他の人からの支援も禁止。
・これらを破った場合、たとえ勝利しても失格となる。

陳琳「それでは組み合わせとルールを説明したところで、競技に参ります！」

陳琳が宣言すると

観客『わー！わー！』

観客である生徒達が騒いでいた。

陳琳「それでは一回戦第一試合、漢軍ＶＳ董卓軍の試合開始です！」

わー！わー！

試合開始と共に、出場する2チームの選手が出てきた。

霞「頑張りや月っち！」

董卓軍　張遼　霞。今回は応援。

そして選手がステージに集まりそれぞれで見つめ合いが始まった。

一刀「（やっぱり前に会った子か）」

月「（この人は私を助けてくれたし、戦いたくないなぁ～！？）」

詠「（相手の戦力は北郷と左慈ね、でもこっちには学園最強の恋がいるから勝てるわよ！）」

左慈「（呂布の相手をどうするかな？）」

華雄「（勝負において、誰にも負けるわけにはいかん！）」

華佗「（華雄の肩に傷があるな、後で診てやろう！）」

恋「（…お腹空いた）」

于吉「（左慈は絶対に守ります！）」

ねね「（こんなヘボ共恋殿の敵ではないのです！）」

及川「（ねねちゃんがわいを見てる！もしかしてわいに気があるのか？）」

選手達が競技は武道系だと考えていると、

陳琳「競技は知識対決です！」

ズッコ～！

武道系だと思っていた人がずっこけた。

詠「（武道系以外の知識対決なら楽勝よ！天才軍師のボクとねねがいるんだもん！少なくともホモ眼鏡とアホ眼鏡に負けるわけないわ！）」

その二人は于吉と及川のことである。

この時、詠は勝利を確信していた。

そして選手達が席につく、

陳琳「それでは第一問！」

そして全員が緊張するなか、問題が発表されようとしていた。

一刀・華佗・左慈・于吉・及川・月・詠・恋・ねね・華雄『ゴクリッ！』

そして…

陳琳「麗羽さんの今日の下着の色は？」

一刀・華佗・左慈・于吉・月・詠・恋・ねね・華雄『ズコッ！』

ほとんど全員がずっこけた。

左慈「何なんだよこの問題は！！！」

詠「ふざけるんじゃないわよ！！！」

左慈と詠が抗議すると

陳琳「何を言ってるんですか！生徒会長ならば生徒のことを何でも知っているのは当たり前でしょう！」

ズビシッ！

正論を言う陳琳であった。

華佗「しかし、本人以外でそんなの分かる奴がいるのか？」

ねね「いるはずないのです！」

誰もが『こんな問題解けるか！』と思っていると

ピンポンッ！

及川がボタンを押した。

一刀「及川テメェ！」

華佗「放っておけば別の問題になったかもしれないものを！」

于吉「何押しているんですか！？」

左慈「後で殺してやる！！！」

４人がボタンを押した及川に文句を言っていると

及川「答えは黒や！」

及川は答えた。

一刀達はもうダメだ！と落ち込んでいると

陳琳「正解です！」

一刀「ほらみろ正解だってよ！」

一刀が言うと

一刀・華佗・左慈・于吉『正解だって！？』

４人は驚いた。

及川「わいの頭の中には及川メモの情報が詰まっとるんや！」

まさか及川にこんな能力（？）があったとは！？

その後も学園の女子に関する問題が出るが

陳琳「華琳様が今までクルクル髪をいじった回数は？」

及川「３５７９億９５１２万８６０４回！」

陳琳「鈴々ちゃんの昨日の昼御飯は？」

及川「ヤサイマシマシニンニクカラメアブラ！」

全て正解する及川だった。

そして最終問題

陳琳「最終問題！去年の学園全員の女子の合計体重はいくつ？」

于吉「ラストだけに難しいですね！？」

左慈「つーか、陳琳も分かるのかよ！？」

これは無理だろうと思っていたが

及川「答えは〈ピー〉ｋｇや！」

そして結果は

陳琳「正解です！よって勝者、漢組！」

及川「やったでみんな！」

及川は活躍して喜んでいた。しかし及川は知らなかった。この件がきっかけで元々少ない及川の人気が更に落ちることを

6時間目「生徒会長争奪戦その1」（後書き）

クラス紹介

・1年B組

担任：管輅（かんろ）　占（せん）

生徒数　8人

張飛　鈴々
諸葛　朱里
馬岱　蒲公英（タンポポ）
董卓　月（ゆえ）
賈駆　詠
孫　小蓮（通称シャオ）
袁術　美羽
永田　ミケ

ミケの名字はアニメの声優からとりました。
管輅の下の名前はオリジナルです。

7時間目「生徒会長争奪戦その2」（前書き）

先に注意しておきます。今回話を一話でまとめたため、読みづらいかもしれませんのでご了承ください。

7時間目「生徒会長争奪戦その2」

何とか及川の知識（？）で生徒会長争奪戦の一回戦を突破した一刀達漢軍。

そして休む間もなく一回戦第二試合が始まろうとしていた。

陳琳「それでは第二試合、蜀軍ＶＳその他軍の試合を始めます！」

陳琳が宣言すると同時に選手達が入場してきた。

桃香「（絶対に勝たなくちゃ！たとえ相手が幼稚園時代から同級生だった白蓮ちゃんだとしても！）」

白蓮「（私が会長になれば今より目立つに違いない！）」

愛紗「（勝利し続けていけばいずれ北郷と当たるためにも勝たねば！）」

選手が緊張するなか、競技が発表される。

陳琳「競技は借り物ラリーです！」

全員が？を浮かべるなか、ルール説明がされる。

借り物ラリールール

・メンバーの代表者４名が一人ずつ紙に書かれている借り物を持っていき、それを交代で先に４人分借り物を済ませた方のチームの勝

ち。

・ただしそれだけでは面白くないので残りの1名は椅子に縛られ、椅子に仕掛けられた負けた方のチームの風船が割れる。

ようするに借り物しながらリレーするようなものである。

そして蜀軍は好奇心で鈴々が座り、その他軍は…

白蓮「何で大将の私が座らなくちゃいけないんだ!?」

白蓮が無理矢理座らされていた。

人和「アイドルが風船とはいえ、爆発したら大変ですから」

地和「ちぃ達アイドルだし～！」

天和「リーちゃんは留学生だから危険な真似させるわけにはいかないしね！」

リー「すみません！」

という訳で白蓮に決まった。（本人は拒否）

そして競技が始まる。

陳琳「位置についてよ～い…」

ドンッ！

各選手が紙めがけて走っていった。

ちなみに順番は

愛紗・朱里・雛里・桃香

地和・リー・人和・天和の順である。

陳琳「各自確実に紙を取って借り物を借りていきます！」

借り物の中には借りにくい物（思春の鈴、桂花の猫耳フード等）があったが、各自なんとか借りていた。

そして展開は早く、ほぼ同時にアンカー対決になった。

桃香「（さて、私の紙に書いてあるのは何かな？）」

パサッ！。

桃香が紙をめくって見てみると

桃香「（ポッ！）／／／」

桃香は顔を赤くした。

桃香がどうしようか迷ってる間に

天和「借り物ＧＥＴ～♪」

天和が借り物を獲得した。

桃香「（こうなったら仕方がない！）」

桃香は観客席に向かって走り出すと

桃香「ちょっとお願いします！」

一刀「へっ？」

一刀の手を引いて走り出していった。

そして舞台にたどり着くと

桃香「借り物持ってきました！」

一刀を舞台に差し出した。

陳琳「ホントですか？」

陳琳が聞くと

桃香「間違いありません！！」

桃香ははっきり言うと

陳琳「よって勝者、蜀軍です！」

勝者が発表され、同時に

パァッーーン！

白蓮の椅子に仕掛けられていた風船が破裂した。

白蓮「くっそ～！次こそは目立ってやる…」

バタッ！

白蓮は倒れてしまった。

しかし会場では何故一刀が連れていかれたのかが疑問になっていた。

及川「何でやろ？」

華佗「強い男って書いてたんじゃないか？」

実は桃香の紙には『好きな人』と書かれていた。（この事を知るのは陳琳と桃香のみ）

一回戦に決着がつき、舞台は講堂から屋内プールに変わる。

パァ～ン、キラ～ン！

ここは普段は男子禁制の屋内プールである。プールというわけで選手は全員水着だ！。（どんな姿かは想像に任せます）

陳琳「さぁそれでは準備が出来たところで二回戦第一試合、漢軍ＶＳ呉軍の試合の説明をします！」

そして選手達が舞台に集まる。

及川「（うわ～！この目で女子の水着姿が見れるなんて感激やわ～

！）」

及川は鼻の下を伸ばしていた。

陳琳「競技は水上相撲です！」

簡単な水上相撲の説明

・巨大な発泡スチロールの上に１０人が乗り、先に相手チーム全員を落とした方の勝ち。

思春「簡単な話だ。ようは敵を全て落とせばいいわけではないか！」

その通りである。

そして選手全員が発泡スチロールの上に乗ると

一刀「揺れまくるな！？」

左慈「立つだけでも大変じゃねぇか！？」

ドォ～～ン！

そして試合開始のドラが鳴り、試合が始まると同時に

シュンッ！

及川「へっ？」

及川が？を浮かべると

ドボンッ！。

いつの間にか及川はプールに落ちていた。

思春「まずは一人！」

思春が高速で移動し、及川を落としたのだ。

思春「次は貴様だ！」

シュンッ！

思春は一刀に狙いをさだめて襲いかかる。

左慈「そうはいくか！」

しかし左慈がそれを阻止する。

左慈「思春、俺が相手をしてやるぜ！」

思春「漢組の武力二番手の左慈か、相手にとって不足はない！」

ガキンッ！

左慈と思春が戦いを始めた。

シャオ「思春が相手をしている間に他の人を落としてやるー！」

穏「いきますです～！」

亞莎「頑張ります！」

3人が華佗と于吉に襲いかかるが

華佗「甘いな！」

華佗は人指し指を立てると

華佗「ゴッドヴェイドォー！指圧拳！」

ズビシッ！ズビシッ！ドスッ！

華佗は3人に指でツボを刺激した。すると…

シャオ・穏・亞莎『プッ…キャハハハッ！』

3人は急にお腹を押さえて笑い出した。

華佗「いま押したツボは笑いのツボだ！」

于吉「相変わらずすごいですね」

ホントは鍼を使うのだが、指定道具でないので指でした。

その頃、一刀と蓮華は

蓮華「このっ！このっ！」

蓮華は拳を振るいまくり、それを見事に避ける一刀。

しかし今の一刀はあまり避けることに集中できずにいた。何故ならば…

プルンップルンッ！

蓮華の腕が振るうと同時に蓮華の胸も揺れているためあまり集中できずにいた。

そんな中、左慈と思春は

左慈「喰らいやがれっ！」

ブォンッ！！。

思春「ハァッ！！」

ブォンッ！！。

二人は物凄い蹴りと拳を繰り出し、

ドカァァーーンッ！！。

その二つが激しくぶつかりあった。その結果

グララッ！

二人の衝撃が発泡スチロールを大きく揺らし、

シャオ「うわっ！？」

華佗「うおっ！？」

ドボドボンッ！

次々と選手達を落としていった。

蓮華「あっ！？」

ツルッ！

蓮華も落ちそうになるが

一刀「危ないっ！？」

ガシッ！　ドボンッ！

一刀は蓮華の腕を掴んでそのまま落ちてしまった。

そして残ったのは

于吉「何とか残りましたよ！？」

発泡スチロールには于吉一人が落ちずにすみ、その結果

陳琳「勝者、漢軍！」

漢軍の勝利が告げられ、選手達がプールからあがる中、一刀の姿がなかった。

華佗「一刀どこだ？」

左慈「もう勝負はついたぞ！」

その時、ザバッ！

プールから顔を出した蓮華は足元に何かを感じた。

見てみるとプールの底には蓮華を助けようとして蓮華に潰された一刀が沈んでいた。

于吉「北郷っ！」

及川「なんてうらやま…いや、大丈夫か！？」

漢組のみんなに助けられて一刀は何とか息を吹きかえすのだった。

蓮華「（すまない北郷…）」

そして二回戦第二試合蜀軍ＶＳ魏軍の戦いが始まる。

競技は第一試合と同じで水上相撲。

華琳「みんな！気合い入れていくわよ！」

華琳が言うと

春蘭「お任せください華琳様！奴らなぞ我が大剣の錆びにしてくれます！」

春蘭は水着のどこから取り出したのか七星餓狼を取り出した。

その結果…

陳琳「魏軍、武器の使用により勝者、蜀軍！」

ズコッ！

会場にいた全員がずっこけた。

桂花「バッカじゃないの！この脳筋！」

春蘭「誰がノーコンだ！」

二人が口喧嘩をしていると

華琳「やめなさい二人共！見苦しいわ！」

華琳が二人を止めた。

陳琳「さぁ、色々ありましたがついに決勝戦！漢軍ＶＳ蜀軍ＶＳ袁軍の三組の戦いだー！」

ワァー！！

会場は決勝戦ということもあり大いに盛り上がっていった。

陳琳「決勝戦ならばやはりこれ、競泳で決めてもらいます！１人２５ｍ、合計１００ｍです。では選手入場！」

陳琳の宣言後、それぞれの選手が入場してくる。
ちなみに三組による戦いなので違反した場合は最下位になるのだ。
許可道具はゴーグル。

そして選手達が並び立つ

一刀「（ここまで来たら勝たねば！）」

桃香「（みんなのためにも頑張らないと！）」

麗羽「（わたくしの勝ちは決まりですわ！オーホッホッホ！）」

第一レーン　袁軍
（猪々子・袁兵兄・袁兵弟・斗詩・麗羽）
助っ人は漢組の袁兵兄弟

第二レーン　蜀軍
（鈴々・朱里・雛里・愛紗・桃香）

第三レーン　漢軍
（華佗・及川・于吉・左慈・一刀）

陳琳「それでは、よ～い…」

ドンッ！バシャッ！

スタートが開始され各選手が飛込んでいった。

陳琳「やはり最初は各軍元気のある人が選ばれました！」

陳琳の言う通り各選手のスピードはほぼ互角だった。

鈴々「うりゃりゃー！」

猪々子「オラオラー！」

華佗「それそれっ！」

タッチ！

そしてほぼ同時に第二走者にバトンタッチされた。

バシャンッ！

第二走者が飛込むなか、

陳琳「やはり袁兵兄が早い！」

ちなみに他の二人は

朱里「はわわ～！泳げません～ん！？」

及川「アップ！…忘れてた！？わいカナヅチやったんや！？」

実は二人は泳げなかった。

一刀「及川！泳がなくていいから歩いて来い！」

桃香「朱里ちゃんもそうして～！」

仲間の指示に従いプールを歩く二人。

そうこうしている間に

陳琳「おーっと！袁軍は早くも第三選手に変わった！」

袁軍第三走者、袁兵弟も泳ぎが早かった。

そして及川と朱里がようやく交代したのは袁兵弟がプールを半分泳いだ時だった。

朱里「雛里ちゃんお願い！」

及川「うっきー！頼むで！」

タッチ！

二人はようやくタッチする。

于吉「左慈の元めがけて行きますよ！」

バシャシャー！！

于吉は左慈に早く会うためいつもより泳ぎが早かった。

雛里「あわわ～！泳げないです～！」

実は雛里も泳げなかったので仕方なく歩いていくことに

袁兵弟「斗詩さん、交代です！」

タッチ！。

陳琳「袁軍は早くも四番手にかわった！」

斗詩「頑張ってリードしないと！」

斗詩が頑張って半分まで泳いでいると

于吉「左慈！交代です！」

左慈「任しとけ！」

タッチ！。

左慈はプールに飛込むと

左慈「いくぜー！」

バシャシャッー！！

左慈は物凄いバタ足で斗詩を追い抜いた。

そして左慈が斗詩を追い抜いたところでようやく

雛里「後はお願いしましゅ！」

愛紗「任しておけ！」

タッチ！

雛里は愛紗と交代した。

バシャシャー！

愛紗は今までの遅れを取り戻すためいつもより早く泳いだ。

そして愛紗が半分泳いだところで

左慈「後は頼むぞ！」

斗詩「麗羽様！」

二人は同時にタッチした。

一刀「任しておけ！」

麗羽「わたくしの華麗な泳ぎを見なさいな！」

ザブンッ！

一刀が飛込んだ後、麗羽が浮き輪をつけて泳いだ。

そして二人が飛込んだ直後に

愛紗「姉上！今です！」

タッチ！

桃香「わかったよ！」

ザブンッ！

桃香が飛込んだ。。

アンカー対決はやはり体力のある一刀に軍配が上がり、

一刀「（もう少しだ！）」

一刀は他の二人との距離を引き離し独走状態だった。

麗羽「くっ！」

麗羽が一刀に対抗して速度をあげる。

桃香「（私も頑張らなくちゃ！）」

桃香も急いだその時だ

ピキッ！

桃香「（えっ！？）」

桃香の足がつってしまい

ブクブク…

桃香は沈んでしまった。

愛紗「姉上!?」

愛紗達が飛込もうとした時

バシャシャー!!ザブンッ!

ゴールから突然Uターンしてきた一刀が潜り出すと

ザバッ!

一刀「大丈夫か?」

桃香「えっ…あの…ありがとう…」

桃香は一刀に助けられたがその間に

麗羽「オーホッホッホ!わたくしが一着ですわ!」

麗羽が先にゴールしてしまった。

7時間目「生徒会長争奪戦その2」（後書き）

クラス紹介

・1年C組

担任：水鏡　洋子

生徒数　8人

鳳統　雛里
陳宮　音々音（通称ねね）
程イク　風
孟獲　美以
高田　トラ
梶田　シャム
徐庶　卵里（らんり）
厳蝉　壱与（いよ）（卑弥呼の姪）

水鏡先生の名はアニメの声優から
トラ・シャムの名字はアニメの声優から
徐庶はオリキャラです。
壱与については小説版真・恋姫無双　呉編を読んでください。（小説では卑弥呼の知り合いです）

8時間目「その後の争奪戦と副会長決定」

4月中頃、激しく争った生徒会長争奪戦から1日が過ぎ、本日より新しい生徒会長が就任することになった。

生徒会長室

ガラッ！

会長室の扉が開き、中に現れたのは…

一刀「ここが生徒会長室か！」

華佗「入るのははじめてだな！」

一刀達漢軍であった。

于吉「北郷が会長になれたのも卑弥呼先生と劉備のおかげですね」

左慈「あの化け物でも役に立つ時があるんだな」

話は昨日にさかのぼる。

麗羽がゴールした時

麗羽「オーホッホッホ！これでわたくしが二期続けて生徒会長ですわ！」

麗羽が大いに笑っていた。

麗羽「（ブ男達は蜀軍の妨害（救援）をしたため自動的に最下位。蜀軍は結果的に2位。どうあがいてもわたくしが会長ですわ！）」

そして一刀達は

一刀「すまないみんな！俺が勝手な事をしたばっかりに！」

一刀がみんなに謝ると

華佗「いいんだよ一刀」

及川「あのまま桃香ちゃんを見捨ててゴールするよりマシや！」

左慈「悔しいがまた1年我慢するしかないな！」

一刀「みんな！」

漢軍の美しい（？）友情であった。

そして麗羽に会長の証のバッジが渡されようとした時、

卑弥呼「ちょっと待つのじゃ！」

卑弥呼が突然叫んだ。

卑弥呼「袁紹が会長になる資格は無いのである！」

卑弥呼が言うと

麗羽「卑弥呼教諭、いくら教諭のあなたでも聞きずてなりませんわよ！このわたくしに何故資格がないのですか！！」

麗羽の抗議に対して卑弥呼は

卑弥呼「お主が会長に選ばれぬ理由それは…」

会場にいたみんなが卑弥呼の言葉を待つ。

卑弥呼「お主が浮き輪を使用しておるからじゃ！」

卑弥呼は叫んだ。

卑弥呼「ルールによると指定した道具以外の使用は禁ずると書かれておる。浮き輪は指定道具でないからのぅ！」

卑弥呼の言う通り指定道具はゴーグルだけで浮き輪は指定されていない。

会場にいたみんなは呆気にとられて驚いた。

卑弥呼「よって順位は蜀・漢・袁（最下位の最下位＝ビリ）と言うことじゃ！」

卑弥呼の言う事に全員が納得した。

麗羽「そんな…！？」

麗羽はただ一人驚愕して

猪々子「確かに理屈にあってるよな」

斗詩「それだけ証拠があるんじゃどうしようもないね」

袁兵弟「兄者残念ですな!?」

袁兵兄「そうだな弟よ!」

袁軍のみんなも納得するしかなかった。

陳琳「それでは袁軍の負けにより勝者、蜀ぐ…」

陳琳が宣言しようとすると

桃香「待って下さい!」

バッ!

桃香が手をあげた。

桃香「ごめんね愛紗ちゃん、鈴々ちゃん、朱里ちゃん、雛里ちゃん!」

桃香はみんなに謝ると

桃香「私達蜀軍は争奪戦を辞退します!」

バンッ!

桃香の口からそう宣言された。

ザワザワッ！

桃香が言った後、会場がざわめき出した。

陳琳「え～っと…この場合蜀軍辞退により勝者、漢軍！」

そして繰り上がりで漢軍が勝者となった。

そして桃香が一刀に近付くと

桃香「一刀君、さっきは助けてくれてありがとう！これから会長として頑張ってね！」

桃香が一刀に言うと一刀はそれに答えるかのごとく

一刀「あぁ、まかしてくれ！（ニコッ！）」

これを間近で見た桃香は

桃香「はうぅ～／／／／」

バタッ！

顔を赤くして倒れてしまった。

華佗「何はともあれやったな一刀！」

左慈「貴様の優しさが勝利の決め手になったようだな！」

于吉「これからが大変ですよ！」

及川「よっしゃ！めでたいからかずピーを胴上げしよや！」

わっしょい！わっしょい！

漢軍が一刀を胴上げしていると

陳琳「それでは新会長になった北郷一刀さんに学園長からのご褒美があります！」

そして聖フランチェスカ学園学園長である夕凪　貂蝉が前に出てくる。

貂蝉「激しい戦いを見事勝ち抜いたあなたにご褒美をあげるわよん♪」

この学園長である貂蝉は普段はヒモパンツ姿にみつ編みの卑弥呼以上の変態おっさんなのだが今日はさすがに背広姿なのでまともそうに見えた。

及川「（ご褒美って何くれるんや？）」

華佗「（会長にしか分からないことだからな）」

そして貂蝉が口を開くと

貂蝉「ご褒美はアタシのあつ～い口付けよん♪」

ぶっちゅ～！

ご褒美という名のばつゲームが一刀に迫る！

そして一刀はとっさに

一刀「及川のおかげで一回戦突破したんだからご褒美は及川が貰えよ！？」

スッ！

及川を盾にし、

及川「えっ？」

知らない内に前に突き出された及川は

ブッチュン！

貂蝉の口付けをまともに受けてしまった。

及川「ギャーー！！！」

バタッ！

及川はその場に倒れてしまった。

ちなみにこれ以後、生徒会長になろうとする人が減ったのは別の話である。

そして現在

華佗「おかげで及川は寝込んでしまって今日は欠席だがな！」

及川はショックを受けてしまい昨日から寝込んでしまった。

漢組及川の部屋

及川「わいのファーストキスがあんな化け物とやなんて！？」

ガクッ

生徒会長室

一刀「まぁ、後で見舞いに行くとして今は会長としての仕事をしないとな！」

誰が原因だと思っている！。

そして一刀が会計帳簿を開いてみると

一刀「何だよこれ！？」

一刀は驚いた。

華佗「どうした一刀？」

一刀「この帳簿見てみろよ！？」

一刀が帳簿をみんなに見せると

于吉「何々…会長専用リムジン代、年４００００００円（４０００万）」

左慈「会長専用ディナー代、年２０００００００円（２億）」

華佗「会長専用エステ代、年３０００００００円（３００万）」

三人は驚くしかなかった。

于吉「まさかあの人がこんなに学園費で豪遊してとは！？」

一刀「これはどう見ても無駄遣いだし、削除していいよな！」

一刀達が会話をしていると

ミシッ！

扉の外から物音が聞えてきた。

左慈「そこにいるのは誰だ！出てきやがれ！出ないと蹴り飛ばすぞ！」

物音にいち早く気付いた左慈が怒鳴りちらすと

ガララーッ！

扉が開いて外から現れたのは

？「グスッ！」

幼稚園生くらいの女の子が涙を流して泣いていた。

左慈「（変だな？さっき感じた気はこんなガキじゃなかったはずだが…）」

左慈が考えていると

？「うわぁ～ん！！」

女の子は泣き出してしまった。

于吉「この子は確か紫苑先生の娘の璃々ですよ」

一刀「あの先生、娘がいたの！？」

娘の年齢を考えてあの人はいくつなんだろう？と考える一刀

華佗「今はそんなことよりこの子を泣き止ます方が先だ！」

璃々「ビェェン！ビェェン！」

璃々は中々泣くのをやめない。

左慈「俺が悪かったからさっさと泣き止んでくれよ！ベロベロバ～♪」

左慈は頑張ってあやそうとするが…

璃々「ビェェン！ビェェン！」

逆効果であった。

于吉「左慈！今の顔をもう一度してください！動画を撮りますから！」

左慈「誰が二度とあんな顔するか！！」

二人は争いを始めた。

一刀「はぁい♪怖くないから泣き止んでね（ニコッ！）」

今度は一刀があやしてみると

璃々「（ジ～）」

璃々は泣くのをやめて一刀をじっと見つめていた。

于吉「（さすがはおとしの北郷、幼女までおとすとは！？）」

于吉はただ一人驚いていた。

璃々「おかあさんどこ～？」

璃々が聞いてくると

華佗「紫苑先生なら今日は研修に行って学園にいないはずだが…」

華佗が璃々の質問に答えると

璃々「いないの？（グスッ）」

璃々は再び泣きそうな顔になった。

どうやらお母さんに会いに来たらしい。

すると一刀は

一刀「それじゃあお母さんが来るまでお兄ちゃん達と遊ぼうか？」

すると璃々は

璃々「うんっ！」

泣き止んで元気な顔で返事を返した。

于吉「それなら紙をあげますからお絵書きしましょう！」

于吉は懐から紙を数枚取り出して璃々に渡す。

そして璃々は華佗から渡されたマジックでお絵書きを始めた。

華佗「やれやれ、紫苑先生には後で連絡いれるとして、そういえば一刀！副会長は誰にするんだ？」

一刀「そういえばまだ決めてなかったなぁ、誰にしようかな？」

一刀が悩んでいると

ミシッ！

扉の外から足音が聞こえてきた。

左慈「（この気は!?さっきの奴か!）」

気配にいち早く左慈が気付くと

左慈「そこにい…」

左慈が叫ぼうとした時

パスッ!

于吉の手が左慈の口を塞いだ。

左慈「（ふひふー!はひひやはふ!!訳：于吉ー!何しやがる!!）」

口を塞がれた左慈が叫ぶと于吉は

于吉「（左慈が叫んでまた璃々ちゃんを泣かしたらどうする気ですか!）」

于吉は小声で囁いた。

左慈「（わはっはかはほほへをははへー!訳：わかったからこの手をはなせー!）」

しかし于吉は

于吉「（ダメですよもう少しこのままで!）」

手をはなすことなく感触を味わっていた。

ピキッ！！！

そんな于吉の態度に左慈が腹を立てて

ドカッ！

于吉の脳天に蹴りを喰らわした。

璃々「今の音なぁに？」

璃々がお絵書きを中断し、左慈達の方を向こうとすると

一刀「何でもないんだよ璃々ちゃん！？」

華佗「そうだとも！？」

一刀達が璃々の目先に立ちはだかり璃々から左慈達を見えなくした。

一刀「それよりも今はお絵書きしようねぇ～。上手に書けたらお母さんも喜ぶからねぇ」

一刀が話題をそらそうとすると

璃々「うんっ！」

璃々は素直に受け取った。

左慈「ったく！俺はもう退散するぜ！」

于吉「あぁ！待ってくださいよ左慈！」

左慈が生徒会長室の扉に触れようとした瞬間

バタンッ！

いきなり扉が開き、中に入ってきたのは

紫苑「璃々！ここにいるの！？」

保健医の黄忠紫苑先生が入ってきた。

ちなみに外に出ようとした左慈達は入ってきた紫苑先生に突き飛ばされて壁に埋もれていた。

于吉「私達って何なんでしょうかね？」

左慈「知るかっ！！」

二人が壁に埋もれながら呟いていると

璃々「あっ！おかあさんだ！」

テトテトッ！

璃々が紫苑の方に近寄っていった。

紫苑「璃々、ダメじゃないの学園に来ちゃ！」

ガシッ！

紫苑は璃々を抱きしめる。

一刀「許してあげてください紫苑先生、璃々ちゃんはお母さんに会いたくて学園に来てしまったんですから！」

一刀が話すと

紫苑「それはわかりました。でも勝手に来たらお母さん心配するから来ちゃダメよ！」

紫苑が言うと璃々は

璃々「はぁい…」

素直に受けとめて返事を返した。

そして璃々は

璃々「そうだ！おかあさんみてみて！璃々、自分のお名前が書けるようになったんだよ！」

バッ！

璃々は紙を紫苑に見せる。

それを見た紫苑は

紫苑「えらいわね璃々！」

一刀「どれどれ？」

華佗「どんな筆跡を書いたのかな？」

二人が紙を見てみると

一刀・華佗『！？』

二人は驚いた。何故なら璃々が書いた紙は

『次の者を副会長に任命する。

副会長　こうちゅう　りり

』

しっかりと名前の欄に璃々の名前が書かれていた。

どうやら于吉から貰った紙が尽きてそこら辺にあった紙に書いたようだ。しかもマジックで書いてあるので消せない！

しかも本人は

璃々「璃々もじ上手？」

えらくごきげんだったので断ることが出来なかった。

こうして聖フランチェスカ学園に新しい生徒会長と副会長が就任した。

生徒会長　北郷一刀
副会長　黄忠璃々

ちなみに左慈が感じていた扉の前の気配は

凪「副会長になりたかった…」

2年B組　楽進凪。生徒会長争奪戦の時に一刀に人目惚れした少女である。

しかし彼女は体中の傷を見られるのが嫌で中々出れずにいた。

だったらいつも一緒にいられる副会長になれればと思っていたが璃々に先を越されてしまったのだ。

凪「はぁ…」

彼女の苦難はこれからも続く。

8時間目「その後の争奪戦と副会長決定」（後書き）

聖フランチェスカ学園教師一覧

学園長　夕凪　貂蝉

教頭　巌蝉　卑弥呼
（漢組担任、男子寮管理人も兼用）

女子寮管理人　孫　雪蓮

２－Ａ黄蓋　祭
２－Ｂ厳顔　桔梗
２－Ｃ何進　愛
１－Ａ周瑜　冥琳
１－Ｂ管輅　占
１－Ｃ水鏡　洋子

保健医　黄忠　紫苑
生徒会副会長　黄忠　璃々

３年の教師はオリキャラです。

貂蝉の名字はゲームからとりました。

9時間目「学園男子最強と学園女子最強」（前書き）

この小説を始めて9話、前作よりも一話に対して文字数が多く、意外に一話でまとまりにくい時があります。その時は余計な文字を消していますがそれでも無理な時は二話に分けてやっています。

9時間目「学園男子最強と学園女子最強」

以前一刀が暴れた黄巾高校（3話参照）

ここから凄い音が鳴り響いていた。

ドサッ！

張曼成「ぐほっ！」

黄巾高校番長、張曼成が投げ飛ばされた。

張曼成「先輩、もう勘弁してください…」

張曼成が言うと

張譲「やめねぇよ、この高校の面汚しが！」

黄巾高校ＯＢ、張譲２１歳。現在はヤクザの幹部

張譲「聞けばテメェら、フランチェスカ学園の奴にボコボコにされやがって！しかもたった一人相手にだぞ！この前も3万人が女一人にやられるとは情けない後輩だぜ！」

グリッ！

そして張譲は張曼成を踏みつける。

張曼成「でも先輩！相手はおとしの北郷と天下無双の呂布ですよ！

勝てるわけが…」

張曼成が言うと

ドカッ！

張譲「言い訳は見苦しいんだよこのタコが！」

張譲は張曼成を殴りつけた。

張譲「まぁいい、俺もフランチェスカの奴らには頭にきてるんでな！その北郷も呂布も俺が何とかしてやるよ！」

ニッ！

張譲は張曼成を睨みつけた。

黄巾高校でそんな話が出てきた頃、一刀は

一刀「さて、会長としての仕事をやりますか！」

実は一刀は昨日、前会長である麗羽の無駄使いを全て削除し、本来の使用である部活創設資金で新たに部活希望者を募集して今日がその集まった部活の視察をする予定なのだ。

一刀「それじゃあ行こうか副会長♪」

一刀が言うと

璃々「うんっ♪」

新たに副会長になった璃々の手を引いて出かけるのであった。

ちなみにあの後、璃々に副会長について説明すると本人が『おかあさんと学園にいられるのならやりたい！』とますますやる気になってしまい、仕方なく副会長に任命した。（断ろうとすると泣き出すからである）

一刀と璃々はまず料理部部室である家庭科室を訪ねた。

ちなみに部活をつくるには部員3人以上と顧問の先生が必要である。

家庭科室

料理部部長・曹操華琳
部員・典韋流琉、徐庶卯里
顧問・水鏡洋子

一刀が家庭科室の扉を開くと

華琳「あら、来たのね一刀！」

華琳が出迎えて（？）くれた。

一刀「ここでは料理の他にお菓子もつくってるんだな！」

一刀の目の前には机に並べられた豪華な料理やお菓子が並んでいた。

華琳「私が部長である以上、半端なものはつくれないからね！」

華琳が自慢げに言うと

璃々「このお菓子食べていい？」

璃々が聞いてきた。

流琉「食べてもいいですよ♪」

流琉から了解をえると

璃々「ホント！？じゃあいただきま～す！」

スッ！スッ！

璃々は次々とお菓子に手をつけた。

そして華琳はそっと一刀に近付くと

華琳「一刀が会長になってよかったわ（ボソッ）」

と耳打ちした。

一刀「んっ？何か言ったのか？」

しかし一刀には聞こえていなかった。

華琳「何でもないわよ！この馬鹿！／／／」

華琳が顔を赤くしながら怒り出した。

すると

パクパクッ！

卵里「ひゃわわ～！璃々ちゃんそんなにお菓子を食べちゃダメでしゅよ～！？」

徐庶　卵里、朱里・雛里とは同じ中学の同期生。

彼女はさっきからお菓子を食べ続けている璃々に注意するが

璃々「いや～！もっと食べるの～！」

璃々は食べるのをやめなかった。

華琳「うちの部を食い荒らす気なのかしら！！！」

ギロリッ！

華琳が一刀を睨みつけると

一刀「失礼しました！？璃々ちゃん、次に行こうね～！！」

ガシッ！　ダッ！

一刀は璃々抱きかかえると家庭科室を飛び出した。

璃々「あ～ん！もっと～！」

それからしばらくして

あの後、お菓子を食べ損ねてぐずる璃々を何とかあやして次々と部活を見て回った二人。そして残るはあと一つとなった。

一刀「え～っと、ここが動物飼育部の部室か　」

動物飼育部、馬術部とは違い馬だけでなく他の動物の面倒をみる部である。

ガチャッ！

一刀が部室の扉を開くと

？「ガゥッ！　」

？「グルルゥー！　」

中からいきなり白虎とパンダが飛び出してきた。

一刀「うわっ！？　」

突然のことにさすがの一刀も反応が鈍り

ズッシーン！！

二頭につぶされた。

璃々「おにいちゃんだいじょうぶ？　」

璃々が心配していると

シャオ「こら～！周々、善々勝手に飛び出しちゃダメでしょ！」

更に中から１－Ｂ孫　小蓮（通称シャオ）が飛び出してきた。

シャオ「二人共！何を踏んでるの？」

シャオが二匹の足元を見てみるとそこには…

ぺら～ん！！

二匹につぶされてのしイカ状態になった一刀がいた。

しばらくして

一刀「ひどい目にあったな！？」

何とか一刀は救出された。

シャオ「会長さんごめんなさい！ほら、二人も謝りなさい！」

シャオが言うと

周々「ガルルゥ～…」

善々「グルルゥ～…」

白虎の周々とパンダの善々は頭を下げた。

一刀「もういいよ！ところで部長の恋はどこ…」

一刀が続きを言おうとすると

タタタタッ！。

どこからか足音が聞え、

ねね「ち～ん～きゅ～う～…」

ビュンッ！

その者は高く飛び上がると

ねね「きぃぃっく！！」

ドカッ！。

一刀に蹴りを喰らわした。

ねね「このへぼ会長め！恋殿を呼び捨てにするなんて１０年早いのです！」

１－Ｃ陳宮　音々音（通称ねね）恋を愛する後輩。

しかしねねは足の感触がおかしいことに気が付いた。

何故ならば…

一刀「いきなり蹴るなんて危ないな！？」

一刀がねねの蹴りを受け止めていたからである。

ねね「このっ！掴んでないではなすのです！」

ねねが足を捕まれながら暴れていると

一刀「ホントにいいの？」

ねね「いいからさっさとはなすのです！」

ねねが暴れながら言うと

一刀「じゃあ…」

パッ！

一刀は掴んでいたねねの足をはなした。

解放されたねねは

ねね「やっとはなしてくれやがったな！このへぼ…」

ここで忘れてはいけないのがねねは立っていた一刀に足を掴まれていたことである。しかもねねは逆さ吊りの状態だ。そんな状態で一刀が手をはなせば…

ゴッチ～ン！★彡。

当然のごとくねねの頭は床にぶつかった。

ねね「うぅ～！へぼ会長めよくもねねの頭にタンコブを…！！」

ねねは一刀を睨みつける。

一刀「だから言っただろ！はなしていいのかって」

その結果がこれだ。

一刀「ところで話は戻るけど部長のれ…」

ねね「ウー！！」

一刀「呂布さんはどこに行った？」

するとシャオが答えた。

シャオ「恋ならたぶんセキト達の散歩だと思うけど…」

一刀「セキト？」

一刀が？を浮かべていると

？「ワンッワンッ！」

セントバーナードがこっちに向かってきた。

ねね「あれは張々！恋殿と一緒に散歩に向かったはずなのです！」

ねねは張々に近付くと

ねね「張々！恋殿はどうしたのですか！？」

すると張々は

張々「クゥ～ン！」

スッ！

口にくわえていた紙をねねに渡した。

パラッ！

ねねがその紙を広げて読んでみると

ねね「これは！？」

ねねは驚いた。紙には

『お前が可愛がっている犬ころは預かった。返してほしくば一人で黄巾高校に来い！　黄巾ＯＢ　張譲』

この手紙は前にも似たような感じがあった。

これを見たねねは

ねね「くっ！黄巾ＯＢの張譲といえば在学時代からの悪で、卑怯がモットーの腐った奴なのです！」

そしてねねの後ろで手紙を読んだ一刀は

一刀「璃々ちゃん、お兄ちゃんはちょっと出かけてくるからここで待っててくれるかな？」

璃々「うんっ！いいよ」

璃々から了承を得ると

一刀「待ってろよ！」

ダッ！

一目散に走っていった。

ねね「ちょっとお前！？どこに行くのですか？」

ねねが止める間もなく一刀は走り去って行った。

そして一刀が来る前、黄巾高校では

恋「…約束通り一人で来た。だからセキトを返す！」

恋は黄巾高校生徒＋ＯＢに囲まれながら言うと

張譲「ヤダね！お前には前に痛い目にあってるからなたっぷりお返してもらうぜ！」

スッ！

張譲が腕を上にあげると

ジャッキーン！

黄巾生徒達が一斉に武器を取り出した。

恋「…仕方ない」

スッ！

恋が腰にある方天画戟に触れようとすると

張曼成「待ちな！こいつがどうなってもいいのか！」

スッ！

？「クゥン…」

張曼成が恋に突きつけた物は恋の愛犬であるコーギーのセキトだった。

それを見た恋は

恋「…セキト大事」

パッ！カランッ！

恋は方天画戟を地に落とした。

張譲「分かってると思うが少しでも抵抗したら犬の命はないからな！」

張譲が言うと恋は

コクリッ　恋「…わかった　」

うなずく恋であった。

そしてそれを確認した張譲は

張譲「野郎共！たまった恨みを返してやりな！　」

黄巾軍『オォーー！！　』

張譲が叫んだ後に黄巾軍は無抵抗の恋に襲いかかった。

それからしばらくして

ボロッ

恋は黄巾軍にやられて体が倒れてボロボロになっていた。

セキト「わんっ！わんっ！？　」

セキトが凄い勢いで叫びまくる。

張曼成「うるせぇぞこの犬！　」

ブンッ！

張曼成はセキトを殴ろうとするが

張譲「馬鹿かテメェ、人質に傷付けたらこいつが何するかわからねぇだろうが！」

張譲が張曼成を怒鳴りつけた。

張譲「だが、人質が無事ならばこいつは抵抗できないからな」

ドスンッ！

張譲は恋の頭を踏みつける。

黄巾生「さすがは張譲さんだ！あの天下無双の呂布をここまで痛めつけるなんて！」

黄巾達が張譲を褒めると

張譲「ふんっ！ガキのテメェらには勝てないだろうが大人の俺には呂布だろうが北郷だろうが相手じゃないんだよ！」

張譲がそう言っていると

？「ならば相手してもらおうじゃん！」

突然後ろから声が聞え、黄巾軍が振り向くと

一刀「久しぶりだね張曼成くん！」

バァン！

そこには一刀が立っていた。

一刀の姿を見た黄巾軍は

黄巾生「ほ…北郷だ！？」

何人かがビビりまくっていた。

張譲「テメェが北郷か！前は後輩が世話になったそうじゃねぇか！」

張譲は一刀の前に立つと

張譲「こいつはそのお返しだ！」

ブンッ！

張譲はいきなりメリケンサック付きの拳で殴りかかってきた。

が…

パシッ！

一刀は簡単に張譲の拳を受け止めた。

張譲「馬鹿な！？学園中の不良をけちらしてきた俺の拳を止めやがった！？」

これには張譲も驚いたが

一刀「お前が学園中なら俺は…」

一刀は拳を後ろにすると

一刀「鹿児島中の不良を相手にしてきたんだよ！」

ドグボッ！！。

一刀の拳が張譲にもろに当たり、張譲はぶっ飛んでいった。

張曼成「（やっぱりこいつは化け物だ！？）」

張曼成が驚いていると

一刀「次はお前か？」

ギロリッ！

一刀は張曼成を睨みつける。

すると張曼成は

張曼成「ひぃっ！？すみませんでした！犬は返しますので勘弁して下さい！」

張曼成は捕まえていたセキトを返すと

張曼成「失礼しました！？」

ビュンッ！

そのまま走り去っていった。さらに張曼成に続いて他の生徒も逃げていった。

セキト「クゥン…」

セキトは倒れた恋に近寄っていき

ペロペロッ

恋の顔を舐めた。それを見た恋は

恋「…セキト、無事でよかった♪」

笑顔を返すのだった。

一刀「さてと！」

そして一刀は恋に近付くと

ヒョイッ！

恋を肩に担いだ。

恋「…？」

さすがの恋もわけがわからなかった。すると一刀は

一刀「ボロボロの女の子を歩かせるわけにはいかないだろ！（ニコッ！）」

一刀のスマイルに恋は

恋「（…何で顔が熱いの？／／／）」

？を浮かべながら赤面していた。

この後、二人は無事学園についたが一刀に担がれている恋を見たねねにキックを喰らってしまったのは後の話である。

9時間目「学園男子最強と学園女子最強」（後書き）

聖フランチェスカ学園

新部活

本編で説明した以外の部活を説明します。

・読書部

顧問：周瑜　冥琳

部長：陸遜　穏

諸葛　朱里

鳳統　雛里

于吉　武人

本を読んだり、雑誌をつくる部活。

・音楽部

顧問：厳顔　桔梗

部長：張　人和

張　天和

張　地和

袁術　美羽

張勲　七乃

コンサートを開く部活

・動物飼育部

顧問：何進　愛

部長：呂布　恋

陳宮　音々音

孫　小蓮

１０時間目「恋の予感？」（前書き）

何とか１０話に到達しました。これからも頑張って投稿していきます！。

１０時間目「恋の予感？」

女子寮シャワー室

シャー！

ここに朝シャワーをしている華琳がいた。

華琳は頭にシャワーを浴びながらうなっていた。

華琳「この私が何であんなことを言ってしまったのかしら！？」

シャワワーッ！

華琳は前回一刀に言ったことを何故言ったのか疑問を感じていた。

華琳「（まさかこの感じって！？）」

同時刻、女子寮桃香・愛紗・鈴々の部屋

桃香「…ポケ～…」

桃香はまるで魂が抜けたように呆然と朝食を食べていた。

するとそんな桃香に

鈴々「桃香お姉ちゃんどうしたのだ？」

鈴々が聞いてきた。

愛紗「姉上、さっきから何ボケッとしてるのですか？」

愛紗も言うと桃香は目を覚まし

桃香「えっ！？別になんでもないよ！？」

すごく慌てていた。

実は桃香は会長争奪戦の時に一刀から受けたスマイルが忘れないでいた。

桃香「あっ！？もうこんな時間だ！早く食べて学園に行かないと！」

スッ！ヌリッ！パクッ！

そして桃香は慌てて食パンを食べた。

愛紗「姉上！？それはバターではなく！？」

そう、桃香がパンに塗ったのはバターではなく、味噌だった。

桃香「えっ…！？ひ～ん！！」

味噌を塗った食パンを食べながら桃香は思った。

桃香「（この気持ちってまさか！？）」

同時刻、学園職員室

ここに日直である蓮華がいた。

ガラッ！

蓮華「失礼します！黄蓋先生、日誌を渡しに来ました！」

この学園では前の日の日直の人が出し忘れると次の日の日直の人が日誌を届けるのだ。（前の日の日直には×をつけられ、×が１０個貯まると補習を受けさせられる）

祭「おぉっ、ご苦労じゃったな！」

蓮華のクラス２－Ａ担任の黄蓋　祭。授業よりも酒が好きな先生。

そして祭は日誌を受けとると

祭「んっ！待たぬか孫！」

祭は去ろうとした蓮華を呼び止めた。

蓮華「どうしましたか祭先生？」

蓮華が聞くと

祭「これは日誌ではなく、お主のノートではないか！」

バァンッ！

祭が見せたのは確かに蓮華のノートであった。

蓮華「すみません！間違えてしまいました！？」

蓮華は慌てていた。

祭「いつも真面目なお主が珍しいのぅ、さては恋でもしたか？」

これを聞いた蓮華は

ボンッ！／／／

顔がゆで蛸になった。

蓮華「祭先生！冗談はやめてください！／／／」

ダッ！

蓮華は顔を赤くして去って行った。

実は蓮華は争奪戦の時に一刀のことが気になっていたことに疑問を感じていた。

蓮華「（もしかしてこの気持ちって！？）」

そして三人は同時に思った。

華琳・桃香・蓮華『（私は恋をしているの？）』

そして学校が始まった時

ズラリッ！

いつの間にか三人は漢組の前に立っていた。

華琳「あら、奇遇ね桃香、蓮華、あなた達が漢組に何の用かしら？」

蓮華「それはこちらのセリフよ華琳、あなたこそ何故ここに？」

桃香「どうやら皆さん目的は同じようですね」

バチバチッ！

今、三人は見えない火花を飛ばしていた。

そして三人は

ガシッ！

同時に扉に手を触れると

ガララッ～！

扉を開いた。

急に開いた扉から入ってきた三人に男達は

男達『おんなー！！』

バッ！

以前のように（2話参照）飛びかかってきたが

ドカカッ！

今回は相手が悪かった。相手に覇王である華琳がいたからだ。

華琳は死神鎌・絶を取り出して男子達をけちらした。

そして男子達が誰も近寄らなくなると

華琳「短刀直入に言うわ！一刀はいるの！」

ビシッ！

華琳の問いに誰もが静まるなか、

華佗「一刀なら副会長のお供で午前はいないぞ！」

華佗の話を聞いた三人は

華琳・桃香・蓮華『副会長のお供（ですって・ですか・なの）!?』

三人は驚いた。

その頃、一刀はというと

場所は変わって璃々の通うカタリナ学園。

先生「はい、ではこの絵は何ですか？」

先生が犬の絵を見せると

子供達『はいっ！はいっ！』

子供達が一斉に手をあげる。

先生「それじゃあ、璃々ちゃん！」

そして先生が璃々を指名すると

璃々「それは犬です！」

璃々が正解すると

一刀「さすが璃々ちゃんだ！」

後ろにいた一刀が璃々を褒めた。

実は今日はカタリナ学園の父親参観日で一刀は紫苑に頼まれて父親代理として来ていた。

璃々「お兄ちゃんやったよ！（V）」

璃々も一刀にVサインするのであった。

そして昼過ぎになり場所はフランチェスカ学園に戻る。

帰ってきた一刀は璃々を生徒会室に送った後、お昼を食べに食堂に向かった。

スッ！

それを見ていた三人も食堂に向かっていった。

食堂

及川「かずピーの弁当相変わらず豪華やなぁ！？」

左慈「よく低コストでそんなもんが作れるぜ！？」

于吉「ちょっとしたコツがあるんですよ！おかげで私も自分の分を節約できて、左慈の分を豪華にできてますからお世話になってますし！」

それはちょっと危ないのでは…

一刀の弁当を遠くから見ていた三人は

華琳「（以前よりも料理の腕をあげてるわね。絶対に私の専属シェフにしてあげるわ！）」

桃香「（美味しそうなお弁当～！私も食べたいな～♪）」

蓮華「（私より美味しそう！？私ももっと腕をあげないと！）」

そしてそんな三人を見ていた人は思った。

（この三人は何をしているんだろう？）

と疑問を感じるのであった。

お昼終了後

一刀「じゃあ俺は会長の仕事があるから！」

華佗「わかった！卑弥呼先生には伝えておくぜ！」

そう言って一刀は会長室に向かっていった。

華琳「さすがにこれ以上は授業があるから尾行できないわね！？」

蓮華「授業をさぼったら先生に叱られるからな！」

桃香「決戦は放課後だね！（でも何で尾行しているんだっけ？）」

桃香はそれが疑問に感じていた。

そして放課後

璃々を紫苑に渡した一刀は寮に戻る。

そして一刀は生徒会の仕事で遅れたため一人で帰るのだった。

それを尾行していた桃香達も後をつける。

帰りのバスの時間はとっくに過ぎたため歩いて帰ることになった。

華琳「ようやく帰るようね！」

蓮華「この先何があるのか？」

桃香「ドキドキですね～！！」

しかし三人は気付いていなかった。これはもはやストーカーだということを！

その後、一刀は普通に帰る途中にコンビニに立ち寄り、おにぎりやジュースを買うという普通なことをしていた。

これを見ていた三人は

華琳「私達って何をしてるの？」

蓮華「さっきから見ていればあいつは普通な行動ばかりだな」

桃香「というより私達がしていることって…」

そして三人は同時に思った。

華琳・蓮華・桃香『これってストーカーじゃん！？』

今更である。

華琳「（一体私の一日は何だったのかしら！？）アホらしくなってきたし私は帰らせてもらうわ！」

スッ！

華琳が帰ろうとすると

ガシッ！

誰かに腕を掴まれた。

アニキ「可愛いい顔のお嬢ちゃん♪俺達と遊ばない♪」

よく見ると桃香と蓮華にも男達が近寄っていた。

桃香「いやっ！はなしてください！」

蓮華「この無礼者め！」

桃香と蓮華は暴れるが

チビ「嫌がる顔も可愛いいねぇ♪」

デク「おとなしくするんだな♪」

二人は手をはなさなかった。

華琳「二人共！？」

スッ！

華琳は絶に手を触れようとするが

アニキ「おっと！二人がどうなってもいいのかな？」

ジャキンッ！

三人は桃香と蓮華の首にナイフを突きつけた。

華琳「くっ！？」

パッ！

二人を助けるため華琳は絶を手放した。

アニキ「それでいいんだよ！」

ガシッ！

アニキは華琳の肩に手を掛ける。

チビ「それじゃあこいつらを連れてラブホでも行きましょうや！」

デク「賛成なんだな！」

三人は言いたい放題だ。

華琳・桃香・蓮華『（誰か助けて！）』

三人は祈るが周りの人はみてみぬふりをしていた。

もうダメだと三人が思った時、

？「あれ～！？お前ら久しぶりだな！」

声に反応して三人が振り向くと

一刀「うちの生徒に手を出すんじゃあ、会長としてほうっておけないなぁ！」

ジャーンッ！

そこには一刀がいた。

アニキ・チビ・デク『おっ…おとしの北郷！？』

三人はこれまで三度も一刀にやられていてそれがすっかりトラウマになっていた。

そして三人は直ぐ様華琳達を解放すると

アニキ・チビ・デク『失礼しました！？』

ピューッ！！。

三人は直ぐ様逃げ出した。

スッ！

三人が去った後、一刀は華琳達の方を向くと

一刀「大丈夫かい？」

スッ！

手をさしのべてきた。

それに対し華琳達は

華琳「い…一応礼を言っとくわ／／／／」

桃香「あ…ありがとうございます／／／／」

蓮華「感謝する／／／／」

三人はそれぞれ顔を赤くしながら礼を言った。

一刀「それじゃ、俺は帰るから！」

タタッ！

一刀はすぐに立ち去った。

そして三人はその場でしばらくしたあと同時に思った。

華琳・桃香・蓮華『（私は（一刀・北郷くん・北郷）に恋をしている！）』

三人が何故そう思う理由は一刀を見ると胸がドキドキするからであった。

そして次の日のお昼

及川「あれっ？かずピー今日は弁当やないんやな！」

この日、一刀は珍しく弁当を持ってこなかった。

一刀「たまには食堂のメニューを食べようと思ってな！」

ガラッ！

そして一刀達が食堂にたどり着くと

華佗「おいっ、一刀！」

華佗が寄って来て

華佗「華琳達がお前に用があるらしいぞ！」

ビッ！

一刀が華佗が指さした方を見てみると

ズラリッ！

そこには華琳・桃香・蓮華が一刀が来るのを待っていたかのように座っていた。

一刀「俺に何か用？」

一刀が三人に聞くと

スッ！スッ！スッ！

三人はほぼ同時に鞄から

バッ！バッ！バッ！

弁当箱を取り出した。

一刀「えと！？、これは何？」

一刀が聞くと三人は

華琳「感謝しなさい、昨日助けてくれたお礼に滅多に食べられない私の弁当を食べられるんだから／／／」

桃香「朝早くから起きて感謝の気持ちを込めて作りました！／／／」

蓮華「料理は初めてなので見た目は悪いが食べてくれ！／／／」

三人は顔を赤くしながら言った。

実は昨日三人は寮に帰った後、一刀への手作りお弁当を作っていたのだ。

これは以前、祭先生が言っていた『男は胃袋からおとせ！』からとっている。

三人に弁当箱を渡された一刀は

一刀「あ…ありがとう」

パクパクッ！

三人からの弁当を食べるのだった。

これで終わればよかったのだが、

桃香「これからは毎日作るからね♪」

桃香の言葉をきっかけに

華琳「私も毎日作るわよ！！」

蓮華「私だって！！」

こうして一刀はしばらくの間、三人からの弁当により食費が削られることになった。

それと同時に及川を含み、周りにいる男子からは『（おのれ北郷め！！！）』睨まれる日々が続いたという。

１１時間目「ＧＷはグアム島で！その１」（前書き）

内容はＯＶＡ２巻を題材にした作品です。

11時間目「GWはグアム島で！その1」

一刀達の通う聖フランチェスカ学園の通り道にある神梅（かんばい）商店街。

品揃えが多く、学生や近所の人にも人気がある商店街だ。

何より一番の魅力は毎年行われる期間中の商店街のレシートを5枚集めた人に豪華な景品が当たる抽選に挑戦できる権利があるのだ。

（一人一度のみ）

そんな商店街の抽選会場である騒ぎが起きていた。

商店街・抽選会場

町内会長「まさか…そんな！？」

町内会長は驚いていた。何故ならば…

町内会長「今年のは滅多に出ないよう細工までした一等賞が…何故出るんだー！」

開始してから一週間もたたずにもう一等賞が出てしまった。

一等を当てたのは勿論…

一刀「マジで一等なの！？」

一刀であった。

この商店街で買い物をしまくっている一刀は今日の買い物でレシートが5枚たまったので抽選することになったのだが、簡単に一等が出てしまった。

これには町内会長も驚いたが、

町内会長「まぁ、当たったもんは仕方がない。ほらよ一等賞の…」

スッ！

会長は一枚のチケットを一刀に渡した。

町内会長「2泊3日グアム島５０名以上の招待券だ」

バババーンッ！

すごい景品である。

一刀「ありがとうございます…！」

一刀は商店街を後にした。

その日の夜、男子寮・一刀の部屋

及川・華佗・左慈・于吉『マジ（かいな・か・かよ・ですか）！？』

４人はあまりのことに驚いていた。

及川「かずピー、お前って何者やねん！最強・料理上手・頑丈・モ

テモテなうえにくじ運強いやなんて反則やで！？」

及川は叫びまくった。

華佗「それにしてもどうする気だこの旅行券？」

華佗はチケットを見る。

一刀「せっかくだからもうすぐＧＷ（ゴールデンウィーク）も近いし、みんなで行かないかと思ってな！」

一刀が言うと

及川「おいおいかずピー、男だけでグアムは寂しいで！」

及川が言うと

于吉「それにこの券をよく見ましたら『必ず５０人以上でお願いします』と書いてますし、漢組を全員入れても１５人ですから足りませんよ」

于吉の言う通りだ。

及川「やったら女子を誘おうやないか！くっさい男共は置いといて！」

自分も臭い男のくせに

華佗「しかし女子が男子の言う通りに動くとは考えられないぞ」

華佗が言うのももっともだ。何故ならば日頃女子達は男子を毛嫌する人が多いからだ。（理由は及川達によるセクハラ）

及川「そんなことならワイに任し！いい作戦があるねん！」

仕方なく一刀達は及川に任せることにした。

そして次の日の昼休み

ザワザワッ

いつものように学園生活を過ごしていると

ピンポンパンポンッ！

放送が鳴り出した。

一刀『え～、生徒会長より呼び出しがあります』

ガタタッ！

声の主が一刀だと知るとほとんどの女子達が聞耳を立てた。

一刀『ＧＷに予定のない女子の皆さん、生徒会長より通達です。唐突ですが２泊３日のグアム島に招待します！』

ザワザワッ！

これを聞いた瞬間女子達がざわめき出した。

一刀『参加希望者は学園内に参加箱をいくつか設置してますので本日午後6時までに備え付けてある参加用紙に丸を書いて箱に入れて下さい。これで生徒会長からの連絡を終わります！』

一刀からの放送が終わると

ガタタッ！

みんなが一斉に動き出した。

桃香「行こうよ愛紗ちゃん！鈴々ちゃん！」

愛紗「姉上！？わかりましたからそんなに興奮しないで下さい！？」

鈴々「今から楽しみなのだ～♪」

別のところでは

華琳「桂花！私のＧＷに予定は？」

華琳が聞くと桂花が答える。

桂花「華琳様のＧＷの予定はお父上とお出掛け…」

華琳「キャンセルよ！」

即答だった。

また別のところでは

蓮華「思春、参加箱を探しに行くわよ！」

思春「ちょ…ちょっとお待ちください蓮華様！？」

蓮華は思春を引っ張っていった。

そして三人が考えていることは共通していた。

桃香・華琳・蓮華『（絶対に（北郷くん・一刀・北郷）と南の島に行くんだから！）』

三人は燃えていた。

学園で騒動が起きている頃、生徒会長室では

一刀「及川、あれでよかったのか？」

及川「ばっちりやってかずピー！これで女子が集まるで！」

さっきの連絡は及川からの指示だった。

華佗「俺達五人の他に保護監督として卑弥呼と副会長の璃々ちゃん、これだけでも7人か」

于吉「一体何人集まるんですかね？」

左慈「つーか、参加箱を見付けたらの話だろうが」

参加箱は5つあり、それぞれ見付けにくい場所に隠されている。見

付けるのは至難の業だ。

そしてあっという間に午後6時を過ぎ、参加箱が回収された。

生徒会長室

一刀「さて、どれだけ入ってるかな？」

参加箱は重く、持ち上げただけでは数が分からないようになっている。

華佗「最悪の場合0とも考えられるぞ」

于吉「その時は私が傀儡（クグツ）を用意しますので心配なく！」

そんな手を使っていいのか？

パカッ！

そして5人が箱を開けてみると

ドッサリ！！。

箱の中には合計50を越えるであろう参加用紙が入っていた。

一刀「マジかよ！？箱は見付かりにくいとこに隠しといたのに！？」

恐るべしグアム島。

これが彼女達をハンターにしたてあげた。

及川「うわっ！？偽名使った男までおるで！？」

左慈「教師まで入ってやがる！？」

恐るべしグアム島。

一刀「ん～と、男を除くと女子が４８人、教師が４人か！」

華佗「それに7人を足すと…合計５９人だな」

及川「それじゃあ選ばれた５２人に通達やな！」

その後、一刀達５人は夜遅く、選ばれた５２人に手紙を届けた。

そして次の日の朝

『見事参加を希望したあなたは招待されました。つきましては５月３日、午前８時に学園・男子寮前に集合して下さい。　生徒会長　北郷一刀並びに及川・華佗・左慈・于吉より』

朝になり、この手紙を受け取った人は

華琳「馬鹿（及川）と一緒は嫌だけど一刀といられるのなら我慢するしかないわ！」

一刀との旅行が目的の者

鈴々「グアム島楽しみなのだ～！」

旅行を喜ぶ者

桂花「男とは行きたくないけど華琳様が行くと言うなら我慢するわ！」

我慢する者など様々であった。

そして5月3日、GW開始日

聖フランチェスカ学園・男子寮前

華佗「俺は正直言って及川の名前を出したら半分は減るんじゃないかと思ったが…！？」

華佗が回りを見てみると

ズラーリッ！。

華佗「全員参加するとは思わなかったぜ！？」

そこには参加希望者が全員集まっていた。

及川「まぁいいやん！女は多い方が楽しいやん♪」

ガッチャリ！

及川は体中にビデオカメラや双眼鏡を装着していた。

左慈「お前、何しに行く気だよ！？」

左慈の荷物はバック一つ

左慈「しかし周りを見てみると2泊3日だというのに何でスーツケース持ってきてる奴までいるんだ？」

左慈が頭に？を浮かべていると

于吉「彼女達は我々と違って乙女ですから荷物が多いんですよ！」

于吉が言うと

左慈「なら何故、お前の荷物は女より多いんだ？」

ズラーリッ！

于吉はスーツケース2つとボストンバッグを持っていた。

于吉「だって私の荷物は左慈の分まであるんですもの♪」

ガラッ！

于吉はバックを開けると中から出てきたのは自分と左慈の着替えと下着、『左慈ＬＯＶＥ！』と書かれた于吉のパジャマ、手作り左慈人形、左慈の抱き枕など左慈に関する物が詰め込まれていた。

左慈「この…！！！」

スッ！

左慈は片足をあげると

左慈「馬鹿野郎が！！！」

ドカカッ！

左慈は于吉を蹴りまくり、左慈グッズを粉砕していった。

華佗「そろそろ時間だし、いいんじゃないか？」

一刀「それもそうだな！」

二人の荷物は旅行バック一つのみだ。

一刀「卑弥呼先生、よろしくお願いします！」

一刀が言うと

卑弥呼「わかったのである！」

ブォンッ！！。

突然男子寮のガレージから二階立てバスが出てきた。

卑弥呼「漢組を創設してから1年、ようやくこのバスが役に立つ時がきてワシは感動するぞい！」

このバスは『漢丸（おとこまる）』といって卑弥呼が漢組のために購入した８０人乗りのバスである。

一刀「それではお乗り下さい！」

一刀が言うと

麗羽「オーホッホッホ！このわたくしが忙しい中付き合ってあげてるんだから感謝しなさい！」

久々に麗羽が高笑いしていた。

猪々子「よく言うよな予定なんてなくて暇だったくせに（ボソッ）」

斗詩「通達が来た時は飛びはねて喜んでたもんね（ボソッ）」

二人が小さく言っていると

麗羽「何か言いましたかお二人さん？」

ゴゴゴッ！

青筋を浮かべた麗羽が笑顔で睨んできた。

その他では

雛里「はぁ、卵里ちゃんが来れなくて残念だね」

朱里「その分、卵里ちゃんへのお土産を沢山買って帰ろうね！」

その他では

シャオ「雪蓮お姉ちゃん来れないなんて残念だね～♪」

顔がそう思っていない。

蓮華「仕方ないだろう。本人がPG（パソコンゲーム）をやると言ってきかなかったのだから！」

その頃、女子寮管理人室

雪蓮「よっしゃ～！アイテムゲットよ～♪」

女子寮管理人・孫　雪蓮。蓮華・シャオの姉であり一日中ゲームをしまくる大人。

そんなこんながあり、バスに乗り込むわけだがここで一つの問題が起きた。それは…

一刀の席の隣に誰が座るかだ！

一刀の席は窓際の一番前、隣には一人座れるスペースがあった。

誰が座るか座りたい者が沈黙しあっていると

華琳「私は酔いやすいから窓際の前ね！」

華琳が先に動いた。

桃香「わ…私の方が酔いやすいから前だよ～」

蓮華「私が一番酔いやすいんだ！」

負けじと桃香と蓮華も前にやって来た。

バチバチッ！

三人が火花を飛ばしていた時、

璃々「璃々が学園で二番目に偉いから座る～♪」

スッ！

簡単に生徒副会長である璃々が一刀の隣をとってしまった。

桃香・華琳・蓮華『・・・・・！？』

三人はただ呆れるしかなかった。

一刀「それでは出発進行！」

璃々「しんこうー！」

ブロロッー！

そしてバスはフェリーが待つ港めがけて走っていった。

11時間目「GWはグアム島で！その1」（後書き）

参加生徒・男子

北郷一刀・及川祐・華佗元化・左慈元放・于吉武人

女子

劉備桃香・関羽愛紗・張飛鈴々・諸葛朱里・鳳統雛里・趙雲星・馬超翠・馬岱蒲公英・魏延焔耶・公孫白蓮・董卓月・賈駆詠・呂布恋・陳宮音々音

曹操華琳・夏侯春蘭・夏侯秋蘭・荀イク桂花・程イク風・郭嘉稟・許緒季衣・典韋流琉・楽進凪・李典真桜・于禁沙和・張遼霞・張天和・張地和・張人和

孫蓮華・孫小蓮・甘寧思春・陸遜穏・結本大喬・結本小喬・周泰明命・呂蒙亞莎

袁紹麗羽・顔了斗詩・文醜猪々子・袁術美羽・張勲七乃・華雄郁叉・孟獲美以・永田ミケ・高田トラ・梶田シャム・デザーン＝リー

教師

巌蝉卑弥呼・厳顔桔梗・黄蓋祭・周瑜冥琳・黄忠紫苑・黄忠璃々

12時間目「GWはグアム島で！その2」（前書き）

今回一見最強な一刀に弱点が発覚します。

12時間目「GWはグアム島で！その2」

バスが港に向けて移動している間、女達はそれぞれで会話をしていた。

華琳「お父様！さっきから言っているでしょう私は友人と出かけるからお出掛けは出来ないの！それじゃあまたね！」

ピッ！

華琳は携帯を閉じた。

華琳「全く！いつまで立っても親馬鹿なんだから！あれが曹操グループの頂点だなんて考えられないわ」

華琳は溜め息をついた。

そして別のところでは

月「詠ちゃんお菓子食べる？」

月が詠にすすめると

詠「もちろん食べる！月がくれるものなら生ゴミだって食べちゃうよ！」

それはちょっとオーバーだ。

詠が月から渡されたお菓子を受け取ろうとすると

パクッ！

横から恋に奪われた。

恋「…モグモグ」

詠「ちょっと恋！！あんたよくも！！」

月「詠ちゃん、まだあるから怒らないで～！？」

詠がお菓子を奪った恋に怒り、それを月が止めていた。

そして別のところでは

冥琳「先生方！分かってるとは思いますが我々は教師なのですから生徒の管理をする義務がありますのでくれぐれも軽はずみな行動は慎むように」

1年A組担任・周瑜冥琳。祭・雪蓮とは同期の卒業生。その後フランチェスカ学園の教師になるが固く厳しい性格なため一部の生徒から恐れられている。

祭「まぁまぁ冥琳よ、修学旅行じゃあるまいし、そう固くならんでもいいではないか！」

そう言いながら酒を飲む祭先生。

冥琳「祭殿！生徒の前で酒を飲むとは何事ですか！！！」

冥琳が祭に怒っていると

桔梗「冥琳よ、酒くらい構わんではないか」

2年B組担任・厳顔桔梗。
紫苑とは同期の卒業生。酒と喧嘩が好きな爆乳の持ち主。

酒を飲みながら言う桔梗先生。

ちなみに男子の間では紫苑・桔梗・祭を三人合わせて熟女爆乳トリオと呼んでいる。（本人達には内緒）

その様子をみた冥琳は

冥琳「二人共いい加減にしないかー！！！」

怒鳴るしかなかった。

そして一刀のところでは

璃々「おに～ちゃん！」

スッ！

璃々が一刀の顔に寄ってきた。

一刀「うおっ！？何だよ璃々ちゃん！？」

急に璃々が出てきたので一刀が驚くと

璃々「璃々、今日のためにお母さんに新しい水着を買ってもらったから見せてあげるね♪」

璃々ちゃんは笑顔だった。

ピクッ！

そして璃々の会話を聞いていた一部の人は思った。

（私だってこの日のために…！）

実は今日という日のために一部の者は水着を購入したり、エステに行っていたりした。

そしてバスは港に着いた。

ブォォッー！！

全員をのせたフェリーはグアム島に向かっていく。

及川「ぐふふっ！爆乳金髪ギャルがわいを待ってるで～！」

及川が一人はしゃいでいると

華佗「あまりに変なことをするなよ！同級生に犯罪者を作りたくないからな」

華佗が注意をした。

及川「何いうてんねん！美女は男のロマンやで！なぁかずピー！」

及川が一刀の方を向くと

一刀「オェェ～！！　」

そこには顔を青くしてバケツに吐いている一刀がいた。

及川「かずピー、もしかして船酔いか？　」

及川が聞くと

一刀「いや、どうも陸から離れている乗り物には弱くてな。オェェ～！！　」

つまり一刀は船だけでなく飛行機・宇宙船・気球に乗っても酔ってしまうのだ。

華佗「大丈夫か？俺が診てやるよ！　」

一刀「ありがとな華佗　」

一刀は華佗に介抱された。

及川「それにしても無敵やと思ってたかずピーにあんな弱点があるなんてこれは驚きやなさっちー！　」

及川が左慈の方を向くと

左慈「オェェ～！！　」

左慈も船酔いしていた。

そしてあっという間にフェリーはグアム島に到着した。（時間に関しては突っ込まないで下さい）

そして全員が高級ホテルに入ると受付らしき人が

受付「ヨウコソ、ゴヨヤクノカタデスカ？」

（片仮名は英語だと思ってください。）

次々と英語を繰り出す受付、しかし誰もが対応できていなかった。何故ならフランチェスカ学園では英語を習わないので教師であろうと理解しにくいのだ。（英語の代わりに漢文を教えている）

そんな時、及川が前に出てくると

及川「この場はわいに任してや！」

忘れている人のために説明しよう。及川も一刀と同じ2年からの転入生である。すなわち、1年間別の学校に通っていたため英語を習っているのだ。

華琳「くっ！？何だか知らないけど馬鹿が大きく見える！？」

蓮華「私もだ。悔しいがな！」

桃香「英語を話せるなんてすご～い！」

そして及川は受付に立つ。

受付「チェックインシマスカ？」

そして及川の口が開いた。

及川「タカラッピト・プピリットパロ・ポッポルンガ！」

ズシャーー！！。

全員がずっこけた。

左慈「馬鹿野郎！ナメック語しゃべってどうすんだよ！」

及川本人は英語を話していると思ったが

及川「違ったか！？だったら、テクマクマヤコン？エロイムエッサイム？」

全員『馬鹿か！！！』

いくら英語を知らないとはいえさすがにあれは違うと感じていた。

そしてみんなは思った。教わったと話せるのは別だということを

みんなが及川を責めていると酔いから覚めた一刀が前に出てきて

一刀「チェックインオネガイシマス！」

英語を話した。

すると受付は

受付「カシコマリマシタ！テハコチラニサインシテクダサイ」

さらに会話を続けた。

受付「ワカリマシタ、コチラガオヘヤノカギニナリマス」

スッ！

受付が鍵を渡すと一刀が戻ってきた。

一刀「お待たせみんな！」

一刀が言うと

華佗「一刀、お前英語が話せるのか！？」

華佗の質問に一刀は

一刀「まぁ、数ヶ月くらい海外にいたからな！」

ちなみに一刀は英語を話せる分、漢文の成績は学年のワースト3位である。（ちなみに2位は及川・1位は麗羽である）

そして一刀はみんなにカードキーを渡して部屋に入った。

ジャーンッ！

部屋の中のすごさに一部の者（特に男）は驚いた。

華佗「二人でこの広さは贅沢だな！」

この部屋は大体畳十二畳ほどある広い部屋でベッドまでついていた。

一刀「商店街の旅行って凄いんだな！？」

ちなみに男子の部屋の相部屋は…

左慈「于吉！この線より先に入ったら承知しねぇからな！」

于吉「そんなぁ～！？ひどいですよ左慈！」

部屋に線を引いて騒ぎまくる二人。

そして残る一つは

及川「何でわいがこんな化け物と一緒の部屋やねん！！」

卑弥呼「お主はあぶなっかしいからのぅ、教師として見張る義務があるのじゃ！」

及川と卑弥呼が同じ部屋だった。

華佗「さてと！支度が済んだら海に行くか？」

華佗がいうと

一刀「それもそうだな！」

一刀も海に行くことにした。

このホテルは裏口がビーチと繋がっていてすぐにでも海に入れるようになっているのだ。

一刀と華佗が水着に着替えてビーチに出てくると

アロ～ハ！

外は季節を感じずに南国ムードだった。

そんななか、周りの視線（特に男）を釘付けにしたのは

バァーンッ！！

水着姿の天使達。いや、フランチェスカ学園の女子達だった。

男１「あの娘達すげーかわいいじゃん！」

男２「彼氏いるのかな？」

学園でも人気のある女子達は外に出ればすごい人気があるのであった。

（ちなみに彼女達の水着姿に関してはＯＶＡ２を参考にして下さい）

そんな彼女達に

男３「ヘイッ！彼女達ひま？」

男４「暇だったら俺らと遊ばない？」

ナンパをかけてくる男達がいた。

しかし、彼らはしらなかった。

ドカカッ！

彼女達の実力がそこらの男以上だということを

春蘭「華琳様に話しかけるなんて１０年早いわ！」

思春「蓮華様に近付くな！この馬鹿共が！」

愛紗「姉上に何をする！」

特に桃香・華琳・蓮華については最強のボディガードがいた。

そして及川はというと

及川「うひょ～！！」

パシャッ！パシャッ！。

及川「さすがはグアム島、爆乳金髪ギャルが多すぎやで！」

さっきまでの暗い感じはどこへやら？カメラで美女を撮りまくっていた。

及川「あっちもこっちも爆乳だらけ！ここは天国やで～♪」

及川の顔が緩んでいると

係員「ソコノオマエ！ナニシテル！！」

ホテルの係員がやって来た。

及川「？」

当然及川は英語を話せないのでわからなかった。

係員「アヤシイヤツメ！タイホスル！」

ガチャッ！

及川は手錠をかけられた。

及川「えっーー！？何の冗談やねんこれは！？」

及川が叫んでいると

係員「コッチニコイ！ケイサツニツレテイク！」

そして及川は連行されていった。

桃香「北郷くん、あの人何て言ってたの？」

桃香が聞くと

一刀「怪しいから連れていくってさ」

一刀は簡単に答えた。

こうして、ハプニングがありながらもグアム島の旅行が始まったのだった。

12時間目「GWはグアム島で！その2」（後書き）

西森「この小説をみている人よ！オラにアイディアを考える力をわけてくれー！」

学園ものは正直言ってネタが詰まります。

そこでアイディアを募集します。

内容は一刀と誰かがこんなシチュエーションをしてほしいというものです。

期限：２０１１年４月２２日終りまで

（例）

一刀と白蓮が遊園地でデート（監視付き）

生徒・教師・オリキャラなんでもありです。文才のない自分に力を貸して下さい！（送られたアイディアを元にキャラはそのままでストーリーを考えます）

13時間目「GWはグアム島で！その3」

警察に連行された及川は卑弥呼に任せ（逆に逮捕されそうだが）、
一刀達はビーチで遊ぶことにした。

そして女をナンパしに来る男がいるように、逆もいた。

女「ソコノイケテルボーイタチ！オネエサントアソバナイ？」

ボイ～ンッ！

そこには及川だったら地獄の底までついて行こうであろう爆乳金髪
ギャルが一刀達男子を誘っていた。

一刀「オレタチハベツニ…！？」

この中で唯一会話ができる一刀が話すと

女「イイジャナイ！アソボウヨ～♪」

ムニッ！

ギャルは胸を一刀の腕に絡ませた。

一刀「うっ！？／／／」

当然ながら一刀も男なので反応してしまった。

そんな一刀の様子を見た一部の女子は

華琳「（なにデレデレしてるのよ！！！）」

蓮華「（北郷！見損なったぞ！！！）」

桃香「（ちょっと幻滅しちゃいました！！！）」

周りには見えないよう三人は小さく青筋を浮かべていた。

一刀・華佗・左慈の三人がどうすればいいのか困っていると

于吉「ワレワレハオンナニキョウミハアリマセン！キョウミガアルノハオトコノミデス！」

ビシッ！

于吉が英語で話した。

女「ゲッ！？マジナノ！？ソウイウコトナラハナシハナカッタコトデ…」

ピュッー！！

于吉の話を聞いたギャルは直ぐ様逃げていった。

只一人、英語を理解している一刀がうなだれていると

左慈「おい一刀！于吉は何て言ったんだ？」

そして一刀が于吉の言っていたことを訳すと…

左慈「ふざけるな！この馬鹿野郎が！！」

ドカッ！

左慈は于吉に蹴りを喰らわした。

左慈「大体なんでお前が英語を話せてるんだよ！」

左慈が聞くと于吉は

于吉「ちょっと、あっち系の本で知りましてね」

左慈「ふざけるなー！！！！！」

ドカドカカッ！

左慈は于吉を蹴りまくった。

そんな小さな騒動が起きるなか、

桃香「ねぇ！北郷くんも泳ごうよ♪」

ムニュッ！。

桃香が一刀の腕に胸をくっつけてきた。

それを見た残りの二人は

華琳「そうね、せっかく来たんだからこの私が直々に遊んであげる

わ！」

スッ！

蓮華「そうだな、せっかく海に来たんだし泳ぐとしようか！」

ムニュッ！。

華琳と蓮華も一刀の体に胸をくっつけてきた。

一刀「ちょっと！？みんなどうしたの！？／／／」

一刀はただ顔を赤くして慌てるのであった。

そんな一刀にくっついてる三人を見た他の人は

春蘭「放せ秋蘭！華琳様を守らなくては！」

桂花「そうよ！一刻も早く華琳様から男をはなさないと！」

秋蘭「落ち着け二人共！」

華琳の前に飛び出そうとしている二人を止める秋蘭

焔耶「桃香様が大変な目に！？放して下さい桔梗先生！」

２年Ｂ組魏延　焔耶。桃香の隠れファンだがほとんどの人に知られており、桔梗とは昔通っていた道場の師弟関係。

桔梗「落ち着かんか焔耶！女の頑張りじゃ！」

これまた飛び出そうとしている焔耶を止める桔梗

思春「あぁ！？北郷め！もっと強く蓮華様を抱かんか！」

先程の二組とは違う反応を見せる思春

そしてみんなはそれぞれ遊ぶことにした。

あるところでは、

鈴々「春巻きには負けないのだー！」

季衣「ボクだってチビッコには負けないもんねー！」

恋「…負けない」

浜辺で大食い競争をする三人（後で代金を払うのを忘れている）

穏「日光浴できれいにやきます～！」

大胆にマットに寝転がる穏を見た他の人は

亞莎「お…おおきいです！？」

明命「巨乳は敵なのです！！」

寝転がる穏の胸を見て驚く二人

璃々「ぶ～！！お兄ちゃんをとられた～！」

璃々が悔しがっていると

紫苑「大丈夫よ！璃々は全然若いからまだチャンスはあるわ！（北郷君と璃々をくっつければ私が北郷君の母になれる！）」

目的のために娘を利用しようと企む紫苑。

大喬「シャオ様、これくらいでいいですか？」

シャオ「もっと大きく！穏くらいにのせなさい！」

シャオの胸に砂をのせまくる大喬。

小喬「わかりました！山ほどですね！」

ドサドサッ！

シャオ「ちょっと！！そこはのせなくてもいいの！！」

シャオの股に砂をのせまくる小喬。

１年Ａ組　結本　大喬・小喬姉妹。彼女達はシャオのボディガードだが思春のように守る気もないし、忠義に従う気もない。

雛里「あわわ～！朱里ちゃん、卵里ちゃんへのお土産何にしようかな？」

朱里「う～ん！珍しい形の貝でもあればいいんですけど…」

しかしその貝が見付からない。

朱里「貝さ～ん！出てきてくださ～い！」

そんなことで出てくるはずはないのだが、

タンポポ「ここにあるぞー！」

ニュッ！

朱里・雛里『（は・あ）わわ～！！』

突然のタンポポの登場に二人は驚いた。

1年B組　馬岱　蒲公英。イタズラ好きな困った娘。翠の従姉妹。

タンポポ「ごめんねおどかしちゃって！でもほら、珍しい形の貝を見付けたからさ！」

そしてタンポポは持っていた貝を二人に見せる。

しかし朱里は

朱里「確かに貝ですけど…ヤドカリですよそれ」

確かによく見てみるとヤドカリだった。

タンポポ「なぁ～んだ残念！」

タンポポが残念がるとヤドカリは怒ったのか

ギュッ！

タンポポ「いったーい！？」

ヤドカリはタンポポの指をはさんできた。

そしてその様子を見ながら悪いとは思うがつい笑ってしまう朱里と雛里であった。

麗羽「何故ですの！」

麗羽は一人怒っていた。何故ならば…

麗羽「世の中の男の目は腐ってますわね、この絶世の美女であるわたくしに声をかけないなんて！」

ようするにナンパされなくていらついているのだ。

猪々子「そりゃそうだよな自分で絶世の美女だと思っているけれども（ひそひそ）」

斗詩「麗羽様は性格悪いし、他の人の方が綺麗だからね（ひそひそ）」

二人が囁いていると

麗羽「何か言いましたかお二人さん！！！！！（ギロリッ）」

麗羽に睨まれてしまった。

そんな時！

男「ネエ、ソコノキミ！」

声をかけられた麗羽が振り向くと

バァーンッ！

そこには色黒イケメンがいた。

麗羽「はいっ！？何でしょうか？」

麗羽はナンパされたと思って待っていると

男「カノジョトシャシントルカラトッテクレナイ？」

ズガーーンッ！！

見事に空振りする麗羽だったが

麗羽「（こんなイケメンが声をかけてくるなんてやはりわたくしは絶世の美女ですわ！）」

英語を知らない麗羽は理解していなかった。

そして一刀はというと

桃香「えいっ！」

蓮華「それっ！　」

華琳「たぁっ！　」

海で楽しくビーチボールで桃香達と遊んでいた。

そんな時！

ザバァッーー！！。

高い津波がやって来て

蓮華「えっ！？キャアッ！？　」

蓮華を飲み込んでしまった。

一刀「蓮華っ！　」

ザブンッ！。

一刀は蓮華を助けるために津波に飛込んでいった。

しばらくして、津波はおさまったが二人の姿は消えていた。

桃香「どうしよう！？大変だよ～！？　」

慌てる桃香に華琳は

華琳「落ち着きなさい桃香！すぐに二人を探すのよ！　」

こうして遊ぶのを一旦やめてみんなで一刀と蓮華を探すことにした。

そんな捜索が始まった頃

稟「二人はどこにいるのでしょうか？」

1年A組　郭嘉　稟。普段は真面目な優等生の彼女が探していると

稟「んっ？何か流れてますね」

そして稟がそれを拾いあげてみると

ブフッーー！！。

稟の鼻から物凄い勢いで鼻血が出た。

彼女は桃色妄想すると鼻血をふく癖があるのだ。

華佗「どうしたんだ！？」

稟の鼻血の音にみんなが集まっていると

風「稟ちゃんの手に何か持っているのですよ」

スッ！

風が稟の持っていたものを引き上げると

全員『こっ…これは！？』

稟が持っていたもの、それは…

ジャーンッ！

蓮華の水着の上だった。

桃香「きっと流されてきたんですね！？」

みんなが驚くなか、華琳は考えていた。

華琳「ということは…」

その頃、一刀と蓮華は

一刀「う～ん、ここはどこだ？」

一刀が目を覚ますと浜辺の反対側に出ていた。

辺りを見渡す一刀は手に何かを掴んでいる感触を感じると

一刀「そうだ！蓮華は」

クルッ！

一刀は蓮華の方を振り向いた。するとそこには…

バァーンッ！！。

見事に水着の上のない蓮華が横たわっていた。

一刀「うわっ！？／／／」

ズザザッー！。

慌てて蓮華との距離をとる一刀

一刀「（落ち着け！何で上のない蓮華がここにいるんだ！？）」

しかし一刀の心臓は止まらないので落ち着くには円周率か素数を数えればいいという話を祖母から聞いたので数えることにした。

一刀「３．１４１９…」

一刀が円周率を数えていると

蓮華「う…ん」

蓮華が目を覚ました。

そしてすぐに蓮華は体に違和感を感じて見てみると

蓮華「キャッーー！！」

大声で叫びまくり、一刀の姿を見付けると

一刀「３．１４１９…」

スッ！

いまだに円周率を数えている一刀に背後に近付き…

蓮華「この馬鹿っ！」

ドグボッ！！。

一刀の頭に肘打ちを喰らわした。

一刀「いったいなぁ！何するんだよ…」

クルッ！

一刀が振り向こうとすると

蓮華「こっちを見るな！！！」

ドカッ！！。

今度は顔面にパンチを打ち込んだ。

しばらくして

一刀「だから、俺はみてないから！？」

実は視界にとらえた後に直ぐ様一刀は視線を外していた。

蓮華「フンッ！信じられるか！貴様も所詮男だからな！」

蓮華はまだ怒っていた。ちなみに今は一刀が持っていたタオルを胸に巻いている。

蓮華「待ってろよ！思春に言いつけて八つ裂きにしてもらうから…
」

蓮華が続きを言おうとすると

蓮華「クシュンッ！」

寒いのか蓮華はクシャミをした。ちなみにあのまま海岸にいたんじゃ危ないので今は使われていない倉庫の中にいる。

蓮華のクシャミを聞いた一刀は木を集めると木同士を擦りあって

シュボッ！。

火起こしをした。

一刀「ほら、あたれよ！ちょっとはましだぞ」

一刀に言われて仕方なく蓮華は火のそばによる。

蓮華「お前、火も起こせるのだな、どれだけ万能なんだ貴様は」

蓮華が聞くと一刀は

一刀「まぁ、小さい頃から色々と教わったからな」

一刀は簡単に返事を返すのだった。

そして蓮華は考えていた。もしこのまま助けが来ずに一刀と二人っきりだったらどうしようと

無人島ならともかくこの場で考えることではないと思うのだが
そんなことを考えていた時！
ガタッ！
蓮華「キャッ！？」
小屋の隅で何かが動いて蓮華は一刀に抱きついてしまった。
一刀「落ち着けって蓮華！？きっとネズミだよ！？／／／」
一刀は蓮華を安心させるため肩を掴むが蓮華は離れなかった。
蓮華「（さっきはあんな態度をとってしまったが、私はやっぱり北…いや、一刀のことが好…）」
蓮華が続けて思おうとした時
バタンッ！
小屋の扉が急に開いて
思春「ご無事ですか蓮華様！？」
思春が入ってきた。そして思春が見たものは
・水着の上のない状態で抱きつく蓮華。
・それを押さえ付ける一刀。

その様子を見て思春が導き出した答えは

思春「北郷！き～さ～ま～！！！」

北郷が蓮華に襲いかかったという答えだった。

チャキッ！

思春は一刀に向かって剣を振るう

一刀「落ち着け思春！？誤解だから！？」

一刀は剣を避けまくるが

思春「問答無用だー！！！！！」

思春は構わず剣を振るいまくった。

そして取り残された蓮華は思った。

蓮華「（もう少し思春が来るのが遅かったらどうなってたのだろうな？）」

蓮華が思っていると

一刀「蓮華～！？思春の誤解をといてくれ～！」

一刀は必死に思春の剣から避けるのだった。

１４時間目「ＧＷはグアム島で！その４」（前書き）

グアム島編最終回です。
次回から日常に戻ります。

１４時間目「ＧＷはグアム島で！その４」

あの後、結局一刀は避けきれずに思春の攻撃を受けてしまい蓮華が止めるまで斬られ続けた。

普通ならば即死亡のはずだが一刀の頑丈さと華佗の治療によりなんとか一刀は一命をとりとめるのであった。

そして今はホテルのレストランで全員で食事をしていた。

及川「か～ず～ピ～！うっきーから聞いたで、わいが警察にいる間に蓮華ちゃんとイチャイチャしてたそうやないか！」

一刀「してねぇよ！大体お前が撮りまくるのがいけないんだろうが！」

及川はまだ未成年ということと初犯ということで釈放されたが代わりに卑弥呼が逮捕された。

警察署・牢獄内

卑弥呼「ワシは無実じゃ！早く出さんかい！」

警察「ウルサイ！オマエハヘンジンザイ（変人罪）デタイホダ！」

というわけである。

ホテル内

シャオ「ぶー！お姉ちゃんずる～い！会長さんとイチャイチャしていたなんて！」

シャオがふくれていると

蓮華「べ…別に何もしてないぞ！／／／」

本当のことが言えない蓮華であった。（前話参照）

その蓮華の様子を見ていた華琳と桃香は

華琳「（蓮華のあの様子じゃ絶対に何かあったわね！次は私が一刀とイチャイチャするんだから！／／／）」

桃香「（蓮華さん一体何をしたんだろう？私も頑張らなくちゃ！）」

グッ！

拳を握る桃香。

そんなことを考えている二人に

春蘭「華琳様、何顔を赤くしているのですか？」

愛紗「姉上、拳を握ってどうされました？」

そこで二人は「あっ！？」と驚いた。

華琳「べ…別に何もないわよ！」

桃香「これはジャンケンのグーの練習だよ！？」

二人は何とかごまかすのだった。（桃香のは無理があるが）

そしてナンパされたと勘違いしている麗羽は

麗羽「さっきの人、なかなかの殿方でしたわね。決めましたわよ！あの人をわたくしの婿にしてみせますわ！」

グッ！

拳を握って決意する麗羽

しかし側近の二人は

猪々子「なぁ斗詩、昼間の男って女連れてたよな」

斗詩「麗羽様には女の姿が見えなかったんだね」

どうせ言っても「そんなことありませんわ！」とでも言われそうなので言わない二人だった。

そして日がたつのは早く、グアム一日目が終了した。（ちなみに蓮華は今日の出来事を思い出して眠れなくなり寝不足になった）

そしてグアム二日目

一刀「う～ん！朝か」

一刀がベッドから目を覚ますと

トントンッ！

扉をノックする音がした。

桃香「北郷くん、起きてますか？」

声の主は桃香だった。

一刀「起きてるけど何か用？」

一刀が聞くと

桃香「あのね、街でお買い物したいんだけど英語分からないからついてきてもらおうと思って、迷惑だったかな？」

桃香の問いに一刀は

一刀「わかった。すぐに着替えるからホテルのロビーで待ってて」

ガチャガチャッ！

そして一刀は着替えた後に寝ている華佗をおいといて出かけるのだった。

ホテル内・ロビー

一刀「待たせたね！それじゃあ行こうか！」

桃香「うんっ♪」

一刀が桃香と出かけようとすると

愛紗「お待ちください姉上！」

後ろから聞こえてきた愛紗の声に反応して二人が振り向くと

愛紗「姉上、勝手な行動は危険ですからお止め下さい！」

鈴々「桃香お姉ちゃんだけお出掛けなんてずるいのだ。鈴々もお兄ちゃんと一緒にお出掛けしたいのだ！」

バンッ！

二人の後ろには桃香の義姉妹である愛紗と鈴々がいた。

桃香「愛紗ちゃん、鈴々ちゃん!?何でついてきたの!?」

桃香が聞くと

愛紗「ここは見知らぬ地です。そんなところでこの男と二人きりなぞになられたらきっと…」

愛紗は昨日の一刀のことですっかり一刀を嫌っていた。

愛紗の回想

桃香「ねぇ北郷くん、何でこんな人が少ない道に来ちゃうの？」

桃香が聞くと一刀は

一刀「わかってるくせに、それはもちろん…」

バッ！

そう言って一刀は上着を脱ぎ出すと

一刀「桃香を食べるためさ！」

ガバッ！

一刀は桃香に襲いかかった。

桃香「いやっ！助けて～誰か～！」

桃香は叫びまくるが

一刀「ムリムリ、こんな道じゃあ叫んだところで誰もきやしないさ！それじゃあいただきます♪」

桃香「いやっー！！」

回想終了

愛紗「…ということになりかねません」

ビシッ！

愛紗が回想を話すと

一刀「俺がそんなことするか！！！」

一刀は怒鳴った。

桃香「はぁ～／／／／北郷くんが私を／／／／」

桃香は赤面し、

鈴々「桃香お姉ちゃんを食べるって、お姉ちゃんは美味しいのかなのだ？」

鈴々は？を浮かべていた。

愛紗「ともかく、蓮華さんにしたように次は姉上に手を出すかもしれないので私もついていきます！」

鈴々「鈴々も行くのだ～♪」

二人がこう言ったら止められないので仕方なく二人も連れていくことにした。（一人は護衛のため、もう一人は遊びのために）

そして４人はホテルを出ていった。

グアム島・街内

まず４人はショッピング街に到着した。

鈴々「お兄ちゃん、鈴々あそこのソフトクリームが食べたいから通訳お願いするのだ」

鈴々は一刀の腕を引っ張りながら言う。

一刀「わかったから引っ張らないで！？」

一刀は鈴々に引っ張られながら店に到着した。

桃香「鈴々ちゃんってホントに甘えんぼだね」

桃香が笑うと

愛紗「義姉妹でありながら悩みの種です」

愛紗は頭を抱えずにはいられなかった。

一刀「桃香と愛紗もソフトクリーム食べる？」

一刀が聞くと

桃香「はぁい、食べま～す♪」

愛紗「はぁ、ここにも悩みの種がありましたか」

義姉妹に苦労する愛紗だった。

その後、４人はソフトクリームを食べた後服屋に寄った。

桃香「ねぇ北郷くん、似合うかな？」

ジャーンッ！

桃香が見せたのは南国風の腰みのスタイル。

桃香「（蓮華さんがあぁいう格好なら私はこう攻めるんだから）」

桃香は蓮華に対抗心を燃やしていた。

桃香の腰みのスタイルを見た一刀は

一刀「に…似合ってると思うよ／／／」

直視しないように顔を横に向けて言った。

桃香「ぶ～！！ちゃんと見てよう！！」

桃香がふくれていると

愛紗「姉上、そんなハレンチな格好をしてはいけません！！／／／」

愛紗が顔を赤くして注意すると

桃香「え～！！これのどこがハレンチなの！？だったら鈴々ちゃんは？」

愛紗が鈴々の方を見てみると

鈴々「ウンバホーなのだー♪」

鈴々は腰みのスタイルに松明（たいまつ）を持って踊っていた。

愛紗「鈴々、何をしているんだ！！」

愛紗が鈴々に怒鳴っていると

ドキューンッ！！。

店内にピストルの音が鳴り響いた。

ピストルの音に反応して４人が見てみると

強盗Ａ「オレタチハゴウトウダ」

強盗Ｂ「オトナシクスルッス」

強盗Ｃ「ンダナ～」

どこの国にも似た奴はいるとは言うが強盗達は黄巾トリオにそっくりだった。

鈴々「何であいつらがグアム島にいるのだ！？」

鈴々が驚いていると

一刀「いや鈴々、あいつらはそっくりさんの別人だから！？」

一刀が突っ込んだ。

愛紗「しかし不味いな！？武器はホテルに置いてきてしまったからな、どうしよう？」

愛紗が悩んでいると

一刀「俺が行くよ　」

スッ！

一刀が立ち上がった。

桃香「そんな！？いくら北郷くんが強いと言っても相手はピストル持ってるから危険だよ！？　」

桃香が言うと

一刀「大丈夫だって、実家の修行じゃあいつもマシンガンの弾を避けてたからさ♪　」

どんな修行だ。

そして一刀は桃香達が止めるのを聞かずに強盗達の後ろに回ると

一刀「おいっ　」

強盗Ｂ「ナンダ？　」

強盗が振り向いた瞬間

ドカッ！！。

強盗Ｂ「グホッ！？　」

強盗は宙に飛ばされた。

強盗C「ナンダ！？」

強盗Cは慌てて辺りを見渡すが

ドグボッ！

強盗C「グホッ！？」

強盗Cは倒された。

一刀「（よしっ、残るは一人だな）」

そして一刀が残る一人の強盗めがけて飛び出した時

ズキッ！

一刀「う゛っ！？」

一刀の体が痛み出した。実は昨日思春から受けた傷が痛み出したのである。

そのためスピードが落ちた一刀は

強盗A「ナンダオマエハ！？」

強盗に見付かってしまった。

強盗Ａ「サテハサッキノハオマエノシワザダナフザケヤガッテ！！
」
頭にきた強盗は
ドキュンッ！！。
一刀「うっ！？」
一刀の右足めがけて発砲してきた。
桃香「キャアッ！？」
一刀が撃たれたことに桃香が驚くと
強盗Ａ「コンドハシンゾウヲブチヌイテヤルゼ！」
ジャキンッ！
強盗が再び一刀にピストルを向けると
愛紗「一人だけを見ているとは…」
声に気付いた強盗が辺りを見渡すと
愛紗「油断大敵だ！」
ドカッ！！。
愛紗は強盗の顔めがけて拳を繰り出した。

強盗A「グホッ!?」

強盗が倒れると

桃香「北郷くん、大丈夫!?」

桃香が一刀に向かって駆け寄ってきた。

一刀「大丈夫、これくらいかすり傷だからさ」

一刀が平気だと知ると

桃香「心配したんだから~!」

ギュッ!

桃香は一刀に泣きながら抱きついてきた。

一刀「ちょ…ちょっと桃香!?///」

言い忘れていたが桃香の姿は腰みのスタイルのままである。

そんな一刀の様子を見た愛紗は

愛紗「(私はやはりこいつのことを誤解していたようだな)」

そんな日が進み、グアム島最後の日がやって来た。

釈放された卑弥呼が運転する帰りのバスの中

桃香「ルンル～ン♪」

一刀の隣の席にはジャンケンに勝った桃香が座っていた。

一刀「（何で俺の隣で喜んでるんだ？）」

一刀が考えていると

桃香「北郷くん、牛乳飲む？」

一刀「うん…」

そして桃香が牛乳を取り出そうとすると

キキィッーー！。

一刀「うおっ！？」

桃香「キャッ！？」

バスが急ブレーキをかけて大きく揺れてしまった。

愛紗「いたた…姉上、大丈夫です…」

愛紗が桃香の姿を見ると

バァーーンッ！

一刀が桃香の胸に蹲って（うずくまって）いた。

それを見た愛紗は

愛紗「北郷…どういうことだ？」

愛紗は青筋を立てながら青龍偃月刀を構えた。

一刀「ふぁいふぁ！？ほはいだふぁらさ！？（愛紗！？誤解だからさ！？）」

一刀は桃香の胸にうずまりながら答えると

桃香「くすぐったいからはなさないで～！？」

そして愛紗は

愛紗「ハレンチなぁー！！！」

怒りの愛紗はバスの中で偃月刀を振りまくった。

一刀「うわっー！？」

一刀にとってこの旅行はほとんど痛い目にしかあっていなかった。

１５時間目「アイドル達の秘密」

楽しくもあり、苦しくもあったＧＷが終わり、久々の日常に戻ってきた一刀達聖フランチェスカ学園一行。

そしてある日の昼休み

食堂

今日も一刀は桃香・華琳・蓮華から貰った手作り弁当を食べていた。

そんな時、

ピンポンパンポ～ン♪

陳琳「皆さんお久しぶりの放送部部長の陳琳です。今日のお昼の音楽は我が学園のアイドル。数え役萬姉妹（やくまんシスターズ）の曲、『ＹＵＭＥ　蝶ひらり』です。どうぞ！」

陳琳が言うと

チャララ～♪

音楽が流れはじめて

『前髪かすめた…』

※これより先はキャラクターソングを聞いてください。

そして音楽が鳴り終るまで食堂は静かになった。少しでも音をたてようなら

男子生徒「ズズッ～」

全生徒『ギラリッ！』

ドカカカッ！！（この時かかった時間が０．０１秒）

そして音をたてた生徒はボロボロの姿になっていた。

そして音楽が鳴り終るといつものように騒がしくなる。

及川「う～ん！やっぱり数え役萬姉妹は最高やで」

一刀「ホントにすごいんだなアイドルって！？」

一刀が驚いていると

及川「当たり前やんかずピー、役萬姉妹の天和ちゃん達はただのアイドルやないんやで！！」

及川は語り始めた。

及川「役萬姉妹は学園はおろか日本全国、いや世界が愛するアイドルで過去の素性は誰にも知らないシークレットアイドルなんや」

及川がそんな話をしている頃

麗羽「ほわ～…」

麗羽はまるで魂が抜けたように廊下を歩いていた。

猪々子「ようやく麗羽様、ナンパは勘違いだと気付いてよかったな」

斗詩「でもそのせいでショックを受けちゃったね」

二人がひそひそ話していると

麗羽「キー！！このわたくしが男に相手にされないなんて何かの間違いですわ！！！」

麗羽はすごく苛立っていた。

麗羽「ムシャクシャしますわ、こんな時は誰かを貶め（おとしめ）たいですわ！」

麗羽が苛つきながら歩いていると

天和「今日も疲れちゃったね」

どこからか天和の声が聞こえてきた。

猪々子「麗羽様、ここは数え役萬姉妹のスタジオですよ！」

斗詩「歩いているうちに着いちゃったんだね」

二人が言うと

麗羽「それは好都合ですわ、アイドルの弱味を握って支配しましょう」

性格が悪すぎだ。

そして麗羽達が壁に耳を当てて中の音を探ってみると

地和「ちぃはもう疲れたから休もうよう！」

天和「それお姉ちゃんもさんせ～い♪」

人和「仕方がないわね、じゃあ今日はこれでおしまい、休みましょう」

役萬姉妹が会話をしていた。

そんな時

『チャラチャラチャラ…♪』

天和の携帯が鳴り出した。

ピッ！

天和「はい、もしもし」

天和が携帯に出ると

天和「集会!?ふざけないでよ何で私達が集会に出なきゃいけないのよ！」

ピッ！

天和は携帯を切った。

地和「姉さん、今の電話誰から？」

地和が聞くと

天和「黄巾高校の張曼成の奴が今夜集会があるから来てくださいって」

天和が言うと二人は

地和「ふざけるんじゃないわよあの馬鹿、私達はもう黄巾高校の生徒じゃないんだからね！」

地和が叫び出した。

人和「もしこのことが学園にバレたら私達退学かもねアイドルとしても…」

人和ががっかりしだした。

普通ならそうはならないと思うが、黄巾高校は近所じゃあ有名な不良校であるし、聖フランチェスカ学園の教師や生徒にも迷惑ばかりかけているので世間からの評判が悪いのだ。

天和「大丈夫だよ！私達が黄巾高校の元番長だって知られなかったらいいんだからさ」

天和は妹達を元気づけると

地和「姉さんの言う通りよ、このことは誰にも知られてないから大丈夫だって！」

人和「そうね、バレさえしなければいいんだし」

天和「それじゃあ、これからも頑張っていこう！」

三人『おぉっー！』

しかし三人は知らなかった。扉付近に人がいることを、しかもその相手が…

この会話を聞いていた麗羽達は

猪々子「斗詩、今の話聞いたかよ!?」

斗詩「聞いちゃったよ文ちゃん、まさか役萬姉妹が黄高（黄巾高校）の元番長だったなんて驚きだね!?」

そして麗羽は

麗羽「ぐふふっ、いいことを思い付きましたわ」

そして次の日

一刀「おはよう！」

一刀が元気よく教室に入ると

シ～～ン。

教室内が静かになっていた。

一刀「一体どうしたんだ！？」

一刀が？を浮かべていると

華佗「原因はこれだよ」

スッ！

華佗から一枚の学級新聞が渡され、読んでみると

『学園のアイドルの正体は実は黄高の元番長！？』

華佗「この紙が学園中はおろか町中に貼られていたぞ！」

華佗が話すと

一刀「何だってそんなものが！？」

その時、

ガラッ！

教室の扉が開かれて及川が中に入ってきた。

一刀「お…及川!?」

一刀が呼ぶと

及川「大変や!?さっき天和ちゃん達が学園長に呼ばれて学園長室に!?」

学園で騒ぎが起きた頃、事件の犯人は

麗羽「おーほっほっほ!いいざまですわ」

学園の秘密の部屋で麗羽が高笑いをしていた。

猪々子「ちょっとやりすぎじゃないか?」

斗詩「バレたらこっちが退学だよね」

二人は身の安全を心配していた。

麗羽「フフフッ、これで後は学園長と会長が認めればあの娘達は退学決定ですわ!」

そして学園長室前

天和「ありがとうございました」

天和が学園長室から出てきた。

地和・人和『姉さん、どうだった!?』

二人が聞いてくると天和は

天和「学園長は会長の判断に任せるだって…」

天和が言うと

地和「会長って、あの北郷一刀のこと!?」

人和「それしか考えられないでしょう」

地和の叫びに人和が突っ込んだ。

天和「あっ!?もうすぐライブの時間だよっ!急がなきゃ!」

そして三人はライブ会場に行くが…

シ～～ン。

会場には人が一人もいなかった。

人和「悔しいけど、これじゃあライブはできないわね」

人和がガッカリすると

地和「あー!!もうっ!!ちぃ達を簡単に見捨てるなんて何て奴らよ!!」

ガンッ!。

地和はマイクを床に叩き付けた。

天和「私達はただ歌を歌いたかっただけなのに」

ポロッ

天和の目から涙が流れ出した時、

一刀「一人もいないってことじゃないぜ」

バッ！

三人が落ち込んでいると一刀が現れた。

地和「何しに来たのよ！！ちぃ達を馬鹿にしに来たの！！」

地和が怒鳴りちらすと

一刀「君達の過去については黄高の張曼成から聞いたよ」

実は一刀は会場に来る前に黄高に乗り込んでいたのだ！。

ここで時間は少し戻り、黄巾高校。

張曼成「あの人達が元黄高というのはホントです。でもあの人達は歌を歌いたかっただけで勝手に暴れていたのは俺達だけなんだ！」

張曼成の話によると、去年彼女達が黄高に入学した時、黄巾生は彼女達を襲おうとしたが彼女達はとっさに歌を歌って食い止めた。その歌に黄巾生が感動し、彼女達を番長に仕立てあげたのだ。しかし黄高の評判は日々悪くなり彼女達は耐えきれずに素性を隠してフラ

ンチェスカに転入したのだ。

張曼成「でもそのせいで天和ちゃん達が退学になっただなんて!?」

張曼成が落ち込んでいると

一刀「心配するな!俺が何とかしてやる!」

そして現在

一刀の話が終わると

地和「だったら何なの!!アンタが私達の何の役に立つって言うのよ!!」

地和が叫ぶと

一刀「俺に出来ることといえば…」

スッ!

一刀は座席に座った。

人和「ちょっと!?どういうつもりですか!?」

人和が言うと

一刀「俺に出来ることといえば、君達の歌を最後まで聞くことさ」

一刀が言うと

天和「でも、たった一人のお客じゃあ…」

天和の声が弱々しくなると

一刀「何言ってるんだ！客が一人だろうが一万人だろうが気持ちは同じだろ！客の数だけで気持ちが変化するならアイドルなんて名乗る資格がない！」

ビシッ！

一刀が叫ぶとそれを聞いていた三人の体が震えはじめて

天和「そうだね会長の言う通りだよ！お客の人数だけで気持ちが変化するなんてアイドルじゃないよ！」

天和が叫び終わると

天和「地和ちゃん、人和ちゃん、頑張って歌おうよ！たとえ一人でも私達を待っているファンのためにさ！」

天和が二人に呼び掛けると

人和「確かにそうね、私達人気アイドルになって気持ちが変化しちゃったみたい。私達は大好きな歌を歌えばいいんだよ」

地和「よく聞いてなさいよ生徒会長！ちぃ達の歌を目一杯聞かせてあげるんだから！」

二人もやる気になった。

天和「それでは只今より数え役萬姉妹のライブを始めま～す♪」

チャララ～♪

音楽が流れ始めて三人が歌い出した。

天和・地和・人和『前髪かすめた…♪』

その後、彼女達は歌い続け、最後まで楽しんで歌った。

そしてライブが終わる頃

天和・地和・人和『どうもありがとうございました～！』

ライブが終了すると

パチパチッ！！。

どこからか拍手が聞こえてきた。

地和「どういうことよこれ！？」

人和「どこからこの拍手が！？」

三人が驚いていると

一刀「ごめんね、実はこれで伝えてたんだ」

スッ！

一刀は懐から校内放送用のマイクを取り出した。

一刀「君達の歌は学園中に広まったということさ」

この拍手は学園中から聞こえていた。一刀が言うと

天和「ひっど～い！！私達を欺く（あざむく）なんて！！」

天和が怒り出すと

一刀「それで生徒会長としての判断だけど…」

ドキッ！？

三人は驚いた。

何故なら一刀の一言で自分達が退学になるかもしれないのだから

そして一刀の口が開くと

一刀「こんなに生徒達に愛されている君達を退学にしたら俺が殺されちゃうかもしれないから退学は無しだ！」

・・・・・

一刀の言葉に三人は

三人『やった～～♪』

盛大に喜んだ。

一刀「（ホントにいい歌だったな）」

そして次の日の昼休み

一刀がいつものように桃香達から贈られた弁当を食べていると

スッ！スッ！スッ！

新たに弁当箱が３つ追加された。

一刀が置いた人の顔を見てみると

天和「昨日はありがとうね一刀♪」

人和「これは昨日のお返しのお弁当です」

地和「ちぃ達の手作り弁当を毎日食べられるんだから感謝しなさいよね！」

弁当箱を置いた人は天和達数え役萬姉妹であった。

当然一刀が断われるはずがなく

一刀「あ…ありがとう」

一刀は弁当箱を受けとるのだが、この後一刀は六人分の弁当を食べたため腹が苦しくなり、そのうえ食堂で天和達から弁当を受け取っ

たところを見られてしまい、彼女達のファンに睨まれる日々が続く一刀であった。

１６時間目「一刀の妹」（前書き）

今回は一刀の妹が登場します。

１６時間目「一刀の妹」

ここは日本に向かう上空の飛行機の中

この場所で今、大変なことが起きていた。それは…

ハイジャック犯「テメェら、少しでも怪しいことするんじゃねぇぞ、したら撃ち殺してやるから覚悟しておけ！！」

この飛行機は今ハイジャックされているのだ。

乗客が震え上がるなか

？「あ～もうっ！！うるさくて眠れやしない！」

一人の乗客が言うと

ハイジャック犯「静かにしやがれこのボウズが！！」

ハイジャック犯がそう言うと

プチンッ！！

乗客がキレた。

？「アタシは女だー！！！！！！」

バッ！

少女がハイジャック犯に飛びかかった。

しばらくして、飛行機が空港に着くと

空港警察署

ドサッ！

？「お巡りさん、ハイジャック犯捕まえたからよろしくね」

少女がハイジャック犯を警察に引き渡すと

お巡り「あ…ありがとうねボク…！？」

お巡りが驚いていると

？「アタシは女です！！！」

少女は怒りながら警察署を離れてタクシー乗り場に向かった。

運転手「お客さん、どちらまで？」

運転手が聞くと少女は

？「聖フランチェスカ学園までお願い」

そしてタクシーはフランチェスカ学園めがけて走り出した。

？「（待ってなさいよお兄ちゃん！）」

しばらくして、聖フランチェスカ学園

？「ここにお兄ちゃんがいるのね」

少女が入ろうとすると

麗羽「おーほっほっほ！そこの貧民さん、何勝手に入ろうとしてますの？」

入ろうとした少女を麗羽が呼び止めた。

？「アンタ誰？」

少女が聞くと

麗羽「このわたくしを知らないだなんて田舎者ですわね。わたくしは袁紹麗羽、この学園で生徒会長をしておりますのよ。おーほっほっほ！」

麗羽が言うと

猪々子「会長っていっても前会長だからね」

斗詩「見栄をはりすぎですよ麗羽様！」

側近の二人が言うと

ギロリッ！！

麗羽「何か言いましたか？猪々子、斗詩～！！！」

麗羽が二人を睨んできた。

そして会話を聞いていた少女は

？「やっぱりアンタが会長じゃなかったんだ。よかったよ」

少女の言葉に麗羽がキレた。

麗羽「あなた、何が言いたいのですの！！！」

麗羽が聞くと少女は

？「だってアンタみたいにおーほっほっほ！なんて古くさいセリフを言う奴が会長ならこの学園も評判落ちたと思ってね♪」

少女の言いたいことが終わると

猪々子「（よく言ってくれた！）」

斗詩「（私達がずっと言いたかった言葉を代わりに言ってくれてありがとう！）」

二人が心の中で思っていると

麗羽「キーッ！！小僧の分際で生意気ですわ！猪々子、斗詩、やっておしまい！」

麗羽が言うと

ブチッ！

今度は少女がキレた。

？「アタシは女だー！！！！！」

それからしばらくして

璃々「お兄ちゃん早く行こう♪」

一刀「ちょっと、璃々ちゃん引っ張らないで！？」

璃々は一刀の服の袖を引っ張りながら走っていた。

実は璃々は一刀と一緒に行くため朝からバス停で待っていたのだ。

そして一刀と璃々が校門にたどり着くと人混みが出来ていた。

一刀「一体何だこの人混みは？」

一刀が？を浮かべると

及川「かずピー大変やで！？」

人混みから及川が出てきた。

及川「麗羽一行が謎の小僧と戦っとんねん！？」

一刀「謎の小僧だって！？」

そして一刀が人混みをくぐり抜けて前に出てくると

猪々子「何だよあいつ!?…」

斗詩「私達じゃあ相手にならないほど強い!?…」

麗羽「このわたくしが負けるなんて!?…」

そこにはボロボロの姿の麗羽一行がいた。

そしてその中央には

?「この学園の人もたいしたことないねぇ、本気出さずに勝っちゃうなんてさ」

及川「かずピー!?そいつが麗羽達をボロボロにした奴や早く逃げるんや!?」

しかし一刀は逃げるどころかどんどん近寄っていく。そして一刀が少女に近付くと

一刀「一刃(かずは)、何でここにいるんだ!?」

声をかけられた少女が振り返ると

一刃「お兄ちゃん!?」

その時、その場が静まった。

しばらくして、生徒会長室

及川「じゃあその子はかずピーの妹っちゅうわけか!?」

この部屋には現在、一刀と一刃、璃々ちゃん、及川しかいない。

及川「しかしどう見ても…」

ジーッ。

及川は一刃を観察して見てみると、男っぽい雰囲気・一刀似の目つき・そしてまな板級の胸。(服装は黒のジャージ)

及川「どう見たって男やん!」

及川がそう言った直後

ドグボッ!!。バキンッ!!。

及川は一刃に殴られた。

一刃「アタシは女だ!」

殴られた及川は壁に埋もれていた。

一刀「それより一刃、お前どうして来たんだ?確か日本に強い奴がいないから世界の強豪探しに行ってたんじゃないのか!?」

一刀が言うと一刃は

一刃「それはそうなんだけど、お兄ちゃんが転入したと聞いて久々

に会いたくなっちゃった♪」

一刃が世界に旅立ったのは一刀が15歳、一刃が13歳の時である。
(現在は一刀17歳、一刃15歳)

一刃「それにしても聞いたよお兄ちゃん、生徒会長やってるなんてすごいじゃん!昔は九州最強の男って呼ばれてたもんね～」

一刃が言うと

一刀「それより、もう顔見たからいいだろ、さっさと帰ったらどうだ？」

一刀の冷たい言葉に一刃は

一刃「何よ!可愛いい妹が兄を訪ねてきたのにすぐ帰れなんてひどいじゃない!」

ブォンッ!!

そして一刃が拳を後ろに構えると

一刃「お兄ちゃんの馬鹿ーー!!!」

ドグボッ!!。バキンッ!!。

一刃の渾身の一撃に一刀は飛ばされ壁に埋もれてしまった。

一刃「もういいもん!勝手に学園見るからね!」

ダッ！

一刃は怒って出ていってしまった。

一刃が出ていった後

璃々「お兄ちゃん大丈夫？」

璃々が埋もれている一刀に話しかけると

一刀「何とか…大丈夫…だから…」

一刀は壁に埋もれながら返事をした。

その頃、一刃は

一刃「うわぁ～！？ホントにすごい学園だねぇ～」

一刃が学園見物をしていると

華琳「すごい学園でしょ」

スッ！

一刃に華琳が近寄ってきた。

一刃「アンタ誰？」

一刃が聞くと

春蘭「貴様ー！！華琳様に対してアンタとは何だアンタとは！！」

春蘭が怒り出したが

華琳「やめなさい春蘭！私は名前を言っていないのだから知らなくて当たり前よ！」

華琳が春蘭を止めると

華琳「申しおくれたわね、私の名は曹操華琳というのよ。話は聞いたわ、あなた一刀の妹なんですってね」

華琳が言うと

一刃「へ～、今朝会った金髪おばさんより礼儀正しいじゃん♪アタシの名は北郷一刃、お兄ちゃんがお世話になってるようで」

一刃が話している間、華琳は一刃をじっと見ていた。

華琳「（こういうタイプの娘もいいかもね♪）」

華琳は頭がいい優等生なのだが、少女趣味という変わった性格だった。

華琳「（私と一刀が結婚すればこの娘が私の妹になるのね）」

ゾクッ！？。

この時、一刃は身の危険を感じた。

一刃「（何だか分からないけれどこの人と一緒にいたら危ないかもしれない!?）」

一刃が身の危険を感じていると

桃香「あっ～!?華琳さんずるいですよー!!」

蓮華「一刀の妹と一緒だったとは!?」

桃華と蓮華が寄って来た。

華琳「何言ってるのよ、この世は早いもの勝ちよ!」

華琳が言うと二人は

桃香「華琳さんがそうくるなら私だって、私の名前は劉備桃香っていうのよろしくね♪」

蓮華「ならば私も!我が名は孫蓮華だ!よろしくたのむ」

二人も一刃に挨拶をした。

突然現れた二人に対して一刃は

一刃「（また違う人が現れたわね!?それにしても…）」

一刃が注目したのは二人の顔ではなく胸だった。

ボイ～ン。ボイ～ン。

二人のふくよかな胸を見た後、自分の胸と見比べると

一刃「（ホントにこの人達は高二なの！？）」

驚くしかなかった。

紫苑「あらあらみんなお揃いで」

桃香・華琳・蓮華『紫苑先生』

三人が向いた方向を一刃も見てみると

ドデ～～ンッ！！

そこには桃香と蓮華をはるかに越す紫苑の巨乳があった。

一刃「（ここは魔乳の巣窟かー！？）」

一刃が驚愕していると

紫苑「璃々を迎えに来たんだけど知らない？」

華琳「知りませんけど」

桃香「ねぇ、一刃ちゃんは知ってる？」

桃香が一刃の方を向くと

一刃「・・・！？」

一刃は驚いたままだった。

桃香「あのぅ？どうしたの一刃ちゃん？」

桃香が聞いた瞬間

ギラリッ！

一刃の目の色が変わった。

そしてその頃、何とか壁から抜け出た一刀は

一刀「早く一刃を見つけて帰さないと！？」

璃々「何で帰すの～？」

一刀に抱かれた璃々が聞くと

一刀「あの子はちょっと変わってて…」

一刀が最後まで言おうとすると

桃香「キャーー！！」

桃香の叫び声が聞こえた。

一刀「しまった遅かったか！？」

ダッ！

一刀は叫び声のする方に急いだ。

そして一刀が声のした場所にたどり着くと

春蘭「ハァッー!!」

一刃「シャッ!!」

一刃と春蘭が戦っていた。

一刀「遅かったか!?」

一刀が驚いていると

華琳「ちょっと一刀!一体あの子は何なのよ!」

華琳達が一刀に近寄って聞いてきた。

一刀「あいつは昔からすごく驚くとあんな風に暴走して暴れてしまうんだよ!?」

一刀が言うと

桃香「止める方法はないの!?」

すると一刀の答えは

一刀「本人の気が済むまで暴れさせるしか方法がないんだ!?ちなみに一刃の武力は俺以上だから!?」

一刀の言葉を聞いた三人は

蓮華「一刀より強いだなんてどうすればいいのよ!?」

みんなが騒いでいると

春蘭「グハッ!!」

バタッ!。春蘭が倒された。

一刃「シャッ!!」

春蘭を倒した一刃は狙いを一刀達に向けた。

一刀「待てっ!?落ち着いて冷静になるんだ一刃!?」

兄の必死の呼び掛けに一刃の反応は

一刃「シャッー!!」

聞く耳を持たずに襲いかかってきた。

一刀・桃香・華琳・蓮華『うわぁーーっ!?』

それからしばらくして、

一刃「シャッ…アタシ何してたの?」

一刃の意識が戻ったが

ボロロ～ン。

回りは一刃が暴れたため、ボロボロだった。

そして一刃は倒れている一刀達を見かけると

一刃「お兄ちゃん!?誰にやられたの!?」

もちろん一刀は一刃にやられたのだが本人は知らなかった。

そして一刃が帰る時

一刃「今日は楽しかったよお兄ちゃん♪」

一刃は笑顔で言うが

一刀「あぁ…それはよかったな…」

一刀は全身包帯まみれになっていた。

一刃「それじゃあ世界武者修行の続きに行ってくるね!あと、来年にはフランチェスカ学園に入学するからよろしくね～♪」

そして一刃は旅立っていったが

一刀達は来年に対して何らかの対策を立てようと考えるのだった。

ちなみに一刃が壊した学園の修繕費は華琳が立て替えてくれた。

その頃、空港に向かっていた一刃は

一刃「あの学園っていい人ばかりでよかったな♪」

一刃が歩いていると

キッ！

一刃の前にリムジンが停まり、中から人が出てきた。

ガチャッ！

貂蝉「んもぅ、学園長会議は大変だったわん♪」

リムジンから降りてきた貂蝉を見た一刃は当然のごとく

一刃「シャッー！！」

再び暴走状態になるのであった。

１６時間目「一刀の妹」（後書き）

オリキャラ紹介

・北郷一刃（ほんごうかずは）

一刀の二つ下の妹。１３の時に日本一になり世界に挑んでいた。一刀以上の武力の持ち主。性格はボーイッシュで可愛いい服は着ない性格。胸はまな板級。普段はお兄ちゃんっ子。

本人は知らないがすごく驚くと暴走してしまい、止めるには気が済むまで暴れなくてはならない。

17時間目「月と一刀を二人っきりにしよう作戦」（前書き）

今回は月の話です。

様々な服装の月が出てきます。（絵がないのが惜しい！）

17時間目「月と一刀を二人っきりにしよう作戦」

それはある日のこと

月「はぁ…」

1年B組　董卓月。彼女が教室で悩んでいると

詠「月っ！お昼食べに食堂に行こう！」

同じく1年B組　賈駆詠。月の中学からのクラスメートで親友である。

詠に誘われた月は

月「うん、詠ちゃん…」

元気のない返事を返した。

月が悩んでいる理由。それは前に一刀に助けられた時（1話参照）にちゃんとしたお礼をしていなかったことが悩みだった。

いざ行こうとするが、彼女は恥ずかしがりやなため一刀の前に直接出ることが出来ないでいた。

食堂に行けば会えるのだが食堂に行くと…

食堂

桃香「お弁当美味しいですか？」

蓮華「初めて入れたおかずは美味しいか？」

華琳「私の弁当が不味いってことはないわよね」

今日はライブで役萬姉妹が来ていないがお昼になると一刀に向かって6人がお弁当を渡しに来る。

一刀「あぁ…美味しいよ…」

当然一刀が弁当を拒むはずがなく受け取ってしまうのだった。

その様子を遠くから見ていた月は

月「はぁ…」

ため息をつくしかなかった。

そしてそんな月を間近で見ていた詠が

詠「どうしたの月？具合い悪いの？」

しかし月は首を横に振る。

詠「月、ボク達は親友なんだからさ悩んでいるなら相談にのってあげるからね！」

詠が言うと月は

月「わかったよ、親友の詠ちゃんだけに話すね」

場所は変わり、中庭

月「というわけなんだ」

月が悩んでいる理由を話すとそれを聞いた詠は

詠「大変だね月（建て前）（あいつのせいで月が悩んでいたのか！！）（本音）」

本音と建て前に分けて考えていた。

月「私って勇気がないからどうしよう…」

月が更に悩んでいると

詠「わかったよ月！その悩みはボクが解決してあげる！」

ガシッ！

詠は月の手を握って言った。

詠「あいつと月が二人っきりになるようしてあげるから後は月が頑張るのよ！」

詠の言葉を聞いた月は

月「詠ちゃん、ありがとう！」

ガバッ！。

月は詠に抱きついた。

詠「（ホントはあいつのことなんて別にどうでもいいけど月のために頑張らないとね）」

詠は決心するのであった。

体育倉庫

詠「というわけなのよ、みんな協力してくれる？」

この体育倉庫には月を除く董卓軍が揃って作戦会議を立てていた。

霞「よっしゃ！月の乙女心のために一肌脱いだるわ！」

２年Ｃ組　張遼霞。董卓軍の姉御。足が速く『神速の張遼』と呼ばれ、馬術も得意。

華雄「董卓様のために私も頑張るぞ！」

２年Ａ組　華雄郁叉。董卓軍の暴れ者。馬鹿力が取り柄で頭が悪い。

月の父に恩義があり月のためならたとえ火の中、水の中、あの娘のスカートの中までも行く。

恋「…恋も頑張る」

２年Ｂ組　呂布恋。学園女子最強。大飯食らいで動物愛好家。

ねね「恋殿がやるのならねねもやりますぞ！」

1年C組　陳宮音々音（通称ねね）。恋を愛し、害する者にはキックを喰らわす。

詠「それじゃあ月のために頑張るわよ！」

霞・華雄・ねね『おぉっー！！』

恋「…おぉっー！！」

こうして『月と一刀を二人っきりにしよう作戦』の作戦会議が始まったのだった。

次の日の放課後、生徒会長室

ほとんどの生徒が帰るなか、一刀は副会長の璃々と共に生徒会の仕事をしていた。

一刀「悪いね璃々ちゃん、手伝わせちゃって」

一刀が言うと璃々は

璃々「別にいいよ♪お母さんのお仕事が終わるまで暇だし、お兄ちゃんと一緒にいられるし♪」

璃々は笑顔で答えた。

そんな二人がいる生徒会長室の扉が

バタンッ！！

勢いよく開かれると

詠「ちょっと！会長はいるの？」

詠が入ってきた。

一刀「俺ならいるけど」

一刀が言うと詠は

詠「お願いがあるのよ！クラスで使う画材を校門で待っている月と一緒に買って来てほしいのよ！」

詠が言うと一刀は

一刀「でも、仕事が残ってるし…」

璃々「お兄ちゃんが行くなら璃々も行く！」

二人が話していると

ねね「会長の仕事ならねねにお任せですぞ！」

詠「副会長は恋と一緒に遊ぼうね～」

恋「…一緒に遊ぶ」

詠達が言っていると

一刀「でも悪いし…」

今だ言い渋る一刀に詠がキレて

詠「さっさと行きなさーーい！！」

ドカンッ！

詠に怒鳴られた一刀は

一刀「それじゃあ！行ってきま～す！？」

ピュッー！！

すぐに駆け出していった。

詠「それじゃあ、あとは恋、ねね頼んだわよ！」

恋「（コクリッ）」

ねね「わかったのです」

ダッ！

詠は一刀の後を追って行った。

そして一刀が校門にたどり着くと

一刀「月って娘はどこかな？」

キョロキョロ

一刀が月を探している間に詠が追い付き、隠れていた霞と華雄に合流すると

詠「月は大丈夫なの？」

霞「大丈夫やって！ウチがしっかり服装をコーディネートしといたからな！」

それが心配なのだが

華雄「月様が出てきたぞ！？」

ようやく緊張して隠れていた月が姿を見せたが

月「あのぅ…お待ちしました…／／／」

バァーーンッ！！

月の服装に霞以外のみんなが驚いた。何故なら月の服装は黒のボンデージファッションだったからだ。

詠「ちょっと霞！月になんて格好させてるのよ！！」

月の格好に詠がコーディネートした霞に抗議すると

霞「アカンかった？男をとりこにする服って及川から聞いたんやけど」

聞いた相手が間違いだった。

月「へぅ～／／／やっぱり恥ずかしいよ～／／／」

スッ！。

月がその場にしゃがみこむと

パサッ！。

月の上に一刀の上着がのった。

一刀「とりあえずこれでも着てくれよ／／／」

上着を渡した一刀の頬はちょっと赤くなっていた。

月「へぅ～、ありがとうございます／／／」

顔を赤くしながら月は一刀の上着を着た。

それを見ていた詠達は

霞「一刀も案外ええとこあるやん♪」

詠「月があんな奴の上着を～！？」

詠が驚いていると

華雄「どうやら進んでいくみたいだぞ！」

月達が歩き出したのでこっそりと跡をつけるのだった。

しばらくして、

買い物は案外早く終わり、学園に戻ろうとした帰り道。

月「あのぅ、今日はありがとうございます」

いまだ月はお礼を言えてなかった。

一刀「まぁ別にいいよ」

一刀が返事を返すと

月「やっぱり優しい人だなぁ／／／」

月は顔を赤くした。

そして様子を見ていた詠達は

霞「何しとんねん月！もっとくっつかんかい！」

詠「何言ってるのよ霞！！」

二人がもめていると

華雄「おい二人共、さっきから月様は何かを見ていないか？」

華雄に言われて二人が月の目線の先を見てみると

ジー。

月はクレーンゲーム機に置いてある熊の人形を見つめていた。

詠「そういえば月は熊が大好きだもんね」

月の熊好きは半端ではなく部屋には至るところに熊グッズが置かれていた。

しかし月はクレーンゲームをしたことがなかった。

月が物欲しそうに熊を見ていると

一刀「あの人形がほしいの？」

一刀が声をかけてきた。

月がコクリッ。と首を下げると

一刀「わかった！任せておいて！」

一刀はゲーム機に向かいすることにしたのだが

ウィ～～ン。スカッ！

一刀「また失敗か！？」

これでもう5回も失敗していた。

実は一刀はクレーンゲームや金魚すくい等の細かいものが苦手なのだ。

一刀「あっ!?１００円玉が切れた!?待ってて、すぐに両替してくるから」

ダッ!。

一刀が両替に行っていると

月「（やっぱり優しい人だなぁ～／／／）」

月が顔を赤くして待っていると

男１「よう、嬢ちゃん一人かい？」

男２「一人なら俺らと遊ばない？」

声をかけられた月は

月「いえ…連れの人を待ってるんですが…」

しかし男達は

男１「女を置いとく奴なんてほっとこうよ！」

男２「俺らとディスコに行こうぜ！」

グイッ!

月の話を聞かず、嫌がる月の手を引いていこうとした。

詠「あいつら、月に何してんのよ!!」

霞「月のピンチや!行くで華雄!」

華雄「当然だ!」

月の危機に霞と華雄が飛び出そうとした時

グイッ!

一刀「あんた達、俺の彼女に何するの?」

一刀が現れて月の手を引いた。

一刀の登場に驚いた男達は

男1「いえ、別に!?」

男2「ちょっと道を聞いただけで!?」

男1・2「失礼しましたー!?」

ピューッ!!。

男達は一刀の迫力にビビって逃げていった。

そして男達が去った後

月「あのぅ、さっき『俺の彼女』って言いましたよね／／／」

月の言葉を聞いて一刀が思い出した。

一刀「ゴメンっ!?あいつら追い払うにはあれしか方法がなかったから!?」

一刀が謝っていると

月「私の方こそすみませんでした。二度も助けられるなんて」

ペコリッ

月は頭を下げた後

月「今日の分も込めて、この間は助けてくれてありがとうございました」

月が笑顔で話すと

一刀「ど…どうも」

一刀は驚いていた。

そしてその様子を見ていた詠達は

詠「やっとお礼が言えたね月！」

霞「やっぱ月はサイコーやで！」

華雄「月様、見事です！」

三人は月に感動していた。

そして買い物が終わり、一刀と月が別れると

詠「やったね月♪」

詠達が飛び出して月に寄って行った。

しかし月からの返事がない。

詠「どうしたの月？」

詠が聞くと

月「詠ちゃん、私頑張るよ！私にしか出来ない方法で一刀さんをものしてみせる！」

グッ！

月は一刀に惚れてしまい、今まで押さえられていた感情に火がついてしまった。

詠「月？どうしちゃったの！？」

月の変化に詠は驚くしかなかった。

そして次の日の土曜日、男子寮一刀の部屋

一刀「ＺＺＺ～」

一刀が寝ていると

「起き…さい」

変な声が聞こえてきたので一刀が目を開けると、一刀の目に写ったのは

月「おはようございます一刀さん♪」

バァ～～ン！！

メイド服姿の月であった。

一刀「何で君が男子寮に！？」

一刀が驚いて聞いてみると

月「学園長にお願いして男子寮のメイドにしてもらったんです」

月が言うと

バタンッ！

詠「さっさと起きなさいよ！いつまで寝てるのよ！！」

今度はメイド服姿の詠が現れた。

詠「勘違いしないでよね！ボクは月を守るためにいるんだから！」

こうして女がいなかった男子寮に二人のメイドさんが住むことになった。

ちなみにこのことを知った桃香・華琳・蓮華・役萬姉妹も男子寮メイドになろうとしたが何とか食い止められた。

17時間目「月と一刀を二人っきりにしよう作戦」（後書き）

月のボンデージファッション姿に関してはＯＶＡ1を見てください。

それから以前募集したアイディア募集を送ってくれた人はありがとうございます。本日4月22日終了までで締め切らせてもらいます。

送られたアイディアは全部とはいきませんがいずれ話にしていきたいと思います。（オリキャラに関してはどんな形であれ登場させます）

18時間目「華蝶連者見参！」

とある深夜、女子寮

星「う～む　」

2年B組　趙雲星。槍の使い手でメンマをこよなく愛し、同好会まで作るほどの人物。

その彼女が部屋にて男子の写真を見ていた。

星「やはり、この人しかおりませんな　」

スッ！

星は写真の中から一刀の写真を手に取る。

ニヤリッ

そしてニヤリと笑うのであった。

そして次の日、学園

一刀「さ～て、今日も書類の判子押しだな　」

一刀がいつものように仕事をしていると

一刀「んっ！？　」

1枚の報告書に目がついた。

一刀「なになに…学園にて不審人物あらわる。目撃者によるとその人物は蝶の仮面をつけた…」

一刀がそんなパピヨン（武装錬金より）みたいな変人がいるのかと思っていると

トントンッ

戸を叩く音がした。

一刀「いいよ」

一刀が璃々だと思い、入室を許可すると

ガチャッ

星「失礼するぞ」

中に入ってきたのは星だった。

一刀「確か君は2年B組の趙雲星だったよね」

一刀が言うと

星「ほぅ、我が名を覚えてくださるとはさすがは生徒会長ですな」

ちなみに前会長の麗羽は生徒の名前を覚えてくれなかった。

一刀「これも生徒会長の仕事だからね、ところで何の用？」

一刀が聞くと

星「実はおりいって頼みがあるのですが」

一刀「俺に出来ることなら何でもするよ」

後で一刀はこの事を後悔するのだった。

星「さすがは生徒会長殿は心が広い、実は頼みと言うのは…」

この時、その場が静かになった。

スッ！

そして星が懐に手をのばすと

ジャンッ！

星が懐から取り出したのは蝶の仮面だった。

星「これを装着し、私と共に学園の悪を退治してほしいのです！」

星がそう言うと一刀は

一刀「却下」

即答で断わった。

星「何故ですか!?私はあなたの強さが欲しいのです!さっき何でもすると言ったではないですか!」

星に言われた一刀は

一刀「でも忙しいからな~♪」

ごまかすように言うと

星「ふっ!仕方がありませんな、これだけは使いたくなかったのですが…」

そして星が懐に手をのばす

一刀「懐にどれだけ入ってるの!?」

一刀が突っ込むと

星「女には秘密の隠し場所がいくつもあるのですよ♪」

スッ!

そして星の懐から写真が取り出された。

星「これを見ても断わる気ですか?」

星が一刀に写真を見せるとそれを見た一刀は

一刀「こ…これは!?」

ジャンッ！。

星が取り出した写真には、一刀がエロ本を部屋の畳の下に入れている姿が写っていた。

一刀「こんなものをいつ！？」

一刀が写真を奪おうとするが

スッ！

写真は星の懐に戻されてしまった。

星「これをバラまかれたくなければ頼みを聞いてくれますか？」

ニヒヒッ

星が不気味に笑うと

一刀「わかりました、頼みを聞きます」

渋々承諾する一刀だった。

星「ふむ、素直でよろしいですぞ」

趙雲星。学園で一番の悪戯好きであった。

星が去った後、一刀は考えた。

一刀「（悪って誰かいたかな？）」

一刀が考えていると

麗羽「おーほっほっほ！」

お馴染のあの声が聞こえてきた。

一刀が注意してもやめないのでほっておこうと思った時

ピピピッ

一刀の携帯が鳴り出した。

ピッ

一刀「もしもし」

一刀が携帯を聞いてみると

星「何をしている！悪が現れたぞ、出動だ！」

電話の相手は星だった。

実は星と別れる前に一刀と携帯番号を交換しあっていた。

星「早く行かないとしゃ～し～ん～を～」

星がにやけ口調で言うと

ガタッ！

一刀「今すぐ出動します！？」

ダッ！

そして一刀は蝶の仮面をつけて出動するのであった。

現場

麗羽「おーほっほっほ！我らはむねむね団！学園は我らの物ですわ！」

そこには仮面をつけた麗羽一行がいた。

猪々子「麗羽様が暴れたいって言った時にはどうしようかと思ったけど」

斗詩「変な仮面つけただけでその気になるなんてね！？」

二人がこそこそ話していると

ギロリッ

麗羽「何か言いましたか？二人共！！」

麗羽が睨んできた。

とその時、

？「あいや待たれい！」

どこからか声が聞こえてきた。

麗羽「この声は!?どこにいますの？」

麗羽達が声の主を探していると

？「我はここにいるぞ！」

校舎の方から声の主である星…

華蝶仮面「我が名は星ではない！か弱き華を守るため、華麗に舞い散る正義の使者、華蝶仮面だ！」

バンッ！

星こと華蝶仮面が名乗ると

麗羽「キー!!また現れましたわね、お邪魔虫さん!!」

この二人の戦いは何度かしているようだ。

華蝶仮面「今日こそお主らむねむね団を成敗してくれる！」

華蝶仮面が構えをとると

麗羽「おーほっほっほ！たかが一人に何ができますの？」

麗羽が言うと

華蝶仮面「ふんっ、一人ではないぞ！いでよ、我が仲間達！」

華蝶仮面が叫ぶと

ブシュッー！！

あらかじめ仕掛けられていたスモークが発動し、煙の中から現れたのは…

朱里「朱仮面！」

バンッ！

1年B組　諸葛朱里。

恋「…恋仮面！」

バンッ！

2年B組　呂布恋。

白蓮「仮面白馬！」

バンッ！

2年A組　公孫白蓮。

そして…

一刀「一仮面！」

バンッ！

一刀であった。

華蝶仮面「５人そろって！」

ビッビッビッ！

全員『華麗戦隊　華蝶連者！！』

バァーンッ！

５人は同時に決めポーズをした。ちなみに全員蝶の仮面をつけただけである。

この時、一刀は思った。

一刀「（明日から俺も変人の仲間入りか）」

一刀が嘆いていると

朱里「大丈夫だと思いますよ、周りの人を見てください」

朱里に言われて一刀が周りを見てみると

男子生徒「華蝶仮面に新メンバー登場かよ！？正体は誰なんだ？」

桃香「ねぇ愛紗ちゃん、あの一仮面って人かっこよくない？」

誰も一刀達の正体に気付いてなかった。

麗羽「おーほっほっほ！たかが５人で何ができますの！そちらが５人ならば…」

スッ！

麗羽が手を上にあげると

麗羽「来なさい、戦闘員達！」

ズラリッ

麗羽が叫ぶとどこから現れたのか１００人を越す戦闘員が現れた。
（正体は袁紹家の使用人）

麗羽「さぁ皆さん！あの変な仮面達を懲らしめてやりなさい！」

猪々子・斗詩・戦闘員『あらほらさっさー！！』

そして戦闘員達が一斉にかかってくると

華蝶仮面「負けるな！華蝶連者、出動だ！」

スッ！スッ！

華蝶仮面と恋は屋根から飛び降りたが

白蓮「私は階段から行くぞ！？」

白蓮は階段で降り、

朱里「はわわ～！！怖くて降りられないです～！？」

高所恐怖症の朱里が震えていると

一刀「だったら俺につかまって！」

朱里「へっ！？」

スッ！

一刀は朱里を抱き上げると

ピョンッ！

そのまま落ちていった。

朱里「はわわ～！？」

ギュッ！

朱里は一刀から離れないようしっかりとしがみついていた。

スッ！

そして先に降りた二人に続いて一刀も着地に成功した。

戦闘員「オラーッ！！」

しかし、休んでいる間もなく戦闘員が襲ってきた。

華蝶仮面「ふんっ、雑魚が何匹集まろうと我々の敵ではないわ！」

ズバズバッ！

戦闘員達を見事に切り裂いていく華蝶仮面。

恋「…恋もやる」

ブォンッ！！

こちらは豪快に倒していく恋。

戦闘員「オラーッ！」

ブォンッ！

戦闘員は一刀にパンチを繰り出すが

一刀「パンチが遅すぎだよおじさん」

パシッ！

一刀は簡単にパンチを受け止めると

一刀「パンチはこう早くなくちゃ！」

ドカッ！！★彡。

戦闘員「ぐはっ！？」

一刀に殴られた戦闘員はぶっとばされていた。

麗羽「キー！！皆さん何をやってますの！お給料を半減しますわよ！」

戦闘員達は給料のために頑張るが華蝶連者に勝てるはずがなく、１００人いた戦闘員は全員やられてしまった。

猪々子「やっぱりあいつらじゃダメだったか！？」

斗詩「それじゃあ行こうか文ちゃん！」

むねむね団の二人が果敢に挑んでくるが

ドカカッ！

猪々子・斗詩『ギャフンッ！？』

所詮、彼女達が勝てる相手ではなかったため簡単にやられてしまった。

残り一人になった麗羽は

麗羽「キー！！だらしのない連中ですわ！こうなったら奥の手を使いますわ！」

スッ！

そして麗羽は懐からスイッチを取り出すと

ポチッとな

次の瞬間！

ゴゴゴッ！

上空から巨大ロボが現れた。

麗羽「おーほっほっほ！我が袁紹家の科学を結集して作り上げたその名も『０８Ｕ２９Ｃ（レイハウツクシー）』ですわ！」

ドシンッ！

そして麗羽似の巨大ロボが降り立った。

麗羽「いきなさい！Ｕ２９Ｃ！」

ウィーンッ！

麗羽の言葉に反応し、ロボが動き出す。

華蝶仮面「いかん！逃げるぞみんな！？」

ヒュンッ！

慌てて逃げる華蝶連者達だが、

華蝶仮面「どうした一仮面よ、早く逃げないか！？」

一刀だけは逃げずにいた。

麗羽「おーほっほっほ！やりなさいＵ２９Ｃ！」

ブゥンッ！

ロボの拳が一刀に迫る！？。

しかし一刀は刀を構えると

一刀「北郷流、『俄龍四神弾（ガリュウスーシンダン）』！」

ズバッ！

一刀の一撃はロボを切り裂いた。

突然のことに周りは驚くが、

実は一刀は気を四神（青龍・朱雀・白虎・玄武）に作り変えて攻撃していたのだ。（普通の人には見えない）

麗羽「そんな！？わたくしのロボが…！？」

麗羽が驚いていると

華蝶仮面「では、成敗といこうか！」

スッ！

麗羽「ヒッ！？」

麗羽の後ろにはいつの間にきたのか、縄を持った華蝶仮面がいた。

華蝶仮面「悪党成敗！」

シュシュッ！

麗羽「いや～っ！？」

しばらくして

バタンッ！

白蓮「待たせたな！仮面白馬、ただいま見参！」

ようやく階段を降りきった白蓮の目の前には

麗羽「キー！！このわたくしに何て格好を！」

そこには亀甲縛りにされた麗羽がいた。

白蓮「何が起きたんだ？」

白蓮のみ真実を知らないのであった。

そしてその頃、校舎裏

華蝶仮面の仮面を外した星は

スッ！

星「この写真を返しておこう」

星は一刀の写真を一刀に返した。

一刀「いいのか！？」

一刀が聞くと

星「お主ほどの実力者を我のみが縛るのが嫌なのでな、やはりお主は生徒全員のものだ」

スッ！

そして星は去っていった。

星「（まぁ、また助けがほしい時には別の写真で脅すがな♪）」

にくめない星であった。

ちなみに男子寮・一刀の部屋

ギィッ！

月が畳をあげるとそこには大量のエロ本があった。

月「隠し場所が甘いですよ一刀さん♪」

月にはエロ本のことがバレているのを一刀は知らない。

18時間目「華蝶連者見参！」（後書き）

一刀の技は送られてきたネタが元になっています。

１９時間目「フランチェスカ学園７不思議」（前書き）

個人的に他の二人に比べて華琳との絡みが少ないと思い、華琳との話にしました。

19時間目「フランチェスカ学園7不思議」

6月はじめ、

どの学園にも7不思議があるようにこの聖フランチェスカ学園にも7不思議があった。

食堂

一刀「7不思議を解明するって!?」

突然の及川の言葉に一刀は驚いた。

及川「そうや、今までの6つと最近できた1つでようやく7つ揃って7不思議になったわけやからな!」

ビシッ!

及川はそう宣言した。

しかし一刀達の反応は

一刀「やりたきゃ好きにやってくれ」

華佗「口をはさむ気はないからな」

左慈「くだらない話に付き合わせるんじゃねぇよ」

于吉「左慈の7不思議の解明なら参加するのですが」

スッ！スッ！スッ！スッ！

みんなは及川から離れていった。

あまりの冷たい反応に及川は

及川「冷たすぎやん！？一人くらい『俺も参加するぜ！』って言う人はおらんのかいな！」

及川が叫ぶと

四人『別に興味ないし』

四人はきっぱりと言った。

この反応に及川は

及川「ひどいやん！？わいら親友やろ、わいが悪霊に呪い殺されてもいいんかい薄情もん！」

及川が叫ぶと

一刀「だったら行かなきゃいいじゃん」

華佗「周りの人を巻き込むのは感心しないぞ」

左慈「勝手に悪霊の仲間にでもなっちまいな！」

于吉「案外悪霊と仲良く出来るかもしれませんね」

相変わらずの冷たい反応に及川は

及川「仕方ないな、これだけは使いたくなかったんやけど」

スッ！

及川は懐に手をのばすと

及川「手伝ってくれたら食堂の割引券一人3枚やるから！」

及川が取り出したのは食堂の割引券だった。

バァンッ！

割引券を見せられた3人は

華佗「仕方ないな、今回だけだぞ」

左慈「まぁ、貴様とはくされ縁だしな！」

于吉「左慈が行くなら私も行きます」

3人は引き受けたが

一刀「俺は弁当だし、また今度な！」

一刀が食堂を去ろうとすると

華琳「待ちなさい一刀！」

ビシッ！

華琳に呼び止められた。

一刀「何だよ華琳？」

一刀が聞くと

華琳「あなたそれでも生徒会長なの！学園の７不思議だなんてあぶなっかしいものをほうっておいていいと思ってるの！」

ビビシッ！

次々と出てくる華琳の言葉にさすがの一刀も

一刀「わかったよ、行けばいいんだろ」

行くのを認めるしかなかった。

実は華琳は怖いものが苦手で７不思議を何とかしてほしかっただけなのだ。

華琳「（ふぅっ、これで安心ね）」

華琳が安心していると

春蘭「７不思議なんぞにビビるとは愚か者め！華琳様なら簡単に解明してくれるわ！ねぇ華琳様、今夜こいつらについて行って解明しましょう！」

華琳「えっ！？」

春蘭の言葉に華琳は驚いた。

華琳が怖いもの嫌いだということは華琳しか知らない秘密なのだ。

春蘭に言われた華琳は

華琳「も…もちろんよ！私に任せなさい！」

華琳の性格上、断ることが出来ずに引き受けてしまった。

華琳「（春蘭、後でお仕置きよ！！！）」

そして深夜１２時になり、７不思議解明が始まった。

あの後、華琳が行くということで桂花が、姉が行くならばということで秋蘭が加わり、総勢９人の７不思議解明が始まった。

及川「それでは全員揃ったことやし、わいが調べた７不思議の説明するで」

聖フランチェスカ学園７不思議

・図書館から聞こえる不気味な声。
・話しかけてくる学園長の銅像。
・言葉を話す人体模型。
・人が消える廊下。
・血が流れる水道。

・叫ぶ階段。
・空中に漂う鬼火。

及川「以上が学園7不思議や！」

及川が言うと

華琳「対したことないじゃない！？」

ガタガタッ

華琳はそう言いながらも震えていた。

秋蘭「華琳様、そんなに震えて怖いのですか？」

秋蘭が聞くと

春蘭「何言ってるのだ秋蘭よ、天下の華琳様が7不思議ごときに怖がるなんてあるはずなかろう！ねぇ華琳様！」

こうまで言われた華琳は

華琳「その通りじゃない！この私が怖がるわけないでしょ！震えているのは武者震いよ！」

華琳はもう強気でいるしかなかった。

及川「それじゃあ行くで！」

こうして一刀達は出発した。

図書館

及川「毎晩夜になるとここから声が聞こえるんやで！？」

確かにこの時間は閉門時間なので誰もいないはずだ。

華琳「アホらしいわね、どうせそら耳よ…」

華琳が言うと

？「ハァ…ハァ…！？」

図書館から声が聞こえてきた。

華佗「今の声は何だ？」

秋蘭「確かに中から聞こえたぞ！？」

みんなが騒ぎ出すなか、

春蘭「ビビっている場合か！さっさと開ければよかろう！」

春蘭が扉に手を掛ける。

左慈「見付からねぇようにそっと開けろよ！？」

春蘭「わかったぞ！」

そして春蘭は扉をそっと開ける。

一刀「（しかしさっきの声ってどこかで聞いたような？）」

ガララッ！

そしてみんなが中を覗いてみるとそこには！？

穏「ハァ～…」

興奮している穏がいた。

２年Ｂ組　陸遜穏。彼女は見たことない本を読むと興奮して欲情する性格なのだ。なので普段は冥琳先生の許可がない限り図書館の入室は出来ないはずだが

ピシャンッ！

襲われてはたまらないので急いで扉を閉めた。

華琳「おそらくこっそり本を読むために深夜に入ったのね！？」

一刀「だな！？」

図書館の鍵は読書部部長である穏なら手に入れるのは簡単だ。

とりあえずここはおいといて他に移動する。

銅像前

及川「ここにある銅像が夜になると話しかけてくるんやで！？」

しかし銅像におかしな所はなかった。

桂花「バッカじゃないの！今度こそそら耳よ」

桂花が言うと

？「そこにいるのは誰なのよ？」

シィ～ン。

辺りが静かになった。

そして次の瞬間！

全員『わっーー！？』

ダダダッー！！

全員逃げてしまった。

そしてみんなが逃げた後で銅像が動き出した。

貂蝉「んもぅ、せっかく美貌を保つため月夜で全身泥パックしてたのに！」

銅像の位置が一番月明かりがよかったのだ。

そして逃げた一刀達は

桂花「何で私があんたなんかと！」

及川「わいかて巨乳の春蘭ちゃんや秋蘭ちゃんと一緒がよかったわい！」

各自バラバラになってしまった。

桂花「ブサメンのあんたに言われると腹が立つのよ！！！」

及川「何やて！猫耳貧乳！！！」

二人が言い争っている間に保健室の前を通りすぎると

？「私ってどうして…薄いんだ？」

ピタッ！

二人が保健室を覗いてみると

？「だから忘れられるんだろうな」

人体模型が話をしていた。

及川・桂花『ギャー！！？』

バタッ！

そして二人は仲良く気絶して倒れた。

ガラッ！

音に気付いて保健室の扉が開くと

白蓮「何してんだこいつら！？」

出てきたのは白蓮だった。

実は白蓮は日頃の陰の薄さを人体模型に話していたのだ。

別のところでは

春蘭「今の叫びは何だ！？」

左慈「何か出やがったのか！？」

左慈が慌てていると

于吉「慌てる左慈も素敵ですね～」

于吉が左慈を見ていると

ドカッ！

左慈「変な顔で見るんじゃねぇ！」

左慈は于吉に蹴られた。

春蘭「こんなとこで遊んでないで早くみんなを探すぞ！」

左慈「わかってるっての！行くぞ于吉！」

ダッ！

于吉「待ってくださいよ左…」

スッ！

左慈「どうしたんだ于吉？」

左慈が後ろを見てみると

後ろにいたはずの于吉の姿がなかった。

春蘭「そういえば！この場所は7不思議の一つの…」

・人が消える廊下。

これを思い出した二人は

バタッ！

同時に倒れた。

そして別のところでは

秋蘭「みんなはどこに行ったのだろうな？」

華佗「慌てて逃げてしまったからどこに行ったか分からないからな、携帯も通じないし」

二人が話していると

ピチョンッ！

華佗・秋蘭『！？』

水滴の落ちる音が聞こえた。

秋蘭「確かこの近くに水道があったな！？」

華佗「行ってみよう！？」

ダッ！

二人が水道に到着して調べてみると

華佗「別にただの水道だな」

当たり前である。

秋蘭「ホントに血が流れるのか？」

キュッ！

秋蘭が水道を回すと

ドジャッー！！。

軽く回したはずの蛇口から勢いよく水が流れ出した。

華佗「まさかな！？」

ペロッ。

華佗が恐る恐る水滴を舐めてみると華佗の動きが止まった。

秋蘭「どうしたんだ華佗！？」

秋蘭が聞くと

華佗「これは血だ！？」

華佗が言うと二人は

華佗・秋蘭『ギャーー！！？』

バタッ！

倒れてしまった。

そして一刀と華琳は

一刀「さっきは慌てて逃げたけど、よく考えたらあの像の声もどこかで聞いたような？」

一刀が考えていると

華琳「春蘭、秋蘭、桂花！応答しなさい！」

華琳は携帯に呼び掛けるが

華琳「何で出ないのよ!?」

3人からの応答がなかった。

一刀「まいったな!?俺は携帯忘れてきたし、仕方ないから一旦外に出る…」

一刀が言う途中で華琳の方を見ると

華琳「怖いわよ、もう悪戯しないから許してよお父様!?」

華琳は涙を流して震えていた。

華琳がお化けなどを嫌いな理由、それは小さい時に悪戯をして暗い物置に長時間閉じ込められたお仕置きからきたものだ。（最後は父に許されて出された）

そんな華琳を見た一刀は

一刀「ほらよっ」

おんぶの構えをとると

一刀「おぶってやるから乗りな！」

一刀に言われた華琳は

華琳「ありがとう」

スッ！

素直に一刀の背中に乗った。

そして華琳を背負った一刀が階段に着いて降りていくと

？「ギャー！！」

階段から叫び声が聞こえてきた。

華琳「ひっ！？叫ぶ階段なの！？」

一刀に乗った華琳が震えていると

一刀「今の声も聞いたことあるぞ？」

そして一刀は周りを探ると

一刀「ここか！」

ドスッ！

すると…

その場所に刀を突き刺した。

タンポポ「いったーい！？」

隠れていた場所から人が出てきた。

1年B組　馬岱蒲公英（タンポポ）。馬超翠の従姉妹で悪戯好き。

さっきの声は隠れていたタンポポが出していた。

タンポポ「見付かっちゃった!?それじゃっ！」

ビュンッ！

タンポポは逃げていった。

一刀「人騒がせな子だな!?」

華琳「もしかして7不思議は全部あいつの仕業じゃないの？」

そう思うしかなかった。

そして校舎を去ろうとする一刀達は途中、腐った床に落ちた于吉を救出し、見回り当番の最中、転んで鼻の穴に水道管が刺さり、更に妄想して鼻血を噴射していた稟を救出し、行方知れずだった他のみんなも発見し救出した。

一刀「それにしてもあと一つの正体は何だろな？」

一刀は華琳を降ろしてみんなを背負いながら言う。

確かにあと一つの漂う鬼火をまだ解明していなかった。

華琳「その7不思議は最近起きたそうよ、徒歩より早いくらいの移動で男子寮から出てきたって聞いたことがあるわ」

華琳が説明すると

一刀「あっ！？」

一刀は何かを思い出した。

それは最近、一刀がみんなのお弁当を完食するため、少しでもお腹が空く様にジョギングしていたことを思い出したからだ。（頭にはろうそくを装着）

これを思い出した一刀は

華琳「あなた、何か知ってるの？」

華琳が聞くと

ビクッ！

一刀は驚きながら

一刀「イヤ、ベツニナニモ！？」

脅える一刀であった。

ちなみにその後、一刀はジョギングから筋トレにメニューを変えた。

19時間目「フランチェスカ学園7不思議」（後書き）

聖フランチェスカ学園7不思議

・図書館から聞こえる不気味な声。
正体は穏の欲情の声。

・話しかけてくる学園長の銅像。
正体は学園長の泥パック

・言葉を話す人体模型。
正体は人体模型に話しかける白蓮の声

・人が消える廊下。
原因は廊下に出来た腐った床に人が落ちただけ

・血が流れる水道。
正体は水道管に突っ込んで鼻血を流した稟

・叫ぶ階段。
正体は蒲公英の悪戯

・空中に漂う鬼火。
正体は頭にろうそくをつけたジョギング中の一刀

２０時間目「壮絶な参観日」（前書き）

親の名前はオリジナルです。

ついに２０話到着！これからも頑張ります。

２０時間目「壮絶な参観日」

それはある日のこと

卑弥呼「それでは来週授業参観があるのでプリントを親に送るように！」

フランチェスカ学園は寮制なので家に送るしか手がないのだ。

そして休み時間

及川「わい、オカンが見に来るのややしプリント送らんとこ！」

一刀「俺も母さん怖いから送らないようにするか！」

二人が話をしていると

華佗「甘いな二人共！」

華佗に呼び止められた。

華佗「この学園では内緒にされないように極秘に親に授業参観の通知がされるんだ。つまり、プリントを送ろうが送るまいが結果は同じということさ！」

ビシッ！

華佗にはっきり言われた二人は

一刀「ダメだー!?来週必ず説教されるー!?」

及川「わいかてゴジラ似のオカンにしばかれるー!?」

騒ぐ二人であった。

もちろん騒いでいるのはこの二人だけではなかった。

桃香「はぁ～、やだな～授業参観」

桃香が溜め息をついていると

愛紗「姉上、どうしたのですか？」

義姉妹の愛紗が聞くと

桃香「授業参観の日は休みたいよ～！」

桃香は騒いだ。

鈴々「何故なのだお姉ちゃん?鈴々はおばちゃんに会えるから楽しみなのだ♪」

桃香の母は愛紗と鈴々のお義母さんでもあるのだ。

桃香「二人はお母さんに怒られたことがないから知らないんだよ～。私が授業で恥かくとお母さんが怒って大変なんだから」

実は去年の授業参観の日

桃香は授業で恥をかいてしまい、桃香の母は桃香だけを校舎裏に呼び出して

桃香母「この恥っさらしがー！！！」

ブォンッ！

桃香「ひぁ～！？」

そしてそのまま池に投げ飛ばされたのだ。

桃香「てなことがあったからさ～」

桃香が話すと

愛紗「ならば恥をかかぬようにすればいいのでわ？」

すると桃香は

桃香「絶対に無理！」

即答だった。

そしてついに一部の人が脅える授業参観の日がやってきた。

ザワザワッ！

一刀「まだ参観の時間じゃないのにすごい人数だな！？」

及川「あの人達何しに来たんやろ？」

二人が考えていると

華佗「決まってる、少しでもいい場所を取るためさ！」

まるで花見の場所取りのようだ。

一刀「ところで俺達の親はまだだけど華佗の親は来てるのか？」

一刀が聞くと

華佗「うちの親は病院が忙しいから来るかどうかは分からないさ！」

そんな話をしていると

及川「まだ時間あるし、せっかくやから他のクラス見てこよっと♪」

及川が教室の外に出ようとすると

ガラッ！

突然教室の扉が開かれて

？「ここが教室か」

傷だらけの白髪の男が入ってきた。

及川「ギャー！！どこかの強盗犯やー！？早く警察に電話せんと！

？確か１１７やったっけ？」

及川が一人で騒いでいると

左慈「親父！？来やがったのか！？」

実はこの傷だらけの男は左慈の父であった。

左慈父「元放（左慈の下の名前）、久しぶりだな！」

左慈父は周りを見渡すと

左慈父「ところであいつは来ていないか！？」

と聞いてきた瞬間！

？「あいつだなんてひどいわ左慈さん～」

ヌッ！

左慈父の後ろから貂蝉と卑弥呼に匹敵するオカマ親父が現れた。

及川「今度こそ出たー！？変質者やー！？警察よばな！確か１１９やったか？」

また及川一人が騒いでいると

于吉「お父様！」

于吉が叫んだ。

実はこのオカマ親父は于吉の父なのだ。

于吉父「みなさ～ん！こんばんは武人（于吉の下の名前）の父の武光（たけみつ）で～す！よろしくねん♪」

ブチュッ！

そして于吉父は投げキッスを繰り出した。

一刀「あぶねっ！？」

サッ！？

及川「ひぃっ！？」

サッ！

みんなは何とか投げキッスを避けた。

ちなみに于吉の父はオカマバーの支配人である。

左慈父「ところで于吉さん、とっとと離れてくれないか」

左慈父が言うと

于吉父「いいじゃないの別にお互い未亡人なんだし再婚しあいませんか？」

ブチッ！

この言葉に左慈父がキレた。

左慈父「ふざけるんじゃねぇぞテメェ！！！」

ドカカカッ！！。

左慈父は于吉父を蹴りまくるが

于吉父「あぁん！もっと強く蹴ってくださ～い！」

逆効果だった。

これを見たみんなは左慈と于吉を見ると

左慈・于吉以外『（この親でこの子ありか！？）』

全員がそう思うのだった。

そしてその頃、別の教室では

2年C組（愛紗・華琳・麗羽のクラス）

？「おーほっほっほ！貧民の皆さん、うちの麗羽をよろしくざ～ます♪」

この人は麗羽の母で袁紹グループのトップ、袁紹麗香（れいか）なのだ。

麗羽「おーほっほっほ！皆さん、お母様が誉めてくださっているのよ感謝しなさいな！」

こちらもこの親でこの子ありだ。

？「あちらは騒がしくてたまらんな！」

こちらは華琳の父で曹操グループ頂点、曹操（じんすう）仁崇なのだ。

華琳「ほっときなさいよお父様、あの馬鹿親子が騒ぐのはいつものことだし」

華琳が言うと

華琳父「華琳！お前は何という娘だ！ワシはお前のような立派な娘を誇りに思うぞ♪」

この親父はかなりの親馬鹿だ。

スッ！

華琳の父が華琳に抱きつこうとすると

ジャキンッ！

春蘭に武器を突きつけられて止められた。

春蘭「いくら華琳様の父でも場所を考えてください！」

華琳父「すまない！？」

睨まれて謝る華琳父であった。

２年Ｂ組（桃香のクラス）

桃香「はぁ～、やっぱりお母さん来てるよ！？」

桃香的には来てほしくなかったのだ。

桃香母「桃香！参観後の面談楽しみにしてますからね♪」

あきらかに池に落とす気満々の桃香の母こと、劉備桃恵（ももえ）であった。

２年Ａ組（蓮華のクラス）

蓮華「お母様、来てくれましたか！？」

蓮華の母は普段忙しいため参観に来ることがないのだ。

蓮華母「仕事が早く終わったから来ました。後でシャオの教室にも寄りますけどね」

この人が雪蓮・蓮華・シャオの母親、孫静蓮（せいれん）なのだ。

蓮華母「ところで蓮華？」

蓮華「何ですかお母様？」

蓮華が聞いてみると

蓮華母「雪蓮はどこにいますか？」

雪蓮の場所を聞いてきた母に対し、

蓮華「姉様なら女子寮の管理人室でゲームでもしてるんじゃないですか？」

それを聞いた母は

蓮華母「あのニート娘がー！！同期の冥琳と祭が教職についているのに昼間からゴロゴロとゲームだと、ふざけるなー！！！」

ダッ！

ひと騒ぎした後で蓮華母は教室から出ていく

蓮華「お母様、どこに行くんですか！？」

蓮華が聞くと母は

蓮華母「決まってるじゃない！あのニートに灸をすえてくる。参観の時間には戻るからね！」

ダダッ！

そして母は駆け出していった。

女子寮管理人室

雪蓮「（ブルッ！？）何か今、悪寒がしたような気が！？」

この後、雪蓮が気付いた時にはもう遅く、母にこってりしぼられる

のだった。

漢組（一刀のクラス）

ガラッ

一刀達が待っていると教室の扉が開いて

？「息子の教室はここでいいですか？」

パァ～～ン！！。

教室に入ってきたのは着物姿の美人だった。

男子生徒１「（誰のお母さんだよ？）」

男子生徒２「（あんな美人な母だなんて誰の母だ？）」

みんなが騒ぎ出すなか、

一刀「（ガタガタッ）」

一刀のみが震えていた。

及川「かずピーどうしたんや？」

及川が聞くと

一刀「あれがうちの母さんだよ！？」

及川「そうか～、かずピーのオカン…ってえーー！！？」

及川は叫んだ。

及川の叫び声で一刀の母が一刀を発見すると

一刀母「あ～！見付けたよ一刀！」

母に見付かってしまった一刀は

一刀「やぁ母さん久しぶり！？」

軽い挨拶をすると

ダダッ！グイッ！

一刀の母は突然駆け寄り、一刀の胸ぐらを掴んだ。

一刀母「か～ず～と～。月1くらいは連絡してくれてもいいんじゃないかな～？」

ギュッ～！

胸ぐらを掴む手が強くなる。

一刀「わ…分かりましたから掴んでいる手を緩めてくださいお母様！？」

一刀が言うと

一刀母「よろしい　」

パッ！

一刀の母は胸ぐらから手をはなした。

実は一刀の母は結婚する前、九州のレディース（女の暴走族）の頭だったのだ。それから一刀の父と結婚し族は解散。現在は九州で小料理の店主をしている。

そして名前は北郷切刃（きりは）という。

しかし一刀の母を見た及川は

及川「すっごい美人やないかかずピー！うちのゴジラとトレードしてほしいわ！　」

及川がそんなことを言っていると

？「誰がゴジラだって？　」

後ろから声が聞こえて

及川「そりゃゴジラっていうたらうちのオカ…　」

及川が後ろを見た瞬間、及川の動きが止まった。

及川母「そうかい、アタシはゴジラかい！！！　」

及川の後ろにいたのは及川の母で及川白子（しらこ）。中年ぶとりのおばちゃ

んだ。

及川母「アタシがゴジラならアンタはミニラだよっ！！！」

バッチーン！！。

及川は張り手をもろに受けた。

しばらくして

参観が終わり、面談の時間。

担任と親が1対1で話し合うのだ。

そしていよいよ一刀の母の番になった。

卑弥呼「体育の成績は良いが、漢文の成績が悪いですな」

切刃「はぁ…」

この時、一刀の母の頭に小さく青筋がたっていた。

切刃「（一刀め～！後でお仕置きよ！）」

一刀の母に怒りがたまるなか、

卑弥呼「しかし、生徒会長を真面目にしており、他の生徒からの人気も高いですぞ」

スゥッ。

この時、頭から青筋が消えだした。

切刃「そうですか　」

この後、更に一刀に対するいい評価が話される。

しばらくして

卑弥呼「とにかく北郷は真面目で良き生徒ですぞ　」

切刃「それはありがとうございます（にっこり）　」

この時、一刀の母の頭からは完全に青筋が消えていた。

卑弥呼「ただ…周りに北郷のことが好きな女子が沢山いるので将来的に注意が必要ですな　」

担任が気にすることではない。

それを聞いた一刀の母は

切刃「なるほどね　」

ニヤリと笑うのであった。

そして別れの時

切刃「いい一刀！夏休みには九州に帰ってくるのよ！お父さんもお爺ちゃんも楽しみに待ってるからね　」

一刀「わかったよ必ず帰るからさ　」

そして別れの間際

切刃「一刀！一つ言っておくわ！女は待たせると怖いからね♪　」

そして母は去って行った。

一刀「何言ってんだ？　」

この時、母の言葉を一刀は理解していなかった。

そして別の場所では

桃香母「この馬鹿娘が～！！！　」

ブォンッ！

桃香「ひぁ～！？　」

ボチャンッ！

桃香「うぅ～、結局投げられたよ～　」

桃香は母に池に投げ飛ばされた。

ため池や　桃香飛込む

水の音　西森の俳句。

２０時間目「壮絶な参観日」（後書き）

オリキャラ紹介

・北郷切刃（きりは）

一刀のお母さん。結婚する前は九州のレディース（女の暴走族）の頭だったのだ。それから一刀の父と結婚し族は解散。現在は九州で小料理の店主をしている。

武力は一刃に次いで強い。（一刀より強い）

胸は普通。

21時間目「聖フランチェスカ学園学園祭その1」（前書き）

時期的には早いと思いますが西森が書きたかったので学園祭編に突入します。

21時間目「聖フランチェスカ学園学園祭その1」

まだ時期的に早いと思うが、もうすぐフランチェスカ学園の学園祭が開催される。

学園祭は二つに分けられており、初日には演劇や合唱。二日目には模擬店を行うのだ。

一刀「さてと、それじゃあ各軍のチェックにでも行くかな♪」

学園祭の出し物は生徒会長が認めたものしかできない。

つまり生徒会長である一刀は危険があったり、過激すぎでないか確認しなければならないのだ。

及川「わいもついてこっと♪」

華佗「他のクラスの出し物を参考にできるかもしれないしな！」

左慈「面白そうだし、ついていくぜ♪」

于吉「左慈が行くなら私も！」

こうしていつものメンバーで出し物の確認に行くことになった。

呉軍

一刀「呉軍はダンスと喫茶店ということだけど…」

一刀はみんなの格好を見る。

蓮華「あんまり見るな！」

スッ！

蓮華は服の裾を引っ張る。

彼女達の格好は赤のミニスカスタイルに白い袖の服だ。（簡単にいうと恋姫の思春の服）

そして下着はもちろん…

一刀「学園祭でふんどしはどうかと！？」

ジャーンッ！

全員さらしふんどしの下着だった。

一刀の言葉に

及川「何言ってんねんかずピー！ふんどしのどこがあかんねん！！」

及川が抗議してきた。

一刀「しかしそんなひわいな下着はちょっと…」

一刀が言い渋ると

思春「貴様！ふんどしのどこがひわいだ！」

そして思春は

ガバッ！

思春「ふんどしこそ真の下着、これをはかねば呉の演技は成り立たないのだ！」

バァーンッ！

思春は服の裾をめくりふんどしをみせびらかした。男子の前で…

蓮華「思春！男の前で何をしているのだ／／／」

蓮華が注意すると

思春「ハッ！？／／／」

思春がようやく気付いたがもう遅い。思春のふんどし姿はバッチリと見られてしまった。

男子の反応は

一刀「うおっ！？／／／」

華佗「あの腰の筋肉はよく鍛えてあるな」

左慈「俺はふんどしに興味ねぇよ／／／」

于吉「左慈のふんどしスタイルなら見たいのですが…」

まぁまぁの反応だったが

及川「お宝映像や～♪もっと見せて～な♪」

及川の反応を見ると

思春「貴様ら出てけー！！！」

ドタバタッ！！。

思春は男子に攻撃してきた。

華佗「さらば～！？」

左慈「一時退却だ！？」

于吉「待ってくださいよ左慈！？」

及川「わいを置いてかんといてや～！？」

一刀「わかりました！認めますから許してくださ～い！？」

ピューッ！！。

男子達は逃げ出した。

魏軍

一刀「魏軍は演劇と喫茶店か　」

この学園では模擬店をすると喫茶店が多くなり、売り上げ勝負になるのだ。

秋蘭「演劇の方は華琳様の武勇伝を題材にしたものだから危険はないし別にいいだろう？　」

秋蘭が聞くと

一刀「確に演劇の方は問題ないが、この喫茶店の『華琳様の味がする喫茶』ってのはどういう意味だ？　」

一刀が聞くと

桂花「決まってるじゃない！しぼったジュースを華琳様の素足にかけて舐めさせるのよ！　」

バンッ！

過激すぎだ。

一刀「そういうひわいな物はちょっと…　」

一刀が言い渋ると

及川「何言ってんねんかずピー！わいは誰が言おうと賛成やで！　」

あきらかに足を舐めるのが目的で賛成する及川だが

華琳「言っておくけど、舐めるのは女性限定よ　」

ピシッ！

華琳の言葉を聞いて及川はショックのあまり体にひびがはいった。

桂花「当たり前じゃないの！華琳様の綺麗な素足を汚い全身精液男が舐めたら華琳様の素足が腐っちゃうじゃないの！」

桂花が言うと

華琳「でも生徒会長なら別に舐めてもいいわよ♪」

華琳が言った後、場が静まったかと思ったら

春蘭「貴様ら出てけー！！！」

ブォンッ！

春蘭が大剣・七星餓狼を振るって襲いかかってきた。

一刀達『わぁーっ！！？』

一刀達は何とかその場から逃げ出した。

一刀達が去った後

桂花「華琳様、さっきのは冗談ですよね！？」

華琳「どうかしらね？」

華琳が桂花をからかっていた。

董卓軍

一刀「董卓軍は演劇と模擬店か」

月「はいご主人様♪（ニコッ）」

月は男子寮メイドになって以来、男子をご主人様と呼ぶ様になった。
（ただし、一刀にだけは気持ちを込めて言っている）

及川「月ちゃん、わいにもご主人様って言って頂戴な♪」

及川が調子にのっていると

詠「調子にのるな!!!」

ガツンッ！

詠が及川をおぼんでおもいっきり殴った。

一刀「まぁ、この軍は問題無さそうだから別にいいな♪」

一刀が認めると

月「へぅ～、ありがとうございます／／／」

一刀に話しかけられて顔を赤くする月だったが朴念仁の一刀は

一刀「（何で顔を赤くしてるんだ?）」

全く理解していなかった。

袁軍

華佗「ここは行ってもどうせ麗羽が『わたくしの提案に口答えする気!!』て言われるのがオチだから行かなくてもいいんじゃないか？」

その通りかもしれないのが麗羽だ。

一刀「確かにここは別にほっておいても…」

一刀達が袁軍の会議室を通りすぎようとした時

麗羽「おーほっほっほ！」

ガラッ！

麗羽の声が聞え、会議室の扉が開いて中から出てきたのは

麗羽「おみこしわっしょいですわ！」

御輿に乗った麗羽だった。（ちなみに担ぎ手は猪々子と斗詩と袁兵兄弟）

麗羽「わたくしの素晴らしい提案を聞かないだなんて残念な人達ですわね」

聞かないのではなく、聞きたくないだけであることを麗羽は知らな

い。

一刀「では聞かせてください」

一刀が力なく聞くと

麗羽「あなた達のようなブ男に教える義務はありませんわ」

じゃあ聞くな。

斗詩「すみません！これがうちの出し物です！？」

スッ！

麗羽に代わって斗詩が謝りながら出し物が書かれた紙を渡す。

一刀「何々、歌劇と美女会？」

一刀は美女会を知らなかったので聞いてみると

猪々子「簡単に言うと麗羽様だけのファッションショーだよ」

麗羽「わたくしの美しさを周りの者に見せ付けてやりますのよ。おーほっほっほ！」

かぎりなく客が０になるであろうつまらなそうなものだが

一刀「じゃあ了承」

ここで断ると麗羽がうるさいので認めることにした。

役萬姉妹

天和「私達は初日は参加しないけど二日目はコンサートを開きま～す♪」

地和「ちぃ達の魅力で観客をメロメロにするんだから♪」

人和「これが成功すれば売上金でさらなる宣伝が可能ですしね」

すごいやる気だった。

ここは断ると後が怖いので認めることにし、一刀達が去ろうとすると

天和「待って一刀！」

一刀が天和に呼び止められた。

一刀「何か用？」

一刀が聞くと

スッ！

天和から二枚のチケットが渡された。

天和「私達のコンサートの一番見やすい席だよ♪二枚あるからお友達を誘ってね♪」

パチンッ。

天和からウインクされた一刀は

一刀「あ…ありがとう」

お礼を言うのであった。

しかし後に天和はチケットを二枚渡したことを後悔することになるのを現時点では知らなかった。

南蛮軍

美以「美以達は南蛮の踊りを披露するのにゃ～♪」

ミケ・トラ・シャム『するのにゃ～♪』

1年C組　孟獲美以。南蛮からの留学生で学園を騒がすちびっ子。

1年B組　永田ミケ。1年C組　梶田シャム・高田トラ。美以の南蛮での同級生で暴れん坊トリオ。

袁術軍

美羽「妾（わらわ）の歌でみんなをとりこにするのじゃー♪」

七乃「お嬢様さすがです～♪」

1年B組　袁術美羽。麗羽の従姉妹で蜂蜜好きなわがまま姫。

1年C組　張勲七乃。本来なら2年なのだが、美羽の世話をしたい

がために留年した。時々美羽に対して悪戯をする小悪魔娘。

そしていよいよ桃香達蜀軍の番になった。

桃香「私達は演劇と喫茶店ですよ」

一刀は桃香から渡された出し物表を見ると

一刀「特に問題点はないから認めよう！」

蜀軍の出し物は認められた。

及川「ほなわいらも教室戻って出し物考えよっか」

そして一刀達が去ろうとすると

桃香「あっ！？一刀君は待って！？」

一刀が呼び止められた。

一刀「悪いみんな！後で行くから先に話を先に進めといてくれ」

一刀が言うと

華佗「わかった！こっちは俺達で進めとくからさ」

左慈「なるべく早く戻れよ！」

于吉「それではお先に」

華佗達が去った後で

一刀「お待たせ！用件は何？」

一刀が聞くと

桃香「あのね／／／」

桃香は顔を赤くしながら言う。

桃香「私達の劇に出演してほしいの！ダメっ？」

桃香が聞くと一刀は

一刀「まぁ初日は俺も暇だし別にいいよ」

一刀は了承した。

しかし、この時断っておけばあんな目にはあわなかったと後で後悔する一刀であった。

そして各軍準備が進み、いよいよ学園祭当日になった。

21時間目「聖フランチェスカ学園学園祭その1」（後書き）

漢組の出し物については秘密です。

22時間目「聖フランチェスカ学園学園祭その2」（前書き）

いよいよ学園祭突入です。今回一刀は主人公なのに前半は全く出ません。

22時間目「聖フランチェスカ学園学園祭その2」

聖フランチェスカ学園学園祭当日

初日は生徒だけだが二日目からは一般客も参加できるのだ。

及川「ついにこの日がやって来たんやな！」

華佗「やっぱり学園といったら学園祭だよな」

左慈「何ガキみたいにうかれてるんだか」

于吉「そういう左慈も昨日はぐっすり眠れなかったくせに♪」

ドカッ！

左慈「余計なこと言うんじゃねえ／／／」

于吉「照れる左慈も素敵ですね」

左慈に蹴られながらも言う于吉だった。

及川「ところでかずピーはどこや？」

及川が聞くと

華佗「一刀なら蜀軍に手を貸しているから初日は見れないんで俺に食堂タダ券3枚でビデオ係を頼んでいたぞ」

華佗の手にはビデオカメラがあった。

及川「何で華佗なん！わいが撮ったるのに！」

及川が抗議すると

華佗「お前が撮ると女子の胸や尻のアップばかり写るからだろう」

ギクッ！？

まさにその通りであった。

左慈「俺は機械は苦手だし、于吉は俺ばかり撮るしな」

于吉「当然ですよ！」

ビシッ！

はっきり言う于吉だった。

華佗「それより早く行かないといい場所を取られてしまうぞ！」

及川「そやな！いそがなっ！？」

そして４人は講堂に走っていった。

講堂

講堂にほとんどの生徒が集まるなか、

陳琳「それではこれより第35回聖フランチェスカ学園学園祭を始めます！」

陳琳の言葉の後

生徒達『わぁっー！！』

生徒達が騒ぎ出した。

陳琳「まずは呉軍による演舞からどうぞ！」

パチパチ！

拍手が飛び散るなか幕が開き蓮華達が現れる。

蓮華「ハッ！！」

ジャジャンッ！

蓮華を筆頭に思春・穏・明命・亞莎・シャオ・大喬・小喬が舞い踊る。

しかしそんななか、

舞台裏

猪々子「麗羽様ホントにやるんですか！？」

麗羽「当然ですわ！わたくしより目立つ奴らなんて恥をかけばいいのよ！」

麗羽達が何かを企んでいた。

斗詩「だからって蓮華さんのふんどしに切れ込み入れるのはやりすぎじゃ！？」

斗詩が注意するが

麗羽「お黙りなさい！ふふふっ蓮華さん後で恥じかくとも知らずに」

しかしいくらたってもふんどしは千切れる気配はなかった。

麗羽「これはどういうことですの！！！」

麗羽が怒鳴ると

猪々子「知りませんよ！？確かに昨日の晩言われた通りに蓮華さんのふんどしに切れ込み入れといたのに！？」

そして呉軍の演舞が終わった。

蓮華のふんどしがちぎれなかった理由、それは…

及川「どうしたんや？朝早く呉軍の会議室に忍び込んで蓮華ちゃんのふんどしパクっといたのにちょっと引っ張ったら勝手に千切れたで！？」

及川が事前に蓮華のふんどしを盗んでおいたからだった。（現在は予備のふんどしを着用）

陳琳「では続いて董卓軍の演劇です！」

そして再び幕が開かれる。

題名は『洛陽の犬』

詠「あるところに貧しい二人の娘と二匹の犬が仲良く住んでいました」

ナレーター・詠
脚本・月

劇が進むなか、またしても麗羽達が何かを企んでいた。

麗羽「今度こそ大丈夫ですわ！こっそりと本番前に恋さんの台本の後半をすりかえておきましたから！」

そして劇は終盤になる。

ねね「うぅっ！？」

ガクッ！

がっくりするねね

ねね「ごめんなのです恋殿、セキト、張々。お金は全て借金取りに払ったからお金が無いのです」

恋「…ねね」

この後、麗羽がすりかえた台本にかわる。

恋「…ねね、恋と結婚する！」

ねね「へっ！？」

シィ～～ン。

この時、場が静まった。

恋「…結婚して二人で幸せになる」

これに驚いた斗詩は

斗詩「麗羽様、一体何とすりかえたんですか！？」

斗詩が聞くと

麗羽「こちらの雑誌ですわよ！」

スッ！

麗羽が見せた雑誌、それは『幸せになる方法』の結婚のページだった。

恋の言葉に場が静まるが

詠「こうしてねねと恋は結婚し、二人は幸せに暮らしましたとさ！」

詠が無理矢理劇を終わらしたが

生徒達『うぉっー！！』

生徒達からはすごい反響だった。

陳琳「続いては魏軍による演劇。題は『華麗なる華琳様の武勇伝』です」

幕が開かれて華琳達が出てくる。

桂花「ある名家に華琳という名のそこら辺の美女がうらやましがるほどの美貌を持った女の子が産まれました」

ナレーター・脚本　桂花

桂花「そんな華琳様の元に猪馬鹿と姉馬鹿が側近として華琳様のそばにつきました」

春蘭「誰が猪馬鹿だ！！！！！」

春蘭が怒鳴る。

秋蘭「姉者、今は本番中だから抑えてくれ」

怒鳴る春蘭を秋蘭が静めるのであった。

そしてまたまた麗羽達が何かを企んでいた。

猪々子「麗羽様～、華琳達には何を仕掛けたんですか？」

猪々子が聞くと

麗羽「フンッ！もっとも憎らしいくるくるおちびさんにはすごい仕掛けを仕掛けましたわ！おーほっほっほっ！」

猪々子が何を仕掛けたんだろう？と考えていると

斗詩「（文ちゃん、上を見て！）」

上を指差す斗詩がいたので猪々子が上を見てみると

ユラリンッ！

舞台の上には吊されたバケツがあった。

猪々子「（なるほど！あれに入っている水を華琳達めがけて落とすわけか！）」

頭の悪い猪々子もわかったようだ。

そして劇は終盤になる。

華琳「我が名は華琳。偉大なる覇王であるぞひざまづけ！」

華琳が舞台の中心に移動した時

麗羽「今ですわ！」

クイッ！

麗羽はバケツに仕掛けられているひもを引っ張る。が…

シィ～～ン。

バケツは何も起きなかった。

麗羽「どういうことですの？」

麗羽が？を浮かべていると

斗詩「あのぅ麗羽様」

斗詩が何かに気が付いた。

斗詩「もしかしてバケツに水を入れるのを忘れたんじゃ！？」

斗詩が言うと

麗羽「（ギクッ！？）」

忘れていたようだ。

麗羽達が馬鹿なことをしている間に

華琳「全ての者は私に従いなさい！」

桂花「こうして華琳様は天下を統一したのでした」

劇が終わってしまった。

麗羽「キッー！！何て運のいい奴！！」

運の問題だろうか？

猪々子「どうするんですか麗羽様！？」

斗詩「残るは蜀軍しかありませんよ！？」

二人が言うと

麗羽「大丈夫ですわ、既に手はうってますから」

そんな麗羽の企みを知らずに蜀軍の劇が始まる。

陳琳「次は蜀軍の演劇、題は『桃雪姫』です」

幕が開いて愛紗が姿を現す。

愛紗「とある昔、桃のように綺麗で、雪のように肌が白い姫がいました」

ナレーター・愛紗
脚本・朱里・雛里

桃香「私の名前は桃雪姫～♪今日も元気に遊びます～♪」

しかしそんな桃雪姫の美しさに嫉妬した母親（翠）は

翠「鏡、世の中で美しい女は誰なんだ？」

すると魔法の鏡（星）が答えます。

星「それはやはり桃雪姫ですな。性格も胸もお主より素晴らしいものをもっているが私はお主のような形の胸が好みでな…」

翠「んなことは聞いてねぇよ！！！」

2年A組　馬超翠。馬術部のエースでキレやすい性格。失禁（おもらし）する癖を内緒にしているがほとんどの人にばれていることを本人は知らない。

翠「こうなったら殺し屋を雇って姫を暗殺してやるぜ！」

そこで翠が用意した殺し屋（焔耶）でしたが

焔耶「私にはあなたのような美しい人を殺すことなんて出来ない！早く逃げてください！」

殺し屋は姫を殺さずに逃がしてやりました。

城から逃げ出した桃雪姫は逃げてる途中で眠くなってしまい森の中にあった小さな家で仮眠をとることにしました。

桃雪姫が寝ていると

鈴々「ハイホー！ハイホー！なのだー！」

朱里「はわわ～／／／」

雛里「恥ずかしいです～／／／」

タンポポ「ここにいるぞー♪」

４人の小人が歌をうたいながら歩いていました。

実は桃雪姫の寝ていた家は小人達の家だったのです。

桃香「勝手に入ってごめんなさい！お世話するから許してください！」

小人達は桃雪姫を許す代わりに家の手伝いをさせました。

一方その頃、桃雪姫が死んでいないことを知った翠は

翠「馬鹿か！！逃がしてどうすんだよ！！」

焔耶「貴様に馬鹿よばわりされる筋合いはないわ！！！」

殺し屋と口論していると

翠「こうなったらあたしが殺してやるぜ！」

スッ！

翠は置かれていたリンゴを手に取った。

麗羽「フフフッ、あのリンゴには眠り薬が入ってますのよ、主役が起きなければ劇は失敗ですわ！」

麗羽の企みを知らずに劇は進んでいく。

翠「桃雪姫、美味しいリンゴをやるぜ！」

桃香「ありがとうございます！」

パクッ。

桃香は眠り薬が入っているリンゴを知らずに食べてしまい

バタッ！

その場で眠ってしまった。

桃香「ＺＺＺ～」

しかし周りのみんなは

愛紗「（さすがです姉上、まるでホントに寝ているような名演技ですね）」

ホントに寝ているのに演技だと思っていた。

そして劇は終盤へ

鈴々「うわ～ん！呪いでお姉ちゃんが死んじゃったのだー！！」

小人達が泣いていると

パカポコッ

馬の足音が聞こえて現れたのは

一刀「君達どうしたんだい？」

ジャーンッ！

華琳・蓮華『（一刀!?）』

突然の一刀の登場に二人が驚いた。

一刀「かわいそうな姫、俺が呪いを解いてあげよう」

一刀は桃香に唇を近付ける。

一刀「（演技なんだしギリギリでいいよな）」

ピタッ！

一刀は唇が触れ合うギリギリの位置で止めるが

桃香「う～ん、しまった!?いつの間にか寝てた!?」

ガバッ！

桃香が目を覚まし、起き上がろうとした時

ブチュッ。

一刀「!?」

桃香「!?」

二人の唇が触れ合ってしまった。

桃香「はふっ!?／／／」

ボンッ!!。

桃香の顔が一瞬でゆで蛸のように真っ赤になり、

一刀「ご…ごめん!?／／／」

一刀が顔を赤くしながら謝っていると

ジャキンッ!

一刀にとって嫌な音が聞こえてきた。

愛紗「貴様は懲りもせずにまた姉上にハレンチなことを!!!」

蓮華「そもそも何で一刀が劇に参加してるのかしら!!!」

華琳「これはお仕置きが必要ね!!!」

武器を持って青筋を立てた三人が舞台に上がってきた。

一刀「うわっ!?」

一刀はその場から逃げようとするが

男子達『ほ～ん～ご～う～、許さんぞ！！！』

桃香ファンの男子達に前をふさがれた。

一刀「うわっ～！！？」

ピューッ！！

一刀は逃げようとするが

ほとんどの生徒『待て～！！一刀～！！！』

ドドドッー！！。

一刀はほとんどの生徒に追い掛けられるのだった。

そして講堂に残ったのは

陳琳「それでは最後は袁軍による歌劇です！」

司会の陳琳と

麗羽「二人共いきますわよ！」

猪々子「行くのは構わないんですけど」

斗詩「行ってもねぇ」

最後の出番の袁軍と

麗羽「それではいきますわよ！」

バッ！

麗羽達は股間に白鳥がついたバレエスーツを着て舞台に上がるが客席を見ると客席にいたのは

桃香「うへへっ／／／」

顔を赤くしている桃香と

華佗「（ジー）」

ビデオを撮っている華佗と

左慈「ＺＺＺ～」

于吉「左慈～ＺＺＺ～♪」

眠っている左慈と于吉しかいなかった。

麗羽「何故誰もいませんの！！！」

他のみんなは全員一刀を追い掛けていた。

22時間目「聖フランチェスカ学園学園祭その2」（後書き）

董卓軍の出し物の元ネタはフランダースの犬です。

一刀を追い掛けている人は嫉妬の人、おもしろみの人、ただついてきた人などがいます。

23時間目「聖フランチェスカ学園学園祭その3」

聖フランチェスカ学園学園祭二日目

昨日のどたばた騒動があったなか、一刀は

一刀「ホントにありがとな華佗…」

全身包帯まみれのミイラと化していた。

さすがの一刀もほとんどの全校生徒からは逃げられず袋叩きにあってしまいボロボロのところをビデオを撮り終えた華佗に治療されたのだった。

華佗「気にするな怪我人がいたら治療するのが医者だ！」

ホントに華佗はいい奴だなと感じる一刀だった。

学園祭二日目からは一般客も参加してくるので昨日よりも人が多い。

一刀が周りを見渡していると

及川「かずピー！」

及川がやって来た。

及川「その怪我で午後からのクラスの出し物に参加できるんかいな！？」

実は昨日の騒動の時に及川はみんなに紛れて一刀を五発殴ったのだった。

一刀「この怪我じゃ無理かもな～♪」

実は包帯は見せかけだけで今朝にはほとんど回復した一刀が白々しく言うと

及川「なら仕方ないな、かずピーはクラスの出し物は参加せんでいいからあとでな！」

及川は去って行った。

華佗「いいのか一刀、クラスの出し物に参加しないで！？」

華佗が心配すると

一刀「いいんだよ別に俺をこんな目にあわせた奴らなんて知るもんか！！！」

一刀は昨日の騒動で及川に五発殴られたこととクラスのみんなにボコボコにされたのを根にもっていた。

一刀「それに俺は今日彼女と見回る予定だし」

華佗「誰と？」

華佗が聞いたすぐ後に

璃々「お兄ちゃ～ん♪」

璃々が駆け寄ってきた。

一刀は近寄って来た璃々を抱き上げると

一刀「璃々ちゃん、今日は一日璃々ちゃんと一緒にいるからね♪」

一刀が言うと璃々は

璃々「やった～♪お兄ちゃんは璃々のもの～♪」

すごく喜んでいた。

一刀「それじゃあ華佗、後は頼むぜ！」

一刀は包帯を解いて璃々と手を繋いで歩いていった。

華佗「まぁあいつもいつも大変だし、今日くらいは好きにさせてやるか」

華佗は一刀の行動を許していたが

及川「かずピーめ！！！」

一刀の様子を木の後ろから見ていた及川は

及川「見てろやかずピー！今日くらいあいつがいなくても大丈夫ってとこを見せたるで！」

ゴォッー！！。

珍しく燃える及川だが彼は忘れていた。左慈はクラスの出し物には参加しないし、于吉は部活優先で参加できないのでイケメン戦力が華佗しかいな…

華佗「何っ!?急患で手が足りないだって!?わかったすぐ帰るぜ！」

華佗が帰ってしまいイケメン戦力が0になってしまう漢組だった。

ちなみに漢組は一刀・華佗・左慈・于吉を除くと及川を含めてモテない男ばかりであった。

一方、華佗と別れた一刀達は

呉軍喫茶店・大熊猫店

蓮華「いらっしゃいませ♪」

フリンッ♪。

そこにはメイド服を着た蓮華が接客していた。

亞莎「さすが蓮華様ですね、接客がうまいです」

思春「当然だ!蓮華様はこういうことに関しては完璧なのだから」

明命「我々も頑張らないと!」

1年A組　周泰明命。猫を愛する忍者マニア。

呉軍のみんなもメイド服を着ていた。（穏は部活優先で参加せず）

シャオ「ぶ～！！お姉ちゃんには負けないもん！一番はシャオなんだから　」

シャオが気合いを入れていると

大喬「シャオ様、二名入ります！　」

シャオ「はい！いらっしゃいま…　」

受付の大喬に言われてシャオが振り向くと

璃々「こんにちは～♪　」

一刀「どうも　」

一刀と璃々が入ってきた。

一刀と璃々が案内されて席につくと

蓮華「いらっしゃいませ♪　」

スッ！

接客に来た蓮華が優しく璃々に水を渡すが

ドンッ！

蓮華「どうぞごゆっくりと！！！　」

一刀に対しては青筋を浮かべて睨みつけながら激しく水を置いた。

どうやら昨日の桃香とのキスを根にもっているようだ。

一刀「（怖いな～！？機嫌悪いのかな？）　」

しかし朴念仁の一刀は蓮華の機嫌が悪いのは自分のせいということを知らなかった。

璃々「璃々はさくらんぼがのっている杏仁豆腐が食べた～い♪　」

一刀「じゃあ俺はトマトジュースで　」

一刀達が注文をとると

蓮華「わかりました少々お待ちください！！！　」

蓮華は青筋を立てながら厨房に向かっていった。

しばらくして

蓮華「お待たせしました！！！　」

スッ！

二人の前に杏仁豆腐とトマトジュースが置かれた。

璃々「わ～い♪いただきま～す♪　」

パクパクッ。

璃々は杏仁豆腐を食べる。

一刀「他にも回らなきゃいけないからおかわりはダメだよ」

璃々「わかってるよ♪」

理解した璃々を見て一刀がトマトジュースを飲もうとすると

一刀「（ブハッ!?）」

一刀はトマトジュースを吹き出した。

一刀「（これって中にタバスコが入ってるじゃん!?）」

一刀が慌てて蓮華の方を見ると

蓮華「フンッ！」

蓮華はまるで『ざまあみろ』というような態度をとっていた。

一刀「（俺が何したの!?）」

一刀は原因が自分にあることを知らずに吹き出したトマトジュースを綺麗にふくのであった。

その頃、漢組は

及川「はぁ～!?まさか頼みの華佗も帰るやなんて!?」

先ほど華佗から送られたメールを見て悩む及川。

及川「かずピー、華佗、さっち―、うっきーがおらへんとわな!?」

一刀の方は謝れば許してくれそうだが及川のプライドがそうさせなかった。

及川「こうなったら仕方ない！」

ダッ！

及川は教壇に立つと

及川「おい聞けやモテへんブサメン（不細工な面(つら)の略）共！」

及川はクラス中に叫びまくる。

及川「かずピー達がいない今、わいらの出し物である『執事喫茶』のＮｏ．１は俺に決定や！お前らブサメンの分までわいが稼いだるから安心せい！」

及川が言い終わると

スッ！スッ！スッ！

一人、また一人と席を立つ生徒が出てきた。

及川「やっとわいの気持ちがみんなに伝わったんやな！」

しかしみんなが席を立った理由は

漢組生徒『誰がブサメンじゃー！！！！！』

及川「へっ！？」

ドガッ！バキッ！ボコッ！

散々言いたい放題した及川をボコボコにするためであった。

漢組生徒1「北郷達がいないんじゃ執事喫茶なんてやるだけ無駄だよな！」

漢組生徒2「俺は出し物を降りた！」

彼らだって馬鹿ではない一刀達がモテるということを理解していた。

みんなが去って行った後、クラス全員にボコボコにされた及川は

及川「何でわいがこんな目に！？」

自業自得である。

その頃、一刀は

一刀「まだ口の中がヒリヒリするよ！？」

璃々「お兄ちゃん大丈夫？」

呉軍の喫茶店を出た一刀と璃々は次の店めがけて歩いていた。

その途中

一刀「んっ？あれは」

一刀が見たものは

白蓮「はぁ～！？」

溜め息をつく白蓮だった。

一刀「どうしたんだ白蓮？」

一刀が聞くと

白蓮「北郷か、実はおでんの屋台を出しているんだが客が来なくてな」

各生徒は全て自己負担ならば店を出してもいいことになっているのだ。

白蓮「そうだ！桃香から聞いたが北郷は料理がうまいんだってな！」

白蓮に期待の目で見られた一刀は

一刀「うっ！？」

一刀は女の子に頼まれれば断れない性格なのだが

璃々「お兄ちゃん？」

璃々をほっておけないという気持ちもあった。

それを察した白蓮は

白蓮「一時間だけでいいし、売上金の半分をあげるからそれで璃々にお菓子でも買ってやってくれ！」

白蓮が頼むと璃々は

璃々「お兄ちゃんかわいそうだから手伝ってあげて、璃々も手伝うからさ」

璃々に言われた一刀は

一刀「仕方ないな、わかったよ手伝うよ」

白蓮の店を手伝うことにした。

白蓮「ありがとう！北郷！璃々！」

そして白蓮の屋台が始まった。

一刀「まずは昆布で軽くダシをとって、隠し味に…を入れて」

※西森は料理の素人です。隠し味はあるかどうかは分かりません。

一刀「璃々ちゃんはそこのコンニャクを俺に投げてくれ」

璃々「うんわかった♪」

白蓮「コンニャク投げてどうする気だ？」

白蓮が聞くと

一刀「まぁ見てなって♪白蓮はコンニャクを入れる器を持っていてくれ」

一刀が言うと

璃々「それっ～♪」

ポイッ！

璃々はありったけのコンニャクを一刀に向けて投げつけた。

チャキッ

一刀は刀を構えると

一刀「でいやっー！！」

スパスパスパッ！！。

ぼとぼとぼとっ！！。

一刀に切られたコンニャクはきれいに三角の形に斬られて白蓮の持

つ器に入っていった。

白蓮「お前ってホントにすごいな！？」

白蓮が驚くと

一刀「昔から母さんの手伝いでよくやらされてたからね！他にも…」

璃々「それっ～♪」

ポイッ！。

今度は大根丸ごと一本を一刀に投げてきた。

一刀は再び刀を構えると

一刀「そらよっ♪」

ブンッ！。

一刀が刀を振るうと

バラリッ！。

大根は見事にこま切りにされて斬られた。

一刀「白蓮っ！器の用意！」

白蓮「わっ…わかったよ！？」

これではどちらが店主か分からない程だった。

そして１０分後

ズラーリッ！。

白蓮のおでん屋は一刀の料理の腕と

璃々「いらっしゃいませ♪（ニコッ）」

璃々のかわいい接客で繁盛していた。

そして更に時間がたち、２０分後

白蓮「完売だー♪」

白蓮のおでん屋は一時間もたたずに完売となった。

白蓮「ありがとな北郷、璃々！約束の売上金の半分だとっておいてくれ♪」

ドサッ！

予想以上に売れたので白蓮は奮発してくれた。

一刀「サンキュー白蓮！璃々ちゃん、このお金で欲しい物買ってあげるね」

璃々「璃々とってもうれし～い♪」

そして一刀と璃々は手を繋いで去っていった。

一刀達が去った後、白蓮が店の片付けをしていると

カツンッ！カツンッ！

及川「ぱ～い～れ～ん～ちゃ～ん～　」

ヌッ！

白蓮「うわっ！！？　」

いきなり白蓮の後ろに杖をついた包帯男と化した及川が現れて白蓮は驚いた。

及川「白蓮は確かおでん屋やったな、ご馳走してくれへん？　」

しかし白蓮は

白蓮「すまないがうちの店は完売したよ　」

これを聞いた及川は

及川「そ…そんな！？　」

ガクンッ。

ショックのあまりその場に倒れこむ及川だった。

２４時間目「聖フランチェスカ学園学園祭その４」（前書き）

学園祭編終了です。次回から日常に戻ります。（前にも同じことを書いた気が？）

２４時間目「聖フランチェスカ学園学園祭その４」

白蓮の店を離れた後、一刀と璃々は数え役萬姉妹のライブに来ていた。

天和「みんな大好き～」

観客『てんほうちゃ～ん♪』

地和「みんなの妹～」

観客『ちーほうちゃ～ん♪』

人和「とってもかわいい♪」

観客『れんほうちゃ～ん♪』

天和・地和・人和『数え役萬…』

天和・地和・人和『姉妹（シスターズ）！』

観客『うぉっー！！！』

前の袁紹の件（１５話参照）でファンが少し減ったかと思ったら逆に前よりファンが増えてしまった。

天和達が歌っていると

璃々「うおっ～♪」

一刀「うおっー！」

叫んでいる一刀達を天和が見付けた。

天和「（一刀、チケット渡したのは私だけど何でその子と仲良くしてるのよ！！）」

天和は一刀と仲良く手を繋いでいる璃々を見て嫉妬していた。

役萬姉妹控室

天和「か～ず～と～！！」

ギュ～！！

一刀「いふぁい！いふぁいってばてんほー！？」

一刀は天和におもいっきり頬を引っ張られていた。

人和「姉さん、焼きもちはみっともないわよ」

人和が言うと

天和「お餅なんて焼いてないもん！」

天和は現国の成績が悪かった。

地和「まぁせっかく来たんだから一刀も手伝ってよ♪」

一刀「何で俺が！？」

一刀が抗議しようとすると

地和「嫌ならいいのよ、そのかわり一刀がちぃ達の着替えを覗いたこと（２話参照）をファンのみんなに言いふらすから！」

地和が言うと一刀は

一刀「喜んで引き受けます！」

そんなことを話されてはいくら一刀でも重症なのは確実なので引き受けるしかなかった。

そしてライブが始まる。

天和「みんな～、今日は私達のライブに来てくれてありがとう～！」

観客『ほわほわ～！！』

地和「そして今日は特別ゲストを紹介します！どうぞっ！」

地和が手を出すと

バンッ！

一刀「ど…どうも！？」

そこには変装した一刀がいた。

人和「それではゲストさんに歌ってもらいましょう！曲は私達のテーマソング『ＹＵＭＥ　蝶ひらり』です　」

チャララ～♪

そして音楽が流れ出した。

一刀「あの…えと…！？　」

中々歌わない一刀に

天和「（ほら一刀、歌ってよ！）　」

天和に急かされて一刀はマイクを手に取り歌い始めた。

一刀「ま～え～が～み～か～す～め～た～…♪　」

ビリビリンッ！。

それはまさに騒音というしかない歌だった。

聞いた人は耳を塞ぎ、雀は逃げ出し、なかには倒れる人までいた。

例えるなら一刀の歌声はジャイアンくらいの音痴だった。

しかし一部の者には

魏軍喫茶店

春蘭「聞いてみろ秋蘭、どこからか素晴らしい歌声が聞こえてるぞ」

一刀の歌声は音痴には好評だった。

ライブ終了後

一刀「だから歌いたくなかったんだよ!?」

一刀はひどく頭をガックリとしていた。

天和「一刀、そう落ち込まないでよ!?」

人和「そうですよ、なかなか個性的な歌でしたよ!?」

素直に下手だと言ってくれた方がまだマシである。

璃々「お兄ちゃん、次の店に行こうよ♪」

一刀「どうせ俺なんて!?」

一刀は璃々に手を引かれながら歩くのだった。

蜀軍喫茶店『はわわカフェ』

愛紗「いらっしゃいませご主人様!」

キッ!

愛紗は客を睨みつける。

客「ひぃっ！？」

愛紗に睨まれて客は大慌てで逃げ出していった。

桃香「ダメだよ愛紗ちゃん、お客さんを怖がらせちゃ♪そんなんじゃお嫁さんになれないよ」

鈴々「愛紗は元から顔が怖いから逃げられてしまうのだ」

義姉妹にはっきり言われた愛紗は

愛紗「ほっといてください！大体私は恋なんてする気はありませんから」

そんなやりとりをするなか、

雛里「大変でしゅ！？」

雛里が慌てて入ってきた。

桃香「どうしたの雛里ちゃん？」

桃香が聞くと雛里は

雛里「あわわ！！朱里ちゃんが掃除してたらつまずいて手首をうっちゃったんでしゅ！？」

桃香・愛紗・鈴々『なんだって（なのだ）！！？』

三人は驚いた。

その頃、一刀達は

図書館

璃々「絵本ありますか？」

璃々が聞くと

穏「絵本は置いてませんね～、大人向けの本しかありませんから子供は読んじゃダメです～」

読書部部長の陸遜穏は部員の于吉と共に図書館で本の販売をしていた。

于吉「北郷も一冊どうですか？私と左慈の熱いラブの本ですよ」

ちなみに左慈には許可をとっていない。

一刀「俺はそういうのはちょっと！？」

一刀は素直に断った。

すると突然

穏「ハァハァ、于吉さんその本あとで読ましてくださいね」

興奮寸前の穏が迫っていた。

一刀「璃々ちゃん、ここは何気無く危ないから他に行こうね」

璃々「？」

一刀は璃々を抱えて図書館から出ていった。

于吉「（あれっ！？北郷がここにいるということはうちのクラスの出し物はどうなったんでしょうか？）」

その頃、みんなが去った漢組の教室では

及川「いらっしゃいやでお客はん！」

ヒュ～

誰もいない教室で及川は一人で接客の練習をしていた。

及川「たとえみんながいなくてもわい一人でお客を集めてみんなを見返したるで！」

学園祭に燃える及川だが真の目的は

及川「（学園祭に来たかわいい女の子を彼女にするんや！）」

下心が見え見えだった。

一方桃香達は

蜀軍喫茶店

桃香「困ったなー！？翠ちゃんとタンポポちゃんは馬術部だし、焔耶ちゃんは料理できないし、雛里ちゃんは朱里ちゃんを保健室に連れていってるし、星ちゃんはいつの間にかいないし！？」

桃香は人手の足りなさに悩んでいた。

愛紗「こうなれば私が！」

愛紗が名乗り出るが

鈴々「愛紗がやるくらいなら桃香お姉ちゃんや鈴々が料理した方が危険は少ないのだ」

桃香「そうだよね、私や鈴々ちゃんがした方がまだマシだよね～」

愛紗の料理を口にした二人だからこそ言える台詞であった。

義姉妹にきつく言われた愛紗は

愛紗「どうせ私の料理は毒ですよ」

すっかりすねてしまった。

そんな時、

璃々「おじゃましま～す♪」

一刀「どうも」

一刀と璃々が入ってきた。

桃香「いらっしゃいませご主人さ…」

振り向いた桃香が一刀と目が合った瞬間

桃香「ハフンッ／／／」

桃香は昨日の一刀とのキスを思い出して顔を赤くしてしまった。

一刀「えと…」

一刀も思い出して戸惑っていると

チャキンッ！

愛紗「また貴様は姉上にキスしに来たのか」

愛紗は一刀の首元に青龍偃月刀を突きつけた。

一刀「あの…偃月刀をしまってくれない！？」

一刀が言うと

鈴々「そうだ！お兄ちゃんは料理がうまいからお店を手伝ってほしいのだ♪」

鈴々が言うと

一刀「えっ！？それは困るよ！？」

一刀が断ろうとすると

鈴々「ダメなのかなのだ？」

キュウ～ン。

鈴々がまるで捨てられたチワワのごとく一刀を見つめると

見つめられた一刀は

一刀「うっ！？」

男のたのみなら断れる一刀も子供と女の子のたのみは断れないのであった。

一刀「わかったよ、手伝うからさ」

引き受けてしまう一刀であった。

そして数時間後、

わいわいがやがや！

客が集まって店は繁盛していた。

一刀「一番テーブルにオムライス置いて！」

桃香「わかりました」

愛紗「五番テーブルにチャーハン注文です」

一刀「了解！」

鈴々「こちらのテーブルにラーメン頼むのだ♪」

一刀「了解…って鈴々も働け！」

鈴々「にゃはっ♪バレたのだ」

一刀の料理で店は繁盛していた。

一刀「これくらいでいいだろう、疲れたしちょっと休憩するよ」

スッ！

一刀が椅子に座ると

ヌッ！ヌッ！ヌッ！

一刀に三つの影が近寄った。

華琳「まさか一刀は蜀だけ手伝うなんてことはしないわよね～」

蓮華「まさか、どの店も同じくらい忙しいのだからそんなこと生徒会長がするはずないじゃない」

月「あのぅ、手伝ってくれるとうれしいのですが」

当然、一刀が断れるはずもなく

一刀「わかりましたよ！」

引き受けてしまう一刀であった。

そして夜になり、学園祭終盤

一刀「今日は疲れた～！？」

さすがの一刀も体力の限界がきて屋上で休んでいた。

璃々「お兄ちゃん大丈夫？」

璃々に聞かれた一刀は

一刀「俺なら大丈夫だよ！それより一緒にまわれなくてゴメンね」

一刀が言うと璃々は

璃々「いいの、今日一日お兄ちゃんと一緒にいられたから♪だから安心して寝てて、璃々がお水持ってきてあげるね」

ダッ！

璃々は水を取りに飛び出していった。

一刀「優しい子だな璃々ちゃんは、それじゃあお言葉に甘えて眠ろうかね」

一刀はそのまま寝てしまった。

ギィッ。

そんな時、屋上の扉が開いて蓮華が入ってきた。

蓮華「ここにいたのね一刀、いないから心配したわ！」

しかしいくら待っても返事がこないので蓮華が一刀の様子を見てみると

一刀「ＺＺＺ～」

一刀は寝ていた。

蓮華「あきれたわねこんなところで眠るなんて」

蓮華は言うが安らかに眠る一刀の寝顔を見ると

蓮華「寝顔はとってもかわいいのね♪／／／」

一刀の寝顔にみとれた蓮華は

蓮華「昼間は失礼な態度をとってごめんなさいね。そのかわりこれで…」

蓮華は寝ている一刀の唇に自分の唇を近付けると

チュッ！。

軽くキスをした。

そしてキスをした直後

バタンッ！

屋上の扉が開いて

桃香「やっと見付けたよ～！」

華琳「困った子ね」

璃々「お水持ってきたよ～♪」

扉が開くと同時に蓮華は一刀の側から離れたので間一髪くっついていたところは見られていなかった。

そしてみんなが来ると一刀は目を覚ました。

一刀「あれっ？みんな何でここに？」

一刀が聞くと

華琳「何でって、あなたは知らないようだけども…」

華琳が言おうとすると

ドッカ～ン！！。

一刀の後ろから花火がうち上がった。

桃香「毎年学園に盛大な花火がうち上がるんですよ♪」

一刀「へぇ〜、すごいなぁ！」

実は一刀には内緒にしていたがこの花火には一つの伝説があった。

それは男女がこの花火を見るとカップルになれるというものだった。

一刀「あれっ？そういえば何か忘れてるような？まぁ別にいいか♪」

一刀は確かに忘れていたことが一つあった。それは…

及川「ご注文は？」

いまだ及川が一人で接客の練習をしていることであった。

及川「お客はまだかいな？」

及川はまだ学園祭が終ったことに気が付いていなかった。

２４時間目「聖フランチェスカ学園学園祭その４」（後書き）

学園祭売り上げランキング

１、蜀軍
　　魏軍
　　呉軍
　　董卓軍
５、役萬姉妹
６、白蓮の店
７、南蛮軍
８、袁術軍
・　・　・
最下位、漢組
　　袁紹軍　０円

25時間目「女おとしの転校生」（前書き）

最近主人公なのに一刀が後半しか出なかったり、ひどい目に合うオチが多いですがこれも面白くするためです。（一刀ファンの人にはすみません）

25時間目「女おとしの転校生」

ある日のこと

キキィッ！。

聖フランチェスカ学園前に一台のリムジンが止まった。

？「弟よ！ここが今日から俺達の通う学園だ　」

？「ここにはかわいい女の子がたくさんいるって聞いたから楽しみだね兄さん♪　」

？「その通りだとも弟よ、この学園の女子全てを我らが兄弟のとりこにするのだ！　」

漢組教室

卑弥呼「今日からこのクラスに転校してきたものが二人おる　」

ザワザワッ

及川「先生！男かいな女ですかいな？　」

及川が言うと

漢組生徒『ギャハハッ！　』

教室中に笑いが溢れた。

及川「何でみんな笑うんや？」

及川が不思議がっていると

華佗「馬鹿かよお前は！このクラスは男子限定教室じゃないか！女子が転校しに来るわけないだろ」

華佗に言われた及川は

及川「すっかり忘れてたわ！？」

ギャハハッ！

また笑いが溢れだした。

卑弥呼「オッホン！では入ってきたまえ！」

卑弥呼が言うと

ガラッ！

教室の扉が開いて中に入ってきたのは

ウィ～ン。ウィ～ン。

ロボットが二体だった。

及川「転校生はロボットかいな！？」

及川が驚いていると

左慈「そんなわけないだろ!?」

左慈が突っ込んだ。

卑弥呼「一体それは何のつもりだ?」

卑弥呼が転校生に聞くと

?「これは失敬、この教室の臭いがあまりにも不潔だったので防臭スーツを着てるんですよ」

転校生が答えると

卑弥呼「学園ではそんなものは脱ぐように!」

卑弥呼に言われた転校生は

?「わかりましたよ!弟よ、脱ぐぞ」

?「仕方ないね兄さん」

スルッ。スルッ。

二人はスーツを脱ぐと

玄徳「聖ローズマリー学園から来た双子の兄の偽田玄徳(にせだげんとく)です!」

天空「同じく双子の弟の偽田天空(てんくう)です!」

バァンッ！

防臭スーツを脱いだ二人は漢組の生徒と比べたら月とすっぽんというくらいの差がある美男子だった。（聖ローズマリー学園とはイケメンばかりの通う上品学園である。）

教室を見渡した二人は

玄徳「見ろよ弟よ、あれがブサメンというものだぞ！」

天空「ホントだね兄さん！今まで転校し続けてきたけどこれほどひどいブサメンはいなかったよね」

イケメン二人に好き勝手言われて黙る漢組の生徒ではなかった。

漢組生徒１「この野郎！」

漢組生徒２「イケメンだからってなめんじゃねぇぞ！！」

漢組の華佗達を除く生徒が一斉に飛びかかる。

しかし避けようとしない二人は

玄徳「（天空、あれをしてやれ！）」

天空「（わかったよ兄さん）」

スッ！

天空が男子に向けて手をかざすと

漢組生徒1「うっ!?」

漢組生徒2「体が!?」

バタバタッ!

漢組の生徒達は次々と倒れていった。

及川「なんやあいつ!?妖術使いかいな!?」

及川が驚いていると

華佗「違う!薬の一種で眠らせただけだ」

華佗だけが原因に気が付いた。

玄徳「ほぅ、弟の薬技に気付くとはなかなかやるねきみ」

玄徳が言うと

華佗「俺は医者の息子なんでな薬に関しては詳しいほうなんだよ」

華佗が言うと玄徳達は

玄徳「弟よ、この学園の女子を全員ものにするには厄介な奴らが数人いるから時間がかかるな」

天空「僕も感じるよ兄さん、このクラスには厄介なのが3~4人は

いるね　」

二人が言う3～4人。それはすなわち、華佗・左慈・于吉そして一刀！…って一刀がいなかった。

及川「かずピーは今日は休みかいな？　」

及川が聞くと

華佗「一刀なら風邪だから病院に行ってから来るそうだぞ　」

そのようであった。

及川「なぁにっ！かずピーの代わりにわいが！　」

及川は偽田兄弟に挑みかかるが

玄徳「ブサメンは黙ってろ！　」

ドカッ！

軽くやられてしまった。

天空「兄さん、こんな男臭い教室はほっといてこれからガールハントに行こうよ♪　」

天空が言うと

玄徳「それもそうだな弟よ！ではガールハントに出発だ！　」

ダダッ！

二人は教室を出ていった。

二人が去った後、

卑弥呼「生徒が４人しかいないので今日は自習にする！」

また卑弥呼の勝手な判断で授業が潰れてしまった。

及川「授業潰れてよかったけどあいつら一体何者なんや？」

及川が不思議がっていると

于吉「今、調べましたらあの二人はちょっとした有名人ですよ」

華佗・左慈・及川は于吉の話を聞いてみる。

于吉「あの二人はローズマリー学園以外にも転校し続けてるんですよ！それも転勤や退学でなく学園の女子全てをとりこにする度に転校し続けている学園の女子荒らしです」

于吉の話を聞いた及川は

及川「それって大変やんか！？あいつらこの学園の女子をとりこにしに来たんやな！」

及川は立ち上がると

及川「かずピーがおらん今、学園の平和はこの及川祐が救ったる！

」

及川は教室を出ようとするが

華佗「やめとけ及川！」

華佗に止められた。

及川「止めるなや！学園の平和は…」

華佗「そんな事しなくてもあいつらは勝手に自滅するさ」

華佗の言葉に及川は？を浮かべた。

及川「何でなん？」

及川が聞くと

華佗「この学園の女子は一味も二味も違うからな」

及川はまだ華佗の言う事が理解できていなかった。

一方、偽田兄弟は

玄徳「年上の3年には興味ないからな、俺は2年を攻めるから弟は1年を攻めてくれ」

天空「わかったよ兄さん！」

二人はそれぞれ分かれていった。ちなみに二人は2年生である。

2年側

玄徳「やはり女の子は同い年にかぎるな！さてと、どの娘から狙おうかな？」

玄徳がターゲットを探していると

桂花「あぁ華琳様♪今日もあなたは美しい」

華琳を遠く眺めている桂花を見付けた。

玄徳「そこの猫耳フードのかわいこちゃん！俺と遊ばない？」

ポンッ！

玄徳が桂花の肩に手を置いた瞬間！

桂花「キャー！？犯されるー！！」

バッチーン！。

桂花のビンタを玄徳は喰らってしまった。

玄徳「きみ何するの…！？」

玄徳が聞くと

桂花「この全身精液変態白濁はらませ男！私に触れていいのは華琳様だけなのよこの馬鹿っ！」

言えるだけの悪口を言って桂花は去っていった。

桂花に散々言われた玄徳は

玄徳「この偽田玄徳。産まれて17年、女の子にあんなこと言われたのは初めてだ!?」

ショックをうけていた。

そんな玄徳の前に

穏「そんなところで何してるんですか〜?」

穏が現れた。穏を見た玄徳はさっきのショックはどこへやら?すぐに立ち直った。

玄徳「なんにもないよ彼女♪それより君は何するところかな?」

玄徳が聞くと

穏「私は〜こっそり借りてきた初めて読む本を読もうと思いまして〜」

穏が言うと

玄徳「本読みなら俺が付き合ってあげるよ」

穏「それはありがとうございます〜♪一緒に読みましょう」

この後、何が起きたかはしっての通りである。

時は少し戻り、1年側

天空「やはり俺は年下の女の子を調教するのが一番だぜ！」

好みが違う兄弟だった。

天空が女の子を探していると

月「一刀さんはまだ来てないか」

歩いている月を見付けた。

天空「かわいこちゃん、僕と遊ばない？」

ポンッ！

天空の手が月の肩に置かれた瞬間！

詠「月に何してるのよ馬鹿チ○コ！！！」

ドグボッ！。

突然現れた詠に膝蹴りを喰らう天空であった。

詠「月！あんな痴漢に近寄っちゃダメよ！」

月「あの人大丈夫かな？」

天空はそのまま置き去りにされた。

天空「この美しい僕が…馬鹿チ〇コだなんて！？」

天空が倒れていると

美以「んにゃっ？」

美以に見付かった。

美以「（くんくんっ）お前からいい臭いがするのにゃ！」

その臭いは天空の持つ薬の材料のマタタビの臭いだった。

すると美以は

美以「決めたのにゃ！こいつをおもちゃにするのにゃ～！」

天空「えっ！？」

天空は美以に襲われた。

そして時は進み、食堂

玄徳「はぁはぁ！？ここまで逃げてくれば！？」

興奮した穏から玄徳は何とか逃げ出した。

玄徳が逃げた食堂に

天空「兄さ～ん！？」

美以にボロボロにされた天空が現れた。

天空「この学園は怖いし転校しようよ！？」

玄徳「なに弱音をはいてるんだ！せめて一人でもとりこにしなければ！」

玄徳が辺りを見渡すと

桃香「一刀君が来るまで食堂で待ってようよ」

華琳「そうね、せっかく作ったお弁当を無駄にするわけにはいかないし」

蓮華「すぐ来ることを祈ろう」

体がボロボロになった偽田兄弟の目にうつったのは桃香達であった。

玄徳「見ろよ弟よ！この学園にはまだあんなかわいこちゃんがいるんだぞ」

天空「本当だね兄さん、神はまだ僕達を見捨てていなかったんだね！」

そして二人が桃香達に飛び付こうとすると

ガラッ！

食堂の扉が開き

一刀「遅くなってすまないな！」

一刀が入ってきた。

一刀が入ってきた瞬間

桃香・華琳・蓮華『一刀（くん）！』

ドドドッー！！。

ドカンッ！

三人は飛び出そうとした偽田兄弟をはね飛ばして一刀に近付いていった。

飛ばされた二人は

玄徳「なんなんだあの男は！！俺達より目立ちやがって許せん！弟よ、あれを奴にふりかけるんだ！」

天空「わかったよ兄さん！」

バババッ！

天空がふりかけた薬は男にのみ効く女に嫌われる薬である。

それが一刀にまかれたが

一刀「何だこの粉は？」

ムズムズ

薬が一刀の鼻にかかると風邪の一刀は

一刀「へっ…へっ…へくしょいっ！」

盛大なくしゃみをした。

ピュ～

一刀のくしゃみに飛ばされた薬は

スゥ～

玄徳「ゲッ！？薬がこっちに！？」

天空「どうしよう兄さん！？」

薬は偽田兄弟の方に飛び散ってしまった。

その直後

桃香「何だかあの二人嫌な気がしませんか？」

蓮華「確かに嫌な気がするな」

華琳「女の子に嫌な気を感じさせる男は最低よ！」

ズッキューーンッ！！

桃香達に散々言われた偽田兄弟は

玄徳「もう女の子なんてこりごりだー！」

天空「待ってよ兄さん！？」

二人は泣きながら逃げ出していった。

一刀「あの二人誰なんだ？」

その後、学園から逃げ出した偽田兄弟はその日のうちに転校し、

あたらしく男子校に転校したという。

25時間目「女おとしの転校生」（後書き）

今回出てきた双子の偽田兄弟のモデルは玄徳がアニメに出てきた偽劉備。弟の天空は西森の前作に出てきた偽の御遣いがモデルです。

（どっちも似たようなものですけどね）

２６時間目「学園の教師達」（前書き）

今回は普段目立たない教師達にスポットを当ててみました。

26時間目「学園の教師達」

聖フランチェスカ学園職員室

漢組担任の卑弥呼が職員室から出ようとすると

冥琳「ちょっと待ってください卑弥呼先生、少しお話がありますのでよろしいですか？」

1年A組担任の周瑜冥琳に呼び止められた。

冥琳の後ろを見てみると

2年A組担任の黄蓋祭。
2年B組担任の厳顔桔梗。
2年C組担任の何進愛。
1年B組担任の管輅占。
1年C組担任の水鏡洋子。

保健医の紫苑を除くフランチェスカ学園の1、2年生の教師が並んでいた。

卑弥呼「皆さん揃って何事ですかな？」

卑弥呼が訪ねると

冥琳「実は漢組の授業が他のクラスより遅れているんですよ！」

最近漢組は騒動により自習が多いからである。

冥琳「このままでは夏期テストの問題がつくれませんので困るんです！」

夏期テストは夏休み前に行われるテストで範囲は全クラス決まっている（ちなみに学園で総合成績がワースト5位までの者は夏休みに補習がある）

水鏡「漢組は3学年まとまっていますけどそれでもテスト範囲までとどいてませんしね」

祭「簡単に言わせてもらうと授業する速さが遅いのじゃ！」

何進「一クラスだけでも授業が遅れては他の生徒に対してしめしがつかないからのぅ」

卑弥呼「ではどうすればいいのです？」

卑弥呼が聞くと

桔梗「幸いわしらのクラスはテスト範囲まで授業が進んでおるから」

管輅「これからテストまでの日まで私達が教えますよ」

冥琳「ということです」

話を聞いた卑弥呼は

卑弥呼「仕方がないのぅ、我輩の授業が遅れているのは事実じゃし、

お願いします」

こうして漢組の授業はテスト範囲まで他の先生が受け持つことになった。

漢組教室

及川「卑弥呼はまだ来てないんか？」

一刀「もうとっくに授業始まる時間なのにな」

漢組はいつも通りみんなが教室で騒いでいた。

于吉「また今日も自習ですかね？」

左慈「そりゃいいぜ、ゆっくりと寝られるからな！」

華佗「おいおい、学生の本業は勉強だろうが！？」

華佗は呆れていた。

及川「いいやんか別に、自習になれば試験範囲まで勉強すすまへんからこのクラスはテスト範囲が短くなるしさ♪」

及川が言うと

桔梗「そうは問屋がおろさんぞ！」

ガラッ！。

教室の扉が開いて桔梗が入ってきた。

一刀「あれっ？今日は卑弥呼じゃないのかな？」

一刀は不思議がると

及川「別にええやんか！あんなバケモンより爆乳美人の桔梗先生の方が授業に気合いが入るで♪」

及川が浮かれていると

桔梗「ほう、気合いが入るとな、ならば」

スッ！

桔梗は鞄からプリントを取り出した。

桔梗「今からテストを行う！３０点以下の者は罰を与える！３０分で終らせるように！」

桔梗が言うと

漢組生徒達『え～！？』

生徒全員からブーイングが飛び出した。

桔梗「黙らんか！さっさとプリントを配らんか！」

スッ！スッ！スッ！

そしてプリントが配られたので見てみると

華佗「このプリントを３０分でやれだなんて無茶苦茶な！？」

そのテストは普段いい成績をとっている華佗や于吉でも全部書くのに１時間はかかるものだった。

しかし桔梗は

桔梗「人間死ぬ気になれば何だって出来るんじゃ！文句言う暇があるならさっさとやらんか！」

ビシッ！

そしてテストが開始された。

一刀「（わっかんねーな！？）」

華佗「（これは俺でもやばいかもしれないぞ！？）」

及川「（罰決定やな）」

左慈「（ふざけるんじゃねぇぞ！？）」

于吉「（罰を受けていたら左慈を観察する時間がなくなってしまうので早く終らせねば！？）」

そして３０分後

桔梗「止めい！」

ドッカーン！！。

桔梗は得物の豪天砲の引金を引いた。

一刀「そんなものを引かないでくださいよ！」

桔梗「男がガタガタ言うでない！さっさとプリントを回収せんか！」

そしてプリントが回収され、採点が終わると

桔梗「お主らは馬鹿か！採点したら最高が６５点で最低が２点じゃと！うちのクラスの方がまだいい点とれるわ！」

ちなみに３０以下には及川と左慈が入っていた。

一刀「俺はギリギリ３２点か！？」

華佗「俺が５５点とはな」

于吉「しまった！？６５点とらずに間違っていれば左慈と一緒に罰を受けてたのに！？」

左慈「ちくしょう！１５点だと！？」

及川「わいは２点か、まぁ予想通りやな」

みんながテストの採点を自己評価していると

桔梗「たわけもの共が！！！　」

ゴンッ。ゴンッ。ゴンッ。

桔梗はみんなにゲンコツをおみまいした。

桔梗「連帯責任でみんなに罰じゃ！宿題出すから明日までにするようにな！　」

バタンッ！

桔梗は怒って教室から出ていった。

一刀「ギリギリだったのに！？　」

華佗「連帯責任とは！？　」

及川「これなら全員が手を抜いた方がよかったな　」

その場合ゲンコツだけではすまなかったと思うが

そして二時間目

管輅「次は私が担当しますね　」

この時、生徒達は安心していた。何故なら管輅先生は学園でも水鏡、紫苑に続く優しい先生だからである。しかしそれが間違いだった。

スッ！

管輅がチョークを手にとった瞬間！

管輅「オラオラてめえら！学生はしっかり勉強しやがれ！」

管輅の性格が１８０度変わってしまった。

一刀「あの先生ってあんな性格なの！？」

華佗「俺もあんな先生は始めてみるぞ！？」

一刀と華佗がひそひそ話をしていると

管輅「そこの奴！話するんじゃねぇ！ぶっ殺されてえのか！」

ホントにこの人が１年の担任でいいのかよ

この授業は授業が終わるまで続き、授業終了後

管輅「てめえらもっと勉強しやがれよ！」

スッ！

管輅がチョークを机に置いた瞬間

管輅「それでは授業を終ります」

ズコッ！

管輅の性格が戻ったことにみんなは驚き全員がずっこけた。

管輅「皆さんずっこけるなんて授業態度が悪いですよ！」

管輅は出ていった。

及川「このまま教室にいたら命がいくつあっても足りん！？わいは早退させてもらうで！？」

及川が逃げ出そうとすると

祭「どこ行く気じゃい！」

ガシッ

及川は入ってきた祭に襟首を掴まれた。

及川「何するんすか！？人をアメショー（アメリカンショートヘア）みたいに！？」

祭「何小さいおじさんみたいなことを言っとるんじゃ！授業を始めるから席につかんか！」

祭の授業は桔梗と同じく豪快的な授業であった。

祭「この馬鹿者共が！こんな問題が解けなくてどうする気じゃ！宿題出すから明日までにやるように忘れたら連帯責任でみんなに宿題を倍出すからな！」

祭が教室を出ると

ササッ！

生徒達は一ヶ所に集まって会議を始めた。

華佗「これ以上のスパルタ授業には耐えきれん！」

左慈「残りの教師のメンツを考えても肉体派はいないはず！？」

于吉「次の授業が始まる前に何とか逃げ出す手を考えましょう！？」

この時、珍しく全員の気持ちが一致した。

例えるなら今なら全員がフュージョンを一発で成功するくらいの一致である。

そして授業が始まる。

何進「では始める…」

次の先生の何進が入ってきたが

シ～ン。

教室には誰もいなかった。

その頃、漢組の生徒一同は

及川「全員で固まってたら見付かってしまうから三手に分かれようや！？」

袁兵兄「ならば俺達はこっちに！」

漢組1年「俺らはこっちに！」

一刀「俺達はこっちに行こうぜ！」

及川「みんな！無事にまた会おうやないか！」

ダダッー！

漢組生徒は三手に分かれて逃げていた。

袁兵兄「ここまで来れば！？」

袁兵兄弟率いる3年が安心していると

ボコッ！

3年『うわっー！！？』

3年生は全員落とし穴に落ち、

1年『うわっー！！？』

1年生も同じように落ちていた。

一方、一刀率いる2年は

及川「放してやみんな！わいは行くんや！」

及川の目指す先には

女「あっは～ん。うっふ～ん」

色っぽい女の声が聞こえていた。

一刀「馬鹿野郎！絶対に罠だろうが！？」

華佗「一人で行くのは構わんが俺達を巻き込むな！」

左慈「早く逃げなきゃいけないだろうが！」

于吉「しつこい人は嫌われますよ！？」

部屋に入ろうとする及川を一刀・華佗・左慈・于吉が４人がかりで引き止めていた。

及川「例え罠だとしてもわいは女の声がするなら地獄でも行くんやー！」

ドドッー！！。

及川のどこにこんな力があるのか？及川は４人を巻き込んで部屋に入っていった。

一刀達『うわっー！？』

ガラッ！

及川「かわいこちゃんどこや？」

及川が中に入るとそこにいたのは

冥琳「こんな単純な手に引っ掛かるとは男とは馬鹿な奴が多いな！！！」

頭に鬼の角をはやした冥琳だった。

しばらくして

漢組生徒は全員捕まり、お説教の後、冥琳の授業をうけるのであった。（何進の授業は逃げている間に時間が過ぎた）

そしてこの日の最後の授業

水鏡「皆さん、そんなにくたびれてどうしましたか？」

最後の水鏡先生の授業をうける時には全員体力と気力が尽きてダウンしていた。

そんな日が一週間は続き、一週間後

桔梗「何とかテスト範囲までは授業を進めることができたな！？」

祭「生徒に教えるのがこんなに大変じゃとは久々に感じるわい！？」

管輅「疲れますね」

何進「あいつら、わしの授業前になると必ず逃げ出しおって！」

水鏡「あの子達を毎日教えている卑弥呼先生はすごいですね!?」

冥琳「あいつらの相手は大変だな!?」

漢組生徒は隙があれば逃げ出そうとし、捕まって説教をうけるという無限ループを一週間続けていた。さすがの教師達も漢組の相手は大変だと話していると

桔梗「確かにあいつらはわしらじゃと逃げ出すのに何で卑弥呼からは逃げださないのじゃろう?」

確かに桔梗の言う通りであるがその真実は…

一刀「卑弥呼の授業は逃げたくても逃げられないよな!?」

華佗「確かに、はじめの授業の時に『逃げ出すような奴がいたら二度と逃げられないように我輩のあつ~いキスをするぞい♪』とか言ってたからな!?」

及川「あんなバケモノにキスされたくないで!」

そういうことを言われたので漢組の生徒は逃げ出すわけにはいかなかった。

27時間目「一刀の里帰り」（前書き）

今回は送られたオリキャラが登場します。

27時間目「一刀の里帰り」

夏期テストも終り、聖フランチェスカ学園は夏休みに入った。
漢文が赤点だったものの、一刀は何とか補習を免れた（まぬがれた）。

男子寮前

ズラリッ！

男子寮前には桃香・華琳・蓮華が並んでいた。

桃香「（一刀くんは私とプールに行くんだもんね♪）」

華琳「（一刀は私と豪華クルーザーでバカンスを過ごすのよ♪）」

蓮華「（うちの親に一刀を紹介しなくては、別に付き合っているわけではないがな！／／／）」

そして三人は一刀の部屋の前に立つと

ガチャリッ

月からもらった合鍵で扉を開けて中に入った。

桃香・華琳・蓮華『一刀（くん）いる～？』

三人が部屋に入ると

ガラーン。

部屋の中には誰もいなかった。

桃香「一刀くんどこにいるの？」

パサッ！。

座布団をめくる桃香

華琳・蓮華『そんなとこにいるはずないでしょ！』

桃香の行動に突っ込む二人だった。

男子寮・及川の部屋

「ねぇ、こっちに来てもいいのよ」

及川「やっぱり夏は一人でＡＶ鑑賞やな～♪」

及川は補習のため遠くにいけないのだった。

ドンドンッ！

及川がＡＶ鑑賞していると玄関を叩く音が聞こえて

及川「はいはい、誰ですか？」

及川はテレビをそのままにして玄関に向かっていった。

ガチャリッ

玄関を開けると

桃香・華琳・蓮華『こんばんは』

桃香達が現れたのを見た及川は

及川「みんな揃ってわいに会いに来てくれたんか～♪」

ピョンッ！。

及川が飛びかかったが

ジャキンッ！

彼女達に得物を向けられると

及川「何か用？」

飛びかかるのをやめた。

華琳「短刀直入に聞くわ、一刀はどこにいるの？」

華琳に聞かれた及川は

及川「かずピーなら昨日から実家の九州に帰ってるで、華佗も実家の病院の手伝いやし、左慈は修行で山籠もり、于吉は左慈について行ったしな、暇なのは補習を受けてるわいだけ…」

及川が桃香達を見てみるとすでに桃香達はいなかった。

及川「何しに来たんやろか？」

及川が？を浮かべていると

及川「何やこれは？」

下に書き置きがあったので拾って見てみると

『くだらないもの見てるんじゃないわよこの変態！』

そこで及川は気が付いた。

テレビをつけっぱなしで玄関に来たことを！

前にも説明したがこの部屋は畳二畳しかないためテレビをつけたら玄関から丸見えになるのだ。

及川「しまった！？」

これ以降、更に及川を嫌う女子が増えたという。

及川はおいといて、桃香達はというと

桃香「早く私達も九州に行かないと！？」

蓮華「落ち着きなさいよ桃香！今から行っても着くのは明日以降よ！」

二人が話し合っていると

華琳「その心配はないわ、さっきお父様に電話して自家用ジェットを用意するよう伝えたから今から行けば一刀に追い付くわよ」

華琳がいうと

桃香「さすが曹操グループの令嬢!?」

蓮華「行動が早いわね!?」

二人が驚いていると

華琳「折角だから行ける人を誘って一刀を驚かしちゃいましょ♪」

小悪魔な華琳だった。

そんなことを知らずに一刀は飛行機の中で

一刀「オエ～～!?」

盛大に吐いていた。

鹿児島の空港

一刀「ようやく着いたぜ!」

一刀は飛行機から降りると体調が回復していた。

一刀「それじゃ、実家に行くとするか！」

一刀は実家に向けて歩き出した。

一刀が着いてから３０分後

ゴゴゴッー！！。

一台のジェット機が空港に着陸した。

華琳「全く！みんなが来るのが遅いから３０分も遅れちゃったじゃないの！」

桃香「だってねぇ、もしかしたら一刀くんの両親に会えるかもしれないから準備に時間がかかっちゃって♪」

蓮華「先に一刀の親に会ってもいいのだろうか！？」

結局補習を受けている麗羽達と一部の生徒を除いてついてきてしまった。

華琳「早いとこ一刀を探さないとね！」

その頃、一刀は

一刀「（ブルッ！？）急に寒気が！？」

何か嫌な予感を感じていた。

一刀が実家を目指して歩いていると

？「ようっ！一刀じゃないか！」

急に呼び止められたので一刀が声のする方を見ると

一刀「蒼魔！鳳賀！九龍！久しぶりだな！」

そこには一刀の九州時代の同級生がいた。

・氷室蒼魔（ひむろそうま）

一刀の同級生で武力は一刀と互角並。銀髪の青眼のツンデレで家族思い。

・李鳥鳳賀（りちょうほうが）

一刀の同級生で軍師並の頭のキレを持ち、武力もそれなりで気弾を放つことができる。鳥のように身軽な青髪黄目の読書眼鏡

・骸亜九龍（がいあクーロン）

一刀の同級生でワイルドな性格。武力は４人の中で一番だが頭が悪い暴れん坊。赤髪赤目の大飯食らい。

一刀「みんな元気だな」

蒼魔「一刀も元気そうでよかったぜ」

鳳賀「おばさんから話は聞いてましたけどね」

九龍「人間、原稿が一番だしな！」

鳳賀「それを言うなら『健康が一番』でしょう」

九龍「そうとも言う！」

どこかの五才児みたいな会話をするのであった。

蒼魔「ここじゃなんだし、近くの公園に行こうぜ！」

４人は近くの公園に移動した。

そしてそれを偶然桃香達が見ていた。

華琳「あの人達は誰かしら？」

蓮華「おおかた一刀の同級生だろうな」

桃香「私達も後についてみようよ♪」

そして彼女達も後についていった。

公園

蒼魔「懐かしい顔が揃ったな！」

鳳賀「一刀が転校してからですから半年近くになりますね」

九龍「俺は中学の時が一番楽しかった♪」

一刀「ホントだよな！よく４人で馬鹿なことしたっけ」

ここで話は中学時代に遡る（さかのぼる）。

千頭中学

一刀「これでいいか？」

蒼魔「もうちょい濃い方がいいな」

鳳賀「早くしないと人が来ますよ！？」

九龍「やれば歴史に残るな！」

彼らがしていることは学園長の銅像に落書きをしているのだった。

先生「あっ！？お前らそこで何してるんだ！」

一刀「やべっ！？見付かった！？」

蒼魔「逃げるぞ！？」

ダダッ！

この後、４人は結局捕まってしまいお説教をうけるのだった。

一刀「顔の寂しい学園長に髭を書いて何が悪いんだか？」

蒼魔「俺達からのささやかなプレゼントだってのによ！」

鳳賀「そのおかげで罰として掃除が終わるまで帰してくれないだなんて少し横暴ですね」

九龍「でもまだ相手が飛琳先生だからよかったな！」

・神龍飛琳（しんりゅうフェイリン）

一刀達の担任でいたずら好きの優しい古文教師。自然が好きな緑髪の赤目美男子。

一刀「掃除なんてかったるいし、サボってゲーセン行かねえ？」

蒼魔・鳳賀・九龍『行こう行こう！』

しかしこの後、門からこっそり出るところを見付かってしまい罰として宿題が増えるのであった。

この時の一刀は自分でも認める悪戯小僧であった。

職員室

教頭「飛琳先生！あの悪ガキ共をほっといていいんですか！普通なら退学級のことをしているのにあなたが頭を下げているから留めてるんですよ！」

教頭が激しく説教すると

飛琳「待って下さいよ教頭、彼らはイタズラはしますが同時にいいこともしているんですよ」

実は先生は知っていた。

最近ここらで暴れる不良が一刀達の手で潰されていることを

そんな毎日が続き、時は進んで高一の冬休み

蒼魔「マジかよ一刀!?東京の高校から推薦入学だって!?」

一刀「あぁマジだぜ!東京の学園長から推薦状をもらったんだ」

一刀が推薦状を取り出すと

九龍「寂しくなるな」

鳳賀「これで千頭四天王も千頭トリオになりますね」

二人が言うと

蒼魔「ふざけるんじゃねえぞ!!!」

蒼魔が怒鳴り出した。

蒼魔「一刀!お前中学の卒業式の日に言ったよな!『俺達4人は高校卒業するまで一緒だな!』って言ったじゃねぇか!」

一刀「それは!?」

蒼魔「それにお前と俺の対戦記録は互いに1勝1敗1分けじゃないか!俺は許さねぇぞ!」

蒼魔が怒鳴り終ると

一刀「わかったよ、ならば千頭学園名物の『我沈誇（ガチンコ）』で決着つけようぜ！」

蒼魔「我沈誇か、それならいいぜ！」

千頭学園名物『我沈誇』とは

己の誇りを賭けて真剣勝負することである。負けた方は勝った方の言うことを素直に聞かなくてはならないのだ。

一刀「俺が勝ったら東京に行くぜ！」

蒼魔「俺が勝ったら転校は無しだからな！」

鳳賀「私達は観戦ですね！」

九龍「んだ」

二人の準備が済み、二人は得物を抜いて構える。

一刀「行くぜ蒼魔！」

蒼魔「行かせはしないぜ一刀！」

ガキンッ！。

千頭高校の屋上で始まった戦いは長く続き、２時間後

カキンッ！

蒼魔の得物の蒼絶氷雷剣が一刀の得物によって弾かれた。

この瞬間、決着がついて

鳳賀「勝者、一刀！」

一刀の勝ちとなった。

負けた蒼魔は

蒼魔「くそっ！？俺の敗けだ！東京にでもどこでも行きやがれ！」

蒼魔がムキになって言うと

一刀「聞いてくれ蒼魔、俺が東京に行くのは自分の修行のためだ」

一刀が語り始めた。

一刀「これから行く東京の聖フランチェスカ学園には強い奴がたくさんいるって聞く、俺はもっと強くなるために東京に行くんだよわかってくれ！」

一刀が言うと蒼魔は

蒼魔「東京行って今より弱くなったら承知しないからな『おとしの北郷』」

一刀「お前も帰ってくる時には今より弱くなるんじゃねえぞ『親熊

の蒼魔』！」

この時から変なあだ名が流れ出した。ちなみに鳳賀が『梟の鳳賀』、九龍が『野人の九龍』である。

蒼魔「元気で行きやがれよ！帰ってきたら戦いだ！」

一刀「任しとけっ！」

カツンッ！

二人は拳をぶつけあった。

そして一刀は東京にたびだった。

現在

蒼魔「んでどうだった東京は？」

蒼魔が聞くと一刀は

一刀「まぁまぁ強い奴はいたな、それと…」

蒼魔・鳳賀・九龍『それと？』

一刀「かわいい女の子がたくさんいたな♪」

これを隠れて聞いて見ていた桃香達は

桃香・華琳・蓮華『（ボンッ！）／／／』

一部のものは顔が赤くなって爆発した。

愛紗「姉上、気をたしかに！？って鈴々はどこだ？」

いつの間にか鈴々の姿が消えていたので愛紗が探していると

鈴々「お兄ちゃん、鈴々もかわいい娘の一人なのかなのだ？」

鈴々は一刀達の近くにいた。

一刀「鈴々ちゃん、どうしてここに！？」

一刀が驚くと

鈴々「鈴々はみんなと一緒に来たのだ！みんなあっちに隠れているのだ♪」

鈴々は全てをばらしてしまった。

一刀「皆さん、いるのなら出てきなさい！」

一刀が言うので隠れていたみんなが出てきた。

ゾロゾロッ！

その数、ざっと４０人近く

一刀「何でついてきたかは聞かないけど今日はどこに泊まるの？」

一刀が聞くと

華琳「どこって、もちろんどこかのホテルか宿に」

華琳が答えるが

一刀「言っておくが、この付近にはホテルも宿もないんだよ」

一刀に言われると女子達は

女子達『えっ～～！？』

盛大に驚いた。

これを見た一刀の同級生達は

蒼魔「確かに一刀の言うようにかわいい娘ばかりだが！？」

鳳賀「東京のかわいい娘は大声で叫ぶんですね！？」

九龍「少しうるさい！？」

女子達の迫力に脅える一刀の同級生達であった。

27時間目「一刀の里帰り」（後書き）

ちなみに今回登場したオリキャラは西森が気に入りましたので後にまた登場するかもしれません。

28時間目「北郷家の人々」（前書き）

今回、一刀の家族が全員揃います。（一刃以外の）

28時間目「北郷家の人々」

一刀についてきた女子達の泊まる先はとりあえず一刀の実家に決まった。（理由はこれだけの大勢を泊められるのは一刀の実家しかないため）

蒼魔達と別れて一刀がみんなを連れて実家に向けて歩いていると

華琳「（一刀のご両親と会うとわかっていたらもう少し化粧すればよかったわ）」

桃香「（やった～♪準備しといてよかった♪）」

蓮華「（両親に対する第一印象は大事だからしっかりせねば！）」

彼女達がそんなことを考えている間に

一刀「着いたよ」

一刀の実家に到着した。

一刀の実家の第一印象は

鈴々「おっきいのだ～！？」

愛紗「実家が道場とは聞いていたがまさかこれほどとは！？」

一刀の実家である剣術道場はでかかった。

一刀「爺ちゃんいるのー？」

シ～ン

一刀は叫ぶが返事がなかった。

一刀「庭かな？ちょっと見てくるから待ってて」

一刀は庭に向けて走り出した。

一刀が去ってからすぐ後

？「グルルー！！」

焔耶「（ビクッ！？）」

焔耶が何かの気配に気付いた。

桃香「焔耶ちゃんどうしたの？」

桃香が聞くと焔耶は

焔耶「今、犬の気配がして！？」

焔耶は犬が苦手なのだ。

？「グルルー！！」

バッ！

そして気配を消していた犬は姿を現すと飛びかかってきた。

焔耶「ギャー！！」

バタッ！

焔耶はあまりの恐怖に気絶してしまった。

しばらくして

一刀「何だ今の叫び声は！？」

焔耶の悲鳴を聞いて一刀が駆け付けてきた。

駆け付けた一刀が見てみると

？「クゥン？」

焔耶「（ヒックヒック！？）」

気絶している焔耶の上に大きなシベリアンハスキーがのっていた。

恋「…かわいい」

なでなで。

恋はシベリアンハスキーが気に入ったようだ。

ねね「恋殿～！？そんな犬よりセキトや張々がいますぞ～！？」

ねねは恋にうったえるが当の本人（本犬？）達は

セキト「ハッハッハッ」

張々「ワンッ♪」

すっかりじゃれあっていた。

桃香「一刀くん！？早くしないと焔耶ちゃんが！？」

このままほっといてもいいかもしれないがそれだと焔耶が起きないので桃香が言うと

一刀「剣（ケン）！こっちに来な！」

一刀が呼ぶと犬は

剣「ワンッ♪」

ガバッ！

尻尾を振りながら一刀にのしかかってきた。

剣「（ペロペロッ）」

一刀「くすぐったいからやめろって♪」

犬は一刀の顔を舐めまくっていた。

華琳「この犬は一刀の犬なの？」

華琳が聞くと

一刀「そうだよ、北郷剣っていうんだ」

剣は一刀が小さい時から飼っている犬だ。

一刀「そういえば剣！爺ちゃん知らないか？」

犬に聞く一刀に対して

桂花「あんたバッカじゃないの！犬が人の言葉を理解出来るわけないでしょ」

と桂花は言うが

剣「ワンッ！」

ダダッ！

剣は理解したのか道場の中に入っていった。

一刀「道場の中だったのか」

一刀は剣の後に続いて道場に入り、女子達も一刀の後に続いて入っていった。

北郷剣術道場内

みんなが道場に入ると

ポツン。

一人の老人が道場の真ん中に座っていた。

一刀「爺ちゃん只今！」

一刀は再び叫ぶが

老人「・・・」

老人はピクリとも動かなかった。

桃香「ボケすぎて耳が遠いのかな？」

桃香が言うと

愛紗「違いますよ姉上、達人というものはいかなる時でも平常心なんですよ」

愛紗はまともなことを言うが

一刀「違うよ、爺ちゃんは寝てるだけだからさ」

ズコッ！

一刀の言葉に全員がずっこけた。

一刀「一度寝た爺ちゃんはそう簡単には起きないからな」

蓮華「では起きるまで待つのか？」

蓮華が聞くと

一刀「そんなに待てないから今すぐ起こすよ」

この時、みんなは？を浮かべた。さっき簡単に起きないと言ったくせにすぐ起きることが出来るのかと

すると一刀は

一刀「ハイレグ着たすっごい爆乳の美女が近くにいるぞー（小声）」

一刀が小声で言うと

愛紗「そんなことで起きるわけが…」

しかし

ガバッ！

爺ちゃん「ハイレグ美女はどこじゃ！？」

さっきまで寝ていたはずの老人がいきなり起き出した。

ズコッ！？

これに対して女子達はずっこけるしかなかった。

一刀「相変わらずだな爺ちゃん」

一刀が呼ぶと

爺ちゃん「なんじゃ、一刀かい」

残念そうに答える爺ちゃんだったが

しかし、

ズラーリッ！

周りにいた桃香達を見付けると

刃「はじめまして、一刀の祖父の北郷刃です。趣味は盆栽と碁を少々…」

ズコッ!?

急に態度が変わる爺ちゃんを見てずっこける女子達だった。

そんな会話をしていると

切刃「道場の方が騒がしいから来てみれば、何してるんですかお父さん!!!」

道場の扉には青筋を立てた一刀の母である切刃が立っていた。

刃「切刃!?違うんじゃよ、これには深い訳が!?」

しかし、そんな言い訳が通じるはずがなく

切刃「この馬鹿父がー！！！」

ドッカーン！！。

刃「ギャー！！？」

娘に制裁される情けない父であった。

しばらくして

切刃「成程ね、そういうことならうちにしばらく泊まっていいわよ」

あの後、切刃に桃香達を泊めていいかを聞いた一刀は母から了解を得るのであった。

切刃「とりあえず狭いけど道場で寝泊まりしてね、それと…」

切刃は縛られて吊された刃を見ると

切刃「このスケベ爺さんがエッチなことしたら殺しても構わないからね」

実の娘の言う台詞だろうか？

そして切刃は桃香達を見渡すと

切刃「（一刀、ちょっと来なさい）」

一刀を呼び寄せる。

一刀「何だよ母さん？」

そして呼んだ一刀の耳に囁いた（ささやいた）。

切刃「あの娘達の中で誰が本命なの？」

一刀「ブッ！？」

一刀は吹き出した。

一刀「何言ってるんだよ母さん！？」

切刃「だって一刀が男友達以外でうちに連れてくるなんてこと今までなかったからさ♪」

切刃は一刀をからかうように言う。

そんな時、

？「只今～」

玄関から誰かが帰ってきた。

切刃「あの声はダーリンだわ！待っててねダーリン♪」

切刃はスキップしながら家の玄関に向かっていった。

華琳「この家は性格変わる人が多いのね！？」

その点は驚くしかなかった。

北郷家・玄関

切刃「おかえりなさいダーリン」

優刀「切刃さん、ただいま！」

北郷優刀

一刀の父で武力は北郷家一の腕前で料理が得意。髪は黒で瞳は緑、見た目は２０代の美男子で職業は会社のサラリーマン（役職は課長）ほとんどの女子社員にモテるが妻のことが一番好き。性格は優しく怒ることは滅多にない。普段は単身赴任中で家には殆んどいない。

切刃「単身赴任ご苦労様♪今日は一刀が女の子をたくさん連れてきたのよ」

優刀「ほう、一刀がねぇ、切刃さん今日は御馳走にしなくちゃね♪」

切刃「もちろんよ♪今から近所のスーパーに買い物行ってくるわ！」

やる気が出る夫婦だった。

しばらくして、北郷家・台所

切刃「さてと、張り切って御馳走を作らなきゃ 」

料亭の女将である切刃が張り切って食事の準備をしていると

華琳「待ってくださいなお母様 」

さりげなくお母様と呼ぶ華琳だった。

切刃「あなたは一刀の友達の、何か用なの？ 」

切刃が聞くと

華琳「あれだけの大人数の料理を作るのは大変ですから我々も手伝いますわ 」

流琉「料理なら任せて下さい！ 」

月「微力ながらお手伝いします 」

料理に自信のあるものが名乗り出た。

愛紗「私もやるぞ！ 」

春蘭「華琳様がやるなら私もやるぞ！ 」

料理を作ると危険な人も名乗り出たが

全員『それはダメ！？ 』

全員が必死に止めたので食い止めることが出来た。

そして夕食の時間

桃香「この料理美味しいね♪」

蓮華「一刀の料理がうまいのは両親の遺伝だったのか！？」

みんなは一刀の両親が作った料理に驚いていた。

恋「…おかわり」

鈴々「おかわりなのだ！」

季衣「おかわりだい！」

1年A組　許緒季衣。小柄な怪力娘で大食い。鈴々とはよく喧嘩をする。同じクラスの流琉とは親友同士の仲。

大食いが三人いるのは大変だったが

桃香「片付け手伝いますよお母様」

蓮華「私も手伝いますよお母様」

さりげなく二人もお母様と呼ぶのであった。

三人の反応に切刃は何かを気が付いた。

切刃「（この娘達が特に一刀のことが好きなのね）」

いわゆる女の勘である。

しばらくして

風呂場

カポーン

さすがに全員入るのは無理なので分かれて入ることにした。

桃香・華琳・蓮華組

桃香「私こんな釜のお風呂に入るのはじめてなんだ♪」

華琳「確かに珍しい感じね!?」

蓮華「今時ゴエモン風呂とはな!?」

三人がゴエモン風呂につかっていると

華琳「一刀、ちょっとぬるいからもう少し熱くしなさい!」

一刀「わかったよ」

一刀は風呂炊きをしていた。

蓮華「一刀、わかってると思うがもし覗いたら命の保証はないからな!」

一刀「わかってますよ、俺だって命は惜しいわけだしさ」

一刀は渋々風呂を炊くのであった。

桃香「でもすごいよね一刀くんって、こんな大きな家に住んでて武力は強いし、家族愛に溢れてるよね」

華琳「確かに最近は生徒会長としても頑張ってるようだしね」

蓮華「だからこそ好きになったのかもしれないな」

桃香・華琳・蓮華『／／／』

ちなみにこの会話は外に聞こえないよう小声で話しています。

桃香「私、一刀くんを譲る気ないし負けないよ！」

華琳「私だって欲しいものは絶対に諦めないわよ」

蓮華「私も負けるわけにはいかないな！」

三人が決意していると

ジ～。ジ～。

風呂場を覗く二つの単眼鏡を発見した。

バシャッ！！

三人が風呂炊き口めがけて熱いお湯をかけると

一刀・刃『あちちっ！？』

そこには一刀と自力で脱出した刃がいた。

三人に見付かってしまった一刀達は

刃「一刀の奴が見ようと言い出して…」

一刀「何言ってんだ！爺ちゃんが先に見ようって言ったじゃないかよ！」

どちらにしろ共犯である。

この後、悲鳴をあげた三人の声を聞いて愛紗・春蘭・思春が駆け寄り、一刀と刃をボコボコにしたあげく、直ぐ様切刃が現れて二人にお仕置きしたのだった。

そして三人は思った。

一刀がスケベなのは爺ちゃんからの隔世遺伝だということを

28時間目「北郷家の人々」（後書き）

北郷家の武力

1、北郷優刀
2、北郷一刃
3、北郷切刃
4、北郷刃
5、北郷一刀
6、北郷剣

こうして見ると学園最強男子の一刀が弱く見えますね

刃の性格は前作とは違います。

ここで一つお知らせです。

オリキャラを全員出してほしいと要望がありましたが数が多くて大変なので今後、新たなオリキャラを送られても登場はさせません。
誠に申し訳ありませんが西森も大変なんです！？

29時間目「北郷夫婦の恋物語」（前書き）

今回は切刃と優刀の過去の話です。

29時間目「北郷夫婦の恋物語」

九州二日目の朝、

我らが主人公・北郷一刀はというと

一刀「んっ…？もう朝なのか　」

昨日の覗きの件で爺ちゃんと共に切刃に説教されたあげく、朝まで木に吊された一刀と爺ちゃんだった。

しばらくして

木の上から降ろされた一刀と爺ちゃんは鍛練を始めた。

北郷家の朝は早い。

家族のみんなは朝の5時に起きてそれぞれ鍛練を始めるのだ。

切刃「一刀、久々に帰ったんだから山まで往復ランニングしてきなさい　」

切刃が言うと

一刀「そうだな、久々に走ってくるよ　」

ちなみにこの家から山までは車で行っても5時間はかかる。いくら人間ばなれした北郷家の人でも3時間はかかるのだ。

優刀「せっかくだし、父さんと一緒に走るか？」

優刀が誘うと

一刀「いいよ♪今日こそは父さんの前を走ってやるぜ！」

優刀「まだまだ息子に抜かれるわけにはいかないよ！」

二人共やる気だった。

刃「わしも暇じゃし、久々に走るとするかのぅ」

爺さんが言うと

優刀「お義父さん！？もうお年なんですから無茶しないでくださいよ！？」

一刀「そうだよ！？年よりは庭で碁でもしときなよ！？」

二人が止めようとすると

刃「バカモン！！二人してわしを年より扱いするでない！こう見えても若い時は『隼（ハヤブサ）の刃』と呼ばれていて周りの女からは声援がとんで…」

爺ちゃんが二人の方を見てみると

シ～ン。

既に二人は走っていた。

優刀「お義父さんが昔の話をする時は長くなるから逃げるが勝ちだな！？」

一刀「どこまでがホントで嘘かわからないしね！？」

二人は話を聞きたくないために逃げていた。

刃「こらっー！！待たんか！わしの自慢話を聞け～！！」

ピューー！！。

爺ちゃんも二人の後を追って走っていった。

しばらくして

朝の7時

切刃「もうそろそろ帰ってくる頃かな？」

切刃が朝食の準備をしていると

鈴々「ふにゃ～…おしっこなのだ～」

愛紗「しっかりしろ鈴々！」

愛紗が寝惚けている鈴々の手を引いて台所に現れた。

愛紗「すみません切刃殿、トイレはどこですか？」

愛紗がトイレの場所を訪ねると
切刃「トイレなら風呂場の隣に…」
とその時、
鈴々「もうここでするのだ～」
寝惚けた鈴々が台所でおしっこをしようとする。
愛紗「ダメだ鈴々！？」
切刃「もうちょっと我慢してね！？」
ダダッ！。
切刃は鈴々を抱えてトイレに走り出した。
しばらくして
愛紗「何とか間に合ったな！？」
切刃「危なかったわね！？」
鈴々「にゃはは♪」
鈴々はすっかり目が覚めてしまった。
鈴々「ねぇねぇおばちゃん！」

鈴々が切刃に話しかけると

愛紗「こら鈴々！おばちゃんはないだろう！」

愛紗が鈴々を叱ると

切刃「いいのよ別に、何か用なの鈴々ちゃん？」

切刃は愛紗を静めた。そして切刃が聞くと

鈴々「お兄ちゃんのお父さんとはどうやって出会ったのだ？」

鈴々の直球すぎる質問に対して

愛紗「何を聞くのだ鈴々！！」

愛紗が怒るが

切刃「いいのよ別に、聞きたいかい？」

切刃が聞くと

鈴々「聞きたいのだ！」

鈴々が答えた。

切刃「あたしがあいつと初めて会ったのは二人が高三の時だった」

ここで話は過去に遡る。

数十年前

ブロロッー！！。

学園にバイクの音が鳴り響いた。

切刃「オラオラてめえら！なめんじゃないぞ！」

北郷切刃　当時１８歳。彼女は九州最強のレディース『天象祢守（アマゾネス）』の頂点に立っていた。あだ名は『紅トカゲの切刃』

彼女がぐれた理由は父親である刃に原因があった。

それは刃がいつも娘に対してセクハラ行為をし続けたため彼女は高一の時にぐれたのだ。

後の一刀の祖母にあたり、切刃の母である北郷（せつこ）切子は刃のセクハラ行為に激怒し、切刃が中一の時に実家の大阪に出ていった。（現在も生存中。本人いわく、刃よりは長く生きてみせるのこと）

そんな切刃は中学時代からセクハラしてくる父を撃退してきたので男は弱いものと認識してしまった。

これが彼女がぐれた理由である。

しかし、学校にはちゃんと通い、弱いものいじめを許さない正義の不良であり、彼女自身も不良になりきれていなかったが、世間の目からはひどくあつかわられていた。

生徒１「またあの不良が来たよ！？」

生徒2「あんな危ない人なんて来なくていいのに」

生徒3「不良が勉強してんじゃねぇよ！」

やはり世間から見れば不良は悪人扱いされていた。

しかし、ただ一人だけ切刃をそんな目で見なかった男がいた。

その男こそ、後の一刀の父親になる北郷優刀（旧姓・翠川（みどりかわ））であった。

当時の彼は成績優秀、スポーツ万能、武力も強い完璧超人だった。

さらに彼は周りの女子からは『白鳥の王子様』と呼ばれるほどモテていた。

女子生徒「優刀様～、あんな不良なんか見てないで私を見てくださいよ～」

優刀は常日頃から切刃のことを見ていた。

そんなある日のこと

切刃がいつものようにバイクを改造していると

ザッ。

優刀が近寄ってきた。

切刃「何か用かよ！！！　」

切刃は優刀のことが嫌いだった。

常日頃から用もなく見られれば怒る理由も分かるのだが

すると優刀は

優刀「きみって可愛いいね♪　」

優刀の直球すぎる発言に

切刃「あたしが可愛いいだと！ふざけるんじゃないよ！！！　」

グッ

切刃は優刀の胸ぐらに掴みかかった。

切刃は常日頃から父である刃に可愛いいと呼ばれていたため切刃は可愛いいと呼ばれることは侮辱行為だと誤解していた。

切刃「さっきの言葉を取り消しな、そうすりゃ殴らないでおくよ！　」

しかし優刀は

優刀「僕は本気できみを可愛いいと思ってるんだ　」

この言葉に切刃がキレた。

切刃「ふざけるんじゃないって言ってるだろうが！」

ブンッ！。

切刃は優刀に拳を繰り出した。

その時、

ピロピロピンッ♪

切刃の携帯が鳴り出した。

切刃「ちっ！」

切刃は拳を止めて携帯を取り出す。

切刃「あたしだ！何か用か！」

携帯を聞いた切刃は

切刃「何だって！？沙耶の奴が捕まっただと！？」

沙耶とは切刃の族仲間で切刃にとって妹分にあたる人物なのだ。

切刃「分かった！すぐ行くから待ってろよ！？」

ピッ！

電話をきった後、切刃はバイクに跨った（またがった）。

切刃「おいテメェ、命拾いしたな！あたしは今忙しいからあばよっ！」

ブロロッー！！。

切刃はバイクに乗って出ていった。

優刀「…」

優刀はそれを見て何かを考えていた。

教室内

優刀「ねぇ、ちょっと聞きたいんだけど最近天象祢守と争っている族って知ってる？」

優刀はクラスから情報を集めていた。

女子生徒「そうですね～、暴走族の『イビルファング』が紅トカゲを嫌ってるって聞きましたよ。港の第３倉庫をアジトにしているみたいです」

優刀「ありがとね桃恵ちゃん♪」

ちなみにこの時教えてくれたのが後の桃香の母である桃恵であった。

（この事は当人達も知らない）

優刀は情報を集めると駆け出していった。

港の第３倉庫

切刃「ぐはっ！？」

バタッ！

沙耶「切刃姉さん！？」

金剛沙耶。切刃の右腕的存在

闇魔「さすがの紅トカゲも人質があれば手も足も出せないようだな」

イビルファング頭、闇魔

彼らは複数で切刃をボロボロにいたぶっていた。

闇魔「紅トカゲさんよう、土下座すれば今日は許してやるぜ」

闇魔は言うが

切刃「フンッ！女一人相手に男数人でかかる卑怯者に土下座なんて死んでもゴメンだよ！」

切刃が言うと

闇魔「じゃあ、死にやがれ！」

ブォンッ！。

キレた闇魔は切刃に金棒を振り降ろした。

切刃、絶体絶命の時

ガキンッ！

金棒は弾かれた。

目を閉じていた切刃が目を開けるとそこには

優刀「どうやら間に合ったみたいだね！？」

２メートルはある巨大な金棒を刀一本で弾いた優刀がいた。

閻魔「この野郎が！野郎共、やっちまいな！」

閻魔子分達『うぉー！！』

向かってくる閻魔達に対して優刀は

優刀「悪いけど、僕は女の子に手を出す奴が一番嫌いでね、本気で成敗させてもらうよ！」

そして戦いが始まり切刃は目を疑った。

何故なら数百人いた族が優刀一人に手も足も出さずにのされていったからだ。

そして最後に残された閻魔も

閻魔「ぐほっ！？」

簡単にやられていった。

数百人いた族が一時間もたたずに全滅したことに切刃が驚いていると

タッタッタッ。

優刀が切刃に近付いて

ガバッ！。

お姫様だっこをした。

これに驚いた切刃は

切刃「馬鹿野郎！何しやがるんだ！／／／」

顔を赤くしながら怒鳴ると

優刀「可愛いい女の子が怪我して歩けないというのにほっとく男はいないよ」

優刀の言葉に切刃は

切刃「また可愛いいって言いやがったな！あたしなんて可愛くな…」

切刃が最後まで言おうとすると

優刀「断る！君や周りが何と言おうと僕は君を可愛いいと思ってる

んだ！」

さらに続けて優刀は

優刀「僕は君のことが好きになった！君のことは僕がどんなことがあっても絶対に守るから高校を卒業したら僕と結婚してください！」

ズッキューン！！。

優刀の直球発言に切刃の心は天使の矢に撃ち抜かれた。

そしておもわず切刃は

切刃「こ…こんな女でいいならあんたと一緒になってやるよ！／／／／」

告白を了承した。この時、切刃の中にあった『男は弱くて変態』という認識から『男は一部を除いていい奴だ』に変わっていった。

そして次の日

切刃はレディースの仲間を集めて叫んだ。

切刃「今日限りであたしは天象祢守の頂点をやめる！代理は沙耶に任してあるからな！」

この言葉に告白現場の側にいた沙耶以外は驚いていた。

そして高校卒業後、二人は結婚の話を刃に伝えたが

刃「ダメじゃ認めん！」

刃は二人の仲を認めてくれなかった。

刃「大事な一人娘を貴様に渡してたまるか！」

その一人娘に散々セクハラしていたのは誰だ。

刃「そんなに切刃がほしけりゃ貴様が北郷の姓を名乗るがいい！」

つまり養子に来いということだ。

だがそんなことで優刀の決意は変わらなかった。

優刀「わかりました！切刃のためなら喜んで養子になります！」

これには刃も認めるしかなかった。

その後、優刀の両親は納得し、二人は結婚式をあげて後に一刀が産まれるのだった。

現在

切刃「というわけさ」

話を聞いていた愛紗と鈴々は

愛紗「すばらしい過去ですね」

鈴々「鈴々も大胆な告白されてみたいのだー！」

そして切刃の話が始まった時、実は桃香・華琳・蓮華も聞耳を立てていた。

桃香「（てことはいずれ一刀くんも大胆に／／／）」

華琳「（案外悪くないわね／／／）」

蓮華「（ロマンチックだな／／／）」

三人がそれぞれ妄想していると

一刀「母さん、ただいま～！」

ランニングを終えた一刀達が帰ってきた。

優刀「お義父さん、だから無茶したらダメだといったじゃないですか！？」

刃「何のこれしき！」

刃はぎっくり腰になって優刀に背負われていた。

切刃「おかえりなさい！すぐ朝御飯の用意するからね♪」

北郷家は今日も平和であった。

29時間目「北郷夫婦の恋物語」（後書き）

今まで送られてきたオリキャラは多少学年などの設定を変えてでも全員は大変ですが登場させますので安心してください。

送られてきたネタはいくつかのネタを参考に話を書いていきます。

３０時間目「殴られ一刀の一日（プール編）」（前書き）

３０話到着！

これからも頑張りますので応援お願いします。

30時間目「殴られ一刀の一日（プール編）」

一刀達が早朝ランニングから帰って朝食を食べていると

優刀「そうだ一刀、知り合いからもらった新しく出来たプールのタダ券が5枚あるから彼女達と一緒に行ったらどうだ？」

優刀の言葉を聞いて一部の人はこれはチャンスだ！と思っていたが、直ぐ様考えが甘かった事に気が付いた。

彼女達が甘かった点、それは水着を持ってくるのを忘れたことだった。

しかし、みんなに隠れて桃香だけはにやついていた。

何故なら彼女の目的は一刀とプールに行くことだったので当然水着は用意していた。

桃香「（ふふんっ♪やっぱり日頃の行いが良いといい事ってあるんだね♪）」

ガサガサッ

桃香はにやけながらバッグの中から水着を取り出そうとしていた。

桃香「（プールについたら一刀くんと…）」

～桃香の妄想～

桃香「どう?この水着似合うかな?」

一刀「桃香は可愛いいからどんな水着でも似合うよ!」

桃香「やだっ!一刀くんったら!」

それから二人に甘い空気が流れ始める。

一刀「それっ~♪」

バシャッ!

桃香「つめた~い!」

二人で水をかけあい、

桃香「はいっ!ジュース飲もう!」

一刀「一つのコップにストロー二つか!?」

一つのジュースを二人で飲み合い、

閉館後

桃香「私…実は一刀くんの事が好きなんだよ!」

桃香が告白すると

一刀「実は俺も桃香の事が好きなんだ結婚してくれ!」

桃香「一刀くん…」

一刀「桃香…」

そして二人の唇は重なりあった。

妄想終了

桃香「（な～んちゃってね♪／／／）」

桃香は顔を赤くしながら荷物を探るが

桃香「あれっ？」

ドサッ！

バッグを引っくり返しても水着は出てこなかった。

桃香「私の水着はどこなの！？」

ちなみに桃香の水着は

ポツ～ン。

桃香が入れ忘れていて女子寮の桃香の部屋に置かれていた。

ガラガッシャーン！！。

→桃香の妄想が崩れる音

その後、桃香は落ち込みながら居間に戻っていった。

ちなみに愛紗達も水着を持っていたが愛紗が姉を置いて行けないということだった。（鈴々は行きたがっていたが）

一刀「残念だけどみんな水着を持ってないから行けないね」

一刀が言うと

スッ！

月が手をあげた。

全員『！？』

これには全員が驚いた。

詠「ゆえっ！？何で水着を持ってるの！？」

詠が聞くと

月「メイドとしての勘ですよ♪詠ちゃんの分もあるよ♪」

ホントは出かける前にあらかじめ九州の有名スポットを調べておいたのだ。

月がいうと

スッ！

恋も手をあげた。

恋「…恋の水着ならねねが持ってる」

ねね「何ですとー!?確かにねねは恋殿と遊ぶためにねねと恋殿の水着を持ってきてはいますが恋殿の水着姿をヘボに見せたくはない…」

ねねが言うと

恋「…嫌?（ウルウル）」

恋が子犬のような瞳でねねを見つめると

ねね「ぐはっ!?」

ねねは何かすごい衝撃をうけた。

ねね「（確かに恋殿の水着姿はねねも見たいのですが他の男に見せるわけにはー!!）」

ねねは悩むが

恋「…ねねお願い（ウルウル）」

恋の子犬の瞳の2発目で

ねね「わかりましたのですぞ!」

認めるしかなかった。

一刀「大丈夫かな!?」

この時、一刀が思った不安が的中することを誰も知らなかった。

かくして、一刀と月、詠、恋、ねねはプールに行くことにした。（他のみんなは留守番）

最近新しく出来たプール
『ＫＹＵ－ＳＨＵ－』（架空の施設）

このプールは流れるプールや温水プールはもちろんのこと、長さ１００ｍのスライダーが魅力なのだ。

一刀「まだみんなは来てないのかな？」

海パンに着替えた一刀が待っていると

月「お待たせしました～／／／／」

声がした方に一刀が振り向くと

キラ～ン。キラ～ン。

そこには水着姿の天使達がいた。（水着はＯＶＡ２のものです）

そしてそんな天使達に周りの男の目は釘付けでなかには隣にいた彼女につねられる男もいた。

月「へぅ～変じゃありませんか？／／／／」

月は顔を赤くしながら水着姿を披露した。

月の水着姿を見た一刀は

一刀「すごく似合ってるよ／／／」

一刀は照れながら答えた。

月「へぅ～／／／（ボンッ）」

月は顔を真っ赤にした。

このまま二人だけならいいムードになっていただろうがそうはいかなかった。

詠「この馬鹿チ○コ！！！」

キンッ！！。

一刀「はうっ！？」

詠の蹴りが一刀の股間にヒットした。

そのまま倒れる一刀に詠は

詠「ボクがいる限りは月にエッチなことしたら承知しないからね！！！行くわよ月！」

グッ！

詠は月の手を引いて一刀を残していった。

一刀「おのれ詠め！？」

さすがに頑丈が取り柄の一刀も急所は弱いらしい。そんな倒れる一刀の元に

恋「…大丈夫？」

恋が心配して来てくれた。

一刀「大丈夫だよ」

一刀が言うと

恋「…痛い時にはさするといい、セキト達が痛がった時はそれで治った」

スッ！

恋の手が一刀の股間に近付く！

一刀「ちょっと恋！？」

さすがの一刀もそれはヤバいと感じた時

ねね「ち～ん～きゅ～う～キーック！」

ドカッ！

一刀「ぐはっ！？　」

上空から来たねねの陳宮キックが一刀に炸裂した。

ねね「このヘボ野郎め！ねねのいない間に恋殿にくっつくなんて許さないのですぞ！恋殿、行くのです！　」

ねねは恋の手を引いて歩いていった。

一刀「（俺、今日が終わるまで生きてるかな！？）　」

しかしこれがまだ序の口だということを一刀は知らない。

流れるプール

月「流れるプールは気持ちいいね詠ちゃん♪　」

詠「だね～月♪　」

浮き輪を装着した月は流されながら詠と会話していた。

温水プール

恋「…お風呂みたいで気持ちいい♪　」

ねね「確かにいい湯ですぞ♪　」

みんなはそれぞれ楽しんでいた。

が、どこにでもトラブルはあるもの

月「あれっ!?止まらないよ～、詠ちゃん助けて～!?」

詠「月っ!?」

月はそのまま流れの速い方に流されていった。

恋「…（ブクブク）」

ねね「恋殿～!?気持ちいいからって寝たら沈みますぞ!?」

恋は温水プールが気持ちよくてそのまま寝てしまい沈んでいた。

その後、二人は一刀に救出された。

詠「月っ!?しっかりして!?」

しかし月は流されたショックで水を飲んでしまい気を失っていた。

（恋は平気）

一刀「お腹の水ははき出させたからあとは呼吸のみか」

詠「だったらボクが人工呼吸するわ!」

詠がしようとすると

ギュッ

月が一刀の海パンを掴んできた。

それを見た恋は

恋「…月は一刀にしてもらいたいらしい」

恋が言うと詠は

詠「冗談じゃないわよ！月の唇をこんな馬鹿チ○コに渡すもので…」

詠は猛抗議するが

ガシッ！

恋は詠を押さえ付ける。

詠「ちょっと！？何するのよ！」

詠はふりほどこうと暴れるが力は恋の方が上なのでふりほどけなかった。

一刀「月のためだし仕方ないな」

一刀は人工呼吸するため月に唇を近付ける。

月「（へぅ～／／／）」

実は月は目を覚ましていたが一刀とキスがしたいがために気絶したふりをしていた。

そして一刀と月の唇があと数センチに近付いたとき

ピタッ！

一刀の動きが止まった。

一刀「月、起きているだろう」

月「はっ！？／／／」

一刀は月の顔が赤くなったことに気がついて止めた。

ちなみにこの後、恋から解放した詠に一刀は何故か殴られるのだった。

しばらくして

もうすぐ閉園時間の時

一刀がジュースを飲んでいると

月「あのぅ、一刀さん一緒にスライダーに乗りませんか？」

月が誘ってきたので一刀は

一刀「いいよ」

了承するのであった。

そして一刀と月はスライダーに向かっていった。

しかしそれを遠くから見掛けた詠は

詠「あの馬鹿チ○コ！！！月をたぶらかしたわね！！！」

何かを勘違いしていた。

詠がスライダーに向かっていくとそのすぐ後に

恋「…月、詠ずるい。恋も一刀とスライダーに乗りたい」

ねね「恋殿～！？」

二人も詠の後ろについていった。

スライダー最上階

月「さすがに高いですね！？」

月があまりの高さに驚いていると

係員「次の方、どうぞ！」

係員に呼び出された。

係員「それでは3つ数えたら前の人は後ろの人につかまってください、後ろの人は横にある掴むところを握ってください」

係員に説明されて一刀と月はゴムボートに乗る。前は月で後ろが一刀だ。

係員「それではいきますよ1・2…」

ボートに二人が乗り込んだのを確認して係員が秒読みしていると

バタンッ!。

詠「ちょっと待ったー!」

恋「…恋も乗る」

ねね「恋殿が行くのならねねもですぞ」

扉が開かれて詠達が現れた。

係員「うわっ!?」

パッ!。

詠達の登場に係員は驚いておもわず掴んでいた手をはなしてしまった。

詠「させるか!」

恋「…恋も!」

ねね「ねねもですぞ!」

ガシッ!。

三人はボートを掴むが流れ出したボートを止められるはずがなく

シャーッ！！。

そのまま流れてしまった。

五人を無理矢理乗せたパイプトンネルのボートは流れ出す。しかも秒読み前だったので一刀と月は掴んでいなかった。

月「へぅ～！？」

一刀「うわっ！？」

詠「キャ～！？」

ねね「どしぇ～！？」

恋「…♪」

そしてトンネルは終盤になり

ザバンッ！

何とか出口にたどり着いた。

一刀「ゲホッ！みんな無事か！？」

一刀が確認しようと月の方を見ると

一刀「月！？／／／」

月「えっ？何ですか？」

バァーン！。

月の上の水着が脱げていた。それに気付いた月は

月「へぅ～！？／／／」

バッ！

月は隠すがバッチリと見られてしまった。

その時、

詠「この馬鹿チ○コ！！！」

ドカッ！

一刀は詠に膝蹴りを喰らった。

詠「月に何するのよこの変態！」

バッ！

詠は月を隠そうと両手を広げて月の前に立ち塞がったが

一刀「うおっ！？／／／」

詠「何よ？」

詠は気付いてなかったが

月「詠ちゃん、水着の上がないよ!?」

月に言われて詠は自分の胸を見てみると

バァーン!。

詠の水着の上はなかった。

詠「キャー!?／／／」

詠は慌てて隠すが一刀をはじめとする他の男に見られてしまった。

更にややこしいことに

ねね「恋殿～!お止めくだされ～!?」

一刀がねねの声がする方を見ると

バァーン!。

恋が自分で水着の上を外していた。

恋「…月と詠だけ見せてずるい」

ずるいとかいう問題ではない。

一刀「俺は何も見てないからね／／／」

一刀が言うと

ねね「ち〜ん〜きゅ〜う〜キーック！」

キンッ！。

ねねの蹴りが一刀の股間にヒットした。

ねね「お前のせいなのです！恋殿〜、早くしまってくだされ〜！？」

ねねに股間を蹴られて一刀を沈みながら思った。

来るんじゃなかったと、

その後、月の詠の水着は見付かり何とか帰ることが出来た。

ちなみに家に着いた時に月と詠が顔を赤くしている理由をみんなに聞かれたが一刀は暑かったからだとごまかすのであった。（何人かは感付いていた）

31時間目「楽しいお祭り」

九州二日目の夜

ピ～ヒャラピ～ヒャラ♪

外から笛の音が聞こえた。

鈴々「おばちゃん、今の音は何なのだ？」

鈴々が聞くと

切刃「今の音はお祭りの笛の音よ」

切刃が言うと

鈴々・季衣・シャオ・美羽・美以・ミケ・トラ・シャム・タンポポ『お祭り！？』

お祭りという言葉を聞いてちびっこ達が騒ぎ出した。

優刀「いい機会だからみんなで行ってきたらどうだ？」

優刀が言うとみんなは喜ぶが

シュン。

すぐに昼間のように落ち込んでいった。

蓮華「行くのは構わないけど」

華琳「この格好じゃね」

ちなみに彼女達は全員制服姿である。別に制服でも構わないような気がするが一部のものはどうせなら浴衣で一刀とロマンチックになりたかったと落ち込んでいた。

そんな彼女達を見た切刃は彼女達の考えを察すると

切刃「皆さん、浴衣の心配ならいりませんよ、あたしのお古でよければ全員分ありますから」

そして切刃は居間から出ていくと自分の部屋からたくさんの甘楽(つづら)を持って戻ってきた。

甘楽の中身は

ジャーンッ！

たくさんの浴衣が入っていた。

切刃「どれでも好きなのを着なさい、あたしが着せてあげるから！」

切刃が言うとみんなは浴衣を選びまくったが

華琳「でも何でこんなに浴衣があるのかしら？」

華琳が一つの疑問に気が付いた。

確かにお古といっても５０着以上はありすぎる。

その答えは…

切刃「うちの変態親父（刃）が子供の頃からあたしを着せかえ人形のようにしていたから浴衣以外にも服がたくさんあるのよ」

切刃は溜め息をつきながら言う。

子供の頃からそんな扱いをうけていれば誰だって不良になるであろうと感じる華琳達だった。

鈴々「どうでもいいから早く着替えるのだ～♪」

ポイポ～イ！。

鈴々はすぐに制服を脱いで下着姿になった。

愛紗「こらっ！鈴々はしたないぞ！男がいるのだから少しは恥じらいをもて！」

愛紗が鈴々を叱りつけた。

ちなみにこの場は居間でまだ一刀、優刀、刃がいた。

切刃「これから女の子達が着替えるから男達は隣の部屋に退散！お父さん、分かってると思うけど覗いたら殺しかねないからね！」

最後はドスがきいた威し（おどし）だった。

刃「分かってますよ!?わしだってまだ死にたくないからのぅ」

男三人は隣の部屋に速やか（すみやか）に移動した。

しかし切刃はあの変態親父が簡単に諦めるはずがないとにらんでいた。

いくら優刀と一刀がいるからとはいえ油断が出来なかった。

隣の部屋

優刀「お義父さん、行っちゃダメですって!?」

一刀「母さん怒らしたら今度こそ死ぬよ!?」

刃「ええい放せ!わしはどうしても若い女の肌が見たいんじゃ!」

切刃のにらんだ通り、覗こうとする刃を優刀と一刀が止めていた。

そんな時、隣の居間から

切刃「最近の学生って胸が大きいのねぇ」

桃香「くすぐったいから触らないでくださいよう／／／」

居間から甘い声が聞こえてくると

刃「もう我慢でき～ん!」

シュバッ！

優刀・一刀『あっ！？』

二人の隙を見て刃が飛び出していった。

刃「（どれどれじっくりと若い女の肌を見るとするかのぅ）」

そして刃が襖（ふすま）の隙間から覗こうとすると

ザクッ！。

襖の隙間から槍が出てきて刃の額に刺さった。

刃「ギャーー！！？」

痛さのあまりにゴロゴロ転がる刃

すると居間の方から切刃の声が聞こえてきた。

切刃「こんなことだろうと思ったわ」

この時、一刀は思った。

これからは少しエッチなことをやめよう！でないと母さんに殺されると誓うのだった。

そしてみんなは浴衣に着替終り、お祭りに行くことにした。（浴衣の模様は想像に任せます）

お祭り会場

ドンドコドンドコッ！

ピ～ヒャラピ～ヒャラ♪

辺りから聞こえてくる太鼓や笛の音に

鈴々・季衣・シャオ・美羽・美以・ミケ・トラ・シャム・タンポポ

『すっご～い♪』

ちびっこ達は驚いて興奮していた。

華琳「祭りごときではしゃぐなんてあの子達はまだまだ子供ね」

華琳が言った後で春蘭、秋蘭の方を見ると

春蘭「みろ秋蘭！あそこで雲を作ってるぞ！？」

秋蘭「姉者、恥ずかしいから騒がないでくれ。それとそれは雲ではなく綿菓子だ」

綿菓子を見てはしゃぐ春蘭にさすがの秋蘭も呆れていた。

それを見た華琳は

華琳「（春蘭、後でお仕置きよ！！）」

身内の恥じ晒者を睨むのであった。

一刀「それじゃあ各自自由行動ってことで１０時には入り口に集合。迷子にならないように３～４人で行動すること！」

浴衣姿の一刀が言うと

桃香「じゃあ私は一刀くんと行くね♪」

グイッ！。

蓮華「一刀は私と来るよな？」

グイッ！。

華琳「あら、私の誘いを断る気かしら？」

グイッ！。

一刀は桃香・華琳・蓮華に引っ張られて両手に花ならぬ、両手に花束の状態だった。

一刀「三人共！？痛いからあまり手を引っ張らないで！？」

しかし彼女達は聞かずに一刀の腕を引っ張りながらいってしまった。

置いてかれた他のみんなもそれぞれ分かれていくことになった。

鈴々「あの焼きトウモロコシ美味しそうなのだ！あっちのフランクフルトも美味しそうなのだ！」

鈴々は食べ物屋を見たら寄って行くの繰り返しをしていた。

愛紗「こら鈴々！おこづかいで買える分だけにしろよ！私は一円たりとも貸さないからな！」

愛紗は鈴々を叱る。

しかし鈴々は聞かずに次々と店をまわっていた。

朱里「雛里ちゃん、卵里ちゃんへのおみやげ何にしよっか？」

朱里と雛里は塾の夏期講習で来れなかった親友の徐庶卵里へのおみやげを考えていた。

雛里「卵里ちゃんはひよこが好きだからひよこ系のおみやげにしよっか」

仲良くおみやげを決める二人

シュンッ！　ポスッ！

流琉「秋蘭様、さすがに射的は得意ですね！」

秋蘭「当然だ。いつも弓を引いているからな」

自慢の弓で射的の景品をとる秋蘭に対し、

春蘭「親父！この弓のせいだぞどうしてくれる！」

弓が景品に当たらないのは弓を出した親父のせいだといちゃもんをつける春蘭がいた。

恋「…ねね、恋はたこ焼き、お好み焼き、焼きそば、りんご飴、かき氷が食べたい」

ねね「承知しましたのですぞ！」

財布を片手に頼まれたものを買って来るねね。

明命「あのお猫様のぬいぐるみがほしいのにとれません！？」

輪投げが苦手な明命。

月「詠ちゃん、このお祭りに来ている人の中に昼間のプールに来ていた人がいたらどうしよう／／／」

詠「大丈夫だよ月、もしいたらボクが記憶から消されるまで殴っておくからさ（ボクだって恥ずかしいよ／／／）」

昼間のハプニングに緊張する二人

美以「みんにゃ！お魚がいっぱいにゃ！」

ミケ「たくさんにゃ！」

トラ「取り放題にゃ！」

シャム「にゃ～！」

店主「お客さん、金魚を素手でとらないでください！？」

金魚すくいの金魚を狙う美以達。

霞「酒飲みたいわ～！」

星「お願いだからはなしてくれ！」

翠「あたし達はまだ１７で高校生だろうが！」

この話を読んでいると年齢設定を忘れてくる。

みんなが騒ぐなか、一刀達は

一刀「そりゃっ！」

ブチンッ！。

華琳「またヨーヨー釣り失敗ね」

蓮華「一刀って細かいものが苦手なのね」

一刀「裁縫なら得意なんだけどね」

家庭的なものが得意な一刀だった。

桃香「ねぇねぇ、もうすぐ１０時だよ」

桃香が言うと

一刀「もうそんな時間か！？急がなくちゃな！」

そして一刀達は入り口に集合した。

桂花「ちょっと変態！私達を呼んで何する気よ！」

桂花が言うと

一刀「今からいい場所に案内するだけだよ、ついてきな！」

ダッ！。

一刀が走り出すとみんなも一刀の後についていった。

そして一刀が着いた先は

千頭学園の屋上

焔耶「こんなとこに連れてきてどうする気だ！？」

風「まさか誰もいないこの場所で風達にあんなことやこんなことをするんでしょうかね～？」

稟「あんなことやこんなこと…（ブーッ！！）」

みんなが騒いでいると

一刀「そろそろかな？」

一刀は時計を見ながら

一刀「それじゃあみんな、東の方を向いてくれ」

クルッ

一刀に言われてみんなが東の方を見ると…

ドッカーン！！。

東の方で大きな花火がうち上がった。

穏「きれいですね～♪」

沙和「まるで宝石みたいな輝きだったの～♪」

2年B組　于禁沙和。聖フランチェスカ学園で一番女の子らしいことをする女の子。おしゃれが大好き。応援団所属だが応援は罵倒混じりで有名。凪と真桜とは親友。

みんなが花火に感激していると

一刀「ここは千頭学園生徒だけしか入れない花火の穴場なんだ」

一刀は去年千頭学園にいたので自由に入れるのだった。

ドッカーン！！。

ドドドンッ！！。

その後も花火は打ち上げられていく。

そんな時、

鈴々「花火は見るのもいいけど鈴々は花火がしたいのだ！」

鈴々の言った一言で

桃香「じゃあ校庭に行ってみんなで花火しようよ♪近くにお店があったから花火売ってるかもしれないしさ！」

桃香の一言で花火をすることに決めた。（※マネして学校で花火をしないでください）

校庭

桃香「花火ってきれいだね～」

華琳「産まれて初めて花火をするわよ！？」

蓮華「以外と楽しいものだな」

花火で楽しむみんなだった。

そんな時、

一刀「あれっ？二人ほど足りないな」

一刀は白蓮と華雄の姿がないことに気が付いた。

その頃、二人は

白蓮「まだみんな来てないのか、しょうがない奴らだな！」

華雄「修行が足りんな！」

実は二人の腕時計は1時間遅れていた。そして二人共影がうすいので誰も気が付かなかった。

32時間目「北郷親子の鍛練」（前書き）

今回登場する技の説明はあとがきに載せてあります。

32時間目「北郷親子の鍛練」

九州三日目のある朝

一刀「う～ん…」

一刀が自分の部屋で目を覚まして目覚ましを探そうと手を伸ばすと

ムニュッ。

手が柔らかい何かを掴んだ。

一刀「何だろ…？」

一刀が目を開けて手の先を見てみると

桃香「う～んムニャムニャ…」

そこには何故か上半身裸で道場で寝ているはずの桃香が寝ていた。

当然、一刀が掴んだのは桃香の胸である。

一刀「！！？」

一刀は驚いたが騒ぐと人が来てしまうため騒がなかった。

そして一刀は昨日の夜を思い出して何があったのかを考える。

昨日の夜、お祭りから帰った後、一刀は疲れたので部屋ですぐ寝ることにした。

そしてみんなはまだ遊び足りないので夜更かしすることになった。

一刀「（それが何でこの状況になるんだ!?）」

どう考えても一刀が桃香を連れこんだわけではないことがわかり、
何故桃香がここにいるのかを考えていると

桃香「う～ん…もう朝？」

桃香が目を覚ましてしまった。

目を開けた桃香は辺りを見渡して自分の姿を見た後

桃香「キャー!!／／／／」

胸を両手で隠して叫び出した。

一刀「叫んじゃ困るって!?」

ガバッ!。

一刀は慌てて桃香を押さえ込む。

しかし少しばかり遅かったようで

タタタッ!。

廊下から走る音が聞こえると

ガチャッ！

愛紗「どうしましたか姉上！？」

愛紗がドアを開けて入ってきた。

その時、愛紗が見たものは

一刀「ハハハ！？」

桃香「う～！う～！」

上半身裸の桃香を後ろに回りこんで口を塞ぎ、更に抵抗されないように両手を押さえる一刀がいた。おかげで桃香の胸は正面にいた愛紗から見たら丸見えだった。

この光景を見た愛紗の頭から

ブチンッ！！。

物凄い音が鳴ると

愛紗「姉上に何をするかこの変態がー！！！」

ジャキンッ！

愛紗は青龍偃月刀で一刀に斬りかかる！

一刀「待ってくれ！俺は無実だー！？」

一刀は必死に叫ぶが

愛紗「問答無用だこの変態がー！！！」

愛紗は聞く耳を持たずに一刀に斬りかかってきた。

一刀「ギャー！！？」

その日、一刀の部屋からは一刀の断末魔の叫び声が聞こえたという。

しばらくして

桃香「一刀くんごめんなさい！」

桃香が包帯だらけの一刀に謝っていた。

桃香「私が寝苦しいからってお風呂を借りた後、下着をつけるのを忘れたうえに、上着を着るのも忘れて部屋を間違えてそのまま寝ちゃってごめんなさい！」

これが話の真相だった。

一刀「いいんだよ別に、俺も桃香を勢いで押さえ付けたわけだしさ」

一刀は桃香をかばうように言うのだった。

愛紗「その…悪かったな斬ってしまって…」

愛紗も無器用ながら謝るのだった。

一刀「別にいいよ、斬られることなら慣れてるしさ」

愛紗をかばうように言う一刀だった。

優刀「それより一刀、そんな怪我じゃあ鍛練はやめとくか？」

優刀が言うと一刀は

一刀「何言ってんだよ！せっかく父さんがいるんだから鍛練しなくちゃもったいないじゃん！こんな怪我なんて怪我のうちに入らないよ」

一刀が元気よく言うと

優刀「さすが一刀だな！それじゃあ今日はたくさん相手をしてやるぞ！」

一刀「了解！今日こそ父さんから一本とってみせるよ！」

そして二人は道場に向かっていった。

鈴々「鍛練なら鈴々も付き合うのだ～♪」

春蘭「私が先だからな！」

鍛練派の二人が道場に行こうとすると

切刃「行っちゃダメよ！」

切刃に止められた。

切刃「二人が鍛練する時は邪魔しちゃダメなのよ」

切刃が言うと

春蘭「何故なんだおばちゃん？」

春蘭が言った直後

切刃「（ギロリッ）」

切刃に睨まれてさすがの春蘭も脅えた。

春蘭「秋蘭、私は怖いものを見たぞ！？」

秋蘭「（脅える姉者も可愛いいな）」

春蘭は秋蘭に泣き付くのだった。

どうやら鈴々のような小さな子におばちゃんよばわりされるのは構わないが他の人だと怒るらしい。

桃香「ところで何で行っちゃダメなんですか？」

かわりに桃香が聞くと

切刃「久々にお父さん（優刀）が夏休みだから一刀も表情に出さないけど一緒に鍛練できて嬉しいのよ♪それに二人の戦いはすさまじいから迂濶（うかつ）に近寄ると怪我するわよ」

切刃が言うと

華琳「大丈夫よ、私達だって並の学生じゃないんだし鍛練の観察くらい…」

華琳が最後までいおうとすると

ドッゴーン!!。

道場の方からすさまじい音が聞こえてきた。

桃香「今のは一体何の音なの!?」

桃香が脅えていると

切刃「一刀とお父さんが鍛練している音よ」

切刃は音を聞き慣れているためなのか、涼しげに言うのであった。

蓮華「これが鍛練のレベルなんですか!?」

蓮華が聞くと

切刃「鍛練といっても二人で剣の打ち合いしているだけだしね♪」

それだけでも音がすごすぎた。

桃香「ちょっと見に行こうよ!?」

桃香が言うと他のみんなも行くことを決意した。

切刃「仕方ないわね、手を出さないなら行ってもいいわよ」

切刃に許可を出されてみんなは見に行くことにした。

道場

愛紗「これは一体!?」

みんなが道場に着いた時、

道場の一部が崩壊していた。幸いにも桃香達の荷物は別の場所に置かれたため無事だった。

しかし、打ち合っている優刀と一刀を見てみると

一刀「北郷流、『俄龍魂絶撃』!」

ブォンッ!

一刀は剣で優刀に殴りにかかるが

優刀「遅いぞ一刀!『俄龍魂絶撃』!」

ブォンッ!!。

優刀が繰り出した俄龍魂絶撃は一刀のものとは比べ物にならない早さで一刀に襲いかかり、そして…

ドッゴーン!!。

一刀「グホッ!?」

ズザザッー!!。

技を喰らった一刀はすごい勢いで飛ばされた。

優刀「一刀も東京に行って強くなったな昔だったら今の一撃で意識を失っていたのに」

一刀はよろめきながら立つと

一刀「俺だって毎日鍛えてるからねちょっとやそっとじゃやられないよ!」

一刀が言うと

優刀「その心意気は気に入った!それじゃあ次はもう少し力を込めるからな」

あれで手加減している優刀だった。

鍛練を見ていたみんなは驚いた。

学園でも1、2を争う実力の一刀が簡単にやられているうえに、あれほどの死闘をしながらいまだ手を抜いている優刀に驚いていた。

愛紗「二人共けた外れの強さだな!?」

翠「悔しいけどあたし達じゃあ二人の足元にも及ばない!?」

星「一刀も学園では手を抜いていたとはな」

みんなが驚くなか

春蘭「ええいっ!見ているだけではつまらん!私も鍛練に参加させろ!」

バッ!

猪女の春蘭が鍛練に割り込んできた。

しかし、

ドカンッ!

春蘭「ぐはっ!?」

春蘭は軽く飛ばされてしまった。

朱里「はわわ!?春蘭さんが軽く飛ばされるなんて!?」

雛里「あわわ!?すごい戦いだね!?」

春蘭の武は魏軍でも上位クラスである。その春蘭が軽く飛ばされるということはもはやあの鍛練に割り込めるのは学園女子最強である恋しかいなかった。

しかしその恋は

恋「ＺＺＺ～」

立ったまま寝ていた。

優刀「一刀、人も集まってきたことだしそろそろ決着をつけるぞ！」

一刀「分かったよ父さん！」

スッ！

そして二人は互いに構えると

優刀「これに耐えたら合格だ。いくぞ北郷流、『俄龍爆撃流星』」

ドドドッー！！。

武に心得のない者にはただ優刀が刀をおもいっきり振ったにしか見えないが心得のある者は

愛紗「何だ今のは！？刀から龍が出てくるとは！？」

春蘭「秋蘭、私の目がおかしいのか！？」

秋蘭「大丈夫だ姉者よ私の目にも龍が見える！？」

思春「あれは一体！？」

みんなが驚くなか、

凪「あれは気の一種ですね！？」

２年Ｂ組　楽進凪。真面目で体中の傷がコンプレックスな辛党。学園でも少ない気を扱う実力者である。

この中で気を見ることができる凪が言うと

鈴々「気って何なのだ？」

案の定聞いてきたので説明することにした。

凪「気とは誰でも少しは持っているものですが、達人が使うと気の形を変化させたり、体に気を流して肉体強化することが出来ます！」

凪は真面目に説明するが

鈴々「ちんぷんかんぷんなのだ～？」

頭の悪い子には分からなかった。

そうこうしている間に優刀の出した龍の気が

ドッゴーン！！。

一刀に直撃した。

愛紗「あんなのを喰らって大丈夫なのか！？」

華琳「いくら一刀でもあんなの喰らったらひとたまりもないわよ！？」

みんなが心配するが

凪「どうやら無事のようです！」

一刀・優刀・凪以外『えっ！！？』

みんなは驚いた。

やがて優刀が放った気で出来た煙幕がはれると

バァーン！。

一刀が多少はボロボロだが生きていた。

凪「会長は攻撃が当たる寸前に自分の体に気を流して防御したのです」

凪が説明し終わると

優刀「さすがだな一刀、東京行ってから怠けていたのなら今の一撃で重傷だったからな」

一刀「よく言うよ、父さんだってまだまだ本気を出してないだろ」

一刀が言うと

優刀「！？」

優刀は驚いた。

何故ならさっきの攻撃は全力でないにしろ９０%程の力だったのだ。

それをまだまだと感じる一刀に優刀は驚いていた。

優刀「（一刀め、父さんを越える日が近いかもしれないな）」

優刀は本気で感じるのだった。

そんな時、

切刃「あなた!、一刀!朝御飯が出来たわよ」

切刃がご飯だよと呼んできた。

実はみんな朝御飯がまだだったのである。

切刃の声を聞くと

優刀「汗かいたから朝風呂浴びてから食べるよ!一刀も久々に一緒にどうだ?」

一刀「俺も汗かいたし、一緒に入るよ」

そして一刀と優刀は風呂場に向かっていった。

桃香「一刀くんってあんな修行してたんだ!?」

蓮華「あんなことをしていたら強くなるのも分かる気がするわ!?

」

みんなはあらためて一刀のすごさを知るのであった。

32時間目「北郷親子の鍛練」（後書き）

・俄龍魂絶撃
剣を使ってすさまじい威力で殴り倒す。
・俄龍爆撃流星
刀に最大の気を送り、龍の気を放つ。

33時間目「蓮華とのお出掛け」（前書き）

あとがきにちょっとしたお知らせがあります。

33時間目「蓮華とのお出掛け」

九州三日目の昼頃

朝の鍛練を終えた一刀は

蓮華「一刀！早く来い」

蓮華と町を歩いていた。

ことの始まりは朝御飯を食べ終わった後、部屋に戻ろうとした時に蓮華に呼ばれた時に始まった。

一刀「町を見てみたいって？」

蓮華「そうだ、遊びまくるのもいいが今まで町を見たことがなかったからな」

ホントはこれは建前で本音は一刀と一緒に出かけたい蓮華であった。

一刀「それじゃあみんなも…」

一刀がみんなを呼ぼうとすると

蓮華「待てっ！みんなは疲れて寝ているから邪魔しちゃ悪いし、二人だけで行こう／／／」

蓮華は勇気を出して一刀を誘ったのだった。

ちなみに他のみんなは

桃香「ムニャムニャ…」

華琳「ス～ス～…」

シャオ「う～ん…」

蓮華に指示された思春がこっそり入れた眠り薬入りの朝御飯を食べて寝ていた。

明命「全員寝ましたね」

亞莎「効き目は夜まで続くから安心ですね」

今この場で起きているのは蓮華とシャオと二喬を除いた呉軍だけだった。

穏「でも思春ちゃんよかったんですか～？蓮華様と一刀さんを二人っきりにして～？」

穏が聞くと

思春「仕方がないだろう！蓮華様が二人っきりにしてくれと言ったのだから、それに北郷ならばそこらの賊が相手でも蓮華様を守ってくれるしな！」

思春なりに一刀を評価していた。だが…

穏「でも～、一刀さんが蓮華様を襲ったらどうする気ですか～？」

ピクンッ！

穏が言った何気無い一言に思春が反応した。

～思春の妄想～

蓮華「こんな所に連れてきて何する気よ！？」

一刀は蓮華を人気のない所に連れてきていた。

一刀「何をするだって？それはもちろん、蓮華に〈ピー〉するために決まってるじゃないか！」

ガチャガチャッ

一刀は蓮華を押さえながらズボンのベルトを外す。

蓮華「助けて思春ー！？」

蓮華は必死に叫ぶが

一刀「無駄だよ、この場所は地元しか知らない秘密の隠れ場所なんだから誰も来ないさ！さてと…」

ガシッ！

一刀は蓮華のお尻を掴むと

一刀「学園一の巨尻をいただきま～す」

蓮華「キャ〜!?　」

〜妄想終了〜

一通り妄想した思春は

穏「な〜んちゃって、そんなことあるはずないんですけどね〜　」

穏が思春の方を見た時には

シーン…

すでに思春の姿はなかった。

その頃、一刀と蓮華は

蓮華「このぬいぐるみはかわいいな　」

蓮華は土産物屋で虎のぬいぐるみを見ていた。

蓮華の家は姉である雪蓮がだらしないため蓮華は小さい頃から母である静蓮に厳しい教育を受けて遊ぶことが許されなかったためぬいぐるみを見るのは久しぶりだった。

虎のぬいぐるみを見ている蓮華を見た一刀は

一刀「もしかして蓮華って虎好き?　」

一刀が言うと蓮華は

蓮華「わっ…悪いか！」

慌てた感じで答えた。

ちなみに蓮華はマジで虎好きである。

土産物屋を出た後、二人は少し早い昼食をとることにした。

一刀「この店は俺が昔から来ているうどん屋でとてもうまいんだぜ！」

蓮華「そうか」

二人のお昼はうどんに決まり、店に入ることにした。

ガララッ～

一刀「おじちゃん！席二つね！」

一刀が店主のおじちゃんを呼ぶと

おじちゃん「その声はかずちゃんか？待ってな席二つだな…」

カラランッ！

おじちゃんは驚いて箸を落とした。そして慌てて二階に上がると

おじちゃん「かあちゃん大変だ！？かずちゃんが美女を連れてきたぞ！？」

ドドドッー！

おじちゃんが叫んだ後、階段から誰かが降りてきた。

おばちゃん「そりゃホントかいおまえさん！？」

降りてきたのはおじちゃんの妻のおばちゃんだった。

おじちゃん「ホントの話だよ！？かあちゃんと比べたら月とすっぽんどころかウルトラマンと一寸法師くらい差があるぜ！？」

簡単にいうと比べ物にならないということである。

ゴチンッ！。

おじちゃんはおばちゃんに殴られた。

一刀「おじちゃんもおばちゃんもオーバーなんだから！？蓮華は彼女じゃなくてただのクラスメートだって」

ただのクラスメートと聞いて蓮華は少し反応した。

おばちゃん「んなこと言ったってかずちゃんが男友達以外を連れてくるなんて初めてだからさ！？」

おじちゃん「ホントに優刀も切刃さんもいい息子を持ったもんだよ、それに比べてうちのせがれときたら転入手続きがあるからって店の手伝いをせずにどこかにブラブラしやがってよ！」

一刀「兄貴が転入するのか！？」

おじちゃん「あぁ、確かフラメンコ学園とかいうわけわからない学園に転入しやがって」

この店の名は『うどん屋楠舞』である。一刀が兄貴と呼んでいるのはこの店の一人息子で一刀の幼馴染みである楠舞弧狼のことである。

そんな会話をしながら一刀と蓮華はうどんを食べ終えて店を出ていった。

一刀「うどん美味しかったろ？」

一刀が聞くと

蓮華「うむ、中々の味だったな」

その後、一刀と蓮華は色々と見て回った。周りから見ればデートしているようにしか見えないのだが鈍い一刀は

一刀「（あんなにはしゃいじゃって、余程出かけたかったのかな？）」

蓮華の気持ちを理解していなかった。

そして二人が次に向かった先は

蓮華「きれいな教会だな！？」

二人が着いた先は結婚式の教会だった。

一刀「ここは昔、父さんと母さんが結婚式をあげた教会なんだぜ！」

一刀がさりげなく言うと

蓮華「そ…そうなのか！？／／／」

蓮華は顔を真っ赤にして驚いていた。

そんな蓮華を見た一刀はおいうちをかけるように

一刀「なんだったら俺達もここで式をあげる？」

蓮華の耳元で囁く（ささやく）と

蓮華「（ボカンッ！！）」

蓮華の顔が真っ赤になって爆発した。

蓮華「（か…一刀と結婚！？）」

～蓮華の妄想～

わーわー！

教会の周りが騒がしくなる。

一刀「そろそろ時間だよ蓮華っ！」

タキシードを着た一刀が控室に入ると

キララ～ン！

蓮華「わかったわ一刀」

そこには純白のウェディングドレスを着た蓮華がいた。

一刀「ドレス姿とっても似合ってるよ」

一刀が言うと

蓮華「嬉しいわ一刀」

二人はイチャイチャな雰囲気になるが

ガチャッ

係員「そろそろ時間ですので準備してください」

いい雰囲気のところで係員に邪魔をされた。

カラーン！カラーン！

そして教会のベルが鳴り響くなか二人はバージンロードをゆっくりと進んで牧師の前に立つ

牧師「あなた方はいつでも愛し合うことを誓いますか？」

一刀・蓮華『誓います』

即答だった。

牧師「では誓いの口付けを　」

牧師が言うと

一刀「蓮華、これからはいつまでも一緒だよ　」

蓮華「嬉しいわ一刀　」

そして二人の唇が近寄ってきた時、

一刀「蓮華！しっかりしろよ！　」

～妄想終了～

一刀「顔を赤くしてどうしたんだよ！？　」

一刀は一行に目覚めない蓮華を揺さぶっていた。

蓮華「（ハッ！？）　」

蓮華が目を覚ますと

一刀「目覚めてよかったぜ！？俺が冗談言ったら急に動かなくなるから心配したよ！？　」

さっきのが冗談だと聞いた蓮華は体を少し震わせると

蓮華「一刀の馬鹿っ！」

バッチーン！！。

蓮華は一刀の頬をひっぱたいた。

蓮華「冗談にもほどがある！もう知らん！！」

蓮華は怒って先に行ってしまった。

一刀「何故！？」

頬に立派な紅葉ができた一刀には何故叩かれたのかがいまだに理解できなかった。

しかし三年後、一刀がこの教会で式をあげることをこの時の一刀自身も他の人も知らなかった。

そしてすっかり日が暮れて夜になり、二人は河原を歩いていた。

しかしいまだに蓮華の機嫌は不機嫌なままだった。

一刀は先程から蓮華に話しかけるがさっきから無視されていた。

一刀「（俺が何をしたんだ？）」

一刀はいまだに蓮華が怒る理由を知らなかった。

そんな時

ポワッ

蓮華「んっ？」

蓮華の目の前に一つの小さな光が現れた。

それを見た一刀は

一刀「蛍か！珍しいな！？」

都会にはあまり見掛けなくなった蛍がいた。

蓮華「綺麗ね…」

ようやく蓮華が話を聞いてくれたようなので一刀は

フリッフリッ♪

側にあった木の枝を拾って振りまくると

バサッー！

たくさんの蛍が舞い上がった。

蓮華「すごいわね一刀！？」

舞い上がった蛍の光に照らされる蓮華を見た一刀は

一刀「蓮華、（光に照らされて）綺麗だよ」

これを聞いた瞬間蓮華は

蓮華「また一刀は私をからかって／／／」

再び顔が爆発しかけたが不発におわった。

しかし一刀は

一刀「冗談じゃなくてホントに（照らされて）綺麗だよ」

これを聞いた蓮華は

蓮華「一刀…」

一刀「蓮華？」

一刀と蓮華の顔が近寄ろうとしたその時…

思春「見つけたぞ北郷―！！！」

ドグボッ！！。

一刀「ぐふっ！？」

一刀は突然現れた思春の蹴りを喰らって飛ばされた。

思春「広い町を探してみれば蓮華様とイチャイチャしようとしおって！！！」

一刀「それは誤解だから…！？」

一刀が言おうとすると

思春「問答無用だー！！！」

一刀「あっー！？」

蛍が舞い散る河原を鈴音を構えた思春に追い掛けられる一刀であった。

蓮華「（思春の馬鹿！あともう少しだったのに）」

蓮華はすごく残念に思った。

そしてボロボロにされた一刀を連れ帰った蓮華と思春はすでに目覚めていた他のみんなに尋問されたという。

33時間目「蓮華とのお出掛け」（後書き）

近いうちに前々から考えていた呉編の恋姫を新規投稿してみようと思います。（その時はこの小説の更新速度が若干遅くなるかもしれません）

なので新作のアイディアを書いてくる人には申し訳ありませんが西森の頑張りでは一度に二作が限度ですのでどちらかの小説が終りしだい新規投稿してみようと思います。

３４時間目「風はキューピッド？」（前書き）

今回は華琳の話です。

３４時間目「風はキューピッド？」

聖フランチェスカ学園２年Ｃ組の級長・曹操華琳。

彼女は今、悩みを抱えていた。

華琳「（何で私は一刀とイチャイチャできる機会がないの！？）」

華琳は自分で言うのもなんだが、小さい頃から天才少女と呼ばれ、現在までの成績は常にトップクラスの秀才だった。（それ故についたあだ名が覇王）

しかし、そんな自分が桃香・蓮華・月にさえ負けているもの、それは…

一刀への好感度だった。

華琳「（桃香とは学園祭でキスしたし（２２話参照）、蓮華の様子からすると恐らく蓮華ともキスしただろうし（２４話参照）、恋に聞いたら月ともキスしかけたって言うし（３０話参照）、どうして私だけがまだ一刀とキスしていないのよ！）」

華琳はキスが出来ないせいでいらついていた。

華琳「（でも覇王である私が素直に一刀にキスしてなんて言えないし！？）」

妙なところでプライドが邪魔をしていた。

華琳「（蓮華のように部下に協力を求めようにも）」

確かにほとんどは聞いてくれそうだが一部のものは

春蘭「華琳様の命令ならば北郷の奴に強引に華琳様と付き合うように言います！」

桂花「華琳様があんな全身精液変態白濁男なんかと一緒にいてはいけません！」

強引な人と厳しい人がいて難しいのだ。

町の案内を頼もうにも昨日蓮華にしたので他の女に見せた場所は行きたくないという華琳だった。

華琳「（何か手はないかしら？）」

華琳が考えていると

ドスンッ！

華琳「うっ！？」

華琳の頭の上に

季衣「ムニャムニャ～」

寝惚けた季衣の足が乗った。

ちなみに言い忘れていたが今は夜でここは華琳達が寝泊まりしてい

る道場の中である。

華琳「まったく、季衣はねぼすけさんねぇ」

スッ！

華琳は寝ている季衣の足を持ち上げて季衣を布団の中に入れてあげた。

華琳「さて、どうしたものかしら？」

華琳はその後、一刀と二人っきりになれる策を考えていた。

ちなみにその時、華琳の側で話を聞いていた者がいた。

そしてあっという間に九州四日目の朝がやって来た。

華琳「うぅ…」

華琳はあれから寝ずに策を考えていたが結局浮かばずに朝がきてしまい一睡も出来なかった。

そして朝食を食べに台所に向かおうとした時

一刀「おはよう華琳」

華琳は一刀に呼び止められた。

華琳「か…一刀!?何の用かしら!?」

華琳が驚きながら聞くと

一刀「今日一日空いてる？」

これを聞いた華琳は

華琳「（え～～！？）」

華琳は驚いた。何故なら朴念仁である一刀が自ら誘ってきたのだから

しかし華琳は疑問を感じた。

華琳「（いくらなんでも話がうますぎよ、これは夢に違いないわ）」

そう考えた華琳は

華琳「一刀、私の頬をおもいっきり引っ張りなさい！」

そうすれば目が覚めると考えた華琳だった。言われた一刀は

一刀「ホントにいいの？」

一応聞いてみることにした。すると、

華琳「別に構わないわよ！あとで絶対に怒ったり、殴ったりしないから早くしなさい！」

華琳から許可をもらうと

一刀「それじゃあ遠慮なく！」

ムニッ。

一刀は華琳の頬を掴むと

ぐい～～ん！。

言われた通りおもいっきり引っ張った。

すると華琳は

華琳「痛いじゃないのバカッ！＃＃＃」

バッチーン！！。

華琳は一刀に平手を喰らわした。

一刀「怒らないし、殴らないって言ったのに！？」

叩かれた一刀が言うと

華琳「怒ってないし、殴ったんじゃなくて叩いた（はたいた）からいいのよ！」

強引な理屈だった。

華琳「（痛かったから夢じゃなさそうね）」

華琳が少し考えると

一刀「もしかして都合悪かった?嫌なら別に…」

一刀が言うと

華琳「誰が嫌だと言ったのかしら?一刀がそこまで言うのならば仕方がなく付き合ってあげるわ!」

えらく態度がでかかった。

華琳「ただし、蓮華とは別のルートよ!」

それだけは強く言う華琳だった。

そして二人は出かけていった。

しかし二人は気付いていなかった。二人の後ろから誰かが覗いていたことを

?「作戦その一成功だな!」

ちなみに他のみんなは

桃香「ス~ス~…」

蓮華「ス~ス~…」

桂花・春蘭『ぐが~!』

秋蘭「いびきをかく姉者も可愛いいな」

流琉「さすが風さん特製の眠り薬ですね」

凪「一口食べただけで寝てしまうとは！？」

魏の真面目人である秋蘭・流琉・凪そして出かけた一刀・華琳そして風以外が寝ていた。

秋蘭「さてと、あとは風に任せて我々も一眠りしようではないか！」

流琉「そうですね、朝から眠り薬入りの料理を作ってましたから眠いですし」

凪「少しくらいなら寝ても構わないでしょう」

そして三人も眠りだした。しかし三人が起きたのは少しではなくほぼみんなと同じ時間に起きることを三人は知らなかった。

その頃、一刀と華琳は

華琳「（まさか一刀の方から誘うだなんておかしいけど今は気にしている場合じゃないわね♪）」

そんな華琳を見た一刀は

一刀「（あんなに嬉しそうにして、そんなに出かけたかったのかな？もしそうなら風の言った通りだな）」

ここで話は華琳が起きる前に遡る（さかのぼる）。

華琳が起きる前、一刀の部屋

一刀「う～ん…！？」

一刀はまるで上に何かが乗っているような感じだった。

一刀「（これってもしかして金縛りか！？）」

そして一刀が目を開けてみると

風「お兄さんようやく起きましたか！以外とお寝坊さんなんですね～」

一刀の布団の上には風が乗っていた。

1年C組　程イク風。いつも飴をくわえており、よそ見をするとすぐに眠ってしまう娘（主に寝たフリが多い）。だが勉学においては華琳の次に頭が良い。猫に好かれる体質で何より最大の特徴が…

？「おいおい兄ちゃん！乙女を待たせていつまで寝てやがるんだ！」

風の頭に乗っている太陽の塔に似た人形・宝ケイ（会話は風の腹話術）だ。

一刀は風が乗っていることに驚いて聞いてみることにした。

一刀「何で上にいるの？」

すると風は

風「ＺＺＺ～…」

いつの間にか寝ていた。

一刀「寝んなっ！」

ビシッ！

一刀が突っ込みをいれると

風「三途の川ですね～」

一刀「古いモノマネはいいから答えなさい！」

一刀はあえて突っ込まないことにした。

風「つれないお兄さんですね～。まぁいいでしょう！文字数が半分をきりましたし手短に言いましょう」

一刀は風が何を言ってるのかが理解できなかったが突っ込まないことにした。

風「短刀直入に言います！お兄さんは今から華琳様を誘って町に行ってください！」

風の言葉に一刀は？を浮かべたが

宝ケイ「兄ちゃん兄ちゃん！乙女に最後まで言わす気か！とっと華

琳を誘って町に行きやがれ！」

宝ケイに言われて一刀は慌てて部屋から出ていった。

現在

風「華琳様は結構恥ずかしがりやの強情ですから自分から誘うことはできませんしね～。そこで風が華琳様のキューピッドになってあげるのですよ～」

昨日の夜、華琳の策を聞いた風は二人の中を進展させようと秋蘭達に協力を頼んで計画を立てたのだった。しかしなかなか風の思うようにはいかなかった。

華琳「…／／／」

一刀「？」

さっきから二人は黙ったままだった。

風「仕方がないですね～」

スッ！

じれったい二人に風が行動に出た。

一刀と華琳が歩いていると

風「そこの仲の良さそうなお二人さん。占ってみてはどうですか～？」

二人の目の前には占師に変装した風がいた。

風「ムムムッ！見えるのですよ！」

ちなみに一刀と華琳は

一刀・華琳『（何風？（してるんだ・してるの））』

すでに風の正体を見破っていた。

風「お二人はこれからあの屋形船に乗るといいのですよ～」

ビシッ！

風が指差した先には一艘の屋形船があった。

華琳「あれに乗れっていうの！？」

一刀「何であんなとこに屋形船が！？」

二人が驚いていると

風「さっさとお乗りくださ～い♪」

ドンッ！。

一刀「うわっ！？」

華琳「キャッ！？」

二人は風に突き飛ばされて強引に屋形船に乗せられた。

風「それではごゆっくり～♪」

シュルリッ！。

風は屋形船に繋いであったロープをほどいた。

ロープをほどかれた屋形船は流れてしまった。

一刀「痛た…！？大丈夫か華琳？」

華琳「大丈夫よ、風には後でお仕置きしなきゃね！＃」

しかし華琳は今気付いた。今、この屋形船には一刀と華琳のみ、すなわち二人っきりということを

一刀「参ったな、携帯置いてきちゃったぜ。華琳の携帯は？」

華琳は携帯を持っていたが

華琳「私も忘れたわ」

小さな嘘をついた。

そして時間がたちあっという間に夜になった。

一刀「どこまで流されるんだろうな？」

いまだに屋形船は流されていた。

幸い屋形船の中にはろうそくがあったので中は明るかった。

一刀は窓から外を眺め、華琳はその場でじっとしていた。

しかし華琳は少し考えると

華琳「一刀」

一刀「んっ？な…」

華琳は一刀を呼び出すと

ゴチンッ！！★彡。

一刀「な…何で！？」

バタッ！

華琳は頑丈な一刀が気絶するくらいおもいっきり殴ると

華琳「あなたに起きてもらうと困るのよ／／／」

そして華琳は気絶している一刀の顔に近付くと

ちゅっ♪

華琳は一刀の唇にキスをした。

華琳「さてとキスはできたしそろそろ迎えに来てもらおうかしら」

華琳は携帯を取り出して連絡した。

数時間後、駆け付けた秋蘭達によって一刀達は救出された。

当然みんなは華琳に尋問したが

華琳「早いもの勝ちなのよ♪」

華琳は白々しく言うのだった。

しかし一刀は

一刀「（何で俺は華琳に殴られたんだ？）」

それだけが疑問に残っていた。

３４時間目「風はキューピッド？」（後書き）

長く続いている九州編ですが、もうそろそろで九州編を終わらせて新たな展開に進ませようと思います。

35時間目「九州旅行最後の日」（前書き）

タイトルの通り九州編の終りです。

35時間目「九州旅行最後の日」

九州五日目の朝

桃香「…（じ～）…」

華琳「…（じ～）…」

蓮華「…（じ～）…」

月「…（じ～）…」

この日は互いに見つめあっていた。

何故なら三日目と四日目に蓮華と華琳がした抜け駆けが発生するかもしれないからである。

そのため朝御飯は眠らされないようにほんの数口しか食べなかった。

その結果

全員『（ぐ～～～～）』

全員のお腹の音が盛大に鳴った。

桃香「お腹空いたよ～、ご飯食べたいよ～」

愛紗「ダメですよ姉上、食べたら寝てしまいます！」

実はみんなは知らなかった。

この朝御飯には一刀の祖父である刃が眠り薬を仕組んでいたことを
その様子を陰から見ていた刃は
刃「（早く食べんかい！寝たらわしがいいことしてやるぞい♪）」
絶対にエッチなことを企んでいた。
そんな時、
ガララッ～
道場の扉が開くと
一刀「何してるんだみんな？」
一刀が現れた。
桃香「何でもないよ～、それより何か用？」
桃香が聞くと
一刀「これから父さんと川に行くけど一緒にどうかなって？」
一刀の言葉に全員が
全員『行くっ！』
了承した。それを陰から見ていた刃は

刃「（馬鹿孫め～！＃あと少しじゃったのに！まぁいいわしも川に行っちゃうもんね～♪）」

刃が浮かれて川に行く準備をしようとしていると

ガシッ！

切刃に肩を掴まれた。

切刃「お父さん、出かける前にあなたが台無しにした朝御飯を残さず全部食べてくださいね～＃＃＃」

切刃は顔は笑っていたが小さな青筋が立っていた。

たとえ親子であってもこの状態の切刃には誰も逆らうことが出来ず

刃「わかりました残さず食べさしてもらいます！？」

刃は仕方なく自分が仕込んだ眠り薬入りの朝御飯を食べるはめになってしまった。

その頃、一刀達は

川

桃香「透き通っていてきれいな川ですね～♪」

鈴々「お魚はいるのかなのだ？」

そこにはきれいな川が流れていて、ちゃんと川魚もいた。

優刀「それじゃあ僕と一刀は焚き火の準備をするから君達は魚をとってくれるかな？」

優刀が言うと

全員『わかりました♪』

全員が答えるのであった。

しかしこの時、みんなは気付いてなかった。これから先に大変なことが起きることを…

桃香「冷た～い！？」

みんなは靴を脱いで川に入ると川の冷たさにほとんどが驚いていた。

美以「お魚いっぱいとるのにゃ～♪」

ミケ「とるにゃ～♪」

トラ「とるのにゃ～♪」

シャム「にゃ～♪」

パシャッ！パシャッ！

やはり美以達は猫なだけあって魚をとるのが得意のようだ。

熊のように魚を手で弾きながらとっていると

鈴々「鈴々もやるのだ！」

バシャッ！

鈴々が美以達の真似をして手で弾いてみるが、そう簡単にとれるはずがなく失敗しさらに

季衣「何すんだこのちびっこ！###」

弾かれた水が季衣にかかって季衣が怒り出した。

鈴々「わざとじゃないから許してほしいのだ！」

季衣「いいや！絶対にわざとだろっ！###」

この二人はいつも小さなことが原因で喧嘩しているのだ。

季衣「喰らえちびっこ！」

バシャッ！

季衣が鈴々に向かって水をかけると

鈴々「よくもやったなー春巻き！###」

バシャッ！

お返しに鈴々も水をかけた。

季衣「へへ～ん♪何度も喰らうもんか」

サッ

季衣は水を避けたが

ザバッ！

季衣が避けたせいで後ろにいた思春にかかってしまった。

思春「貴様らー！＃＃＃」

バシャッ！

思春は水をかけるが狙いがそれて地和に

水をかけられた地和は

地和「ちょっと！ちぃは何もしてないのにひどいじゃない！＃＃＃」

それから壮絶な水のかけあいが始まった。

一刀「お～い！魚はとれたか？」

準備を終えた一刀が川に寄ってみると

そこには…

愛紗「よくもやったな喰らえっ！」

春蘭「華琳様に水をかけるな！」

亞莎「ずぶぬれです～」

そこはまさに修羅場とかしていた。

一刀「みんな！やめ…」

一刀が叫んで止めようとすると

桂花「うっさいわね黙りなさいよ！＃＃＃」

バシャッ！

止めようとした一刀は逆に水をかけられた。これぞまさしく水も滴る（したたる）いい男。

一刀「いい加減にしろっ！＃＃＃」

ピタッ

修羅場は一刀が叫んだおかげで何とかおさまった。

しばらくして

パタパタッ

風になびく服の近くに

桃香「へくしゅんっ！」

タオルにくるまれた桃香達がいた。

優刀はこんなときのためにあらかじめタオルを全員分持ってきていた。

パチパチッ！

焚き火にあてられた魚からこうばしいにおいがすると

一刀「そろそろ焼けたかな？」

パクッ！

一刀が一口食べてみると

一刀「うん！いい焼き具合いだよ父さん♪」

優刀「それはよかったな一刀。みんなも遠慮しないで食べなさい」

優刀に言われてみんなも魚を手にとって一口食べてみると

桃香「おいし～い♪」

蓮華「魚を焼くとこんなに美味しいとはな！？」

華琳「今度うちのシェフに頼んで献立に入れてもらおうかしら」

月「いい焼き加減ですね♪」

それぞれが反応をして喜んでいると

ガササッ

みんなは気付いてなかったが茂みの中に刃が隠れていた。

刃「（寝過ぎたと思っていたが間に合ったようじゃのう）」

チラリッ

そして刃は干してある下着に目を向けると

刃「（もらったー！）」

バッ！

刃が下着めがけて飛んだ時

ビュッー！！

パッ！

突然吹いた強風により桃香の下着が飛ばされてしまった。

風に飛ばされた下着は

パサッ！。

一刀「んっ？」

見事に一刀の頭の上に落ちた。

桃香「はっ！？／／／」

それを見た桃香は赤面し

一刀「何？どうしたの？」

一刀が聞いた直後

チャキッ！

愛紗「お前はまたしても～＃＃＃」

怒りの愛紗が青龍偃月刀を持って構えていた。

一刀「何で怒ってるの！？」

一刀が答えを聞く前に

愛紗「この変態が―！＃＃＃」

ドッカーン！！。

愛紗の怒りが爆発した。

しばらくして

一刀「何だか俺って夏休みになってからひどい目にあい続けてない？」

多分気のせいであろう。

そして夕方になって一刀の家に着いた時、明日は何をしようかなと桃香達が考えていると

ピロピロピンッ♪

華琳の携帯が鳴り出した。

華琳「誰からかしら？」

ピッ！

華琳が携帯を開くと

？「お嬢様！大変でございます！？」

電話の相手は華琳の家の執事長だった。

華琳「何があったの！？」

華琳が慌てて聞くと

執事長「旦那様（華琳の父）がお嬢様に会えないばかりに暴れているのでございます！？このままでは屋敷が壊されてしまいますので大至急お戻り下さいませ」

華琳父「華琳に会いたいよ～！」

ものすごく迷惑な父だった。

華琳は呆れながら携帯をきると

華琳「仕方がないわね、春蘭、秋蘭、桂花、魏のみんな仕方がないから家に帰るわよ」

魏のみんなは華琳の家に寝泊まりしているのだ。

華琳「一刀、次に会うのは二学期の始業式でね」

華琳はそう言うと去って行った。

桃香「じゃあ私達はもうちょっといよ…」

桃香が言おうとすると

愛紗「姉上、お母様から電話です」

電話と聞いて桃香がびくびくしながら電話をとると

桃香「もしもし…！？」

すると

桃香母「桃香！よそ様の家に厄介になってないで早く帰ってきなさい！帰らないと池に投げ込みますよ！＃＃＃」

ピッ！

桃香は電話をきると

桃香「愛紗ちゃん、みんな急いで帰ろう！」

即答だった。

蓮華「みんなが帰るのなら我々も帰るしかないな」

蓮華が言うと

シャオ「え～！！シャオはまだいたいよ～」

シャオが言うと蓮華は

蓮華「お母様一人では姉様を見張るのは大変だろうか！」

夏休みの間、家に帰った雪蓮は母から家事を言いつけられるのだがすぐに脱走するため大変なのだ。

こうして蓮華達も帰ることになった。

残りのみんなもそれぞれ理由があって帰ることになった。

そしてみんなを見送った後一刀の母の切刃は

切刃「（あの中の誰かがうちに嫁いだら面白そうね♪）」

なんて事を考えていた。

ちなみに刃はというと

刃「わしが悪かったから許してくれ～！！」

飛び出したところをみんなに見付かってしまい罰として木に縛られていた。

優刀「さて一刀、夏休みが終わるまで鍛練するぞ！」

一刀「わかったよ父さん！」

こうして九州での長い旅行は終りを告げた。

３５時間目「九州旅行最後の日」（後書き）

次回から夏休みあけの二学期が始まり、送られたオリキャラのほとんどが登場する予定です。

３６時間目「転入生は凄い奴ら！？」（前書き）

今回出てこなかったキャラについては後に出る予定ですので安心してください。

ちなみに技名が記載されていなかったキャラについては西森が勝手につけました。

36時間目「転入生は凄い奴ら！？」

一刀にとって初日に苦しいおもいをした夏休みが終り今日から二学期が始まった。

二学期の始業式前

華佗「おはよう一刀！」

一刀「久しぶりだな華佗」

一刀は懐かしいクラスメートと再会していた。

左慈「フッ！貴様も強くなったようだが俺も負けないぞ！」

于吉「私達は密着で修行しましたからね♪」

于吉が言うと

左慈「テメェが勝手についてきただけだろうが！＃＃＃」

ドガンッ！

左慈の蹴りはあきらかに夏休み前よりも威力を増していた。

何故なら蹴りを喰らった于吉が前よりも遠く飛んだからだ。

一刀達４人が会話をしていると

及川「みんなおっはー！」

及川が声をかけてきたが

一刀「あいつ誰だっけ？」

左慈「俺が知るかよ！」

于吉「そもそもこの学園の生徒でしたっけ？」

華佗「さっぱりだ」

ズッコー！！？

４人の反応に及川はずっこけた。

及川「ひどいやんかみんな！いくら８話ぶりの登場やからってそれはあんまりやで！」

しかし一刀達は

一刀「思い出せないな～！？」

左慈「こんな奴いたか？」

于吉「新キャラですかね？」

華佗「それなら分からないはずだ！」

勝手に新キャラ扱いされていると

及川「2話目から登場してるわ！」

及川がついにキレた。

いい加減ふざけるのはよせと思っている人もいるかもしれないが一刀達は本気で忘れていた。

及川のことは気にせずに一刀達が漢組の教室に着くと

ざわざわっ！

教室の中がやけに騒がしかった。

一刀「何かあったのか？」

一刀が聞いてみると

漢組生徒「この漢組に新しい生徒が数人入るんだってよ」

男子生徒が言うと

一刀「二学期前に転入生だなんて何考えてるんだ学園長は！？」

一刀が少し驚いていると

ガラッ

卑弥呼「ほらみんな、さっさと席につかんかい！」

久しぶりに卑弥呼が現れた。

そしてみんなが席に着くと

卑弥呼「知っている者もいると思うがこの漢組に新しい生徒が数人やって来る。それでは順番に入ってきなさい！」

卑弥呼が言うと

ガラリッ！

教室の扉が開いて転入生が入ってきた。

蒼魔「氷室蒼魔だ！よろしく頼むぜ！」

鳳賀「李鳥鳳賀だ！はじめまして」

九龍「骸亜九龍、よろしくな！」

孤狼「楠舞孤狼だ！3年だから兄貴ってよんでくれ！」

鉄「司郎鉄（くろがね）ですはじめまして」

小兎「愛藤（ことう）小兎。はじめましてだみゅう」

転入生達が入ってきた時、一刀は驚いていた。

何故なら転入生のほとんどが一刀の知り合いだったからだ。

そして転入生達が一刀を見付けると

蒼魔「また会えたな一刀！」

鳳賀「これからはよろしく！」

九龍「千頭学園四天王の復活だー！」

みんなが一斉に一刀に近寄ってきた。

孤狼「久しいじゃねぇか一刀に他三人よ、またお前達とやり合うのを楽しみにしてるぜ！」

はっきり言って狐狼の実力は一刀以上である。

鉄「また君達ですか騒がしくなりますね」

転入生が騒ぐ一方で在校生の華佗達は

華佗「驚いたな！？ほとんどが一刀の知り合いだったとは」

左慈「さすが北郷の知り合いだぜ、どいつもこいつも強い気を放ちやがる！まぁいずれ俺が全員まとめて殺ってやるがな！」

于吉「そんなことをいう左慈も素敵ですね♪」

この直後、于吉は左慈に蹴られた。

及川「しかしまぁ、お嬢ちゃんいくつ？ここは男のクラスやから女の子は別の教室に行き」

及川が小兎に話しかけると

小兎「ボクは男だー！子供扱いするなみゅう！」

小兎の外見は女のようで身長が璃々ちゃんほどしかないためよく女の子や子供に間違われるのだ。（本人は嫌っている）

一方、転入生が来たのは漢組だけではなかった。

小百合「愛澤（さゆり）小百合よ、よろしくね♪」

美紀「剣崎美紀よ、よろしく」

銀「司郎銀（しろがね）ですはじめまして」

女子のクラスの方でも新たに3人が追加された。（しかも全員が一刀の知り合い）

そんなこんなが始まり、昼休みの屋上

蒼魔「まさか兄貴までいやがるとはな」

鳳賀「正直言って驚きだぜ！？」

孤狼「それはこっちの台詞だっての！そんなことよりも…」

孤狼は背中に手を伸ばすと

孤狼「久々に揃ったわけだしみんなで『我沈誇（がちんこ）』やらねぇか？」

スッ！

孤狼は自分の得物である鉄甲と鉄のすねあてを取り出した。

※我沈誇については27話参照。

蒼魔「兄貴にしてはいいことというじゃねぇか！」

鳳賀「退屈しのぎには丁度いいな！」

九龍「みんなで殺り合う♪」

ジャキンッ！

他の三人もどこから取り出したのか自分の得物を取り出した。

一刀「仕方ないな、修行の成果を試すにはいい機会だし少しだけ暴れてみるか！」

ジャキンッ！

この中で一番真面目な一刀まで戦闘体勢にはいった。

孤狼「最初にダウンした奴はみんなに昼飯一週間奢ることにしようぜ！」

蒼魔「その話乗ったぜ！」

鳳賀「いちいち弁当作らなくてもいいからな」

九龍「いっぱい食べれる～♪」

一刀「それじゃあ始めますか」

全員『我沈誇…スタート！』

ダダダッ！

スタート開始と同時に全員が飛んだ。

とそんな時

鉄「この俺をほっておいて我沈誇とは…、俺は発明の次に我沈誇が好きなのに！」

バッ！

何故か鉄までも我沈誇に参戦した。

そして少し時間がたって

及川「かずピー、もうすぐ授業やで…」

華佗達が呼びに来た時には既に

ボロ～ン

屋上の一部が破壊されていた。

華佗「何が起きたんだ！？」

みんなが驚いていると

于吉「どうやら原因はあれのようですね」

于吉が屋上破壊の原因を発見した。その原因とは

一刀「俄龍四神弾！」

蒼魔「絶対零度撃！」

鳳賀「電撃砲撃（プラズマショット）！」

九龍「破滅爪（ブラスタースマッシュ）！」

孤狼「狼円斬！」

鉄「聖獣斬り！」

ドガッバキン！！。

そこには自らの得物を持って暴れる一刀達がいた。

及川「あいつら何してんねん！？喧嘩やったら先生よばな！？」

及川が出ていこうとすると

左慈「待ちやがれ！」

グイッ！

左慈に止められた。

左慈「何だか知らねぇがこの俺をさし置いて戦いするなんて水臭いぜ！」

ダッ！

そして左慈も戦いに参戦した。

于吉「今、先生を呼んだら左慈の機嫌が悪くなりますからほっといた方がいいですよ」

及川「そりゃそうやけど、怪我人出たら大事件やで！？」

及川が騒ぐと

華佗「心配するな！その時は俺が全員を治療してやるぜ！」

そういう問題ではないと思うのだが

そして新たに左慈が加わった7人の戦いはどんどんエスカレートしていった。

そして騒ぎを聞き付けて

桃香「何してるんですか！？」

蓮華「何故戦っているのだ？」

華琳「こんなに屋上を壊して、弁償代が大変よ！？」

騒ぎを聞き付けて桃香達がやって来た。

一刀「止めないでくれよ！」

蒼魔「一度始まった我沈誇は途中でやめるわけにはいかないんだ！」

孤狼「もしやめたら全員が罰を受けなきゃならないからな！」

つまりもし戦いをやめたら全員が誰かに昼飯を一週間奢らなくてはならないのだ。

しかし7人に疲れがたまってきたのか動きにキレがなくなってきた。

一刀「そろそろ決着つけないか！？」

蒼魔「互いに疲れたみたいだしな」

鳳賀「残念だが疲れたしな」

九龍「もっと殺りたかった」

孤狼「しかしこの学園には強い奴がたくさんいるんだなわくわくしたぜ！」

鉄「戻ったらデータをとらないとな」

左慈「ごちゃごちゃ言ってないで決着つけようぜ！」

シュバッ！

そして7人は戦いを一旦やめてその場から離れると

全員『スゥ～！』

軽く息を吸い込んだ瞬間

全員『ハァーーッ！』

ダダッ！

全員が一斉にとびかかった

そして互いがぶつかりあおうとした瞬間

？「我沈誇終了！」

ピタッ！

誰かの声が入って全員の動きが止まった。

一刀「今の声は！？」

全員が辺りを見渡して声の主を探していると

飛琳「みんな少しは落ち着いたかな？」

バンッ

一刀達の視線の先には一刀の中学・高校の担任だった神龍飛琳（しんりゅうフェイリン）先生がいた。

左慈以外『飛琳先生何故ここに！？』

左慈を除く6人が聞くと

飛琳「お前達に会いたくなってな！今日からこの学園に転勤してきたんだ」

来た理由を言うと

飛琳「さてと、それじゃあ君達は我沈誇を途中でやめた罰と屋上を破壊した罰で屋上の修理をしてもらおうか！」

全員『えっ！？』

全員が辺りを見渡すと

ボロロ～ン

屋上は既に半壊していた。

左慈「誰がお前なんかに従うかよ！」

飛琳先生を知らない左慈が呟く（つぶやく）と

飛琳「もし次の授業までに修理が終ってなかったら連帯責任で全員の恥ずかしい写真をばら蒔くからね」

すると

左慈以外『頑張らせていただきます！』

シュバッ！

6人は素早く作業にかかった。

左慈「何してんだあいつら？」

左慈が作業をしないでいると

飛琳「左慈　元放。得意技は蹴りの乱れ蹴り、小さい頃はよくお漏らしをしていた…」

左慈「（ビクッ！？）」

これを聞いた左慈が反応すると

飛琳「これをバラされたくなかったら君も作業をしなさい」

そこまで言われた左慈は

左慈「わかったよ！やればいいんだろうが！」

渋々修理作業をすることになった。

その頃、学園長室では

学園長室

卑弥呼「貂蝉よ、お主があんなに生徒を集めたということはあれが近いのじゃな？」

貂蝉「そうよん♪うちの学園は男子の力が弱いから補強するためなのよん」

学園長である貂蝉と教頭の卑弥呼が話をしていた。

卑弥呼「教師まで呼んだのは武力上昇のためか、しかしこれなら勝てるかもしれんな」

卑弥呼が言うと

貂蝉「勝てるかもじゃダメなのよん！絶対に勝たなくちゃん！学園対抗武術大会に出てくる悪を懲らしめるためにねん！」

いつもと違い真剣な顔をする学園長であった。

36時間目「転入生は凄い奴ら！？」（後書き）

呉編を投稿していましたがネタが思い付かずに削除してしまいました。どうも自分は思い付くのが苦手のようです（反省）。

次に書いてほしいという話は既に似たような話がありますので迷っています。もしくは新しく西森が考えをまとめた後に投稿する予定です。

37時間目「幼児一刀の大冒険」

転入生が多く入った始業式が無事に終り（？）、今日から普通の授業が始まった。

ある日の朝、理科室

ギィィィンッ！

この場所で新たに作られた部活が朝から活動していた。

真桜「もうちょいで完成やな！」

2年C組　李典真桜。関西弁を話す巨乳の発明オタクで新しく作られた科学研究部の部長でもある。

ちなみに他の部員は

鉄「出来たぞ！我が傑作の発明品その名も『自動じょうろ』中に入っている水が空になったとしても横に取りつけてあるボトルを繋げれば水が入るのだ！」

漢組の転入生、司郎鉄。

銀「どうせなら可愛いく象さんの形にしようよ♪」

2年C組の転入生、鉄の双子の妹である司郎銀。

二人は発明好きな双子なのだ。

二人が完成した発明を喜んでいると

真桜「つ～か、それって単なる予備水のついたじょうろやん、自動じゃなくて手動やし！」

真桜に突っ込まれた。

鉄「発明は失敗がつきものなんだ！いつかは成功するさ！」

うまくごまかされた。

鉄と銀はたまに凄い発明をするからいいものの、問題は真桜の方だった。

銀「真桜ちゃんだって自動竹籠編み機っていいながら手動じゃないですか」

ガーンッ！

事実であった。

真桜「うちらって何してんのやろ、それに比べて飛琳先生は凄いなぁ」

科学研究部顧問・神龍飛琳。彼が作った発明品は数知れず、ついには学園長に無断で学園の改造までする始末である。

真桜「この間も変な薬品つくってたしな」

スッ！

真桜は棚に置いてあったフラスコに入っていた薬品を取り出した。

とその時、

ツルリッ！

真桜「うわっ！？」

ドスンッ！　ポ～イッ！

真桜が足を滑らせて尻餅をついた拍子に薬が高く飛んだ。

ピュ～！

真桜「あわわ！？」

幸い蓋がしてあるので中身は溢れない（こぼれない）が高く飛んだ薬はそのまま落下してくる。

そして落ちてくる薬に対して真桜は

真桜「あわわ！？レシーブ！」

パシッ！

とっさにレシーブした。

ピュ～！

レシーブされた薬は銀の方に飛んでいく

銀「え～っと！？」

突然のことに慌てた銀は

銀「トッ…トス！」

パシッ！

慌ててトスをした。

そして飛ばされた薬めがけて

鉄「トスされたらアタックだー！」

バシンッ！

鉄がアタックをした。

真桜「ってあほぅ！アタックしてどないすんねん！」

真桜が突っ込むがもう遅い、

アタックされた薬はそのまま扉の方に飛ばされた。その時、

ガラッ！

一刀「朝から何騒いでるんだ！」

一刀が扉を開けて入ってきた。

そして…

ガッチャーン！

薬は一刀にぶつかってしまい、一刀は薬まみれになった。

真桜「あわわ！？会長はんだいじょぶかいな！？」

真桜が聞くと

一刀「大丈夫なわけな…うっ！？」

ブシューッ！！。

突然一刀の体から煙が吹き出てきた。

そして

真桜「だいじょぶかいな！？」

真桜が見た時には既に

小一刀「お姉ちゃん誰でちゅか？」

一刀の姿は子供へと変わっていた。

真桜「何でこうなるんや！？」

鉄「今の薬って!?」

鉄が割れたフラスコを見てみるとフラスコには『ア○トキ○ン４８６９液体型』と書かれていた。

真桜「んなもん置くなや!?」

ちなみにその薬は一歩間違えれば毒薬である。

銀「そんなことよりも一刀がいないよ!?」

銀の言う様にいつの間にか一刀の姿が消えていた。

鉄「探したいのはやまやまだが今は元に戻す薬を探すんだ!」

そして科学研究部は一刀のことはほっておいて薬探しを始めた。

そして一刀が向かった先は

しばらくして

漢組

華佗「ホントに一刀なのか!?」

左慈「信じられねぇぜ!?」

于吉「一刀くんはいくつでちゅか～?」

于吉が聞いてみると

小一刀「5歳でちゅ」

これを聞いたみんなは

左慈「テメェ一刀！ふざけるのもいい加減にしやがれ！！」

グイッ！

左慈が小一刀に掴みかかると

小一刀「びぇぇ～ん！このお兄ちゃん怖いでちゅ～！」

小一刀が盛大に泣き始めた。

于吉「ダメですよ左慈、今の一刀は5歳児なんですから優しくしなくては！もう大丈夫でちゅよ～♪」

そしてみんなは起用にあやす于吉を見て

華佗「于吉ってお父さんよりいいお母さんになれそうだな！？」

華佗が呟く（つぶやく）と

于吉「そりゃそうですよ！いつか左慈との子供ができたら私があやしますからね♪」

そんなことが起きるわけなかろう

ちなみにこの時、左慈が于吉を蹴り飛ばそうとしていたがまた一刀が泣かれては面倒なのでみんなに押さえられていた。

そんな時

華佗「あれっ!?一刀がいないぞ!?」

いつの間にか一刀の姿が消えていた。

于吉「仕方ないですね手分けして探しましょう!」

こうして漢組による一刀捜索が始まった。

ちなみにその頃、一刀はというと

小一刀「ここどこでちゅか〜?」

テクテク

可愛いく廊下をテクテク歩いていた。

そして小一刀が2年B組の方に歩いていると

沙和「あの子はどこの子なの〜?」

沙和に見付かった。

沙和「名前は何ていうの〜?」

沙和が聞くと

小一刀「ほんごうかずとっていうのでちゅ～」

小一刀が言うと

沙和「（会長さんの弟かな～？）」

沙和は思っていたが

小一刀「可愛いいお姉ちゃんここどこでちゅか？」

可愛いいと言われた沙和は

沙和「すっごくいい子なの～♪お姉ちゃんについてくるの～」

可愛いいと言われて沙和は疑問を忘れていた。

そして沙和が2年B組に連れていくと

桃香「可愛いい～♪」

ギュ～ッ！

小一刀「お姉ちゃん苦しいよ～！？」

桃香に抱き締められていた。

沙和「桃香ちゃん！そんなに抱き締めたらかずくんが潰れちゃうの～！」

サッ！

沙和は桃香から小一刀を取り上げた。

桃香「ごめんごめん！ってかずくんって何？」

桃香が聞くと

沙和「かずとって名前だからかずくんなの～♪」

沙和が言うと

桃香「ふ～ん、でも一刀くんと同じ名前なんて変わってるねー」

桃香は不思議に思っていた。

が

小一刀「お姉ちゃんどうしたのでちゅか？」

小一刀のつぶらな瞳を見ていると

桃香「かわい～い♪」

ギュ～ッ！

そんなことを忘れてしまった。

桔梗「これこれ、何をしとるか！授業を始めるぞ！」

いつの間にか授業の時間になって担任の桔梗先生が入ってきた。

桔梗「んっ？その小僧は誰じゃ？」

桔梗は桃香に抱かれている小一刀を見付けた。

桃香「迷子のようなんですようちで預かっちゃダメですか？」

桃香が聞くと

桔梗「ダメじゃ！学園を託児所と一緒にするでない！」

ひょいっ！

桔梗は小一刀の首ねっこを掴んだ。

小一刀「高いでちゅ～」

小一刀は上げられたことを喜んでいた。

桔梗「これ小僧！おとなしくせんか！」

掴まれながらも暴れまくる小一刀を桔梗が叱ると

小一刀「うぅ…びぇぇ～ん！」

小一刀は泣き出した。

桔梗「こっ…これ！泣き出すでないわ！？」

桔梗は一生懸命あやすがなかなか小一刀は泣き止まない

穏「子供が泣き出す理由ってお腹が空いたんじゃないですか～？」

穏が言った後、みんなが見つめた先は

ジーーッ。

ドドーンッ！！

桔梗の爆乳だった。

桔梗「何を見つめておるか！わしはまだ乳なぞ出んぞ！／／／」

桔梗が言うと

桃香「そんなに大きいのに出ないなんて役立たずですね」

沙和「だったらせめておしゃぶりの代わりにするの～」

周りがそれはいい考えだと思い、桔梗を見つめると

桔梗「仕方がないのぅ／／／泣かせたわしにも責任あるし少しだけじゃからな／／／」

スッ！

桔梗は服を脱ぎ出したが

凪「あのぅ皆さん、いつの間にか子供がいませんが！？」

バァンッ！。

凪の言う様にいつの間にかさっきまで掴まれていた小一刀の姿が消えていた。

その頃、小一刀は

小一刀「ひっく！ひっく！もう帰りたいよ～」

泣きながら廊下を歩いていた。

ちなみに一刀は小さい頃、危険を感じるとよく脱出する癖があり幼稚園の頃はよく注射の日には抜け出したものであった。

今の一刀は精神的にも子どもなため危険を感じると脱出していた。

小一刀が泣きながら歩いていると

璃々「どうしたの君？」

璃々ちゃんに出会った。

小一刀「あのね、帰りたいのに帰り道が分からないの」

小一刀が言うと璃々は

璃々「じゃあ璃々が帰り道を教えてあげるね♪」

ギュッ！

璃々は小一刀の手を引きながら歩いていった。

この時、小一刀は

小一刀「（何だか心臓がドキドキするでちゅ／／／）」

元の姿でも感じない恋を感じていた。

璃々「この道を真っ直ぐ行くと外に出られるよ♪」

小一刀「ありがとう君って詳しいんだね／／／」

小一刀が顔を赤くしながら言うと

璃々「一刀お兄ちゃんに教えてもらったんだよ♪」

璃々が言うと

小一刀「一刀お兄ちゃん？」

小一刀は自分の名前と同じことに驚いていると

ブシューッ！！

璃々「あれ？何だか煙が出てるよ」

小一刀「えっ？」

小一刀の体から煙が出たことに驚いていると

ブシューッ！！

璃々「うわっ！？」

煙が盛大に吹き出した。

やがて煙がはれていくと

一刀「何でここにいるんだ？」

煙の中から一刀が現れた。

璃々「あれっ？あの子がお兄ちゃんになっちゃった！？」

突然のことに璃々が驚くと

一刀「どうしたのかな璃々ちゃん？」

ヌッ

一刀が聞いてきたので

璃々「何でもない♪」

璃々は忘れることにした。

そして二人が話していると

真桜「会長～！」

遠くの方から真桜の声が聞こえてきた。

真桜「棚を見たら大きくなる薬を発見したで～！」

真桜が薬を持ちながら走ってくると

つるりっ！

真桜「うわっ！？」

ドスンッ！　ポ～イッ！

また真桜は尻餅をついて薬を投げてしまった。

その結果…

バシャッ！

またも一刀に薬がかかってしまった。

真桜「あわわ！？会長だいじょぶかいな！？」

真桜が聞く前に

ブシューッ！！。

一刀から煙が吹き出した。

璃々「お兄ちゃん！？」

真桜「またややこしいことに！？」

やがて煙がはれてくると

大一刀「ここは一体？」

バァーン！。

今度は大人になった一刀が現れた。

璃々「お兄ちゃんがお父さんになっちゃった！？」

真桜「なんでやねん！早く元に戻さんと…！？」

しかし真桜が大一刀を見てみると

さすがは美形の父を持つだけあってなかなかのいい男だった。

真桜「もうちょっとこのままでええかもしれへんな／／／」

真桜は大人になった一刀にみとれていた。

結局一刀が元に戻ったのは会議で出かけていた飛琳先生が帰ってきた放課後だったという。

38時間目「麗羽達の宝探し」（前書き）

久々の登場の麗羽達の話です。

38時間目「麗羽達の宝探し」

聖フランチェスカ学園・倉庫

この場所には創立以来のものが中に入っている。

普段は生徒会長である一刀が鍵の管理をしているのだが

猪々子「麗羽様！漢組が体育している間に鍵を盗んでおきましたよ！」

麗羽「ご苦労ですわ猪々子」

久々の登場で忘れている人もいるかもしれないがこの人は元生徒会長の袁紹麗羽である。

斗詩「麗羽様～、かってに鍵を盗んでよかったんですか～!?会長さんなら理由を話せば鍵を渡してくれたと思いますけど…」

斗詩が言うと

麗羽「お黙りなさい！何でこのわたくしがあんなブ男さんに頼まなくてはいけないのですの！」

麗羽は自分を会長の座から蹴り落とした一刀をひどくにくんでいた。

猪々子「麗羽様、そんなことよりさっさと中に入りましょうよ誰か来たら大変ですよ!?」

猪々子が言うと

麗羽「あなたにそんなこと言われなくてもわかっていますわ！」

ちなみに今は授業中であり、この３人は授業をサボっていた。

ガチャリッ！

倉庫の鍵を開けて中に入ると

麗羽「さっさと誰か来る前にお宝を探しますわよ！」

３人の目的は宝探しだった。

猪々子「でも麗羽様、何でこの倉庫にお宝があると思ったんですか？」

猪々子が聞くと

麗羽「わたくしの勘ですわ！」

キッパリ！

これを聞いた二人は

猪々子「雪蓮先輩の勘なら頼りになるけれども」

斗詩「麗羽様の勘は当てにならないもんね」

二人がひそひそ話していると

麗羽「二人共！無駄口たたいてないでさっさと探しなさい！」

麗羽が怒鳴り出した。

そして倉庫で宝を探すこと３０分。

いまだに宝は見付からなかった。

斗詩「見付かりませんねー！？」

麗羽「諦めないで探しなさい！」

麗羽も実は探すのを諦めかけたその時、

猪々子「んっ！？何か古い紙があるぞ」

猪々子が一枚の紙を見付けた。

麗羽「猪々子、何か見付けましたか？」

麗羽が猪々子に近寄ると

猪々子「何かボロい紙を見付けましたよ」

麗羽「ボロい紙ですって？」

スッ！

麗羽が猪々子から紙を奪って見てみると

麗羽「こっ…これは!?」

その紙は所々虫食いがあるが確かに『フランチェスカ学園の屋内プールにた〇らを埋める』と書かれていた。

麗羽「これはまさしく宝の地図ですわ!?二人共、探しに行きますわよ!」

斗詩「今からですか!?授業はどうするんですか!?」

斗詩の質問に麗羽は

麗羽「授業なんて行ってたら宝を横取りされてしまいますわよ!授業はサボりますわ!」

※絶対に麗羽の真似はしないでください。

斗詩「はぁ〜、そんなんのだから夏休みに補習を受ける羽目になったのに」

斗詩は溜め息をつくしかなかった。

猪々子「諦めなって斗詩、麗羽様についてきた時点でこうなることは分かるじゃないか!それに麗羽様の言う通り早くしないと奪われちまうしな!」

斗詩「もうっ、文ちゃんまでそんなこと言って!今は授業中だから私達以外はみんな授業を受けているからこの事に気付く人なんていないのに〜」

確かに普通なら斗詩の言う通りなのだが彼女達は知らなかった。学園で唯一授業を受けていなかった人が近くで話を聞いていたことを

その人は…

璃々「（宝の地図～？お兄ちゃんに知らせなくちゃ！）」

この学園の生徒副会長である璃々ちゃんだった。

そして授業が終わった時

一刀「麗羽達が授業をサボって宝探ししてるって！？」

璃々「うんっ！」

璃々は生徒会長室にてさっきのことを一刀に報告していた。

一刀「どうりで倉庫の鍵がなくなっていたはずだ！？」

一刀が少し驚いていると

璃々「お兄ちゃん！璃々も宝探しがしたい♪」

キュゥ～ン。

まるでチワワのようなつぶらな瞳をする璃々の頼みを一刀が断れるはずがなく

一刀「仕方がないな、麗羽達を連れ戻すついでに宝探しをしよっか

」

璃々「やった～♪」

璃々は喜んでいた。

しかしこの時、一刀は気付いてなかった。生徒会長室の扉付近で話を盗み聞きしているものがいることを

？「いいこと聞いちゃったわね♪」

漢組

卑弥呼「北郷は会長として授業をサボった麗羽を連れ戻すために午後の授業は休むそうじゃ！」

この時、漢組の生徒は思った。

全員『（一刀もサボりだろ）』

しかし決して口に出す人はいなかった。

その頃、麗羽達は

麗羽「この地図によると入り口前の噴水から右に３０m進んで…」

斗詩「あのぅ麗羽様、宝の場所が分かっているのに何でいきなり宝の場所に行かないで探しに行くんですか？」

斗詩が聞くと

麗羽「あなた馬鹿じゃありませんの！それではおもしろみがないではありませんか！」

ちなみに当然のごとく3人の中で一番馬鹿なのは麗羽である。

麗羽「そんなことよりもさっさと行きますわよ！」

そして麗羽達は進んでいった。

その頃、一刀と璃々は

璃々「お兄ちゃん、どうやってお宝見付けるの？」

確かに地図を持っていない一刀達では探しようがないどうするのか璃々が聞いてくると

一刀「ちょっとした秘策があるのさ♪」

そして一刀がついた先は電話ボックスだった。

一刀「確か受話器を持って０１２３４５６７８９を押すと…」

ピッピピピッ！

一刀がお金を入れずに番号を押すと

ウィーンッ！

電話ボックスから音が鳴り出した。

一刀「この画面を見てごらん」

璃々「？」

璃々は？を浮かべたが一刀に抱かれて画面を見てみると

言い忘れていたがこの電話はテレビ電話である。

そして璃々が画面を見た先には

璃々「あれっ？道場が見えるよ！？」

ちなみに今いる場所から道場まではかなり離れている。

一刀「今写っているのは道場近くにある電話ボックスの画面だよ」

簡単にいうと他の電話ボックスの見た画面が見えているのだ。

一刀「これを使って麗羽達を探そう！」

璃々「うんっ♪」

なぜ一刀がこの事を知っているかというと、この学園の施設のほとんどが飛琳先生によって既に改造されている。先頭中でも同じことをしていたのでもしかしたらと一刀は思ったのだった。

そして一刀達が麗羽達を探していると

一刀「いたっ！屋内プールの近くか！」

ついに麗羽達を発見した。

一刀「行こうっ！璃々ちゃんっ！」

璃々「うんっ！」

ダダッ！

一刀は璃々ちゃんを背負いながら走り出した。

？「面白そうなことになったわね♪」

そしてその様子をみていた人も後を追って行った。

屋内プール

麗羽「地図によるとこのプールの床下にお宝があるそうですわね。二人共準備はよろしいですか！」

猪々子「準備万端っすよ！」

斗詩「いいのかな？」

ジャキンッ！

二人の手にはドリルとスコップが握られていた。

麗羽「お宝が見付かればわたくしが再び生徒会長になってあのブ男さんに一泡吹かせてやりますわ！オーホッホッホ！」

麗羽が高笑いしていると

一刀「残念だがそれは無理な話だ！」

ビクッ！？

麗羽達が声のした方を向くと

一刀「あんたに生徒会長をやらせたら学園がめちゃめちゃになるからならせるわけにはいかないぜ！」

璃々「お兄ちゃんの言う通りだもん！」

猪々子「会長の言う通りだ！」

斗詩「麗羽様に会長は無理です！」

麗羽「何言ってますのあなた達！＃＃＃」

猪々子・斗詩『あっ！？』

どさくさに紛れて猪々子と斗詩も叫んでいた。

一刀「宝はともかく、生徒会長を渡すわけにはいかない！」

一刀が叫ぶと

？「宝はいらないんだ♪だったら…」

ビュンッ！

急に人が飛んで来て麗羽達を抜き去ると抜き去った人は

雪蓮「宝は私が貰うもんね～♪」

一刀達の話を盗み聞きしていたのは雪蓮だった。

雪蓮「宝が手に入ったら女子寮管理人なんて辞めて豪遊するんだもんね～♪」

ダダッー！

走り去る雪蓮を見た麗羽は

麗羽「お待ちなさい！宝はわたくしの物ですわよ！」

猪々子「麗羽様待ってくださいよー！？」

斗詩「すみません会長さん！お説教なら後で聞きますから！」

ダダッ！

麗羽達も走り出した。

一刀「あっ！？待てっての！璃々ちゃん行くよ！」

璃々「うんっ！」

一刀達も走り出した。

そして全員が屋内プールに入ろうとした時、

キ～ンコ～ンカ～ンコ～ン♪

授業終了のベルが鳴って少しした時に全員が入っていった。

次々と人が中に入るなか

一刀「待たないかっ！」

バタンッ！

最後に走っていた一刀達が扉を開けるとそこには…

愛紗「／／／」

思春「／／／」

華琳「／／／」

一刀「あれっ！？」

前の授業の体育が終り、スク水から着替えていた2年C組がいた。

そして当然のごとく…

愛紗「堂々と入るとはいい度胸だな！＃＃＃」

思春「殺してやる！＃＃＃」

華琳「見損なったわよ一刀！＃＃＃」

一刀「誤解だー！？」

ドガバキンッ！！

2年C組のほとんど全員から集団リンチを受ける一刀であった。

一方、先に入った雪蓮と麗羽達は

麗羽「こうなったら雪蓮さんを倒してしまいなさいな！」

猪々子・斗詩『あらほらさっさー！』

二人が飛びかかるが

雪蓮「あらっ、学生時代『江東の小覇王』と呼ばれた私に二人がかりとはいえ勝てるのかしら？」

雪蓮の実力は恋くらいのものであった。雪蓮が言うと

斗詩「確かに武力では敵いません（かないません）が弱点を知ってますから！」

シュッ！

そして斗詩は懐から一枚の紙を飛ばした。

雪蓮「あの紙は！？」

飛ばされた紙には一万円札が挟まっていた。

雪蓮「お金～♪」

ピョンッ！

雪蓮はお金めがけて走り出した。

麗羽「さてと、ようやく邪魔者が片付いたところで宝を掘り起こしますわよ！」

バコッ！。

まずはプールのタイルをはがすと

ザクザック！

床を掘り始めた。

そして

カツンッ！

何かに当たると

麗羽「ついにお宝発見ですわ！」

麗羽が見てみるが

猪々子「おかしいですよこれ。何で汚い袋に入ってるんですか？」

床から出たのは古いゴミ袋だった。

斗詩「それに袋が黒くて分かりにくいですけど中身も腐ってますけど！？」

宝が腐るなんてありえないと考えていると

一刀「ちょっと地図を見せてみな！」

そこに木刀で体を支えた一刀が現れた。

一刀が地図を見てみると

一刀「これは宝の地図なんかじゃない！ゴミ捨て場の見取り図だ」

麗羽達『ゴミ捨て場の見取り図～！？』

麗羽達は驚いた。

一刀「前に学園長から古い見取り図を倉庫にしまうように言われたから間違いない」

一刀が言うと

麗羽「そんなっ！？」

猪々子「くたびれ損の骨折りもうけかよ！？」

斗詩「逆だよ文ちゃん！？」

バッターンッ！

麗羽達は倒れ出した。

ちなみに地図の『屋内プールにた〇らを埋める』は宝ではなく俵（たわら）であることが後に判明した。

そして麗羽達は授業をサボった罰として補習授業が行われることになった。

そして真実を知った雪蓮も寝込んだという。

38時間目「麗羽達の宝探し」（後書き）

まず始めに気付いたことがあります。何と前話の時点で投稿話数が前作を合わせて１００話を達成しました。これからも頑張りますのでよろしくお願いします。

39時間目「恋とアニマルデート」

それはある日のこと

恋「…（もぐもぐ）」

いつものように恋がお昼を食べていると

ねね「恋殿～、阿蘇阿蘇（あそあそ）を買ってきましたぞー！」

阿蘇阿蘇…女の子に人気のファッション雑誌

何故おしゃれに興味のない恋がこの本を欲しがったのかというと

ねね「今週号は番外としてグルメ情報記事が載っているのです！一緒に食べに行こうですぞ♪」

というわけだった。

パラパラッ

そして恋がページを捲って（めくって）いると

恋「…！？」

一つの記事に注目した。

ねね「なになに…『3丁目の近くに美味しいラーメン店近日ＯＰＥＮ！』ですかですぞ！」

ねねはラーメン店の記事を見ていたが恋が見ていたのは

『男の人と過ごす休日！絶対に彼氏をゲットする方法』

隣の記事の方だった。

恋「（…休日に一刀とデート）」

今、恋の中では一刀とデートしている妄想が浮かんでいた。

漢組

飛琳「であるからしてこの方式は…」

飛琳先生は漢組の副担任になった。

授業が始まっていると

ガラッ！

漢組の教室の扉が開いて

恋「…」

恋が現れた。

飛琳「君は確か2年B組の呂布恋だったよね。何か用かな？」

飛琳が聞くと

恋「…恋、一刀に用があってきた」

恋が言うと

飛琳「北郷、ご指名だぞ！」

飛琳が一刀を呼んだ。

呼ばれた一刀は

一刀「何か用？」

前に出てきて聞くと

恋「…ここじゃあ恥ずかしいからこっちに来る」

グイッ！

一刀「えっ！？」

恋は一刀の手を引いて教室から飛び出した。それを見た及川は

及川「何かあるで」

とにらんでいた。

その頃、恋に引っ張られた一刀は

一刀「どこまで行くんだよ！？」

まだ引っ張られていた。

恋「…ここならいい　」

ピタッ

そして恋がゴミ捨て場の前で止まると

一刀「一体何か用!?　」

一刀の問いに恋は

恋「…今度の日曜日に恋とデートする　」

スッ!

恋はそう言うと一枚の動物園のチケットを一刀の前に出した。

一刀「デートってねねも一緒に?　」

一刀は恋はいつもねねと一緒なので聞いてみると

恋「（フルフル）…違う、恋と二人で　」

恋は首を横に振って答えた。

その日は特に予定はなかったので一刀は

一刀「別にいいよ　」

即答で答えた。

恋「…じゃあ、日曜の朝９時に動物園前で待ち合わせする♪」

一刀「分かったよ」

しかし二人は気付いてなかった。この話を及川が隠れて聞いていたことを

及川「成程ね～」

話を聞いた及川は

及川「恋ちゃんには悪いけどもかずピーばかりにいい思いはさせへんで！」

漢組２年生　及川祐。
趣味はＡＶ鑑賞と女子のデータ集め
彼女いない歴１７年、中学時代につけられたあだ名が『実界の百手太臓』さらに人の幸せ（恋愛）を破壊することから幸せクラッシャーと呼ばれていた。

及川は駆け出すと向かった先は

１年Ｃ組

ねね「何か用なのですかへぼ眼鏡、ねねはお前なんかと話すことなんてないのです！」

及川「まぁそう言わんと実はな…ごにょごにょ」

及川はねねに恋と一刀がデートすることを伝えると

ねね「何ですと―!?」

ねねは盛大に驚いた。

ねね「まさか恋殿がへぼ会長をデートに誘うだなんて何かの間違いなのです!?」

ねねが必死に現実逃避していると

及川「かずピーのことやからデートにかこつけて恋ちゃんを…」

及川が言うとねねがビクッと反応して考え出した。

～ねねの妄想～

動物園に来た恋と一刀は互いに楽しんでいた。

恋「…一刀、この動物園に象がいない」

恋が象がいなかったことに落ち込んでいると

一刀「象ならこっちだよ!」

グイッ!

一刀は恋の手を引っ張った。

そしてついた先は人気のないところ

恋「…象はどこ？」

恋が聞くと

一刀「象なら…」

ガシッ！

一刀は恋を押さえると

一刀「ここにいるじゃないか！」

バァーン！。

〈これより先の記載は危険ですので想像したい方はどうぞご自由に〉

～妄想終了～

考え終えたねねは

ねね「恋殿が危ないのですっ！このねねが命にかえましても恋殿をお守りするのですよ！」

及川「（おもろなってきたな♪）」

悪魔のような及川だった。

そして日曜日

動物園前

一刀「少し早く来ちまったな」

一刀は母の切刃から女の子と出かける時は必ず待ち場所には一時間前からいることと言われたので一時間前から待っていた。

そして一刀の行動を監視するため及川とねねも一時間前から監視していた。

及川「一時間前から待つなんてさすがかずピーやで！？」

ねね「待ちすぎなのです！おかげで朝は早かったのです！」

そして一時間後

恋「…お待たせ♪」

一刀がやっと来た（一刀が早く来すぎたせいなのだが）恋を見てみると

恋「…どう？」

パァーンッ！

恋の服装はキラキラしてフリフリのついた可愛いい服だった。

恋「…沙和に服を貸してもらった。変じゃない？」

すると一刀は

一刀「変じゃないよ、似合ってるよ」

恋「…（ポッ）／／／」

恋は顔を赤くした。

そして陰から見ていたねね達は

及川「私服の恋ちゃん！お宝写真やで～！」

カメラを構える及川に対し、

ねね「恋殿、似合いすぎて素敵ですぞ／／／」

ねねは顔を赤くしていた。

そして一刀と恋は

一刀「それじゃあ時間だし中に入ろうか」

恋「…（コクリッ）」

動物園の中に入って行った。

それを見たねね達は

ねね「中に入っていったのです！追い掛けるのです！」

及川「よっしゃ行くで！」

二人も中に入ろうとしたが

係員「入るなら入場料払ってください」

係員に止められた。

ねね「仕方ないのです、お前が払うのです！」

及川「何でわいが！？」

及川が抗議しようとするが

ねね「さっさと払うのです！！＃＃＃」

ギロリッ！

ねねが睨んできた。

及川「わかりました！？」

及川はビビりながら入場料金高校生２人分　８０００円を払うのであった。

その頃、一刀と恋は

恋「…動物がいっぱい」

動物好きの恋にとって動物園はまさに楽園だった。

恋「…次はあっちのキリン見る！」

一刀「そんなに急がなくてもキリンは逃げないからさ！？」

恋は一刀の手を引きながら走っていった。

そしてねね達は

ねね「あのへぼ会長め～！恋殿に馴れ馴れしいのです！！へぼ眼鏡、さっさと行くのです！」

ねねが及川を呼ぶと

メス猿「ウッキ～／／／／」

メス猿「ウッキ～／／／／」

及川「わいってモテモテやな～」

猿山のメス猿にモテまくりの及川だった。

ねね「あんな奴ほっておいていくのです！！」

ねねは怒りながら一刀と恋を追って行った。

その後、一刀と恋は

恋「…この子可愛いい」

ふれあいコーナーに行ってモルモットや兎を抱いたり、

恋「…あのお肉欲しい」

ライオンが食べているお肉を恋が欲しがったり

恋「…一刀の大きい」

一刀「交換してあげるからさ」

一刀が食べていたアイスが自分のより大きいと言って欲しがったりした。

そしてそんな二人を見て悔しがるねねであった。

それから時間がたって日が暮れた時

〈まもなく閉園時間です。忘れ物がないようお気を付けてお帰り下さい〉

アナウンスが流れると

一刀「もう閉園時間だし帰ろうか」

一刀が聞くと恋は

恋「…まだ帰りたくない」

一刀「でもアナウンスが…」

一刀が最後まで言おうとした時

及川「助けて～！？」

及川の叫び声がしたので一刀達が振り向くと

及川「放してや！？」

メスゴリラ「ゴホゴッホ／／／／」

檻から脱走したメスゴリラに及川が捕まっていた。

係員「あのゴリラは近年旦那を失ってショックだったんだ！？」

ちなみに旦那の顔は及川にそっくりだったという。

ゴリラは及川を大事に抱えていたが

ズルリッ！

及川の眼鏡がずれて素顔を見ると

メスゴリラ「ガホガッホ！！！＃＃＃＃」

ゴリラは興奮して及川を放り出して暴れだした。

係員「大変だ！？何とかしないと！？」

とはいえ暴れるゴリラを普通の人が押さえられるはずがない！？

普通の人ならば…

ビュンッ！

係員が驚いている隙に一刀と恋が飛び出していった。

そして一刀は

ブォンッ！　ガシッ！

繰り出されたゴリラの拳を受け止めると

一刀「おとなしく…しろっ！」

バターンッ！

ゴリラに一本背負いを喰らわした。

そして倒れたゴリラに恋が近付くと

恋「…暴れちゃダメ！おとなしくする」

撫で撫で

恋が撫でるとゴリラの興奮がおさまってきておとなしくなった。

しばらくして

係員「ありがとうございました！これはお礼です」

一刀と恋はお礼として年間フリーパスと饅頭(まんじゅう)をもらった。

動物園を出た後二人は

一刀「すごいな恋、ゴリラをおとなしくさせるなんて　」

一刀が言うと

恋「…（フルフル）恋はすごくない、投げ飛ばした一刀の方がすごい　」

恋は首を横に振って言った。

一刀「それじゃあ二人がすごいんだな！さてとそろそろ帰るか　」

一刀が帰ろうとすると

恋「…待って！こっちを向いて　」

一刀「んっ？　」

一刀が恋の方を向くと

ブチュッ！

恋は一刀の唇にキスをした。

恋「…今のは恋のファーストキス、これで完了　」

一刀「完了って？／／／」

一刀が聞くと恋は鞄から一冊の阿蘇阿蘇を取り出した。

恋「…ここに書いてある」

スッ！

一刀は恋の指差したところを見てみると

必ずうまくいくデートの方法

・デートの誘いは少々強引に！

・服装は可愛いい服で

・デートの帰りにはファーストキスをプレゼント

と書かれていた。

一刀はこれを見て呆気にとられていると

タタタッ！

ねね「ち～ん～きゅ～う～旋風回転キーック！！」

ドカッ！

一刀はねねの蹴りを喰らってしまった。

ねね「このへぼ会長め！よくも恋殿の唇を奪いやがったですね！死んでお詫びするのです！！＃＃＃」

ねねはあきらかに怒っていた。

一刀「待てって誤解だ！？」

一刀は言うが

ねね「問答無用なのです！！」

ドカカッ！

恋「…？」

その後、一刀は寮に着くまでの間ねねに蹴られまくったという

一方、ゴリラに投げ出された及川はというと

〈本日もご来店ありがとうございました。またのお越しをお待ちしております〉

閉園後の動物園にて

及川「何でこんな目にあうねーん！？」

オランウータン「ウホッ♪」

オランウータンに好かれていた。

幸せクラッシャー及川祐。相手の幸せを破壊しようとするがいつも失敗し自分がひどい目にあう自業自得男である。

４０時間目「頑張れ凪ちゃん！」（前書き）

今回は凪の話です。

４０時間目「頑張れ凪ちゃん！」

ある日のこと

凪「ハァ～」

２年Ｂ組の楽進凪が溜め息をついていた。

実は彼女は今、病にかかっている。

そしてその病はドクターボンベ、ブラック・ジャック、南方仁ですらも治せなかった。

彼女がかかえている病、それは…

凪「会長さん…」

恋の病である。彼女は生徒会長である北郷一刀に恋をしていた。

凪「他者を寄せ付けぬ圧倒的武力、学園のほぼ全員を旅行に誘う優しさ、そして気の使い手でもある！」

学園内でも気を扱うものは以前なら凪と祭くらいしかいない。

しかし一刀は自分なんて足元にも及ばないなかなかの気の使い手であることを知って一刀に注目しだした。（実際は他にも気の使い手が出来たが凪は特に一刀を注目していた）

できることならばすぐにでも愛の告白に行きたいのだが

凪「でもこんな傷だらけの女なんて…」

実は凪は中学時代に好きな人が出来て両思いになったのだが、車に撥ねられそうな男の子を助けた際に車に撥ねられてしまい、一命はとりとめたものの全身に消えない傷ができてしまったのだ。

しかもその時見舞いに来てくれた彼氏から

彼氏「傷ものはいらないんだよ！」

冷たい一言を突きつけられて凪は心と体に重症を負った。（その彼氏は激怒した凪に殴られて入院した）

何度自殺しようと思ったが凪には自殺しようとしても止めてくれる友達がいた。

真桜と沙和である。

二人は何とか凪を励ました。

真桜「簡単に死ぬなや！生きてれば絶対にええ事があるで！」

沙和「そうなの！いつか凪ちゃんのことを愛してくれる男がきっと現れるの！」

二人から勇気をもらった凪は死ぬのをやめた。

そして三人は仲良く聖フランチェスカ学園に入学して何もないまま

1年が過ぎていき1年後…

一刀が転入してきた。

凪もはじめは興味を持っていなかったが

黄巾高校に殴り込み、春蘭を圧倒する武力。会長争奪戦での優しさを見たり聞いたりして一刀は他の男とは違うと感じていた。

そして副会長募集時に副会長に立候補しようと会長室に乗り込もうとするが勇気が出せずに璃々に先を越されてしまった。

そして一刀の実家に来た時に一刀が気の使い手であることを知り、この人ならばと凪自身も思ったのだが

凪「やはり私なんて…」

過去のトラウマが原因で勇気が出せなかった。

もし一刀も「傷ものはいらない！」と言ったらどうしよう。それが凪を心配させていた。

そしてそんな凪の様子を見る者達がいた。

真桜「凪のやつまだトラウマになっとるんやな」

沙和「凪ちゃんかわいそうなの～」

孤狼「一刀が見た目で判断するはずないってのに」

溜め息をつく凪を見ていた三人は

真桜「会長狙う女なんてごまんとおるんやから凪も早くしなアカンと先越されるちゅうのに！」

沙和「この間も恋ちゃんが洋服貸してほしいって言ってきたの～」

孤狼「一刀が来るのを待ってたら何時になるかわからないぞ！」

三人が凪の恋について悩んでいると

孤狼「どうせなら俺達で二人をくっつけないか？」

真桜「兄さんええ事言いますな～♪」

沙和「ナイスアイディアなの～♪」

半分は友情のためだがもう半分はただ面白いからという理由で賛成する二人だった。

こうして三人による凪と一刀をくっつけちゃおう作戦が開始された。

そして次の日

凪「服を見たいから付き合ってほしい？」

凪は下校の時に真桜と沙和に誘われた。

沙和「そうなの～♪この間かわいい服を見付けたから買い物したいから付き合ってほしいの～」

真桜「親友のうちらしか分からんセンスがあるかもしれんからな♪」

二人に言われた凪は

凪「まぁ今日は特に予定もないしたまに服屋に行くのもいいかもしれないな」

凪は買い物に付き合うことにした。

そして下校中

沙和「見付けたの～！このお店なの～」

目的の服屋に到着した。

真桜「さっさと中に入ろうやないか♪」

凪「こっ…こらっ！押すんじゃない！」

真桜が凪を店に入れてる間に沙和は携帯を取り出すと

沙和「こちらは準備オーケーなの♪そっちはどうなの？」

孤狼「こっちもようやく会長の仕事が終ったようだぜ！」

電話の相手は孤狼だった。

実はこの計画ははじめから仕組まれていた。

あらかじめ孤狼が一刀から好きな服を聞いておき、その服が置いてある店を調べておいてそこに一刀と服を着た凪を鉢合わせさせる作戦なのだ。

孤狼「それじゃあ今から一刀をそっちに向かわせるからそっちは頼むぜ！」

沙和「わかったの～」

ピッ！

孤狼「あとは一刀を向かわせるだけだな」

孤狼が一刀の方を向くと

及川「かずピー！帰りにカラオケ寄らへんか？」

及川が一刀を誘ってきた。

一刀「及川がそんなこと言うなんて珍しいな、何か下心があるだろ？」

一刀が聞くと

及川「んなもんないって！？わいはただ友達としてカラオケに誘っただけやがな！？」

そう言う及川だが、実は下心があった。

及川「（合コンの相手がかずピー指名したやなんて言ったら絶対に来ないやろな!?）」

ということだった。

一刀「でも俺音痴だし、行ってもつまらないぞ」

及川「歌は歌わんでもいいねん!座ってればいいだけやからさ!」

及川がどうしても一刀をカラオケに行かせるために言っていると

ガシッ!

及川は頭を掴まれた。

孤狼「悪いな、一刀はカラオケに行くにはいかねぇんだよ!」

及川の頭を掴んだのは孤狼だった。

孤狼に睨まれた及川は

及川「でもかずピーがどうしても必要でして!?」

ビビりながら反論するが

孤狼「んなもん知るか!カラオケならテメェ一人で…」

孤狼は大きくふりかぶると

孤狼「行きやがれー!!」

ビューンッ！。

及川を遠くに投げ飛ばした。

及川「あ～れ～！！？」

キランッ★彡。

そして及川は星になった。

一刀「ありがとな兄貴、及川を飛ばしてくれてよ！じゃあ俺はこれで…」

一刀が帰ろうとすると

ガシッ！

孤狼に肩を掴まれた。

孤狼「一刀は俺に付き合いな！」

一刀「へっ？」

一刀はわけを知らないまま連れていかれるのであった。

その頃、真桜達は

沙和「凪ちゃんかわいいの～♪次はこの服を着てほしいの～♪」

凪「おい沙和っ！いい加減にしてくれっ！／／／」

凪は沙和の着せかえ人形になっていた。

そんな時、

ピッピリ！ピョーピンピーピ！

真桜の携帯が鳴り出した。（着メロは気にしないで下さい）

真桜は携帯を開くと

真桜「『一刀を連れていくことに成功！すぐそちらに向かう　孤狼』かいな」

真桜は携帯の内容を沙和に伝えると

沙和「わかったの～！もう少し着せかえしたかったけど仕方がないの～」

着せかえは時間稼ぎではなく単なる沙和のお遊びだった。

二人が話していると

凪「もういいだろ私は帰るぞ！」

凪が帰るために店の外に出ようとすると

真桜「もうちょい待ってや！」

沙和「次の服は絶対凪ちゃんに着てもらいたい服なの～！」

凪「私に着てもらいたい服？」

そして二人は孤狼から渡された一刀の好きな服が書かれたメモを取り出した。

真桜「ほほぅ、会長はんはこんな服が好みなんやな～♪」

沙和「結構センスがいいの～♪」

凪「？」

二人の行動に凪は？だった。

しばらくして

孤狼「この店に入ろうぜ一刀！」

一刀「ここって服屋じゃないか！？」

孤狼が一刀を連れて店に到着した。

孤狼「とにかく入れよ！」

ドンッ！

一刀「うわっ！？」

バタンッ！

孤狼に押されて転んだ一刀が見たものは

凪「か…会長さん!?」

キラーンッ!

一刀「これは!?」

一刀の目線の先には

バニ〜!!

バニーガールの服を着た凪がいた。

真桜「よっしゃ行けや凪!」

沙和「そこで脳殺ポーズなの!」

二人が騒いでいると

孤狼「ありゃなんだ?」

孤狼の質問に対して

真桜「何って、兄さんが渡してくれた紙に一刀はセクシーな服が好きって書いてたから」

スッ!

真桜が紙を孤狼に差し出すと

孤狼「！？」

孤狼は驚いた。実は…

孤狼「（しまったー！？間違えて及川が好きな服を書いた紙を渡しちまった～！？）」

ということなのだ。

そして一刀と凪は

凪「（やはり傷だらけの私にはこんな服は似合わない、しかもこの姿を会長に見られた！／／／）」

凪が顔を下げて赤くなっていると

バサッ！

凪に一刀の上着が被せられた。

一刀「その格好じゃあ風邪ひくだろうから着なよ／／／」

一刀が顔を赤くしながら言うと

凪「ありがとうございます／／／」

凪も顔を赤くしてお礼を言った。

そしてその様子を見ていた三人は

真桜「これでいいのかな？」

沙和「一応会話はできたけど…」

孤狼「まぁまぁ、凪にしてみれば大きな一歩じゃないか！」

孤狼の言う通り凪は大きく前進した気がした。
（孤狼の誤魔化しだが）

その後、凪は制服に着替えて一刀に寮まで送ってもらうのだった。

ちなみに投げ飛ばされた及川はというと

及川「何でこんなとこにおんね～ん！！？」

及川は東京タワーまで飛ばされていた。

その後、結局合コンには間に合わず女の子達に嫌われる及川だった。

41時間目「危険な山岳訓練」

とある日の土曜日

一刀「クソッ！なんてこった！」

我らが主人公北郷一刀は

一刀「まさかこんなとこに落ちるとはな！？」

ある山の崖下にいた。

しかも…

蓮華「傷は大丈夫なのか？」

蓮華も一緒なうえに

一刀「まぁさっきよりは痛みがひいたかな？」

一刀の右足は大きく斬られていて重症だった。

何故こんなことになっているのかというと、話は今朝に遡る（さかのぼる）。

今朝、聖フランチェスカ学園

卑弥呼「今日は2年生による1泊2日の山岳訓練の日である！山の中は迷いやすく危険がいっぱいなので気を付けるのであるぞ！」

生徒達『はいっ！』

卑弥呼「それではあとのことは頼みましたぞ飛琳先生！」

飛琳「まかしてください」

卑弥呼が山岳訓練の間、漢組の授業は副担任の飛琳先生がすることになっている。

卑弥呼「それでは出発なのじゃ！」

こうして2年生を乗せたバスは山の方に向かっていった。

移動中のバスの中

天和・地和・人和『前髪かすめた…』

バスの中は役萬姉妹のライブで盛り上がっていた。

一刀「及川も災難だよなこんな日に病欠だなんて」

華佗「俺が治療した方がよかったかな？」

左慈「どうせ仮病だろうが！」

その頃、男子寮・及川の部屋

及川「こんな天気のいい日に山岳訓練なんてやってられるかい！今日と明日はＡＶ鑑賞や♪」

左慈の言う通り仮病だった。

再び戻ってバスの中

蒼魔「一刀も歌わないか？」

一刀「えっ！？」

中学時代からカラオケに行ってないので蒼魔達は一刀が音痴なのを知らない。

桃香「えぇっ！私も一刀くんの歌聞きた～い♪」

蓮華「わ…私も是非！」

華琳「一刀これは命令よ、嫌なら前に立て替えた校舎の修繕費（16話参照）を全額払いなさい！」

みんなに言われた一刀は

一刀「どうなっても知らないからな！？」

スッ！

一刀がマイクを手に取ると

ワー！ワー！

回りから声援が飛んできた。

そして…

一刀『ま～え～が～み～か～す～め～た～…♪』

ボエ～～♪

一刀の音痴な歌が流れ出してほとんどが苦しみ、倒れるなか無事だったのは

春蘭「みんな疲れて寝たのか？」

卑弥呼「いい歌声じゃのう！」

一刀と同じく音痴な人だけが助かっていた。

そしてバスは目的地にたどり着いた。

卑弥呼「これより気嫌山（きけんざん）に登るから足元に注意するのじゃぞ！」

気嫌山…崖崩れが多いことで有名な上に時々霧が出てくるので危なくて有名な山。

そしてみんなは山登りを始めると

蓮華「ハァハァ…！？」

蓮華が早くも疲れていた。

思春「蓮華様、荷物を持ちましょうか？」

思春が聞くと蓮華は

蓮華「私に構うな！」

冷たい態度をとった。

そしてすぐに

蓮華「はっ！？済まない思春、持ってくれるか？」

思春「わかりました」

スッ！

思春は一瞬慌てたが蓮華から荷物を受け取った。

その様子を見たみんなは

一刀「何だか今日の蓮華って妙にいらついてないか？」

華佗「どうしたんだろうな？」

二人が話していると

于吉「どうやら姉の雪蓮さんに色々と言われたそうですよ」

于吉が口をはさんできた。

左慈「何でお前がそんなこと知ってるんだよ？」

左慈が聞くと于吉は

于吉「実は同じ読書部の穏さんから相談されましてね、それで分かるんですよ。もちろん私は左慈一筋ですから妬かないで下さいね♪」

ドカッ！

于吉は左慈に蹴られた。

実は于吉の言う通り蓮華の機嫌が悪いのは姉の雪蓮と口喧嘩したことが原因だった。

今朝、女子寮

雪蓮「ねぇ蓮華、あなたって彼氏いるの？」

ブバッ！

蓮華は飲んでいた牛乳を吹き出した。

蓮華「ゲホッ！いきなり何を言うんですか姉様！」

蓮華が聞くと

雪蓮「母さんがさぁいい若いものがぐうたらするくらいなら見合いしろってうるさいのよ！だから蓮華の彼氏を使おうと思ってね♪」

これを聞いた蓮華は

蓮華「何言ってるんですか！妹の彼氏を使うだなんて！！」

蓮華が怒ると雪蓮は

雪蓮「そんなこと言ってホントは彼氏がいないんじゃないの～。そんなんだから尻だけが大きくなるのよ」

ブチンッ！

これを聞いた蓮華がキレた。

蓮華「お尻は関係ないじゃないですか！もう知りません！私は山岳訓練に行ってきます！」

バタンッ！

そして蓮華は怒りながら出ていった。

そして現在にいたるというわけだ

蓮華「（まったく！姉様なんてもう知りませんから！）」

蓮華が怒りながら歩いていると

ボコッ！

蓮華「えっ！？」

蓮華の足元が崩れてしまい

蓮華「うわっ！？」

蓮華は落ちていった。

思春「蓮華様！？」

思春が飛込もうとするが間に合わない。その時、

一刀「蓮華っ！？」

ビュンッ！

一刀が蓮華の落ちた方に飛び出した。

ガシッ！

そして落ちていくなか一刀は蓮華の手をつかまえるがそのまま落ちていった。

思春「蓮華様っ！？」

荷物を置いた思春も後について行こうとしたが

穏「危ないからダメですよ～！！」

ガシッ！

穏に止められた。

思春「放せ穏！私は蓮華様を見捨てるわけにはいかないのだ！」

思春は穏を振り払おうと暴れると

華佗「ゴッドヴェイドォー！麻酔拳！」

ビシッ！

華佗の技が思春に直撃して思春は

思春「ＺＺＺ～…」

眠ってしまった。

華佗「あんまり興奮すると危ないからな」

蒼魔「それに一刀がついているから大丈夫だろう」

鳳賀「早く卑弥呼にこのことを伝えないとな」

そしてみんなが騒いでいる頃、崖に落ちた一刀と蓮華は

蓮華「いたた…無事なのか？」

どうやら蓮華は無事のようだが

蓮華「一刀、ありが…」

蓮華が一刀の方を向くとそこには

一刀「ハァ…ハァ…　」

一刀は落ちた時に斬ったであろう大きな傷が右足にできて大量の血が流れていた。

蓮華「私をかばった時に!?大丈夫なのか!?　」

蓮華が心配すると

一刀「大丈夫だからさ…　」

ホントは大量の血を流しすぎて意識さえはっきりしていない一刀だった。

そして冒頭にいたる。

蓮華「しかし困ったな、こんな脆い（もろい）崖じゃあ登れないし、助けも呼べない　」

蓮華が考えていると

グキュ～

蓮華のお腹が鳴り出した。

蓮華「（そういえば朝は姉様のせいでまともに食べられなかったし、私の荷物は上にいる思春が持ってるしどうしよう?／／／）　」

蓮華が顔を赤くしながら考えていると

一刀「腹空いたんなら俺の弁当食べなよ」

スッ！

一刀は自分の荷物を蓮華に差し出した。

蓮華「いいのか？」

一刀「俺は朝飯食ってきたからさ、全部食べなおにぎりだけども」

もちろん朝飯を食べたというのは嘘である。

蓮華「しかし私だけ食べるのは嫌な気がするから半分こにしよう」

そして二人はおにぎりを分けあった。

その時、

ポツンッ！　ザーッ！

雨が降りだした。

一方、山小屋に避難していたみんなは

思春「この鎖をほどけ！この雨では蓮華様が風邪をひいてしまう！」

暴れないように鎖で動きを封じられた思春

華佗「落ち着きなって！捜索願いは出したし一刀も一緒だから大丈

夫だ」

華佗は言うが

思春「だから心配なんだ！あの男のことだから今頃蓮華様を…」

～思春の妄想～

蓮華「何をする気だ！？」

嫌がる蓮華に近寄る一刀

一刀「この場所なら誰も来ないから好き放題が出来るぜ！」

ガチャガチャッ

一刀はベルトを外すと

一刀「さぁ行くぜ！」

ガバッ！

そのまま蓮華に襲いかかった。

蓮華「キャーッ！！」

～妄想終了～

思春「てなことになるかもしれないんだぞ！」

何で愛紗と思春は一刀をそんな目で見るのだろうか？

その頃、一刀と蓮華は

一刀「俄龍四神弾（威力弱め）！」

ドカカッ！

一刀は壁に向かって俄龍四神弾を放って壁に穴を開けると

一刀「とりあえず雨風は防げるな」

その穴を寝床にすることにした。

蓮華「早くみんなと合流出来るのだろうか…？」

蓮華が心配していると

一刀「大丈夫だって！俺が必ず送り届けてあげるからさ」

蓮華「一刀／／／」

この場所は暗い洞窟の中、二人っきりだけで他に人はいない

このシチュエーションの中、一刀は

一刀「明日も早いし、さっさと寝よう」

すぐに寝るのだった。

蓮華「（一刀の馬鹿）」

ニブチンの一刀にはまだ理解できていなかった。

そして一夜が明けた次の日

蓮華「もう朝か…」

蓮華が目を開けると

ずんずんっ

何故か地面から遠く離れている目線を見た。

蓮華はどうしたんだ?と思っていると

一刀「もう起きたのか?」

いつの間にか蓮華は一刀におぶされていた。

蓮華「これは一体!?」

蓮華が慌てると

一刀「慌てると落ちるぞ!?」

何故こんなことを言うのかというと実は一刀は蓮華を背負いながら崖を登っていた。

一刀「昨日言ったろ、必ずみんなのとこに送り届けるって」

確かに言ったが無茶しすぎだ。

蓮華を背負いながら崩れやすい崖を落ちないように登り、さらに右足から血が流れている状態で登っているのだから（これは一刀だから多少は大丈夫なわけで真似しないで下さい）

そして一刀は蓮華を背負いながら着々と進んでいき、登りきるまであと少しのところに来た。

一刀「もう少しだからな蓮華…」

蓮華「えぇ…」

蓮華は心配していた。

何故なら一刀は血を流しすぎて顔色が悪い上に手は崖登りの時にボロボロになっていたからだ。

そして次の岩に手をかけた時

ボコッ！

岩が崩れた。

蓮華「キャッ！？」

このままではまた落下してしまう！しかし一刀は

ビュンッ！

蓮華「えっ！？」

蓮華を崖の上に放り投げると

一刀「せめて蓮華だけでもな」

ヒューッ！

そのまま落ちていった。

蓮華「一刀っ！？」

いくら一刀でももう一度落ちたら命に関わってしまう！

蓮華が叫んだその時！

ビュッ！　ジャキンッ！

蓮華の後ろから鎖が飛んできて一刀に巻き付いた。

華佗「危なかったな！？」

蓮華「華佗っ！どうしてここに！？」

いきなり現れた華佗に蓮華が聞くと

凪「会長さんの気をたどって探しに来たんですよ間に合ってよかったです」

華佗の後ろには凪がいた。

華佗「よしっ！鎖が巻き付いたようだから引き上げてくれ！」

この後、一刀は無事に引き上げられて直ぐ様病院に運ばれた。

おかげで山岳訓練は中止となった。

そして帰りのバスの中

思春「申し訳ありませんでした蓮華様、この私がいながらあのようなことになってしまって！」

思春は蓮華に謝ると

蓮華「いいのだよ思春」

蓮華は一刀のことを心配していてそれどころではなかった。

それは蓮華だけでなく一刀のことを思う子全てが心配していた。

桃香「（一刀くん…）」

華琳「（一刀…）」

そして帰りのバスの中は来る時より暗かったという

４１時間目「危険な山岳訓練」（後書き）

次回は一刀の入院についての話です

42時間目「殴られ一刀の一日（病院編）」

聖フランチェスカ学園

この日は朝から騒動があった。理由は生徒会長である一刀が入院したからである。

漢組

及川「華佗、さっちー、うっきー！かずピーが入院したってほんまかいな！？」

及川は山岳訓練の時、仮病していていなかったのでよく知らなかった。

華佗「ホントの話だ」

于吉「噂によると大量出血、足には大怪我、手はボロボロの瀕死の状態だそうですよ」

于吉が言うと

ガクンッ！

及川「そんな！？もしかずピーがそれで死んだら…」

友情を感じて落ち込んでいるんだと思う人は甘い。

及川「この小説のタイトル変わって主役はわいになるな～♪」

この小説は終り、次回から新しく『真・恋姫†無双　及川祐の恋物語』が始まります。

（→嘘ですよ）

そしてそれを聞いた華佗達は

華佗「ありえないだろ」

左慈「即刻打ち切りだな」

于吉「どうせやるなら私と左慈の恋物語の方がいいですね♪」

ドカッ！

于吉は左慈に蹴られた。

みんなにはっきり言われた及川は

及川「ひどいでみんな！友達やからってあんまりやー！」

ダーッ！

及川が教室を出ようとすると

ガラッ！

急に教室の扉が開いて

桃香「退いてっ！」

ドンッ！

桃香が入ってきて及川を撥ね飛ばした。

入ってきた桃香はいきなり華佗の前に立つと

桃香「華佗くん、一刀くんが入院している病院知っていたら教えて！」

ズンッ！

桃香は華佗に迫ってきた。華佗は病院の息子なので知っていると思ったのだ。

華佗「またか、結構人が来るんだな」

桃香「またってどういうこと？」

桃香が聞くと

左慈「今朝から同じこと聞いてくる奴がいたんだよ！」

于吉「華琳、蓮華、月に凪、恋それに他にもいるかもしれませんがね」

それを聞いた桃香は

桃香「みんなずる～い！私も行っちゃうもんね～」

ダッ！

桃香は駆け出すが

グイッ！

愛紗に止められた。

愛紗「姉上、まだ場所を聞いていないでしょう！それに今は授業中ですから行くなら放課後にして下さい！」

桃香「やだ～！今すぐ会いた～い！」

桃香がダダをこねると

愛紗「行くのならお義母上に言いつけますよ」

すると桃香は

桃香「愛紗ちゃんの鬼～！わかったよ放課後まで待つよー」

母には逆らえない桃香だった。

華佗「一刀のいる病院なら隣町の洛陽病院だぞ」

桃香「わかったよ、それじゃあね～」

ダダッー！

桃香は走っていった。

そして扉付近で

及川「痛た…」

ドカンッ！

また及川を撥ね飛ばす桃香だった。

その頃、一刀のいる洛陽病院では

璃々「お兄ちゃん、これお見舞いのお花♪」

一刀「ありがとうね璃々ちゃん」

みんなより先に璃々が見舞いに来ていた。

璃々「体は大丈夫？」

璃々が聞くと

一刀「一晩寝たら大分回復したよ」

一刀は頑丈だけでなく回復力も並外れていた。

とそこへ

ガララーッ！

ナース「北郷さん、具合いはどうですか？」

美人のナースが入ってきた。

一刀「もうほとんど平気ですよ」

とはいえ手には包帯、足にはギプス、輸血パックまでしている一刀だった。

するとナースは

ナース「あんまり無理しないで下さいね♪」

パチッ！

ナースがウインクすると

一刀「はっ…はい！／／／」

一刀は顔を赤くして答えた。

ナースは別名白衣の天使というがあのナースはまさに天使という雰囲気だった。（実際あの人目当てで入院してくる患者がいるほど）

しかし一刀は忘れていた。

璃々「ム～！」

近くに璃々がいたことを

そして璃々は

ボカンッ！★彡

一刀「いたっ！？何するの！？」

璃々は一刀のギプスを殴ると

璃々「知らないもん！」

ダッ！

そのまま去って行った。

そして時は進んで放課後

女達の戦いが始まった。

まず最初に来たのは

蓮華「大丈夫か一刀？」

蓮華だった。

蓮華「私のせいで入院することになってすまないな」

蓮華が謝ると

一刀「別に気にしてないって少なくとも崖登りは俺が勝手にしたことだしさ」

二人が言い合いながらもいい雰囲気になっていると

思春「コホンッ！」

思春がわざとらしく咳を出した。

一刀・蓮華『（ビクッ！？）』

驚いた二人はすぐに離れた。

思春「北郷、蓮華様を助けてくれたのは礼を言うが私は貴様を認めたわけではないからな覚えておけ！」

相変わらず一刀に厳しい思春だった。

蓮華「一刀、これは見舞いの品だ、後で食べるといい」

スッ！

そして蓮華は果物籠を渡した。

一刀「ありがとうな」

そして蓮華はもう少しいたかったが思春に「本日は忙しいので」と言われて退き上げることにした。

そして蓮華が去ってから数分後

華琳「一刀、具合いはどう？」

今度は華琳がやって来た。

一刀「まぁ大丈夫だけど　」

一刀が言うと

華琳「元気そうでよかったわ　」

スッ！　　パチンッ！

そして華琳が指を鳴らすと

春蘭「北郷、見舞いの品だ！　」

秋蘭「後で食べるがいい　」

桂花「別にあんたにやるんじゃないわよ、華琳様がどうしても渡せ！って言うから仕方なく…　」

そこには見舞いの品を持ってきた春蘭達が現れた。

華琳「一刀、果物籠があるけど誰か来たの？　」

華琳が聞くと

一刀「ついさっきまで蓮華が来てたんだ　」

それを聞いた華琳は

華琳「へぇ…そう（先を越されたわ！）」

華琳が悔しい顔をしていると

春蘭「しかし軟弱者め！その程度で入院するとは！」

バシバシッ！

春蘭が一刀を叩いていると

春蘭「もっと体を鍛えんか！」

バシンッ！

春蘭は一刀をおもいっきり叩いた。その結果…

秋蘭「姉者、叩きすぎだ！北郷の腰がおかしな方に曲がっているぞ」

春蘭「へっ…！？」

この後、すぐにナースコールで連絡したが新たに腰の骨を折った一刀だった。

華琳「これ以上いたら悪化しそうだし退かせてもらうわ」

華琳は残念そうに去るのだった。

そして春蘭は華琳にお仕置きを受けるのだった。

しばらくして

一刀「さてとお腹が空いたし果物でも食べるかな」

スッ！

一刀が果物を手に取ろうとすると

月「怪我人が自分で剥いちゃいけませんよ！」

スッ！

果物と包丁は月に奪われた。

月「皮剥きなら私がやりますから♪」

シャーッ！

すると月は高速で林檎の皮を剥いていった。

そしてあと少しで全部剥き終る時に一刀が

一刀「本当に月は手際がいいな！お嫁さんにしたら頼もしそうだよ♪」

なんて言ったので月は

月「へぅ～！？お嫁さんだなんて／／／」

シャーッ！！

顔を赤くしながら月は剥き終ったはずの林檎の皮を剥いていき

その結果…

ポツン。

残ったのは林檎の芯だけになった。

月「すみません！すみません！」

必死で謝る月に対して

一刀「別に構わないよ！俺も変なこと言ったからさ！」

月「一刀さん…」

二人がいい雰囲気になっていると

恋「…一刀、お見舞いに来た」

いつの間にか恋が来ていた。

月「へぅっ！？恋さんいつからいたんですか！？」

月が聞くと

恋「…月が一刀に林檎の芯をあげたときから」

ほぼ始めからである。

恋「…お見舞いの品持ってきたから一緒に食べる」

スッ！

そして恋は饅頭の箱を取り出した。

一刀「ありがとう恋！それじゃあ遠慮なく…」

パカッ！

一刀が箱を開けると

ポツン。

１０個は入る饅頭の箱には饅頭が１個しか入ってなかった。

恋「…ごめん、持ってくる時に待ちきれなくて食べた」

恋が正直に言うと

一刀「仕方ないよ、俺は気にしないからさ」

一刀が言うと恋は

恋「…一刀優しい、だから一刀のこと好き♪」

ギューッ！！

恋は一刀に抱きついてきたが一刀は重傷なので

一刀「いたたー！放してくれ恋！？」

恋「…？」

月「あわわっ！？ナースコールはどこですか！？」

しばらくして、ナースが駆け付けた時には一刀の背骨が折れかけていた。

そして月と恋が帰ると

一刀「何だか俺って入院してからどんどんひどくないか！？」

多分気のせいであろう

一刀「また巻き込まれて怪我するのも嫌だし、さっさと寝ちまおう！」

バサッ！

一刀は布団を被って寝ることにした。

そして一刀が寝てから数分後

桃香「ふぅ、日直だったから遅くなっちゃった」

桃香が遅れてやってきた。

桃香「愛紗ちゃんがいると一刀くんとイチャイチャするなー！って

怒るだろうから振り撒くのも大変だったしね」

今、病院には桃香しかいない

桃香「てなわけで一刀くんの病室にとうちゃ～く！具合いはどう？」

桃香が部屋に入ると

一刀「ＺＺＺ…」

すでに一刀は寝ていた。

桃香「気持ち良さそうに寝てるね♪」

すると寝ている一刀を見た桃香は

桃香「お邪魔しま～す」

スッ！

一刀のベッドに入り込んで

桃香「おやすみなさい」

そのまま寝てしまった。

しばらくして

愛紗「全く姉上に振り撒かれてしまうとは！」

鈴々「鈴々は何と無く気持ちが分かるのだ！愛紗のことだから『おのれ北郷めー！』とか言ってお兄ちゃんを痛めつけるのがオチなのだ」

鈴々にはっきり言われた愛紗は

愛紗「何を言うのだ鈴々！私だって鬼ではないのだ！いくら相手が北郷でも怪我してる者に攻撃なぞせん！」

愛紗は言い切るのだった。

そして二人は一刀の病室に着くと

鈴々「お兄ちゃん元気なのかなのだー？」

愛紗「鈴々、元気でないから入院しているんだろう…」

そして愛紗がベッドを見ると妙に膨らんでいた。

鈴々「お兄ちゃんはここなのだな、起きるのだー！」

ガバッ！

鈴々が強引に布団を取るとそこには…

一刀「ん…ん…」

桃香「う～ん…」

一刀と桃香が絡み合って寝ていた。

それを見た愛紗は

ブチンッ！！

青筋が立っていた。

一刀「ん…誰か来たのか？」

一刀が目を覚まして前を見てみるとそこには

愛紗「私がいないところで何をしているんだ貴様は！！！」

ゴゴゴッ！！

後ろに炎を燃やして、鬼の角がはえた愛紗が立っていた。

一刀「何って…！？」

一刀が回りを見てみると

桃香「う…う～ん」

一刀が桃香を押し倒すような形になっていた。

一刀「誤解だ！？俺はホントに何も知らないんだ！？」

一刀は必死に言うが

愛紗「聞く耳持たん！！＃＃＃」

ドカッ！

一刀「あー！？」

愛紗にボコボコにされる一刀だった。

そして

華佗「具合いはどうだ？」

左慈「起きてるか？」

漢組のみんなが来た時にはすでに

蒼魔「一刀、お前病院に来た時よりボロボロになっていないか？」

ミイラ男と化した一刀が寝ていた。

これにより退院期間が長くなった一刀だった。

ちなみに孤狼は一刀のボロボロの原因が分かったのか後ろで笑っていた。

ちなみに凪はというと

凪「私のようなものが行ってもいいのだろうか？」

必死になって悩んでいた。

43時間目「メイドさん大作戦」

ある日の放課後聖フランチェスカ学園会議室

この場所では重大な会議が開かれていた。

トントンッ！

華琳「上、山、袁紹」

桃香「下、川、馬鹿」

ギィィッ

会議室の扉が開かれた。

これは一種の合言葉である。

華琳「遅かったじゃないの桃香」

蓮華「あなたが一番最後よ」

月「へぅ、待ちくたびれちゃいました」

そこには先に華琳、蓮華、月が待っていた。

桃香「ごめんなさい、宿題忘れて居残りだったからさぁ」

華琳「まったく、まぁメンツも揃ったところで始めましょうか」

蓮華「そうね　」

月「へぅ、　」

桃香「それじゃあいきますよ！　」

彼女達が集まった理由、それは…

全員『第一回北郷一刀を癒してあげよう会議の始まり（よ・です・ね）』

ズバァーンッ！

彼女達が集まった理由は入院した北郷一刀の退院期間が延びたのは自分達に原因があると感じているのだ。

桃香「私は愛紗ちゃんがしょっちゅう痛めつけてるからねぇ　」

蓮華「私も恥ずかしながら思春がな　」

華琳「うちの方も一刀を嫌う春蘭と桂花がいるからねぇ　」

月「私のとこも詠ちゃんとねねちゃんと恋さんとその…私もいますし　」

最後の方を小さく言う月だった。

華琳「とにかく！最近一刀が傷付いている原因は一部私達にあるのよ！　」

というわけで少しでも一刀を癒してあげようと会議を開くのだった。

桃香「どうせなら全員水着姿で密着なんてどうですか？」

月「へぅ、水着ですか！？／／／」

蓮華「確かにいい策だと思うけど／／／そんな事したら余計に一刀が傷付くわ」

～みんなの妄想～

愛紗「北郷！貴様よくも姉上とくっついたな！！」

春蘭「なんて羨ましい（うらやましい）ことを！！」

思春「死ね！！」

～強制終了～

華琳「却下ね」

桃香「うぅ、いい策だと思ったのに…」

みんなで考えていると

蓮華「そういえば気になっていたんだけど月は何でメイド服なんて着てるの？」

蓮華が言うとみんなが月に注目した。

ジ～～

月「へぅ～、それは…」

一刀の側に一日でも長くいたいとは言えず月は

月「お…お母さんがメイドさんも花嫁修行の一つだって進めてきたんです」

小さな嘘をつくことにした。

それを聞いたみんなは

桃香「メイドさんか～、案外いいかもね一刀くんに『ご奉仕します』ってな感じで♪」

ピクンッ！

それを聞いたみんなは何かを感じていた。

蓮華「それはいい策ね」

華琳「私の情報だと一刀は3日後に退院するそうよ」

月「それじゃあ満場一致で決定ですね」

全員『それでは一刀をご奉仕作戦開始！』

こうして作戦が開始されるのだった。

そして3日後、洛陽病院

ナース「北郷さんまた来てね～♪」

一刀「また来ますよ！」

鼻の下を伸ばす一刀だった。

一刀「いかん！いかん！俺は何してるんだ！」

バチバチンッ！

一刀は誤魔化すために自分の頬を叩くのだった。

その時、

ブロロッ！

一台のリムジンが一刀の目の前に停まった。

ウィィン！

そして車の窓が開くと

運転手「華琳様からのお呼びです、お乗り下さい」

一刀「へっ！？」

一刀は？を浮かべるが

ブロローッ！

勢いでリムジンに乗せられた。

そしてリムジンの着いた先は

一刀「ここは！？」

一刀は驚いた。着いた先は間違いなく聖フランチェスカ学園だったのだが

ジャーンッ！！

一刀「何で豪邸になっているんだ！？」

学園のあった場所には西洋城のような豪邸が建っていた。

一刀「これはどうなってるんだ！？」

一刀が驚いていると

ギィィッ！

城の扉が開いて中から現れたのは

桃香・華琳・蓮華・月『おかえりなさいませご主人様♪』

バァーン！。

そこにはメイド服に身をつつんだ桃香達がいた。

ガシッ！

一刀は頭をかかえた。

一刀「俺は脳まで壊れたのか！？目の前にメイド服の桃香達がいるなんて！？」

一刀は自分の体を疑っていた。

すると

ムニュッ！

桃香「ご主人様～早く入りましょうよ～♪」

桃香が胸を当ててきた。

一刀「（にや～）ハッ！？」

一刀は一瞬にやけるがすぐに回りを見渡した。

何故なら桃香とこういうことをしていると

愛紗が「姉上に何をするー！！」と言って問答無用で斬りつけてくるからだ。

しかし、今回は未だに来なかった。

桃香「愛紗ちゃんのことなら心配しなくていいから中に入ろうよ♪」

桃香が言うと

蓮華「桃香！あなたばかりずるいじゃないの！」

月「そうですよ！一刀さんはみんなのご主人様なんですから」

みんなが言い合うなか、

一刀「それよりこれってどういうこと？」

一刀が聞くと

華琳「私達からのささやかな退院祝いよ、学園も一日だけ改装してもらったし一部の生徒には休んでもらってるしね♪」

恐るべし曹操グループである。

桃香「そんなことより中に入ろうよ♪」

一刀は無理矢理城の中に入れられた。

ジャーンッ！

城の中には豪勢な装飾品があちこちにあった。

一刀「（この壺いくらするんだよ！？）」

一刀が高そうな壺を見ていると

華琳「それはうちにある安物で大体一千万円くらいのものよ」

聞いた途端に一刀は驚いた。

月「ご主人様、お昼ご飯の用意ができましたよ♪」

そして月が出したご飯を食べることにするのだが

桃香「ご主人様、あ～んして♪」

蓮華「ご主人様、こちらを食べてください」

華琳「ご主人様、私のものを食べられないなんて言いませんよね？」

月「へぅ、ご主人様食べてください」

みんなが次々と箸を寄せてくるのに

一刀は耐えきれなくなり

一刀「ご馳走さま！！」

ダッ！

その場から逃げ出した。

そして一刀が走り去った後、

及川「突然休校なんておかしい思って来てみたら成程な　」

柱の陰から及川が現れた。

及川「かずピーも奥手やなぁあんなかわいいメイドから逃げるやなんて、まぁかずピーの代わりにわいがご奉仕させてもらおうか♪　」

スッ！

そして及川は懐から薬を取り出した。

及川「科学研究部からすっといた変身薬や！これでかずピーになるで！　」

ゴクンッ！

及川が薬を飲み込むと

ボワンッ！

及川の姿は一刀になっていた。

一刀（及川）「さぁ行くで！　」

そして及川は桃香達の待つ部屋に向かっていった。

その頃、桃香達は

桃香「少しやりすぎちゃったかな？　」

華琳「一刀もあれくらいでだらしないわね」

蓮華「やはりもう少しおさえた方が…」

月「へぅ～！」

４人が考えていると

ガラッ！

一刀（及川）「ただいま！わ…俺のメイドさん達！」

一刀に変身した及川が入ってきた。

一刀（及川）「それじゃあたっぷりご奉仕をお願いしようかな♪（パチンッ！）」

一刀（及川）がウインクすると

全員『はいっ！ご主人様！』

みんなは及川だと気付いてなかった。

しばらくして

一刀「やっぱり何も食べないで出たのはダメだったな、少しくらいは食べないと」

ガラッ！

一刀（本物）が扉を開けて覗いてみると

一刀（及川）「ほらほらっ！桃香は乳枕、蓮華は耳かき、華琳は本を読んで、月はア～ンしてくれよ！」

全員『はいっ！ご主人様！』

一刀（及川）がやりたい放題好き放題していた。

一刀（及川）「なははっ！んっ！？」

そして一刀（及川）が一刀（本物）に気付いて目を合わせた時、メイド達もそっちを向いた。

桃香「一刀くんが二人！？」

蓮華「どっちが一刀なのだ！？」

月「見た目が同じで分かりません！？」

メイド達が困るなか、策を出したのは

華琳「見分ける方法なら簡単よ！」

華琳だった。

桃香「見分ける方法があるんですか！？」

蓮華「どうする気だ！もし間違えたら大変なことだぞ！」

華琳「簡単なことよ、本物一刀ならばね…」

スッ！

桃香・蓮華・月『？』

華琳はみんなの後ろに立つと

華琳「これが一番の策よ！」

バサッ！バサッ！バサッ！

華琳はいきなり桃香達のスカートをめくった！

桃香・蓮華・月『キャッ！？／／／』

慌ててスカートを押さえる3人

桃香「華琳さん何するんですか！」

蓮華「いきなりめくるでない！」

月「へぅ～／／／」

三人が抗議していると

華琳「私はちゃんと言ったわよ一刀を見抜く策だとね、その証拠に二人を見なさい」

桃香・蓮華・月『!?』

3人が二人の一刀を見てみると

一刀（左）「もっと見せて～な～♪」

一刀（右）「見ちゃいかん!見たらあのジジイと同じ変態になってしまう!」

左の一刀がよだれを垂らしているのに対し、右の一刀は見ないようにしていた。（ここでクイズです。本物はどっちでしょう?答えはまるわかりですけどね）

華琳「一刀（左）が偽物よ!」

ビシッ!

指された一刀（左）は

ボンッ!

及川「うへへ♪」

正体がばれると同時に薬の効き目がきれた。

桃香「騙すなんてひどいですよね～!##」

蓮華「その罪は死に値するな!###」

月「許しませんよ####

」

華琳「首を狩らせてもらうわよ！###」

ゴゴゴーッ！！

及川「へっ？」

及川はようやく薬の効き目がきれたことに気付いたが遅かった。

桃香・華琳・蓮華・月『死（んでね・になさい・ね・んでください）！』

この先は恐ろしくて書けないが一言言うなら及川は重傷を負って入院するはめになったとさ

そして一刀は

桃香「ご主人様、あ～んして♪」

蓮華「ご主人様、こちらを食べてください」

華琳「ご主人様、私のものを食べられないなんて言いませんよね？」

月「へぅ、ご主人様食べてください」

一刀「わ…わかったよ！？」

その後、しばらくの間ご奉仕される一刀だった。

ちなみに一刀に危害をくわえる愛紗達はというと

愛紗「ここから出せ―！姉上が何かされている気がする！」

春蘭「私も出せ―！華琳様が危ないんだー！」

思春「右に同じくだー！」

詠「ここから出しなさいよー！」

愛紗達は一刀に危害をくわえないようにまとめて幽閉されるのだった。

４４時間目「恋のダイエット大作戦」

この小説の月日が経つのは早いもので今は１０月の秋をむかえていた。

秋といえば

穏「読書の秋です～！新しい本を読んで知識を上昇するのです～♪」

２年Ｂ組　陸遜穏。本を読むとおかしくなる生徒の中では１、２を誇る爆乳の持ち主。

于吉「私は左慈と私のＢＬ（ボーイズラブ）の本を書きますよ～♪」

シュバッ！

于吉は素早い動きで本を書いていた。

後日、このことを左慈に知られて于吉はおもいっきり蹴られたという。

秋といえば…

春蘭「秋蘭だ！」

秋蘭「違うぞ姉者、芸術の秋だろうが」

２年Ａ組　夏候秋蘭。魏軍の中では一番真面目な性格。実は絵が得

意。

稟「私も絵を描きますよ！」

１年Ａ組　郭嘉稟。真面目だが桃色妄想すると鼻血を出す。

稟が筆を持って絵を描いていると

スッ！

風が現れた。

そして風は稟に近寄ると

風「稟ちゃん、今日の華琳様の下着は黒だそうですよ～」

すると稟は

稟「黒っ！？（ブハッ！）」

稟は鼻血を出して倒れた。そして稟のキャンバスは鼻血で赤く染まっていた。

これを見た風は

風「稟ちゃんのおかげで助かったのですよ～、赤色の絵の具が切れたのでこの鼻血をもらいますね～♪」

命がけの採取である。

秋といえば…

美以「スポーツの秋にゃ～！だからみんにゃで鬼ごっこするのにゃ～！」

ミケ・トラ・シャム『オーッにゃ～！』

鬼ごっこはスポーツではないと思うが！？

そして秋といえば忘れてはいけないのが食欲の秋だ。

秋は食べ物が美味しくなるので注意が必要なのだ。

これはそんな秋をうっかりしてしまった人達の物語

聖フランチェスカ学園女子寮・桃香、愛紗、鈴々の部屋

むにっ！

桃香「ちょっとお肉がついちゃったかな？」

桃香は自分のお腹をむんずとつかんでいた。

桃香「これってもしかして！？」

そして何かに気付いたようだ。

蓮華、シャオの部屋

いつものように蓮華が制服を着ていると

蓮華「んっ！？入らないぞ！？」

スカートが最後まで閉まらなかった。

蓮華「これはもしや！？」

そして何かに気付いたようだ。

聖フランチェスカ学園大浴場

華琳が朝風呂を浴びていると

華琳「久々に計ってみようかしら」

スッ！

華琳は体重計の上に乗った。そして…

華琳「まさかっ！？」

華琳は驚いた。そして三人は同時に思った。

桃香・蓮華・華琳『もしかして…太ってる！？』

しばらくして朝のＨＲ（ホームルーム）前、屋上

桃香「ハァ～、そういえば最近新しく出来たケーキ屋のケーキバイキングに通っていたからなぁ」

蓮華「ハァ～、最近は姉様に似たのか食っちゃ寝を繰り返していたからなぁ」

華琳「ハァ～、最近部活で作ったお菓子が美味しすぎてついつい食べ過ぎたのが原因ね」

三人がそれぞれ太った原因を考えていると

桃香「あっ!?」

蓮華「あらっ!?」

華琳「まぁっ!?」

三人の目があった。

そして三人は同じことを思っていた。

桃香・蓮華・華琳『（もしかしてこの人達も太ったな!?）』

そして太り者同士で話をすることにした。

蓮華「最近うっかりぐうたらしてしまってな」

華琳「私もついつい食べ過ぎてね」

二人が話していると

桃香「一刀くんって太ってる娘は好きなのかな?」

ピクンッ！

桃香の一言に華琳と蓮華が反応した。

～華琳の妄想～

一刀「華琳、太ったんだってな！胸はないのに腹が出るとは笑っちまうぜ！」

～蓮華の妄想～

一刀「蓮華、胸はでかくて尻もでかくて腹もでかいからまるで肉団子だな」

～どちらも終了～

華琳「誰の胸がないですってー！！＃」

蓮華「尻がでかいとはなんだ！！＃」

ガタンッ！

急に二人が叫び出した。

どちらも二人の妄想なのだが…

桃香「私も心配になっちゃったな～」

～桃香の妄想～

一刀「俺は腹が出る桃香よりもスタイルのいい愛紗の方が好きなんだ！」

～妄想終了～

桃香「ひどいよ一刀くん！」

ガタンッ！

桃香も叫び出した。

三人の考えすぎで一刀を知る者ならば一刀がそんなことをいうはずがないと思うのだが、三人はそこまで感付いてなかった。

そして三人が考え抜いた結論は

桃香・華琳・蓮華『痩せなきゃっ！』

ただそれだけだった。

そして三人は実行に移る。

桃香の場合

桔梗「今日の体育はマラソンじゃ！体が倒れるまで走るがいい！」

桔梗先生の地獄の授業、地獄マラソン。最も多く走ったものは成績を上げるという地獄の授業なのだ。（逆に一番周回が低いものは体調不良以外ならば成績が下がる。）

桃香は毎回最下位レベルなのだが

桃香「（今日だけはこのマラソンに感謝しないとねぇ～♪）」

桃香は一気にマラソンで脂肪を燃やすつもりだった。

そして授業が始まると

３０分後

桃香「もうダメ～！」

バタンッ！

桃香は無理をしすぎてしまい倒れた。

桔梗「だから無茶したらいかんと言ったのに！？誰か保健室に連れていってやれ！」

桃香は保健室に連れて行かれた。

蓮華の場合

思春「蓮華様、いきなり呼び出して稽古とはどういうことですか？」

思春は蓮華に呼び出された。

蓮華「最近体がなまってきたから思春に久々に稽古をつけてもらおうと思ってな！」

ホントの理由が痩せるための運動だとは言えない蓮華

しかし思春は

思春「この思春感動しました！まさか蓮華様が運動するために私を呼んだなんて思った私をお許しください！」

図星だった。

思春「では、本気で向かいますので覚悟してください！」

少しばかり手を抜いてほしいのだが

３０分後

蓮華「もうダメ！？」

思春「まだまだですよ蓮華様！あと３０分はやってもらわないと！」

余計なことを言ってしまった蓮華だった。

華琳の場合

桂花「華琳様、大量のダイエット品が届きましたがどういうつもりですか？」

桂花が聞くと

華琳「あらっ、理由をいちいちはなさなきゃいけないのかしら？」

桂花「いいえ！別に！」

桂花はその場を去った。

華琳「フフフッ！これだけの品があればどれかが当たるはず…いくわよ！」

ガババッ！

華琳はてあたりしだいに薬を飲みまくった。（マネをしたらいけません！）

３０分後

華琳「苦しい～！？」

華琳は薬の飲みすぎで見た目が前より太っていた。

そして昼休み

桃香「足がくたくただよ～！」

蓮華「体中が痛い！」

華琳「お腹が苦しいわ！」

結局三人の減量作戦は失敗に終った。

桃香「食べても太らない恋ちゃんや鈴々ちゃんが羨ましいよ～！」

蓮華「私もあんなにごろごろしながらプロポーションを維持できる姉様が羨ましいわ！」

華琳「季衣は何で太らないのかしら！」

三人が愚痴を言っていると

桃香・蓮華・華琳『太らないといえば！』

そして三人の目先は一致した。

天和「一刀～、今日のお弁当だよ～♪」

地和「ちぃ達が作ったんだから残さず食べなさいよね！」

人和「後で今後のために感想を言ってもらえると嬉しいです」

一刀「あ…ありがとう」

今日は張三姉妹だけだが、いつもは6人分食べているにもかかわらず、体が変化しない一刀に三人の目線が集中していた。

桃香「男の人って太りにくいのかな？」

蓮華「一刀の場合厳しい鍛練をしてるからではないのか？」

華琳「少し調べてみる必要があるわね」

そして深夜、男子寮

他の部屋の電気は切れているのに対して一刀の部屋の明かりがついていた。

桃香「こんな遅くまで何してるのかな？」

蓮華「勉強か何かかしら？」

華琳「気になるわね」

じっと見つめられるなか、部屋の中で一刀は…

一刀「ふんっ！ふんっ！」

自主トレをしていた。

一刀は６人分の昼食を残さず食べるために自主トレをしていたのだ。

以前は外でやっていたのだがそれが原因で学園７不思議になったので部屋の中でするようになった。（１９話参照）

寮の外で見ていた三人は

桃香「考えてみたら一刀くんは見た目で判断するような人じゃないよね」

蓮華「確かにその通りだな」

華琳「そこまで考えてなかった自分が馬鹿になってきたわ」

三人はようやく考え直した。

桃香「でもダイエットはしなくちゃ！」

蓮華「すぐにリバウンドしてしまうからな」

華琳「秋だからって怠けたり食べ過ぎは禁物ね」

その後、三人はまともなダイエットをした結果

元の体重より痩せたという。

だが…

愛紗「最近太ってきたな!?」

春蘭「やはり食べ過ぎたしな!?」

思春「蓮華様とは久々の鍛練だったしな!?」

愛紗・春蘭・思春『ダイエットせねば！』

ダイエットの脅威は次々と広まるのだった。

４５時間目「北郷婆ちゃん来るっ！」（前書き）

今回は少し短めです。

45時間目「北郷婆ちゃん来るっ！」

東京駅

ザッ！

？「ようやく東京についたべさ　」

一人の老人が東京駅に着いた。

？「待っとれよ、我が孫！　」

そして老人はタクシーに乗ったのだが

？「だからフラミンゴ学園だって言ってるべさ！　」

運転手「あのねおばあちゃん、そんな名前の学園はないからさ！？　」

？「嘘こくでねぇ！孫が通ってる学園だから間違いねぇだ！　」

行き先で運転手ともめる婆さんだった。

聖フランチェスカ学園

一刀「今日もいい天気だな～♪こんな日には何かいいことあるかもしれないな♪　」

そしていつものように教室に入った。

そして一刀が教室に入って少し時間が立つと

華佗「一刀大変だぞ！」

華佗が急いで教室に入ってきた。

一刀「どうしたんだよ華佗そんなに慌てて？」

一刀が聞くと華佗は

華佗「今、校門を通ったらお前の名前を叫んでいる老人が警備員ともめてるんだよ！？」

一刀「老人？」

老人と聞くと一刀の頭の中には刃が浮かんできたが女子生徒にちょっかいをかけるならともかく、警備員ともめるのはおかしいということですぐに頭の中から消えた。

そして一刀が校門にたどり着くと

？「だから！孫の一刀に会わせろと言ってるべさ！」

警備員「たとえ家族でも参観日以外での入出は許可できませんので！？」

お婆さんが警備員ともめていた。

？「お前じゃ話にならねぇ上司の人を呼んで…」

そしてお婆さんが一刀を見付けると

？「一刀！」

ドンッ！

お婆さんは警備員を押し退けて一刀に近付いていった。

ガシッ！

そしてお婆さんは一刀の手を握ると

？「久々だべなぁ、会いたかったべ」

一刀はこの人誰だ？と一瞬思ったが

一刀「そのどこの地方に住んでいるか分からない口調は…まさか切子（せつこ）婆ちゃん！？」

切子「ようやく分かってもらえたべさ！」

このおばあちゃんは一刀の祖母の北郷切子（旧姓：仮野）なのだ。

一刀「とりあえずここじゃあなんだから中に入って！？」

そして一刀は切子を学園の中に入れた。

生徒会長室

切子「何だべこの部屋はキラキラして悪趣味な部屋だべさ」

生徒会長室は前会長の麗羽の趣味に合わせてあちこちが金ピカになっている。一刀も変える気がないのでほっておいたのだ。

一刀「そんなことよりも婆ちゃんは何で来たの？」

一刀が聞くと切子は

切子「優刀さん（一刀の父）からお前が夏休みに帰ってきたと聞いてな、それで顔が見たくて来たんじゃよ」

ホントは夏休みに来る予定だったのだが、一刀の祖父の刃が今年は一刀は帰ってこないと嘘をついたため来ることが出来なかったのだ。

切子「まったくあのスケベ爺さんは優刀さんが連絡してくれなかったら知らないままじゃったわい！」

実は一刀が産まれた時も刃は連絡しなかったのだが優刀が連絡したため孫の顔を見ることができたのだ。

一刀が切子と話していると

ガチャリッ！

璃々「お兄ちゃん遊ぼ～♪」

扉が開いて璃々が現れた。

璃々を見た切子は

切子「この子はまさか一刀の娘かい？」

一刀「（ドテンッ！）」

璃々「？」

切子の言葉に一刀はすっ転び、璃々は頭に？を浮かべた。

一刀「学園の先生の娘だからさ！」

一刀が突っ込むと

切子「んなこと分かっとるわい、ジョークじゃて」

冗談が過ぎるジョークだった。

一刀「それじゃあ俺は授業出なきゃいけないから婆ちゃんはこの部屋にいてくれよ！」

切子「分かったわい！」

ガチャンッ！

そして一刀は出ていったが

３０分後

切子「少しくらいならいいじゃろう！璃々ちゃん、案内してくれんか？」

璃々「うんっ♪」

切子は璃々を連れて出ていった。

しばらくして

切子「ここはどこじゃ？」

璃々「わからな～い」

璃々も学園の中全てを知っているわけではないので道に迷ってしまった。

どうしたらいいか切子が悩んでいると

璃々「そうだ！お兄ちゃんを呼ぶから待ってて」

タタタ…

璃々はかけられていた柱時計を見付けると

璃々「このボタンだ！」

ポチッ！

璃々が柱時計についていたボタンを押すと

同時刻、漢組

ブルルッ！

授業を受けている一刀の携帯が震え出した。

一刀「（これは璃々ちゃんに教えた危険信号だな）」

もちろんこの機能も飛琳先生が勝手に取りつけた。

一刀「（場所は柱時計の所か）先生！トイレ行ってきます！」

そして一刀は璃々を助けに教室を出るのだった。

柱時計前

璃々「もうすぐお兄ちゃんが迎えに来てくれるよ」

切子「たまげたのぅ！？小さいのにすごい子じゃな」

切子が驚いていると

桃香「あれっ！璃々ちゃんじゃない」

蓮華「こんなところで何をしているの？」

桃香・華琳・蓮華が現れた。

華琳「あらっ、そのお婆さんって確か警備員ともめていた人よね」

今朝の出来事は学園中の噂になっていた。

璃々「お兄ちゃんのお婆ちゃんなんだよ」

璃々が言うと

桃香「えっ!?お婆様はじめまして!?」

蓮華「お初にお目にかかります!?」

華琳「私は曹操華琳と申します!?」

三人はいきなりお婆様と呼んで固くなりだした。

この様子を見た切子は

切子「（この娘達はもしかして一刀の嫁候補かのぅ?）」

女の勘を感じていた。

切子は桃香を見ると

切子「（この娘は乳がでかいから子が出来たら元気に育つな）」

スッ!

そして今度は蓮華を見ると

切子「（この娘は尻がでかいから子供二人は楽に産めそうじゃな）」

スッ!

そして最後に華琳を見ると

切子「（この娘はなりは小さいが将来大物になるな）」

ちなみにこの切子の勘は外れたことが少ないのだ。

そして切子が再び診断していると

一刀「婆ちゃん何してるんだよ！」

いきなり一刀が現れた。

そして切子は会長室に連れ戻されるのだった。

生徒会長室

一刀「まったくもう！婆ちゃんは迷子になりやすいから気を付けてっていつも言ってるのに！」

一刀は切子に説教するが

切子「（何だか知らんがあの娘達の他にもこの学園には一刀を愛する人の気が漂っていたな）」

切子は説教を受けながら一刀の嫁について考えていた。

そして

スッ！

切子は立ち上がると

切子「世話になったな一刀よ、わしは大阪に帰るわい！」

一刀「どうしたんだよ婆ちゃん!?一日くらい泊まればいいのに」

一刀が言うと

切子「いいや、これ以上いても迷惑かけるだけだしなんと無く安心したから帰るべさ」

切子が来た理由、それは孫の一刀に会いたいのも理由の一つだが、本当の理由は一刀の嫁を心配して調べに来たのだ。

そして切子は一刀に見送られながら去っていった。

切子「しかし妙な気を感じるとは不気味じゃのぅ、一刀に黒い気が出てるとは!?」

切子は気のせいだと思っていたが実は気のせいではなかった。

そしてこの時、一刀は気付いてなかった。この平和が少しの間だけ消えてしまうことを

４５時間目「北郷婆ちゃん来るっ！」（後書き）

次話より学園対抗武道大会編が始まる予定です。

４６時間目「忍び寄る魔の手」（前書き）

学園もののはずが急にバトルものに入ってしまった！？。

46時間目「忍び寄る魔の手」

聖フランチェスカ学園・校門

この場所に見知らぬ生徒が二人いた。

？「ここが学園長が言っていた聖フランチェスカ学園か」

？「確かにすごい気が山ほど感じるぜ！」

そして二人が中に入ろうとすると

警備員「そこの二人止まりなさい！」

警備員に止められるが

？「うせろ…」

二人のうちのオレンジのロング髪の男が大刀を取り出すと

ズバッ！

警備員「ぐはっ！？」

警備員を切り裂いた。

？「人殺しはさすがにヤバいんじゃないの？」

もう一人の黒髪の男が言うと

？「急所は外しているから死んじゃいねぇよ」

しかし周りが騒ぎ出すと

愛紗「何の騒ぎだ!?」

春蘭「見ろ、警備員が倒れているぞ!?」

思春「あやつの仕業か」

そして校門には昼寝中の恋を除く武力に自信のある女子が集まってきた。

愛紗「貴様らは何者だ！」

愛紗が聞くと

焔「俺の名は光魔学園2年日輪の焔！」

神華「同じく光魔学園1年光明の神華(しんふぁ)だ！」

二人は名前を言うと

焔「早速だがこの学園で一番強い奴を出しな！この中にいないことは分かってるんだ雑魚に用はない」

焔が言うと

春蘭「何を～!!誰が雑魚だ！＃」

ダッ！

春蘭が挑発にのって向かっていった。

焔「馬鹿が…」

スッ！　ガキンッ！

焔は大刀で春蘭の七星餓狼を軽く受け止めた。

それを見た愛紗達は

愛紗「あの春蘭の一撃を軽く受け止めるとは！？」

思春「やつらを甘く見ない方がいいな！？」

確かに春蘭は馬鹿だが武力は高い方だ。

焔「やはり雑魚だったな」

ブンッ！

春蘭「ぐはっ！？」

ズササッ！

焔は春蘭を軽くはね飛ばした。

焔「本気でかかってきな！それとも今のが本気ならこの学園は対し

たことないな！」

挑発された愛紗達は

愛紗「我々をなめるな！」

思春「ならば些か（いささか）卑怯な気がするが全員で相手してやろう！」

すると焔は

焔「確かにそれなら少しは楽しめそうだし全員でかかってきな！」

そして愛紗達は

愛紗「その言葉を後悔させてやる！」

ダダッ！

一斉に焔に向かっていった。

愛紗「この一撃、受けてみよ『青龍逆鱗陣』！」

鈴々「いっくぞーっ！『猛虎粉砕撃』なのだー！」

星「趙子龍の一撃を喰らえ！『星雲神妙撃』」

翠「ぶっとびやがれ！『白銀乱舞』」

春蘭「さっきはよくもやったな！喰らえっ！『怒髪衝天』」

凪「喰らえっ！『猛虎蹴撃』　」

真桜「ぶちかましたるで『地竜螺旋撃』や！　」

霞「いくでー！『蒼龍神速撃』　」

ズバババッ！！。

彼女達は一斉に必殺技を出した。（技のない娘は武器を繰り出している）

これで焔も終りだと誰もが思ったが

焔「ちっ！これでもつまらねぇや　」

焔はかすり傷一つなかった。

焔「神華、あれをするぞ！　」

神華「わかったよ！　」

神華は渋々言いながら剣を取り出すと

焔「全てを燃やし尽せ、『九頭炎獄滅』！　」

神華「神の裁きを『破滅の翼龍の炎（ライト・ブレイク・ワイバーン）』！　」

二人が放った必殺技は

愛紗「なっ！？」

ゴォォォーッ！！。

周りを飲み込むくらいの光になった。

しばらくして

プシューッ！

一刀「まさかバスが故障して遅れるとは！？」

蒼魔「早く行かないと遅刻しちまうぜ！」

一刀達が急いで校門に行くと

華佗「何だか煙が出てないか！？」

学園から煙が出てきたので一刀達が急いでみると

一刀「何だこれは！？」

一刀の目の前には焼け野原となった学園があった。

そして…

愛紗「うぅ…」

倒れている愛紗達を見付けると

左慈「人が倒れてるぜ!?」

及川「愛紗ちゃん!?（今のうちなら触っても怒られない!）」

及川が下心をもって愛紗に近付くと

ブォンッ!!

突然火柱が上がった。

一刀「誰だ!?」

一刀が叫ぶと

焔「へぇ、この学園にも少しは骨のある奴がいるんだな」

柱の陰から焔が現れた。

及川「あんたはどこのどいつや?」

及川が焔に近付くと

焔「雑魚は消えろ!」

及川「えっ!?」

ズバッ!

及川は焔に斬られて倒れた。

一刀「及川っ！？」

ダッ！

一刀達が及川に近寄ると

焔「安心しな、まだ生きてるぜ！」

焔が言うと

一刀「何てことをしやがるんだ！」

一刀が叫んだ。

友情に感じているのかとおもいきや…

華佗「どうせなら殺してくれればいいものを！」

左慈「こんな奴いない方が学園のためになるのに！」

于吉「テストはカンニングするし、女子更衣室は覗くし、ツケで払うと言ってお金を借りようとする最低な人間なんです！」

ひどいようだが及川なので仕方がない。

焔「何なんだこいつらは…」

さすがの焔も呆れていると

焔「まぁ、別にいいそこの奴、学園対抗戦を楽しみに待ってるぜ！

」

スッ！

そして焔達はどこかに消えていった。

鳳賀「一体何者なんだ？」

みんなが唖然とすると

華佗「驚いてないでみんなを病院に運ぶのを手伝ってくれ！」

そしてみんなで愛紗達を病院に連れていった。

しばらくして学園長室

貂蝉「まさか先手をうってくるなんて予想外だったわねん！？」

さすがの貂蝉も驚いていた。

卑弥呼「もはや迷ってる暇はないぞ生徒達に知らせるのじゃ！」

貂蝉「仕方がないわねん」

そして貂蝉達は病院に向かった。

洛陽病院

華佗「医師に聞いてみたんだが全員重傷でしばらくは動けないようだ」

一刀「くそっ！何でこんなことに！」

一刀がくやしがっていると

ウィィンッ！

病院の扉が開いて貂蝉が現れた。

貂蝉「ここにいるみんなに話すことがあるわん」

そして貂蝉は語り出した。

貂蝉「生徒達を襲ったのは光魔学園の連中よん、その中でもやつらは武力に優れたデスドラゴンナイツと呼ばれる連中で恐ろしい奴よん」

貂蝉が話すと

左慈「何でそんな奴らが襲ってきやがるんだ？」

左慈の問いに貂蝉は

貂蝉「みんなには黙っていたけど近々学園対抗武道大会があるのよん、そのための奇襲に奴らは来たのよん」

学園対抗武道大会…各地から武力に優れた学園を集めてＮｏ．１を決める大会。優勝学園には参加学園を自由に支配することが出来る。必ず十人一組で女子を二人入れることが条件。

貂蝉「男子の補強のために北郷君や、強い友人達を集めたのよん」

卑弥呼「そして我が学園の代表選手は決まって…」

卑弥呼が言おうとすると

一刀「聞かなくても分かるぜ、俺達だろ」

蒼魔「強い相手なら燃えるぜ！」

鳳賀「みんなの敵討ちだな」

九龍「俺もやる！」

鉄「仕方がないね」

孤狼「ドラゴンナイツなんてぶっ殺してやるぜ！」

華佗「俺も参加させてもらおう！」

左慈「男はこれで決まりだな」

残るは女子だが

スッ！

恋「…恋がやる！」

いつの間にか恋が来ていて手を挙げた。

于吉「あとは女子一人ですが誰がいましたっけ？」

愛紗達は怪我で出れない、みんなが悩んでいると

ウィィン！

桃香「学園はどうしちゃったの！？寝坊したから来てみたら学園が傷だらけだったからさ！？」

桃香が遅れて現れた。

一刀「桃香しかいないのか！？」

左慈「でも確かこいつの武術の成績は武術組の中でも下クラスだろ！？」

華佗「でも桃香しかいないから仕方がない！？」

ガックリうなだれるみんなだった。

桃香「なんでみんなガックリしてるの？」

その頃、光魔学園

光魔「そうか、フランチェスカ学園の戦力を削れたようだな」

光魔学園学園長・二階堂光魔。現・大統領でもある。

焔「あんな奴らよわっちいぜ！」

神華「我々が真の力を出す相手ではない」

二人が言うと

光魔「確かにそうだが油断するなよ！」

焔・神華『了解ですボス！』

そして戦いが始まろうとしていた。

聖フランチェスカ学園・出場選手

北郷一刀
氷室蒼魔
李鳥鳳賀
骸亜九龍
華佗元化
左慈元放
楠舞孤狼
司郎鉄
呂布恋
劉備桃香

４７時間目「激戦前夜」（前書き）

今回は激しい戦いを前にしたみんなの心境です。

47時間目「激戦前夜」

前回のあらすじ・聖フランチェスカ学園の生徒が光魔学園の生徒に襲われて愛紗を含む武道派の生徒が入院となった。

しかし近々学園対抗武道大会があるので一刀達は女子の中でたよりになる人が恋しかいないまま出場することになった。

そして大会前夜、それぞれはというと

一刀サイド

一刀「生徒会長として何とか頑張らないとな！」

一刀は気合いをいれて準備していた。

すると

トントンッ！

ドアをノックする音が聞こえたので

一刀「いいよ」

一刀が返事すると

ガチャリッ！

現れたのは…

天和「やっほ～一刀♪」

地和「話は聞いたわよ！」

人和「みんなのためにも頑張ってください」

張三姉妹が現れた。

一刀「こんな夜中に何の用だ？」

一刀が聞くと

地和「何言ってんのよ！話は全部わかってるんだからね」

人和「学園対抗武道大会を頑張ってください！」

二人が応援すると天和は

天和「これは私からのお守り」

スッ！

すると天和は「天和」と書かれたお守りを一刀に渡した。

天和「絶対に怪我しないでよね！」

すると一刀は

一刀「なるべくな」

二人がいい雰囲気になっていると

地和「ちょっと！姉さんずるいわよ！」

人和「私たちも応援してますので！」

そして張三姉妹は去っていった。

三姉妹が去ったあと一刀は

一刀「みんなのためにも頑張らなくちゃな！そのためにも絶対に勝って生きて帰らなきゃ！」

正直いって今度の戦いは一刀でも嫌な予感を感じていた。だがしかし、帰りを待つみんなのためにも絶対に生きて帰ることを誓うのだった。

華佗サイド

華佗「正直いって俺は桃香より武力は上だが一刀達には大きく劣る。本来なら救護班として待機した方がいいのだが怪我人を出された以上、医者の卵としてゴッドヴェイドォーの弟子としても許すわけにはいかないんだ！」

なにげにいつもより熱い華佗だった。

左慈サイド

左慈「・・・」

左慈は瞑想していた。

于吉「左慈、私も影から見守りますからね！」

グッ！

于吉は握り拳を作ると

于吉「そして無事に帰ってきたら結婚してくださいね♪」

そして次の瞬間

シュッ！　ドカッ！！

于吉は左慈に顔面を蹴られた。

左慈「お前となんて結婚するかよバカ！＃」

于吉「あぁ、これが愛情の裏返しですね」

左慈「お前なんて死んでしまえ！」

ドカッ！！

左慈はもう一発蹴りを于吉におみまいした。

蒼魔・鳳賀・九龍サイド

蒼魔「一刀と一緒に戦うなんて中学以来だな」

鳳賀「あの時と違うのが負けたらダメということか　」

九龍「絶対に勝つ！　」

蒼魔「だな、俺たちだってこの学園に来てから大分修行したから前より強いのは確かだしな　」

鳳賀「光魔学園に我々の力を見せてやろうぜ！　」

九龍「俺も必ず勝つ！　」

気合いをいれる三人だった。

孤狼サイド

孤狼「光魔学園か、噂には聞いていたがうちの学園の武道派をほぼ全員倒しやがるとはな…　」

さすがの強さに孤狼も驚いているのかと思いきや

孤狼「それだけ強ければ倒しがいがあるぜ♪　」

驚くどころか逆に喜んでいた。

鉄サイド

鉄「こんなに楽しみな試合は一刀達とやりあって以来だな！俺の頭脳と科学力で絶対に倒してやるぜ！　」

恋サイド

恋「もきゅもきゅっ　」

恋は美味しく肉まんを食べていた。

ねね「恋殿～、たくさん食べて霞と華なんとかの敵を討つのです！　」

ねねは次々と料理を運んできた。

恋「…恋、頑張る　」

ねね「さすが恋殿なのです！へぼ野郎（一刀達）よりも大活躍するのですよ！もし勝ったらありったけのごちそうを奢るのです　」

恋「…ご馳走！？　」

ご馳走と聞いて目の色を変える恋だった。

桃香サイド

愛紗達の病室にて桃香は

桃香「正直いって武術組で一番弱い私が選ばれるなんておかしなことなんだ。でも愛紗ちゃんと鈴々ちゃんをこんな目にあわせた人を見過ごすわけにはいかないから私も精一杯頑張ってみようと思う！　」

病院の病室で眠る義姉妹達に向けて言葉を送る桃香

だが

桃香「でもうちには私より格段に強い一刀君やみんながいるから私の出番はないかもね♪」

ちゃっかり他人の力をあてにするのだった。

そして次の日の朝

ズラリッ！

選手一同が校門に集まっていた。

貂蝉「みんな揃ったようねん！それじゃあ出発よん♪」

そしてみんなは戦いの場である武道コロシアムに行くバスに乗り込んだ。

一刀「待ってろよ光魔学園！みんなの敵は絶対に討ってやるぜ！」

47時間目「激戦前夜」（後書き）

次回、ついに大会が始まります。

48時間目「武道大会はじまる」

一刀達をのせたバスは無事武道コロシアムに到着した。

武道コロシアム…広さは東京ドームとほぼ同じで中には世界中の戦いの記録が刻まれている。

コロシアムに到着した一刀達は

桃香「スッゴーい！こんなとこに来るのははじめてだよ!?」

あまりのすごさに桃香は驚いていた。

一刀「それじゃあ一気に乗り込むぜ！」

一刀が駆け出すと

貂蝉「ちょっと待ちなさいよん」

学園長である貂蝉に呼び止められた。

貂蝉「入る前に大将を決めないといけないのよん」

スッ！

すると貂蝉は体のどこから出したのかわからないが一枚の紙を取り出した。

取り出された紙には大会規則条と書かれていた。

学園対抗武道大会ルール

・各学園で十人一組のチームを作る。その際には必ずチームの中に女子を二人いれること。

・選手の交代は認められない

・学園の中で大将を一人決めること。ちなみに大将が負けた時点でその学園は敗北となる。

・殺人は禁止！もしした場合、殺害した学園は勝利数が多くても負けとなる。

貂蝉「というわけでうちの大将なんだけど…」

貂蝉が最後まで言おうとすると

蒼魔「うちの大将はもう決まってるじゃないか！」

孤狼「確かに今さら決める必要ないじゃねぇか」

貂蝉「それで誰なのん？」

すでにわかっているが貂蝉が聞くと

スッ！

全員が大将に指を向けた。

全員『一刀に決まってるじゃん！』

ビシッ！

大将に任命された一刀は

一刀「俺が負けたら即敗北なんだから頑張らなくちゃな！」

ギュッ！

気合いをいれる一刀だった。

一刀「それじゃあ気を取り直して、いくぜみんな！」

全員『オォッ！』

そしてみんなは気合いを入れてコロシアムに入室した。

コロシアム内

中にはすでに人が集まっていた。

華佗「ここにいる人全てが選手なのか？」

鳳賀「まさか、観客も混じってるんだろう」

みんなが人の多さに驚いていると

焔「久しぶりだな、フランチェスカ学園の野郎共！」

みんなが声のする方を見てみるとそこにはにっくき光魔学園の焔がいた。

一刀「この間の敵討ちだ！お前は俺が倒してやるぜ！」

ビシッ！

一刀が怒りながら指をさすと

焔「面白いこというじゃねぇか！入院しているやつら同様貴様らも地獄に送ってやるぜ！」

戦いの前から火花を飛ばす二人だった。

神華「焔、学園長がお呼びだから来な！」

神華に言われた焔は

焔「そういうわけだからまたな！」

スッ！

そして焔は去っていった。

一刀「あいつだけは許さないぜ！」

燃える一刀だった。

武道コロシアム・大ホール

この場所で開会式が行われようとしていた。

陳琳「さぁ、始まりました！第二回学園対抗武道大会！実況はフランチェスカ学園より久々に登場した陳琳仁美がお伝えします！」

陳琳が挨拶をすると

一刀「あいつ、いないと思ったらあんなとこにいたのか！？」

呆気にとられる一刀だった。

陳琳「それではまず出場する四学園の紹介からまいりましょう！」

陳琳が宣言すると同時に

ブシュッー！！

辺りからスモークが吹き出した。

陳琳「まずは生徒はみんな忍者のプロ、依頼を受ければ褒賞次第でどんな仕事も引き受ける影十字学園！」

バァンッ！

煙が晴れて影十字学園が姿をあらわした。

陳琳「続いて、生徒全員が犯罪者！人殺しだって簡単にしてしまう大蛇（オロチ）学園！」

バァンッ！

煙が晴れて大蛇学園が姿をあらわした。

※大蛇について知らない人は西森の前作『北郷一刀の旅立ち』を見てください。

陳琳「続いて、学園長が大統領、全てが謎につつまれた光魔学園！」

バァンッ！

陳琳「そして最後は前大会優勝校、私が母校の聖フランチェスカ学園！」

バァンッ！

そして一刀達も登場した。

蒼魔「この学園って前に優勝したことがあるのかよ!?」

華佗「俺だって知らなかったぞ!?」

一応学園の中では先輩である華佗や左慈が知らないのも無理はない実は聖フランチェスカ学園は数十年前の大会で優勝したことがあるのだ。

陳琳「それでは組み合わせ抽選の結果を発表します！」

パパッ！

陳琳が言うと電工掲示板が出てきて組み合わせが写し出された。

一回戦第一試合

聖フランチェスカ学園ＶＳ影十字学園

第二試合

大蛇学園ＶＳ光魔学園

そして勝者が決勝に移る。

組み合わせ結果を見た一刀達は

一刀「光魔学園と戦うには一回戦を勝たなきゃならないのか」

鳳賀「相手がどこであれ油断は禁物だな」

そして会場の準備が終了し、一回戦が始まろうとしていた。

陳琳「それでは一回戦のルールを説明します！その名も…」

陳琳「トリプルバトルです！」

トリプルバトルのルール、

・各選手はルーレットによって先鋒・中堅・大将に分けられる。（あとでの変更は却下）

・先に2勝した学園の勝ち（一勝一敗一引き分けの場合は再度ルーレットで前の選手以外が一人選ばれて勝者を決める）

陳琳「それではルーレットスタートです！」

そしてルーレットの結果、運悪く…

聖フランチェスカ学園

先鋒・北郷一刀（大将）

中堅・氷室蒼魔

大将・劉備桃香

影十字学園

先鋒・服部忍

中堅・天川八雲

大将・甲賀半蔵（大将）

となってしまった。

孤狼「桃香、運がないにも無さすぎるぜ！？」

九龍「まさか桃香が選ばれるとは！？」

選手達が落ち込むなか

華佗「いや、大丈夫だろう！一刀と蒼魔が2勝すれば桃香の出番はないんだから！」

左慈「そうだぜ北郷、相手が女ならお前なら楽勝だろう！」

スッ！

左慈が一刀の顔を覗いてみると

一刀「（だらだら…）」

一刀の顔は汗だらけだった。

左慈は不思議に思うが

陳琳「それでは両学園の先鋒は舞台に集まってください！」

陳琳の宣言により一刀は舞台に集合した。

陳琳「それでは第一試合の先鋒戦、北郷一刀選手ＶＳ服部忍選手の試合を始めます！」

ゴォーンッ！

銅鑼が鳴り響いて試合が始まった。

忍「お主には恨みはないが我が学園の勝利のため、斬らせてもらうぞ！」

シュンッ！

忍はものすごい早さで一刀に迫っていった。

華佗「さすがは学園の代表というだけあってものすごい早さだな！？」

左慈「あんな早さなんて思春に比べたら遅すぎだろが、一刀は一度思春と戦って思春のものすごい早さを避けてるんだぜ、あんな奴の早さくらい簡単に避けて一撃を食らわせるはずだ」

左慈の言った通り

サッ！

一刀は攻撃を避けたのだが

スッ！

反撃せずに後ろに下がっていった。

華佗「一刀の奴何をやってるんだ！？」

左慈「北郷！何で反撃しないんだ！貴様なら簡単に攻められるはずだろうが！＃」

左慈が一刀に怒鳴ると

蒼魔「お前達は知らないんだな」

鳳賀「一刀が反撃しない理由を」

蒼魔達が話しかけてきた。

華佗「そういえばお前達は一刀と同じ中学だったんだな、何故一刀は反撃しないんだ？」

華佗が聞くと

蒼魔「一刀は反撃しないんじゃなくて反撃できないすなわち、あいつは女を攻撃することができないんだよ！」

蒼魔の話を聞いたみんなは

知らない人たち全員『えぇ～～！？』

すごく驚いていた。

49時間目「一刀、苦戦する」

一刀が女を攻撃できない理由、

それは一刀が幼少時代に聞いた母である切刃の言葉が原因だった。

十五年前、妹の一刃が生まれたときのこと

切刃「一刀、あなたはお兄ちゃんになったのはわかるわよね」

幼い一刀（当時二歳）「はい、おかあさま」

切刃は一刀の顔をじっと見ると

切刃「あなたは一刃を守らなくちゃいけないの、でもだからって一刃をいじめたりする女の子を攻撃したらダメよ！もし攻撃したら…」

幼い一刀「したら？」

一刀が怯えながら聞くと

切刃「あなたのチ○コをちょんぎっちゃいますからね♪」

ぞくっ！？

これは切刃の冗談だったのだが、幼い一刀は真に受けてしまった。

そして一刀は成長したあとでも相手が女ならば

中学時代、スケバングループとの戦い

スケバン頭「オラッ！」

ブンッ！サッ！

一刀は攻撃してくる相手の攻撃を避けるが

一刀「参りました！！」

ピューッ！

スケバン頭「ハァ？」

直ぐ様降参して逃げるということが多くなった。

ちなみにこの事を知っているのは中学時代に一刀と一緒にいた蒼魔達と兄貴分の孤狼だけである。

理由を聞いた華佗達は

華佗「マジなのかよ！？」

左慈「考えてみたら思春や春蘭と戦った時も手を出していなかったな！？」

少し考えればわかる話だった。

鳳賀「一刀、絶対に降参するなよ！」

九龍「お前が降参すればその時点で俺たちの負けになるからな！？」

一刀もその事を理解していた。

一刀「（降参しちゃダメなのはわかっているけど、どうすりゃいいんだよ！？）」

仕方がないので相手が疲れるまで避け続ける一刀だった。（今の一刀にはそれしかできないため）

しかし対戦相手の服部忍（はっとり）は

忍「そっちが避け続けるなら、こっちはこうさ！」

シュッ！　プシューッ！

忍は煙玉を一刀に向けて投げた。

一刀「これじゃあ何も見えない！？」

モワーッ！

煙はあっという間に対戦リングを包んで周りからでは中がどうなっているか見えない状況を作り出した。

忍「ふふんっ！あんたには私の姿は見えなくてもこっちはあんたの姿が丸見えなのさ！」

シュンッ！

忍者は本来闇討ちや奇襲を専門とするため暗いところや煙の中でもよく見えるのだ。

ズバッ！

一刀「くっ！？」

一刀は煙のせいで相手の姿が見えないので次々と斬られていた。

やがて煙が晴れて来るとみんなの目に写ったのは

ボロボロッ

ボロボロに斬られた一刀がそこにいた。

桃香「一刀君！？」

見るも無惨に斬られた一刀を見て驚く桃香

忍「悪いけどこれで終わりだよ」

ジャキンッ！

忍は刀を構えた。

忍「死ねーっ！！」

ビュンッ！

高速で向かってくる忍

そして一刀はボロボロで避けることができなかった。

一刀最大のピンチにリングの外で見ていた蒼魔達は

孤狼「一刀！相手を女だと思うな！男だと思いやがれ！」

無理な話である。

そして一刀に刃が当たりそうになったその時！

ガチャンッ！

突然コロシアムの扉が開いて現れたのは

華琳「何やっているのよ一刀！」

蓮華「しっかりしなさい！」

月「頑張ってください！」

そこには光魔学園襲来時に寝坊や用事があって来るのが遅くなった華琳達がいた。

一刀「（あれは！？）」

サッ！

ボロボロの一刀は華琳達の姿を見ると忍の攻撃を避けた。

忍「なっ！？」

これに忍は驚いてしまい

ズササーッ！

スッ転んでしまった。

そして華琳達は一刀を見ると

蓮華「話はテレビで見させてもらったわ！」

実はこの大会はテレビの生放送で全国中継されていた。

華琳「そして急いでお母様に連絡をとっておいて女を殴っていい許可をもらったから好きにしなさい！」

何故華琳がお母様と呼んでいるんだと疑問に思う一刀だが今はそんなことを気にしている場合じゃなかった。

母から許可をもらったと言うことを聞いた一刀は

一刀「わかった！今だけ相手になるぜ！」

シャキンッ！

さっきまでの怪我の痛みはどこへやら？一刀はやる気全開で復活した。

忍「ふんっ！だったらその本気を見せてもらおうじゃないか！」

ビュンッ！

忍はさっきよりも早く向かうが

一刀「甘い！」

サッ！

一刀は簡単に避けると

一刀「ちょっと痛いけど我慢してね」

忍「なにっ！？」

忍が一刀の方を向いた直後

一刀「俄龍魂絶撃（こんぜつげき）！」

ドガッ！

一刀は忍に対して剣ですさまじい威力で殴り倒した。

忍「ぐはっ！」

ドサッ！

殴られた忍は気絶してしまった。

一刀「威力はおさえたからすぐに立ち上がれるよ」

あれで押さえたなんてとても思えない！？

改めて一刀の実力を知るみんなだった。

恋「（…一刀強い、本気なら恋も負けるかもしれない）」

そして試合は

陳琳「服部忍選手、気絶により勝者、北郷一刀選手！」

一刀の勝利が決定した。

そして一刀がリングから降りると

華佗「ひやひやさせやがって！」

左慈「あんな奴に負けたらただじゃおかなかったぞ！」

一刀「ごめんごめん！！」

一刀は頭を下げるのだった。

蒼魔「まぁ、勝ったからいいじゃねぇか！俺が勝利すればそれで勝ちだしな！」

蒼魔は戦いが始まれば相手が女子供だろうがリングに立った以上、本気で相手をする人だった。

桃香「（蒼魔君が勝てば私の出番がなくなるから頑張ってもらわないと）」

心の中で応援する桃香だった。

そして二戦目がはじまる。

５０時間目「蒼魔の誇り高き敗北」（前書き）

ついに５０話を突入しました！これからも頑張ります！

50時間目「蒼魔の誇り高き敗北」

陳琳「それでは一回戦第二試合、氷室蒼魔選手ＶＳ天川八雲選手の戦いを始めます！」

ワァー！ワァー！

会場が大いに盛り上がり選手の二人がリングに立った。

蒼魔「悪いが俺は一刀と違って相手が女でも手加減しないぜ！」

八雲「それは結構、私だって相手が女だからって手加減する者は嫌だからな」

二人が火花を飛ばすなか、

カーンッ！

試合開始のゴングがなった。

蒼魔「悪いが一撃で終わらせてやるぜ！ハァッ！」

いきなり蒼魔は剣に氷の気を送り込むと

蒼魔「絶対零度撃！」

ゴォーッ！

冷気の塊が八雲に襲いかかった。

一刀「蒼魔のやつ、いきなりの大技とはやっぱり手加減してないな！？」

鳳賀「そりゃそうさ、一刀の行為は優しいからいいかもしれないが場合によっては侮辱行為にあたるわけだしな、その点蒼魔は戦う相手には手加減なしが普通だからな」

ガキーンッ！

蒼魔の技が八雲に決まり、勝者が決まったかと思いきや

バンッ！

蒼魔「バカなっ！？」

八雲は冷気が吹くなか体を震えながらも立っていた。

八雲「ふんっ！これが大技だと言うならあなたを少々買い被っていたようね」

八雲は蒼魔を挑発すると

蒼魔「俺を怒らせて熱くさせようとする気だがそんな手にのる俺じゃねぇよ！」

蒼魔は挑発にのらなかった。

蒼魔「悪いがここで消えろ！」

ビュンッ！

蒼魔は得物の『蒼絶氷雷剣』を片手に八雲に立ち向かった。

八雲「今度は肉弾戦というわけか」

ジャキンッ！

八雲も負けじと『紫桜剣』を片手に蒼魔に立ち向かう！

キンキンッ！

二人の剣が激しく打ち合うなか、

桃香「そういえば前から聞きたかったんだけど一刀君と蒼魔君はどういうきっかけで出会ったの？」

桃香の空気を読めない質問に

一刀「俺が蒼魔と出会ったのは中一の時だった」

一刀は語り始めた。

五年ほど前、千頭中

ドカッ！

男「ぐはっ！」

バタッ！

一刀「これに懲りてうちのクラスの生徒をいじめるんじゃないぞ！」

この時すでに一刀は弱いものいじめをする悪いやつをこらしめていた。

そして今日もクラスの生徒をいじめた悪いやつをこらしめて教室に戻ると

蒼魔「このクラスに北郷一刀というやつはいるか！」

ガラッ！

蒼魔がクラスに乗り込んできた。

一刀「俺が一刀だが何かようか？」

一刀が聞くと

蒼魔「うちのクラスのやつを痛め付けたって聞いたぞ！」

一刀「痛め付けたんじゃない！うちのクラスメートをいじめたからこらしめただけさ！」

蒼魔「嘘つくんじゃねぇよ！」

一刀「嘘じゃない！」

二人が言い争っていると

飛琳「はいはい、迷ったり言い争う場合は我沈誇(ガチンコ)あるのみ、それが千頭中のルールでしょ」

飛琳先生が現れて喧嘩の仲裁（？）をしてきた。

一刀「確かに先生の言う通りだな」

蒼魔「いいだろう！決着つけてやるぜ！」

そして昼休み、二人は我沈誇をはじめた。

二人の戦いは熾烈を極め、戦いは二時間に達した。

そして二時間後

一刀「俄龍四神弾！」

ドカッ！

蒼魔「ぐはっ！」

わずかに一刀に軍配が上がった。

蒼魔「ハァハァ！？」

倒れこむ蒼魔を見た一刀は

スッ！

手をさしのべた。

一刀「お前強いんだな！今回は俺が勝ったが危なかったぜ！？」

すると蒼魔は

蒼魔「お前だって中々じゃないか！また我沈誇しようぜ！」

二人は戦いを通じて友情が芽生えたのだった。

その後も二人は我沈誇をやり続けて鳳賀と九龍も加わり、いつの間にか四人は四天王と呼ばれるようになった。

これがみんなの出会いである。

そして話は戻り、

キンキンッ！

蒼魔と八雲の試合は続いていた。

蒼魔「（こいつおかしいな、もう倒れてもいいはずなのに倒れないなんて！？）」

蒼魔が不思議に思っていると

八雲「私は唯一の肉親である妹を助けるために勝たなくてはならない！！」

八雲が語りかけてきた。

八雲「私の妹は現代では解明できない病におかされていてそれを直すために私は大会に出場したんだ！」

スッ！

八雲が手を合わせると

八雲「だから勝つためには禁術を使ってでも勝たせてもらう！」

パパッ！

そして八雲は印を結ぶ

八雲「忍法・桜吹雪の大蛇龍の術！」

ゴォーッ！

印を結んだ瞬間、八雲の剣から八頭の龍の気が流れ出した。

八雲「この禁術を使ったものは悪魔と呼ばれて死ぬ。だが、私は…、妹の小春が元気になればそれで良いの…っ！それが叶うなら…、自ら悪魔になって死んでも良い！」

涙をこぼしながら言う八雲に蒼魔は

蒼魔「あんたは悪魔などではない！！」

八雲「っ！？」

蒼魔は怒鳴り散らした。

蒼魔「君は妹だけが笑顔になればそれで良いわけがあるはずがないっ！自分だけが犠牲になって、立った一人の肉親を残して死ぬなんて絶対に許されない！君の悲しみは俺の悲しみだ！強くなれ八雲。たった一人の家族を残さないで強く生きろ！」

八雲「蒼魔殿…」

蒼魔「技は発動さえしなければ失敗に終わる、その技は俺が止めてやるぜ！」

そして蒼魔が力をためていると

一刀「あの技をする気かよ蒼魔！？あいつはお前にも制御が難しいじゃないか！？」

一刀は忠告するが蒼魔は

蒼魔「あれから五年は経ってるんだ俺にだって制御できるぜ！」

スッ！

そして蒼魔の力がたまると

蒼魔「氷河千兆撃（ブリザードデストロイヤー）！！」

ゴォーッ！

剣から強烈な冷気が放たれてすべてを凍らせた。

パキパキッ！

もちろん八雲の放った桜吹雪の大蛇龍さえも

そしてその瞬間

八雲「今ので私の気は全部使い果たしてしまった！？」

陳琳「ということは勝者、蒼…」

陳琳が宣言しようとしたとき

蒼魔「待った！」

蒼魔がひきとめた。

蒼魔「俺が疲れたから俺の敗けだ」

蒼魔が自分の負けを宣言した。

陳琳「本人が言うならそうなので勝者、天川八雲選手！」

正式に蒼魔の負けが決定した。

八雲「何故だ！宣言しなければあなたが勝者のはずだ！」

八雲が聞くと

蒼魔「俺も一刀と長い付き合いのためか人に対して甘くなっちまったんだよ」

八雲「蒼魔殿／／／」

顔を赤くする八雲だった。

そして蒼魔がリングを降りると

一刀「よくやったな蒼魔！」

蒼魔「負けて悪かったな」

鳳賀「だが、良い心がけだったぞ」

九龍「うむっ！」

みんなは優しく出迎えてくれたがひとつあることを忘れていた。それは…

桃香「これで一勝一敗だから私が勝たなきゃダメ？」

しーん…

桃香がいった瞬間、場の空気がさめた。

全員『しまったー！？』

51時間目「黒桃香」

蒼魔が負けてしまったことにより
一回戦第一試合の勝者は大将戦に委ねる（ゆだねる）ことになったのだが
対戦相手の影十字学園の選手が大将である甲賀半蔵に対して
聖フランチェスカ学園の選手は
一刀「よりにもよって桃香とは！？」
鳳賀「あのとき蒼魔が勝利、あるいは引き分けにしていれば！？」
蒼魔「すまないみんな！後のことを考えていなかったんだ！！」
もし蒼魔が勝利した場合
二勝により桃香は戦わずして勝利
蒼魔が引き分けの場合
一勝一引き分けで桃香が負けても代表戦がある。
しかし蒼魔が負けてしまったので
一勝一敗により、引き分けなら代表戦があるが負けた場合一勝二敗でフランチェスカ学園の負けとなる。

つまり負けないためには桃香は勝つか引き分けかの二択しかないのだ。

華佗「しかもよりによって相手が敵の大将とはな!?」

影十字学園大将・甲賀半蔵。

影十字学園のなかでも一番の忍術の使い手

桃香「あんな人に勝てるわけないよ～!?ギブアップしていい?」

桃香が聞くと

全員『絶対にダメだ!』

もはや桃香に敗北の道は許されなかった。

陳琳「それでは一回戦第三試合、甲賀半蔵選手ＶＳ劉備桃香選手の試合を始めます!両者、リングに上ってください」

陳琳が宣言すると

桃香「あの～、私ちょっとお腹の調子が…!?」

桃香は残された手段である仮病を使うが

陳琳「それなら甲賀半蔵選手の不戦勝で…」

陳琳が宣言すると

フランチェスカ学園全員『大丈夫ですから！』

全員で必死に宣言を止めにはいった。

陳琳「それでは試合開始！　」

カーンッ！

そしてゴングが鳴り響いた。

桃香「みんなのおに～！！私は戦いたくないのに～！！　」

桃香は泣きながらリングに立つと

半蔵「悪いが拙者は相手がおなごであっても容赦はせんぞ！　」

シュシュッ！

半蔵は印を結ぶと

半蔵「忍法・火炎砲撃の術　」

ドドンッ！

半蔵は口から火炎弾を出してきた。

桃香「うわぁー！？　」

ササッ！

桃香は必死に避けるが

ボッ！

全弾避けることができず、スカートに当たってしまい少し燃えてしまった。

桃香「あちっ！あちちっ！　」

シュボッ！

桃香の消火作業により火は消し止められたが

半蔵「まだまだっ！　」

シュンッ！

半蔵は即座に桃香に斬りかかろうと迫ってきた。

左慈「あのままじゃ直撃するぞ！？　」

鉄「避けるんだ桃香！　」

みんなは必死に叫ぶが

半蔵「遅いっ！　」

ズバッ！

桃香「きゃっ！？」

桃香は間に合わず斬られてしまった。

半蔵「安心しろ、刃は短くしてある。殺したら拙者の敗けだしな。じっくりといたぶってくれる！」

シュンッ！

半蔵は再び桃香に斬りかかってきた。

桃香「きゃっ！？」

ズバッ！ズバッ！ズバッ！

桃香は避けることができずに斬られ続け、体は傷つき、服はボロボロになっていた。

九龍「桃香！？」

孤狼「くっそー！俺が出てたらあんな奴イチコロなのに！」

もはやみんなは桃香の傷つく姿をみたくなかった。

蒼魔「俺がせめて引き分けだったら！桃香は負けてもよかったのに！」

蒼魔は自分が負けたことで桃香が戦うことになったことを後悔していた。

桃香「はぁはぁ！？」

桃香は斬られすぎて体も服もボロボロになっていた。

半蔵「もはやお主の命運もこれまでだな！これでくたばるがいい！」

シュンッ！

半蔵は再び桃香に斬りかかってきた。

もはや避けることができない桃香だったがそのとき！

一刀「桃香！右に避けろ！」

桃香「えっ！？」

サッ！

言われた通りに桃香は右に避けると

スカッ！

半蔵「なにっ！？」

半蔵の斬りかかりは空振りにおわった。

鳳賀「もしかして一刀！？」

鳳賀が聞くと

一刀「あぁ、あいつの動きはすべて読みきった！桃香、俺の指示通り動けば必ず避けられるから安心するんだ！」

桃香「一刀君／／／」

ようやく一刀が突破口を開いてくれたことに桃香は喜んだ。

半蔵「私の動きがすべてわかっただと、ふざけるな！ならばすべて読んでみよ！」

シュンッ！

半蔵は再び桃香に斬りかかってきた。

が同じ手はもう二度と食らうことはない

一刀「左、後ろ、前、ジャンプするんだ！」

桃香「はいっ！」

サッ！サッ！サッ！ピョンッ！

桃香は一刀の指示通り動くとあら不思議！？半蔵の攻撃を全く受けなかった。

半蔵「くそっ！ちょろちょろ逃げおって！？」

さすがの半蔵も苛ついてきた。

桃香「これなら避けられる～♪」

桃香は浮かれきっていたがこのまま避けているだけではいずれ体力の少ない桃香の方が先にダウンするのはみんなわかりきっていた。

半蔵「おのれっ！」

シュッ！

半蔵は刀を繰り出すが

桃香「そんなの避けちゃうもんね～♪」

桃香は簡単に避けたのだがその時、事件は起きた！

びりっ！

桃香「えっ！？」

半蔵の刀は避けたものの、半蔵の攻撃で起きた風圧によって桃香の服の胸の部分が完全に破れてしまった。

その結果、

ぽろりっ

桃香の胸は丸出しになった。

桃香「キャーッ／／／／」

桃香が慌てて隠すがすでに会場にいた男のほとんどが目撃したうえに、この試合は全国中継されているため日本中の人に目撃されてしまった。

そしてもちろんリング外にいた一刀達にも見られそうになったのだが

華琳「男共！見たら首を落とすわよ！＃」

蓮華「いくら一刀でも見たらダメだからね！＃」

月「見たらひどいお仕置きしますからね！＃」

一刀達『わかりました！絶対に見ません！？』

その場にいた華琳達によって目撃は避けたのだった。

そしてリング上では

半蔵「フフフッ！両手が使えぬ今なら私に勝機ありだな！」

桃香は胸を隠しているため両手が使えない状態だった。

半蔵「くたばるがいい！」

シュッ！

半蔵は今がチャンスだと思い桃香に斬りかかってきた。

一刀も目を閉じているため指示が出せない！

桃香、絶体絶命のピンチのそのとき！

桃香「怒られちゃうよ…」

桃香がぶつぶついい始めた。

桃香「服をボロボロにしただけでも怒られるのに好きな人以外におっぱい見られたなんて聞かれたらお母さんに怒られちゃうじゃない！」

ゴォッ！

このときの桃香はいつもと雰囲気が違っていた。

半蔵「何事だ!?」

ピタッ！

桃香の変化に半蔵は動きを止めると

桃香「どうしてくれるのよっ！＃」

ドッカーンッ！☆ミ

キィーン

桃香の渾身の一撃で半蔵は遠くの彼方に飛ばされた。

そしてその時点で

陳琳「甲賀半蔵選手、コロシアム場外により勝者、劉備桃香選手！
よって、二勝一敗で勝者、聖フランチェスカ学園！」

カンカンカーン！

聖フランチェスカ学園の勝利が決定した。

一刀「でも何で桃香は急に強くなったんだ？」

一刀を含めてみんなが考えていると

華琳「実は前にも桃香はあの状態になったことがあるのよ」

華琳が話し出した。

華琳「あれは一年ほど前、バカ達（麗羽一行）が愛紗がいない間に
桃香を苛めたのよ」

一年ほど前、聖フランチェスカ学園

桃香「いたっ！」

麗羽「おーほっほっほっ！あなたなんて所詮愛紗がいなければなに
もできない弱虫さんですわ」

麗羽達が桃香をいじめていた。

桃香「なぜ私をいじめるんですか？」

桃香が聞くと

麗羽「それはもちろん、わたくしより目立って、クラスの人気者で、わたくしよりも胸が少し大きいあなたがいけないんですわよ！」

完全な逆恨みである。

麗羽「とにかくあなたは生意気ですのよ！」

びりっ！

麗羽は桃香の制服を少しやぶいた。すると桃香は

桃香「ひどいよ、この制服はお母さんが一生懸命働いて買ってもらった制服なのに一年もたたずにやぶれたらお母さんに怒られちゃうじゃない！」

麗羽「この人は何をいってますの？」

猪々子「さぁね？」

斗詩「あのぅ麗羽様、今すぐにでも謝った方が！？」

斗詩は言うがもう遅い！

桃香「どうしてくれるのよ～！」

ドッガーンッ！

桃香の渾身の一撃で麗羽はどこかに殴り飛ばされた。

これ以後、麗羽は桃香をいじめなくなったという

これを見た華琳いわく桃香の中に住むもう一人の桃香別名『黒桃香』の誕生だった。

そしてやぶれた制服は麗羽が弁償してくれたため怒られずにすんだのだった。

話は現代に戻り、試合終了後桃香は

桃香「服をボロボロにしておっぱい見られたからお母さんに怒られちゃうよ～！？」

必死にトイレの中で悩むのだった。

５２時間目「光魔学園ＶＳ大蛇学園（前編）」（前書き）

今回は話が長くなりそうなので二話に分けました。

52時間目「光魔学園ＶＳ大蛇学園（前編）」

一刀達の試合が終わって数時間後、

その後、一回戦第二試合も無事におわった。

聖フランチェスカ学園控え室

この場にはまだ落ち込んでいる桃香をのぞいた全員がいた。

そしてみんなが沈黙しあっていた。

理由は簡単、第二試合を見てしまったからである。

ここで話は遡る（さかのぼる）。

第二試合目前

一刀「敵の試合を見て観察した方がいいな」

蒼魔「果たしてやつらの実力がいくらか見極めてやるぜ！」

というわけで桃香をのぞいた全員が試合の観察にやって来た。

陳琳「それでは第二試合、大蛇学園ＶＳ光魔学園の試合を始めたいと思います！」

陳琳が宣言すると

焔「ちょっと待ちな審判！　」

光魔学園の焔が急に呼び止めた。

焔「こんな雑魚相手に三試合なんてつまらねぇから特別ルールにしようじゃねぇか！　」

焔にバカにされた大蛇学園は

九頭「俺たちが雑魚だと！ふざけるんじゃねぇ！　」

二頭「落ち着け九頭、我らを怒らせるのが敵の策だ！　」

頭の切れやすい九頭を冷静な二頭が止めた。

焔「策なんてありゃしねぇよ！只暇だから特別ルールとしてお前ら全員対俺一人で相手をしてやるよ！　」

ざわざわっ！？

この言葉に会場中が驚いた。なぜなら一人で相手をするということは一対十の戦いを意味するのだ。

普通ならば光魔学園に不利な状況である。

陳琳「えぇと！？大蛇学園が了承すれば可能ですが…　」

陳琳が悩んでいると

零頭「別に構わねぇぜ！」

大蛇学園の学園長である零頭が了承した。

陳琳「それでは両者認めたところで試合を開始します！」

そして一対十の変則的な戦いが始まった。

カーンッ！

ゴングが鳴り出すと

九頭「まずは俺から行くぜ！」

試合開始早々九頭が襲いかかるが

焔「雑魚がっ！」

ドカッ！

九頭「ぐほっ！？」

ドスンッ！

身長三メートルを越える九頭がたった一撃で崩れ落ちた。

焔「まずは一人だな」

にやりっ！

この時、焔の瞳は殺戮（さつりく）を楽しんでいるようだった。

ビクッ！

この反応にさすがの犯罪者集団である大蛇学園さえもビビるしかなかった。

神華「（ふふっ！ビビらせるようで悪いが焔はまだ力を半分しか使ってないからな！）」

52時間目「光魔学園ＶＳ大蛇学園（前編）」（後書き）

大蛇学園については西森の前作『北郷一刀の旅立ち』をご覧ください。さらに今回は新メンバーとして百頭（もず）が新しく入っています。

５３時間目「光魔学園ＶＳ大蛇学園（後編）」（前書き）

書いてみたら二話に分ける必要がありませんでしたね！？

53時間目「光魔学園ＶＳ大蛇学園（後編）」

光魔学園ＶＳ大蛇学園の試合が始まってから数分。

早くも大蛇学園から敗北者が出てしまった。

はじめは光魔学園の恐ろしさにびびっていた大蛇学園のメンバーだったが

百頭「はんっ！九頭のような弱い奴を倒したからって威張るんじゃないよ！」

大蛇学園一年生　百頭

百頭「九頭は学園じゃあ一番弱い奴なのさ！そんな奴を倒したくらいで威張るなんてあんたの力がみえみえだよ！」

ピキッ！

この言葉に焔が少しキレた。

百頭「どうしても威張りたけりゃ…」

シュッ！　ジャキンッ！

百頭は指から鋭い爪を出すと

百頭「あたいを倒してみな！」

ビュンッ！

百頭はそのまま焔に向かっていった。

サッ！

焔が避けようとすると

百頭「かかったな！」

ビュッ！

百頭の爪から紫の液体が飛び出して

ベチャッ！

焔の頬につくと

ジュ～！！

頬から煙が出てきた。

百頭「あたいの爪にはコブラだって嫌がる猛毒が塗ってあるのさ！一度かかったら最後、あんたの命はおしまいだよ！」

ヒュッ！

百頭はとどめをさすべく焔に爪を突き立てるが

ガキンッ！

百頭の爪は焔に折られてしまった。

百頭「何で…！？あたいの毒が頬にかかったというのに何で平気なんだい！？」

百頭が驚いていると

焔「悪いがあの程度の毒なら俺には効かないのでな、とはいえ俺の顔を汚したわけだからこの落とし前はつけさせてもらうぜ！」

ブンッ！

百頭「ひっ！？」

焔は百頭に対して剣を降り下ろすが

ガキンッ！

焔が繰り出した剣はいきなり現れた七頭によってふさがれていた。

百頭「七頭さん！？」

七頭「…もう勝負はついてるからやめろ（ボソッ！）」

神速の剣士・七頭

普段は無口だが実は実力は高い方

七頭が言うと焔は

焔「ほうっ、こいつよりはすごい奴だがまだまだ俺の敵ではない！
」

グッ！　ドンッ！

七頭「うおっ！？」

七頭は振り払った衝撃で飛ばされてしまった。

そして飛ばされた時に

ガシッ！

百頭「えっ！？」

百頭も巻き添えにしてリングの外に落ちていった。

ドスンッ！

そして落ちたと同時に

陳琳「七頭選手、百頭選手！共にリングアウトにより敗けが決まりました」

二人は同時に敗けとなった。

百頭「何でだよ七頭さん！？どうしてあたいを道連れに！？」

百頭が慌てると

七頭「…お前はまだ若い、だから死なせるわけにはいかない（ボソッ！）」

つまり七頭はわざとリングから降りて敗けとなったのだ。

そしてそれを見ていた他のメンバーは

四頭「（確かにそれなら戦わなくても負けになるのです！？）」

六頭「（この場で生き残るためには！？）」

八頭「（自らリングアウトするしかない！？）」

そろ～り

三人がこっそりリングアウトしようとすると

焔「させねぇよ、『九頭炎獄滅』！」

ゴオーッ！！

三人の後ろから炎の龍の気が迫ってきて

三人『へっ！？』

三人が気づいたときには

ゴオーッ！！

三人の体は消し炭のように黒い大火傷を負っていた。

焔「戦場で逃げる奴は最低な屑野郎だぜ！」

焔がそう言うと

ズシンッ！

上から大きな鉄球が落ちてきた。

五頭「馬鹿ナ奴メ、他ノヤツラニ気ヲトラレテイルウチに俺ノ存在二気ガツカナイトハナ！」

この鉄球は全身機械の五頭が落としたものである。

五頭は自分が倒したと思っていたが

ジュ～！！

落とされた鉄球が急に溶け出した。

焔「悪いな、俺にはこんな攻撃は通用しないぜ！」

焔は自分に火を包んで鉄球を防いだのだった。

五頭「ナナナッ！？」

五頭が驚いていると

焔「屑鉄はスクラップにでもなりな！」

ズバッ！

五頭「グホッ！？」

ガララッ！

五頭は焔に斬られてしまいバラバラにされた。

焔「これで残るは三人か」

もう大蛇学園で残っているのは

水を操る大夫の一頭

三面六手の鬼神の二頭

ナイフ投げの三頭のみとなった。

焔「最初にいっておく！死にたくなければ敗けを認めるんだな！」

焔が挑発すると

三頭「大蛇学園をなめるなザンスー！＃」

シュシュッ！

三頭はナイフを沢山焔に向けて投げた。

しかし投げたナイフは

ジュ～！！

焔に当たる前に全て溶かされていた。

焔「俺にそんなおもちゃが効くかよ！」

ギロリッ！

焔が睨み付けると

三頭「ひっ！？もうミー達の負けでいいザンス降参しましょ！？」

三頭が弱味をみせると

二頭「貴様！それでも誇り高き大蛇学園の生徒か！」

大蛇学園はもめ始めた。

一頭「つまらないことでもめるのはおやめ！」

しかし一頭がもめ事を静めた。

一頭「零頭様には悪いけどこの試合はあたし達の敗けだよ！」

一頭がそう言うと

二頭「何だと一頭！お前までそう言う気か！」

一頭「仕方ないだろう！悔しいけれどこのまま殺されるのと零頭様にお仕置きされるんじゃお仕置きの方がまだましさ！？」

ほんとは降参なんてしたくなかったのだ。しかし命を守るためには仕方のないことである。

陳琳「おぉっと！大蛇学園がギブアップ宣言をした！よって勝者は…」

陳琳が言おうとした時

焔「待ちな！降参してくれた礼として俺の最大級の技を食らわしてやるぜ！」

スッ！

焔は気をためると

一頭「ちょっと待ちなよ！？あたしらは降参しただろ！？」

三頭「ひどいザンス！？」

しかし焔は

焔「確かに死にたくなければ降参しなと言ったが、半殺しにはしてやるぜ！」

そして焔の気がたまると

焔「食らいやがれ『獄炎の死の大剣（アポロデスコルブラント）』！」

ゴオーッ！！

炎の気が燃え上がり三人に襲いかかった。

三人『うわーっ！？』

ゴオーッ！！

炎は三人を飲み込んだあとにすぐに消えたものの、三人は全身に大火傷を負っていた。

陳琳「えぇと！？大蛇学園、全員戦闘不能により勝者、光魔学園！」

カンカンカーン！

これ以上犠牲者を出さないために素早く終了のゴングが鳴った。

陳琳「本来ならばすぐに決勝戦なのですが、会場の修理のため決勝戦は明日行われます！」

焔「ふっ！命拾いしたな聖フランチェスカ学園ども！明日は血祭りにあげてやるぜ！」

そして光魔学園は去っていった。

試合を観察していた聖フランチェスカ学園は

孤狼「たいした自身だなあいつら」

鉄「決して大蛇学園が弱いわけじゃないのにあぁもボロボロにするとは!?」

華佗「この場所に桃香がいたら気絶どころか失禁していたかもな!?」

左慈「やな試合見ちまったぜ!?」

恋「…!?」

一刀達はみんな光魔学園のあまりのすごさに驚くのだった。

５３時間目「光魔学園ＶＳ大蛇学園（後編）」（後書き）

決勝戦はちょっと間をあけてから始めるつもりです。

５４時間目「教師の戦い」（前書き）

一刀「光魔学園ＶＳ大蛇学園の試合が始まったがあまりの光魔学園の強さにさすがの俺も少しばかりビビっちまった！？このままではいけない！今夜は寝ずに特訓だ！」

５４時間目「教師の戦い」

一刀達がそれぞれ明日の戦いに向けて眠り、特訓をしていた頃

光魔学園控え室

光魔「やはり聖フランチェスカが勝利したか、しかし以前採取したデータよりも能力が向上しているのが気になりますね」

光魔が聖フランチェスカの力が上がっているのを不思議に思っていた。

黒羽「わかってるよアニキ、だから俺達を呼んだんだろう！」

泉華「我ら光魔学園教師の三獣士がな」

森羅「あのぅ、ホントにするんでしょうか？闇討ちなんて卑怯なんじゃ？」

そこには三獣士と呼ばれる光魔学園の教師が集められていた。ここに集められた三獣士は聖フランチェスカ学園の生徒達を闇討ちするために集められたのだ。

光魔「何くだらないことを言ってるんですか西園寺先生！この大会に光魔学園が勝たなければあなたの夢である全世界の植物の保護も叶わないんですよ！それでもいいんですか？」

光魔が問いつめると

森羅「…そうですよね、植物を守るためですものね」

光魔学園保険医・西園寺森羅が言うと

光魔「それにあなたの術ならば例え勝てなくても明日の決勝戦に出せなくすることが可能ですしね！あなたは元ドラゴンナイツの一員だったんですから自信を持ってください！いいですね？」

すると森羅は

森羅「わかりました！精一杯頑張ります！」

光魔「その意気ですよ活躍に期待しています」

トンッ！

光魔は森羅の肩に手をのせると

光魔「では三獣士の皆さん、行ってきなさい！」

三獣士『ハッ！』

シュシュシュンッ！

そして三獣士は飛び立っていった。

そして三獣士が飛び立ったあとに

ギィ～

光魔学園控え室の扉が開くと

？「流石だねあんたの悪さには誰もかなわないよ」

古ぼけた博士のようなじいさんが現れた。

光魔「これはこれは誰かと思ったら光魔学園教頭のＤｒ．バイオス博士ではないですか！来るなら来ると言ってくれればいいものを相変わらず人が悪いですね」

Ｄｒ．バイオス「人が悪いのはお互い様じゃろうて、科学研究所から追放されたわしをスカウトして生徒を実験台にした極悪人が」

光魔「人聞きが悪いですねあなたこそバイオ科学を研究しすぎたせいで強化ホムンクルス（人造人間）を作ろうとした犯罪者のくせに！」

二人が言い合いをしていると

Ｄｒ．バイオス「まぁそんなことは別にいいさ、お前さんのおかげでわしは発明資金をたんまり貰えてるわけだしね別に警察に訴える気にはならんさ。それにしてもお前さん三獣士まで利用しようとするとはね実の弟まで」

光魔「私は彼らが聖フランチェスカの生徒を倒せるとははじめから思っていませんよ。ただ、明日の決勝戦に出られないようにしてくれればＯＫなんですから」

Ｄｒ．バイオス「だからと言って連中に小型爆弾を仕掛けるとは日

本の総理とは思えんね」

光魔「ふふふっ！私は家族や友人、そして恋人ですら利用できるものはなんでも利用しますよ。私にとって生徒は使い勝手のいいおもちゃでしかありませんからね！」

この大会に小さな闇が隠されていた。

その頃、爆弾を仕掛けられたことを知らずに闇討ちに行った三獣士は

庭園

森羅「やはり闇討ちなんて卑怯な手を使いたくありません！もっと生徒達の力を信用すべきです！」

森羅が反論すると

泉華「何いってるんだ森羅先生？あんな奴らに期待なんて初めからしてませんよ！」

黒羽「要するに保険だよ！あいつらは我々と違った生物実験体なんだぜ！完成体の俺らと違って奴らは弱いわけさ、万が一光魔学園が負けたらアニキの総理追放はもちろんのこと、俺らの夢だって崩壊してしまう！そうなればあんたの夢である植物の保護の夢も叶わないんだぜそれでもいいのかな？」

すると森羅は

森羅「そうですよね、植物保護のためには仕方のないことなんですよね聖フランチェスカ学園の生徒達には悪いですけどね」

黒羽「そう言うことだよわかったらさっさと闇討ちにいくぜ！」

そして三人が先に進もうとすると

？「なるほどね話は全て聞かせてもらいましたよ」

どこからか声が聞こえてきた。

黒羽「そこにいるのは誰だ！」

黒羽が尋ねると

飛琳「はじめまして光魔学園の先生方、私は聖フランチェスカ学園漢組の副担任の神龍飛琳と申します！」

バンッ！

そこには飛琳先生が現れた。

飛琳「話は聞きましたが闇討ちするなんてせこくてずるいことを考える学園なんですね光魔学園って」

飛琳が光魔学園を挑発すると

泉華「こいつっ！馬鹿にしやがって＃」

泉華がキレると

黒羽「やめとけ泉華、こんな奴相手に無駄な力を使うな」

黒羽が泉華を静めた。

黒羽「飛琳とか言ったな！悪いがお前の相手をしてる暇はないんでなそこを通らせてもらうぜ！」

黒羽が言うと

飛琳「そうはいきませんよ、通したらあなた達は生徒達を襲う気でしょう。それをわかっていて通すほど私は弱くないんでね」

飛琳がそう言うと

ゴォッ！！

飛琳の気がいきなり上がった。

飛琳「悪いですが私は教え子を守るためなら平気で人を殺しますよ！」

飛琳が言うと

黒羽「ふっ！こんな奴って言ったのは訂正してやるよ。泉華、森羅、こいつの相手は任せたぜ！」

ダッ！

そう言うと黒羽は窓から室内に入ろうとした。

飛琳「そうはいきませんよ！」

ダッ！

飛琳も追いかけるが

泉華「させるかよ『烈風の太刀』！」

ゴォッ！！

飛琳「うわっ！？」

サッ！

泉華に妨害されてしまいまんまと黒羽に逃げられてしまった。

飛琳「（今の技は私の一頭の舞に似てますね！？）」

飛琳が驚いていると

泉華「ここを通りたけりゃ俺達を倒すしかないぜ飛琳先生よぉ！」

森羅「ごめんなさい！！いけないことはわかっていても通すわけにはいかないんです！！」

ジャキンッ！

二人は武器を構えた。

飛琳「ほぅ、私と戦う気ですか？いいでしょう！相手になりますよ

！」

ジャキンッ！

飛琳も武器を構えた。

泉華「くらえっ！『怨霊の太刀』！」

ゴォッ！！

まず先に泉華が仕掛けると

飛琳「『二頭の舞』！」

ガキンッ！

飛琳は似たような技で受け止めた。

泉華「俺と同じ技を使うとはなこれは驚きだぜ！？」

飛琳「それはこちらの台詞ですよ。こっちだって少しは驚いているのだからね！」

ガキンッ！ガキンッ！

その後は同じ技同士の撃ち合いとなったが

力は飛琳の方が上で泉華は少しずつおされていた。

飛琳「（この勝負もらいましたよ！）」

スッ！

止めをさすために飛琳は庭園にある大きな石に飛び移ると

泉華「（かかったな！）森羅、今だ！」

飛琳「何っ！？」

飛琳が驚いていると

森羅「すみません！」

ビカッ！

森羅の杖が光ると

シュルシュルッ！

飛琳「なっ！？」

木の蔓が飛琳に絡み付いた。

そして動けない飛琳めがけて

泉華「くだばりな！『鬼龍突』！」

ドガッ！

飛琳「ぐはっ！？　」

泉華の技が飛琳にクリーンヒットした。

泉華「驚いたようだな森羅は植物を自由に操れるのさ！お前のように邪魔する奴を倒すためにわざと植物の多い庭園から攻めてきたのさ！　」

つまり飛琳は罠に嵌まった（はまった）のだ。

森羅「ごめんなさい学園長の命令なんです！すみませんでした！　」

森羅は頭を下げながら謝った。

飛琳「（くっ！？この私が罠に嵌まるとは！？）　」

飛琳はとても悔しがっていた。

泉華「それじゃあ動けない今がチャンスだな！　」

泉華は刀を振り上げると

泉華「くだばりやがれっ！　」

ブンッ！

飛琳めがけて刀を降り下ろした。

５４時間目「教師の戦い」（後書き）

飛琳「どうも飛琳です。生徒達を守るのが教師である私の役目、たとえ不利な状況であっても私は頑張ります！しかしあの森羅と言う人の様子がおかしいですね？次回、『飛琳の怒り、極めし力』生徒達は私が守ります！」

５５時間目「飛琳の怒り、極めし力」（前書き）

一刀「光魔学園との戦いを明日に控えたとき、光魔学園の学園長である二階堂光魔が俺達を闇討ちするため三獣士をけしかけた。それに察知した飛琳先生が相手をするが一人を逃がしてしまいさらにつかまってしまった！？大丈夫かよ先生！？」

55時間目「飛琳の怒り、極めし力」

飛琳先生が三獣士の罠にかかってしまい、縛られてしまった!?

泉華「どうしたどうした!悔しかったら反撃したらどうだ!」

ズバッ!ズバッ!

飛琳「くっ!?」

動けない飛琳めがけて次々と攻撃を仕掛ける泉華。飛琳は避ける間もなく攻撃を受け続ける。

泉華「おいっ!森羅、お前もやれよ!」

泉華が森羅に攻撃するよう言うと

森羅「はい…」

森羅は仕方なく杖を構えた。

森羅「(これも植物達を守るためなんです!ごめんなさい!)」

ここで話は過去に遡る(さかのぼる)。

二年ほど前　学会の発表会

森羅「ですから全世界の植物を守るためにも少しでも排気ガスを減らさなければならないのです!」

まだ光魔学園教師でなかった森羅が植物を守るための演説をするが

偉い人「たかが植物くらいで大げさだよ」

偉い人「付き合いきれないな」

彼らは植物が無ければ人間が絶滅することを知らない。

ぞろぞろ

そして会場には森羅以外誰も残らなかった。

森羅「やはり全世界の植物を守るなんて無理なのかな？」

森羅が落ち込んでいると

パチパチッ！

どこからか拍手の音が聞こえてきた。

森羅が拍手の音がする方を見ると

光魔「素晴らしい学説を聞きましたよ！」

そこには光魔がいた。

森羅「あなたは総理大臣の二階堂光魔さん！？あなたのような人がどうしてここにいるんですか！？」

森羅が驚いていると

光魔「私は素晴らしい学説を聞き取ることができるんですよ！そして聞き取ってみたらこの場所に着いた、ただそれだけの話です」

光魔が言うと

光魔「あなたの学説は素晴らしい！それを理解できないあの教授や博士はおかしすぎますよ！どうですか、あなたさえよければ是非うちの教師になってもらいたいのですが？」

光魔が言うと

森羅「私のような人が総理大臣の学園の教師だなんておそれ多いですよ！？」

森羅が驚いていると

光魔「そんなことありませんよ！うちの学園に入ってくれればあなたの夢である全世界の植物の保護ができますよ。それにあなたの植物と会話する能力があればね」

実は森羅には植物と会話する能力があった。しかし端からみれば変人扱いされるためずっと隠していたのだ。

そして森羅は

森羅「わかりました！お誘いに乗ります！」

こうして森羅は光魔学園の保険医になったのだった。

そして森羅は教師になった証しとして光魔から植物が力を貸してくれる『木龍杖』をもらったのだが、本当はこの杖は植物が力を貸してくれるわけではなく、植物を無理矢理操る杖であることを森羅は知らない。

わかり人もいると思うが森羅は光魔に利用されているのだ。

話は現代に戻る。

森羅「『自然龍の攻撃（ナチュラルドラゴンブラスト）』！」

ゴォッ！！

森羅の出した技が飛琳に命中する！？

しかし飛琳は

ピクッ！

少し体を動かしただけだった。

その様子を森羅は不思議に思ったが

少し動いただけで避けられるはずがなく

ドカカッ！

飛琳「ぐはっ！？」

技は飛琳に直撃した。

しかしさすがは飛琳先生、直撃したにもかかわらずよろめきながらも立ち上がる。

すると森羅は飛琳に質問をした。

森羅「何故です！少し体を動かしても直撃すると分かっているのに何で動いたんですか！？」

すると飛琳は

飛琳「それはあのように避けた方が少しでも植物を守れるからですよ」

そして森羅が飛琳をみると

なんと！？飛琳の体がボロボロなのに対して巻き付いていた植物に被害はなかったのだ！？

つまり飛琳は自分を犠牲にして攻撃を受けてでも植物を守っていたのだ。

それを見た森羅は思わず

ピカッ！

杖を光らせると

シュルシュルッ！

飛琳に絡み付いていた蔓が次々とほどかれていった。

泉華「何してるんだ森羅！？　」

森羅の意味のわからない行動に驚いた泉華が聞くと

森羅「もうやめましょう！闇討ちなんて卑怯ですし、この人には何の罪もありません！もっと生徒達の力を信用すべきです！あの子達は自分の力で勝利することができますよ！　」

森羅が言うと泉華は

泉華「…　」

少しの間黙っていて、ポケットからスイッチを取り出すと

泉華「この裏切り者め！　」

ポチッ！

泉華がスイッチを押した瞬間！

バリリッー！！

森羅「きゃあっ！？　」

ものすごい電流が森羅を襲った。

泉華「万が一お前が裏切ったときのために光魔様が電流装置を取り付けておいたのさ！」

実は前回光魔に肩を叩かれたときにこっそりと仕掛けられたのだ。

泉華「一度発動したら最後、外すことができないし、止める方法もないのさ！」

泉華が笑いながら説明すると

ビリリ～。

電流の音がいつの間にか小さくなっていき

プツンッ！

最後には完全に止められた。

泉華「一体どうしたというんだ！？」

泉華が不思議に思っていると

飛琳「残念ですね、こうみえても私は機械技術が得意でしてねこんなものなら簡単に解除できるんですよ」

確かに森羅に仕掛けられていた電流装置は解除されていたが

高圧電流を素手で触ったため飛琳の腕は黒こげになっていた。

そして同じく黒こげになった森羅が話し出した。

森羅「すいませんでした。関係のないあなたを巻き込んでしまって、私はただ植物を守るために戦っていましたがその私が植物を武器に使うなんて間違っていました」

森羅は涙を流しながら謝って反省した。

飛琳「あなたの気持ちはよくわかりましたよ！だって私は二年ほど前にあなたの学説を聞いてから植物を大事にしようと思ったんですから」

森羅「もっと早くあなたに会えばよかったです…」

ガクンッ

そして森羅は気絶して寝てしまった。

そしてそれを見た泉華は

泉華「バカな奴め！光魔様に利用されてるのも知らずに素直に従うなんてな！お前のような奴が光魔様に好かれるはずがないだろうに！初めからお前の能力である植物会話力が目的だったのさ」

泉華が次々と衝撃事実を明らかにしていくと

飛琳「黙りなさい…」

泉華「はっ？」

飛琳「彼女をバカにすることはこの私が許しません！＃」

ゴォッ！！

飛琳の気がさっきよりも格段に上がった。

泉華「何なんだよこの気は！？こんな奴が何で光魔様にスカウトされないんだ！？」

泉華があまりの飛琳の気の多さに驚いていると

飛琳「答えは簡単ですよ！私は悪人なんかには絶対に手をかしませんからね！＃」

ゴォッ！！

そしてさらに飛琳の気が上がった。

飛琳「あなた程度の人に使うのは惜しいですが今の私は非常に怒っているから仕方がありませんね！」

スッ！

そして飛琳は構えると

飛琳「和が呼び掛けに答えよ、いでよ炎龍！」

ゴォッ！！

飛琳がそう叫ぶとどこからか時空の裂け目が現れてそこから炎の龍

が現れた。

飛琳「超進化！」

そして飛琳が叫ぶと

ゴォッ！！

炎の龍は飛琳を飲み込み、そこから現れたのは！？

バァンッ！

赤い九頭の龍の鎧兜を身に纏った飛琳が現れた。

泉華「何だよその姿は！？」

泉華が驚くと

飛琳「この姿は超進化と言って龍と心が一致したときにできる大技ですよ、ちなみに私は紅蓮炎龍といいます」

スッ！

そして飛琳は少しずつ歩きながら泉華に近付くと

飛琳「あなたを許すわけにはいきません！」

ゴォッ！！

怒り１００％で向かっていった。

これに恐怖を感じた泉華は

泉華「別にびびる必要なんてないんだ！？」

スッ！

構えると

泉華「絶対防御、『天守閣の太刀』！」

ゴゴゴォーッ！

すると下から天守閣が飛び出して泉華を守るように並ばれた！

泉華「本来ならば地震を起こすのだがこのままでも防御には役に立つ！この技は焔でも破ることができないのさ！」

泉華が言うと飛琳は

飛琳「ならば私が破った人第一号ですね」

スッ！

飛琳は構えると

飛琳「『九頭炎龍舞』！」

ザクッ！　ゴォッ！！

地面に突き刺した飛琳の刀から巨大な炎の龍が飛び出して

ゴゴゴォーッ!!

天守閣めがけて襲いかかった。

そしてあとに残ったのは

やけ崩れた天守閣と

泉華「ば…馬鹿な!?」

かろうじて生きていた泉華のみとなった。

ザッ!ザッ!

飛琳が少しずつ泉華に近付くと

泉華「ひっ!?」

泉華は残った力を振り絞って空高く逃げた。

そして逃げた泉華めがけて飛琳は

飛琳「そうそう、彼女の体に小型爆弾が仕掛けられていましたがあなたもあるかもしれないんで気を付けてください!」

泉華「えっ!?」

泉華が飛琳の最後の言葉を聞いたときには

ドッカーンッ！！

すでに小型爆弾が爆発した。

シュシュンッ！

そして飛琳は紅蓮炎龍を解くと

飛琳「とりあえず私と彼女は医務室につれていった方がいいですね」

ひょいっ！

森羅をお姫様だっこをして抱えて医務室に向かっていった。

飛琳「それにしても久々に使ったら体のあちこちが痛み出すとは、危ないと思いましたが一刀達にこの技を教えてよかったんでしょうかね？」

実は飛琳はすでに一部の生徒に超進化を教えていた。

飛琳「まぁ、龍と心が一致しないとできない技ですから心配ないと思いますがね」

そしてそのまま医務室に向かっていった。

55時間目「飛琳の怒り、極めし力」（後書き）

黒羽「光魔の弟の二階堂（クロウ）黒羽だ。森羅も泉華もだらしねぇな！こうなったら俺一人だけでも闇討ちしてやるぜ！次回、『駒』俺はあいつらとは違うぜ覚悟しな！」

56時間目「駒」（前書き）

一刀「飛琳先生が大ピンチになった!?そんなとき三獣士の一人である森羅が攻撃を止めた。しかし、裏切ったばつとして制裁を食らってしまい光魔学園の非道さに飛琳先生が激怒し、真の力を解放した。そして見事泉華を打ち破り、先生は森羅を連れて去ったのだった」

56時間目「駒」

飛琳が泉華に捕まっていた頃、

一人その場から立ち去った黒羽は

黒羽「危なかったぜ！？あんな奴がフランチェスカにいたとはな！？」

飛琳の力に驚いていたが任務である闇討ちを優先した。

黒羽が宛もなく室内を歩いていると

ブンッ！ブンッ！

どこからか素振りの音が聞こえてきた。

音のする方に黒羽が近付いてみるとそこには…

一刀「相手はあの光魔学園だ！今まで以上の戦いになるだろうから寝る間を惜しんで特訓しなくちゃな！」

一刀が木刀で素振りをしていた。

黒羽は物陰に隠れながら

黒羽「（こいつはラッキーだぜ！まさかフランチェスカの大将に出会うとはな♪こいつを痛め付ければうちの不戦勝じゃねぇか！）」

大会中の選手の途中交代はできないので一刀が痛め付けられれば交代はできないし、大将である一刀が出なければそれだけで光魔学園が勝ちとなるのだ。

黒羽「（あんな見た目が弱そうな奴なんて一撃で仕留めてやるぜ！）」

ジャキンッ！

黒羽は武器であるダークランスを構えた。

黒羽「（くらえっ！北郷）」

シュンッ！

黒羽は一刀めがけてダークランスを投げた。

しかし、

カキンッ！

投げたダークランスは一刀に弾かれてしまった。

一刀「誰だか知らないけどさっきから殺気が駄々漏れしすぎだよ」

スッ！

そして一刀は黒羽が隠れている場所を見つめると

一刀「隠れているのは分かってるんだから早く出てきな！」

一刀が叫ぶと

黒羽「さすがはフランチェスカの大将、見た目で判断したらいけないな」

スッ！

物陰から黒羽が出てきた。

黒羽「俺の名は光魔学園三獣士の一人、二階堂黒羽（クロウ）！お前の命、もらいに来たぜ！」

ジャキンッ！

黒羽はダークランスと魔黒弓剣を構えると

一刀「俺は簡単には殺られないぜ！」

スッ！

一刀も木刀を構えた。

黒羽「木刀が武器だなんて俺をなめてるのか！少し時間をやるから武器を取ってこいよ！」

黒羽が叫ぶと

一刀「俺が持ってるのが木刀だからってなめてかかると痛い目見る

ぜ！」

一刀が言うと

黒羽「面白い奴め、武器を持ってこなかったことを後悔させてやるぜ！」

ゴォッ！！

いきなり黒羽は気を全開に出した。

一刀「（この気の量は！？すごいな！？）」

一刀が黒羽の出した気に多少驚いていると

黒羽「さっきは弾かれたが、今度はどうかな？」

シュンッ！

黒羽は再びダークランスを一刀に投げつけた。

しかし、一刀は

一刀「ちっ！？」

サッ！

弾かずに避けた。だが少し体を斬りつけてしまった。

そしてダークランスが当たった傷口から

ジュオオッー！

闇の気が噴き出してきた。

一刀「何だよこれは！？」

一刀が驚いていると

黒羽「俺のダークランスが当たったら最後、俺の闇が貴様を痛め付けるぜ！」

ゴォーッ！！

一刀「ぐわーっ！？」

斬りつけられた傷はわずか数ミリに対して闇の気がたくさん噴き出してきた。

そして吹き出してくるたびに一刀の顔が険しくなっていた。

黒羽「俺の闇に耐えきれたのは神華と闇華と兄貴の光魔だけさ！」

ここで話は少しばかり過去に戻る。

数十年前、光魔と黒羽の二階堂兄弟は産まれながらに他より強い力を持っていた。

だが黒羽が唯一勝てなかった相手が兄である光魔だった。

そして光魔が総理大臣になった時、黒羽は心に誓ったことがあった。

黒羽「（俺は兄貴には絶対に勝てない！だったらせめて兄貴の足手まといにならないように兄貴の補佐をするしか俺に道はない！）」

その後、黒羽は兄である光魔のために少しでも役に立とうと兄の命令通りに動いていった。

黒羽「とどめだ！せめて楽に殺してやるぜ！」

シュンッ！

黒羽はダークランスを構えて一刀に向かっていく！

一刀絶体絶命のピンチ！？

だが、その時

ドッカーンッ！

遠くの方で爆発音が聞こえてきた。

実はこの音は泉華が爆発した音である。

黒羽「今の音は何だ！？」

そして黒羽が爆発に気をとられている間に一刀は

一刀「（あいつに一瞬の隙ができた！チャンスは今しかない！）」

スッ！

そして一刀は残った気を振り絞って右腕に力をためると

ゴォーッ！！

右腕がひかりだした。

そしてその右腕を隙ができた黒羽めがけて

一刀「『俄龍光拳』！」

ドガッ！

技を繰り出した。技を食らった黒羽は

黒羽「げほっ！？」

バシャーッ！

胃の中からすべてを吐き出した。

黒羽「（この俺がこんなガキに！？）まぁいい、任務は成功だ！」

シュンッ！

黒羽は怪我を負いながらもその場から立ち去っていった。

そして一刀は

一刀「ぐほっ！？」

いまだ痛む闇の気と戦っていた。

光魔学園控え室

ギィッ！

黒羽「兄貴、闇討ち成功だ！北郷一刀はしばらくは動けないぜ！」

ボロボロの姿の黒羽が光魔のいる控え室に戻ると

光魔「黒羽！無事だったのか！」

ギュッ！

光魔は黒羽を抱き締めた。

黒羽「よせよ兄貴、抱き締めるなんて恥ずかしいじゃないか／／／」

黒羽が兄の行動に照れていると

ザシュンッ！

黒羽「えっ！？」

黒羽は光魔に斬られた。

光魔「ご苦労だったな弟よ、闇討ちご苦労様、そしてもう貴様に用はない！闇討ちした奴を匿うほど優しくないんでな」

光魔の言葉に黒羽は

黒羽「何故だよ兄貴！俺はいつでも兄貴のためだと思って！？」

しかし、光魔は

光魔「私のためならばさっさと死ね！貴様は駒としてはいい出来だったぞ！最後は捨て駒らしく散れっ！」

ザシュンッ！

瀕死の黒羽に光魔の攻撃が炸裂した。

黒羽「そんな兄貴…！？」

バタンッ！

そして黒羽はその場で倒れてしまった。

光魔「北郷一刀が負傷したとならばうちの学園の勝利は確実だ！ハッハッハッ！」

そしていよいよ明日、決勝戦が始まる。

56時間目「駒」（後書き）

光魔「どうも皆さん光魔です。うちの捨て駒である黒羽もたまには役に立ちますね、これでうちの勝利は決まったも同然ですよ。次回、『関ヶ原の戦い』憎きフランチェスカよ、あなた達の最後です」

57時間目「関ヶ原の戦い」（前書き）

一刀「決勝戦の前の夜、光魔学園の二階堂（クロウ）黒羽！が闇討ちをしてきやがった！何とか追い払った俺だが敵の攻撃を受けてしまったんだ！そして戻ってきた黒羽に対して兄の二階堂光魔は弟である黒羽を切り裂きやがった！許さないぜ光魔！」

57時間目「関ヶ原の戦い」

そしてついに学園対抗武道大会決勝戦の朝をむかえた。

武道コロシアム

陳琳「さぁ、いよいよ学園対抗武道大会決勝戦の日がやって来ました！」

解説の陳琳が姿を現すと

ワァーッ！ワァーッ！

会場は大いに盛り上がっていた。

陳琳「それではここまでに勝ち進んだ学園を紹介しましょう！」

スッ！

陳琳が青い門を指差すと

ボワーッ！

いきなりスモークが吹き出して煙の中から

ズラリッ！

焔、神華、そして黒い外套を身にまとった八人が現れた。

陳琳「一回戦は大蛇学園を圧倒的な力で倒した総理大臣・二階堂光魔が率いる光魔学園の入場です」

ザッ！ザッ！

そして光魔学園は入場をする。

そして入場が終わると

陳琳「続いて、我が母校である聖フランチェスカ学園の入場です！」

ボワーッ！

陳琳が赤い門を指差すとスモークが吹き出した。

その頃、光魔学園控え室

光魔「フフフッ！頼みの綱である北郷一刀は負傷、他の奴らは雑魚の集まり我が学園の勝利は決まったも同然だな！」

光魔が勝利を確信してにやけていると

ザッ！ザッ！

聖フランチェスカ学園は一刀を先頭にして入場していった。

光魔「バカな!?何で北郷がいるんだ!?」

光魔が驚くのも無理もない、何故なら一刀は傷口に少し包帯を巻いているだけでピンピンしていたのだから

どうしてこうなったのかというと話は今朝に遡る（さかのぼる）。

今朝、フランチェスカ学園控え室

弧狼「あいつらなめた真似しやがって!#」

一刀の傷を見て光魔学園の仕業と知り、弧狼は腹を立てていた。

一刀「ぐはっ!?」

闇の気はいまだに一刀の体を蝕んでいた。

弧狼「こうなったらいくぞお前ら!」

蒼魔「行くったってどこ行く気だよ兄貴!?」

蒼魔が聞くと

弧狼「決まってるだろ!あいつらの大将を一刀と同じように斬りつけなくちゃ俺の気がすまないんだよ!#」

弧狼が光魔学園控え室に向かおうとすると

一刀「止めなよ兄貴!」

一刀が止めにはいった。

一刀「いくら光魔学園がやったからってあいつらの仕業がどうかわからないし、そんなことすれば兄貴は卑怯ものだぜ！」

弧狼「うっ！？」

弧狼は卑怯が嫌いであった。

鳳賀「しかしこれでうちは光魔学園が十人に対して八人で戦わなくてはならないとはな！？」

何故一刀を除いても九人なのに対して八人かというと桃香を除いているからである。

みんなが頭を悩ましていると

華佗「それの治療法ならあるにはある」

華佗が言うと

蒼魔「ホントかよ華佗！？」

弧狼「そんな方法があるならさっさと言えっての！」

弧狼が言うと

華佗「簡単に言うと、その傷は一刀の気に同調して反応しているわけだから一刀が気の流れを人並みにすれば治るわけだ」

つまり闇の気は一刀の気が大きいため激しく痛んでいるが、一刀の気を人並みになるほど小さくすれば痛みはおさまるわけだ。

鳳賀「確かにそうなのだが、それってつまり…」

一刀は気の技である俄龍四神弾や俄龍光拳が使えないのである。もし使えば再び痛みが出てくるのだ。

弧狼「そんなハンデが使えるか！やっぱりあいつらの一人や二人を痛め付けないと俺の気がすまない！」

ダッ！

弧狼が飛び出そうとすると

一刀「止めなよ兄貴！俺が強いのはみんな知ってるだろ！気を使えないなんてちょうどいいハンデだぜ！」

こうして一刀は気を人並みにして決勝戦に挑むことになった。

現在

そして選手全員が揃うと

蓮華「ホントにやるの！？／／／」

月「恥ずかしいです／／／」

華琳「今更何をいってるのよ！恥ずかしいのは私だってそうよ！でも少しでも一刀達の役に立つためなのよ！／／／」

ジャララーッ！

そしてどこからか音が聞こえてくると

ジャジャンッ！

そこにはチアガール服を身にまとった華琳・蓮華・月がいた。

華琳「頑張れ！頑張れ！フランチェスカ！／／／」

蓮華「負けるな！負けるな！フランチェスカ！／／／」

月「それいけ！それいけ！フランチェスカ！／／／」

みんな顔を赤くしながらも応援をする。

観客「すごい格好だな♪」

観客「試合よりこっちの方が見ものだぜ♪」

これだけならば試合より応援の方が見ものだっただろう。次のこれがなければ

于吉「Ｌ・Ｏ・Ｖ・Ｅ・左・慈♪」

卑弥呼「負けたらワシがなぐさめとしてキスしてやるぞ～♪」

二人がチアガール服を身にまとい、不気味な応援（？）をしていた。

スッ！スッ！

そして観客の目線はリングに戻った。

陳琳「なお、この試合は全国に放映されています！それでは決勝戦のルールを説明しましょう！」

陳琳が宣言すると

パッ！

電工掲示板に文字が写し出された。

『関ヶ原の戦い』

これを見た桃香は

桃香「関ヶ原ってあの有名な戦いだよね！？」

と聞くと

一刀「桃香が関ヶ原を知ってるなんて驚いたな！？」

と言うと

桃香「ひっどーい！これでも私は高2なんだから分かるもん！」

蒼魔「だったら関ヶ原は何の戦いだ？」

と聞かれた桃香は

桃香「簡単だよ♪日本とアメリカが初めて戦争した戦いだもの♪」

桃香が自信をもって言うと

ズシャーッ！！

恋と九龍以外のみんながずっこけた。そして、

弧狼「馬鹿かお前は！何で江戸時代にアメリカと戦争するんだよ！」

桃香「違うの！？じゃあ、モンゴルが嵐によって流されたって言う…」

鳳賀「それは元寇だし、時代も鎌倉時代だろうが！」

桃香「これも違うの！？じゃあ、最後にパンがなかったらケーキ食べろって…」

蒼魔「それはフランス革命だ！」

左慈「いい加減バカなことをするのはやめろ！テレビに映っている

ぞ！」

桃香「えっ！？」

桃香はその事に気づくと

桃香「どうしよう！？お母さんに怒られちゃう～！！」

桃香は泣き出してしまった。

同時刻、桃香の実家では

桃香の母、桃恵

桃恵「あの馬鹿娘は、世界中の笑い者だよ」

怒るよりも先に呆れていた。

武道コロシアム

陳琳「それではルールを説明しましょう！」

陳琳「まず皆さんは広々とした場所で戦えるように転送装置を使って無人の山奥に移動してもらいます」

陳琳「そして各人はこのボールを一人一つずつ持ってもらいボール

が割れた時点でその人は試合に参加できずにこの武道コロシアムに強制転送されます。先に大将を倒すか、敵軍を全滅したチームの勝ちです！なお、このボールは自分で割ることができませんので了承してください。もし、殺人した場合殺した人は強制転送されますのでその点についても了承お願いします」

あらかたルールが説明されると

一刀「（どちらにしろ俺が負けた時点で負けなんだから頑張らないとな！）」

一刀が気合いを入れていると

桃香「ぷっ！」

桃香が笑いだした。

華佗「何笑ってるんだ桃香？」

華佗が聞くと

桃香「何でもないの、ただ光魔学園の最後の人の名字がおかしくてつい」

桃香が言うのでみんなが電工掲示板に写し出された選手一覧を見てみると

日高　焔
神谷　神華
神谷　闇華

水上　雫
杉崎　紫電
天宮　零霧
土屋　地王
宮澤　嵐
骸亜　死龍

そして…

山田　映者

これを見たみんなは

一刀「ブハハッ！ホントに変わった名字のやつがいるぞ！」

蒼魔「よりにもよって山田さんかよ！」

フランチェスカ学園側から笑いが飛んでいた。

しかし、一人だけ気にくわない人がいた。山田映者である。

映者「（俺を馬鹿にしやがって！後で後悔しやがれ！）」

とても苛立っていた。

57時間目「関ヶ原の戦い」（後書き）

一刀「一刀です。いよいよ決勝戦が始まろうとしていた！俺は桃香を一人にしないように守らなくちゃな！次回、『魔鏡家、山田の挑戦！』おい西森！最近タイトルをパクりすぎなんだよ！」

58時間目「魔鏡家、山田の挑戦！」（前書き）

一刀「ついに決勝戦が始まろうとしていた！しかし俺は闇討ちのせいで気を使えないままリングに立つことになってしまった。そして試合の説明がされていよいよ決勝戦が始まるぜ！」

58時間目「魔鏡家、山田の挑戦！」

そして、今まさに決勝戦が始まろうとしていた！

陳琳「なお、皆さんがどこに飛ばされるかは運ですので！携帯の電波も通じないのでご了承ください」

一刀「今になってその説明かよ！？」

蒼魔「遅すぎだろうが！？」

そして全員が転送装置にたどり着いたところで

陳琳「それでは決勝戦、フランチェスカ学園ＶＳ光魔学園の試合開始！」

ポチッとな

陳琳がボタンを押すと

シュンッ！

２０人があっという間に姿を消した。

陳琳「なお、会場のお客さんには試合状況がわかるようスクリーンに映るようになっていますのでご安心ください！」

パッ！

そしてスクリーンには戦いの舞台である、とある山奥が映し出された。

ある場所では

一刀「う～ん！？着いたのか？」

目を覚ました一刀が起き上がろうとして手をつくと

むにっ♪

右手に柔らかい感触を感じた。

一刀が恐る恐る右手を見てみると

桃香「う～ん！？」

バァンッ！

一刀の右手は桃香の胸を触っていた。

一刀「（またかよ～！？／／／）」

サッ！

前にも似たようなことがあったのを思い出した一刀はすぐさま桃香の胸から手を離して後退りした。

すると

桃香「う〜ん！？」

桃香が目を覚ました。

そして桃香は一刀を見つけると

桃香「やった〜♪一刀くんだ〜♪」

ギュッ！

桃香は一刀に抱きついた

一刀「桃香！？今は試合中だぞ！？／／／」

一刀が注意するが

桃香「よかったよ〜！もし誰にも会えなかったらどうしようかと思ってたんだもん！」

桃香は話を聞かずにさらに強く抱き締めてくる。

ちなみにこの状況もカメラを通じて武道コロシアム、世界中に流れていた。

武道コロシアム

華琳「桃香、少しずるいわね＃」

蓮華「一刀も何デレデレしてるのよ＃」

月「これは後でお仕置きですね＃　」

試合会場

一刀「（ゾクッ！？）　」

何か恐ろしいことが起きると予感する一刀だった。

そんな時、

映者「試合中にイチャイチャするなんて余裕だな　」

バンッ！

丘の上に映者が現れた。

一刀「お前は…！？　」

一刀が言う前に

桃香「山田さん！？　」

桃香が先に答えた。

映者「名字で呼ぶな！俺は映者だ！＃　」

山田さんと言われて映者が怒る。

映者「俺は運がよかったなぁ～♪相手が負傷の北郷と一番弱い劉備

だなんてね♪お前らの首！デスドラゴンナイツの一人、『鏡銅の映者』が相手してやるぜ！」

バサッ！

そして映者は外套を脱ぎ捨てると

映者「ちゃっちゃと終わらせてやるよ！」

ジャキンッ！

映者は武器の魔鏡楯を取り出して

映者「くたばりやがれー！」

バッ！

桃香めがけて襲いかかった。

一刀「桃香！？」

一刀が叫ぶが相手のスピードの方が早い！

桃香「来ないで～！？」

ブンブンッ！

桃香が武器の靖王伝家を振り回していると

チクリッ！

刃先が映者に刺さった。その瞬間

映者「ギャー！？痛いっ！死んでしまう～！」

映者は大げさにのたうち回った。

それを見た一刀は気がついた。

一刀「桃香、安心しろこいつは桃香より弱いぞ」

一刀が言うと

桃香「なんだか私もそんな気がしてきたよ」

桃香もすでにわかったようだ。

すると映者は

映者「俺を馬鹿にするんじゃねぇ！俺はデスドラゴンナイツで一番強いんだぞ！その証拠を見せてやるぜ」

スッ！

映者は魔鏡楯の標準を一刀と桃香に合わせると

映者「『鏡の影（ミラージュシャドウ）』！」

ビカッ！

魔鏡楯がひかりだすと

ズズズゥーッ！

魔鏡楯の中から色黒い一刀と桃香が現れた。

映者「俺のこの技は鏡に写った相手のコピーを作るのさ！しかもコピーは俺の思い通りに動くのさ！」

映者が言うと

一刀「所詮はコピーだろうが！本物に勝てるかよ！」

バッ！

一刀は黒桃香に斬りかかろうとするが

黒桃香「一刀くん、私に手を出さないで！」

うるうるっ！

黒桃香が涙を流すと

一刀「なっ！？」

ピタッ！

一刀の動きが止まってしまい

黒桃香「馬鹿ねぇ！」

ズバッ！

一刀「ぐおっ！？」

一刀は黒桃香に斬られてしまった。

映者「キャハハッ！お次はお前だぜ劉備！」

バッ！

映者は黒一刀を操って桃香を襲わせる。

黒一刀「食らえっ！」

すると桃香は

桃香「一刀くん、私に手を出さないで！」

黒桃香の真似をすると

ピタッ！

黒一刀「うっ！？」

黒一刀の動きが止まったのだが

桃香「助かった～！？」

桃香は手を出さなかった。

映者「おのれっ！ならば黒一刀は北郷を、黒桃香は劉備の相手をしてもらうぜ！」

シュバッ！

命じられた黒一刀と黒桃香は一刀と桃香に襲いかかってきた。

一刀「ちっ！？」

ガキンッ！

一刀はなんとか黒一刀の攻撃を受け止めるが

桃香「これが私のコピーなんて嘘でしょ！？だって私こんなに強くないもん！！」

桃香は黒桃香の攻撃を避け続けていた。

一刀「（早くこいつを何とかしないと桃香が危ないのは分かっているんだが！？同じ実力じゃあいつまでたっても決着がつかないし、かわし続ける時間もない！）」

一刀は必死に自分の弱点を考えるが女以外には浮かばなかった。

一刀「（ダメだ！あいつは鏡から出てきた俺のコピーなんだから弱点なんて…。んっ！？そうか鏡のコピーか！）」

そして一刀は黒一刀の今までの行動を思い出していると

一刀「（やっぱりそうだったのか！だったら勝てるぜこの試合！）」

一刀は打開策を浮かんだようだ。

すると一刀は

一刀「ほらよっ！」

ブンッ！

黒一刀に向かって木刀を投げつけた。

パシッ！

しかし黒一刀は簡単に右手で受け止めてしまった。

映者「悪あがきはよしな！黒一刀、自分の木刀を消してそいつのを使いな！」

黒一刀「わかったぜ！」

スッ！

黒一刀は分身でできた木刀を消すと一刀の木刀を左手でつかんだ。

一刀「今がチャンスだ！」

シュンッ！

一刀は全速力で黒一刀に向かっていき

一刀「桃香も俺と同じことをするんだ！」

桃香「えっ！？」

桃香に聞こえるように叫ぶと

ブンッ！

渾身の右ストレートを繰り出した。

黒一刀「馬鹿め！剣を振るえない隙を狙ったつもりだろうがまだ拳があるんだよ！」

ブンッ！

黒一刀も右ストレートを繰り出した。

ドカッ！！

互いにはなった右ストレートは同士討ちとなった。

映者「馬鹿なやつめ！相討ちを狙ったようだがダメージのある貴様に黒一刀が負けるはずないだろうが！」

映者が叫んでいると

ドカッ！！

いつの間にか桃香も一刀と同じ手を使って黒桃香と渾身の右ストレートを繰り出して相討ちになっていた。

桃香「（痛いけどこれでどうなるの？）」

桃香が疑問を感じていると

バタンッ！

黒一刀「馬鹿な！？」

黒一刀が先に倒れ出した。

そしてそれから数分もたたずに

バタンッ！

黒桃香「何でなの？」

黒桃香も倒れ出した。

映者「何故だ！？相討ちなのに何故コピーが負けるんだよ！？」

映者が驚いているうちに

一刀「さぁな！」

ドカッ！

一刀が背後から映者を攻撃した。

映者「ピクピクッ…」

一刀「しばらく動けないと思うからボールは別に割らなくてもいいな」

一刀が言うと

桃香「ところで一刀くん！何で私達が勝っちゃったの？」

桃香の質問に一刀が答える。

一刀「一見そっくりに見える鏡でも違う点がひとつあるのさ」

桃香「違う点？」

一刀「鏡は左右逆に映るんだ。俺は右利きだから木刀を右手で持っていたけど鏡のあいつは左手で持っていたから左利きだとわかったのさ！」

一刀「たとえダメージを受けていても右手勝負に持ち込めば右利きの俺は左利きのあいつには負けないわけさ！」

これは人にもよるが利き手じゃない方が利き手よりも威力は弱いものである

一刀は分かりやすく説明したつもりだったが

桃香「わからない！」

ズコッ！

桃香にはわかってもらえなかった。

58時間目「魔鏡家、山田の挑戦！」（後書き）

九龍「九龍だ！一刀達も頑張っているみたいだし俺も頑張らないとな！さてと俺の相手は誰かな？やっぱりお前か！次回、『兄弟対決九龍ＶＳ死龍』腹へったぜ！」

５９時間目「兄弟対決九龍ＶＳ死龍」（前書き）

一刀「決勝戦が始まり、俺と桃香が最初に出会ったのは山田という男だった。戦闘力が低いということでなめてかかったが山田は俺と桃香のコピーを作り出して攻撃してきた。同等の力を持つコピー相手に苦戦する俺達だったが鏡のコピーの弱点をついた作戦により見事山田を撃破したのだった」

59時間目「兄弟対決九龍VS死龍」

とある場所では

九龍「みんなどうしてるかな？」

ガツガツ

九龍が持参していた肉を食べていた。

カランッ！

九龍「さてと、お腹も一杯になったことだし、そろそろ対戦相手を探すとするかな」

試合中にもかかわらずのんきな性格である。

そして九龍が歩き出そうとすると

？「相変わらずどんなときでもマイペースな奴だな」

どこからか声が聞こえてきた。

九龍「誰だ！？」

九龍は気を読み取って相手の位置を探すが

九龍は一刀達に比べると気による位置探査能力が乏しかった。

九龍「隠れてないで出てこい！」

九龍が叫ぶと

？「位置探査もできないなんてお前はホントに我が家の恥さらしのようだな」

このままではただ単に時間がたつだけなので仕方なく対戦相手が九龍の前に現れた。

九龍「お前が俺の対戦相手か！すぐに終わらせてやるぜ！」

ジャキンッ！

九龍は武器の龍殺牙を構えると

九龍「食らえっ！」

バッ！

問答無用で襲いかかってきた。

しかし

？「アホかお前は」

サッ！

九龍「なにっ！？」

相手は突進してきた九龍を軽く避けると

ドカッ！

腹に一撃を食らわした。

九龍「ぐはっ！？」

腹にもろに食らった九龍はその場に倒れこむ

？「昔とちっとも行動が変わってないんだよ」

それを聞いた九龍は

九龍「そうか！今思い出したぞ、その武器にさっきの避けたときの構え…アンタは！？」

？「気付くのが遅いんだよ！」

バサッ！

対戦相手は外套を脱ぎ捨てると姿をあらわした。

九龍「やっぱり死龍の兄貴だったのか！？」

この相手は九龍の兄である骸亜（シーロン）死龍であった。

九龍「やはり兄貴だったのか！？会うのは久しぶりだな！」

死龍「最後に会ったのはお前が中学に入った時だったな」

二人が会話をしていると

死龍「挨拶はこれくらいにしてさっさと殺り合うか！」

死龍は武器の漆黒龍皇牙を構えると

九龍「兄貴と殺り合うのは久しぶりだな」

ジャキンッ！

九龍も武器の龍殺牙を構えた。

九龍「『巨大炎（ギガフレイム）』！」

ゴォーッ！

九龍は先手を打つべく炎を吹き出すと

死龍「そんな技が食らうものか！」

死龍は軽く避けた

死龍「思った通りだな、お前の技は中学に入った時とたいして変わっていない！お前の技を知り尽くしている俺が勝つのも時間の問題だ」

死龍が言うと

九龍「ふんっ！それを言うなら俺だって兄貴の技を知っているから互角だぜ！」

九龍が言うと

死龍「馬鹿め！あれから六年は経っているんだぞ！ぐうたらしていたお前とひたすら骸亜家の長男として鍛えられていた俺を一緒にするんじゃない！」

スッ！

そして死龍は構えると

死龍「『暗黒龍の破滅撃（ダークドラゴンフォース）』！」

ゴォッ！

九龍が知らない技を繰り出した。

九龍「なにっ！？うぉっ！？」

ドカカッ！

死龍の放った技は九龍の急所に当たった。

死龍「今の技でくたばってもらっては困るぞ！何故ならわざと生きるように手加減してやったんだからな！」

ヨロッ

その言葉の通りに九龍は立ち上がったが

九龍「（兄貴の手加減は手加減なんかじゃないからな）」

だったという。

九龍「そういえばひとつ聞くが何故兄貴は光魔学園にいるんだ？」

すると死龍は

死龍「俺は力だけが全ての骸亜家の長男だった。しかし回りのやつらは俺の強さにビビって誰も相手をしない平凡な日々が続いたのさ」

死龍「そんな退屈な日々から俺を出してくれたのが光魔さんだったのさ！」

回想

死龍「ちっ！誰も俺が強いからって相手にしないなんて弱虫だらけだぜ！」

死龍が廊下を歩いていると

光魔「力がありすぎるが故の孤独ですか、とても凛々しいようだな」

突然光魔が現れた。

死龍「アンタは確か総理大臣の光魔だったな！俺になんの用だ！」

光魔「さすがだな俺が誰かと知っていながら敬語を使わないやつは貴様が久しぶりだよ。単刀直入に言うが力に飢えているのならこんな学園より我が学園に来ないか？強い奴もたくさんいるから相手には不自由しないぞ！もちろん授業料は免除にしてやるさ」

光魔が言うと

死龍「先に言っておくが生徒に死人が出ても知らないぜ！」

死龍が言うと

光魔「それは結構、弱い奴は我が学園にはいらないから好きにしても構わない！もちろん訴える気にもならんよ」

こうして死龍は光魔学園に編入した。

この時、死龍は高二である。（現在は高三）

そして一年後

光魔「おめでとう死龍、お前は誇り高き学園対抗武道大会のメンバーになったよ！まぁ、お前の実力は我が学園の中でもトップスリーに入るから当然だがね」

光魔が言うと

死龍「楽しみだぜ！俺の一年がどうなっているのかよう！」

そして死龍は学園対抗武道大会に参加した。

回想終了

死龍「でもまさか俺の相手が弟のお前だったとわな！前より弱くなったお前に用はない！さっさとお前達の大将を倒してやるぜ！」

死龍が言うと

九龍「兄貴は知らないのか？」

死龍「ハァ？」

九龍「一刀は光魔学園の闇討ちを受けて負傷してるんだよ！」

死龍「なにっ！？」

死龍は激しく動揺した。

何故ならば死龍は卑怯が大嫌いだからである。

死龍「嘘だ！俺をおどかそうとしてもそうはいかんぞ！」

ジャキンッ！

そう言いながらも死龍は動揺しながら武器を構えた。

九龍「光魔が兄貴にした洗脳を俺が解いてやる！」

ジャキンッ！

九龍は武器の龍殺牙を構えた。

九龍「食らえっ！兄貴！」

バッ！

先に飛び出したのは九龍だった。

死龍「嘘だ！嘘だ！」

死龍は動揺してうまく考えることができていない！

九龍「『破滅爪（ブラスタースマッシュ）』！」

死龍「『漆黒龍剣（ドラゴンブレイド）』！」

二人は同時に技を繰り出して

ドカカッ！

互いの技は激突しあい、その衝撃で

パンッ！　パンッ！

互いのボールは衝撃に耐えきれず割れてしまった。

シュンッ！　シュンッ！

ルールにより会場に戻される二人

そして戻った二人は

死龍「九龍、技は前と変わらないが威力が強くなったな！」

九龍「そりゃそうだよ中学時代に散々一刀達と我沈誇をやりあったんだから強くもなるさ」

死龍「ふっ！見事だったぞ九龍…」

ガクンッ！

そして二人は互いに意識を失って眠っていた。

そしてその様子を見た光魔は

光魔「やはりデスドラゴンナイツになれなかった者ではダメだったようだな」

自分を慕っていた死龍をあざ笑うのだった。

５９時間目「兄弟対決九龍ＶＳ死龍」（後書き）

恋「…恋。恋はいつも一人ぼっちだったけど親愛なる友人、後輩、そして愛する人をもてて幸せだった。病院送りになった霞と華雄のためにも恋は負けない！次回、『恋の本気、友情の地龍』お腹空いた」

６０時間目「恋の本気、友情の地龍」（前書き）

一刀「決勝戦が進んでいき、九龍が敵と出会った。しかし、九龍の相手は実の兄である死龍だった。九龍の手口を知る相手に九龍は苦戦するなか、見事に死龍を倒したのだが、互いにボールが割れたため九龍は死龍と共にコロシアムに戻っていくのだった」

60時間目「恋の本気、友情の地龍」

とある場所では

恋「…みんなどこ？」

飛ばされた恋がみんなを探していた。

恋「…ここさっきも通った気がする」

実は恋は重度の方向音痴でありいつもは学園に行く時でもねねや霞が案内していた。

ぐぅ～

恋「…お腹空いた」

おまけに恋のお腹の音が鳴り響く

仕方がないので食べ物を探す恋だが

いくら山とはいえ決勝戦の舞台に野草や食べ物が置いてあるはずがなく

恋「…お腹空いた」

バタンッ！

その場で倒れこむ恋だった。

そんな時

モワ〜ン

どこからかいい臭いがしてきた。

ピクンッ！

そして恋の食べ物探し機能がある二本の触覚のようなアホ毛が食べ物の臭いを関知すると

恋「…こっちからいい臭いがする」

ダッ！

恋は迷わず臭いのする方向に走り出した。

するとそこには

ジャーンッ！

骨付き肉がぶら下げられていた。

ガブッ

迷わず噛みつく恋、ところが

ガササッ！　ガバッ！

肉に噛みついた直後に下に仕掛けられていた網が上がって恋を捕まえてしまった。

そこへ

闇華「こんな罠に簡単に捕まるなんてフランチェスカの奴はバカだな～」

デスドラゴンナイツのＮｏ．３である神華の双子の弟、神谷闇華が現れた。

闇華「言っとくけどその網はチェーンソーでも斬れない丈夫な網だから暴れても無駄だよ。後はボクが君を軽くいたぶって…」

闇華が最後まで言おうとすると

ブチンッ

恋「…脱出できた」

恋が方典画戟を片手に網から脱出していた。

闇華「ふっ！どうやら君の力を見くびっていたようだね」

スッ！

闇華はどこから取り出したのか小型パソコンを取り出すと

闇華「聖フランチェスカ学園２年Ｂ組・呂布恋。好物食べ物全般。高１にして黄巾高校を一人で壊滅させた実力者としてうちのスカウ

ト陣が向かうも必要なしということで勧誘はされていない。そして君の大会前日までの身体能力は全て頭の中にインプットずみです。それによると君がボクに勝てる確率は…おおまけにまけて約０，０１％だね。つまりボクが君に負ける確率は…」

闇華が最後まで言おうとすると

ブンッ！

恋の方典画戟が闇華の髪の先をかすった。

恋「…話が長すぎる、時間の無駄」

ジャキンッ！

恋が方典画戟を構えると

闇華「そんなに死にたいのなら相手をしましょう」

ジャキンッ！

闇華も武器の魔剣・神討（かみうち）を取り出した。

闇華「君のステータスならばこの技は避けられまい！『巨大暗黒魔（ギガダークネス）獣波（フレア）』！」

ゴォッ！

闇華は刀から獅子の気を放って恋にぶつけてきた。

ドカカッ！

技は恋に直撃したらしくものすごい音が鳴り響いた。

闇華「今ので終わりだよ、殺したら退場になるからボールを割るだけにしといたからね」

闇華は安心した顔つきをすると

恋「…何が終わったの？」

闇華「えっ！？」

いつの間にか恋が闇華の後ろに立っていた。

実はさっきの一撃を恋は避けていたのだ。

コロシアム内

零頭「おかしいな！？」

一回戦にて光魔学園に負けた大蛇学園の学園長・零頭

零頭「（さっきのあいつの避け方は大蛇学園が得意とする瞬間移動・蛇歩（だほ）に似ているが何故あいつができるんだ？）」

それが零頭にとって不思議だった。

決勝戦会場

恋「（…昨日、教えてもらっておいてよかった♪）」

実は昨日の夜、こんなことがあったのだ。

昨日の夜、恋の部屋にて

恋「…ＺＺＺ～」

恋が部屋で眠っていると

パチンッ

誰かの気配を察知して恋は目を覚ました。

恋「…誰？」

恋が気配のする方を見てみるとそこには

七頭「…こんな遅くにすまない（ボソッ）」

光魔学園との戦いで軽傷を負って生き延びた七頭が立っていた。

七頭「…光魔学園の奴らはみんな強い、一人だけでもあの実力だ。
例外はいるが下手するとフランチェスカは負けてしまう（ボソッ）
」

恋「…だから何の用？」

恋が聞くと

七頭「…君を死なせたくはないから大蛇学園に伝わる瞬間移動・蛇歩を教える。少なくともすぐ死ぬことはない（ボソッ）」

七頭が言うと恋は

恋「…どうして教えてくれるの？」

すると七頭は

七頭「…君が俺に似ているからさ、なんとなくだが同じような気がしてほっておけないのさ（ボソッ）」

そしてその日の夜、恋の修行は始まり、恋は大蛇学園よりもすばやい蛇歩を身に付けたのだった。

その結果、前までなら避けられなかった闇華の攻撃も避けられるようになったのだ。

恋「…さっきのが本気ならお前なんて怖くない」

ブンブンッ

恋は方典画戟を振り回す

闇華「くそっ!?こんなはずじゃあ!?」

計算が外れたことにより闇華は動揺しまくっていた。

そしてついに

ズバッ

方典画戟が闇華の頬をかすめて頬から血が流れると

闇華「頬から血が!?よくも美しい顔を…」

闇華はその場で震えると

闇華「テメェもう許さねぇぞ!デスドラゴンナイツＮｏ．３『暗影の闇華』様の実力を思い知らせてやるぜ!」

突然闇華は人格が変わったようにキレ出した。

ガンガンガンッ!

恋「…くっ!?」

闇華は神討をめちゃくちゃに振り回して恋を追い詰めると

闇華「食らいやがれ!『暗黒の破滅龍（ダーク・デリート・ワイバーン）』」

ゴォッ!

闇華の放った闇の龍が恋に襲いかかる。

恋「…逃げないと！？」

恋はとっさに蛇歩で避けようとするが

ドゴォッ！！

攻撃の速度が早すぎて避ける暇がなく、技は今度こそ恋に直撃した。

コロシアム内

光魔「フフフッ！闇華があの技を使うとはな選手がかわいそうだな。なにせあの技を耐えきれたのは焔・神華・雫しかいないのだからな。まぁ相手を殺したら闇華は戻ってしまうがあの雑魚共相手ならば残りのメンバーでかたがつくだろう」

光魔が落ち着いていると

ヨロッ

恋はよろめきながらも無事であった。

光魔「あの一撃を食らって生きてるだと！？」

しかし恋の体はボロボロであった。

闇華「しぶとい奴め、もう一撃食らわして今度こそ殺してやるぜ！

」

スッ！

閻華は今度こそ殺すべく力をためる。

体力がほとんどなく、必死に立ち上がるだけの力しかない恋がもう一度食らえば死はまぬがれない！！

そんななか、恋は独り言を話していた。

恋「（…恋は小さい頃から一人ぼっちだった…。でも、月や詠…、ねね…、霞…、セキト…、華雄達…、そして一刀に出会ってからずっとずっと楽しかった…。恋は…、皆ともっともっと楽しく過ごしたい…！だから…、一刀達は恋が守る…！！）」

と、その時

パァーッ

恋の体が光り出してきて、両手の甲と額に「地」という文字が浮かび上がる。

恋「…これはなに？」

恋が驚いていると

？「汝（なんじ）、我が力を望む者か？」

バァンッ！

恋の目の前に龍が現れた。

龍「我が名は地龍、汝が力を望むのならば力を貸すぞ！しかし、汝が我が力を悪用するのならば容赦はせん！」

龍の言葉に恋は

恋「…恋はみんなを守る力が欲しい！仲間のため、友情のため、そして愛する人を守るために」

恋の言葉を聞いた地龍は

地龍「汝の願いしかと聞き入れた！我の力を汝に貸すぞ！」

スッ！

そして地龍は恋の体に入っていった。すると！？

ゴォォンッ！！

地面から龍が現れて

バクンッ

恋を飲み込むと

バキバキンッ

龍の中から頑丈な鎧を身に纏い、髪がロングになり、いつものスカ

ートとヘソ出し姿の恋が現れた。

恋「…これは!?」

これには恋が一番驚いていた。

と、その時

闇華「今さら何しても遅いんだよ!」

ブンッ!

闇華は神討を振り下ろすが

ガキンッ

闇華の神討が折れてしまった。

闇華「なんて固さなんだ!?」

ジ〜ン!!

闇華の手は痺れていた。

恋「…今度はこっちの番」

スッ!

恋は方典画戟を取り出すと

ザクッ

地面に突き刺した。

すると

ゴゴゴッ！！

戟を突き刺した場所から光が出ると

ドドドォーッ！

刺した場所から六頭の地の龍の気が飛び出してきた。

恋「…これぞ『地龍六頭撃（ちりゅうりゅうとうげき）』みんな、あいつをやる」

恋が指示すると六頭の龍の気は

ゴォォンッ！！

一斉に闇華に襲いかかった。

闇華「なっ！？そんな馬鹿な！？」

闇華はなんとか防ごうと思うが武器が破壊されては防げるはずがなく

ドドドォーッ！

闇華「ぐわぁーっ！？」

技を食らってしまった。

このままいけば再起不能になるところだったのだが

恋「…みんな、止めて　」

恋が龍の気に攻撃停止を呼び掛けた。

そして龍の気が次々と消えていき、残ったのは

ボロ～ン

ボロボロになりながらもボールが割られていないため戻されていなかった闇華が倒れていた。

コロシアム内

光魔「馬鹿な!?あれほどの逸材を何でスカウト陣はほっておいたんだ!?」

実は一年前、黄巾高校を撃破した恋を当然スカウト陣がスカウトしにいったのだが

恋「…ＺＺＺ～　」

恋の外見と態度にスカウト陣は「こんな奴が呂布なわけがない」と見捨てていったのだった。

60時間目「恋の本気、友情の地龍」（後書き）

左慈「左慈だ。他の奴らが頑張るなか、俺だけ休んでたまるかよ！…って俺の相手は于吉みたいなホモ野郎かよ！お前のような変態には絶対負けないからな！次回、「変態を撃破せよ！」って于吉の野郎いつまでチアガールの格好してやがるんだ＃」

61時間目「変態を撃破せよ！」（前書き）

一刀「決勝戦が進んでいき、恋と闇華が激突した。最初は恋が新たな技で攻めまくるがキレた闇華が反撃をして苦戦する恋。大ピンチのなか、恋は地龍と超進化をして闇華を倒すのだった」

61時間目「変態を撃破せよ！」

とある場所では

左慈「あの野郎ふざけやがって＃　」

左慈がバッグの中身を見て怒っていた。

実は今朝、于吉から

于吉「私より愛する左慈に愛を込めて　」

とバッグを渡されたのだ。（当然このあと于吉は左慈に蹴られた）

ところがバッグの中を見てみると

『左慈と私の愛の交換日記』

『左慈ＬＯＶＥと書かれたお守り（ちなみに于吉も于吉ＬＯＶＥと書かれた自作のお守りを持っている）』

『于吉を象った（かたどった）仏像』

『手編みのハンカチ（もちろん左慈ＬＯＶＥと書かれた刺繍入り）』

『于吉の写真』

が入っていた。

これを見た左慈は

左慈「どうりで重いと思ったら仏像まで入れやがってあの野郎が！！　」

めちゃくちゃ怒っていた。

左慈が怒っていると

？「怒りの顔は君のような美男子には似合わないよ」

と、どこからか声が聞こえてきた。

左慈「誰だ！！どこに隠れてやがる！」

左慈が隠れている相手を探していると

？「では君の美しい顔に免じて姿を見せてあげましょう」

バサッ

対戦相手は木の上から降りて姿を現した。

零霧「はじめまして美男子君、私の名前は天宮零霧です。君の名前はなんですか？」

対戦相手が姿を現して聞いてくると

左慈「俺の名は左慈元放、お前の対戦相手だよ」

左慈が言うとは

「左慈元放…。素晴らしい名前だ！！私の美男子コレクションにふさわしい」

左慈「何だよその美男子コレクションってのは？」

左慈が聞くと

零霧「お近づきの印にどうぞ　」

スッ！

零霧は一冊の冊子を左慈にプレゼントした。

左慈「どれどれ…」

戦い中なのも忘れて左慈が中身を見てみると

美男子コレクション

Ｎｏ．１　北郷一刀
Ｎｏ．２　華佗元化
Ｎｏ．３　氷室蒼魔
Ｎｏ．４　楠部弧狼
・
・
・

そこには及川以外のフランチェスカ学園の男子生徒がずらりと書かれていた。

左慈「何だよこれは！？お前は男なんだから女を記録しろよ！（あれっ？俺って前にも似たような台詞言っていたような気が？）」

左慈が言うと

零霧「女を記録するなんて冗談じゃない！！女は所詮美男子を産むことしか役目がないのさ　」

零霧が言うと

左慈「あっそうか、ということよりも、先手をいかしてもらうぜ！　」

ビュンッ

左慈は不意打ちを仕掛けるようにものすごい早さでに迫っていった。

しかしは

零霧「君の戦術からしてそうだと思っていたよ。だから僕の方から手をうっておいたけどね　」

零霧が言うと

ピキピキッ

左慈「なにっ！？　」

いつの間にか左慈の足が凍り付いていた。

ズサッ

足が凍りついたことにより左慈の足の動きが止まり、左慈はその場に倒れた。

左慈「くそっ！！いつの間にこんな氷を仕掛けやがった！？」

左慈が言うとは

零霧「はじめからだよ僕が君の前に姿を現すまでね、弱い技だから凍りつくのに時間がかかったけどね」

つまりは戦いが始まる前に左慈の足に氷を仕掛けていたのだ。

左慈「成る程、会話は凍りつくまでの時間稼ぎだったわけか」

左慈が言うと

零霧「それは違うよ、僕はただ単に君と話がしたかっただけだからさ。でもそれもおしまいだね、全身を凍らせて僕のコレクションに加えてあげるよ」

スッ！

零霧は構える、だが左慈は足を凍らされているため動くことができないでいた。

左慈「くそっ！！」

零霧「ｇｏｏｄ－ｂｙｅ美男子君♪『不死鳥の氷の引導（フェニックスブリザードファイナル）』」

ゴォォーッ！！

強烈な冷気が左慈に襲いかかる!!

ピキピキッ

そして左慈の体が次々と凍っていくと

左慈「くっそー!!」

パキンッ

ついに左慈は全身が凍りついてしまった。

零霧「さてと、後は僕のコレクションに加えるだけだね♪」

零霧は美男子を捕まえてウキウキしていた。

そして左慈は心臓が凍りつく前に今までの思い出が頭の中に入っていった。

左慈「(へっ!何が最強の左慈だよ、あんな奴相手に何もできなかったじゃねえか!これなら逃げながら勝った劉備のほうがまだましだぜ)」

左慈が実力の足りなさに嘆いて(なげいて)いると

左慈「(そういえば俺はどうして于吉と知り合ったんだろう?)」

思い出が走馬灯のように流れ出した時、左慈はふと于吉との出会いを思い出していた。

二人の出会いは中二まで遡る。

約４年前

ドカカッ！

相手「ぐえっ！？」

左慈「ふんっ！上級生が呼び出すからどんな奴かと思って期待して来てみたらとんだふぬけだったようだな」

当時の左慈は上級生を軽く倒す不良だった。

その日もいつものように廊下を歩いていると

男１「ギャハハッ！見ろよこいつの携帯の待ち受け写真、三年生の雨留鷲（うるわし）センパイだぜ」

男２「男のくせにキモい奴だぜ」

于吉「やめてください！私の携帯を返してくださいよ」

于吉武人、この当時から男好き

男１「やだよーだ、このオカマ男」

男２「お前なんて男と結婚して子供を産んじまえ！」

二人が于吉をからかっていると

左慈「おいっ　」

男1・2『あんっ　』

男達が声のする方を見てみると

ドカッ！

男達は左慈に蹴られた。

左慈「弱いものいじめしないで、強いものいじりしようぜ　」

左慈が言うと

男1「こいつは左慈元放！？　」

男2「マジかよ！？上級生でも敵わない『蹴撃の左慈』かよ！？　」

左慈は昔、蹴り技が得意なので蹴撃の左慈と呼ばれていた。

左慈「どうした？やるかやらないかどっちだよ！！　」

左慈が怒鳴ると

男1・2『ギャーッ！？　』

ピューッ

男達は一目散に逃げていった。

しばらくして

于吉「ありがとう左慈君」

左慈「気にすんな、あいつらが強いと思って喧嘩うってみたら弱かっただけの話だ。それにしてもお前は男なんだから女の写真を撮れよ」

すると于吉は

于吉「実は私は以前に女性とお付き合いしていたんですがひどいフラれ方をされたんです。それ以来私は女を信用しなくなり、男のことが好きになったんです」

そういう考えはどうかと思うが!?

左慈「お前馬鹿か？」

左慈はストレートに言った。

左慈「男のことが好きな男なんておかしすぎだろ。まぁ俺は別に気にしないがな」

この言葉が于吉を左慈の虜にした。

それ以来、

于吉「もし左慈が死んでも私が生き返らせてあげますよ！いずれ私と結婚するためにね　」

左慈「しねぇよこの馬鹿が！！　」

ドカカッ！

于吉「左慈、バレンタインのチョコですよ♪　」

左慈「いるかボケッ！！　」

ドカッ！

于吉は左慈に付きっきりになった。

現在

それを思い出した左慈は

左慈「（冗談じゃないぞ！！俺が死んで于吉に生き返らせてもらったら于吉に借りができて結婚しなくちゃいけないじゃないか！？）　」

すると氷付けの左慈は

ピキピキッ

于吉と結婚しないためにも生きようとして

バッキーンッ

氷から脱出した。

零霧「なにっ！？」

これに驚いた零霧が構えようとすると

左慈「くたばりやがれ変態が！！」

ドガッ！！

左慈は渾身の蹴りを零霧の顔面めがけて蹴り出した。

零霧「ぐほっ！？」

顔面を蹴られた零霧は岩に頭をぶつけてしまい、打ち所が悪くて気を失ってしまった。

左慈「何とか勝ったのか！？」

バタンッ

勝ったのを確信すると左慈はその場に倒れこんだ。

左慈「俺は于吉と結婚しないためにも死んじゃいけないんだよ」

スゥ～スゥ～

そして左慈はその場で寝てしまった。

61時間目「変態を撃破せよ！」（後書き）

桃香「桃香です。一刀君が一緒で安心だけど気を使えない一刀君の代わりに私が頑張らなくちゃ♪って誰なのよあなたは！！私の一刀君と誘惑して、一刀君もデレデレしないでよ＃！！次回、『エッチな戦い』一刀く～ん＃　」

62時間目「エッチな戦い」（前書き）

一刀「決勝戦が進んでいき、左慈は『氷河の零霧』と戦っていた。男好きの零霧に対して左慈は油断をしてしまい、全身を凍らされてピンチに陥るが于吉の言葉を思い出して氷から解放された左慈は零霧を撃破したのだった」

62時間目「エッチな戦い」

とある場所では

一刀「桃香、歩けるか？」

桃香「歩けるけれども疲れたよ～」

映者を撃破した一刀と桃香が森の中をさまよっていた。

桃香「さっきの戦いで服も汚れちゃったし、汗もかいたから水浴びしたいよ～」

戦い中だというのにのんきな桃香であった。

そんな時、

一刀「んっ！あれは」

ジャーンッ！！

一刀が湖を見つけた。

一刀「桃香、湖を見つけたぞ」

桃香「ホント！？やった～♪」

一刀は湖に近付くと

ガバッ

いきなり顔を突っ込んだ。

ザバッ

一刀「プハッ！うまい　」

一刀は水を飲んでいたのだ。

一刀「美味しいから桃香も飲んでみろよ　」

くるっ

一刀が桃香の方を見ると

桃香「えっ？　」

ババーンッ！！

桃香はすでに上着を脱いで上半身下着姿になっていた。

一刀「何してるんだよ桃香！！／／／　」

一刀が聞くと

桃香「だって暑いから水浴びしようと思って　」

桃香が言うと

一刀「忘れたのか桃香、この辺には監視カメラがあるんだぜ」

桃香「えっ！？」

一刀の言う通り決勝戦会場にはあちこちに監視カメラがあり、今のこの映像も世界中に流れているのだ。

桃香「いや～ん！！」

桃香は慌てて両手で胸を隠す

一刀「仕方ないな」

桃香に水浴びさせるために一刀は監視カメラを見つけると

ギュッ

持っていた布で画面を見えなくした。

コロシアム内

男達『あぁーーっ！？』

九州の北郷家

刃「何するんじゃ馬鹿孫め！！」

世界中のほとんどの男達からブーイングを受ける一刀だった。

決勝戦会場

一刀「これで姿は見えないから声に気を付ければいいぜ」

桃香「一刀くんありがとう♪一緒に入る？」

ピタッ

桃香の言葉に一瞬一刀は迷ったが

一刀「俺は見張りやらなきゃいけないしな／／／」

何とか耐えきれた一刀だった。

桃香「一緒に入りたかったのに～、まぁいいや」

ポイポイッ

桃香は服を脱ぎ捨てて裸になると

ザッブーンッ！！

湖に飛び込んだ。

そして一刀は桃香を見ないようにして、気配を感じながら見張るのだった。

そんなとき

ピクンッ

一刀が近付いてくる敵の気配に気づいた。

一刀「誰だか知らないが出てこいっ！」

一刀が叫ぶと

ザッ

光魔学園の生徒が姿を現した。

？「あっ！？見つかってしまいました！？」

出てきた相手が女だと知ると一刀は

一刀「（相手が女だとやりづらいな）俺の名は北郷一刀、悪いが相手をするぜ」

スッ！

一刀は相手をビビらせるために叫ぶと

雫「わ…私は水上雫です。（どうしよういきなり敵の大将に出会っちゃったなの！？）」

彼女は物静かな性格だった。

雫「（そもそも何で私が学園代表に選ばれたのかななの！？私なん

て弱虫で戦えないのに、でもピンチの時に使えって教頭のＤｒ．バイオスがお薬くれたっけなの）」

チャキッ

雫は懐から薬を取り出して

ゴクンッ

飲み込むと、

ブシューッ！！

雫の体から湯気が出てきた。

雫「体が熱い…なの！！」

一刀「何が起きてるんだ！？」

一刀ですらも驚いた。そして湯気が出終わると

雫「ふふふ…」

雫の口調が少し変化した。

雫「はじめましてなのお兄さん」

口調が変化した雫の声は色っぽい声だった。

実はさっき飲んだ薬は精力剤を改良したものだったのだ。

それを飲んだ雫は普段の大人しい性格から色っぽい性格に変化したのだ。

雫「私は光魔学園Ｎｏ．４『水魔の雫』なの。あなたは顔がタイプだから遊んであげるなの　」

雫の色っぽい口調に一刀は

一刀「（落ち着け！落ち着くんだ俺！！）　」

色っぽい口調に必死に耐えていた。

雫「でもその前に…　」

ジャキンッ！

雫は得物の龍の形をした銃『海龍』を取り出すと

ドキュン！ドキュン！

辺り一面に撃ち始めた。しかしでたらめに撃ったわけではない。撃たれた場所を見てみると

シュ～

監視カメラがマイクごと破壊されていた。

雫はカメラを狙って撃ったのだ。

雫「これでこの様子が見えることも聞こえることもなくなったなの。それじゃあ」

スッ！

雫は一刀の方に体を向けると

雫「かわいがってあげるなの」

ドォーンッ！！

胸元を一刀に見せた。

しかもさっきまで小さかった胸が今では穏くらいはある隠れ巨乳だった。

これを直面した一刀は

サッ

一刀「（耐えるんだ～！！）」

目線を雫から外して見ないようにしていた。（でもちょっとだけちら見）

しかし雫は

雫「私の胸を触りたいのなら降参するなの。そうすれば胸くらいさわり放題なの」

ピクンッ

これを聞いた一刀の心の中に天使と悪魔が生まれた。

悪魔一刀「触りたいのならさわっちまえよ！カメラが壊れてるんだから言い訳なんていくらでもできるぜ　」

天使一刀「何をいってるんだ！ここまで頑張ってきたみんなの思いを無駄にする気か！　」

悪魔一刀「うるせぇんだよ！目の前の胸を触っていいと言われたら触るのが男だろうが！！　」

天使一刀「馬鹿いえ、ここで触ったら感付いた華琳達にバレてお仕置きされるオチが見えてるぞ！　」

一刀の中で天使と悪魔が戦っている頃

ザバッ

桃香「気持ちよかった～！　」

桃香が水浴びを終えた。

桃香「さてと、急いで着替えないとね　」

そして桃香が着替えようとしていると

一刀「ぐわーっ！！　」

一刀の叫び声が聞こえてきた。

桃香「あの声は一刀くん!?大変急がなくちゃ」

パパパッ

桃香は急いで着替えを終えると

桃香「待っててね一刀くん　」

ダッ！

直ぐ様一刀の所に走り出した。しかし、この時桃香はある忘れ物をしていた。

ガサッ

桃香が忘れ物に気付かず一刀の元にたどり着くとそこには

雫「ほら、触ってもいいのよなの」

半裸状態で胸を寄せる雫と

一刀「バウッバウッ！」

誘惑に耐えきれず雫の犬になった一刀がいた。

これを見た桃香は

桃香「何してるの一刀くん！！＃」

一刀を叱るが

一刀「ふんっ！」

一刀は聞く耳を持っていなかった。

桃香「どうしてこうなったの！？」

桃香が驚いていると

雫「一刀はもう私の虜になったなの。さぁ一刀、私の胸に飛び込んでくるのなの～♪」

これが雫が光魔Ｎｏ．４である理由。彼女は武力も高いがそれ以上に魅力が高いのだ。今までこれをくらって平気だった男は数少ない

一刀「バゥ～ッ♪」

ピョ～ンッ

一刀が雫の元に飛び付こうとすると

桃香「だったら…」

桃香の体が少しずつ震えてきてそして

ガバッ

桃香「私も下着姿ぐらい見せてあげるもん！」

桃香は上着を脱ぎ捨てた。

しかし

ぷるんっ♪

桃香「えっ！？」

桃香は下着を着けていなかった。

実は急いで着替えた時に慌てて下着をつけ忘れた桃香だった。

そして桃香の胸が丸出しになると

桃香「！？」

監視カメラが壊されていることを知らない桃香は

桃香「ふふふ…くわっ！」

胸を見られた恥ずかしさにより黒桃香に変化した。

そして雫の犬になった一刀が桃香の方を向くと

黒桃香「こうなったのも全て一刀くんがエッチなせいなんだよね＃」

そこには胸を丸出しにしながら怒っている桃香がいた。

一刀「バゥ～ッ♪」

変態と化した一刀が桃香の元に跳ぶと

黒桃香「一刀くんの馬鹿ーーっ！！＃」

ドグボッ！！

一刀「バゥ～ッ！？」

キランッ☆ミ

一刀は黒桃香によってどこかに殴り飛ばされてしまった。

そして雫は

雫「あの子ってあんなに強かったの！？ここは逃げるが勝ちなの！！」

ピュンッ

その場から立ち去っていった。

やがて桃香が正気に戻ると

桃香「うわ～ん！！またおっぱい見られちゃったからお母さんに怒られる～！！」

監視カメラが壊されていることを知らずに泣き叫ぶ桃香だった。

そしてテレビに写った最後の映像が一刀が飛ばされるシーンだったという。

62時間目「エッチな戦い」（後書き）

華佗「華佗だ。治療班である俺がこの舞台にいるなんて今でも驚きだぜ！？桃香だって頑張っているようだし俺も頑張らないとな。次回、『唸れ鉄針、五斗米道武術』ごどべいどうではない、ゴッドヴェイドォーだ！」

63時間目「唸れ鉄針、五斗米道武術」（前書き）

一刀「決勝戦が進み、俺と桃香がさ迷っていると湖を発見し、桃香が水浴びをすることに、その間見張っていた俺の前に水魔の雫が現れてしまい、彼女のお色気にまんまとはまってしまう俺。それを見た桃香が対抗心で上着を脱ぎ捨てたが下着をつけ忘れてしまいポロリを見せてしまった桃香は羞恥心で再び黒桃香に変身し、鼻の下が伸びきった俺を遠くの彼方にぶっ飛ばしてしまうのだった」

63時間目「唸れ鉄針、五斗米道武術」

とある場所では

華佗「みんなはどこにいるのだろう？」

華佗がみんなと合流すべく、仲間を探していた。

華佗「しかし見渡す限り森でここが何処なのかまるで見当がつかないな」

華佗がみんなを探していると

キランッ☆ミ

華佗「昼間に流星とは珍しいな」

実は流星ではなく、前回桃香に殴り飛ばされた一刀であった。

そんなとき

ビューッ！！

華佗の近くを竜巻が襲う

華佗「うわっ！？」

サッ

早めに気づいたため何とか避けた華佗だった。

華佗「（こんなところに竜巻だなんておかしいぞ！？）そこにいるのは誰だ！」

華佗が叫ぶと

？「へぇ、計算だと直撃するはずなのになかなかやりますね」

ガサッ

華佗が叫ぶと木の上から女の子が降りてきた。

嵐「私はデスドラゴンナイツＮｏ．８『風狂の嵐』こと宮澤嵐。よろしくね」

ジャキンッ！

嵐は剣をもって構える

華佗「そっちが自己紹介したのなら俺もしなくちゃな、俺は五斗米道十代目師範の華佗元化だ」

スッ！

華佗も懐から針を取り出して構えた。

嵐「ごどべいどうなんて聞いたこと…」

嵐が言うと

華佗「ちがーう！！ごどべいどうじゃないゴッドヴェイドォーだ！」

華佗が注意をした。

嵐「（何でこいつムキになってるの！？）まぁどっちでもいいさ、あんたはここで死ぬのだからね」

ジャキンッ

嵐は得物の剣・風獄斬を抜くと

嵐「『風龍の嵐獄（ウイングドラゴンストーム）』！」

ゴォッ！！

剣をふるって竜巻を発生させた。

華佗「（さっきの竜巻はあれか）くっ！？」

サッ

しかし華佗は竜巻を避けきった。

華佗「俺だってだてに学園代表に選ばれてるんでね負けるわけにはいかないさ」

華佗が言うと

嵐「なるほどね、私はあなたを少々見くびっていたようね」

そして嵐が少しの間黙りこむと

嵐「華佗元化、計算より少し能力ステータスアップ」

そして

嵐「『風龍の嵐獄（ウイングドラゴンストーム）』！」

ゴォッ！！

再び竜巻を華佗にぶつけてきた。

華佗「悪いがその技はもう見切って…」

サッ

華佗はさっきのように避けようとするが

ドゴッ！！

華佗「なっ！？」

急に竜巻の速さが変わって華佗に直撃した。

華佗「ぐほっ！？」

ドサッ

攻撃をもろに食らった華佗はその場に倒れこむ。

華佗「（馬鹿な竜巻が急に変化するなんて!?）」

華佗が驚いていると

嵐「どう、驚いたでしょう天才軍師の私は計算によって竜巻を自由に操れるのよ。さっきと同じだからって油断したあなたの負けよ」

確かに今のは油断した華佗の失敗だった。

華佗「（ちっ！相手がＮｏ．８だからって油断した俺の敗けだ！）」

はっきり言って華佗の実力は桃香よりは強いものの、全体面でいえばＮｏ．９にあたるのだ。

華佗「（くっ!?今ので肋骨（ろっこつ）が何本か折れてしまった!?）」

ここにきてピンチの華佗に対して

嵐「さっさとギブアップしなさい！」

ブンッ！

剣で斬りつけてくる嵐

いくら華佗がゴッドヴェイドォーの使い手とは言ってもゴッドヴェイドォーは自分の治療が出来ないのだ。

しかし華佗は諦めない

華佗「これは使いたくなかったが」

スッ！

華佗は指を二本立てて

華佗「五斗米道武術・腹下し拳」

ビシッ

嵐に命中させると

嵐「一体何のまね…」

嵐が最後まで言おうとすると

ピ～ゴロゴローッ！

嵐のお腹が鳴り出した。

嵐「なっ！？」

カランッ

両手でお腹をおさえておもわず剣をはなしてしまう嵐

嵐「あなた、私に何をしたの！？」

嵐が聞くと華佗は

華佗「簡単なことさ、俺の指圧で君のお腹を刺激したのさ」

しかし嵐は

嵐「それくらいで勝ったつもり！お腹が痛くたって戦うのがデスドラゴンナイツなのよ。最後にあなたを倒してゆっくりと用を済ましてもらうわ」

スッ！

そして嵐は落とした剣を拾うと

嵐「『風龍の嵐獄（ウイングドラゴンストーム）フルパワー』！」

ゴォッ！！

嵐はお腹を痛めながらもさっきまでとは比べ物にならない技を繰り出した。

すると華佗は

華佗「こうなったら俺もゴッドヴェイドォーの奥義を使わなくてはな！？」

華佗は懐から針を取り出すと

華佗「五斗米道武術・究極奥義、『硬体壺（フルメタルポイント）』！」

ブスッ！！

華佗は針を自分に突き刺すと

カチカチンッ

華佗の体がどんどん硬くなってきていた。

そして

ドガガッ！！

鋼の体になった華佗と嵐の技が激突しあい、どちらが勝つか分からなかったが

パンッ！

両者のボールが割れてしまった。

嵐「何で！？私のボールが割れるの！？」

嵐が驚いていると

華佗「簡単なことさ、俺が竜巻を体で受けているときに針を投げたのさ」

つまり華佗は竜巻を食らいながら針を嵐のボールめがけて投げて割ったのだ。

シュシュンッ

そしてルールによりコロシアムに戻される二人であった。

ちなみに余談であるが嵐は戻ってきたときに直ぐ様トイレに駆け込んだらしい。

63時間目「唸れ鉄針、五斗米道武術」（後書き）

孤狼「孤狼だ！みんな頑張ってるじゃねぇか俺も兄貴として頑張らねぇとな、だが俺にふさわしい相手は一番強いやつなんだが二番目に強いやつと当たっちまったがまぁいいや♪兄貴として負けるわけにはいかねぇぜ。次回、『兄貴ＶＳ兄貴』そういえば次話で話数が前作を越えるらしいが関係ねぇや♪」

６４時間目「兄貴ＶＳ兄貴」（前書き）

一刀「決勝戦が進み、華佗は風使いの嵐と出会った。最初は華佗の頭を使った避けが効いたものの、敵は天才軍師であり直ぐ様形勢逆転されてしまい危機に陥る華佗。そんなとき華佗は五斗米道武術を発動させてなんとか引き分けにもちこむのだった」

６４時間目「兄貴ＶＳ兄貴」

この決勝戦の舞台である山は広い。おまけに一対一で戦わなければいけない規則もない。ゆえに敵と出会わない確率もあり得るし、ずっと隠れていれば戦わずして学園の勝利が決まることもあり得るし、他の仲間と合流すれば一対複数という戦いも可能なのだ。

ちなみに選手達は誰が脱落したのかは知らない。

そんななか、一人変わった男がいた。

弧狼「オラーッ！！光魔学園、誰でもいいから出てきやがれー！！この俺が相手をしてやるよー！」

自ら位置を教えている弧狼である。

そんな時、

ガサッ

孤狼の近くで物音が聞こえてきた。

神華「奇襲戦術をした方がいいこの場所で大声をあげるなんて馬鹿なやつだな」

光魔学園Ｎｏ．２神谷神華こと『光明の神華』が現れた。

弧狼「やっと出やがったなしかし、Ｎｏ．１じゃなくてＮｏ．２が相手とは俺もついてねぇな」

弧狼はできるだけ強い相手と戦いたかったのだ。

神華「言っておくがＮｏ．１じゃないからって手を抜いたりしたら貴様はすぐに死ぬぞ　」

弧狼「わかってるよ相手が誰であろうと全力で戦うのが俺なんでね　」

スッ！

スッ！

二人は武器をもって構えだした。

神華「くらえっ　」

ダッ！！

先に先手をうってきたのは神華だった。

神華は得物の神滅剣で斬りかかってくる。

弧狼「ちっ！？『狼波弾』　」

ドドンッ！！

弧狼は大量の気弾を放って防ごうとする

神華「くっ！！　」

カカカカンッ

神華は全てを神滅剣で防いだ。

神華「なるほどねお前は気の使い手だったとはな、数少ない人間だな　」

気弾を放つ気の使い手は地球で数えてみても数十人しかいないのだ。

弧狼「お前もなかなかやるじゃねぇかＮｏ．２にしては見直したぜ　」

弧狼も神華をほめた。

神華「それはありがとう、ではぼちぼち本気を出させてもらうとしよう　」

スッ！

神華は神滅剣を構えると

神華「『破滅の翼龍の光（ライト・ブレイク・ワイバーン）』　」

ゴォッ！！

神華の神滅剣から巨大な龍が出てきた。

神華「くたばりな　」

ゴォッ！！

神華の技は弧狼に直撃しようとするが

弧狼「『空狼走』」

ダダッ！！

弧狼は気を踏んで空中移動した。

ドガガッ！！

しかしそのおかげで技を避けた弧狼だった。

弧狼「俺に一度見られた技は通用しないぜ」

弧狼は光魔学園が襲撃したときに一度この技を見ていたのだ。

神華「なるほどね、ならばこれならどうかな？」

スッ！

神華は再び構えると

神華「『聖獣白虎撃（ライトニングバイフー）』」

ゴォッ！！

今度は龍ではなく剣から巨大な虎が出てきた。

しかし弧狼は避けるどころか

弧狼「狼が虎に負けてたまるかよ！」

ダッ！！

自ら虎に立ち向かうと

弧狼「『狼牙爪』」

ブンッ！！

腕を振って爪で切り裂こうとした。

ドカカッ！！

ぶつかり合う狼と虎、果たして勝者は！？

ドカンッ！！

弧狼「ぐはっ！？」

虎が消え去り、弧狼が飛ばされた。どうやら相討ちだったようだ。

ドカッ！

飛ばされた弧狼は木にぶつかると

神華「貴様はバカか？自ら技に立ち向かうなんて馬鹿な奴がするこ

とだぞ　」

神華が言うと弧狼は

弧狼「確かにあんたのいう通り技に立ち向かう奴はバカかもしれないな、だがそれなら俺は馬鹿のままで構わない！」

キッパリ！！

弧狼はキッパリ言った。

神華「やはり貴様は馬鹿のようだな、バカは馬鹿らしく消えろ！」

スッ！

神華は剣に気をため始める。

弧狼「（そう、俺はあの時からどんなときにも立ち向かうって決めたんだ）」

ことの始まりは四年前・千頭中でのこと。（弧狼中3、一刀達中2）

弧狼「久し振りの学校だな」

弧狼は修行のために学園を休んでいるのだ。（そのため授業日数が足りなく、留年することも）

そして修行を終えた弧狼が教室に入っていくと

やけに教室の中が騒がしかった。

弧狼「何の騒ぎだ？」

弧狼がクラスメートに聞くと

クラスメート「久し振りだな弧狼、実は二年生にすごく強い四人組がいるらしいぜ！？」

一刀達は中２の時点で学園では有名になっていた。

弧狼「強いやつだと～」

当時、戦闘狂だった弧狼は

弧狼「面白いじゃねぇか！俺は強いやつと戦うのが好きなんだよ！」

そしてその日の放課後

一刀「あんたかい？俺達を呼び出したのは？」

蒼魔「俺達をわざわざ呼び出すとはな」

九龍「っていうかあいつ誰だ？」

鳳賀「楠舞弧狼という一年上の先輩だよ」

弧狼は一刀達を呼び出した。

弧狼「お前らかよ俺を差し置いて学園最強を名乗っている奴らは！お前らのような生意気な後輩は先輩である俺が仕付けないとな。さぁ、まとめてかかってきやがれ！」

そして一刀達と弧狼による我沈誇が始まったのだが、一刀達はまとめてかからず一人ずつが相手になった。（もちろん一人倒れたら弧狼の体力が回復するまで待つ）

そして最後に残った一刀との戦いが終わりをむかえようとしたとき

一刀「ハァハァ！？」

弧狼「ハァハァ！？なんでお前らはまとめてかからないんだよ！？まとめてかかれば俺を倒せたはずだろうが！？」

すると一刀は

一刀「俺は父さんから言われてるんでね、たとえ相手がどんな卑怯な手をつかっても正々堂々と戦い、己は個人で戦えとね」

この時、弧狼は一刀の言葉になにかを感じていた。

そんなとき

不良「久し振りだな弧狼」

弧狼を目の敵にしている不良が現れた。

不良「お前が修行から帰ってくるのをずっと待っていたんだぜ、お前に折られた奥歯が痛むんでな」

この不良は弧狼に喧嘩を挑んで負けてしまい、その時折られた奥歯が虫歯になってしまったのだ。（しかもこの不良は歯医者嫌いである）

不良「さすがのお前も百人相手では手も足も出まい！」

ズラリッ

不良の後ろにはズラッと百人の不良が並んでいた。

弧狼「（ちっ！？さすがの俺でもこの状態で百人相手はキツいかもな！？）」

さすがの弧狼も悩んでいると

スッ！

弧狼の隣に一刀が並んだ。

一刀「先輩、よかったら助太刀しますよ」

そして一刀に続いて

蒼魔「一刀だけにいい格好はさせないぜ」

鳳賀「俺達だってまだまだやれるさ」

九龍「まだ暴れ足りないしな！」

蒼魔達も立ち上がった。

弧狼「それじゃあ暴れようぜ後輩達！！俺のことは今日から兄貴と呼べ！」

一刀達『おうっ、兄貴！』

このあと無事に不良を撃破した一刀達であった。

現在

弧狼「（あの時から決めたんだ、俺は後輩のためなら下がらないし、卑怯もしない俺は後輩のためにも絶対に負けられないってな）」

スッ！

倒れていた弧狼は立ち上がった。

神華「しぶとい奴め、だが死んでもらうぞ『月光龍虎撃（ディアナドラゴバイフーブレード）』」

ゴォッ！！

神華の最強技が弧狼に迫り来るが

弧狼「ちょうどいい、ここなら誰にも迷惑かけないだろうし、久し

振りにいくぜ！」

ゴゴゴッ！！

すると弧狼の回りに気の渦が流れ出してきた。

弧狼「気伝体術奥義・真黒神！」

ゴォッ！！

そして気の渦が弧狼にまとわりつくと

ジャキンッ！

弧狼は黒鉄色の狼の鎧を身に纏っていた。

弧狼「本来ならば一刀との再戦時にまでとっておきたかったが我が儘言ってる場合じゃないんでなすぐに終わらせてやるよ」

スッ！　キュィィーンッ！！

弧狼は右手にもてる気の全てを溜めていた。

そして

弧狼「『超狼撃』！」

ゴォッ！！

右手に溜め込んだ気を爆発させるかのように神華に突っ込んでいっ

た。

そして…

ゴォキィィーーンッ!!

ドゴゴゴッ!!

お互いの最強技がぶつかり合って決勝戦の舞台が地鳴りを起こした。

フシュ〜!!

やがて爆風が落ち着いてきて二人の姿が確認できるようになると

そこに立っていたものはいなく、二人は互いに倒れていた。

弧狼「やるじゃねぇかテメェ…」

神華「お前もだな、こんなに暴れたのは焔以外で初めてだぜ。お前は兄貴って呼ばれているらしいが俺にも弟がいて兄貴って呼ばせてるんだぜ」

弧狼「ふぅん、まぁ俺には四人も弟分がいるから俺が頑張らねぇとな。しかしこの戦いでわかったぜ俺はまだまだ修行不足だってことがよ」

その後、二人は何気ない雑談をするのだった。

６４時間目「兄貴ＶＳ兄貴」（後書き）

蒼魔「いよいよ俺の出番がきたぜ相手は誰だ！？と思ったら焔の奴かよ！？氷と炎で相性が悪い俺は直ぐ様危機に陥ってしまうがその時、現れた人物は…次回、『最悪の相性！？救世主あらわる』

６５時間目「最悪の相性！？救世主あらわる」（前書き）

一刀「決勝戦が進むなか、兄貴である弧狼は光明の神華と対峙し戦いを始めた。お互いに死力を尽くした戦いは死闘を極め、兄貴は何とか勝利をおさめるのだった」

６５時間目「最悪の相性！？救世主あらわる」

決勝戦が進むなか、次々と光魔学園がやられていくのを見た光魔は

光魔学園控え室

光魔「あの役に立たない馬鹿どもめ、せっかく闇討ちしてまで北郷を痛め付けたというのに何をしているんだ！＃」

大変怒っていた。

Ｄｒ．バイオス「まぁまぁ、他の奴らはへぼのようなものだし、勝機がないにしてもあいつなら何とかしてくれるじゃろうて」

バイオスが言うと

光魔「あいつと言うと焔のことか、確かにあいつだけ生き残れば他の奴らが負けようとも関係ないからな」

そして決勝戦会場のとある場所では

蒼魔「みんなは無事だろうか？（特に桃香が）」

蒼魔がみんなのことを心配して歩いていた。

蒼魔が気を張り巡らしてみんなを探していると

ぴくんっ

強い気に反応した。

蒼魔「（この馬鹿でかい気は前にもどこかで感じたことがあるぞ！？）」

ダッ！！

蒼魔が感じた気の場所に急いで駆けていくと

焔「よぅ」

そこにはデスドラゴンナイツ最強の焔がいた。

蒼魔「（こいつは学園を襲撃した炎使い！？）」

蒼魔だって馬鹿ではない、直ぐ様焔の実力を計算していた。

そして計算の結果…

蒼魔では勝てないという答えが出てきた。

蒼魔「（あいつの実力ははるかに俺や一刀や兄貴さえも上回るかもしれない！？だが、たとえこの戦いで死ぬことになるとしても俺は逃げるわけにはいかないぜ！）」

ジャキンッ

蒼魔は得物の剣『蒼絶氷雷剣』を抜いて構えた。

焔「ほぅ、俺との力の差を知ってなお挑んでくるとはな、それが間違いだったと後悔させてやるぜ！」

ジャキンッ

焔も得物の大刀『邪魂大蛇丸』を抜いて構えた。

しかし、

ぶるぶるっ！！

蒼魔の体はかすかに震えていた。

達人という者は自分より強い相手と出会ったとき、恐怖により小刻みに震えるという。

蒼魔もフランチェスカ学園ではＮｏ．３クラスの達人だったため恐怖に怯えていた。

蒼魔「（落ち着け！落ち着けよ俺！、あいつに敵わないことは分かっているのに戦うと決意したのは俺じゃないか！）」

必死で自分に叫んだ蒼魔は少しだけ落ち着くと焔の能力を思い出していた。

蒼魔「（あいつの能力は大蛇学園戦で見た限りじゃ体には鉄をも溶かす熱と強力な火炎放射といったところだが、俺が考えた限りだと奴を倒せる可能性があるとしたら一つしかない！）」

実は蒼魔は昨日の夜、光魔学園の誰が当たってもいいようにイメージトレーニングしていたのだ。

もちろん焔のイメージトレーニングも

蒼魔「いくぜっ！」

ダッ！！

散々考えた蒼魔は速攻を仕掛けるべく、焔の元に急いだ。

焔「馬鹿の一つ覚えに突撃とは馬鹿だ…」

焔が最後まで言おうとすると

蒼魔「『氷河千兆撃（ブリザードデストロイヤー）』！」

シュシュシュンッ！

蒼魔は氷の連弾を繰り出した。

焔「んな氷が俺に効くかよ」

ジュジュ～！！

しかし、焔の熱によって全弾溶かされてしまうのだが、

蒼魔「それを待っていたのさ！」

焔「なにっ！？」

シュ～ッ！！

たくさんの氷が溶かされて水蒸気になり蒼魔の姿を見えなくなる煙幕を作り出した。

焔「ふんっ！こんな目隠しが何の役に…」

焔が最後まで言おうとしたとき

カチカチッ

焔の足が少しずつ凍りついていた。

焔「これはいったい！？」

焔が驚いていると

蒼魔「溶かされた水蒸気を再び凍らせたのさ、俺が氷の連弾を作ったのはお前に攻撃するわけではなく初めから目隠しと回りに水蒸気を作るためだったのさ」

カチカチッ！

こうして会話している間にも焔の体の水蒸気が凍りついていた。

焔「お前、初めからこれを狙って！？」

蒼魔「その通りさ、あいにく俺の冷気は絶対零度まで凍りつく、いくら貴様が炎使いでも絶対零度までは溶かせまい！」

焔「くっそー！！はめられたー！！」

カチカチンッ

そして焔にまとわりついた氷は焔の全身を凍らせた。

蒼魔「やったのか！？俺はあいつに勝ったのか！？」

蒼魔が勝利を喜んでいると

ピキッ！ピキピキンッ！

焔を凍らせていた氷に罅（ひび）が少しずつ入り、

パッキーンッ！！

ついには氷を砕いてしまった。

すると割れた氷の中から

焔「やはりこの程度とはな　」

無事な姿の焔が現れた。

蒼魔「馬鹿な！？俺の氷が砕かれるなんて！？」

蒼魔は自信のあった技を打ち砕かれて驚いていた。

焔「確かに今のは一瞬危なかったが所詮は氷、炎には勝てないんだよ！」

焔は自身に『九頭炎獄滅』を放って氷を砕いたのだった。

氷は零下数度までしか下がれないが、炎は限りなく温度を上げられる。つまり、焔の炎の温度が蒼魔の絶対零度の零度を上回ったのだ。

焔「いっておくが俺はまだ本気を出してはいないぜ」

蒼魔「なにっ！？」

焔の言葉に驚く蒼魔

それもそのはず、自分は全力で相手をしたのに力を出しきっていない相手に打ち砕かれたのだからショックが大きかったのだ。

焔「今度はこっちからいくぜ！」

スッ！

焔は得物を構える。

焔「『九頭炎獄滅』！」

ゴォッ！！

焔の技が蒼魔を襲う！？

蒼魔「ちっ！？『絶対零度撃』！」

ゴォッ！！

蒼魔も技を放つが

ジュジュ～！！

焔の熱には勝てず溶かされてしまう。

蒼魔「そんな！？うわっ！？」

ゴォッ！！

焔の炎が蒼魔に襲いかかった。

いくら蒼魔が氷の属性とはいえ焔の炎を食らえば大怪我は間違いない！？

誰もが蒼魔の敗北だと思ったとき

シュボッ！

突然炎の勢いが消えて炎は消えてしまった。

とは言っても蒼魔が消したわけではなく、

焔「すぐ殺すとつまらないからな、じわじわといたぶってやるぜ！」

焔が自分で炎を消したのだった。

焔「おらよっ！」

ドカッ！

動けない蒼魔めがけて焔は蹴りを連続で放つ。

焔「お前のような弱い奴なんて何の役にも立たねぇんだよ！お前が弱い理由を教えてやるよ。それは仲間という弱い者の集まりを作っているからだ！お前が強くなれないのは仲間というものを教えた奴のせいなんだよ！」

ドカカッ！

焔に蹴られている間、蒼魔は考えていた。

蒼魔「（俺に仲間というものを教えたのは一刀、俺が強くなれないのは一刀のせいだったのか！？）」

じわじわと蒼魔の心は闇になっていた。

焔「そんなお前にプレゼントとしてバイオスが作ったこの『即席強化薬』をくれてやるぜ！」

ブスッ！

蒼魔「がはっ！？」

蒼魔は強化薬を注射された。

焔「さてと、お遊びはこれくらいにしてそろそろ殺してやるとするか」

スッ！

焔は技の構えをとる。

焔「くたばりやがれ『獄炎の…』」

焔が技を放とうとしたその時、

シュッ！

どこからか煙玉が投げ出されて

もわーっ

辺り一面が見えなくなった。

焔「何だこの煙は！？」

そして煙が晴れてくると

すでに蒼魔の姿はなかった。

焔「新手の奴か、まぁいいずれまた戦うかもしれないしな」

ザッ

焔はその場を後にした。

そしてその頃、

ザッ

蒼魔の姿が確認できるようになると

？「もう大丈夫でしゅよ」

そこには璃々ちゃんくらいの小さな子がいた。

蒼魔「あんた誰だ？」

蒼魔が聞くと

小春「わたちは天川八雲の妹の天川小春でしゅ。姉上から蒼魔しゃんの話は聞きましたのでしゅ。わざと負けてくれた蒼魔しゃんを助けに参ったのでしゅ」

彼女も姉と同じ忍者だったため蒼魔を担ぎながらここまでこれたのだった。

小春「今、水を探してきましゅから待っていてくだしゃいね」

ヒュンッ

小春は水を探しにその場を去っていった。

小春が去った後

蒼魔「俺が強くなれないのは一刀のせいだ」

蒼魔は一刀を憎むようになっていた。

そんなとき

ガサッ

鳳賀「やっと会えたな蒼魔♪」

鳳賀が蒼魔と合流した。

鳳賀「お前も無事でよかったよ」

このとき、鳳賀は気づいてなかった。蒼魔の目の色がおかしくなっていたことに

６５時間目「最悪の相性！？救世主あらわる」（後書き）

一刀「一刀だ。俺が飛ばされた先には蒼魔がいた。再会を喜ぶ俺だが蒼魔は何故か俺に向かって攻撃してきた。どうしたんだよ蒼魔！？次回、『激突、一刀ＶＳ蒼魔』俺がお前の目を覚ましてやるぜ！」

６６時間目「激突、一刀ＶＳ蒼魔」（前書き）

一刀「決勝戦が進むなか、蒼魔は敵の大将である焔と戦うことになった。はじめはビビっていた蒼魔だったが頭脳をいかした戦法で焔を捕縛し、見事倒した…かに思えたが焔には効いておらず逆に蒼魔に危機が訪れたがそんな蒼魔の危機を救ったのは天川八雲の妹の天川小春だった。小春に連れられ蒼魔は逃げるが蒼魔の様子がおかしくなっていた」

６６時間目「激突、一刀ＶＳ蒼魔」

とある場所では

キーンッ！

ドッシーン！

一つの流星が落下した。

しかし、これは流星ではなく

一刀「いてて～！？」

６２話にて桃香に殴り飛ばされた一刀だった。

一刀「俺はなんでこんなところにいるんだ？」

どうやら自分が色仕掛けにはまったことは忘れたようだ。

一刀「しかし、頬が痛いな～！？」

一刀が頬の痛みを感じていると

ガササッ

近くの茂みが揺れていて

サッ

一刀は身構えると

一刀「光魔学園の奴か、隠れているのはわかってるんだ出てこい！」

一刀が叫ぶと

バッ！

茂みの中から飛び出してきたのは

蒼魔「何だよ一刀かよ！？」

蒼魔だった。

一刀「蒼魔、無事だったんだな！？」

蒼魔「当たり前だよ俺が簡単にやられる奴じゃないってのはお前が一番知ってるだろう」

二人は再会の会話を交わすと

一刀「早く他のみんなを探さないとな」

一刀が言うと

蒼魔「鳳賀だったら見つけたぜ」

一刀「マジかよ!?んでどこにいるんだ?」

一刀が身を乗り出して聞くと

蒼魔「そんなことよりもさ…」

スッ

蒼魔はそっと一刀に近付くと

ザクッ!

いきなり蒼絶氷雷剣を一刀に突き刺してきた。

一刀「ガハッ!?何するんだよ蒼魔!?」

一刀が聞くと

蒼魔「お前が悪いんだぜ一刀、お前が俺に仲間なんて言葉を教えるからいけないんだよ」

一刀「何言ってんだよ蒼魔!?お前何か様子がおかしいぞ」

蒼魔「おかしいだと?おかしなことを言う奴だな俺は何も変わってないぜ。この世は強い者支配する、昔の俺の考えそのままなのさ、仲間意識というものは弱い奴が覚えるものなのさ、その証拠がこれだ」

ポイッ　　ドサッ

蒼魔は一刀の目の前に

一刀「ほ…鳳賀!?」

ボロボロにされた鳳賀を投げ捨てた。

蒼魔「そいつはおかしな奴だよ。俺にボロボロにされようとも最後まで俺は仲間だと言って反撃しなかったんだからな。所詮仲間意識というものは邪魔にしかならないんだよ!」

ビシッ!

蒼魔の言葉に一刀はぶちギレそうになったが

一刀「(ダメだ!?どんなに憎くてもあいつは仲間なんだ!)」

一刀は必死に怒りをおさえていた。

すると蒼魔は

蒼魔「どうやらお前も鳳賀と同じように仲間だから戦えないという甘ちゃんらしいな。だったら俺がお前を戦う気にさせてやるぜ」

蒼魔が言うと

ビュゴォーッ!!

強烈な冷気が蒼魔を覆った。

そして冷気の中から

バァンッ！！

氷龍の鎧を身に纏った蒼魔が現れた。

蒼魔「これが仲間を捨てて得た力、武装氷龍だ」

蒼魔はバイオスの薬によって無理やり龍を支配したのだった。

蒼魔「一刀、お前も真の力を見せてみろ！」

一刀「嫌だ！どんな理由があろうともお前は俺の親友であり、仲間なんだ！」

まだ蒼魔を仲間だと言う一刀に対して蒼魔は

蒼魔「本気になれないのなら俺がそうしてやるぜ！」

ビュゴォーッ！！

蒼魔は蒼絶氷雷剣に冷気を溜めると

蒼魔「『氷河散弾千兆撃（ブリザードスマッシャー）』！」

シュシュシュンッ！

その技は焔に食らわしたものに似ているが威力が断然違っていた。

シュシュシュンッ！

無数の氷が一刀に襲いかかる。

一刀「ちっ！？」

サッ

一刀はなんとか避けようとするが

蒼魔「甘い！貴様がどう動くなんて俺には手に取るようにわかるんだよ！」

長い間一刀と行動を共にしていた蒼魔は一刀の行動パターンを熟知していた。

そして一刀の動いた先に蒼魔は無数の氷をぶつけようとする。

ドガガガッ！！

一刀「がはっ！？」

蒼魔の考え通りに動いてしまった一刀は攻撃をもろに食らってしまった。

蒼魔「どうした？俺が憎いだろう、憎かったら俺と戦え！」

しかし、ここまでされても一刀は

一刀「嫌だって言ってるだろう！お前は俺の大事な親友なんだ！」

蒼魔を攻撃することができなかった。

蒼魔「そうか、そんなに仲間意識が大事なのか、だったら死になっ！」

ブンッ！

蒼魔は蒼絶氷雷剣を高く上げた。

この一撃を食らってしまえばいくら一刀であっても殺られてしまう！？一刀に危機が訪れたが

桃香「見つけたよ一刀くん　」

そこに桃香が現れた。

桃香「ごめんねさっきはおもいっきり殴っちゃって　」

桃香は状況を気にせずに一刀に近付いていく

それを見た蒼魔は

蒼魔「どうやらお前に本気を出させるには生け贄が一人では足りないらしいな　」

スッ！

蒼魔は上に上げていた蒼絶氷雷剣を桃香に向けると

蒼魔「あいつにも生け贄になってもらうぜ」

ヒュンッ

蒼魔は高速で移動し、桃香に近寄っていった。

桃香「えっ!?蒼魔くんなの!?」

訳を知らない桃香は避けることができなかった。

一刀「(このままでは桃香が殺られてしまう!?でも俺には蒼魔を傷付けることなんて!?)」

必死で悩む一刀

そんなとき一刀の脳内に中学時代にした蒼魔との約束が思い出された。

中学時代

蒼魔「なぁ一刀、俺達って将来どうなるかわからないし、もしかしたら地球を破壊する悪の親玉になってるかもしれない。とにかく、俺達のどちらかが悪の道に進んだら互いに容赦なく戦おうぜ!」

一刀「わかった男同士の約束だな。悪になった親友を助けてあげられなくて何が親友だ」

回想終了

一刀「（そうだ。悪になった蒼魔を救ってあげられるのは親友である俺しかいないんだ！）」

ゴォッ！！

一刀は気を使えば闇の気が蝕むのを気にせずに自身の気を膨れ上げさせた。

ピタッ

この一刀の爆発した気を感じ取った蒼魔は蒼絶氷雷剣を桃香に当たる寸前に止めると

蒼魔「やっと本気になったようだな」

ヒュンッ！

狙いを桃香から一刀に変えて向かっていった。

蒼魔「死にやがれ一刀『最終龍撃牙（ファイナルブレイク）』！」

パキパキッ！！

蒼魔は剣を構えて自身を氷柱（つらら）のように鋭くして一刀に襲いかかる。

対する一刀は

一刀「『俄龍爆撃流星（がりゅうばくげきりゅうせい）』！」

ゴォッ！！

刀に気を送って龍の気を放った。

ガリガリンッ！！

一刀の龍の気によって蒼魔の氷柱は少しだけ削られた。

蒼魔「こんな技が俺に通用するかよ！」

続けて一刀は

一刀「『俄龍光拳』！」

ブンッ！！　ガキンッ！！

拳に気を送って蒼魔の氷柱を破壊し、蒼魔の姿はむき出しになった。

蒼魔「これくらいで俺がまいるかよ！」

さらに続けて一刀は

一刀「『俄龍混沌炎撃（カオスバースト）』！」

ゴォッ！！

両手から闇の気を放った。

蒼魔「こんな技くらいで…　」

しかし

パキパキッ

蒼魔の鎧が次々と欠けていった。

蒼魔「馬鹿な！？こんな技くらいで俺が…！？」

これらの技は単体でも強いが連続で出すことによってもっと強い北郷流奥義『俄龍光爆撃走』になるのだ。

そして蒼魔の鎧が全て砕け散ると

スッ！

蒼魔の目の前に一刀が現れて

一刀「すまないな蒼魔、『俄龍魂絶撃』！」

ドグボッ！！

物凄い力で蒼魔を殴り、気絶させた。

６６時間目「激突、一刀ＶＳ蒼魔」（後書き）

焔「焔だ。一刀は闇に蝕まれ、蒼魔は気絶中。そんな弱い奴を倒すのは気が引けるが仕方がない片付けてやるよ！次回、『ダーク一刀あらわる』全てを燃やし尽くすぜ！」

67時間目「ダーク一刀あらわる」（前書き）

一刀「桃香に殴り飛ばされ、落ちた先にいた蒼魔と合流し、喜ぶ俺だったが蒼魔は何故か俺を攻撃してきた。自分が弱くなったのは俺のせいだという蒼魔は俺を本気にさせるために鳳賀をボロボロにし、桃香をも傷付けようとした。仲間相手に戦えないと決めていた俺だったが蒼魔との約束を思いだし、戦うことを決意し、蒼魔を本気で攻撃するのだった」

67時間目「ダーク一刀あらわる」

ドシンッ!!

一刀が渾身の一撃を蒼魔に食らわし、一刀の技を食らった蒼魔は地面に倒れた。

桃香「二人とも大丈夫かな!?」

二人が何故戦いあうのかを知らない桃香は驚いていた。

一刀「すまないな蒼魔、こうするしかお前の目を覚ますことができなかったんだよ」

一刀が言うと蒼魔は

蒼魔「何言ってんだよ。助かったぜ一刀、俺を正気に戻してくれてよ」

蒼魔の目は正常に戻っていた。

しかし、

ズキンッ!!

一刀「ぐはっ!?」

桃香「一刀くん!?」

蒼魔を助けるためとはいえ、気の技を使った一刀に再び闇の気が襲いかかってきた。

桃香「一刀くん!?もう一度気の流れを止めてよ、そうすれば痛みを押さえられるんでしょ!?」

桃香は言うが

一刀「ムリなんだよ桃香、あの方法は一度しか使えないんだ。たとえもう一度使っても闇の気を押さえることができない…ぐほっ!?」

桃香「一刀くん!?」

闇の気はどんどん一刀の体を蝕んでいき、一刀の体の色がどんどん黒く染まっていた。

そんなとき

焔「美しい友情劇ってか」

バァンッ!

一刀・桃香・蒼魔の近くにいつの間にか焔がいた。

焔「仲間を助けるために自分を犠牲にするなんてやっぱりフランチェスカの奴等は馬鹿ばかりのようだな」

焔が罵倒すると

蒼魔「テメェ！！＃」

ゴォッ！！

蒼魔は再び武装氷龍形態に変身し、

蒼魔「よくも俺を悪の道に進ませやがったな！＃」

キーンッ！！

焔に速攻を仕掛けるが

焔「のせられる奴が馬鹿なんだよ」

サッ

焔は軽く避けた。

蒼魔「おのれ！！お前だけは俺が倒してやる『氷河散弾千兆…』」

蒼魔は技を焔に仕掛けようとするが

焔「そういえばいい忘れていたけど、お前に撃ったあの薬、実は副作用があってな時間が経つと…」

そのとき

ブシュッ！！

蒼魔「ぐわーーっ！？」

蒼魔の右腕が破裂した。

焔「薬の副作用として、体に痛みが走るんだよ」

蒼魔「テメェ…」

シュンッ　バタンッ

蒼魔の武装氷龍が解けて蒼魔はその場に倒れてしまった。

一刀「蒼魔！？貴様よくも蒼魔を＃」

一刀は体を蝕まれながらも抵抗するが

ズキキンッ！！

一刀「ぐおっ！！」

動けば動くほど闇の気は一刀の体を蝕んでいった。

焔「無茶するなって次第にお前は闇に蝕まれて廃人になるんだからよ。動くだけで体力の無駄遣いだぜ」

一刀「そんなの知るかよ！たとえ確率が０．１％しかなくても０％

でない限り、俺は抵抗するんだよ！」

ゴォッ！！

一刀は闇の気に抵抗しようとさらに気の放出量を増やしていった。

焔「（こいつ馬鹿か！？んなことすれば益々闇の気の進行速度が上が…）」

ところが

シュルシュルルッ

闇の気が一刀の放出する気を吸い込めなくなってきたのかどんどん闇の気が小さくなってきていた。

焔「（マジかよ！？少しやばいかもな）」

スッ

焔は懐に手を伸ばすと

ワラワラッ

天道虫（てんとうむし）に似た黒い虫を数匹取り出した。

焔「バイオスのじいさんに言われて用心のため持っておいてよかったぜ」

ピュッ！

焔は虫を一刀に投げ出した。
すると投げ出された虫は

ズブブッ

一刀の体に触れた瞬間、体内に入っていった。
すると一刀は
一刀「ぐはっ！？」
更に痛みが強まり苦しむようになった。
桃香「ちょっと！？一刀くんに何したのよ！」
桃香が聞くと
焔「冥土のみやげに教えてやるよ。そいつに投げたのは暗黒虫（カオスバグ）という闇の気を促進させる虫さ！」
焔が言うと桃香は
桃香「メイドって、月ちゃん達にお土産なんて渡さないでよ！」
桃香は頭が悪かった。
焔「馬鹿かお前は！北郷を見てみな」

焔に言われて桃香が一刀を見てみると

一刀「ぐわーーっ！？」

暗黒虫によって更に闇の気が強まった一刀が苦しんでいた。

桃香「一刀くん！？」

スッ

桃香が一刀に触れようとするが

バチバチッ！

桃香「きゃっ！？」

闇の気に阻まれてしまった。

焔「さぁ北郷よ、その痛みから解放されたくば心を闇で覆い尽くせ！」

そしてついに一刀は

一刀「うぉっー！？」

バチバチンッ！！

全身が闇で覆われてしまった。

闇一刀「・・・」

バチバチッ!!

今の一刀の姿は漆黒の玄武の鎧を身に纏い、左腕にはドクロの凶悪顔の龍の骨、右腕と足は黒獅子、そして背中には闇の気の翼がはえていた。

桃香「そんなっ!?嘘でしょ一刀くん!?」

スッ

桃香は一刀に手を触れようとするが

闇一刀「俺に触れるな!」

バシンッ!!

一刀は桃香の手を叩いた。

焔「諦めな劉備、闇の気に支配されて無事だったやつは一人もいない。方法があるとすれば北郷を殺すのみさ!」

焔の言葉を聞いた桃香は

桃香「そんな!?一刀くん!?」

大きなショックを感じていた。

焔「まぁ北郷を倒したとしてもそれより強い俺がいるわけだしな」

すると

ゴォッ！！

焔の回りに炎の渦が発生し、

ゴゴゴッ！！

焔を飲み込んだ。

そして渦の中から

焔「これが俺の力、『魔龍炎焔（まりゅうえんほむら）』だ！」

バンッ！

炎の龍の鎧を身に纏った焔が現れた。

67時間目「ダーク一刀あらわる」（後書き）

華琳「華琳よ」

蓮華「蓮華よ」

月「月ですへぅ」

華琳「あんな姿の一刀なんて見たくないわ！」

蓮華「正気に戻ってよ一刀！」

月「一刀さん…」

華琳「必死で叫ぶ私達だけども何もできないだなんて悔しいわ！」

蓮華「でも私達にだって一刀を応援することはできる！」

月「必死で祈りましょう！」

華琳・蓮華・月『次回、『乙女達の祈り、甦れ一刀』一刀頑張ってね』

68時間目「乙女達の祈り、甦れ一刀」（前書き）

一刀「俺と蒼魔の戦いが終わった後、俺は気を使ったせいで再び闇の気が暴れてしまい危機に陥る。そんななか、焔が現れて蒼魔を挑発し、蒼魔までも倒してしまう。俺は必死で闇の気を押さえようとするが焔の手により闇の気を溢れ出されてしまい俺の体は闇一刀（ダーク一刀）になってしまったのだった」

68時間目「乙女達の祈り、甦れ一刀」

焔は魔龍炎龍焔に強化して更なる絶望を桃香に見せつけると

焔「北郷、さっさと劉備を殺してしまえ！」

一刀に命令を下した。

闇一刀「ウゥゥ…」

闇の気に染まった一刀は少しずつ桃香に近寄ってくる。

桃香「一刀くん!?なんでこっちに来るの!?」

桃香が驚いていると

ブンッ

ドカッ！

桃香「きゃっ!?」

ズザザーッ！

一刀は目にも止まらぬ速さで桃香を殴り、桃香は地面を転がっていった。

闇一刀「お前…、死んでしまえ！」

もはや今の一刀には桃香の声は聞こえないくらいに闇の気に染まっていた。

桃香「嘘でしょ一刀くん！？　」

桃香はよろめきながらも立ち上がると

焔「何をしているんだ北郷、そんな雑魚ごときすぐに片付けてしまえ！　」

焔が一刀に命令すると

闇一刀「了解…　」

ジャキンッ！

一刀は腰にあった剣『髑髏龍獄丸』を抜くと

ゴォッ！！

剣に闇の気を注ぎ始め、

バサッ！　　キーンッ！

翼を広げて空高く舞い上がると

闇一刀「『獄俄龍四神撃』！　」

ブンッ！

桃香相手に最大級の技を放った。

ゴォッ！！

技は桃香目掛けて襲い掛かってくる。

桃香「そんな…一刀くん…！？」

桃香はいまだショックから立ち直れずにいて避けることができない、
たとえ避けたとしても今からでは間に合わない！？

ゴォッ！！

そして闇一刀が放った技は

ドッゴーーンッ！！！

半径１０ｍを巻き込んで爆発した。

焔「やったな北郷」

誰もが桃香は殺されたと思うが

シュ～

爆風が吹き消されていくと

焔「なっ！？」

桃香がいた場所には

弧狼「間一髪だったようだな!?」

恋「…桃香、大丈夫?」

そこには真黒神状態の弧狼と超進化状態の恋が桃香を守っていた。

桃香「恋ちゃん!?兄貴さん!?どうしてここに!?」

弧狼「あれだけデカイ闇を感じたら来るのが当たり前だろう」

恋「…一刀に嫌な予感を感じたから来た」

三人が会話をしていると

焔「バカな!?貴様らが相手をしていたデスドラゴンナイツはどうしたんだ!?」

焔が聞くと

弧狼「あいつなら目が覚めないように一発殴って気絶させたぜ」

恋「…気絶して寝てる」

二人が相手をしたのはデスドラゴンナイツでもＮｏ．２、３クラスの強敵である。

焔「おのれ、フランチェスカごときがデスドラゴンナイツを舐めやがって!!北郷、こいつらを片付けてしまえ!」

闇一刀「ウゥゥ…」

焔は闇一刀に弧狼達の相手をするように命令する

弧狼「やはり恋の嫌な予感が当たったようだな!?」

恋「…一刀!?」

二人は一刀の変貌ぶりに驚いていた。

弧狼「仕方ねぇ!たとえ相手が仲間であっても戦うのが千頭中の礼儀ってやつだ。俺はやってやるぜ」

恋「…ホントは嫌だけど一刀を止めるには戦うしかないのなら恋も戦う!」

ジャキンッ!

二人は武器を一刀に構えるが

桃香「そんなのダメだよ!一刀くんだって苦しいんだよ戦うなんてダメだよ!」

桃香は必死で戦おうとする二人を止めていた。

焔「確かにそいつらに北郷の相手は少しヤバイからな、お前らには

こいつらの相手をしてもらうぜ！」

スッ！

焔が手を挙げると

バババッ

焔の後ろの草葉から二人の男が飛び出してきた。

紫電「俺の名は紫電、貴様らの相手をしてやる」

地王「オレは地王、ほむたんの邪魔する奴は俺が倒す！」

この二人はデスドラゴンナイツの残る二人だった。

焔「紫電、地王、劉備は北郷に任せるから残りの二人を殺れ！」

紫電「わかった」

地王「任しといて」

スッ

二人は弧狼と恋の前に立ちはだかると

紫電「北郷を助けたくば先に俺達を倒すことだな！」

地王「ほむたんの邪魔は絶対させないもんね～！」

弧狼「ちっ！邪魔な奴等め！」

恋「…すぐに倒せば問題ない」

ジャキンッ

仕方がなく弧狼と恋は二人の相手をすることになった。

焔「北郷、さっさと雑魚（桃香）を殺してしまえ！」

闇一刀「了解…」

スッ

闇一刀は桃香の前に立ちはだかった。

桃香「一刀くんもうやめてよ！これ以上無駄な戦いはしたくないよ！」

桃香は涙を流して叫ぶが

闇一刀「耳障りなんだよ！」

ドカッ！

一刀は話を聞かずに桃香を殴った。

桃香「どうしても戦うことしか道がないのなら私だって戦うもん！
」

ジャキンッ

桃香は得物である宝剣・靖王伝家を抜いた。

桃香「たぁーっ！」

桃香は一刀に向かっていくが

ガキンッ！

女子の中でも最弱である桃香が剣の腕前で一刀に勝てるはずがなく
靖王伝家は軽く弾かれてしまった。

弧狼「桃香!?」

恋「…桃香が危ない!?」

スッ

二人は桃香の助けに向かおうとするが

紫電「ここは通さん！」

地王「邪魔はさせない」

スッ

二人に回り込まれてしまった。

この二人は実力ならばデスドラゴンナイツの中でも下クラスなのだが攻撃を避けて時間稼ぎしているため簡単には倒せなかった。

闇一刀「終わりだ桃香！」

ブンッ！

闇一刀は髑髏龍獄丸を振り上げる。

これが下ろされれば桃香は確実に死ぬ！？

闇一刀「くたばれー！」

ブォンッ！

そして剣は無情にも桃香に降り下ろされた。

桃香「（一刀くん！？）」

ここで時間は少し戻り。闇一刀が桃香に攻撃を仕掛けるところまで戻る。

コロシアム内

闇一刀「耳障りなんだよ！」

ドカッ！

闇一刀が桃香を殴った時、華琳達は

蓮華「もうやめてよ一刀！」

月「そんな一刀さんの姿なんて見たくないです！」

二人は必死にテレビ画面を見ないようにしていたが

華琳「諦めるのは早いわよ！」

華琳はただ一人、画面を見続けていた。

蓮華「華琳！あなたあんな一刀の姿を見て平気なの！」

蓮華は言うが

華琳「平気なわけないじゃない」

蓮華「えっ！？」

華琳「私だってあんな姿の一刀なんて見たくないわよ！でも桃香だって戦いたくないのに戦っているのよ！だから私達だって見なきゃいけないのよ！」

華琳は強く発言した。

蓮華「ごめんなさい華琳、あなたがそこまで考えているなんて知らなかったわ」

華琳「別に構わないわよ、私も強く言ってごめんなさい」

二人が互いに謝っていると

月「あっ！？」

そのとき闇一刀は

闇一刀「終わりだ桃香」

剣を振り上げていた。

華琳「やめてよ一刀！」

蓮華「降り下ろさないで！」

月「二人とも、テレビに話しかけても聞こえませんよ！？」

華琳・蓮華『そんなことわかってるわよ！』

月「すみません～！？」

華琳「こうなったら私達ができることは」

蓮華「最後まで一刀のことを」

月「祈ることですね」

そして華琳達は一刀が元に戻るように必死で祈った。

闇一刀「くたばれー！」

ブォンッ！

闇一刀の剣が桃香に降り下ろされた。

そんなとき、

ドクンッ！

闇一刀「うっ！？」

ピタッ

桃香「えっ！？」

闇一刀の剣が桃香すれすれで止まった。

今、闇一刀の頭の中には

華琳「一刀、しっかりしなさいよ！」

蓮華「あなたは闇にのまれる人なんかじゃない！」

月「負けないでください一刀さん！」

華琳達の叫びが頭の中に流れていた。

闇一刀「やめろ…なんだこの叫びは…！？」

そして闇一刀の動きが鈍くなったときに

ガバッ！

桃香が闇一刀に抱きついた。

桃香「もうやめてよ一刀くん！こんなのホントの一刀くんじゃないよ！」

桃香は泣きながら叫ぶ

焔「何してるんだ北郷、さっさと劉備を殺せ！」

闇一刀「ウゥゥ…」

闇一刀が再び動きだそうとすると

桃香「ホントの一刀くんは強くて、優しくて、かっこよくて、ちょっとエッチだけど、私達はそんな一刀くんのことが好きなんだよ！だから正気に戻ってよ！」

ポチャンッ

桃香の涙が地面に落ちた。

焔「何してるんだ北郷め、こうなったら俺自身で…」

焔は桃香に攻撃を仕掛けようとするが

紫電「ぐほっ！？　」

地王「ぐへっ！？　」

バタバタッ

弧狼「いっちょ終わったぜ　」

恋「…早く桃香を助ける　」

ようやく二人がデスドラゴンナイツの二人を撃破した。

焔「おのれ～！！＃　」

この様子に苛立つ焔

そんなとき、

闇一刀「『獄俄龍…』　」

ゴゴゴッ！

闇一刀が再び剣に闇の気を注ぎ込んでいた。

焔「よくやったな北郷、さっさとこいつらを消し飛ばしてしまえ！　」

ビシッ！

焔は弧狼達を指差した。

闇一刀「（コクリッ）」

焔の言葉に頷く（うなづく）闇一刀。そして

闇一刀「『四神撃』！」

ゴォッ！！

闇一刀は必殺技をぶちこんだ。

しかし、方向は

焔「なっ！？」

ドッゴーーンッ！！！

何故か焔に向けられていた。

闇一刀「さっきからぶつぶつ言いやがって…」

スッ

一刀「耳障りなんだよ！」

バンッ！

一刀は完全に闇の気を取り払い元の姿に甦った。

桃香「やったー♪一刀くんが元に戻った～♪」

ギューッ！

喜びのあまり強く抱き締める桃香

一刀「と…桃香、今はそれどころじゃ／／／」

そんなとき、

焔「闇の気を取り払っただと、ふざけやがって女共々消えちまえ！」

スッ

焔は両手を合わせて構えると

焔「『日輪の龍の息吹（ドラゴンブレスアポロ）』！」

ゴォッ！！

両手から高温度の炎の龍の気を桃香目掛けて放った。

桃香「えっ！？」

あわてて避けない桃香に

一刀「危ない桃香！？」

ドンッ

一刀は桃香を押し出して

ゴォッ！！

一刀「ぐおーーっ！？」

桃香の代わりに技をうけることになった。

桃香「一刀くん！？」

68時間目「乙女達の祈り、甦れ一刀」（後書き）

一刀「一刀た。焔の一撃により、重傷を負った俺は意識を失ってしまう、そんなとき、俺の目の前に現れたのは一匹の龍だった。次回、『龍の試練、聖騎士光龍あらわる』龍よ、俺に貸してくれ！」

69時間目「龍の試練、聖騎士光龍あらわる」（前書き）

一刀「闇に染まった俺は無情にも桃香を攻撃し、そのまま暴れてしまった。そんなとき、華琳達の必死の祈りが頭の中に入り、その怯んだ隙に桃香が俺に抱きついて叫んでその結果、俺は闇の気を取り払うことができた。だが、油断した俺は桃香を庇い焔の攻撃を受けるのだった」

69時間目「龍の試練、聖騎士光龍あらわる」

一刀「桃香、危ない！？」

ドンッ！

桃香「きゃっ！？」

一刀は桃香を押し出すと

焔「くたばりやがれ『日輪の龍の息吹（ドラゴンブレスアボロ）』！」

ゴォッ！！

一刀「ぐわーっ！？」

桃香をかばって焔の炎を受けた。

桃香「一刀くん！？」

メラメラッ

燃え盛る炎のなか、炎の中に一刀の姿はなかった。

焔「俺の炎で骨まで溶けたか。仲間をかばって自分を身代わりにするなんて北郷って奴はホントにバカだよ！ハハハッ」

焔が一刀を嘲笑う（あざわらう）と

ドゴンッ！！

ゴゴゴッ…　ドシーンッ！

近くにあった大木が倒れ出した。

弧狼「たとえ神がお前を許しても俺はテメェを絶対に許さねぇぞ！＃一刀の弔い合戦だ！」

ゴゴゴッ…！！

そこには真黒神の力を全開に出していた怒り狂う弧狼がいた。

そして

ジャキンッ！

恋「…恋もお前を絶対許さない＃」

顔はいつもの通りだがこちらも怒りを顔に出さない恋がものすごく怒っていた。

焔「面白い、お前らのような雑魚が何匹いても勝てないことを俺が教えてやるよ！」

ジャキンッ！

焔は得物の剣を抜いて二人の前に立った。

激闘が開始されようとした時、一刀はというと

一刀「（…んっ）」

一刀はいつの間にか意識を失い、目が覚めてみると周りが暗い場所に一人で寝転んでいた。

一刀「（…俺は一体!?そうか、桃香をかばって焔の技を受けたんだよな）」

一刀はさっきまでのことを思い出すと

一刀「（…ってことはここは天国か?いや、一度とはいえ闇に染まったんだから地獄かな?）」

一刀「（…どっちでもいいけどどうせ死ぬなら死ぬ前に机に仕掛けておいた二重底の開き方を間違えると電流が流れて火事になる恐れがある仕掛けに隠しておいた秘蔵のエロ本を読んでおくべきだったぜ）」

ちなみにそのエロ本はとっくの昔に月にバレていることを一刀は知らない。

一刀がどうでもいいことに対して悔やんでいると

?「何くだらないことを悔やんでいるのだ!」

誰かの叫び声が聞こえてきた。

一刀「今の声は誰だよ！？」

ガバッ！

一刀は驚いて立ち上がると

一刀「さっき言った奴はどこだ！？」

キョロキョロッ

一刀は声の主を探すが声はすれども姿は見えずの状態で見つからなかった。

一刀がまだ探していると

？「どこ探しとるんじゃここじゃ！見下げてみんかい！」

スッ

一刀が目線を下に向けるとそこには

？「ようやく気づきおったかたわけ（バカ）者めが」

ドォーンッ

そこには璃々ちゃんより小さな中華服を着たえらそうなトカゲがいた。

一刀「なんだこれ？トカゲか？」

一刀が言うと

バシンッ！

一刀はトカゲに叩かれた。

？「わしはトカゲではないどっからどう見ても龍じゃろうが！」

小説なので姿はわからないがどう見てもトカゲにしか見えなかった。

一刀「というか、ここはどこだよ！？」

一刀は今更ながら周りの景色を見て気づいたが周りの景色はいつの間にか暗闇から神殿のようなものに変わっていた。

？「ここか？ここは選ばれし者しか入ることができない竜宮神殿じゃ」

決して竜宮城ではないので間違えないように

白竜「そしてわしが竜宮神殿の管理人・白竜（パイロン）じゃ」

白竜が言うと

一刀「その管理人が俺をこんなとこに連れてきて何の用だよ？死んでないのなら俺は早くみんなのところに戻らなくちゃいけないんだ！」

一刀の言葉に白竜は

白竜「たわけ者が！一度敗れたお前が行ってまた負ける気か！いいや、今のお前ならば１００回出向いても勝つことなんて無理じゃ」

一刀「何を！」

ブンッ！

一刀は白竜に拳を繰り出す

が

サッ

白竜は軽く避けると

白竜「わしにすら勝てぬお前が焔に勝つなぞ百年早いわ！」

ドカッ！！

一刀「ぐほっ！？」

白竜は一刀に蹴りを食らわした。

白竜「言っておくが焔はわしよりも強い、今のお前が行っても指一本当てるのが関の山じゃ」

関の山…限界と言う意味

白竜の話を聞いた一刀は

一刀「だったらどうすればいいんだよ！俺を強くしてくれるからここに連れてきたんだろ！」

一刀が叫ぶと

白竜「お前を連れてきたのはわしではない、竜宮神殿の主、項羽様じゃ」

一刀「項羽？」

一刀はその名前をどこかで聞いたような気がした。

白竜「お前、今より強くなりたいのか？」

白竜の質問に一刀は

一刀「もちろんだとも、今より強くなりたいんだ！」

そう答えると

白竜「いいだろう、ついてくるがよい」

スタスタッ

白竜は神殿の奥に入っていった。

竜宮神殿の奥

白竜「これを見るがよい　」

ビシッ

白竜が指をさした先を見てみるとそこには

ズォーンッ！

巨大な龍が飾られた巨大な扉があった。

白竜「この先に項羽様がいる。扉を開けることができればわしが直々に項羽様に龍を授けるようお願いしてやろう　」

白竜が言うと一刀は

一刀「扉を開けるなんて簡単じゃんか♪　」

スッ

一刀は力を込めて扉を開けようとするが

一刀「ふぎぎーっ！！　」

扉は一ミリたりとも開くことはなかった。

白竜「いい忘れていたがこの扉は少しでも闇の気があれば開くことはできんぞ　」

白竜が言うと

一刀「だったら闇の気を取り払った俺がなぜ開けられないんだよ！？」

一刀は扉から手を離して白竜に聞くと

白竜「ホントにそうかな？わしにはとても殺意で人を倒そうとするお前が闇の気を取り払ったなんて思えんがのう」

白竜が挑発すると

一刀「もういいっ！死ぬ気で扉を開けてやる！」

スッ

一刀は再び扉に手を触れた。

白竜「せいぜい頑張れよ、この神殿内は時空が違うから１０日経っても向こうじゃ１時間しか経たんからな」

その後、一刀は扉を開けようとするが扉は一ミリたりとも開くことはなかった。

そして５日が経ったとき

時空が違うので腹がへらない一刀が扉を開けようとしていると

白竜「無駄じゃ無駄じゃ、いくらやってもお前に闇の気があるかぎり扉を開くことはできんよ。時間の無駄というもんじゃ 」

白竜が言うと

一刀「うるさいな！大体なんで闇の気があると開かないんだよ！」

一刀が言うと白竜は

白竜「闇の気があると龍の逆鱗に触れるからじゃよ。項羽様は人に龍をやどらす力があって大昔にもその力を使ったのじゃ 」

白竜は昔話を始めた。

白竜「かつて鎌倉幕府をひらいた源頼朝、天下統一を果たした豊臣秀吉。この二人に項羽様は龍を与えたからこそこの二人は偉業ができたのじゃよ 」

※架空の話です。

白竜「じゃが、頼朝は邪魔な弟の義経を殺し、秀吉は外国である朝鮮を攻めたため心に闇が招じた。そして二人は龍の逆鱗に触れて亡くなったという。以来、項羽様は龍をやどすには心に闇がないものと限定し、試練を与えたのじゃ 」

白竜「今のお前が龍をやどしてもすぐ死ぬのは目に見えておる！お前に問う、お前にとって戦いとはなんだ！ 」

ビシッ

白竜の言葉に一刀は

一刀「俺にとっての戦い、それは憎いやつを…」

このあと、倒すための戦いと言おうとした時に一刀は父である優刀の言葉を思い出していた。

優刀「一刀、戦いとは誰かを憎むためにするんじゃない。誰かを守るために戦うものそれが戦いなんだ」

この言葉を思い出した一刀は

一刀「そうだ、俺はさっきまで焔を倒すことばかり考えていたけれどもそれじゃダメなんだ！」

スゥッ

この時、一刀の体は光に包まれていた。

一刀「戦いとは相手を思いやる心、それが大事なんだ。ただ憎しみだけでいたら殺人鬼と同じじゃないか！だから俺はたとえ憎い相手だろうと戦いを通じて心を通わせてやるぜ！」

一刀がそう決意したとき

パァッ！！

一刀の体が光り輝き、しばらくして一刀を見てみると！？

白く輝く騎士姿で髪は長髪になり、右手には巨大な白虎の銃・『聖獣白虎銃』を構え、白虎の足を持ち、左手には龍の形をした光の剣『聖龍光丸』を構え、両肩には二頭の玄武顔を並ばせ、背中には赤いマントがつけられていた。

そして

スッ

その状態の一刀が扉に手を触れると

バッターンッ！！

扉は勢いよく開いた。

白竜「どうやら会得したようじゃな聖騎士光龍を」

白竜が感心していると

白竜「さてと、約束通り項羽様に…」

しかし一刀は

一刀「もういいよ。強さってものはもらうものじゃなくて、身に付けるものだからさ。それじゃあばよ白竜」

シュンッ！

そう言うと一刀の体は一瞬で瞬間移動して消えていった。

白竜「人間とはホントにせっかちじゃのう」

ギィッ

そして一刀が開けた扉の中には

ガラ～ン

中には誰もいなかった。

白竜「もうあやつは大丈夫のようだな…」

パァッ

白竜の体が光り輝くと

項羽「白竜とは仮の姿、その実態は武の神、項羽なのだよ」

バァンッ！！

白竜の姿は項羽になった。

項羽「それにしてもあやつの気は昔、私の前に現れたあやつに似ておるな。名前はたしか翠川優刀だったな」

項羽は一刀が優刀の息子であることを知らなかった。

６９時間目「龍の試練、聖騎士光龍あらわる」（後書き）

焔「焔だ。一刀の奴め、消えたと思ったらいきなり出てきやがって、しかも聖騎士光龍だとふざけるんじゃねぇよ！次回、『光龍ＶＳ魔龍』なんだこいつの強さは！？」

70時間目「光龍VS魔龍」（前書き）

一刀「桃香を庇うため焔の技を食らった俺は意識を失い竜宮神殿と言う場所に連れてこられた。そしてそこにいたトカゲもとい白竜という龍に今のままでは勝てないと言われ扉を開ける修行を開始する。扉はぜんぜん開くことはなかったが白竜に戦いの意味を思い出させられて真の意味を知り俺は聖騎士光龍となりみんなの元に帰るのだった」

70時間目「光龍VS魔龍」

一刀の姿が消えてから30分後、決勝戦会場では

弧狼「ぐはっ!?」

ズザザッー!

恋「…くっ!?」

ズザザッー!

弧狼と恋が焔に苦戦していた。

焔「フンッ!貴様らは確かに強いが俺の足元にも及ばなかったようだな」

ボロボロの二人に対して焔はほぼノーダメージだった。

桃香「まだだよ!まだ私が残ってるもん!」

スッ

桃香は焔の前に立ちはだかるが

焔「雑魚は引っ込んでろ!」

パシンッ!

桃香「きゃっ！？」

桃香は軽く倒されてしまった。

焔「さてと」

グイッ

焔は桃香の襟首を掴んで持ち上げると

焔「あの世で北郷に会いな！」

ボォッ！

炎の拳を桃香に食らわせようとする。

弧狼「桃香！？」

恋「…体が動けない！？」

二人は桃香を助けようとするがダメージが大きすぎて動けなかった。

焔「死にさらせ！」

ゴォッ！！

焔の拳が桃香に繰り出される！

桃香「（一刀くん…）」

桃香でさえも諦めたそのとき、

ブンッ！　スカッ

焔の拳は空振りに終わった。

焔「おかしい！？劉備はどこだ？」

焔がさっきまでつかんでいた桃香の行方を探していると

ピクンッ

後ろにものすごく高い戦闘力を感じ、振り向いてみると

焔「（この戦闘力はまさか！？）」

焔は信じたくなかった。何故ならそこにいたのは

バァーッ！

光り輝く鎧を身に纏った一刀がいたのだ。

弧狼「あれが一刀なのか！？」

恋「…きれい」

二人が一刀の出現に驚いていると

桃香「この暖かい感じは…もしかして一刀くん！？」

桃香がさっきまで閉じていた目を開いてみると

一刀「待たせたな桃香　」

そこには間違いなく一刀の姿があった。しかも桃香は一刀にお姫様抱っこされていた。

桃香「やっぱり生きてたんだね。私は信じていたよ！」

ギュッ

桃香は一刀を抱き締める。

一刀「（胸が～／／／）桃香、それは後にしてくれ　」

一刀は頭に感じている下心を必死におさえて桃香を落ち着かせると

一刀「兄貴と恋もありがとうな　」

くるっ

一刀は弧狼と恋の方を向いた。

弧狼「ったく、お前はいつもいつも遅いんだよ！でもまぁあいつを倒したら帳消しにしてやるぜ！　」

グッ！

指を立てる弧狼に対して恋は

ギュッ！

動けないはずなのにいつの間にか一刀の腕に抱きついていた。

恋「…一刀、生きていてよかった」

ギュ～ッ！

一刀「（胸が～／／／）恋、今は戦い中だからな」

ふるふるっ

恋「…いや、もう少しこのままでいる／／／」

ギュ～ッ！

恋がさっきよりも強く抱き締めると

桃香「恋ちゃんずる～い！じゃあ私も♪」

ギュ～ッ！

桃香も抱き締めてきた。

その様子に焔は

焔「ほぅ、どうやって生き返ったかは知らないが戦闘中に女を抱くとはふざけるんじゃねぇ！」

ゴォーーッ！！

焔は一刀に火炎放射を繰り出してきた。

一刀「…！？二人とも、離れて！」

ドンッ！

桃香「きゃっ！？」

恋「…痛い」

一刀は二人を押し出すと

ゴォーーッ！！

焔の炎を食らってしまった。

焔「フンッ！生き返ってきてまた死ぬとはバカな奴だぜ」

焔は一刀は死んだと思っていたが

一刀「ちょっと熱いな」

焔「！？」

炎の中から一刀の元気な声が聞こえてきた。

そして一刀は

くるくるーっ！！

しゅぼぼ

その場で回転して風を巻き起こし、炎を消した。

一刀「マントが少し焦げちゃったじゃないか」

これには焔も驚いた！？

焔「（バカな！？少なくとも俺はほぼ全開を出したんだぞそれなのに無傷なんて）」

焔は驚いていたが少しすると

焔「フフフッ！お前はホントに面白い奴だよ北郷、最初に見た時は全力を出す相手じゃないと思っていたが撤回するぜ！」

ゴォッ！！

焔の気がさっきよりも格段に上がった。

弧狼「マジかよ！？俺らとやった時でさえ１００％じゃなかったってのかよ！？」

焔「この俺が貴様らごときに１００％の力を出すわけがないだろう！ちなみにさっきまでの俺の力はだいたい８０％くらいだ。だが北郷喜ぶがいいぞ、お前は俺が初めて１００％の力で戦う記念すべき相手なのだからな」

ゴゴゴッ…！！

焔の気がどんどん膨れ上がってきている

そして、

ドドーンッ！！

焔の気は１００％に達した。

焔「どうだ北郷！俺の力を見るがいい！」

スッ

焔は拳を後ろに構えると

焔「『日輪の龍の息吹（ドラゴンブレスアポロ）』！」

ゴゴォーーーッ！！！！

焔は最大クラスの一撃を一刀に放った。

しかし一刀は

一刀「こんな程度とはな」

鼻で笑うと

一刀「『聖俄龍四神弾』！」

ズバーッ！！

一刀は俄龍四神弾を放ったが

弧狼「おいっ！？俺は何度かあの技を見たことがあるが威力は今までとは桁違いじゃねぇか！？」

一刀の技を見続けていた弧狼さえも驚いた一撃は

ズバババッ！！　ゴォーーッ！！

焔の技とぶつかり、相殺していった。

焔「バカな！？俺の技があんな技ごときに相殺されるなんてあり得んのだ！？」

焔が打ち消されたことに一番驚いていると

シュンッ

一瞬で一刀は焔の目の前に現れ

一刀「お前は悲しい奴だよ、強さを求めるあまり悪に染まるなんてな」

とささやいた。

しかし焔は

焔「だまれだまれ！貴様に何がわかると言うんだ！」

ブンブンッ！

焔はがむしゃらに邪魂大蛇丸を振りまくった。

一刀「どうやら悪の気が深いとこまで入り込んでいるらしいな。だが、安心しろ俺がお前を救ってやるぜ！」

焔「だまれだまれ！貴様に俺の何がわかると言うんだ！」

スッ

焔「『九頭炎獄滅』！」

ゴォーッ！！

焔は一刀に技を繰り出すが

一刀「白虎砲（バイフーホウ）！」

ドキュンッ！！

一刀の放った弾丸で焔の技は消滅した。

一刀「はっきり言わせてもらう！今の悪に染まったお前じゃあ俺には絶対勝てないぜ」

焔「まだそれを言う気か！だったらもっと力をつけるまでさ！」

スッ

そして焔は身を丸くして構えると

ゴゴゴッ…！！

焔「うぉーっ！！」

ブチブチッ！！

ゴキゴキッ！！

ビリリッ！！

焔の体が服を破くほど大きくなり、体が龍のように変貌していった。

そして

ジャーンッ！！

とうとう焔の体は翼の生えた赤い龍に変身した。

焔「これが俺の最終兵器、その名も龍力開放（ダークネスモード）だ」

どうやら龍に変わっても焔の意識はあるようだ。

焔「北郷、今からお前に一撃を食らわせる！避けたければ避ければいいさ！ただし、貴様が避けた瞬間周りの人間が死ぬがな！」

一刀「どういうことだ　」

焔「簡単なことだよ、技の範囲はおよそ半径３０メートルすなわち貴様のいる位置から半径３０メートルの距離だ。だが、貴様が避けたら技は周りにいる劉備・呂布・弧狼を巻き込むのさ！俺は他の奴が死のうが別に構わないがな　」

一刀「なにっ！？桃香、恋と兄貴を連れて遠くに逃げるんだ！？　」

桃香「えっ！？わ…わかったよ　」

ダッ

桃香は直ぐ様弧狼と恋の元に向かい引きずりながら遠くに運ぼうとした。

弧狼「桃香、俺は大丈夫だ！俺は奴が見捨てた奴を運んでやるぜ！　」

ガバッ！

そして弧狼はボロボロの体ながらも紫電と地王を担ぎ上げた。

焔「そんな雑魚を助けてる間があるなら逃げればいいのに、バカな奴だぜ　」

スッ！

焔は大きく口を開けると

焔「『神玉獄炎龍大蛇（アポロデスゴッドフレア）』！」

ゴゴゴォーーーッ！！

ものすごい技を繰り出した。

しかし、みんなは逃げ切れずまだ近くをさまよっていた。

一刀「ちくしょー！」

ガシッ！

一刀は少しでも速度を落とすよう焔の技を受け止める。が

ジジジ…

一刀「くっ！？」

いかに聖騎士光龍とはいえどもこの技を長時間受け止められるはずがなかった。

あと数分も受け止めていればいくら聖騎士光龍状態でも一刀は死んでしまう！？

一刀「（それにしても奴はなんで技をバラしたんだ？）」

一刀がその事を考えていると一つの疑問を思い出した。

回想

焔「劉備・呂布・弧狼」

そこで一刀は気付いた。

一刀「しまった!?」

少なくともこの近くには桃香達だけでなく近くで倒れている蒼魔と鳳賀がいたのだ。

焔「ようやく思い出したようだがもう遅い、もう貴様は限界だろう！仲間を見捨てれば貴様の命は助かるぞ！」

しかし一刀が仲間を見捨てられない性格であることは焔もわかっている。

だが、今さら誰かが向かったところでボロボロの弧狼達では間に合わない。

一刀「くっ!?」

一刀が迷っていたその時

ビュンッ！　サッ！

突然ものすごい早さで駆けてきた者がおり、蒼魔と鳳賀を抱えて走り出した。

小春「今なのでしゅよ一刀しゃん！」

二人を抱えたのは小春だった。

一刀「助かったぜ！」

シュンッ

そして一刀は瞬間移動で焔の技を避けた。

焔「バカな！？消えただと！？　」

聖騎士光龍状態の一刀は瞬間移動が可能なのだ。

そして

シュンッ！

焔「うわっ！？」

一刀は焔の目の前に現れると

一刀「今からお前にある悪の気を消し去ってやるよ」

スッ！

一刀はかめ〇め波のような体制をとると

一刀「『光龍と項羽の気光波（ライトニングドラゴンオーラ）』！」

ゴォーーッ！！

項羽の姿をした光の波動を焔に食らわした。

焔「ぐおーっ！？」

光の波動を食らった焔の龍力開放は解けていき

パンッ

焔のボールを割った。

そしてこの瞬間、聖フランチェスカ学園の勝利が確定したのだった。

70時間目「光龍VS魔龍」（後書き）

光魔「光魔だ。デスドラゴンナイツが敗れるなんてそんな馬鹿なことが！？やはり使い物にならない連中だったようだな。次回、『鉄拳粉砕、野望を粉砕せよ！』俺はまだ負けてなぞいない！」

71時間目「鉄拳粉砕、野望を粉砕せよ！」（前書き）

一刀「試練を終えて竜宮神殿から帰ってきた俺は魔龍と化した焔と戦いを始めた。しかし、光龍を手にした俺にとってもはや焔なぞ相手ではなく焔は更に力を見せるが結局一刀の一撃が決まり、焔のボールは割れるのだった」

71時間目「鉄拳粉砕、野望を粉砕せよ！」

一刀と焔の戦いで焔の持っていたボールが割れてしまった。

これにより

陳琳「おぉーっと！大将である焔選手のボールが割れてしまった！？ルールによると勝者、フランチェスカ…」

陳琳がフランチェスカの勝利を宣言しようとすると

光魔「その審議待った！」

光魔が待ったをかけた。

光魔「フランチェスカは規則違反を犯している！その証拠に登録選手でない小春選手を試合に協力させているではないか！ルール違反で失格だ！」

確かに光魔の言い分はあっていた。

会場が騒ぎ始めるなか

光魔「（デスドラゴンナイツが負けるとは思っていなかったがまぁいい、私はどうしてもフランチェスカに勝たせるわけにはいかないのだ！そして違反をしたフランチェスカを批判してやる。それが貂蝉への最大の復讐だ！）」

光魔が思っていると

？「違反を先にしたのはそっちじゃないか」

何処からか声が聞こえてきた。

光魔「誰だ!?どこから聞こえてるんだ!?」

光魔が叫んでいると

飛琳「ここだがね」

バンッ

扉の前に飛琳が立っていた。

飛琳「この大会を安全かつ学園同士の戦争を避けるために決められた規則がある。それは試合中以外での抗争、暗殺、そして闇討ちを禁ずる。もしこれを犯した場合、直ぐ様学園は敗北となる。学園長ならば当然知っているはずだよな」

光魔「だから何だと言うのだ!私がそんなタブー（危険行為）を犯したというのか?証拠はどこだ?総理大臣の私に変な言いがかりはやめてもらおうか!」

Ｄｒ．バイオス「そうじゃそうじゃ!?証拠を見せんかい!」

バイオスが焦りながら言うと

飛琳「証人ならここにいるぜ」

スッ

飛琳が後ろを指差すと

森羅「光魔学園長、ひどいです！私はそのような規則があるとは聞いていませんでした！」

光魔学園の森羅先生が現れた。

飛琳「彼女と病院で寝ている泉華、あとここにはいないがあんたの弟の黒羽はあんたに言われてうちの生徒の闇討ちを命じられたんだとよ」

ざわざわっ！？

会場内がざわめきだした。

しかし光魔達は

光魔「私が教師や弟に闇討ちを命じた？バカなことをいうな！証拠はどこにあるというんだ！すべてはその女がでたらめを言っているだけじゃあないか！」

Ｄｒ．バイオス「そうじゃそうじゃ！ちゃんとした証拠を見せろ！」

完全にしらを切っていた。

飛琳「証拠ならあるさ、実は彼女はあらかじめ会話を録音していたんだよ」

スッ　ポチッ！

飛琳が懐から取り出したボイスレコーダーのスイッチを入れると

『光魔「どんな手を使ってもいい、フランチェスカの奴らを明日の決勝戦では動けないようにしろ！」』

と、流れていた。

飛琳「これでもまだしらを切る気か？」

光魔「くっ！？」

実はこれは録音されたものではなく飛琳が森羅の話を聞いて声を変えてボイスレコーダーに吹き込んだだけである。

Ｄｒ．バイオス「おいアンタ！？どうするんだよ！？」

バイオスが動揺していると

光魔「フフフッ…」

光魔は笑いだして

光魔「その通りだよ！私は闇討ちを命じたのさ！役に立たない生徒のためにさ！」

光魔は狂ったように開き直った。

警備員「光魔さん、あなたを逮捕させていただきます」

ズラリッ！

そして光魔とバイオスの周りに警備員が囲んできた。

Ｄｒ．バイオス「どうするんじゃよ！？わしは監獄なんてごめんじゃぞ！？」

バイオスが慌てていると

光魔「愚問だな。なぜ私が監獄に入らなければならないのだ？」

Ｄｒ．バイオス「何でって！？これは重罪なんじゃぞわかっとるのか！この会場にいる全員がアンタが悪人だと証明するのじゃぞ！？」

光魔「なら簡単な話ではないか、この会場にいる人間を全て殺せば私が捕まることなぞあり得ん！バイオス、黒羽の血液をよこせ！早くだ」

Ｄｒ．バイオス「仕方ない、お前が捕まればわしも同罪じゃし、たのむぞ」

スッ

バイオスは光魔に血液入りの注射器を渡した。

飛琳「何をする気だ!?」

光魔「フフフッ!教えてやろうこれは弟の黒羽の血液だ。私達兄弟の血は少し変わっていてね」

ブスッ

光魔は注射器を自分に刺すと

光魔「片方の血液をもう片方に入れると闇の力を手に入れることができるんだよ!」

ゴゴゴッ…!!

そして光魔の姿は黒騎士のような姿に変わっていった。

光魔「これぞ兄弟融合『暗黒堕騎士(ダークネスナイト)光魔』だ!デスドラゴンナイツなんぞ私の力の研究のサンプルにすぎん!」

※注意　兄弟といっても違う血液型を入れた場合死にますので真似しないでください。ちなみに光魔と黒羽は血液型は違います。

光魔「ふんっ!」

バキンッ!

強化した光魔は転送装置を破壊した。

光魔「これで関ヶ原にいる連中はすぐには帰ってこれない!ここにいる奴等なんて私の敵ではない」

飛琳「おのれっ！」

ゴォッ！！

飛琳は怒りで紅蓮炎龍になろうとしたが

そのとき

シュンッ！

一刀「アイツが親玉か」

瞬間移動して一刀が帰ってきた。一刀はコロシアムから悪の気を感じていち早く帰ってきたのだ。

一刀「先生、悪いけどあいつの相手は俺にやらせてくれよ」

一刀が言うと

森羅「何をいってるんですか！？光魔さんは物凄い気を纏っているんですよ！？高二のあなたが勝てるわけ」

森羅は心配していうが

飛琳「やってきなさい北郷、自分の気がすむまでね」

一刀「サンキュー先生♪」

ダッ！

そして一刀は光魔の元に走っていった。

森羅「なぜ止めないんですか！？あなたは生徒が心配じゃないんですか！？」

森羅が叫ぶと

飛琳「あいつは心配するような人間じゃないんだよ。いつだって約束は守るような生徒だったからな。もし北郷が負けるようなことがあるならその時は責任として辞職する覚悟ですよ」

森羅は驚いていた。

今までこれほどまでに生徒を信頼する教師を森羅は見たことがなかったのだ。

ザッ

そして一刀は光魔の後ろに立つと

一刀「おいっ」

光魔「あんっ」

くるっ

光魔が振り向いた瞬間

ドグボッ！！

一刀の渾身の右ストレートが炸裂した。

一刀「生徒を道具としか見ていないお前だけは絶対に許さねぇぞ＃」

ゴゴゴッ…！！

一刀の怒りは限界を越えていた。

光魔「貴様、この総理である私を殴ってただですむと…」

光魔が最後まで言おうとすると

一刀「まずこれが」

スッ

一刀は拳を後ろに構えると

一刀「お前の命令で学園を襲撃され、病院送りになったみんなの怒りだ！＃」

ドドドーーッ！！

一刀は高速の拳の連打を光魔の腹めがけて殴りまくった。

光魔「ぐほっ！？」

バシャッ！

光魔は耐えきれずに腹の中のものを吐き出した。

これは決して光魔が弱いわけではなく怒りの一刀の力が強すぎるからである。

一刀「まだいくぜ！こいつは…」

スッ！

一刀は拳を後ろに構えると

一刀「この戦いでお前に利用された焔達の怒りの分だ！＃」

ドゴンッ！！ドゴンッ！！

一刀は重い一撃を十連発光魔に食らわした。

光魔「ぐべはっ！？」

この時点で身体中の骨は数本折れており、どんなすごい回復力があっても一ヶ月はかかるほどだった。

一刀「そして最後に…」

スッ！　ゴォッ！！

一刀はおもいっきり気を溜めて拳を後ろに構えた。

この一撃を食らうまいと思った光魔は

光魔「ま…待ってくれ！？私が悪かった！金なら望むがままやる！だから命だけは助けてくれ！命乞いする人を殴るなんて正義の味方のすることか！？」

光魔の必死の命乞いに一刀は

一刀「仕方がないな」

シュンッ

気の流れを止めると

光魔「バカめ！『闇魔の裁きの龍（デスドラゴンジャッジメント）』！」

ドゴォッ！！

光魔は不意打ちの攻撃を一刀に仕掛けた。

光魔「この技は光の気を持つお前には効果抜群でな！バカな奴め！今時あんな手にかかるとはな！ハッハッハッ！」

光魔は一刀を倒して大いに笑うが

一刀「そんなことだと思ったよ」

光魔「！？」

一刀は光魔の後ろにいた。

一刀「俺が瞬間移動できるのを忘れたの？」

一刀はあの一瞬の間に瞬間移動して攻撃を避けたのだった。

一刀「さてと、今ので一気にぶちキレたぜ！＃」

ドゴォッ！！

一刀はさっきよりも強く気を拳に溜め込んだ。むしろさっきのほうがましなくらいに！？

光魔「ま…待ってくれ！？今のはどうかしてたんだ！？だから助け…」

一刀「二度も同じ手がきくかよ！『聖俄龍光拳』！＃」

ドッカーーーンッ！！

一刀は渾身の一撃を光魔の顔面に炸裂させた。

光魔「グボベーッ！？」

ドシャンッ！

光魔の顔は元の顔がわからないくらい腫れてしまった。

一刀「今のは俺の怒りの分だ！それと、殺してないから安心しな」

一刀が光魔を殴ったあと、関ヶ原にいたみんなは転送装置の修理により帰ってきて、逃げようとしていたＤｒ．バイオスも捕まり、デスドラゴンナイツのみんなは事情聴取を受けることになった。

一刀「それにしても光魔の奴、なんでフランチェスカを憎んでいたんだろう？」

それについてはちゃんとした理由があった。

実は数年前の大会の時

決勝戦にてフランチェスカ学園大将の貂蝉と当時高１だった光魔が戦いをしていたのだが、あろうことに貂蝉は光魔の唇にキスをしてしまい、光魔は戦意喪失により敗北となり、学園からは責められ、当時付き合っていた彼女からもフラれてしまい悲惨な高校生活を送るはめになってしまいそれ以来貂蝉を憎むのだった。（そのことを貂蝉は忘れている）

一刀「まぁなにはともあれ一件落着だな！」

そうなればよかったのだがそうは問屋が下ろさなかった。

華琳「か～ず～と～＃」

一刀「んっ？」

後ろから華琳の声がしたので振り向いてみると

華琳「桃香から聞いたわよ、あなた女の色仕掛けに負けてギブアップしようとしていたんですってね＃」

どきっ！？

華琳がすごく怒っていた。しかも華琳だけではなく

蓮華「これは少しばかりお仕置きが必要ね＃　」

月「それくらい当然ですよね＃　」

桃香「覚悟してよね一刀くん＃　」

ゴゴゴッ…！！

蓮華達ものすごく怒っていた。

一刀「あの…あれはそのぅ…！？　」

桃香達『いいわけ無用！＃　』

ドガッ！バキッ！バシッ！ボコッ！ドゴッ！

一刀「ギャーッ！？　」

その後、桃香達からのお仕置きを受けた一刀は

試合よりも重傷を負ってしまいしばらくの間、入院するはめになったという。（ちなみに一刀の裏切り行為については桃香達の心の中に仕舞われたため露見されることはなかったという）

71時間目「鉄拳粉砕、野望を粉砕せよ！」（後書き）

愛紗「愛紗だ。久しぶりだな。武道大会も終結し、学園の勝利を祝うため全員で温泉旅行に出掛けたのだが…。次回、『ドキドキの温泉旅行』北郷、姉上（桃香）の入浴を覗いたら承知せんからな！」

72時間目「ドキドキの温泉旅行」（前書き）

一刀「大会が終わり、フランチェスカの勝利かと思われたが光魔が異議を唱え始めた。ところが飛琳先生が現れて光魔の不正を発表、追い詰められた光魔は真の力を出して皆殺しを企むが怒った俺にボコボコにされてしまい光魔の世界支配という野望を粉砕されたのだった」

72時間目「ドキドキの温泉旅行」

あの白熱した学園対抗武道大会から一週間後

一刀や入院していたみんなの怪我も治り、学園対抗武道大会優勝を記念して貂蝉が一泊二日の温泉旅行をプレゼントしてくれたのだった。（ちなみに副賞である望みは光魔がコロシアムをめちゃめちゃに壊したため少し遅れることになった。）

温泉に向かうバスの中

及川「えぇー、この度は学園の優勝とみんなの退院を祝って温泉旅行に来たわけやでー♪」

やけに及川が浮かれているのには理由があった。それは…

及川「（水中カメラに湯煙防止カバー、何でも揃えたから絶対に覗いたるで♪）」

１００％覗く気まんまんだった。

華琳「何だか約一名バカが張り切ってるようだけど気にしないようにしましょう」

蓮華「そうした方がよさそうね」

月「へぅ」

そして我らが主人公であり、大会の最優秀賞に輝いた北郷一刀はと

いうと

桃香「一刀くん、そこのお茶取って」

一刀「はいはい！？」

前回の追加のお仕置きで今日一日は桃香達の犬と化してしまった一刀だった。

そうこうしている間に

及川「おっ！温泉旅館が見えてきたで！」

温泉旅館が見えてきたようだ。

キラーンッ☆

そこはまるで高級ホテルのような外見であった。

于吉「（あんな豪華な場所で左慈と一日を過ごせるなんて♪）」

左慈「言っておくが俺は絶対お前とは違う部屋に入るからな！」

みんなは旅館の外見に浮かれていたが

貂蝉「何言ってるのよん、私達が泊まるのはあっちよん♪」

スッ

貂蝉が指差した先を見てみると

ボロ～ン

そこはまるで幽霊屋敷のようにボロボロだった。

華琳「ちょっと一刀！旅行資金等は生徒会長であるあなたが仕切っているはずよね！＃」

蓮華「それなのにどういうことよ！＃」

みんなが会長である一刀を責めてくると

一刀「何だか俺が入院している間に帳簿が塗り替えられたみたいで…！？」

実は一刀が入院している間に麗羽達がこっそりと帳簿を塗り替えていたのだ。（そのため麗羽達はこの場にはいない）

その頃、麗羽達は

麗羽「おーほっほっほっ！学園の皆さんはのんきに温泉、そしてわたくしは南の島でバカンスだなんてすごい差ですわねおーほっほっほっ！」

塗り替えた帳簿のお金を使って南の島でバカンスを過ごしていた。

斗詩「麗羽様、これがバレたら大変なことになっちゃいますよ！？」

猪々子「つ～か、１０月に南の島なんて雰囲気が合いませんよ」

忘れている人もいると思うが今の季節は１０月の秋である。

麗羽「お黙りなさい！せっかくあなた達を連れてきてあげましたのよ！感謝は言われても文句を言われる筋合いはありませんわ！」

斗詩「南の島なら五月にもグアムに来たのにね（ひそひそ）」

猪々子「あんときはアニキ（一刀）に誘われちまったから今度は自分で行きたかったんだろよ。しかも一人じゃ寂しいもんだからアタイ達を無理矢理誘ってさ（ひそひそ）」

二人がひそひそ話していると

麗羽「あなた達！それ以上話すとお仕置きですわよ！＃」

と、こんな日々を過ごしていた。

一方、温泉の一刀達は

最初は及川を含む男子達が騒いでいたが

女将「いらっしゃいませ、当旅館の女将であります岡見と申します」

仲居「仲居の中井と申します」

和服美人の女将と仲居を見たとたん

及川含む男子達『この旅館に決定！』

態度を１８０度変えた。

そして温泉旅行といえば

カポ～ン

一刀「やはり露天風呂だよな～」

左慈「戦いの疲れが癒えるぜ」

華佗「まったくだな～」

戦いの疲れを癒す三人

于吉「左慈、こっちに一緒に入れば友情が上がる風呂がありますから一緒に入りましょう♪」

左慈「テメェ一人で入りやがれ＃」

一方、女湯では

桃香「愛紗ちゃん、お風呂場に偃月刀持ち込んでどうしたの！？」

愛紗「なぁに、変態の北郷が覗きに来たときのためですよ！」

愛紗にとって一刀のイメージは最悪だった。

思春「しかし、北郷が覗かなくてもあの変態（及川）は必ず覗きに

来るだろうな　」

春蘭「もし来たら三枚に下ろしてやる！　」

恐ろしい会話が聞こえてくるが

華琳「それなら大丈夫よ、たとえ変態が覗こうとしても最強のガードマンが守ってくれるからね　」

愛紗・思春・春蘭『ガードマン？　』

一方、男湯では

及川「にしし、折り畳みはしごに湯煙遮断カメラ、仕込みはバッチリ！では、覗くで！　」

ダダッ！

まさに及川が女湯を覗こうと男湯と女湯の仕切りに向かうが

バンッ

一刀「そこまでだ及川！　」

及川の前に一刀が立ちはだかった。

及川「カズピー！？いったい何の真似やねん！？　」

一刀「お前に女湯を覗かせるわけにはいかないんだよ！　」

本来ならば一刀も覗く側の人間であるが、華琳達に命令されてガードマンをしているのだった。

及川「たとえカズピーが言ってもそれだけは聞けへんで！わいは絶対に覗くんや！」

シュンッ！

そして及川は普段よりも素早く走ってきた。

一刀「ならば天誅を下してやるまでだ！」

ブンッ！

一刀は及川に木刀を振るうが

サッ

普段の及川では避けることができない一刀の一撃を避けた。

及川「カズピーの動きは全部分かっとんや！絶対覗いたるで！」

人は欲望だけで強くなれるのだった。

一刀「絶対に覗かせはしないぜ！」

ブンッ！

一刀も少しずつ本気を出してきた。

女湯

ドタバタンッ！

鈴々「男湯から音が聞こえてくるのだ！？」

蓮華「どうやら変態が覗こうとしているのを一刀が防いでいるみたいね」

愛紗「（なんとっ！？私は北郷のことを誤解していたのかもしれないな）」

愛紗の一刀に対するイメージが少しは良くなった。

男湯

一刀「くそっ！？ちょこまか逃げやがって！？」

及川「へへ～ん♪カズピーなんて怖くないわい！」

さっきから及川は一刀の攻撃をことごとく避けていた。

調子にのる及川に対して

ブチンッ！

一刀「及川、もう手加減しないぞ＃」

一刀がぶちギレた。

スッ

そして一刀は構えて気を溜めると

一刀「『俄龍爆撃流星』！」

ドドドーーッ！

一刀は刀に最大の気を送り、龍の気を及川に放った。

及川「ひーっ！？」

ピューッ！

及川は技を食らうまいと必死で逃げ続ける。

ドカカカーッ！

及川が逃げる道を龍の気が追っているので次々と露天風呂が破壊されていく

そして

ドカッ！

及川「ぐはーっ！？」

ようやく技は及川に命中した。

一刀「ふんっ！天罰だ…」

そのとき

ゴゴゴッ…！！

一刀の攻撃に露天風呂の竹製の仕切りが耐えきれなくなり

バッコーンッ！

仕切りは崩壊した。

これにより男湯と女湯を遮るものが無くなり

バッタリ

一刀は女湯にいた女子達と対面した。（ほとんどの女子はタオルを巻いていなかった）

華琳「へぇ、まさかガードマンのあなたが覗くだなんてね＃」

愛紗「貴様、覚悟はいいだろうな＃」

ジャキンッ！

タオル一枚のどこに隠してあったのか？武力に自信のある者は武器を取り出した。

一刀「あのぅ、これは不可抗力では…！？」

ほぼ女子全員『問答無用ー！！＃』

ドガッ！バキッ！バシッ！ボコッ！ドゴッ！

一刀「ギャーッ！？」

その場にいた女子のほとんどからリンチを受ける一刀だった。ちなみに他の男子達は巻き沿いを食らうまいとして一刀と及川が戦っている間に風呂から出ていった。

しばらくして

旅館の外

ビューッ

一刀「さむっ！？」

一刀は旅館の外に放り出されていた。

一刀は覗いた罰として夕食禁止と朝まで旅館追放

及川は覗こうとした罰として夕食禁止となった。

一刀「毛布があるけど今夜は冷えるな！？」

一刀が少し震えていると

ガラッ

旅館の扉が開いて

月「大丈夫ですか？」

浴衣姿の月が現れた。

月「今夜は冷えるそうですからどうぞ」

スッ

月は一刀に暖かいお茶入りのポットを差し出した。

一刀「ありがとう月」

月「へぅ／／／」

そして月は旅館に戻ろうとするが

ガチンッ

月「あれっ？」

旅館の鍵がかけられていて中に入れなかった。

月「さっきまで開いてたのにおかしいな？」

トントンッ！

月は扉を叩くが誰にも聞こえなかった。

ビューッ！

月「へぅ！？」

ぶるっ

そして月が寒そうにしていると

スッ

一刀「毛布に入れば少しはましになるよ」

一刀は月に毛布に入るように言った。

月「へぅ！？／／／」

月は恥ずかしがっていたが仕方がないので入ることにした。

そして二人が毛布に入っていると

月「（この状態だけで熱いよ～／／／）」

ポ～ッ！！

月の顔は煮えた湯が入ったやかんのように真っ赤になった。

月「（でもこれはいいチャンスかもしれない！）」

くるっ

月は一刀の方に顔を向けると

月「一刀さん、私は入学式の次の日、はじめてあなたに出会ったときに胸が暑くなりました。それから一週間は授業を聞いても頭に入らないくらいでした。だから正直に言います。私はあなたのことが…／／／／」

月が勇気を出して告白しようとしたその時

一刀「ぐおーっ！」

一刀のいびきが聞こえた。

どうやら一刀は月が毛布に入ったときから眠ってしまったらしい。

これを知った月は

月「へぅ～／／／／」

ボンッ！！

顔が一気に茹で蛸のように真っ赤になると

月「でもいつか本当の告白をしますからね♪」

スッ

一刀の頭を自分の膝にのせて膝枕の体制にし、自分もそのまま寝てしまった。

その頃、扉のすぐ内側では

星「会長殿の鈍感には呆れますな」

弧狼「情けないぜ一刀！」

扉に鍵をかけた張本人である星と弧狼が立っていた。

そして翌日の朝

月を探しに来た詠によって一刀と月は見つかってしまい

詠「このバカチ○コーっ！＃」

ドカッ！！

詠におもいっきり蹴られる一刀だった。

72時間目「ドキドキの温泉旅行」（後書き）

華琳「華琳よ、大会優勝記念にみんなでビデオを撮ることになったの監督は私よ、そして主演はもちろん一刀♪あともう一人は…。次回、『華ざかりの君達へ美少女パラダイス』一刀、あなたの姿に期待してるわよ」

73時間目「華ざかりの君達へ美少女パラダイス」（前書き）

一刀「学園対抗武道大会から日が経ち、俺達は温泉旅行にやって来た。そして俺は温泉にて女湯を覗こうとする及川と戦い、覗きを阻止するが俺は女子達にボコられてしまう。そして罰として旅館を追い出された俺は朝まで月と一緒に玄関で眠るのだった」

73時間目「華ざかりの君達へ美少女パラダイス」

とある日のフランチェスカ学園

華琳「では、スタート！」

カチンッ

華琳がドラマや映画の撮影で使われるカチンコを鳴らすと

パァーッ

一刀「ここが俺…いや、私が今日から通うフランチェスカ学園か、この場所で今日から私の女としての生活が始まるんだわ♪」

そこには女装した一刀がいた。

こうなったのも数時間前に問題があった。

数時間前

全員『映画の撮影！？』

華琳「そうよ、うちのお父様が学園対抗武道大会で優勝した記念に映画会社を総動員させて映画を作ることになったのよ、そして監督・脚本は私で作ったのよ」

スッ

華琳はみんなに映画の台本を渡した。

一刀「何々…、『ある日主人公は走り高跳びの見学を見に行ったときに美しく高跳びをする少女を見つけて恋をする。しかし、少女は女子校に通っていたため少女と一緒にいたい主人公は仕方がなく女装をして学園に通う。タイトル「華ざかりの君達へ、美少女パラダイス」』一歩間違えたら変態のストーカーだな!?」

似たような内容のドラマがあることは伏せておこう。

華琳「もうキャストも決まってるのよ!桃香・蓮華・月は各組の級長。そして主人公の女装する男は一刀、あなたよ!」

ビシッ!

華琳の言葉に

一刀「えぇーっ!?」

一刀はすごく驚いた。

一刀「無理だって女装なんて!?」

一刀は断ろうとするが

華琳「あらっ、私の決めたキャストに文句を言う気?別に嫌なら構わないわよその代わり学園対抗武道大会での裏切…」

一刀「喜んで引き受けさせてもらいます!?」

しばらくは学園対抗武道大会での裏切りによって脅される一刀だった。

その他のキャストは

ヒロイン・恋
女子校学校医・華佗（もちろん女装）
ブロッサム学園の男子達・男子一同
寮で飼っている犬・及川

ちなみにヒロインが恋である理由は中学時代、恋は走り高跳びが得意で飛将軍と呼ばれていたからである。

ねね「恋殿をあのへぼ会長と一緒にさせるなんてねねが許しませんぞ！＃」

恋をヒロインにすることにねねがもう反対していたが

華琳「あらっ、ヒロインになれば可愛い衣装を着た恋が見られるのよ、見たくないの？」

ねね「うぅ…！？」

これにより仕方なくねねは折れるのだった。

一刀「（今のうちに帰った方がよさそうだな！？）」

そろ～り

みんなが騒いでいる間に一刀が逃げ出そうとしていると

沙和「逃がさないの～！」

ガシッ！

沙和に捕まってしまった。

沙和「沙和は今回のメイク係なの～、会長さんをとびっきり可愛い女の子にしてあげるの～♪」

ずるずるっ

一刀「あぁ！？お願いだからやめてくれ！？」

バタンッ

一刀が沙和に引きずられて部屋に入ると

一刀「いやーっ！？」

部屋の中から一刀の叫び声が聞こえてきた。

数時間後

ガチャリッ

部屋の扉が開くと

沙和「自分でも驚きの最高傑作ができたの～！？」

疲れきった沙和が出てきた。

沙和「ほらっ！会長さんも観念して出てくるの！」

ぐいっ

そして沙和に引っ張られた一刀が部屋から出てくると

パァーッ

男子達『おぉーっ！！／／／／』

そこには美少女に変身した一刀がいた。

一刀の女装姿におもわず顔が赤くなる男子達

一刀「うぅ…、こんな姿を見られたらお婿にいけねぇよ」

そして一刀はガックリとうなだれていた。

華琳「大丈夫よ一刀、私がもらってあげるから」

ポンッ

華琳が一刀の肩に手をおきながら言うと

桃香「華琳さんずるい！私だってもらってあげるからね！」

蓮華「私だって！」

月「へぇ、私ももらってあげます！」

バチバチッ

四人の火花が飛び散るなか

一刀「さっさと撮影しようぜ」

撮影が開始された。

そして

華琳「それではシーン1、一刀が学園の門に入るシーンからよ」

そして

一刀「今日から俺の…」

華琳「カット！一刀、あなたは今女装しているのよ！俺じゃなくて私！心を女にしてもっとかわいく言いなさい！」

そして

一刀「今日から私の女としての生活が始まるんだわ♪」

と、いうわけである。

その後も撮影は進み、

華佗「どうして男がこの学園にいるのかしらん？」

桃香「女の子を好きになった私って変なの？」

及川「バゥバゥッ！」

そして撮影は終盤に

華琳「それじゃあ最後のシーン、一刀の正体が学園にバレたのを恋が庇うところよ！」

そして

蓮華「わかってるのよ！あなたの正体が男だってことはね！」

月「この変態っ！」

みんなに責められる主人公

一刀「仕方がないわ、もうこの学園を去るしかないな」

パサッ

一刀はカツラを脱いで去ろうとすると

恋「…ダメ！行かないで！」

ギュッ

一刀の腕をつかむ恋

一刀「俺は男なんだぜ。女子校に通う男なんて変態だろう」

一刀が言うと

恋「（ふるふるっ）…変じゃない。実はあなたの正体を知っててみんなに話さなかった。だってあなたのことが好きなんだから！あなたが去るなら私も学園を去る！」

そして

一刀「ありがとう、俺も君が好きだよ」

恋「…ありがとう」

ジャーンッ

クライマックスに入って撮影は幕を閉じたのだが

華琳・桃香・蓮華・月『（ぽぉ～～／／／）』

一刀の告白シーンにおもわず顔を赤くする四人だった。

そして撮影終了後

華琳「じゃあ、みんなこの映画が公開されるのを楽しみに待っててね♪」

一刀「えぇーっ!?公開されるのかよ!?」

一刀が驚くと

華琳「もちろん全国の映画館で上映するわよ♪」

一刀「やめてくれ～!?」

そして数日後、一刀の願いもむなしく映画は公開された。（もちろんキャストはふせてある）

そして映画の最後には

※この映画は実際の学園・人物が使われています

と、テロップが新しく付け加えられていた。

そして映画公開数日後

がやがや

学園には多くの人が集まっていた。

桃香「これってみんな私達を撮りにきた人かな?」

みんなは校舎の窓から人だかりを見ていた。

月「へぅ～、なんだかスターになった気分です～／／／」

しかし人だかりの原因は桃香達を撮るためではなく

人「主人公役の娘ってどの娘かな？」

人「あれだけの美貌ならものすごい美少女に違いないぜ」

人だかりの原因は女装した一刀を撮るためであった。

華琳「一刀、女装して挨拶してきなさい！」

一刀「断る！もう女装なんてしないからな！」

そしてしばらくの間、学園に謎の美少女が現れたという噂が流れるのだった。

73時間目「華ざかりの君達へ美少女パラダイス」（後書き）

一刀「ぼくは誰だ？自分がどこの誰なのかも思い出せない！？そして唯一覚えていることといえば、次回、『一刀、記憶喪失になる』ぼくは一体誰なんだー！？」

74時間目「一刀、記憶喪失になる」（前書き）

一刀「華琳の父親の提案で映画を撮ることになった俺達、しかし主演となった俺は無理矢理女装をさせられてしまう。そして無事に撮影が終わり、公開数日後女装した俺を探しにたくさんの人が学園に押し寄せてくるのであった」

74時間目「一刀、記憶喪失になる」

ダダッ…

一刀「くっそー！まさか目覚ましが壊れて寝坊するなんて、やっぱり昨日の夜遅くまで深夜番組見るんじゃなかったぜ遅刻しちまう！」

一刀は遅刻を何とか避けるために猛スピードで走っていると

ビュンッ！

女「きゃっ／／／」

ひらりっ

一刀「うほっ／／／」

女の人とすれ違って一刀が走っていたことにより舞い上がったスカートの中を一刀が覗いたとき

カツンッ

一刀「えっ」

一刀は石に躓いて（つまずいて）しまい、そして

ププーッ！

一刀「うわーっ！？」

ドガチャーンッ！

歩道に出てしまった一刀は頭からトラックに衝突してしまった。

ガチャリッ

運転手「大変だ、人をはねちまった！？」

運転手があわてて降りてくる。普通ならば即死のはずだが

一刀「う～ん…」

日頃鍛え、愛紗や華琳達にボコボコにされ慣れている一刀にとって今さらへでもなかった。

運転手「どうやら生きているらしいが大丈夫か」

運転手が一刀に聞いてみると

一刀「ここはどこ？僕は誰？」

一刀は記憶喪失になっていた。

そして数時間後、フランチェスカ学園

卑弥呼「北郷は遅刻であるな」

一刀は遅刻扱いになってしまった。

及川「カズピー昨日夜中までテレビ見とったからな絶対寝坊やで」

及川達がそんな話をしていると

ガラリッ

教室の扉が開いて

警察官「あのぅ、すみません…」

警察官が顔を出してきた。

卑弥呼「何ですかのう？」

ヌッ

そして卑弥呼がいきなり警察官に顔を出すと

警察官「わーっ！？怪物だーっ」

ドキュドキュンッ！

警察官は卑弥呼にむかっていきなり発砲してきた。

卑弥呼「いきなり何をするんじゃ＃」

ガツンッ！

そして卑弥呼が警察官を殴ると

警察官「すみません、いきなり恐ろしいものが現れたのでつい…」

気持ちはわかるかもしれないがやりすぎである。

卑弥呼「それで警察官が何の用じゃ？」

卑弥呼が本題を聞くと

警察官「そうでした！？あのぅ、御宅の学園に北郷一刀という生徒はいますか？」

卑弥呼「北郷ならうちの生徒じゃが、何かあったのか？」

卑弥呼が聞くと

及川「まさかカズピーの奴、女子校を荒らしたんか！？それとも銭湯の女湯を覗いたんか！？それとも…」

警察官「違いますよ。実は…」

警察官が最後まで言おうとすると

一刀「お巡りさん、ここはどこですか？」

ひょこっ

警察官の後ろから一刀が出てきた。

卑弥呼「なんじゃ北郷、遅刻じゃぞ」

ヌッ

そして卑弥呼が一刀の前に顔を出すと

一刀「うわーっ!?化け物だーっ!?」

ズザザーッ

一刀は後ずさりをしていった。

卑弥呼「化け物じゃと…」

見ず知らずの警察官ならともかく教え子の一刀にまで化け物呼ばわりされてさすがの卑弥呼もショックを受けていた。

卑弥呼「今日は我輩の心が傷ついたので自習とする」

そしてまた、授業がつぶれた漢組であった。

及川「カズピー何だかわからへんけどナイスやで!」

ポンッ

及川が一刀の肩に手を置くと

一刀「カズピー?それが僕の名前なんですか?」

及川「僕?何言ってんねんカズピー、いつも俺って言ってるやんけ気持ち悪いで」

一刀「そうなんですか？」

そんな一刀を不思議に思ったが

華佗「もしかして一刀、お前…」

華佗が一刀の異変に気づいた。

数分後

男子全員『記憶喪失～！？』

華佗「あぁ、一刀の症状からして間違いないだろうな」

左慈「それでもとに戻す方法はないのか？」

華佗「記憶喪失を失った原因と同じくらいのショックを与えればいいはずなのだが、一刀がどんなショックをうけたのかがわからないからな」

さすがの華佗もまさかトラックに衝突したなんてわかるはずがなかった。

及川「まてよ、今のカズピーはもはや伝えれば鵜呑みにするような存在、ということは…」

スッ

及川は一刀の前に立つと

及川「カズピー！アンタはイケメン王子こと、及川祐様の子分やったんや！それはもう忠義な態度で…」

及川はでたらめを言いまくるが

一刀「すみません。どうも僕の記憶にはそんな思い出はないような気がするんですが」

そういうことは覚えている一刀だった。

左慈「安心しろ、こいつが言ったことはすべて嘘だ」

于吉「ホントは私と左慈の恋のキューピッド…」

ドグボッ！！

左慈「テメェも記憶喪失になっちまえ！＃」

于吉「たとえそうなっても左慈のことは絶対忘れませんからね。ゲフンッ」

華佗「やれやれ」

そして一刀が記憶喪失になったということは学園中に広まっていった。

漢組

桃香「一刀くん、記録喪失になったってホントなの!?」

華佗「桃香、記録(きろく)喪失じゃなくて記憶(きおく)喪失だからな」

一刀「えぇと、君は?」

一刀が聞くと

桃香「私の名前は桃香だよ!一刀くんホントに私のこと忘れちゃったの!?」

一刀「そのようなんだ。ごめんなさい」

一刀が謝ると

桃香「一刀くん、私のことが大好きですって言ったことも、私と結婚式を挙げますって言ったことも忘れちゃったの!?」

一刀「う…うん」

※桃香の言っていることは嘘です。

桃香「じゃあ、私のおっぱい見ちゃったことも!」

一刀「君のおっぱい…」

モワ~

一刀が妄想しようとすると

愛紗「姉上の変な姿を想像するでない！＃」

バキンッ！

一刀は愛紗に殴られた。※ちなみにホントに一刀は桃香のおっぱいを目撃しています。

そしてその後も

剣崎「一刀は私の彼氏になるって言ったよ！」

剣崎美紀…夏に転校してきた一刀の幼なじみ。確かに約束はしたが一刀は話を聞いていなかったため本人は彼女のつもりである。

桂花「あんたなんて全身精液男よ！」

霞「アンタはなかなか面白い奴やったで♪」

ここで一刀がみんなの話を整理してみると

一刀「えぇと、つまり僕の名前は北郷一刀で、学園のほぼ全員を彼女にしていて、面白い全身精液へぼ会長バカチ○コ男でエッチな男であると…」

みんなの意見を繋げるとそうなってしまった。

華佗「落ち着け一刀、ほとんどが嘘だからな」

そして華佗に言われた一刀は

一刀「あぁもうっ！さっきから君達の言っていることは嘘ばかり、僕は誰の意見を信じればいいんだ！？」

ダッ！

そして一刀は教室を飛び出していった。

桃香「待ってよ一刀くん」

華琳「止まりなさいよ一刀」

蓮華「一刀」

ドドドーッ！！

そしてみんなは一刀のあとを追う

一刀「嫌だ！嫌だ！もう嘘だらけの情報なんてうんざりだ！」

ダダダッ！

一刀は夢中で屋上に向かう階段を駆け上がる。

月「あの～、確か屋上は改装工事中で立入禁止だったのでは？」

全員『あっ！？』

今ごろ全員がそのことに気づいた。

華琳「一刀止まりなさい！　」

蓮華「その先は立入禁止よ！　」

みんなは必死に叫ぶが

一刀「嘘だ～！！　」

一刀は聞く耳をもっていなかった。

そしてついに

ガチャリッ

一刀が屋上の扉を開けて進もうとすると

スカッ

足元に地面はなく

ひゅーーっ！

一刀「うわーっ！？　」

一刀はそのまま落下していった。（ちなみにフランチェスカ学園は四階建てである）

華琳「一刀！？　」

蓮華「遅かったか　」

華琳達が屋上にたどり着いた時には

ズッシーーンッ！！

一刀は頭から地面に激突していた。

月「一刀さん！？　」

桃香「一刀くん！？　」

トタターッ！

そして桃香達が落下した一刀に近寄ると

一刀「う～ん、いたた…　」

一刀が目を覚まし、

一刀「ここは学園じゃないか俺はいつたどり着いたんだ！？　」

記憶喪失が治っていた。

桃香「よかった記録喪失が治ったんだね　」

華琳「桃香、記憶喪失よ　」

ダダッ！

そして華佗が一刀に近寄ると

華佗「そういえば一刀、最後に見たものを覚えているか？」

華佗が後述のためにどれ程のショックで記憶喪失になったのかを聞いてみると

一刀「確か…トラックに頭から衝突して…」

普通の人間ならば即死である。

一刀「その前にパンテ…」

一刀が最後まで言おうとすると

桃香・華琳・蓮華・月『パンテ…！＃』

そこには桃香達が凶器を持って睨んでいた。

恐らく一刀が見たものが何なのかわかったのだろう。

華琳「一刀、あなたは最後に何を見たのかしら？＃」

蓮華「そんなものに気をとられて記憶喪失になるなんてね＃」

桃香「私達すっごく心配したのに～＃」

そして一刀は

一刀「パンティングを見たんだよ！？」

誤魔化すことにしたが

華琳「誤魔化されると思ってるの＃」

蓮華「一刀のバカー！＃」

桃香「そもそもパンティングって何ですか！＃」

ドガバキッ！

一刀「ぎゃーっ！」

桃香達にボコられてしまう一刀だった。

そして後日、

一刀「ここはどこ？僕は誰？」

ボコられすぎたショックで再び記憶喪失になる一刀だった。

74時間目「一刀、記憶喪失になる」（後書き）

麗羽「おーほっほっほ！わたくしは誇り高き袁家の麗羽ですわよ。今日はクリスマスの日、学園の皆さんを呼んでうちで豪華パーティーを開きますわよ。ブ男さんはどうするかって？あんなブ男をうちに入れるわけが…いやまてよ、いいことを考えましたわよ！次回、『壮絶クリスマスパーティー』おーほっほっほ！ブ男さん覚悟しなさい」

75時間目「壮絶クリスマスパーティー」（前書き）

一刀「ある日、俺は遅刻しそうになり駆け出しまくったところよそ見をしてしまいトラックに頭から突っ込んでしまった。何とか怪我はなかったものの、俺は記憶喪失になってしまった。学園に着いてみんなから俺に関する情報を教えてもらうが嘘ばかりだったため耐えきれず俺は屋上に逃げ出した。しかし、屋上は工事中だったため屋上から落下した俺は記憶を取り戻したがその後、華琳達にボコボコにされるのだった」

75時間目「壮絶クリスマスパーティー」

この小説内の月日が経つのは早く、季節は12月の冬を迎えた。

そして12月のイベントといえばもちろん…

麗羽の実家・袁紹邸

全員『メリークリスマス！』

この日は生徒と教師全員が麗羽に呼び出されてクリスマスパーティーを開いていた。

そしてもちろん…

ガツガツッ！

及川「食い溜めやー！こんなご馳走二度と食えへんでー！」

一刀「これは真空パックに入れておけば3日は持つな」

漢組の一刀達も呼ばれていた。

そして

パッ　パッ！

急に電気が切れて再びつくと

麗羽「おーほっほっほ！皆さんわたくしの開いたクリスマスパーティーに来てくださってようこそですわ！」

舞台には金ぴかドレスを着た麗羽が立っていた。

華琳「相変わらず趣味悪いわね」

麗羽「お黙りなさい！華琳さん！＃さてと、それでは本題に入りまして今日は皆さんとゲームをしようとおもいましてね」

全員『ゲーム？』

会場の麗羽達以外の全員が？を浮かべた。

麗羽「ルールは簡単！この家全部を使って男女一組で双六大会を開きますわよ！賞品は入口にて皆さんから預かったクリスマスプレゼントを早い人から順に自由に一つずつ貰えますわ！」

ぴくんっ！

麗羽のこの一言にほとんどの人が反応した。

桃香「（一番になれば一刀くんのプレゼントが貰える！）」

桂花「（華琳様のプレゼントは私のものよ！）」

及川「（フランチェスカには金持ち多いから豪華なプレゼント獲得したる！）」

ゴォッ！！

ほとんどの人が燃えるのだった。

麗羽「なお、時間制限がありまして夜9時までに誰もゴールにたどり着けなかった場合、プレゼントは全部わたくしが貰いますわ！それでは男女のくじ引きを始めますわよ！」

ちなみに今は夜6時である。初めから麗羽はプレゼントを全部奪う気でいたのだが

華琳「この完璧人間である私が双六ごときお遊びなんて簡単よ！」

焔耶「桃香様のプレゼントは私のものだー！」

華佗「何だか知らんが俺も燃えるぜ！」

ほとんどが聞いていなかった。

そして組分けのくじ引きが開始されたのだが

一刀「…」

愛紗「なんで私がこんな奴と一緒なんだ！＃」

一刀・愛紗組

桂花「私だってこんな変態お断りよ！＃」

及川「ワイかて巨乳ちゃんの方がいいわい！＃」

桂花・及川組

穏「よろしくです～♪」

于吉「共に頑張りますかね」

穏・于吉組

弧狼「プレゼントは俺がいただくぜ！」

星「（楽にプレゼントがいただけて）頼もしいですな～」

弧狼・星組

蒼魔「俺はくじ運がないのか！？」

美以「にゃっ？」

蒼魔・美以組

等々と決まっていった。

桃香「（愛紗ちゃんが一刀くんと一緒だなんてズルい！）こんなの無効ですよ！」

華琳「（いくら愛紗でも一刀と組むのは許さないわ！）そうよ！もう一度やりましょうよ！」

各人が再度くじ引きするよう騒ぐが

麗羽「くじ引きは公平ですわよ！それに早くしないと9時になりますわよ」

バッ

その言葉を聞いて全員が時計を見てみると時間はすでに7時前であった。

麗羽「サイコロの順番はありませんからお早めに…」

麗羽が言い終わる前に

ドドォーーッ！

全員が双六を始め出した。

猪々子「なぁ斗詩、今日の麗羽様はいつもの麗羽様と違うな（ひそひそ）」

斗詩「ホントだね文ちゃん、いつもならわざと長引かせてプレゼントを強奪するのにね（ひそひそ）」

確かに麗羽ならそうしたであろう、しかしやらなかったのには理由があったのだ。

麗羽「（おーほっほっほ！指令で慌てる皆さんの顔が見られるなんて愉快ですわ♪しかもわたくしが最も嫌うブ男さんを痛い目にあわせるチャンスですしね。それを見ずにタイムオーバーなんてさせませんわ！）」

これが麗羽のねらいだったのだ。

愛紗「仕方がない！さっさと終わらせるからな」

一刀「う…うん」

じと～

一刀は愛紗を見つめていた。

一刀「（この小説が始まって以来俺は彼女にボコられ続けていたから怖いイメージしか頭にないけど）…」

ボコられてしまう原因はほとんどが事故なのだが

ボイーンッ　むっちーんっ

一刀「（桃香の義姉妹だけあってスタイルいいよ…）」

一刀がエッチな顔をしていると

ガスンッ！

愛紗「スケベな顔をするでない！バカたれが！＃」

一刀「心の中で思ってたのにあなたは読心術でも使えるんですか！？」

バタンッ

愛紗「まったく！」

コロリッ

愛紗はサイコロを転がすと

愛紗「3か。それで指令は？」

『相方の男を三回殴る』

愛紗「すまない！これも指令なのだ！」

ドカッドカッドカッ！

一刀「ぐえーっ！？」

口ではこう言っているが半分今までの恨みを込めて殴る愛紗だった。

そして他の方でも

『互いに相手の悪口を言う』

桂花「超絶馬鹿変態全身精液白濁男！＃」

及川「猫耳貧乳毒舌ドMチビ女！＃」

※桂花ファンの人にはすみません

『互いに趣味を話し合う』

于吉「私は左慈に対する研究ですね。その日何を食べたのか、何回トイレに行ったのかを毎日記録してますよ」

穏「穏は本読みですね～。この間読んだ本なんてページをめくるたびに体がドキドキしちゃって～」

『コスプレして双六を続ける』

星「華蝶仮面見参！」

弧狼「仮面ライダーでいっ！」

『相方と服を入れ換える』

蒼魔「ふざけるなー！」

美以「男の服って初めて着るにゃ～♪」

そしてどんどん時間は過ぎていき

現在・８時半（終了まで３０分）

愛紗「よしっ！ゴールまで残り６マスとなったな」

現在トップは一刀・愛紗組である。

そして愛紗が後ろを見ると

一刀「あぁ、そうだな…」

ボロリッ

顔を腫れ上がらせた一刀がそこにいた。

なぜこうなったのかというと、一刀達が止まった指令が全て『相方を殴る』だったのだ。当然一刀が愛紗を殴れるはずがなく、毎回愛紗が一刀を殴っていたのだ。

愛紗「すまなかったな、今すぐ終わりにしてやるから」

コロリッ

愛紗はサイコロを転がすと

ピタリッ

惜しくもサイコロは5で止まってしまった。（つまりゴールの一歩手前）

愛紗「（まぁいい、次で決めるとするか）それで指令は？」

愛紗が指令を見てみると

『巨大ロボ０８Ｕ２９ＣＭａｒｋ？（レイハウツクシーマークツー）と戦って勝つ（負けたらスタートに戻る）』

愛紗「なんだこれは？」

愛紗が頭に？を浮かべていると

ゴゴゴッ…！！

ガタンガタンッ！

いきなり壁が開いて

ジャッキーン！！

中から巨大ロボが現れた。

麗羽「（最後から５マスまでは全て同じことが書かれてますのよ！）おーほっほっほ！このロボは前に破壊された０８Ｕ２９Ｃを改良したスーパーロボットですわよ！」

※０８Ｕ２９Ｃについては１８話を参照

麗羽「さぁタイムリミットまであと２０分ですわ！０８Ｕ２９Ｃ、やっておしまい！」

ウィーンッ！

０８Ｕ２９Ｃが麗羽の命令で起動し、一刀と愛紗に襲いかかる。

しかし

ピタリッ

突然０８Ｕ２９Ｃの動きが止まった。

と、いうのも

一刀「あれっ？確かこいつは半年前くらいに破壊したロボットだったな」

０８Ｕ２９Ｃのコンピューターに以前一刀に破壊されたトラウマが残っており一刀に恐れを抱いているのだ。

麗羽「何してますのこのポンコツロボ！さっさと北郷を倒しなさいなこの馬鹿っ！＃」

ポイッ　ガチャンッ！

麗羽はカップを０８Ｕ２９Ｃにぶつける。

その時、

ガガガッ…

カップに入っていたお茶がかかっておかしくなったのか、麗羽に怒りを感じたのかはわからないが

ガピーッ！　プシューッ

０８Ｕ２９Ｃは頭から煙を噴き出して暴走した。

華琳「ちょっと麗羽！これはどういうことよ！？」

麗羽「わたくしは知りませんわよ！？あのガラクタが…」

ドカンッ！　バキンッ！

０８Ｕ２９Ｃは家まで無差別に破壊し出した。

桂花「こういう状況じゃあ双六大会どころじゃないわよ」

及川「賛成！逃げるで」

ダダッ！

そしてみんなは逃げ出していった。

しかし

愛紗「くっ！？」

愛紗は逃げる時に足をくじいてしまい動けずにいた。

ブォンッ！！

そこへ０８Ｕ２９Ｃの足が容赦なく襲いかかる。

愛紗「（もはやこれまでか！？）」

愛紗が諦めて目を閉じたその時、

ガバッ！

愛紗「（えっ／／／）　」

愛紗の体が宙に浮き、愛紗がおそるおそる目を開いてみると

一刀「逃げるぞ　」

愛紗「なっ！？／／／　」

一刀が愛紗をお姫様抱っこで抱えていた。

一刀「ボコるのなら後でボコられるから今は逃げるが勝ちだ！　」

ぴゅーっ！！

そして一刀は愛紗を抱えたままみんなのいる場所に走っていった。

愛紗「（何故なんだ？こいつに抱えられているというのに嫌な気を感じないのは何故なんだ？／／／）　」

愛紗は一刀に抱えられたまま不思議な気持ちを抱いていた。

そして一刀達がみんなのところにたどり着くと

華琳「真桜、あぁいうタイプのロボットに弱点はないの？　」

真桜「そうやなぁ、確か弱点は頭やったはずや！脳天にガツンと一発かましたら動きが止まるはずやで！　」

真桜が言い終わると

一刀「分かった！なら俺がいってやるぜ！」

ダダッ！

一刀は０８Ｕ２９Ｃめがけて走り出していった。

そして

ダッ！　トンッ！

高く跳んで０８Ｕ２９Ｃの上に乗ると

一刀「『俄龍流星撃滅』！」

ザクッ！

一刀は０８Ｕ２９Ｃの脳天に剣を突き刺した。ところがこれで終わりではなかった。

０８Ｕ２９Ｃ『ピーッ！ダメージ８０％、自爆装置作動します』

一刀「へっ？」

何故か急に自爆装置が作動してしまった。

麗羽「おーほっほっほ！０８Ｕ２９ＣＭａｒｋ？は敵にやられると自動で十秒後に自爆装置が作動するよう改良しましたのよ」

余計なことを！

一刀「みんな、急いで逃げるんだ！？」

一刀に言われるまでもなく

全員『わーっ！？』

全員が出口めがけて走り出していった。

一刀「さて、俺はっと」

一刀は逃げずに屋敷の中をさまよっていた。そしてあっという間に十秒が経ち、

ドッカーンッ！！

０８Ｕ２９Ｃは自爆し、麗羽の家は破壊された。

及川「なんとか間に合ったようやな！？」

桂花「私達助かったのね！？」

ところが

桃香「ねぇ一刀くんは？」

その場に一刀の姿はなかった。

蓮華「まさかまだ家の中に！？」

華琳「ちょっと麗羽！どうしてくれるのよ！＃　」

華琳は麗羽に怒鳴るが

麗羽「わたくしの家が…！？これが海外にいるお母様にバレたら…　」

すでに麗羽は魂が抜けていた。

愛紗「（くっ！北郷をみすみす死なせるなんて！私はなんて弱いんだ！）　」

愛紗が自分の弱さを責めたその時

一刀「俺は大丈夫だよみんな　」

上空から一刀の声が聞こえ、見上げてみると

一刀「ただいま♪　」

ジャンッ

そこには聖騎士光龍と化した一刀が浮いていた。

スッ

そして一刀が降りてくると

一刀「あの後、とっさに超進化してプレゼントが置かれた部屋まで行った後、瞬間移動して帰ってきたのさ。ほらっプレゼントは無事

だよ　」

バラリッ

一刀はみんなに無事な姿のプレゼントを見せた。

桃香「一刀くん、助かってよかったよ～　」

バッ

桃香が一刀に抱きつこうとするが

パシンッ

愛紗が先に一刀にたどり着いて一刀に平手打ちを食らわした。

愛紗「姉上に心配をかけるなこの馬鹿者が！　」

ポロリッ

だが、そんな愛紗の目からかすかに涙が流れていた。

一刀「ごめん…心配かけて　」

一刀が謝ると

愛紗「私の方こそ殴ってすまなかったな　」

愛紗も謝るのだった。

鈴々「そんなことより9時前に戦いが終わったからプレゼントをもらうのだ～♪」

ちなみに今は8時55分である。

こうしてプレゼントを分け合い、クリスマスパーティーは終了したのだった。

ちなみに一刀がもらったプレゼントは

一刀「研ぎ石？」

愛紗からのプレゼントだったというのは内緒の話である。

75時間目「壮絶クリスマスパーティー」（後書き）

璃々「璃々だよ～♪あのね大晦日なのにお母さんは職員忘年会に行っちゃって璃々は学園でお兄ちゃん（一刀）と二人っきりなんだ。だけど色々あって二人で年越しパーティーすることになって璃々は嬉しいな♪次回、『大晦日の夜・学園編』お兄ちゃん来年もよろしくね♪」

76時間目「大晦日の夜・学園編」（前書き）

一刀「麗羽の家のクリスマスパーティーに呼ばれ、プレゼント争奪双六大会が開かれた。俺はいつもボコられている愛紗と組むことになってしまった。そして時は進み、ゴール目前の指令で麗羽ロボットが現れ暴走しだした。そこで俺は暴走ロボットを止め、プレゼントを無事に守るのだった」

76時間目「大晦日の夜・学園編」

クリスマスから数日後、世間では大晦日になり、フランチェスカでもクリスマス後から冬休みにはいった。

そして現在、学園には実家に帰っても爺さんしかいないため会計整理に来た生徒会長の一刀と教師による忘年会に行くからといって保険医の紫苑先生が預けていった娘の璃々がいた。

一刀「これで会計整理がやっと終わったぜ」

夜遅くかかって一刀はようやく仕事を終わらせた。（ちなみに前会長である麗羽は猪々子と斗詩に全て任していた。）

一刀「さてと、仕事も終わったし璃々ちゃん、俺の部屋に戻ろうか」

すると一刀の近くでお絵描きしていた副会長である璃々は

璃々「うんっ♪お兄ちゃん♪」

ぎゅっ

喜んで抱きつくのだった。

ちなみに他のみんなは帰省だったり、修行だったりでみんな出掛けている。そのため寮には一刀しかいないのだ。

そして一刀が璃々の手を繋ぎながら男子寮に来ると

配達員「北郷さんいますか？」

男子寮の前で一刀の名を叫ぶ配達員を見かけた。

一刀「北郷なら俺ですけど何か用ですか？」

配達員「あなたが北郷さんですか。大阪と鹿児島から荷物が送られてますので判子か拇印(ぼいん)をお願いします」

一刀「わかりました」

スッ　　ポンッ

一刀は懐から判子を取り出して押すと

配達員「ありがとうございました」

タタッ！

配達員は荷物を渡して去っていった。

璃々「誰からなの～？中身はなぁに？」

一刀「ちょっと待っててね、え～と送り主は？」

一刀が荷物を見てみると手紙が付いていた。

『一刀へ、大会での活躍見事じゃったぞ！わしも近所では鼻が高く

なったわい♪頑張った褒美として蟹や海老を送るから食べなさい。
　仮野切子（一刀の母方の母・一刀の祖母）』

『一刀へ、見事に光龍を扱えるようになったそうじゃないか！まぁ俺の孫なら当然だろうがな。だが光龍を扱えるようになったからといって鍛練を怠慢するでないぞ！褒美として最高の肉を送るので力をつけるがよい。たまにはうちに来ておくれ！　翠川優神（一刀の父方の父・一刀の祖父）』

そして箱の中にはたくさんの海鮮や肉がぎっしりと詰められていた。

璃々「すっごーい！蟹さんやお肉が一杯だ～！これってみんな食べていいの？　」

一刀「別に構わないけれど、そうだお野菜を買ってきて鍋パーティーしよっか？　」

璃々「お鍋！食べた～い♪　　」

そして一刀達は商店街にて野菜やジュースを購入し、学園に一旦戻るのだった。

学園内・講堂

ポチッ

ガガガッ

講堂はすでにカラクリ好きな飛琳先生によって改造されていた。

ガシンッ

それはボタンを押すと鍋セットが出てくる仕掛けだった。

一刀「さてと、鍋スープのもとを入れてあらかじめ切っておいた肉や野菜等を入れて蓋を閉めれば完成だな」

※西森は料理の素人です。調理法が間違っているぞというツッコミは勘弁してください。

一刀「それじゃあ少し早いけど…」

トクトクッ

一刀はコップにジュースを入れると

一刀「年越しパーティー開始だ～！」

璃々「おぉ～！」

カツンッ

一刀は璃々ちゃんと乾杯するのだった。（午後8時）

数時間後（午後9時）

ひょこっ

学園の門の前に人影が現れた。

桃香「えへへ～、一刀くんが残ってるって聞いたから来ちゃった♪
お母さんは同級生と忘年会でいないし、一刀くんはライバル多いから先手を打たないとね♪」

愛紗「まったくもうっ姉上は」

鈴々「鈴々はお兄ちゃんに会えるから嬉しいのだ♪」

桃香達は門を通り抜けて生徒会長室に向かおうとしていると

蓮華「あら」

華琳「桃香達も来たのね」

月「へぅ…」

ズコッ

先に華琳達も来ていたことに桃香は驚いてずっこけた。

桃香「あはは…みんな考えることは一緒のようですね」

蓮華「そのようだな」

華琳「では生徒会長室に向かおうかしら」

そしてこの場にいた全員が生徒会長室に行こうとした時

ぴくんっ

恋の頭の食べ物センサーが反応した。

恋「…会長室ちがう、講堂の方」

ビシッ

恋が講堂を指差すと

鈴々「ホントだ講堂の明かりがついているのだ」

思春「もしかして北郷がいるかもしれぬな」

華琳「そうだと分かれば行き先変更！講堂に行くわよ！」

講堂

璃々「お兄ちゃん蟹さんおいしいね♪」

一刀「そうだねさすがは俺の婆ちゃんだよ爺さんとは大違いだ」

鹿児島の北郷家

刃「へっくし！誰かわしの悪口言ってるのかのぅ？」

一刀の母方の父（一刀の祖父）・刃が大きなくしゃみをした。

講堂

一刀「璃々ちゃん海老さん食べさしてあげるからアーンして」

璃々「うんっ！アーン」

璃々が大きく口を開けて一刀がその口に海老を放り投げようとすると

パクっ

突然、恋が現れて一刀の手ごと海老を食べてしまった。

一刀「って恋!?」

恋「…（もぐもぐ）璃々だけずるい恋にもアーンして」

一刀が恋の存在に驚いていると

鈴々「あーっ！お兄ちゃんだけ鍋食べてずるいのだー！」

季衣「ボクも食べるー！」

ダダッ！

そしてちびっこ食いしん坊コンビの二人も鍋に群がってきた。

一刀「何でみんなここにいるの!?」

一刀が驚いていると

桃香「私達もいるよ一刀くん♪」

華琳「私を置いて鍋するなんていい度胸じゃない一刀＃」

蓮華「具材もあるから使ってくれ」

月「へぅ…じゃあ私が準備しますね」

いつの間にか桃香達も現れた。

更に数時間後（午後１０時）

ガヤガヤ

いつの間にか講堂には人が集まっていた。

鈴々「この肉は鈴々のなのだ！」

季衣「ちびっこ！それはボクの肉だぞ！」

恋「…恋の！」

パクパクッ

大食いトリオが肉を食べまくり

愛紗「まったく姉上ときたら日頃からだらしなくてな」

秋蘭「愛紗よ、その気持ちはわかるぞ」

シャオ「ホントお姉ちゃん達ったらシャオの邪魔するんだもんね」

妹トリオが愚痴を言い

明命「はぅ～♪お猫耳フード似合ってますね～」

桂花「ちょっと！あんまり触らないでよ！　」

風「ゴマ団子は飴には劣りますがなかなか美味しいですね～　」

亞莎「飴も美味しいですね　　」

穏「はぅ～、本が読みたいです～　」

稟「華琳様が使ったお箸…ブホッ！　」

詠「ちょっと！鼻血出さないでよね！　」

その他の人々が騒ぎ、そして

桃香「一刀くんアーンして　／／／　」

蓮華「一刀、口を開けてくれ／／／　」

月「へぅ…／／／　」

華琳「一刀、私の差し出した料理が食べられないとでも？　」

璃々「お兄ちゃん？　」

一刀は5人の女の子にアーンを迫られていた。

一刀「俺、ちょっと外の空気を吸いに…　」

ガラッ

一刀がこの場を逃げるために講堂の扉を開くと

ねね「ちんきゅうキーック！」

ドガッ！

いきなりちんきゅうキックを食らわされた。

ねね「このヘボ会長め！恋殿を鍋でたぶらかすなんて最低な奴なのです！」

一刀「何故ねねがここにいるの？」

一刀が不思議がっていると

華琳「甘いわよ一刀、さっきみんなに一斉送信したもの『講堂にて生徒会長による年越しパーティー開催！各自食材を持ってきて講堂に集合すること』ってね」

ちなみにこのメールは呼んだらうるさい麗羽とアドレスを教えると迷惑な及川以外全員に送られている。

一刀「あはは…」

一刀はもう笑うしかなかった。

更に数時間後（午後１１時４５分）

わいわいがやがや

講堂には教師を除く生徒のほぼ全員が集合していた。

天和「あぁんっ！紅白白組が負けちゃったよ～！」

地和「ちぃ達が出てたら絶対勝っていたのに！」

人和「姉さん達がメールを見て仕事をすっぽかすからでしょ」

真桜「ちょっと凪、鍋にそんなに七味入れるなや！」

凪「これくらいがちょうどいいのだが」

春蘭「華琳しゃま～、何故私を置いて学園にいったんでしゅか～！」

華琳「あなたが勝手に寄り道したからでしょ」

もはや講堂は宴会場と化していた。

そんななか、一刀は一人講堂の屋根に登ると

一刀「俺が東京に来てもう８ヶ月になるのか、その間いろんなことがあったな」

一刀は８ヶ月の思い出を思い出していた。

武将達との戦い、生徒会長争奪戦、ＧＷのグアム島旅行、学園対抗

武道大会などいろいろなことがあった。

一刀が思い出にひたっていると

璃々「お兄ちゃ～ん、年越しそばができたから食べようって呼んでるよ」

一刀「わかった今行くよ」

講堂

桃香「一刀くん、生徒会長なんだから締めの挨拶してよ」

一刀「仕方ないな、それでは新年まであと一分なのでカウントダウン始めようか！」

全員『イェーイ！』

しかしこの時、一刀達は知らなかった。新年を迎えるのはまだまだ先になるということを

76時間目「大晦日の夜・学園編」（後書き）

優刀「一刀の父の北郷優刀です。年越しでクラス会やるなんてたまにはいいよね♪クラスの懐かしい人達に会えるかな?次回、『大晦日の夜・会場編』楽しい夜をすごそうね切刃」

77時間目「大晦日の夜・会場編」（前書き）

一刀「今年もあと数時間に迫った大晦日の夜、俺は璃々ちゃんと年越しパーティーをすることにした。だが桃香達が来たことがきっかけでいつの間にかほぼ全員が集まり、カウントダウンが始まるのだった」

77時間目「大晦日の夜・会場編」

一刀達が学園にて大晦日をむかえている頃、

午後10時

東京ロイヤルドーム（最高級の会場）

キキィーッ

この場所に一台の車が止まった。

ガチャリッ

そして降りてきたのは

優刀「ようやく着いたよ切刃」

切刃「そうねあなた」

一刀の両親である北郷夫妻であった。

実はこの場所で××年度の学園の同窓会が開かれているのだ。

会場内

もちろん会場には優刀の同級生もいた。

桃恵「優ちゃん久しぶり～♪」

優刀「桃ちゃん、相変わらず元気だね　」

劉備桃恵　桃香の母（しかしその事を優刀達は知らない）

桃恵「そりゃあもう、この間うちの娘が全国的に恥をかいたから娘を川に投げ込むくらい元気なんだからさ　」

とても桃香の母とはおもえないくらい豪快にいう母だった。

仁嵩「うぉーん！華琳ちゃんに特別同窓会に来ておくれと言ったら断られてしまったわ～い！　」

曹操（じんすう）仁嵩　華琳の父　曹操グループの頂点に立つ男。かなりの親バカである。

麗香「おーほっほっほっ！無様な顔が勢揃いですわね。あら、そこにいるのは元助番（スケバン）の切刃さんじゃありませんこと？　」

袁紹麗香　麗羽の母　麗羽に似て嫌みな性格。在学時代から優刀と仲がよかった切刃を目の敵にしている。

麗香「おーほっほっほっ！スケバンさんは化粧しなくていいですわね何故なら化粧したところで無駄ですもの　」

ピキンッ＃

この言葉に切刃がキレた。

切刃「そうよね～、私と違ってあなたは元が汚いから高い化粧品使って隠さないといけないものね～＃」

麗香「おーほっほっほっ！＃」

切刃「ハハハッ！＃」

バチバチッ

顔は笑顔だがものすごい火花を飛び散らす二人だった。

瑠里「はわわ～！せっかくの同窓会なんですから喧嘩しないでくださーい！」

諸葛瑠里　朱里の母

ちなみに蓮華の母である静蓮は仕事で遅れている。

恋歌「…もぐもぐ」

呂布恋歌　恋の母

？「相変わらず騒がしい連中だな」

優刀「その声は昴じゃないか久しぶりだな」

氷室昴　蒼魔の叔父。優刀の同級生で在学時代の優刀のライバル

昴「テレビ見たぜ！お前の息子が活躍したそうじゃないか、まぁ俺も甥っ子（蒼魔）を鍛えておいたから負けないけどな　」

優刀「確かに一刀は強くなったよ、実力なら今のお義父さん（刃）を軽く越えているね。でも僕から見たらまだまだだよ　」

昴「お前も相変わらずだな　どうだいっちょ久々に殺り合うか？」

スッ

昴が構えると

優刀「今は同窓会なんだ、後で相手してやるよ　」

優刀と昴が話し合っていると

飛鳥「昴、あいつらが来たそうだぜ　」

李鳥飛鳥　鳳賀の父。蒼の秘書

そして鳳の見た方向を見てみると

ズォンッ！！

どす黒い気を纏った数人の人達が入ってきた。

スッ　　ギロリッ

そしてその中でも一番大きな気を纏った男が優刀を睨み付けると

奈雲「優刀、久しぶりじゃねぇか♪」

バシンッ！

男はものすごい勢いで優刀の背中を叩いた。

優刀「いたた…。お前も久しぶりだな」

実はこの連中はかつて優刀達と戦った奴らであり、現在は仲良しなのだ。

奈雲「テレビ見たぜ！優刀の息子はすごかったな！俺の息子と一度戦わせてみたいが俺の息子はまだ幼稚園児でな」

優刀「その子が成長するのを待ってたらうちの息子は３０過ぎになるぜ」

奈雲「アハハッ！それは違いねぇや！」

今はこうして仲良くなっているが数十年前は敵同士であり互いに命を懸けた激闘を繰り広げていた。

そして数時間後（午後１１時半頃）

五月「へぅ…、でも優刀くんと切刃さんが結婚できたのは今でも驚きですぅ」

董卓（さつき）五月　月の母

切刃「確かにあたしもあのガリ勉優刀と結婚できただなんて少しは驚きだよ。もう少し早く合ってればあたしもスケバンにならずにすんだかもね」

切刃がぐれたのは父である刃のせいである。

瑠里「でも切刃ちゃんに赤ちゃんができたって聞いたときは驚いたよね」

切刃は高校卒業して結婚してしばらくした後、一刀を身ごもったのだ。

切刃「あの時はさすがのあたしも怖かったよ。この子が元気に産まれてくるのかさ、ほらあたしって高三まで喫煙してたからさ」

※未成年の喫煙はいけません。

当時切刃はマタニティーブルー（出産時の不安）を起こしていた。

切刃「でもそんなあたしを優刀がずっとはげましてくれて、手術室にまで入ろうとしたんだから」

瑠里「アツアツですね～／／／／」

五月「へぇ～／／／／」

切刃の言葉に顔を赤くする二人。

麗香「ふんっ！スケバンのあなたのことですから優刀くんを脅したんでしょう！『あたしと付き合わねぇと殺してやるぞ！』ってね」

切刃「なんだと麗香！優刀はあたしに脅されてビビる男じゃねぇぞ！＃」

ガタンッ

麗香の話を聞いて切刃は立ち上がる。

麗香「あら、スケバンのあなたの言うことなんて信じませんわよ！」

麗香は優刀と結婚する予定だったのだが、できなくて自分から優刀を奪った切刃を逆恨みしてるのだ。

切刃「やんのかテメェ！」

麗香「のぞむところですわよ！」

二人の雰囲気が嫌な展開に

王龍「喧嘩か？なら俺もやるぞ！」

骸亜王龍（わんろん）　九龍の父

仁嵩「うぉーん！華琳ちゃんが来てくれないのは悲しすぎるわい！この悲しみは戦いではらさなければ！」

ドカドカッ！

同窓会は一気に戦場になってしまった。

そんななか優刀は

奈雲「優刀、覚えてるか？」

優刀「何を？」

奈雲と楽しく雑談をしていた。

奈雲「卒業前に戦った奴らのことだよ。確か名前は…」

優刀「十二神将（デーヴァ）だろ。突然現れてこの地球（ほし）を頂く！と言っていたかなり手強かった奴らか」

奈雲「確か優刀が止めをさした時に言ってたよな。『予言しよう！例え我々が封印されようともいずれ我々は必ず復活してみせる！その時が人間共の最後の日だ』ってな。封印の方は大丈夫か？」

奈雲が心配していると

昴「何だよお前、意外と臆病なんだな。昔は『翠川優刀、俺は貴様を倒して神になってやる』って言ってたくせによ」

ピキンッ！＃

この言葉に奈雲がキレた。

奈雲「お前、死にたいらしいな数十年前は俺に手も足も出なかった野郎が＃」

ピキンッ！＃

そして昴もキレてしまった。

昴「俺を数十年前と一緒にするんじゃねぇよ、お前程度なら片腕で倒してやるぜ！＃」

奈雲「おもしろい、受けてたつぜ！＃」

ドタバターッ！！

こちらでも喧嘩が始まってしまった。

優刀「（しかしデーヴァか、まぁ今は地下深くに封印しているから大丈夫だと思うけどな）」

しかしその頃、東京の地下街では

麗羽「おーほっほっほっ！お宝はわたくしのものですわよ！」

年越しパーティーに呼ばれなかった麗羽が地下街で叫んでいた。

猪々子「全くもう麗羽様ったら～」

斗詩「少しは自分で荷物を持ってくださいよ～」

そしていつものように麗羽に付き合わされる二人

麗羽「お黙りなさい！この古道具屋で見つけた宝の地図、これさえ

あれば失ったお小遣いを取り戻すくらい簡単ですわ！おーほっほっほっ！」

クリスマスパーティーの時に麗羽は家を壊した罰として半年分の小遣いをカットされたのだ。（約６００万円）

そんな麗羽は古道具屋で見つけた宝の地図（１０００円）をたよりに東京の地下街にやって来たのだ。

麗羽「前の宝の地図と違って今回は古めかしくて本物っぽいから大丈夫ですわ！『東京の最も深き場所、〇を収める』の〇部分はきっと宝に違いありませんわ！それっレッツゴー！」

麗羽は一人で先を進むが

猪々子「なぁ斗詩、麗羽様から離れた方がアタイ達幸せになれるんじゃないか？」

斗詩「そうかもしれないね」

二人はいずれ麗羽から離れようと考えていた。

77時間目「大晦日の夜・会場編」（後書き）

？「憎いぞ忌々（いまいま）しい人間共め、よくも神である我々を封じてくれたな！この恨みは絶対忘れはせんぞ！次回、『新たなる敵、十二神将（デーヴァ）』私の正体は次話で明らかに…」

78時間目「新たなる敵、十二神将（デーヴァ）」（前書き）

一刀「俺達が年越しパーティーをしている頃、父さんと母さんはドームにて同窓会を開いていた。そこには俺も知らなかったが桃香や華琳、月などの親がいた。そして父さんが昔のライバルと会話しているとひとつの言葉、十二神将（デーヴァ）が出てきた。一方その頃、東京の地下街では…」

78時間目「新たなる敵、十二神将（デーヴァ）」

世間ではあと数分で新年を迎える頃、東京の地下街では

麗羽「ほら斗詩、もっと力を込めなさいな！猪々子、サボるんじゃありません」

麗羽達が必死に穴堀りをしていた。

斗詩「麗羽様～、指示ばかりしてないで少しは手伝ってくださいよ！」

猪々子「アタイ達だけにやらせないでよ！」

二人が文句を言うと

麗羽「何を言ってますの？わたくしが鶴嘴（つるはし）やスコップを握ればわたくしの白魚のような手が汚れてしまうではありませんか、それにわたくしはあなた達がくたばらないよう応援してあげてますのよ」

麗羽が言うと

斗詩「そんなこと言っちゃってホントはサボりたいだけなのにね（ひそひそ）」

猪々子「そんでもってアタイ達が宝を見つけても絶対奪う気でいるんだからな（ひそひそ）」

ひそひそと愚痴を言う二人に

麗羽「お黙りなさい！＃愚痴をこぼす暇があるなら手を動かしなさい！＃　」

怒鳴る麗羽だった。

そして新年まであと１０分と迫ったとき

ボコッ！

猪々子「麗羽様、壁掘ってたら何か古い壺を見つけましたけど　」

麗羽「なんですって！？わたくしにその壺を見せなさい！　」

スッ

麗羽は穴の空いた壁の中に入ると

ドロロ～ン

中には鬼の顔の不気味な古い壺があった。

麗羽「ついにお宝を見つけましたわよ！早速開けますわ、この張り紙が邪魔ですわね　」

ビリッ！

麗羽が壺に貼ってあった張り紙を剥がした瞬間

ブシューッ！！

壺の中から黒い煙が噴き出してきた。

猪々子「麗羽様、なんなんですかこれは！？」

斗詩「私達何かいけないことをしたんじゃ！？」

くるっ

二人は麗羽の方を見るが、すでに麗羽の姿はなく

麗羽「おーほっほっほっ！わたくしは何も知りませんわ！」

ピューッ！！

入り口へと猛スピードで逃げ出す麗羽だった。

猪々子「麗羽様、待ってくださいよー！？」

斗詩「一人で逃げちゃうなんてずるいです～！？」

ピューッ！！

そして猪々子と斗詩も逃げていった。

三人が逃げたあと、煙が晴れてその場にいたのは十二匹の獣の化け物だった。

？「ようやく封印が解けたようだな」

？「待ちくたびれたでチュ　」

？「ここではすでに数十年の時が経っているなり」

？「忌々しい人間め！神である我々を封印するなんて許さんッキー＃」

？「では早速我々を封印した人間に復讐しようではないか」

？「賛成だぜ」

？「ボガボガァー！」

そして新年開始まであと5分の時

東京ロイヤルドーム

ガランッ

静蓮「遅れちゃってごめんなさいね」

蓮華の母である静蓮がギリギリになってやって来た。

切刃「お仕事大変ね」

静蓮「そうなのよ、おまけにうちには怠け者の長女（雪蓮）がいるから大変よ」

そんな世間話をしている頃、ドームの上空では

？「この場所に我らを封印した憎き翠川優刀達がいるというのだな」

？「間違いないメー」

？「ではそろそろ始めるとするか」

スッ　スッ　スッ

怪物達はバラバラに散って六亡星（三角形と逆三角形を重ねた形）の配置につくと

？『六亡封印陣』

カッ

東京ロイヤルドームに封印術をかけた。

ドーム内

優刀「んっ！？」

外の異変に優刀がいち早く気付いた。

切刃「どうしたのあなた？」

優刀「嫌な気を感じるんだ。ってこの気は確か！？みんな、早くドームから出るんだ！」

優刀はドーム内に聞こえるように叫ぶが

シュンッ

間に合わず、封印が完了してしまった。

優刀「しまった!?まさか奴らが復活するなんて、だが私が動けなくてもあとは任せたぞ一刀…」

カチンッ

カチンコチンッ!

そしてドームの扉は封鎖され、優刀達は石になってしまった。

その頃、フランチェスカ学園では

全員『9・8・7・6…』

のんきに新年のカウントダウンが始まっていた。

そして

全員『3・2・1・0!ハッピーニューイヤー!』

めでたく新年を迎えた。

…かに、思えたが

一刀「あれっ？」

桃香「一刀くん、どうしたの？」

一刀「おかしいんだよ。俺のデジタル時計が１１：５９：５９（１１時５９分５９秒）で止まってるんだ」

桃香「ホントだ。私の時計も止まってる」

華琳「私の時計もよ」

蓮華「私のもだ」

なんと会場にいた全員の時計が止まっていた。

と、その時

ブォンッ！

テレビの電源が勝手につくと

？「人間共よよく聞け！我らの名は十二神将（デーヴァ）なり、この世は全て神である我々が支配する。我が名は馬神・インダラ」

？「同じく鼠神・クビラ」

？「同じく牛神・バサラ」

？「同じく虎神・メキラ」

？「同じく兎神・アンチラ」
？「同じく龍神・アジラ」
？「同じく蛇神・サンチラ」
？「同じく羊神・ハイラ」
？「同じく猿神・マコラ」
？「同じく鳥神・シンダラ」
？「同じく戌神・ショウトラ」
？「ボガボガァー！（同じく猪神・ビカラ）」

そこにはそれぞれの獣の姿をした化け物がいた。

インダラ「人間共、神に従うがよい！」

新たなる戦いの幕開けであった。

78時間目「新たなる敵、十二神将（デーヴァ）」（後書き）

桃香「桃香です。新年を迎える前に大変なことが起きちゃったよ～!?でもデーヴァはすぐに人類を殺すかと思いきや3日の猶予をくれたんだ。（案外いい人かも?）そして校庭にはデーヴァを倒すべく仲間が世界中から集まってくれたんだ。次回、『結成!龍神騎士団（ドラグーンナイツ）』うちのお母さん大丈夫かな?」

79時間目「結成！龍神騎士団（ドラグーンナイツ）」（前書き）

一刀「新年を迎える前に麗羽達は東京の地下街で宝探しをしていたところ怪しげな壺を発見し、麗羽は壺に貼っていたお札を破いてしまった。その結果、昔父さん達が封印したデーヴァが甦ってしまいデーヴァ達はまず始めに自分達を封印した父さん達を封じ込めた。そしてその頃、地球は新年を迎えようとするがいつまでたっても時が経たないそしてテレビが勝手について」

79時間目「結成！龍神騎士団（ドラグーンナイツ）」

フランチェスカ学園

一刀「十二神将（デーヴァ）だって！？」

桃香「嘘だよね、これって最新の特撮だよね」

桃香は信じずにいたが

インダラ「愚かな地球人（人間）共よ！我々に従うがいい！」

インダラが叫ぶと

及川「何を勝手なことぬかしてんねん！」

突然及川の声が聞こえてきた。

実は偶然デーヴァの中継場所の近くに及川がいたのだ。

及川「出っ歯かなんか知らんけれども馬のくせに人間を従うなんてバカなことはやめい！」

ビシッ！

及川が言い終えると

インダラ「貴様、干支で好きな動物はなんだ？」

インダラの質問に

及川「わいはバニーガールが好きやけど干支の中なら犬が好きやで！」

及川が答えると

インダラ「戌か、ならばショウトラ！」

ショウトラ「うむっ！」

バッ！　クルクルッ！

インダラに言われてショウトラは高く跳んで回転すると

ブォンッ！　ブォンッ！

あっという間にショウトラの体は巨大な鎚（ハンマー）に変化し、

ショウトラ「宝鎚！」

ブォンッ！

及川「へっ？」

ズッシーンッ！！

及川を潰した。

及川「一体何が起きたんや…！？」

しかし、さすがは生命力ならばゴキブリ以上の及川、簡単には死んでいなかった。

インダラ「我らの地球支配がホントだということがこれでわかったであろう！今すぐにでも人類を死滅させたいところだがそれではつまらんからな人類に三日間の猶予を与える。３日の間強者を揃えるなり、宇宙にでも逃げるがいい！我々が本気を出せばこの地球全ての生物を殺すのには一週間もあれば十分だからな！」

ビシッ！

インダラの言葉に世界中の人々が恐怖を感じていた。そして最後にデーヴァは

インダラ「愚かな人間共よ、恨むのならば我らの封印を解いて解放したれい…」

インダラが最後まで言おうとすると

プツンッ！

突然テレビの電源が切れた。

一刀「どうなってるんだ？　」

実はこの事態は世界中で起きていてその原因は

東京電波塔（世界中の電波を操作しているところ）

麗羽「早く世界中のテレビを止めなさい！オーナーの娘であるわたくしの命令ですわよ！」

係員「は…はいっ！」

電波塔のオーナーは麗羽の母の麗香である。麗羽は急いで世界中のテレビを止めていた。

猪々子「バレたら世界中の人間から袋叩きにされちゃうかもしれないしな（ひそひそ）」

斗詩「麗羽様も必死だね（ひそひそ）」

麗羽「あなた達！サボってないで手伝いなさい！」

そして数時間後

キャスター「ここで電波が戻りましたのでデーヴァについてのことですが、地球のあらゆる歴史に詳しい江良井（えらい）教授に話をうかがいましょう」

スッ

そして江良井教授が現れる。

江良井「このテレビを見ている世界中の皆さん、デーヴァとは地球に古くから住む悪魔の一種なのです。十数年前の火山の噴火の際、奴らの封印が解けて奴らは脱出し地球を乗っ取ろうと企みました」

江良井「しかし、そんなことはさせないぞ！と言うある高校生達の一団により、デーヴァは東京の地下街に永久に封印されたはずでした。だが何らかの事情で封印が解けてしまい今回の事態が起きたのです！」

このテレビを見ていた麗羽達は

猪々子「やっぱり封印解いたの麗羽様じゃないですか！？」

斗詩「今ならまだ自白しても許してくれるかもしれませんから白状しましょうよ！？」

自首を進める二人に対して麗羽は

麗羽「わたくしのせいではありませんわ！手で引っ張ったくらいで破れるお札を作った生徒達が悪いんじゃありませんの！」

麗羽はあきらかに責任転嫁（過ちを人に擦り付けること）していた。

記者「教授！こうなったら前の高校生達にまた封印してもらうように頼むしかありませんよ！」

一人の記者が言うと

江良井「それは無理じゃ、デーヴァは先手を打って高校生達がいた場所を封印したんじゃ。おかげでその場所には入れないし、電話も通じない。ちなみにこれがその生徒達のリストじゃ」

スッ

教授が立てた戦士達の名前が書かれたフリップの中には

・翠川優刀

一刀の父の名前があった。

これを見た一刀は

一刀「父さんの名前!?まさか…」

ピッ!

一刀は急いで父である優刀に電話するが

『ツーツー』

優刀は電話には出なかった。

一刀「まさか父さんがやられるなんて!?」

ピリリッ

他の人も親に連絡を入れるが

桃香「お母さん!お願いだからでてよ!」

華琳「お父様!あなたの愛する娘の華琳よ!」

蓮華「母さん!何があったの!?」

華佗「親父！」

華佗父『何か用か？』

ほとんどの保護者が電話に出ることはなかった。

桃香「うえーん！お母さんー！」

一刀「まさか父さんがデーヴァを封印した人の一人だったなんて！」

人類に希望がなくなり泣くもの、悔やむもの等がいるなか

江良井「世界中のみなさんまだ望みは微かですがあるかもしれません！」

！？

教授の言葉に世界中の人が驚いた。

江良井「私には見えませんが私の後ろにはあるものがいます。それが見える人は今から３０分の間に学園対抗武道大会優勝校であるフランチェスカ学園の校庭に集まってください！その人達が救世主になってくれるでしょう！」

スッ

江良井教授が椅子から離れると

ボワ～

一刀「あれは！？」

椅子にはトカゲくらいの小さな龍がいた。

しかし誰でも見れるわけではなく

春蘭「何もないではないか教授のバカめ！」

愛紗「何がいるというのだ？」

そしてその正体に気付いた一刀が

スッ

校庭に向かおうとしたその時

ギュッ

恋「…恋にも見えた。一緒に行く」

一刀「恋、わかった行くぜ！」

他の人が何がいるのか分からずにおろおろしている間にこっそりと

校庭に向かう一刀と恋であった。

そして一刀と恋が校庭に着いたとき

蒼魔「どうやら一刀にも見えたようだな」

一刀「蒼魔！？」

すでに蒼魔の姿があった。

蒼魔「俺だけじゃねぇぞ、俺より先に来た奴がいるぜ！」

ピッ！

そして蒼魔が指を指した先には

焔「久しぶりだな北郷」

バァンッ！

光魔学園の日高焔がいた。

焔「安心しろ、お前を殺すために来た訳じゃねぇよ！デーヴァをぶっ倒しに来たんだお前を倒すのはその後にしておいてやるぜ！」

一刀「焔！」

敵だった奴が仲間になるというのは一刀にとって嬉しいことだった。

焔「それと忠告してやる。その場からはなれな」

一刀「？」

一刀は？を浮かべたが

雫「ダーリン会いたかったなの～♪」

ギュ～ッ

一刀はいきなり光魔学園の水上雫に抱きつかれた。

雫「焔に付いていけばダーリンに会えると思ったけど正解だったなの～」

ギュ～ッ！

一刀「（む…胸が～／／／）」

一刀は雫の巨乳を押し付けられて赤くなっていた。

と、その時

ガラリッ！

講堂の扉がいきなり開いて

桃香・華琳・蓮華・月『なに赤くなってるのよ一刀（！・くん！・さん！）＃』

怒鳴り散らす一刀大好き連合だった。

そして期限の３０分後、校庭には数人の生徒がいた。

カウボーイスタイルの金髪ロングで長身の男

ビリー・ザ・キッド　高２

紺色のお下げをしたカンフー服を着た少女（簡単に言うと紺色お下げの凪）

チャン・レイ　高２

ドイツの軍服を着た銀髪でドクロの眼帯をつけたドイツの誇る天才少年

ブロッケン・アルベルト　高２

フランス人形のような風貌と青い目で月みたいな雰囲気の少女

フランソワーズ・ルイ　高１

イギリスの誇る青い目のロイヤルガーディアンの騎士隊長

エドガー・ロビン　高３

ロシアの大柄モヒカンの怪力男

イワン・ボルコフ　高１

そして一刀、恋、蒼魔、焔、雫の１１名が揃った。

果たして彼らはデーヴァの魔の手から地球を守ることができるのだろうか！？

79時間目「結成！龍神騎士団（ドラグーンナイツ）」（後書き）

蒼魔「蒼魔だ。まさかこんなにも龍を見れた奴がいたとはな。しかし、3日以内に何をするかでもめたところ一刀がとある提案をした。次回、『龍宮神殿での修行』パワーアップした俺の力を見せてやるぜ！」

８０時間目「竜宮神殿での修行」（前書き）

一刀「デーヴァ達が現れたことにより地球に危機が訪れた。しかしデーヴァはすぐには攻めず人間達に３日の猶予を与えたのだった。そしてそれまでの間、人類は世界中から戦士達を集めるのだった」

８０時間目「竜宮神殿での修行」

復活した十二神将（デーヴァ）を倒すためフランチェスカ学園に龍神騎士団（ドラグーンナイツ）と呼ばれる１１人の戦士達が集結した。

そして現在彼らは

ビリー「誰か１００円貸してくれないか？日本についたばかりでドルしかないんだ」

一刀「仕方ないな、ほらよっ１００円だ」

ポイッ

一刀が１００円を渡すと

ビリー「センキュー！今から俺とアンタはベストフレンドだ！」

ギュッ！

一刀に必要以上にスキンシップをしてくるアメリカ人ビリー・ザ・キッド

レイ「お前が北郷か、学園対抗武道大会の活躍は素晴らしきものだったぞ。だが、少しばかり甘いところがあるな」

中国のカンフー少女、チャン・レイ（胸は凪くらい）

ルイ「あのぅ…」

焔「何か用かよ」

ギロリッ

ルイ「いいえ、別に…」

フランスのおとなしい少女、フランソワーズ・ルイ（胸は朱里くらい）

ロビン「さてみんな、ここに集まったということはあれが見えたようだな」

最年長なのかリーダーシップを取りたがるイギリスのロイヤルガーディアン（女王護衛部隊）隊長、エドガー・ロビン

イワン「んなもんわかってるんだよ！それにしても来てみれば男ばかりで女は洗濯板ばかりじゃないかよ！つまらねぇな！」

ロシアのレスリングチャンピオン、イワン・ボルコフ（通称マッチョ男の麗羽）

イワンが言うと

雫「失礼ね！他はともかくなんで私が洗濯板なのなのよ！＃」

ぷるんっ

恋「…恋も胸ある　」

ぷるんっ

イワンに胸のことをバカにされて胸を見せる二人（もちろん下着着用）

桃香「私だって胸あるもん！　」

ぐいっ

桃香も胸を見せつけようとすると

愛紗「姉上、少しは自重してください！　」

ガバッ！

桃香は愛紗に押さえつけられた。

カタカタッ

アルベルト「この場には馬鹿がいるようだな　」

と、パソコンにデータを打ち込むドイツの誇るＩＱ３００の天才軍師ブロッケン・アルベルト

蒼魔「こんなメンバーで大丈夫かよ！？　」

蒼魔が心配するのも無理もなかった。見た感じほとんどの人が弱い感じがしてこれから一緒に戦うというのにチームワークを全く感じ

なかったからだ。

一刀「まぁ、なんとかなるだろうよ一応ここにいるみんなは教授の後ろにいたあれを見ることができるんだしな」

一刀の言う通り、この場にいる人達は愛紗や春蘭が見えなかった教授の後ろにいた龍を見ることができたのだ。外見はどうあれ戦闘能力はあるといえよう。

ビリー「ところで集まったのはいいがこれからどうする？」

ビリーの質問に

イワン「決まってるじゃねぇか馬鹿かお前は！3日といわず奇襲して出っ歯を襲うんだよ！」

ロビン「デーヴァだ馬鹿者め！奇襲戦法なんて卑怯者のすることだ戦士として恥ずかしくないのか！」

イワン「何だと馬鹿って言う奴が馬鹿なんだぜ！＃」

ならば最初に言ったあんたこそ馬鹿である。

アルベルト「待ってくれ！僕の計算によると奇襲するにしてもしないにしても今のままではデーヴァに勝ち目がない！」

ルイ「どうしてわかるの？…」

アルベルト「それはこれを見ればわかるさ」

スッ

そしてアルベルトは一枚のグラフを見せた。

アルベルト「僕らの力を数値化すると合計しても約１５００、だがやつら一人の強さは約２０００近く、この結果から今のままじゃどうしても敵わないのさ」

その結果に全員が驚いたが

レイ「一つ聞く、個人の数値を教えてくれ！そして一番数値が高い者が我らを引率していった方がいいだろう」

焔「早い話がリーダーを決めるわけか」

アルベルト「僕は別に構わないがみんなもそれでいいか？」

イワン「構わないぜ！どうせ俺が一番強いんだからな！」

ルイ「（こくりっ）」

ロビン「意義なし」

一刀「それで構わないぜ」

みんなから了承を得ると

アルベルト「わかった。では発表する。北郷一刀、１８８。日高焔、１７５。氷室蒼魔、１７０。呂布恋、１６８。水上雫、１５０。ビリー・ザ・キッド、１６５。エドガー・ロビン、１８０。チャン・

レイ、１５２。イワン・ボルコフ、５７。フランソワーズ・ルイ、５。そしてブロッケン・アルベルト、１４５。以上だ」

ちなみに１４０以上ですでに超人レベルであり、並みの人間が１０近く、プロ選手で１００近くなのだ。

並べかえると

一刀、ロビン、焔、蒼魔、恋、ビリー、レイ、雫、アルベルト、イワン、ルイの順である。

この結果を聞いたイワンは

イワン「ふざけるなよ！なんで俺がビリツーなんだよ！しかも女に負けるなんてなめるなよ！＃」

結果に納得がいかなかった。

ビリー「落ち着けよデカ男、それが全てなんだよ」

ロビン「往生際が悪いぞ！」

イワン「だまれだまれ！こうなったら一番強いと言われたこいつをぶっとばして俺が一番になってやるぜ！＃」

ブォンッ！

イワンは一刀に渾身の拳を繰り出した。

だが

サッ

一刀「頭に血が上りすぎだぜ」

一刀はその拳を軽く避けた。

イワン「だまれだまれ！」

ブォンッブォンッ！！

イワンは逆上して一刀に攻撃を仕掛けるが全てかすりもしなかった。

アルベルト「馬鹿（イワン）はほっておいて、僕らのリーダーは北郷でよろしいですね？」

レイ「意義なし」

ロビン「仕方ないな」

雫「ダーリンに決定♪」

一刀がイワンと争っているうちにリーダーは一刀に決まった。

ビリー「それよりどうするんだよデーヴァが来るのは3日後だろ、時間が足りないからどうするんだ？」

ビリーの言う通り、あと3日でデーヴァが攻めてくる。一刀達が今から修行しても精々数値が10上がるのがやっとであり時間が無さ

すぎるのだ。

そのことで一刀も悩んでいたが

ピキンッ！

あることを思い出した。

イワン「こなくそがー！」

ブォンッ！

それと同時にイワンが拳を繰り出すが

パシッ！

一刀は繰り出された拳を軽く受け止めると

一刀「竜宮神殿があったじゃないか！」

突然叫びだした。

焔「なんだよ北郷、突然叫びやがって！？」

ロビン「さっき確か竜宮神殿と言ったが」

アルベルト「興味深いね、是非教えてよ」

すると一刀は

一刀「簡単に言うと短い時間で数日鍛えられる場所だ。連れていくから俺につかまってくれ」

たしかに竜宮神殿ならば１０日いても地球では一時間しか経たない。つまり地球では3日経つ間でも竜宮神殿ならば７２０日（約二年）も修行できるのだ。

一刀から竜宮神殿の話を聞いたみんなは

蒼魔「面白い、俺は行くぜ！」

焔「貴様がそこで強くなったのならば俺もそこで強くならなくてはな」

雫「雫はダーリンの指示に従いますなの～♪」

恋「…恋も行く」

ビリー「俺はベストフレンドを信じるぜ！」

アルベルト「竜宮神殿か、研究にもってこいの場所だね」

ロビン「今ここでじたばたするよりはましだろう」

レイ「あなたを信じよう」

ルイ「（こくりっ）」

イワン「ちっ！みんなが行くなら仕方がないな。俺様もついていっ

てやるよ！」

一人余計だが結局全員向かうことに決めた。

一刀「じゃあ、俺の体につかまってくれ。いくぜ！」

ゴォッ！

一刀は聖騎士光龍になって瞬間移動で竜宮神殿に向かおうとすると

桃香「一刀くん、待って！」

桃香に呼び止められた。

桃香「どこかに行くなら私も行くもん！」

蓮華「もちろん私もだ！」

月「へぅ、私も」

華琳「この私を置いていくなんてことはないわよね？」

どうしてもついてこようとする桃香達に

一刀「何を言うんだ！遊びとか観光じゃないんだぞ！地球の未来がかかってるんだからな！」

ビシッ

一刀は珍しく厳しく言うが

華琳「連れていかないのならこの間の映画のヒロインの正体（７３話参照）をマスコミに…」

一刀「置いていくわけないだろう」

ズコッ

態度を百八十度変える一刀だった。

一刀「では改めまして、いくぜ！」

ゴォッ！

一刀は聖騎士光龍に姿を変えると

一刀「目標、竜宮神殿！行くぜ！」

シュパンッ！

一刀達は竜宮神殿へと瞬間移動していった。

竜宮神殿

パンッ

なんとか無事に竜宮神殿にたどり着いた一刀達は

一刀「おーい！白竜（パイロン）、いろいろと聞きたいことがあるんだよ！」

一刀は白竜に聞こえるように叫ぶが

シーン

誰も返事を返さなかった。

８０時間目「竜宮神殿での修行」（後書き）

雫「雫なの～♪ダーリンと一緒に修行できると思ったのにお邪魔虫（桃香達）がたくさんいて困っちゃうの～！でもダーリンと焔以外にもたくさんの龍がいたんだねそれは驚いたなの！？次回、『それぞれの龍（ドラゴン）』絶対にダーリンと二人っきりになれるチャンスを掴んでやるのなの～♪」

81時間目「それぞれの龍（ドラゴン）」（前書き）

一刀「デーヴァ襲来の話を聞き付けて世界中から戦士達が集まってきてくれた。俺や蒼魔達率いる日本の他に、アメリカ・中国・フランス・イギリス・ドイツ・ロシアからやって来た戦士達だが、デーヴァとの力の差を知り落胆するみんな。だが、修行するにしても時間がないということで俺はみんなを竜宮神殿に送り届けることにしたのだが」

81時間目「それぞれの龍（ドラゴン）」

竜宮神殿

ここは普段から静かそうな場所だが、今はひとっこ一人いないような感じだった。

一刀「まさかデーヴァの魔の手がここまで来たのか!?白竜（パイロン）、お前がやられたら…」

一刀が叫んだその時

ガラッ

白竜「あぁ、よく寝たわい　」

ズコッ！

扉が開いて白竜が現れた。

白竜「おぉ一刀か、久しぶりだな　」

一刀「久しぶりだなじゃねぇよ！てっきりデーヴァにやられたかと思ったら心配かけさせやがって！　」

一刀が言うと

白竜「なにっ！？何故一刀がデーヴァのことを知っておるのじゃ？あやつらは確か数十年前に封印されたはずじゃがのぅ　」

一刀「お前、今まで冬眠していたのかよ！誰かが封印を解いてデーヴァが復活したんだよ！」

その封印を解いたものが身近にいることを一刀達は知らない。

白竜「なるほどな、一刀よ少し頭を下げてくれ」

一刀「こうか？」

スッ

一刀は少し頭を下げると

ピタッ

白竜は一刀のデコに自分のデコを当ててきた。

神様の一人である白竜は神通力によってデコを重ねあうことにより他人の記憶を読み取ることができるのだ。

白竜「なるほどな、それで一刀は何故ここに来たのじゃ？」

一刀「決まってるだろ！ここなら時の流れが違うから短い時間で数年間修行できるから修行しに来たんだよ！」

一刀が言うと

白竜「それは別に構わないが…」

ジーッ

白竜は桃香達を見ると

白竜「強い気を感じる十人はともかく、何で強い気をもたない普通の人間がいるのじゃ！ここはめったに人が入ることができない聖域なのじゃぞ！」

華琳「あら、あなたが誰だか知らないけれど私達が足手まといと言ってるみたいね」

蓮華「一刀、いい加減に教えてくれこのトカゲは何なのだ？」

桃香「えぇっ！？イグアナじゃないんですか！？」

月「へぅ、私は蛇かと思いましたけれど」

華琳「馬鹿ね、コモドオオトカゲ（トカゲの中でも大きな種類）よ」

イワン「ヤモリだな！」

散々言われた白竜は

白竜「どっからどう見ても龍じゃろうが！＃」

ドッカーンッ！！

ついに我慢の限界を越えて怒りまくるのだった。

焔「遊ぶのはいい加減にしろ！」

蒼魔「俺達はこんなことをしている場合じゃないだろうが！」

アルベルト「今ので約5分のタイムロスだな」

ロビン「さっさと修行をはじめてくれ」

そして冷静組が騒ぎを静めた。

白竜「まぁいい、お前達の素質を見てやるからまずは超進化してみるがよい」

桃香「超進化？」

この場にいる桃香達は超進化という単語を知らない。

一刀「こういうもんだよ」

スッ

すると一刀はお手本を見せるかのように気をためると

ゴォッ！！　パァッ！

聖なる光に包まれた一刀の体は

バシュンッ！

聖騎士光龍へと変化した。

桃香「これが超進化!?」

蓮華「どんどん一刀が強くなっていくな!?」

この状況では一番戦力が低いと思われる桃香達は驚いたが

ビリー「さすが俺達のリーダー格だな。超進化の速度と強さなら俺達以上かもだぜ!?」

レイ「だが、超進化くらいなら我々とて朝飯前だ」

スッ

そして十人も気をためると

ゴォッ!!　　パァッ!

何人かが光に包まれて

蒼魔「武装氷龍!」

恋「…獣騎士地龍!」

雫「流騎士水龍!」

ビリー「轟騎士雷龍!」

レイ「闘騎士武龍！」

アルベルト「機騎士鋼龍！」

ロビン「嵐騎士風龍！」

焔「獄騎士炎龍！」

ジャキキンッ！

それぞれが超進化を果たした。

蒼魔「どうだ一刀、叔父さんとの修行によって薬の力無しで超進化できるようになったぜ」

焔「俺も魔龍を捨てて貴様らの先公（飛琳）にプライドを捨ててまで炎の扱い方を教わったら超進化できたしな」

雫「ダーリン、雫のダーリンに追い付けるよう頑張ったらできたなの～♪ほめてほしいなの～♪」

ぎゅっ

どさくさに紛れて一刀に抱きつく雫

一刀「（む…胸が～／／／）」

鎧越しでも柔らかく大きな雫の胸、しかしここでデレデレしてはい

けない！もしデレデレしたならば

桃香「か～ず～とく～ん＃　」

蓮華「か～ず～と～＃　」

華琳「か～ず～と～＃　」

月「か～ず～とさ～ん＃　」

ゴゴゴッ…！！

デレデレした瞬間、一刀の死が決定してしまうからだ。

白竜「うむ、みんななかなかの龍を操るようじゃのう　」

竜宮神殿の白竜は力を貸してくれる龍の姿が見えるのだ。

白竜「だが、約一部はダメらしいが　」

スッ

白竜がその一部を見てみると

イワン「うーんっ！　」

ルイ「う～！　」

ただ気張っているだけで超進化できてない二人がいた。

白竜「（お嬢ちゃんの方は龍がまだ成長してないから仕方ないとして、男の方は龍ではなく小さなものが見えるがのぅ？）」

白竜が考えていると

ビリー「おい、んなことより修行の付け方を教えてくれよ」

白竜「おっと、そうじゃったな。修行法は簡単なものじゃよ二人一組になって戦いあうがよい、互いに鍛えあえばスキルも上がるじゃろうて」

ロビン「確かに理屈にあっているな」

アルベルト「それじゃあクジでも作る？」

恋「…恋、一刀と戦いたい」

蒼魔「だったら俺は焔だ。学園対抗武道大会の仕返しをしてやるぜ」

焔「一度俺に負けたくせに、いいだろう相手になってやるぜ」

ビリー「ならナイスバディガールは俺とやりな、どちらが強いガンマンか勝負しようぜ」

雫「オッサンなんかの相手は嫌だけれど勝ってダーリンに頭を撫でてもらうなの～♪」

レイ「私と戦ってくれないか？」

ロビン「女性の頼みを断るわけにはいかないな」

アルベルト「じゃあ僕は少し待ちますか」

そして各自戦いが始まった。

桃香「私達は何すればいいの？」

月「とりあえず皆さんのお世話ですね」

蓮華「食事や休養だな」

華琳「勝手についてきちゃったんだから仕方がないわね」

そして桃香達は手伝いをすることになり、瞬く（またたく）間に二年（実際には3日）の月日が経ち

ドッカーンッ！！

デーヴァが動き出した。

もちろんデーヴァが動かなかった間、人類は何もしなかったわけではない

軍隊をすぐに作り、海外からも応援を頼んでデーヴァが潜んでいると思われる東京の地下街に攻撃を仕掛けたが

デーヴァ達のはった結界によって攻撃は全然効かず、3日経った今日になってデーヴァの逆襲が始まっていた。

インダラ「どうやら人間共は我々に対抗する手段を考え付かなかったようだな」

マコラ「数十年前の戦士達を封じたんだからもはや人間に勝ち目はないっキー！」

クビラ「このまま都庁を攻めるでちゅ！」

東京の都庁

現日本総理大臣・中泉総理（光魔の後任）

副総理「総理、ここは危険ですから逃げましょう!?」

副総理が慌てて駆け込むと

中泉総理「副総理、私が先に逃げてどうするというのだ?日本は総理大臣である私が守らなくてはいかんのだ！」

副総理「そ…総理!?」

ジ～ン

副総理は感動していたが

中泉総理「私が逃げるのは国民が一人逃げ出したあとだ!そうすれば私が逃げるのは二番目だから先に逃げてなどいない！」

ズコッ！

この総理の発言に副総理はずっこけた。
そしてデーヴァはじわじわと都庁に向かっていく。

シンダラ「見えたぞ！都庁だぜ！」

アジラ「突撃だー！」

デーヴァが都庁に突撃しようとしたその時

シュパンッ！

キィィンッ！

一本の光の矢がデーヴァの目前に突き刺さった。

バサラ「誰だ？」

ゴゴゴッ…！！

そして光の中から現れたのは

一刀「待たせたなデーヴァ！」

バンッ！

やっぱり一刀達であった。

ハイラ「何かと思ったら人間が11人じゃないかメー」

サンチラ「驚かすんじゃねぇよ！」

ギロリッ！

デーヴァは一刀達を睨み付けるが

一刀「俺達をただの人間だと思うなよ！俺達はお前達を倒すために生まれた地球の救世主、龍神騎士団（ドラグーンナイツ）だ！」

バンッ！

口に出すと結構恥ずかしい台詞である。

イワン「お前らなんて俺一人で十分なんだよ！いくぜっ！」

ゴォッ！

気を溜め込むイワン

一刀「（しかしあいつ白竜に聞いた話じゃあ最後まで龍が見えなかったらしいがどうなっているんだ？）」

一刀が不思議がっている間に

イワン「超進化！いでよ相棒の…」

超進化とは本来、相棒となる龍と心がひとつになり、力を借りて初めてでできる技である。

ズズンッ！

そしてイワンの背後から何かが出てきた。

イワン「相棒のドラゴン・フライ！」

バンッ！

ブブゥン。

イワンの背後から現れたのはドラゴン・フライすなわち…

蜻蛉（トンボ）であった。

ズココッ！

これにはさすがにずっこけるドラグーンナイツ

蒼魔「馬鹿かお前は！＃トンボなんかがなんの役に立つんだよ！＃」

超進化は龍にしか使えないので龍を使えないイワンが使えるはずがない。

だが、それでもトンボと契約しているので龍の気配は読み取れるので3日前の映像ではかすかだが見えていた。

イワン「いくぜドラゴン・フライ！合体だ」

スッ

イワンはトンボと合体しようとするが

ドッカーンッ！

ショウトラ「わしらを舐めてるのか！＃」

ショウトラにトンボごと潰されてしまい

イワン「ふっ！所詮俺の相手ではなかったか」

バタンッ！

イワンはその場で倒れてしまった。

ドラグーンナイツ　残り１０人

８１時間目「それぞれの龍（ドラゴン）」（後書き）

華琳「華琳よ、一刀達は大分強くなったわね！？（一人を除く）これならばデーヴァだって倒せるわ！頑張りなさいよ！次回、『デーヴァＶＳドラグーンナイツ』一刀、私の未来の夫になる人ならば偉業をしなさい！」

西森「ここでこの場を借りてお知らせです。いつもこの小説を見てくれてありがとうございます。そしてまだ先ではありますが１００話目は特別編として本編とは少し関係ない番外編をします。そこでこの小説を見てくれている人にはお願いとして１００話目にメインとして登場させてほしいというキャラを募集しています。（複数回答可・新作のオリキャラは不可、すでに出ているキャラに限る）今まで目立たなかった人が目立つチャンス！締め切りはまた後程お知らせします」

82時間目「デーヴァVSドラグーンナイツ」（前書き）

一刀「俺は三日で完璧にするために竜宮神殿を訪れた。そして白竜に修行をつけてもらうことになった。そしてあっという間に三日が経ち、デーヴァは地球を攻めてきた。軍隊でも敵わないデーヴァが暴れるなか修行を終えた俺達が現れたのだった」

82時間目「デーヴァVSドラグーンナイツ」

ショウトラ「もし残りのやつらもさっきのやつ（イワン）のような雑魚ならば戦うのは時間の無駄だとっとと立ち去るがよい！」

ショウトラが言うと

蒼魔「ふざけるな！あんなカトンボと一緒にするんじゃねぇよ！＃」

焔「俺達はあいつの千倍は強いぞ！」

一刀「そういうことだぜデーヴァ！お前らは俺達龍神騎士団（ドラグーンナイツ）が必ず倒してやるぜ！」

ビシッ

一刀が宣言すると

インダラ「面白い我らが神と本気で戦おうとするとは人間というものは数十年経っても同じようなことを言うようだな！」

そして東京の人がほとんど逃げていたとき、一刀達をじっと見つめる人物がいた。

中泉総理「彼らはいったいなんなんだ！？」

現・日本総理大臣、中泉

総理は逃げ遅れ…いや、勇気を出して脱出しなかった時に急に現れた一刀達に驚いていた。

そんなとき

副総理「総理、総理に面会したいという人が来ておりますが」

中泉総理「誰だよこんなときに、総理はあんたなんかに会いたくないといってくれ！」

総理が言うと

副総理「わかりました。では華琳お嬢様にそのように伝えておきます」

ピクンッ

この言葉に総理は反応した。

中泉総理「バカモン！華琳お嬢様ならそう言わんか！すぐにお通ししろ！」

総理がこんなにペコペコしている理由は華琳の父である仁崇が光魔の後任として中泉を総理にしたからである。

よって彼は仁崇の娘である華琳にも頭が上がらないのだった。

そして

中泉総理「これはこれは華琳お嬢様、よくぞいらっしゃいまして」

華琳「無駄な挨拶は結構よ、それに今日は友人を連れてきたしね」

桃香「こんにちは」

蓮華「忙しいのに申し訳ない」

月「へぅ」

華琳の後に続いて桃香達も現れた。

華琳「時間がないから簡単に話すわ中泉、デーヴァには一切手を出さないよう軍隊に呼び掛けなさい！」

総理大臣を呼び捨てにする17歳

中泉総理「それは無理ですよ！？軍隊が攻撃の手を止めたら誰があのバケモノ共を倒すというのですか」

華琳「あら、あなたの目は節穴（ふしあな）なのかしら？軍隊で勝てないやつらを倒せる人物、それは彼らよ！」

ビシッ！

華琳は一刀達が戦っている方角を指差した。

中泉総理「そんな！？あんな高校生の集団が勝てるわけが…」

華琳「責任は全て私がとるわ！だから軍隊の攻撃をやめなさい！これ以上戦っても無駄に死者を増やすだけよ！」

華琳の言葉に

中泉総理「わかりました。世界中の大統領にも話しておきましょう」

中泉総理は心を打たれた。

副総理「（総理、あなたはやっぱりやる人なんですね）」

総理の行動に感動する副総理だが

中泉総理「（万が一彼らがやられても私は責任を負わないからな♪もし倒したならば私は更に一躍有名になれるかもしれん♪）」

よく深い総理大臣だった。

一方、一刀達とデーヴァの戦いは

サンチラ「ここは俺がやらせてもらうぜ！」

バンッ！

蛇神サンチラが相手になった。

一刀「だったら俺が…」

一刀はいこうとするが

ビリー「待ちなよマイフレンド、こいつの相手は俺達に任せてくれよ　」

レイ「そうだな修行の成果を試すにはちょうどいいし、海外勢があんな馬鹿（イワン）と同じだと思われたくないからな　」

アルベルト「戦力データをとるためにも実戦経験は必要だしね　」

ロビン「そういうことだ。ここは我々に任せてもらおうか　」

ルイ「やるっ！　」

みんなの行動に一刀は

一刀「わかったよあの蛇の相手は頼むぜ　」

笑顔で見送るのだった。

サンチラ「ケッ！俺達デーヴァに全員でかかっても勝てないのに５人で挑むとわな　」

ビリー「おいおい、あんたこそ人間の実力を馬鹿にしてるとひどい目に遭うぞ　」

レイ「実力を過信している奴ほどたいした奴はいないからな　」

サンチラ「何だと！＃お前ら全員ぶち殺してやるぜ！　」

シャーッ！

サンチラが気合いを入れると

ビリー「そんじゃあいくぜ！」

レイ「うむ！」

アルベルト「スタートです」

ロビン「我らが力で悪を打ち消してやる！」

ルイ「がんばる」

スッ

5人は気合いをためると

5人『超進化！』

ゴォッ！

5人は一斉に超進化した。

ルイ「守騎士護龍！」

ジャーンッ！

ルイも超進化ができるようになっていた。

サンチラ「見てろよテメェら！この5人を殺したら後の5人もぶっ殺してやるぜ！」

サンチラは言うが

蒼魔「どうやら今回俺達の出番はなさそうだな」

焔「あの蛇とあいつらじゃ実力が違いすぎだぜ！」

雫「あれ～、人を簡単に評価しない焔が評価するなんてどうしたんだろうね？」

焔「雫、殺すぞ＃」

ギロリッ

焔が雫を睨み付けると

雫「いや～ん焔がこわーい！ダーリン助けて～」

ぎゅっ

雫は一刀に抱きつく

一刀「（胸がー！／／／）って抱きつくなよ！」

少し惜しいかもしれないが一刀が言うと

雫「照れなくていいじゃん♪」

ぎゅ～っ！

雫はますます胸を当ててくる。

だが

ぎゅっ！

一刀「恋！？」

反対側の腕には恋が抱きついてきた。

恋「…雫だけずるい、恋もくっつく」

そんな問題ではないと思うが

一刀「二人とも、いい加減に離れてくれよ！」

しかし二人は

雫・恋『いや♪』

離れるのを拒否した。

その頃、議事堂では

桃香「何だか急に怒ってきましたよ＃」

蓮華「奇遇だな、私もだ＃」

月「へぅ、私もです＃　」

華琳「私達みんなが怒るってことは原因は一刀ね＃　」

ゴゴゴッ…！！

中泉総理「何だか少し怖いな！？　」

副総理「私も身震いしてきましたよ！？　」

四人が燃やす嫉妬の炎に怯える総理と副総理だった。

82時間目「デーヴァVSドラグーンナイツ」（後書き）

ビリー「ヘイ、ビリーだよ！いよいよデーヴァとの初戦だな。だが負けるわけにはいかないぜ俺の力を見せてやる！次回、『海外勢の力』カモンデーヴァ！」

83時間目「海外勢の力」（前書き）

一刀「竜宮神殿での修行を終えて俺達ドラグーンナイツはデーヴァと直面した。実はその頃桃香達は総理大臣にデーヴァへの攻撃停止を呼び掛けていた。そしてドラグーンナイツは海外勢の5人がデーヴァに挑むこととなったのだ」

83時間目「海外勢の力」

サンチラ「この蛇神サンチラ様が貴様らを殺してやるぜ！」

シュンッ！

サンチラは口から巨大な槍を飛ばしてきた。

ルイ「護ります！」

スーッ　パンッ！

超進化したルイが深呼吸した後に両手を重ねると

ルイ「『龍門防御陣』」

ゴゴゴッ…！！

ガキンッ！

ルイの正面に龍門が出現してサンチラが出した槍を弾いた。

サンチラ「なにっ！？」

サンチラが驚いている隙に

ビリー「余所見は禁物だぜ！」

ジャキンッ！

超進化したビリーがサンチラに愛銃のリボルバーとマグナムを向けると

ビリー「『雷撃波動弾（ライオットブラスト）』」

ドドンッ！

ビリーは雷でできた銃弾をサンチラめがけて撃った。

ビリリーッ！

サンチラ「ギャーッ！？」

そしてサンチラが痺れて怯んだところを

レイ「うまい具合に来たな」

ピョンッ！

超進化したレイがサンチラの頭上で待ち構え

レイ「『龍華段々脚（りゅうげだんだんきゃく）』！」

ドドンッ！！

連続の踵落とし（かかとおとし）をサンチラの頭に食らわした。

サンチラ「ぐほっ！？」

うまい具合にチームプレーができている海外勢だがはじめからこんなわけではなく、長く厳しい修行によってチームプレーをとれるようになったのだ。

そしてデーヴァは

マコラ「サンチラの奴め！いつまで遊んでやがるんだキー！＃」

デーヴァ達の目にはサンチラが手を抜いているように見えるが

インダラ「なるほどな」

インダラだけは納得したようで

インダラ「アンチラ、奴らの力を計測してみろ」

アンチラ「わかった」

ピコンッ！

兎神であるアンチラは耳を立てることによって相手の実力を計測することができるのだ。

アンチラ「なるほどサンチラでは敵わないはずだ」

マコラ「どう言うことだ？もったいつけずに教えやがれっキー！＃」

アンチラ「サンチラだって手は抜いているだろうが戦闘力は３００だ。だが、奴らの力は…」

アンチラの計測結果

ビリー　３７００
レイ　３５００
ルイ　３１００

ちなみに彼らも少しは手を抜いている。

アルベルト「さて次は僕の番だな」

ウィィーン

超進化したアルベルトは右腕をサンチラに向けると右腕につけられたアサルトカノンが作動し、

アルベルト「『アタックフォーメーションα（アルファ）』」

ドドドンッ！

アサルトカノンはサンチラめがけて撃ち出された。

サンチラ「ごべへっ！？」

撃たれて怯むサンチラ

ロビン「止めは私がささせてもらう！」

ジャキンッ

超進化したロビンは愛槍である『シルフィースピア』を取り出して風の気を送ると

ロビン「『風牙馬上槍(ふうがばじょうそう)』！」

ズプシッ！

ロビンの技は大蛇であるサンチラの体を貫いた。

サンチラ「ギェーッ！？」

バターンッ！

たまらずサンチラはその場に倒れた。

マコラ「おいおい！？いくらサンチラが油断していたからってデーヴァが人間なんかに負けるなんて！？」

ショウトラ「十数年前にも貴様は同じ様な台詞を言ったぞ」

アンチラ「ためしにあの二人も計測してみたがアサルトカノンを撃った方が３３００、槍で貫いた方が４０００だ。ちなみに最初にやられた馬鹿(イワン)は１５０だったぞ」

いつの間にかルイにまで抜かれていたイワンだった。

レイ「デーヴァとはこんな実力なのか？残りも全て倒してやるからかかってこい！」

レイが挑発すると

インダラ「フフッ、人間というものは数十年経っても油断するものだな」

ビリー「なんだよ負け惜しみか？」

と、その時

グニョグニョッ

死んだはずのサンチラの死体が急に動き出して

サンチラ「油断した人間共！」

ブシューッ！

海外勢に毒霧を撒き散らした。

ロビン「馬鹿な！？確かに貫いた筈なのになぜ生きている！？」

確かにサンチラの体には貫いた後にできた大穴が空いていたが

サンチラ「俺は偽死（昆虫が行う死んだふり）が得意でな、かすかに急所をずらして死んだふりさせてもらったんだよ！俺の毒霧はダイヤモンドさえ溶かすんだいくら超進化といえども骨まで溶けるぜ！」

サンチラの奇襲をついた見事な策だった。

ジュジューッ！

ビリー「ちっ！超進化の鎧が溶かされていくぜ！？」

アルベルト「この毒霧では満足に動けない！？」

ルイ「ひっ！？」

奇襲をつかれた海外勢に脱出する手だてはなかった。

サンチラ「ハハハッ！馬鹿な人間共め！」

サンチラはおおいに笑うが

ビュゴォーッ！

突然、風が吹き

ビューッ！

毒霧を吹き飛ばした。

サンチラ「馬鹿な！？いったい誰が！？」

サンチラが辺りを見渡してみると

一刀「なんとか間に合ったようだな」

バンッ！

そこには光の気で毒霧を吹き飛ばした一刀がいた。

サンチラ「テメェ、手を出すなと言われただろうが！＃」

サンチラは一刀が手を貸したことに怒ると

一刀「助けるなと言われて助けたのが馬鹿呼ばわりされるなら、俺は一生馬鹿で構わない！」

ズキュンッ！

一刀のこの言葉にインダラは反応した。

インダラ「（この言葉、数十年前にも聞いたことがあるな）」

実はこの言葉は数十年前、一刀の父である優刀も言った台詞である。

サンチラ「だったら馬鹿はさっさと死にな！」

シャーッ！

サンチラは大きく口を開けて一刀を噛み殺そうとするが

一刀「そう言えばいい忘れてたけど、死にたくなければ動かない方がいいよ」

サンチラ「えっ！？」

一刀が言った後

スパパンッ！

サンチラ「なっ！？」

全員『！？』

サンチラが動いた瞬間、サンチラの体はバラバラになった。

一刀「実はあんたが毒霧を出した時、隙だらけだったから何かあると思って切り裂いたんだけどね」

みんなは何という早業なんだと驚いていた。何故ならサンチラには見た感じ隙なんてなかったからだ。

サンチラ「この俺が人間ごときに殺られるなんて！？」

バタッ！

サンチラは今度こそ絶命した。

一刀「みんな、大丈夫か？」

一刀が海外勢に聞くと

ビリー「蛇が倒れたら毒霧が消えたな」

アルベルト「あれ以上食らっていたら少しやばかったね」

ロビン「恐ろしい奴だった！？」

ルイ「ありがとう　」

みんなは礼を言うが

レイ「余計なことを！あれくらいなら何とかできたのだ！　」

レイだけは礼を言わなかった。

その時、デーヴァ達は

マコラ「サンチラが殺られるなんて！？　」

メキラ「蛇のごとくしぶとさだけが取り柄だったというのに　」

ビカラ「ボガガァ！？　」

さすがのデーヴァ達も驚いていた。

だが

インダラ「フフフッ！やっぱり人間というものは面白きものだな。数十年前とまるで変わらない　」

インダラが笑うと

インダラ「人間共、貴様らに生きるチャンスを与える！これより１１日間我々デーヴァと貴様ら人間との戦争として『デーヴァゲーム』を行う！　」

一刀「デーヴァゲーム？　」

インダラ「説明しよう。これより１１日間の間、我々デーヴァは一日ごとにある国を攻める！人間共は我々デーヴァを倒すがいい。だがもし１１日間を過ぎても我々が一人でも生きていた場合、人質となっている数十年の戦士達は一人残らず死ぬ。ではさらばだ」

フッ

そしてデーヴァ達は一人残らず消えていった。

一刀「デーヴァとの戦争か　」

人類と神々の戦いが始まったのだった。

83時間目「海外勢の力」（後書き）

レイ「チャン・レイだ。デーヴァ襲撃に備えてドラグーンナイツは各地に散らばっていたのだが、何故か北郷が私と同じ中国に来てしまった。はっきり言おう、私は北郷が大嫌いだ！次回、『龍虎が交わる万里の長城』嫌いだというのに北郷のことを意識してしまうのは何故だ？」

８４時間目「龍虎が交わる万里の長城」（前書き）

一刀「初戦のデーヴァの相手は蛇神サンチラに決まり、海外勢が戦うことになった。海外勢達は修行によってサンチラより強くなりサンチラを追い詰める。だが、サンチラの死んだフリに引っ掛かり海外勢達は一気に危機に陥る。それを俺が助太刀しサンチラを倒すことに成功、そしてデーヴァは人類にデーヴァゲームでの戦いを言うのだった」

８４時間目「龍虎が交わる万里の長城」

十二神将（デーヴァ）による地球侵略という名のデーヴァゲームが開催されることになった。

後１１日間の間までにデーヴァを倒さなければ人質になっている優刀達の命が危ない！だが、デーヴァがどこに現れるかは分からないので一刀達龍神騎士団（ドラグーンナイツ）は各自世界中に散ってデーヴァの情報を集めることにした。

中国・万里の長城

レイ「うむ、やはり故郷の空気は素晴らしいものだな 」

ドラグーンナイツの一人チャン・レイは故郷である中国が心配で様子を見に来たのだ。だが、

一刀「うむ、やはり肉マンは本場の中国が一番美味しいな 」

レイの近くには何故かついてきた一刀が肉マンを食べていた。

レイ「貴様、なぜついてきたんだ？ 」

レイが聞くと一刀は

一刀「決まってるだろデーヴァの力は未知数なんだし、女の子を一人にするわけにはいかないからな 」

それなら何故レイについてきたかというと、恋と雫の実力は一刀が

よく知っているし、ルイは他のみんながついているからである。

その話を聞いたレイは

レイ「貴様は女だからという理由で私を馬鹿にするのか！＃」

急にレイはムキになって怒鳴り出した。

レイ「私に構うな！ここからは別行動だ！＃」

ダッ

そしてレイは走り出していった。

一刀「おいっレイ！？」

一刀もレイの後を追おうとすると

ガッシリ

何者かに腕をつかまれた。

肉マン店店主「お客さん、肉マンただ食いしちゃダメあるよ。料金５０元（設定的には１元は約１０円なので５００円）払ってよろし」

しかし一刀は元がいくらなのかを知らない

一刀「元っていくら？」

肉マン店店主「日本語わからんある　」

一方駆け出したレイは

レイ「北郷だけは違うと思っていたが所詮男というものは女を馬鹿にするようだな　」

彼女がこう思うのには理由があった。

小さい頃、武芸に優れていたレイは祖父が館長をしているカンフー道場に女でありながら門下生の男達を倒しまくっていた。

だが、レイに負けていった男達はみんな悔し紛れに『女相手に本気が出せるかよ』と言いまくりそれ以来レイにとって男は弱々しく情けないものと思うようになった。

レイ「元々私は男の力なんて信用してない！デーヴァの残り１１体は私が全て倒してやる！　」

グッ！

レイが拳を握ると

シュシュンッ！

レイ「！？　」

どこからか棒がレイに向かってきた。

レイ「なんのっ！　」

サッ

しかし見事にかわすレイ

実は彼女の家は大道芸人(サーカス)の家系でレイも小さい時から大道芸をやっていたため体が柔らかいのだ。

レイ「デーヴァだな、どこからでもかかってこい！」

レイが叫ぶと

ガサガサッ　ビュンッ

茂みの中から誰かが飛び出してきた。

？「さすがはドラグーンナイツの一人、馬鹿(イワン)ばかりではないようだな」

茂みから出てきたのは何と人間だった。

レイ「馬鹿な!?さっきの殺気は確かにデーヴァだったはず!?」

レイが驚いていると

？「わしらデーヴァをなめるなよ!あの姿（巨大な干支の獣姿）では目立つのでな人間に姿を変えさせてもらったのだよ」

※デーヴァの人間体を創造したい人は五胡兵士の仮面がそれぞれの干支になっていると思ってください。

メキラ「わしの名は虎神・メキラ、デーヴァ1の棒術使いだ！」

メキラが言うと

レイ「この中国で虎が暴れるとはな、中国では虎は神秘の獣とされているが相手がデーヴァならば容赦はしないぞ！」

※小説内での設定です。ちなみに西森は国外に出たことがありません。

そしてレイは気をためると

レイ「超進化！」

ゴォーーッ！！

レイの後ろから武人の龍が現れて

ガバッ

レイを抱き抱えると

パァッ！

ジャキンッ！ジャキンッ！

両手に龍の腕のような手甲（ガントレット）と両足には龍の鱗（うろこ）が描かれた鎧の武具、体は中央に陰陽の勾玉（まがたま）が描かれた凪のような鎧、そして頭には龍の角飾りのバンダナをつけたレイが現れた。

レイ「闘騎士武龍！」

バァーンッ！

これぞレイの超進化、格闘術に特化した闘騎士武龍である。

メキラ「デーヴァの一人メキラ、いざ参るぜ！」

シュシュンッ！

メキラはいきなり虎模様の棒・『宝棒』で攻撃してくる。

レイ「そんなものが通用するものか！」

ササッ！

しかし超進化して更にスピードに磨きがかかったレイにとって避けられないものではなかった。

レイ「蛇といい、虎といいデーヴァの攻撃は単調だな」

レイが言うと

メキラ「このメキラ様をあんな蛇と一緒にするなよ！」

するとメキラの持っていた宝棒は

バラリッ

バラバラに分かれて穏の九節棍より多い十二節棍に変化した。

メキラ「デーヴァ棒術・大河の舞い」

ジャララッ！

メキラの放った宝棒はバラバラに分かれてレイに襲いかかってきた。

レイ「数で攻めるということならばムダだ！」

スッ　　クルッ

レイはその場で少し回転すると

レイ「『龍陣防御円』！」

クルクルーッ！

カキカキンッ！

更に激しく回転し、向かってきた宝棒を全て弾いた。（この技はＮＡＲＵＴＯのネジの回天と似たような技である）

レイ「どうした？もう手は出せないか？」

全て弾いたレイがメキラに言うと

メキラ「人間はおろかなり、弾いた宝棒の数をよく見てみるのだな」

レイ「なに？　」

レイが弾いた宝棒の数を数えてみると

レイ「なにっ！？　」

なんと、十二本あるはずの宝棒が六本しかなかった。

メキラ「数を数えてなかったようだな、残りの数は…　」

すると

ゴゴゴッ…！！　　ドバッ！

レイ「なっ！？　」

メキラ「地の底さ！　」

いきなり宝棒の残りの六本が地面から現れた。

ドカカッ！

レイ「ぐはっ！？　」

さすがのレイも不意をつかれては避けられるはずもなく全弾食らってしまった。

メキラ「わが宝棒は触れただけで鉄をも切り裂く強靭な刃なり！　」

これならいくら超進化で防御が強化されていてもダメージは大きい。

バタッ！

そしてレイはその場に倒れてしまい

メキラ「さて、ドラグーンナイツもこやつを消せば残りは9人、それに比べて我らデーヴァは11人もいる。デーヴァゲームは我らデーヴァの勝利だぜ！」

メキラは余裕の顔で笑っている。

だが、レイは笑える状況ではなく涙を流していた。

レイ「（私が馬鹿（イワン）に続いての敗北者だなんて）」

情けなく感じる思いだった。

レイ「（体は動けそうにないしこのまま見す見す殺されるのも悔しい！）」

イワンや及川はギャグキャラなのでデーヴァの攻撃を受けても多少は平気だったが、レイはギャグキャラではないので食らえば死ぬ確率だってあり得る。

レイ「（どうせ死ぬのならば最後に北郷に謝りたかったな）」

メキラ「では、止めをさしてやる！」

シュシュンッ！

十二節に分かれた宝棒が再び一つになってレイに襲いかかる。
レイですら諦めて死を決意したその時
ガキンッ！
メキラ「なにっ！？」
レイ「（えっ！？）」
メキラの放った宝棒は
一刀「危なかったな！？」
バァンッ！
超進化した一刀によって防がれていた。
一刀「レイの気を探って来たら気が弱々しくなっていたからね早く来てよかったよ」
そして一刀は首をレイからメキラに向けると
一刀「さてとデーヴァ、ここから先は俺が相手をするぜ！」
メキラ「面白い。この我を油断したサンチラと同じだと思うなよ」
スッ
メキラは宝棒を構えると

メキラ「大河の舞い！」

シュシュンッ！

一刀に向かって宝棒を飛ばしてきた。

レイ「気を付けろ！それは…」

先に技を食らったレイが説明しようとすると

一刀「大丈夫」

スッ

レイの話を聞かずに一刀は気をためると

ニュインッ！

ニュインッ！

両肩にあった玄武の首が動き出して

一刀「聖俄龍鋼重波！」

ズババッ！

玄武の口からエネルギー波が放たれて一つは前にもう一つは地面に放たれた。

シューッ

メキラの放った宝棒は十二本全部がエネルギー波によって消滅してしまった。

メキラ「馬鹿な!?なぜ地面の宝棒までわかるのだ!?」

すると一刀は

一刀「よく気配を読めば何かが迫ってくるってわかるんだよ」

メキラ「おのれっ!こうなれば肉弾戦で…」

スッ

メキラは構えるが

一刀「格闘戦ならばレイ、頼むぜ」

一刀が言うと

シュッ!

レイ「心得た!」

宝棒によって受けたダメージを回復させたレイが空高く跳んで

レイ「『飛龍光神脚(ひりゅうこうじんきゃく)』!」

キィーンッ!　ドカッ!

メキラに必殺の蹴りを食らわした。

メキラ「この私が負けるなんて嘘だぁー！？」

ドカンッ！！

メキラは消滅した。

一刀「さすがだなレイ」

一刀が言うと

レイ「ウォーアイニィー」

一刀「えっ？」

中国語を知らない一刀にさりげなく『私はあなたを愛する』というレイだった。

そしてレイの考えは

レイ「（男は北郷以外は軟弱者）」

に変わったという。

８４時間目「龍虎が交わる万里の長城」（後書き）

焔「焔だ。情熱の国、スペインに向かった俺はデーヴァの一人と出会ってしまう。俺の新しい力を試すにはちょうどいい相手だぜ！次回、『燃えろ焔！』燃え上がれ獄炎よ！」

85時間目「燃えろ焔！」（前書き）

一刀「中国・万里の長城にレイと向かった俺、だが何故かレイを怒らせてしまいレイは俺を置いて先にいってしまう。だが一人になったレイの前にデーヴァの一人虎神メキラが立ちはだかった。レイは超進化して戦うがメキラの技に苦戦する。そこへ俺が現れてレイと協力してメキラを倒すのだった」

85時間目「燃えろ焔！」

情熱の国、スペイン

この場所に焔がデーヴァの偵察としてやって来ていた。

※西森は国外に出たことがありません。よってこの国にそんな街は無いぞ！というツッコミは控えてください。

スペインの中でも闘牛が盛んな街、レッドロー

闘牛士「オーレッ！」

サッ

闘牛士がうまく闘牛の相手をしているなか

ガツッ！

焔「しかしまぁ海外に行かせてくれるなんて曹操グループもたいした金持ちだぜ」

一刀達が海外に行く旅行金は全て曹操グループの会長代理である華琳が出していた。（ただし、行きと帰りの運賃のみで遊ぶ金はもらっていない）

焔「さてとさっさとデーヴァを見つけてやるとするかな」

ガタッ

焔が腹が減っては戦はできぬということで立ち寄ったホットドッグ屋から立ち去ろうとすると

ワーワーッ！？

闘牛場の方が騒がしくなってきた。

焔「もしかしてデーヴァか！？」

ダダッ！

そして焔は闘牛場めがけて走っていった。

店主「ホットドッグ代払いやがれー！」

ホットドッグ代も払わずに…

焔「今忙しいんだ！金なら曹操グループに取り立ててくれ！」

闘牛場

闘牛士「ひぃーっ！？」

闘牛士は腰が抜けて震えていた。

バサラ「我が同士である猛牛を人間の見世物にするとは許さぬぞ！」

そこにはデーヴァの一人バサラが闘牛士の前に立ちはだかっていた。

ジャキンッ！

バサラは闘牛士に黒の双剣『宝剣』を向けると

バサラ「貴様も見世物にしてやるわ！」

スパパーッ！！

闘牛士に剣を振りまくり

ハラリッ

闘牛士「へくしゅんっ」

闘牛士の髪を坊主にし、服を切り刻んで裸にした。

バサラ「今度は肉を切り刻んでやるぞ」

ジャキンッ！

闘牛士「ひっ！？」

闘牛士の絶体絶命のピンチの時

ゴォッ！！

どこからか火炎弾がバサラめがけて飛んできた。

バサラ「こんなものっ！　」

ガキンッ！

しかしバサラは宝剣で火炎弾を軽く防いだ。

闘牛士「ひぃーっ！？　」

ピューッ！！

その隙に裸で逃げ出す闘牛士

バサラ「この反応、ドラグーンナイツの一人だな　」

バサラが言うと

焔「ご名答、まさかホントにデーヴァがいるとはな　」

バンッ！

壁の後ろから焔が現れた。

焔「俺は北郷と違って手加減しないたちでな、悪いがとっとと終わらせてやるぜウシ！　」

ゴォーーッ！！

焔は気をためると

焔「超進化！　」

ズゴォーッ！！

焔が叫んだ後、炎の龍が焔の後ろに現れて

ゴォーーッ！！

焔に火炎を浴びせると

ジャキンッ！

炎の中から深紅の鎧を身に纏い、胸の中には炎が見え、背中には豪炎のごとく黒い翼が生え、両腕にはマグマブラスター付きの炎の鎧、両足には龍の鱗が撒かれたような鎧、そして頭部は赤い龍の兜を装着した焔が現れた。

これぞ焔の超進化、獄騎士炎龍である。

焔「あの先公（飛琳）との特訓の成果を見せるにはちょうどいい相手かもな」

ジャキンッ！

焔は腰から大剣『邪魂大蛇丸』を取り出した。

バサラ「ほほぅ、デーヴァ1の剣の使い手である我に剣術で挑むとはな」

他に剣を使う奴がいないだけな気もするが

バサラ「うるさい！貴様ごとき我の敵ではないことを教えてくれるわ！」

バッ！

バサラは宝剣を持って焔に突進してきた。

焔「ほぅ、ウシは赤い色を見ると興奮するってね」

実は案外そうでもなく、ウシはヒラヒラしている物めがけて突進するらしい（確証はありません）

サッ　チュンッ！

バサラの突進を軽く避ける焔

だが、

ドギュンッ！！

焔「なっ！？」

確かに避けたはずなのに焔は何故か重い一撃を食らってしまった。

バサラ「我が突進は完全に避けぬ限り少しでもかすれば打撃を負うのだよ」

焔「マジかよ！？」

例えるならかすっただけでもトラックに跳ねられたような一撃なのだ。もし直撃したらロケットに跳ねられるより重い一撃を食らうようなものである。

バサラ「隙ありだ！」

焔「しまった！？」

そして焔が本の少しの隙（約2秒）を見せた隙に

ドグボッ！！！！！

バサラの突進が焔に直撃した。

焔「ガボッ！」

体の骨は数本折れ、口から大量の血を流し

バタンッ！

焔はその場に倒れた。

バサラ「我は先に殺られたサンチラとメキラのように弱くはないぞ！それにしても貴様は弱いな」

ピクンッ

このバサラの言葉に焔は反応した。

バサラ「こんな雑魚より二人を倒した北郷の相手をした方がよかっ

たわい　」

ピクピクンッ！

焔「テメェ…　」

ボボボッ…

焔の怒りが高くなると同時に胸の炎が大きく燃えてきた。

この胸の炎は焔と連動しており豪炎のごとく炎が高ぶった時、焔の最大級の力が炸裂するのだ。（今で大体５０％）

バサラ「それにしても貴様には闇の気を感じるな。どうだ、貴様さえよければ我の部下にしてやるぞ。元々貴様は仲間というのが嫌なはずだろう　」

バサラが言うと

焔「へっ！以前の俺なら賛同していたかもしれないな、だが以前そんな軽い口車に乗ってしまい光魔の奴に利用されまくったんでな。それに俺は北郷に出会ってから何だか気分がよくなったんだ仲間というのもいいかもしれないってな！　」

ガバッ！

ゴゴゴッ！

焔は重傷にもかかわらず立ち上がり、それと同時に胸の炎が燃えまくってきた。（８０％）

焔「いくぜ！」

スッ

焔が片手を出すと

ボォッ！

手から飛琳の剣である『超絶炎龍丸』が出現した。

焔「あの先公との修行によってあみだした炎の二刀流だぜ！」

それは学園対抗武道大会が終わって数日の頃

光魔の悪巧みを知らずに協力させられたというデスドラゴンナイツのメンバー（知っていて協力した映者を除く）は警察の事情聴取を終えてそれぞれの道を進んでいた。

神華と闇華の兄弟は恋と孤狼にリベンジするため修行に入り

嵐は華佗にリベンジするため今度は華佗の得意分野である医学で戦うことを決意し勉強中

零霧は美男子を探す旅に出掛け

紫電と地王は仲良く修行中

死龍は弟である九龍を越えるため実家で修行中

森羅先生はもっと植物を勉強しら植物保護プロジェクトを実地中（いずれは飛琳との結婚を夢見ている）

雫は今度一刀と出会ったときのため美しくなりに行き

映者は未だに警察の取り調べを受けていた。

そしていずれはみんなで聖フランチェスカ学園に転入することにしていた。

そして焔はというと

飛琳「何か用？」

焔「とぼけるなよ！森羅先生から聞いたぜあんた炎の使い手らしいじゃねぇか」

焔は飛琳のところを訪ねていた。

焔「頼みがある！俺を強くしてくれ！北郷のあの超進化という力を俺もものにしたいんだ！」

焔が頼み込むと

飛琳「嫌！と言いたいとこだが、若き戦士は多い方がいい教えてあげるよ」

そして修行が始まったのだが

飛琳「まずは炎と友達になることだ。このたき火を抱きかかえなさ

い！」

焔「わかったぜ！」

ギュッ！

もちろんそんなことをすれば…

焔「あつーいっ！！」

いくら炎の使い手でもあついのは当たり前である。

焔「（だが、これに耐えてこそ修行になるんだ！）」

焔はこれも修行の一つだと思っていたが

飛琳「（久々にからかいがいのある人物に出くわしたものだ♪）」

実はこれは飛琳のイタズラだった。

そんなこんなが続き数週間後

ゴォーッ！

焔「やった！修行のおかげで超進化ができたぜ！」

ホントは焔に素質があっただけなのだが（ほとんど修行は飛琳のイタズラ）

飛琳「厳しい修行の成果だ！更にもっと強くなるよう修行するぞ！

」

焔「おぅっ！」

焔は騙されたとも知らずに飛琳を崇拝していた。

そしてデーヴァ襲撃の大晦日の夜

焔「何であんたは行かないんだよ！正義感が強い北郷のことだから『地球は俺が救ってやる！』って言うに決まってるぜ！」

飛琳「確かにお前の言う通り俺がいけばデーヴァなんて簡単に倒せるだろう、だがこの戦いは若きものだけで戦うのだ！これもまた修行の一つなのだよ！」

ビシッ！

飛琳に言われた焔は

焔「なるほどな、わかったよデーヴァなんて俺が軽く倒してやるぜ！」

飛琳「よくぞ言ったさすがは我が弟子だ！御守りとしてＭＤと我が刀を持っていくがよい」

スッ

飛琳は焔にＭＤと超絶炎龍丸を渡した。

焔「あばよ先生！」

ダッ！

そして焔はフランチェスカに向かっていった。

焔「先生、今こそこの刀とＭＤ使わしてもらうぜ！」

カチッ

焔がＭＤの電源を入れると

『前髪かすめた…』

ＭＤには数え役満姉妹の歌である『ＹＵＭＥ　蝶ひらり　天和ｖｅｒｓｉｏｎ』が収録されていた。

焔「…」

これを聞いた焔は

焔「テンションＭＡＸだぜーっ！」

ゴゴゴッー…！！

胸の炎がものすごい勢いで燃え上がった。（１００％）

実は焔は数え役満姉妹、それも部屋中を天和のグッズで敷き詰めるほどの天和の大ファンであった。（もちろん修行時代の時に飛琳にその事がバレている）

焔「テンションＭＡＸな俺にもうお前の攻撃は通用しないぜ！」

バサラ「何をこしゃくな！＃」

ドドーッ！

バサラは再び焔に突進を仕掛ける。もしもう一度くらえば胴体が引きちぎれてしまう

しかし焔は慌てずに

焔「いくぜ炎の二刀流合体技・『日輪の焔龍の龍撃（レッドドラゴンバーストアポロ）』！」

ゴォーーッ！！

焔の放った炎はものすごい勢いで燃え上がり

バサラ「なにっ！？」

ゴォーーッ！！　バクッ

バサラ「ギャーッ！？」

突進してきたバサラをそのまま飲み込んでしまった。

そして後に残ったのは

カランッ

バサラの宝剣だけであった。

焔「フンッ！デーヴァなんて大したこと…」

バタンッ！

そう言って焔は気を失って倒れてしまった。

なお日本に帰国後、華琳からホットドッグの代金を数倍返しで払うはめになったのは言うまでもない

８５時間目「燃えろ焔！」（後書き）

ルイ「ルイです…。私のような小さな女の子がなんでドラグーンナイツに選ばれたのかが不思議です。苦しい生活にも飽きてしまいましたがそんな時、一人の少女と出会いました。次回、『眠りの街の美女』ありがとうございます〇〇さん 」

西森「ここで１００話目の話の途中経過発表です。
この中のいずれかの話が選ばれます。果たして誰がメインなのか？

・桃香
・恋
・孤狼
・剣崎美紀
・愛澤小百合
・北郷優刀
・蒼魔
・一刀が来る前の桃香達の話
・フランチェスカ学園創設の歴史

締め切りは８８時間目投稿まで（それ以降は受け付けません）

この他にもまだまだキャラの話は募集中です。

なお、結果は１００話目にて明らかになります 」

86時間目「眠りの街の美女」（前書き）

一刀「スペインに向かった焔はそこでデーヴァの一人バサラと出会い戦闘になる。バサラの強さに苦戦する焔だが飛琳先生との特訓を思い出して見事バサラを撃破するのだった」

86時間目「眠りの街の美女」

フランス・パリ

ここにはドラグーンナイツの一人フランソワーズ・ルイが故郷を心配して帰ってきていた。

とあるお城のような豪邸

ルイ「ただいま帰りました　」

ルイが言うと

ガチャリッ！

豪邸の扉が開いて

メイド達『お嬢様、よくぞご無事で！』

たくさんのメイドが出てきた。

メイド長「戦いでお疲れでしょう、ゆっくりとお休みください　」

実はルイはフランスでは有名な貴族の産まれなのだ。

ルイの部屋

ルイ「はぁ…、もし私の家柄がドラグーンナイツの皆さんに知られたら皆さんは普通に接してくれなくなっちゃう　」

昔から家柄が有名だということで友達ができなかったルイにとって一刀達ドラグーンナイツは戦友であると同時に友達でもあった。

ルイ「私の力は守りの力、皆さんを守るしか私に取り柄がない」

実はデーヴァが現れた時、ルイに龍の力が覚醒し、直ぐ様デーヴァを退治しに向かおうとしたのだがメイド長であるクラリスに止められてしまい危ないことをしない、自分から戦わないということを条件にデーヴァ退治を許可されたのだった。

ルイ「クラリスさんごめんなさい、私だって戦いたいのです」

シュルルッ

そしてルイはロープを使って二階にある自分の部屋から脱走するのだった。

フランスの街並み

ルイ「街はとても賑やかですね」

とてもあと数日で地球がデーヴァに乗っ取られるかもしれないのにフランスの街は賑やかだった。（それもそのはず、華琳の命によってデーヴァゲームの所載は国民には一切知られていないのだから）

貴族服を脱ぎ捨てたルイがボロ布を身に纏い街を歩いていると

ドンッ！

ルイ「きゃっ！？　」

通行人とぶつかってしまった。

ゴロツキA「いててっ！何ぶつかってるんだよ骨が折れちまったじゃないか！　」

ゴロツキB「治療費出してもらおうか　」

ゴロツキが言うと

ルイ「そんな軽くぶつかったくらいで大袈裟ですよ　」

ルイが言うとゴロツキは

ゴロツキA「ふざけるなよ！あんたはさっさと金だしゃいいんだよ！＃　」

ゴロツキB「痛い目見たくなけりゃさっさと出しな　」

グイッ！

ルイの首が捕まれる。だが周りの人は助けようとせずに見て見ぬふり

ルイ「うっ　」

ルイがピンチになったその時

キィーンッ！

ゴロツキA「うっ！？」

バタリッ

ゴロツキAは股を押さえながら倒れた。

？「へぇ～、か弱い女の子をいじめるから男じゃないって思ったけどチ○コがあるから男のようだね」

ゴロツキAが倒れた原因はゴロツキAの後ろにいた黒い外套を身に纏った女の子がゴロツキAの股間をおもいっきり蹴ったからだった。

ゴロツキB「この野郎！」

ブンッ！

ゴロツキBが女の子を殴ろうとするが

サッ！

女の子は拳をかわし

？「せいやっ！」

ドゴンッ！！

ゴロツキB「ゲボッ！？」

女の子はゴロツキBの胸に正拳突きをおみまいし

バタリッ！

その場に倒れるゴロツキB

？「ホントに男って弱いわね、どんどん強くなるお兄ちゃんとは大違いよ」

女の子が言うと

ルイ「あのぅ、危ないところをどうもありがとうございました。私はフランソワーズ・ルイ、ルイと呼んでください」

一刃「ルイちゃんか、私の名前は一刃、北郷一刃よよろしくね」

忘れている人もいると思うが彼女は一刀の実の妹の一刃である。家族でも上位級の強さをもつ彼女は武者修行のため世界中を旅していた。

ちなみに以前は一刀より強かったものの今では生身なら一刀と互角クラスである。（一刀が強くなったため）

街の喫茶店

一刃「へぇ～、ルイってお兄ちゃんと同じドラグーンナイツなんだ！？」

ルイ「私も驚きましたよ一刀さんに妹がいたなんて」

一刃「お兄ちゃんって家族のことは話したがらないからね」

その理由は祖父の刃に原因があった。

二人が仲良く会話をしていると

♪～

どこからか素敵なメロディーが流れてきて

バタリッ　　バタリッ

ＺＺＺ～

メロディーを聞いた人は次々と眠ってしまった。

一刃「何なのよこれ…」

バタリッ

一刃「ＺＺＺ～」

ルイ「一刃さん!?」

一刃さえも眠ってしまった。

そしてもちろんこんなことができる奴といえば

ハイラ「メェーッ!」

デーヴァの一人、羊神のハイラの仕業だった。

ルイ「あなたは確かハイラ!?」

ハイラ「我が名を覚えているとは光栄だメェー!我が歌を聞いたものは永遠の眠りにつき、我が命ずるまで起きることはなく、悪夢を見続けるのさ」

ルイ「なんですって!?一刃さん」

ユサユサッ

ルイは一刃を起こそうとするが

ハイラ「ムダだ。我が歌を聞いて起きたものはいない、だが欠点としては貴様らドラグーンナイツには効かぬがな」

だからドラグーンナイツの一人であるルイはハイラの声を聞いても眠らなかったのである。

ハイラ「貴様の能力はサンチラとの戦いで研究ずみだ。守ることしかできぬ貴様に我を倒すことはできん!」

グイッ!

ハイラは武器である宝弓を構えると

ハイラ「くらえっ!」

ヒュンッ!

ルイめがけてうちはなった。

ルイ「ひっ！？」

パァーッ！

驚いたルイはとっさに龍の力を発動させて

ゴゴゴッ…！！

ルイの後ろから光に包まれた龍が現れると

ゴーッ！

龍はルイを守るようにとぐろを巻いて

ガキンッ！

ハイラの弓を防いだ。

ゴゴゴッ…

そして龍はとぐろを巻くのをやめると龍の中から

両手には結界籠手（アームシールド）、体は神父のような格好、手にはヒーリングロッドを持ち、頭には龍の姿が描かれたヘルメットをつけたルイが現れた。

ルイ「守騎士護龍！」

ジャキンッ！

これがルイの超進化、護騎士守龍である。

ハイラ「守るだけの力に何ができるというのだ！食らうがよい！」

シュシュンッ！

ハイラは次々と矢を放ってきた。

ルイ「『龍門防御陣』」

ゴゴゴッ…！！

ガキキンッ！

だがハイラが放った弓は全てルイに防がれていた。

ハイラ「だがいつまでもつかな！」

シュシュンッ！

相変わらず弓を射続けるハイラ。このままでは通用しないとわかっているはずだが

ピシッ！　ピシシッ！

どんどん龍門防御陣にヒビが入っていき

バキンッ！

龍門防御陣は破壊されてしまった。

ハイラ「ハハハッ！ただ単に矢を射続けた訳ではない。ちゃんと計算して狙ったのだよ！」

どんなに固いものでも数ミリの穴さえ空けば簡単に崩れてしまうのだった。

ヒュンッ！

バリアが破れたところにハイラが矢を放つ

スパッ！

ルイ「きゃっ！」

矢はルイの腕を掠めてしまった。

ハイラ「今度は心臓めがけてやるぞ！」

グッ

ハイラが弓を引こうとすると

一刃「…グルルーッ！」

寝ている一刃が唸りだしていた。

そして

一刃「うがーっ！」

バキンッ！

ハイラ「なっ！？」

寝ぼけた一刃はハイラに攻撃を仕掛けてきた。

ルイ「何が起きてるんですか！？」

別に一刃の寝相が悪いわけではなく、これには理由があった。

ハイラの声を聞いて眠った者は悪夢を見る。一刃にとっての悪夢は驚きの連続だった。

そして忘れている人もいると思うが一刃はものすごく驚くと暴走形態に変化し、本人の気が済むまで止まることはないのだ。（ちなみに暴走形態の一刃の力は肉弾戦なら現在の一刀ですらも越える）

一刃「うがーっ！」

つまり一刃は眠りながら暴走形態になっているのだ。

ハイラ「おのれっ！」

シュシュンッ！

ハイラは一刃に攻撃を仕掛けるが

サササのサッ！

一刃は全て避けきった。

ハイラ「こうなったら私の全身全霊をかけた最強の一撃を食らうがよい！」

グッ！

ハイラは弓を構える。

だが

ルイ「（最強の一撃！ならば今しかありませんね）」

この時、ルイが何か秘策を思い付いた。

そうとは知らずに

ハイラ「『羊倒弓肉（ようとうくにく）』！」

シュンッ！

ハイラは渾身の一撃を一刃に放った。

そしてそれと同時に

ルイ「『護魔反射壁（ごーまはんしゃへき）』！」

シュパンッ！

ルイがハイラの回りにバリアを放った。

ハイラ「何の真似だ？」

ハイラが不思議がっていると

ググッ！

ハイラの放った弓が

ボインッ！

ルイの貼ったバリアに跳ね返されて

ザクッ！

ハイラ「なっ！？」

ハイラの体を貫いた。

ルイ「『護魔反射壁』は相手の技を跳ね返す技。あなたの最大の技でも跳ね返らせるように力をおもいっきり溜めましたよ！」

つまりハイラは跳ね返ってきた自分の攻撃を受けてしまったのだ。

ハイラ「このデーヴァの私が自分の技で散るなんて…」

シュ～ッ

そしてハイラは宝弓を残して消滅してしまった。

一刃「はれっ？」

ハイラが消滅したことにより眠っていた一刃は目を覚ました。

一刃「何だかすごい気を感じたけれど何が起きたの？」

※一刃は暴走している間の記憶は覚えてないのだ。

しばらくして

一刃「それじゃあルイ、お兄ちゃんによろしく言っといてね♪」

ルイ「はい、一刃さんも元気でいてください」

一刃「それじゃあまたね♪」

ダッ！

そして一刃はまた武者修行の旅に出ていった。

ルイ「（今度出会ったら私の家に招待しますからね。そしてデーヴァとの戦いが終わったらドラグーンナイツの皆さんも招待しましょう）」

86時間目「眠りの街の美女」（後書き）

ロビン「エドガー・ロビンだ。故郷イギリスの警護をしていた私はある男と出会い戦いになってしまう。だがその最中にデーヴァが現れてしまいイギリスは大変なことになってしまう。次回、『先輩からの教え』私が戦っている最中にイギリスが！？」

87時間目「先輩からの教え」（前書き）

一刀「フランスに帰ってきたルイはなんとお嬢様！家の中にいると息苦しくなるルイは外に抜け出して偶然一刃に出会う。仲良くする二人だがそこへデーヴァの一人であるハイラが現れて一刃は眠らされた。力は防御のみだと知られているルイは戦うがハイラにバリアを破られてしまい苦戦するも一刃が暴走し、ハイラに少しの隙ができたところに逆転の技を仕掛けるのだった」

87時間目「先輩からの教え」

イギリス・ロンドン

とある貴族の宮殿

ここではドラグーンナイツの一人であり、ロイヤルガーディアン（女王護衛部隊）の隊長でもあるエドガー・ロビンが女王の警護をしに来ていた。

女王「ロビン、あなたの活躍には期待していますよ」

イギリスの女王　エリザビス女王四世

ロビン「女王様からそのような言葉を聞けるなんて私は嬉しゅうございます」

ロビンの家は先祖代々女王の護衛をつとめているのだ。

隊員「見ろよ隊長だぜ！」

隊員「地球の平和は隊長にかかってるんだってな」

ガヤガヤ

ロイヤルガーディアンの隊長であるロビンは隊員からも人気が高かった。

ロビン「騎士（ナイト）たるものいついかなる時に敵が現れるか分からないのだから鍛練をしなくてはな」

そしてロビンが鍛練をしに中庭に行こうとすると

隊員「隊長！怪しい男が宮殿の裏庭をうろついていたので捕らえました」

ロビン「怪しい男…」

この時、ロビンは思った。他のドラグーンナイツに聞いたところデーヴァは人間に化けることができるということを聞いたことがあった。

ロビン「もしやその者は！？」

ダッ！

ロビンは直ぐ様裏庭に向かっていった。

何故ならロビンはそいつがデーヴァの一人だと思ったからだ。

裏庭

？「放しやがれよ！俺はちょっとこの中を進んだ方が近道だと思ったから進んだだけだっての！」

ロビンが裏庭に向かっている頃、一人の男が隊員達に囲まれていた。

隊員「嘘つくな！目的は女王の暗殺か泥棒だろうが！」

隊員「今すぐ牢屋にぶちこんでやるから覚悟しとけよ！」

グイッ！

隊員達は男の話を聞かずに乱暴に扱うと

？「痛いじゃねぇかこの野郎！」

ガツンッ！

男は隊員の頭を殴った。

隊員「おのれっ！今のは公務執行妨害だぞ」

？「ふんっ！口で言ってわからない奴らには体で教えるしかないようだな」

コキコキンッ！

男は両手を合わせて音を鳴らして臨戦態勢に入ると

隊員「生意気な奴め！返り討ちにしてくれる！」

ババッ！

隊員達はぞろぞろ集まってきて臨戦態勢をとった。

そしてしばらくして

ロビンが裏庭に着くと

ロビン「何だこれは!?」

ロビンは驚いた。回りには仲間であるロイヤルガーディアンの兵士達が倒れていてその中央には

?「そっちから売ってきた喧嘩だろうが!」

男が兵士の襟をつかんで上にあげていた。

これを見たロビンは

ロビン「(あの強さ、鋭い目付き、そしてあの狂暴性、間違いないあいつはデーヴァだ)」

と誤解していた。

ロビン「そこのお前、雑魚いじめはそこまでにしたらどうだ」

?「あんっ、誰だよお前?」

男がロビンに聞くと

ロビン「私はロイヤルガーディアンの隊長、エドガー・ロビンだ。貴様のような邪悪な存在は私が消してくれる!」

ビシッ!

ロビンが男に言うと

？「何いってるんだよ?俺を消すなんてバカな話は…」

ロビン「問答無用！」

シュッ！

ロビンはいきなり男に愛槍『シルフィースピア』を繰り出した。

？「あぶねぇじゃないかよ!売られた喧嘩なら買ってやるぜ！」

バッ！

男はロビンに飛びかかった。

ロビン「こいっ！私が成敗してくれる！」

ドカカッ！

そして二人は戦いを始めた。

数時間後

ロビン「やるな貴様ハァハァ」

？「アンタこそ少しはやるじゃねぇかハァハァ」

二人は戦いで息を切らすほど疲れていた。

孤狼「アンタの名はロビンだったよな。俺の名は孤狼だよろしくな」

孤狼が言うと

ロビン「（おかしいぞデーヴァにそんな名前の奴はいなかったはずだが）」

ロビンが考えていると

隊員「隊長！大変です。宮殿内にデーヴァが現れました」

ロビン「何だと！？では貴様は一体」

ビシッ！

ロビンが孤狼を指さすと

孤狼「何だよデーヴァって？」

学園対抗武道大会終了後、自分がまだまだ未熟だと悟った孤狼はそのまま海外へ修行の旅に出掛けてしまいデーヴァのことを知らない。
（ラジオですら持っていかなかった）

ロビン「しまった女王様の命が危ない！？」

ダッ！

ロビンは直ぐ様女王の部屋に急いだ。

孤狼「おい待てよ！戦いを中途半端で終わらせる気か！」

孤狼が叫ぶと

ロビン「今は貴様の相手をしている暇はない！」

ダダッ！

そしてロビンの姿は見えなくなってしまうと

孤狼「おいっお前！」

隊員「へっ？」

グイッ！

孤狼は隊員を一人捕まえると

孤狼「デーヴァって何だ？一から教えやがれ！＃」

隊員「はっはい！？」

隊員はびびって孤狼に全てを話した。

その頃、女王の部屋

女王「ひぃっ！？」

怯えるエリザビス女王の前には

クビラ「チチチッ！世界的に有名な女王の権力を使えばデーヴァが世界支配するのも簡単でちゅ！」

デーヴァの一人である鼠神（ネズミ）クビラが立ちはだかっていた。

女王「ロビンはどこじゃ！私を守りたまえ！」

クビラ「助けを呼んだところで誰が来るもんかでちゅ！権力を利用しようと思ったけれども考えてみたらこんなオバサンにそんな権力があるはずないでちゅのでさっさと死ぬでちゅよ！」

ブンッ！

クビラは自分の武器である宝杵を女王に向けた。杵といっても刃付きである。

女王「ひぃっ！？」

女王のピンチの時

ガラッ！

ロビン「大丈夫ですか女王様！」

扉を開けてロビンが現れた。

クビラ「貴様はドラグーンナイツ！？ヤバイからさらばさせてもらうでちゅ！」

シュンッ！

クビラの能力は高速移動。スピードならばデーヴァで一番早いのだ。

ロビン「逃がしはしないぞ！」

ス～ッ！

ロビンは気を溜めると

ロビン「超進化」

ビュゴーッ！

ロビンが言った後、竜巻がロビンを包み込んで中から現れたのは

ジャキンッ！

所々に龍の鱗のある銀の鎧に身を包み、兜は龍の頭部の形、背中には素早く動くための小さな翼が生えたロビンが現れた。

これがロビンの超進化、嵐騎士風龍である。

ロビン「デーヴァめ、逃がしはしないぞ！」

ギュイーンッ！

ロビンは背中の翼を広げて高速移動を開始した。

クビラ「チチチッ！逃げるが勝ちでちゅよ！」

デーヴァであるはずのクビラが逃げる理由、それはクビラがデーヴァの中でも弱いからである。（実力的にはサンチラより下）

なのでクビラはサンチラを倒したロビンの相手をするわけにはいかなかったのだ。

クビラ「俺は逃げ足だけなら誰にも負けないでちゅ！」

クビラが笑いながら走っていると

ドグボッ！！

クビラ「ぐへっ！」

突然どこからか来た攻撃を食らってしまった。

クビラ「今攻撃したのは誰でちゅか！」

クビラが怒ると

孤狼「俺だよネズ公」

バンッ

柱の後ろから孤狼が現れた。

孤狼「お前のせいでせっかくの喧嘩が中断しちまったんだ。この落

とし前はつけさせてもらうぜ！＃」

ゴゴゴッ…！！

孤狼は戦いを邪魔されてすごく怒っていた。

クビラ「このデーヴァであるクビラ様に出会うとは運のない奴め！
あの世で後悔するでちゅよ！」

バッ！

クビラは孤狼に飛びかかっていった。だが孤狼の実力は読者の知るように

孤狼「邪魔なんだよお前はよう！＃」

ドグボッ！！

クビラ「ぐへっ！」

孤狼の右ストレートをクビラはもろに食らってしまった。

そしてぶっ飛ばされたクビラが飛んでいった先には

ロビン「あれはクビラ！」

ロビンが駆け出していた。

ロビン「『一角獣の突進（ユニコーンタックル）』！」

ダダダッ！

ロビンは槍を構えながら走ってくると

ドンッ！

クビラに激突した。

クビラ「俺って何しに現れたんでちゅか？」

シュンッ！

そしてクビラは宝杵を残して消えていった。

女王の部屋

女王「ロビン、あなたには失望しましたよ！大事な時に警備をサボって戦闘するなんてバカらしいですわ」

ロビン「申し訳ありません女王様！」

ロビンが女王に謝っていると

孤狼「おい女王、こいつは一番にお前を助けに来たんだぜ礼の一つも言ったらどうだよ！」

女王に対して失礼な態度をとる孤狼

ロビン「バカか貴様は！今ならまだ間に合うからさっさと謝れ！」

孤狼「やだね！どうしても俺を謝らせたかったら俺に勝つことだな！」

その提案にロビンは

ロビン「良いだろう！勝負してやるから覚悟しとけよ！」

そして二人は裏庭に向かっていった。

孤狼「（作戦成功♪これでまた戦えるぜ♪）」

戦い好きの孤狼にとっては嬉しい限りであった。

孤狼「（ホントなら俺もデーヴァとの戦いに参戦すべきかもしれないがまだ修行が終わってないからな。それまで何とか勝ってくれよ一刀！）」

グッ！

孤狼は右腕を挙げて遠くから一刀にエールを送るのだった。

87時間目「先輩からの教え」（後書き）

雫「雫なの♪せっかくだからダーリン（要らないおまけ付き）とニュージーランドにやって来たなの♪だけどそこにデーヴァが現れて…次回、『一刀ドッキリ！雫の色気作戦』ダーリンが言うのなら特別におっぱい見せてもいいのなの♪」

88時間目「一刀ドッキリ！零の色気作戦」（前書き）

一刀「イギリスにて女王警護をしていたロビンは怪しい不審者を見つけて捕らえようとするが不審者の正体は何と兄貴である孤狼だった。そしてロビンが離れた隙にデーヴァが女王を奇襲。何とかロビンが駆けつけるとデーヴァは逃げようとするがデーヴァは兄貴とロビンの攻撃を受けてやられるのだった」

88時間目「一刀ドッキリ！雫の色気作戦」

ザッパーンッ！

デーヴァ出現の影響により日が経つのは止まっているが日本では冬の時期、日本の裏側にあたるニュージーランドでは夏を迎えていた。

そしてこの場所にはデーヴァが現れると予測した雫が一刀を連れて来ていた。

と本人は言っているが

一刀「どう見たってバカンスだよな」

海岸には一刀の他に誰もいなくまさに貸切状態であり

雫「ダーリン♪」

そして向こうの方から

ぶるんっ！ぶるんっ！

その大きな胸を揺らしながら雫がやって来るのだった。

水上雫　元光魔学園のデスドラゴンナイツの一人であり普段はわからないが実は胸ならば生徒の中で一番でかい穏やリーと互角の胸の持ち主で隠れ巨乳である。

ピクンッ！

そんな大きな胸が揺らされて黙っていられる一刀ではなかったがここはなんとかこらえた。

雫「ダーリン、この水着似合うかな?ダーリンに見せるために新調したなの♪」

ぷるんっ!

そして雫はきわどい紐ビキニ姿を一刀に見せつけると

一刀「あぁ、似合ってるよ／／／」

じーっ

顔を背けながらも一刀の目線は雫の胸に集中していた。

それに気づいた雫は

雫「やった~!ダーリンのエッチ~!でもどうしてもダーリンが見たいって言うのなら私のペットになるなら生で好きなだけ見てもいいなの♪」

ドッキンッ!!

この雫の一言に一刀は驚いき、そして再び一刀の心に天使と悪魔が生まれた。

悪魔一刀「この場には二人しかいないんだから見ちまえよ!見ないと後悔するぜ」

天使一刀「何を言うんだ！それでもお前は主人公か！読者を失望させるな！」

悪魔一刀「お前はいちいちうるさいんだよ！『俄龍四神弾』！」

ドカッ！

天使一刀「ぐわっ！？」

そして天使一刀がやられた瞬間

一刀「わぅーん！」

一刀の理性が崩壊し、零に飛び移ろうとした時

キィーンッ！

ドッゴーンッ！！

突如上空からジェット機が飛んできて一刀に激突した。

ウィーン！

そしてジェット機の中から現れたのは

桃香「一刀く～ん＃」

華琳「あなたは何をしているのかしら＃」

蓮華「どうしようもない尻軽男ね＃」

月「これはお仕置きですね＃」

ゴゴゴッ…！！

ジェット機から現れたのは怒りに燃える一刀大好き連合の桃香達だった。

華琳「おかしいと思ったのよ、曹操グループが開発したデーヴァレーダーにニュージーランドは反応しなかったし」

桃香「一刀くんが雫ちゃんと出ていったと聞いてもしかしたらと思ってね＃」

以前にも雫は一刀を誘惑した前科があり、桃香はその事を思い出したのだった。（62話参照）

華琳「さぁ一刀！遊んでないでさっさと帰るわよ＃」

グイッ！

華琳は一刀の手を引く

普通ならジェット機にはねられれば誰だって即死のはずだが

一刀「きゅ～」

鍛えられた一刀は気を失っただけだった。

桃香達が一刀を連れ去ろうとすると

雫「あーっ！わかったあなた達私に嫉妬してるんだ」

ピタッ

この言葉に桃香達が耳を傾けると

雫「だってあなた達が持ってないものを私は持ってるし～」

ドンッ！

雫が巨乳を強調すると

ピキンッ＃

桃香達の何かがキレた。

桃香「雫ちゃんには負けないもん！おっぱいなら私だって負けないし、華琳さんはお金持ちだし、月ちゃんは家庭的だし、蓮華さんは学園が誇る巨尻の持ち主だしさ！」

桃香がみんなのアピールできるところを言うと

華琳「他にもいいとこがあるでしょ！＃」

月「へぅ／／／」

蓮華「巨尻と言うな！＃　」

ダメ出しをされる桃香だった。

雫「ふんっ！だったらダーリンを賭けて勝負するなの！負けた人は潔くダーリンのことを諦めてもらうなの！勝負する気がないなら別にいいけどね、自分の体に自信が持てない無美体（美しくない体）の人はさっさと帰るなの♪　」

雫がみんなを挑発すると

ブチンッ！！

桃香「いいよその勝負受けてあげるよ＃　」

華琳「この私に勝負を挑んだことを後悔させてあげるわ＃　」

蓮華「孫家次女としての誇りをかけて相手をしてやる＃　」

月「絶対に負けませんからね＃　」

ゴゴゴッ…！！

今ここに一刀をめぐる三角関係（トライアングル）ならぬ六角関係（ヘキサゴン）が火花を散らすのだった。

しばらくして

バァーンッ！

どこから用意したのか海岸には水着に着替えた桃香達が集結していた。

雫「まずは競泳で勝負なの！あそこにある岩を回ってきてここにたどり着いた人の勝ちなの！」

桃香「負けないからね！」

華琳「一刀、スタートの合図お願いね」

そしてみんなが並び終わると

一刀「それではスタート！」

バシャバシャンッ！

一刀の合図と共にみんなは一斉に飛び込んだ。

桃香「う～ん！胸が邪魔で泳ぎにくいよ～！」

蓮華「くっ！胸が水圧で押されて泳ぎにくい！」

胸のある二人に対し、

華琳「何だか腹立つことが聞こえるけれどチャンスだわ」

月「へぅ～！？そういえば私って泳げなかったんでした！」

自分のペースで進む二人

そして折り返し地点の岩までもう少しのところで

月「そういえば雫さんはどうしたんでしょう？」

蓮華「そういえばいないわね」

雫がいないことにみんなが気づいた。

華琳「しまった！？まんまと嵌められたわ！？」

華琳の考えている通り雫は最初からスタートしておらず

雫「うふふっ。ようやく二人きりになれたの♪」

一刀「あのぅ、雫！？」

海外から離れたところで一刀と一緒にいた。

雫「ダーリン、私のおっぱい触っていいから一生私のものになるなの」

ぷるんっ！

雫は胸を揺らして一刀を誘惑する。

一刀「（触りたいけど触ってしまったら最後、桃香達からどんな目に合わされるか）」

一刀は欲望と自分の命を天秤にかけていた。

悪魔一刀「触っていいなら触ってしまえよ！どうせ痛い目にあうなら先に幸せな目にあってしまえ！」

悪魔一刀が言うと

一刀「（そうだよな！）」

本来止めるべき天使一刀がいないので一刀は即決で触ることを決意した。

そして一刀が雫の胸を触ろうとすると

ゴポポッ…

海から気泡が出てきて

ザッパーンッ！

アジラ「よくぞ我が住み処を見付けてくれたなドラグーンナイツ！」

海の中から龍神アジラが現れた。

雫「（いいとこだったのに～！＃）デーヴァめ、この雫ちゃんが退治してやるなの！」

ゴゴゴッ…！！

雫は気を溜めると

雫「超進化！」

パァーッ！

雫が言うと

シャワーッ！

雫の体を水が包んで

バシュンッ！

水の中から現れたのは

服は水色と青色の穏みたいな服（胸部分が青）、靴はロングブーツ、手には愛銃の『海龍』、頭は魚のヒレと龍をかたどったティアラを装着した雫が現れた。

雫「流騎士水龍！」

バンッ！

これが雫の超進化、流騎士水龍である。

一刀「よしっ！俺も…」

一刀も超進化しようと気を溜めるが

雫「ダーリンはそこで見てて、私の力を見せてあげるなの♪」

雫は超進化しようとする一刀を止めるのだった。

アジラ「龍神である我に一人で挑むとはな後悔させてくれるぞ！」

雫「あんたバカじゃないの？ここは海なの、水の使い手である雫の力が何倍にも膨れ上がっちゃうのなの！」

ブシューッ！

アジラ「ぐおっ！？」

雫はアジラに水流波をおみまいした。

一刀「（それにしても雫ってエロいだけかと思っていたけど意外と強いんだな）」

こう見えても雫は元デスドラゴンナイツのＮｏ．４である。そんな雫が何故超進化できたのかと言うと話は学園対抗武道大会の日に遡る（さかのぼる）。

焔と一刀が激突しあっていた時、雫は近くにいたのだ。

雫「（ものすごい戦いなの～！？）」

この時、雫は薬の効き目が切れて元の大人しい性格に戻っていた。

そして一刀が超進化した時、その美しい輝きを見た雫は

ドッキーンッ！！

雫「（ものすごい輝きだったの～！とてもきれいだったの～！あの一刀って人かっこいいの～！／／／）」

薬無しで一刀のことが好きになっていた。

そして大会終了後

雫は特訓に特訓を重ねてついに超進化ができるようになったのだった。

雫「（超進化はダーリンとお揃いなの♪）」

と雫は喜んでいたと言う

アジラ「このアジラ様をなめるでないわ！『宝矢』！」

シュシュンッ！

アジラは手から大量の矢を出現させ雫に狙いを定めた。

雫「へんっ♪そんな攻撃なんて軽く…」

サッ！

雫は避けようとするが

ザククッ！

矢は雫に全弾直撃した。

アジラ「我が矢は我の自由に操れるのだ。自らの技で散る羊と一緒にするでないわ！」

一刀「雫っ！？テメェ！」

ゴォッ！！

一刀は雫をやられた怒りで超進化しようとするが

雫「ダメだよダーリン、怒りで超進化したらダメなの。私なら大丈夫だから心配しないで」

スッ！　ゴォッ…！！

雫は海龍に力を込めると

雫「この海の場でパワーアップした私の技を食らうなの！」

そして

雫「『真・最終大蛇水龍（ネオファイナルアクアオロチ）』！」

チュドンッ！！

ゴォーンッ！！

雫の放った技は巨大な水龍と化して

ドグボーッ！！

アジラに直撃した。

普通の状態ならばそれほど痛くはないはずなのだが

アジラ「ぐおーっ！？」

最大の気を溜めた上に、水の場ということもありその一撃は十倍以上になっていた。

シュンッ！

そしてアジラが消滅すると

雫「やった…なの…」

バタンッ！

超進化を解けた雫はその場に倒れた。

一刀「雫！？」

ガバッ！

一刀は雫に近寄って抱き抱えると

悪魔一刀「今がチャンスだぞ雫の体を思う存分さわっちまえ♪」

悪魔一刀が囁く（ささやく）が

ジャキンッ！

天使一刀「聖騎士光龍！」

天使一刀が復活した。

天使一刀「聖俄龍四神弾！」

ドカッ！

悪魔一刀「ぐわーっ！」

シュンッ

悪魔一刀は天使一刀の技を食らって消滅した。

一刀「大丈夫なのか雫！」

悪魔一刀が消滅したことによりエッチなことを何とか押さえた一刀だった。

雫「ダーリン…、雫はもうダメなの死ぬ前に雫の願いを聞いてくれる？」

一刀「あぁ、なんだって聞いてやるよ！」

一刀が言うと

雫「じゃあキスしてくれる？」

一刀「あぁ、キスくらいなら何百回だってしてやる…」

一刀は言い切ろうとするが

一刀「（あれっ？死にそうなのに血が流れてないな？）」

一刀が疑問に思っていると

ズププッ

雫の傷口が何だかおかしい感じだった。

雫「あはっ♪バレちゃったなの♪」

実は雫の体は液体化することができ、攻撃を食らう前に液体化して防いでいたのだ。

一刀「心配させて…」

一刀が言うと

チュッ

雫が一刀の唇にキスをした。

雫「約束は約束だからキスしたなの♪」

一刀「な…何を／／／」

一刀が顔を赤くしていると

ゴゴゴッ…！！＃

ギギギッ！

一刀が恐ろしく感じながらもブリキ人形のように殺気のする方に首を向けると

桃香「一刀く～ん＃」

華琳「一刀＃」

蓮華「一刀＃」

月「一刀さん＃」

そこには怒りに燃える桃香達がいた。

桃香「私達がいない間に雫ちゃんとキスするなんてね～＃」

一刀「いや、それはその…」

一刀は言い訳しようとするが

四人『問答無用！！＃』

一刀「ぎゃーっ！？」

四人に袋叩きされる一刀だった。

雫「えへっ、ダーリンとキスしちゃったなの♪」

88時間目「一刀ドッキリ！零の色気作戦」（後書き）

アルベルト「どうもアルベルトです。ラスベガスにてビリーさんといた僕は一刀さんと出会い豪遊します。ところがデーヴァのせいでラスベガスは大騒ぎです。次回、『光を失う街』僕に任せてください」

89時間目「光を失う街」（前書き）

一刀「俺達は雫のわがままによりニュージーランドに来ていた。そしていつの間にか桃香達まで俺を奪うようになってしまい、争いをなくすために競泳が開かれるも雫は裏をかいて俺と二人っきりに、だがそこへデーヴァの一人アジラと遭遇し戦う雫だった」

89時間目「光を失う街」

アメリカ・ラスベガス

世間的にもギャンブルの街と言われる昼夜を問わず光で明るい街、ここには故郷であるアメリカの警護に来たビリーと相談があると言われて来たアルベルトがいた。

アルベルト「あのねぇビリーさん、僕はあなたから『とっても大変な目にあっているから助けてくれ！』と連絡を受けたからドイツからわざわざ来てあげたんですけど　」

ビリー「そんで？　」

アルベルト「なのに…　」

ジャララーッ！

アルベルト「こんなところでギャンブルしてるんですか！？　」

今二人はカジノ場に来ていた。

ビリー「だから言った通りだよ。たまの息抜きに頭の固いお前さんを娯楽に誘おうと思ってね♪　」

気楽な人である。

アルベルト「僕は忙しいんですよ！失礼します　」

スッ

アルベルトが去ろうとするが

ビリー「固いこと言うなよ～！同じドラグーンナイツの仲間じゃないかよ」

ビリーはアルベルトの片足にしがみついていた。

アルベルト「離してください！僕は帰らなくちゃいけない…」

アルベルトがビリーを振り払って去ろうとすると

一刀「よぅっ！ビリー久しぶりだな」

バンッ！

入り口からタキシードを着た一刀が現れた。

ニュージーランドにいた一刀はビリーに呼ばれて桃香達と共にラスベガスに来ていたのだ。

アルベルト「（どきっ）か…一刀さん！？／／／」

ビリー「（何で顔が赤いんだ？）おぉマイフレンド一刀、来てくれたのかよ！」

一刀「お前が助けてくれってメール送ったからだろうが」

一刀が言うと

桃香「ここがカジノってとこなんだね初めて見たよ」

華琳「お父様の付き添いで何度か来たけど本場は違うわね」

ぞろぞろっ

一刀の後ろから桃香・華琳・蓮華・月が現れた。（雫は桃香達に無理矢理おさえられてニュージーランドに残された。）

ビリー「それじゃあ仲良くギャンブルといきますか！」

一刀達『ギャンブル？』

アルベルト「実はかくかくしかじか…」

アルベルトが理由を話すとまぁビリーだから仕方がないやということでギャンブルをすることになった。

桃香「まずは手始めにスロットだよね♪」

蓮華「日頃動体視力を鍛えている私達には楽なものだな！」

華琳「持ち金を十倍にしてやるわよ！」

数分後

桃香「お小遣いが無くなっちゃった…」

蓮華「こんなはずでは！？」

華琳「この機械が狂ってるのよ！＃」

そして月はと言うと

ジャララーッ！

月「すみませ～ん！この機械壊れてますよ～。こんなにコインが出てるんです～！？」

ずこっ

この中で一番とろそうな月が一番稼いでいた。

ビリー「おっ！嬢ちゃんえらく稼いでるじゃないかあっちでルーレットやってるからしないか？」

月「ルーレットですか？」

※西森はスクラッチしかギャンブルをしたことがありませんので『これは違うぞ！』というツッコミは控えてください。

このカジノには特別なルーレットがある。

ルーレットは赤と黒の１～５０までの１００個と普通なのだが、基本的にルーレットは配当が２倍で当たる確率が１／２の色賭（赤か黒のどちらか）、配当が３６倍で当たる確率が１／５０の数字賭、更にこのカジノには配当が１００倍で当たる確率が１／１００の数字と色を当てる両賭がある。（両賭のあるカジノがある場合配当が

違いますのでこの話を本気にしないでください）

ガヤガヤ

アルベルト「何だか騒がしいですね」

ビリー「そこのおっちゃん、ルーレット場で何かあったのかい？」

ビリーが人に聞くと

おっちゃん「すごい人がいるんだよ！両賭を四回成功している人がいるんだよ！最初賭けたのは１ドル（約１００円）だったんだけどさ」

おっちゃんの話を聞くと

桃香「ってことは日本円で１００を４回掛けるわけだから…いくら？」

華琳「桃香、答えは…」

１×１００＝１００ドル（一万円）

１００×１００＝一万ドル（百万円）

１０．０００×１００＝百万ドル（一億）

百万×１００＝一億ドル（百億）

華琳「答えは百億円よ　」

桃香「へぇ～、百億か～！…って百億円！？　」

あまりの桁に驚く桃香だった。

するとそこへ

一刀「みんなどうしたんだ？　」

ガラガラッ

来る時には持っていなかった大型のスーツケースを持った一刀が現れた。

桃香「一刀くん！？それってもしかして！？　」

一刀「あぁ、ルーレットで適当に数字を言いまくったら大勝だぜ　」

この男は天に愛されているのだろうか！？

一刀「そうだ華琳、今まで借りてたお金これで足りるか？　」

華琳「それだけあればお釣りが大量にくるわよ！　」

一刀達が話をしていたその時

フッ

カジノの電気が消えた。

桃香「暗いの怖いよ～！一刀くん助けて～！」

蓮華「桃香、私に捕まるな！」

ビリー「もしかしてデーヴァの仕業か？」

アルベルト「もしかしなくてもこんなことできるのはデーヴァしかいないでしょう！」

そんな時

ピクンッ！

一刀はデーヴァの気配を読み取った。

一刀「どうやら一番上に何かがいるみたいだぜ！」

すると

ビリー「了解！デーヴァの相手は俺に任せな！」

アルベルト「僕もサポートしますよ！」

ダッ！

二人が出ていくと

一刀「待ってくれ！俺も…」

一刀も出ていこうとするが

ガシッ！

月「へぅ～！怖いです～！？　」

桃香「一刀くん助けて～！　」

蓮華「私は別に怖くないのだが仕方なくな！？　」

華琳「一刀～！私から離れないでー！　」

一刀大好き連合につかまってしまいそのまま一刀は動けなかった。

カジノの屋根の上

ビリー「この屋根のどこにデーヴァがいるんだ？　」

アルベルト「どうやら敵は迷彩能力（隠れる力）が使えるらしいが僕の前では無駄だよ！　」

パチンッ！

アルベルトはドクロの眼帯に取り付けられたセンサーを起動させるとピピピッ…　ピコンッ！

アルベルト「敵はそこの中央にいますよ！　」

ビリー「OK♪」

ジャキンッ！

ビリーは腰からリボルバーを取り出すと

ビリー「『雷撃弾（ライオットブリット）』！」

ドキュンッ！

雷の力を使うビリーは超進化しなくても雷の弾丸を撃つことができるのだ。

ビリーが放った弾丸は

バチンッ！

何もないところで炸裂した。

シンダラ「ちっ！もう見つかってしまうとはな！？」

そして何もないところからデーヴァの一人、鳥神シンダラが現れた。

ビリー「テメェ！俺の故郷で何しやがるんだ！」

ビリーが怒るとシンダラは

シンダラ「決まっているだろう！人間というものは光がないと何も

できない弱虫揃いだからな、だから電気を食料とするこの俺様がこの世界から『電気』という光を吸いとってやるのさ！」

シンダラが言うと

ビリー「んなことさせるかよ！電気が無くなったら俺の大好きなスロットができないじゃねぇか！お前は俺が必ず倒してやるぜ！」

ゴゴゴッ…！！

理由はともかくビリーが気を溜め始めていると

アルベルト「それじゃあ僕も戦うとしますか！」

ゴゴゴッ…！！

アルベルトも気を溜め始めた。

そして

ビリー・アルベルト『超進化！』

パァーッ！

二人が同時に気を溜め終わると

ゴロゴローッ！！

ウィィーンッ！！

ビリーに雷が落ち、アルベルトに鉄の塊がまとわりついて

ドッカーンッ！！

龍の鱗がつけられたウェスタンベストを身に纏い、雷マーク入りのズボンと車輪つきのロングブーツ、頭にはカウボーイハットを被ったビリーが現れて

バキバキンッ！！

見た目がまるでロボコップのようなアルベルトが現れた。

これぞ二人の超進化、轟騎士雷龍と機騎士鋼龍である。（ダサいと思ってくれても別に構いません）

ビリー「一気に決めるぜ！『雷撃波動弾（ライオットブラスト）』」

ドキュンッ！！

ビリーが技を放つと

アルベルト「ダメですよ！奴に雷は！？」

アルベルトが忠告するがもう遅かった。

アルベルトの忠告通り

シンダラ「バカか貴様らは！」

バクンッ！

シンダラはビリーが放った『雷撃波動弾（ライオットブラスト）』を食べてしまった。

アルベルト「雷を食べる敵に雷属性のビリーさんではまずい！？ここは僕がいかせてもらう！」

アルベルトが言うと

ウィィーンッ！

左腕からサブマシンガンが出てきた。

アルベルト「『アタックフォーメーションタイプγ（ガンマ）』！」

ドキュキュンッ！

アルベルトはシンダラにサブマシンガンを乱射するが

キキキンッ！

シンダラ「フンッ！そんな攻撃を食らって散るような俺様ではないぜ！」

固い体をもつシンダラにサブマシンガンは通用しなかった。

シンダラ「こいつを食らって落ちちまえ！」

バササッ！

シンダラは翼を広げて強風を起こして二人を落とそうとする。

アルベルト「しまった!?」

ビューっ!!

ビリー「アルベルト!?」

そしてアルベルトはうっかり飛ばされてしまい屋根から墜落した。
（ちなみにここは五十階建てのビルの屋根です）

そしてアルベルトが落ちたその時

一刀「なんとか振り払うことができたぜ!?」

一階のカジノから一刀が桃香達を振り払って出てきた。

そしてそれとほぼ同時に

アルベルト「うわーっ!?」

一刀「えっ?」

ドッシーンッ!!

一刀は落下してきたアルベルトに激突してしまった。

一刀「何が落ちたんだ?」

一刀が平気な顔で落ちてきたものを探っていると

むにゅっ♪

何だか柔らかいものをつかんだ。

一刀「えっ!?」

一刀がそれをよく見てみると

アルベルト「う…う～ん」

そこにはアルベルトが倒れていて一刀の手はアルベルトの胸をさわっていた。

一刀「（何で!?何で男なのに胸があるの!?）」

一刀が驚いていると

アルベルト「はっ!?」

アルベルトが目を覚まして現状を確認した瞬間

アルベルト「きゃーっ／／／」

バッチーンッ!!

一刀「ぶへっ!?」

一刀はアルベルトから平手打ちを食らってしまった。

一刀「どうなってるの？」

一刀が驚いていると

キィーンッ！

また何かが落ちてきた。落ちてきたものの正体は…

シンダラ「グエーッ！！」

シンダラだった。

ビリー「やっぱり思った通りだな貴様は外側からの攻撃は大丈夫だが、体の中までは鍛えてないようだな！」

つまりビリーは電気を込めて撃つ方法をやめて強烈な炸裂弾を撃っていたのだ。

シンダラ「くっそー！人間共め！こうなったら逃げさしてもらうぞ！」

バササッ！

シンダラが翔んで逃げようとすると

ビリー「悪いがチェックメイトだぜ！」

ゴゴゴッ…！！

ビリーは愛銃に力を込めて構えると

ビリー「『雷撃波動弾（ライオットブラスト）』」

ドキュンッ！！

そしてシンダラは

シンダラ「ぐえええーっ！？」

シュンッ！そのまま消滅していった。

ビリー「やっぱり俺がＮｏ．１だぜ！」

89時間目「光を失う街」（後書き）

恋「…恋。恋は友達を助けるためにデーヴァと戦う。みんなは恋が守ってみせる！次回、『恋の調教術』一刀に会いたい」

９０時間目「恋の調教術」（前書き）

一刀「ビリーに誘われてギャンブルの街ラスベガスにやって来た俺達、ところがデーヴァのせいで停電になってしまう。原因を探りにいったビリーとアルベルトはデーヴァと戦うがほとんどダメージを与えることができなくアルベルトは倒れてしまう、だがビリーの体の外からではなく体の内から倒す方法で見事デーヴァを倒すのだった」

９０時間目「恋の調教術」

クビラ、バサラ、メキラ、アジラ、サンチラ、ハイラ、シンダラ

一刀達の活躍によってデーヴァは１２匹から7匹減って残りは5匹（アンチラ、インダラ、マコラ、ショウトラ、ビカラ）となっていた。

聖フランチェスカ学園

ねね「何々、『ドラグーンナイツまたも大勝利！』『地球の救世主北郷一刀！』『北郷一刀、ラスベガスにて１００億円を入手する！』ふむふむ」

もはや世界中で戦いが始まればドラグーンナイツの名は有名になっていた。

なかでも一刀は学園対抗武道大会でも有名だったため他の人よりも目立っていた。

しかし、その事を気にくわない人がいた。

ねね「ムキーッ！恋殿の記事が無くて何であのヘボの記事が沢山あるのですかー！！＃」

ビリビリーッ！

ねねは新聞を破きまくった。

恋の愛好者であるねねはどの新聞も恋の記事が書いてないことに怒っていた。

ねね「せっかく貯金をはたして世界中の新聞を買い集めたというのにこれでは単なる無駄遣いなのです！」

びっちり

ねねの部屋には破かれた新聞が大量に敷かれていた。

ねね「恋殿は恋殿で朝からねねを置いて出掛けてくるし、もうっ！ムシャクシャするのです！＃」

そんな怒るねねの近くを

一刀「どうしたんだねね？」

スッ

一刀が通りかかると

ねね「全てはお前が悪いのです！ちんきゅうキーック！＃」

ドカッ！

一刀「ぐほっ！？何で？」

バタリッ

一刀はねねのちんきゅうキックを食らって伸びてしまった。

さてその頃、恋は

プシューッ！

電車に乗って遠くの街まで来ていた。

恋「…七頭、元気かな？」

理由は大蛇学園の七頭に会うためである。

学園対抗武道大会で仲良くなった二人は今ではペンフレンドになっていた。

そして今日は七頭に呼ばれて久々に出会う約束の日である。

大蛇学園の住所である地獄町（フランチェスカ学園の最寄り駅から電車で五時間経った場所にある）

恋「…七頭が迎えに来ているはずなのに」

キョロキョロ

恋は辺りを見渡すが七頭の姿はなかった。

そんな時

ブォンッ！

恋の後ろから黒い影が現れると

ズッシーンッ！！

恋はいきなり後ろからきた鎚（ハンマー）に潰されてしまった。

そして鎚の後ろから現れたのは

ショウトラ「ガハハッ！人間とは間抜けばかりのようだな」

デーヴァの一人、犬神ショウトラが現れた。

ショウトラ「貴様の情報はすでに分かっているからな、偽の手紙で貴様を誘き出して不意打ちを食らわせたのよ！」

ショウトラは大いに笑うと

ショウトラ「だが、即死ではなかったようだがな」

ビシッ！

ショウトラの視線が一つに集中し、その視線を見てみると

恋「…危なかった！？」

バンッ！

恋は以前七頭から教えてもらった大蛇学園に伝わる瞬間移動・蛇歩を使ってかろうじて一撃を避けていた。

と思ったが

ズキンッ！

恋「…いたっ！」

ショウトラ「我が鎚の一撃を避けたことはほめてやるが完全に避けることは無理だったようだな」

恋は鎚を受ける直前、完全に避けたとおもっていたが実はわずかながら足首にダメージを受けていたのだ。

ショウトラ「その足では先程のように瞬間移動はできまい、貴様の最後なり」

ショウトラが言うと

恋「…恋はまだ負けてない！まだ力がある！」

ゴゴゴッ…！！

恋は気を溜めると

恋「超進化！」

パァーッ！

恋は獣騎士地龍に超進化した。

ショウトラ「フンッ！そんなことをしても無駄ということをわからせてやる！貴様は我が先に潰したバカ二人（及川・イワン）と同じ様に早死にするでないぞ！」

ブォンッ！！

ショウトラは宝鎚を振り上げると

ショウトラ「宝鎚！」

ブォンッ！！

恋めがけて降り下ろした。

恋「…蛇…」

恋は再び蛇歩を使おうとするが

ズキンッ！

恋「…ぐっ！」

足に痛みを感じてスピードが鈍くなってしまった。

そして

ドッゴーンッ！！

恋「…ぐはっ！？」

恋はむなしく宝鎚の一撃を頭から食らってしまった。

ショウトラ「我が鎚を頭から食らうとはバカな奴め、今の一撃で頭蓋骨にキズが入ったのは確かなり」

ショウトラの言う通り恋はいくら獣騎士地龍で強化されているとはいえ大ダメージを受けたのは確実だった。

恋「（…頭がすごく痛い、あれっ?前にもこんなことがあったような?）」

この時、恋は昔の記憶を思い出していた。

十三年ほど前、四歳だった恋は木から落ちて頭を強く打ってしまった。（幸いこの時から恋は頑丈で命は助かったが）

子供恋「…痛いよ～！」

恋が泣いていると

?「大丈夫?」

一人の男の子が恋に近寄ってきた。

少年「頭が痛いのか、だったら俺が治してやるよ」

パチンッ！

少年はバックから傷薬を取り出すと恋の怪我を治療した。

子供恋「…ありがとう。名前教えて」

恋が聞くと少年は

少年「疾風（はやて）、七ヶ崎（なながさき）疾風だ。それじゃあまたねお嬢ちゃん」

そして少年は去っていった。

次の日、子供恋はお礼をいいに少年の家を訪れたが少年はすでに引っ越しをした後だった。

それが今でも恋の大事な思い出となっている。

恋が思い出にひたっている間に

ショウトラ「もう一度食らって頭蓋骨を粉砕してくれるわ！」

ブォンッ！！

ショウトラは宝鎚を振りかぶった。

恋「…しまった！？」

すっかり恋は油断してしまい避ける間がない。

ゴォーッ！！

宝鎚が恋に当たりそうになった時

ガキンッ！！

ぼわっ！

誰かが宝鎚を受け止めてその衝撃で場にすごい土煙が舞い上がった。

ショウトラ「我が鎚を受け止めるとは何奴だ！？」

スゥーッ

やがて土煙が晴れてくるとそこにいたのは

七頭「…恋、助けにきた（ぼそっ）」

恋「…七頭！？」

バンッ！

恋の危機を感じて助けにきた七頭であった。

七頭「…恋、頭を怪我してる（ぼそっ）」

スッ

そして七頭は懐から傷薬を取り出すと

七頭「…気休め程度だけど無いよりはいい（ぼそっ）」

スッ

七頭は恋に傷薬を渡した。

恋「…ありがとう七頭（もしかして七頭って）」

恋が考えていると

ショウトラ「ほぅ、この辺の地歴を学んでみたらその速さはまさしく七頭、いや七ヶ崎疾風！」

ビシッ！

ショウトラが叫ぶと

恋「（…えっ！？）」

恋は衝撃を受けて驚いた。

七頭とは大蛇学園によってつけられたコードネームのようなものである。七頭の本名は七ヶ崎疾風。恋の思い出の相手である。

ショウトラ「まぁ別に何も感じんがな！仲良く二人揃ってくたばるがよい！」

ブォンッ！！

ショウトラが宝鎚を振り上げる

七頭「…まずい、もう一度は支えきれない！？（ぼそっ）」

恋「（…七頭があの時の少年）」

ショウトラ「くたばるがよい！」

ブォッ…

ショウトラが宝鎚を降り下ろそうとしたとき

バゥッ！

ショウトラ「！？」

何処からか犬の声が聞こえてきた。

ねね「恋殿～！ねねが助太刀に来ましたぞー！」

ねねが曹操グループのジェット機で恋の助けに現れた。

バゥッ！　ワンッ！

恋とねねの愛犬であるセキトと張々を連れて

ショウトラ「（びくんっ）」

するとセキトと張々を見たショウトラは急変し、

ショウトラ「バウーン♪」

じゃれあうように接触してきた。

恋「…（じー）」

そして恋はショウトラを見つめると

スッ

恋「…お手！」

ショウトラに手を差し出した。するとショウトラは

ショウトラ「バゥッ！」

ぽすんっ

恋の手に自分の手をのせてきた。

恋「…いいペットが増えた。この子も飼う♪」

ショウトラ「バゥッ！」

どうやらショウトラは犬を見ると犬としての性格が目覚めるようだった。

そして帰りの時

恋「…七頭、どこ？」

恋は七頭を探すが見つからない

そして七頭は木の上から恋を見ていた。

七頭「…まさかあの時の少女が俺より強くなるとはな、しかもまだまだ成長するから侮れない（ぼそっ）」

ねね「恋殿～！そろそろ帰るのですぞ～！セキト、張々、少将（しょうしょう・ショウトラの名前）恋殿を迎えにいくのです！」

ダッ！

そして恋の元に走りよるねねと共に走るコーギーのセキト、セントバーナードの張々、そして大きな狛犬の少将だった。

ちなみに余談だが恋が帰ってきた時、みんなは当然のごとく驚いたという。

９０時間目「恋の調教術」（後書き）

蒼魔「蒼魔だ。自らの修行のため北極にやって来た俺はデーヴァと出会い戦いを始める。いまこそおじさんに鍛えてもらった力を試す時だぜ！次回、『凍てつく場の戦い』今の俺は以前とは違うんだよ！」

91時間目「凍てつく場の戦い」（前書き）

一刀「友達の七頭に呼ばれて遊びにやって来た恋、だが呼んだというのはデーヴァの一人、ショウトラの罠ということがわかり恋は不意打ちを食らってしまう。そして動けなくなった恋を攻撃するショウトラの攻撃を防いだのは恋の危機を救いにきた七頭だった。そして二人がショウトラと戦おうとすると駆けつけたねねが連れてきたセキトと張々を見たショウトラの様子が急変し、ショウトラは恋に飼われることになった」

91時間目「凍てつく場の戦い」

ビュゴーッ!!

極寒の地、北極

この地には蒼魔が鍛練のために来ていた。

蒼魔「・・・」

荒れ狂う猛吹雪の中、蒼魔はフランチェスカの制服に身を包みながら考え事をしていた。

蒼魔「(学園対抗武道大会が終わった時、俺は叔父さんに呼ばれた…)」

時は少し遡り(さかのぼり)、学園対抗武道大会が終了して数日後

氷室家

蒼魔「まさか叔父さんが俺を呼ぶなんてな、何か用?」

家族の呼び出しで学園を休んで九州の実家にやって来た蒼魔は自身を呼び出し椅子に座っていた叔父の昴(すばる)に話しかけると

昴「来たのか蒼魔、ちょっとこっちに来な」

蒼魔「?」

スタタッ

昴に呼ばれて蒼魔が昴の近くにいくと

バチコーンッ！！

ズシャシャーッ！！

いきなり蒼魔は昴に顔面を殴られてぶっ飛ばされた。

昴「俺を失望させるなよ、俺の甥があんな無様な戦いをさらしやがって！」

蒼魔「ゲホッ！？」

蒼魔は口から血を流しながらも立ち上がる。

蒼魔父「兄さん、何をするんだよ！？」

蒼魔父がいきなり息子を殴った昴に注意しようとすると

昴「お前が甘やかすからいけないんだ！＃だからこいつは自分を見失って仲間さえも傷つけるような性格になっちまうんだよ！」

ビシッ！

昴がはっきり言うと

蒼魔父「兄さんと蒼魔を一緒にしないでくれ！大丈夫だったか蒼魔？」

スッ

蒼魔父が蒼魔に手を差し出すと

蒼魔「どうすりゃいいんだよ」

蒼魔父「？」

蒼魔父が？を浮かべていると

蒼魔「どうすりゃもうあんな暴走しないですむのか教えてくれよ叔父さん！」

ドンッ！

蒼魔が昴に向かって叫ぶと

昴「簡単な話だ。俺の元で鍛練しろ、一から鍛え直してやるぜ！」

昴が言うと

蒼魔父「待ってよ兄さん、蒼魔はまだ17歳だよ！？学校はどうするのさ！？」

蒼魔父は昴に向かって叫びまくる

ホントにこんな人が蒼魔の父だとは思えないくらいに、中学時代蒼魔が一刀と共に四天王を名乗ったのもこんな情けない父と同じ道を

いかないためである。

昴「お前に聞いてるんじゃない！俺は蒼魔に聞いてるんだ！どうする蒼魔？今のままじゃ絶対にお前は強くなれないぞ」

昴に言われた蒼魔は

蒼魔「わかったよ昴叔父さん！俺を強くしてくれ！もう二度と闇に飲み込まれたくないんだ！」

ビシッ！

父の前で叔父にはっきり言った蒼魔に昴は

昴「さすがは俺の甥だ。というわけだから休学届け出しといてくれねえか？」

蒼魔父「えっ！？」

その後、蒼魔は叔父から修行を受けるため休学届けを提出した。

叔父との鍛練は蒼魔にとって試練ではなく死練というべきものであり、蒼魔は何度も逃げ出しそうになったがその度に昴が

昴「また諦めるのか、今諦めたらお前は大事な親友を絶対に助けられない！それでもいいなら逃げてしまえ！」

と言うので厳しい鍛練のなか、蒼魔は見事に鍛練をやり遂げたのだった。

それにより蒼魔は強化薬無しでも龍の力が使えるようになり、完全に武装氷龍を操れるようになったのだった。

蒼魔「（叔父さんはデーヴァに捕らわれている、今度は俺が叔父さんを助ける番だぜ！）」

そこで蒼魔は更なる力をつけるべく、叔父との修行の場である北極にやって来たのだった。

蒼魔「デーヴァの奴め！誰でもいいから相手をしてやるぜ！」

ザザッ！

蒼魔が打倒デーヴァに向けて氷の上をスケート靴無しで走っていると？「助けて～！？」

何処からか助けを求める声が聞こえてきた。

蒼魔「こんな北極で助けを求めるなんて誰だろな？」

ザザッ！

蒼魔は不思議に思いながらも声のする方に走っていった。

そしてたどり着いた先には

アンチラ「お前達、殺してやる！」

ジャキンッ！

刃付きの籠手『宝斧』を装着した兎神アンチラが人を襲っていた。

？「たのむっ！命だけは助けてくれよ！」

？「何でもしますから助けてください！」

アンチラに襲われている二人が助けてもらうようアンチラに頼むと

アンチラ「何でもするというのなら、死ね！」

ブォンッ！！

二人『ギャーッ！？』

アンチラの宝斧が二人に迫る。

そんな時

ガキンッ！！

アンチラ「！？」

二人『！？』

超進化した蒼魔がアンチラと二人の間に入って攻撃を防いだ。

蒼魔「お前は確かアンチラだったよな、戦うなら俺が相手をしてやるぜ」

アンチラ「ドラグーンナイツの氷室蒼魔か、のぞむところだ！」

バッ！

アンチラは離れて蒼魔から距離をとると

アンチラ「ハァッ！」

シュバッ！

アンチラは勢いよく蒼魔に蹴りを繰り出してきた。

しかし

ガシッ！

蒼魔はアンチラの足をつかむと

蒼魔「おらっ！」

ブォンッ！！

ジャイアントスイングの要領で投げ飛ばした。

スタッ！

しかしアンチラはうまく着地すると

アンチラ「フンッ！」

ジャキンッ！

今度は宝斧を向けて突っ込んできたが

蒼魔「『氷河千兆撃（ブリザードデストロイヤー）』！」

シュシュシュッ！

強力な氷の気を蒼魔はアンチラに放った。

ガガガンッ！

アンチラ「ぐほっ！？」

そしてアンチラは技の勢いに負けてぶっ飛ばされた。

アンチラ「馬鹿なっ！？以前計測した貴様の力はサンティラを倒した北郷以下のはず、実力からして我が負けるはずがないのにどうしてだ！？」

アンチラが聞くと

蒼魔「あれが俺の本気だと思ったら大間違いだぜ、俺は貴様らが世界で暴れてからも常に鍛練してきたんだよ！あの時の俺より今の俺が確実に強いんだよ！」

ビシッ！

蒼魔はアンチラに言うとさらに続けて

蒼魔「言っておくが、北郷一刀は更なる力を秘めてるぜ！」

ドォンッ！

とアンチラに言うと

アンチラ「ふふふっ！人間とは面白いものだな数十年前と台詞がほとんど変わらんとは」

蒼魔「？」

この言葉の意味がわからず蒼魔は？を浮かべた。

実はこの台詞は叔父の昴がデーヴァに向かって言った台詞と似ていたのだ。

昴「翠川優刀は俺より強いから覚悟しとけよエセ（偽）神共！」

アンチラ「では我は戦いに来たわけではないのでこの場は去らしてもらおう」

スッ

そしてアンチラはどこかに消えていった。

蒼魔「ちっ！逃がしちまうとはな」

蒼魔が倒せなかったことを悔やんでいると

蒼魔「ところで、こそこそ逃げるんじゃねぇよそこのお二人さん」

二人『（ドキッ！？）』

実は蒼魔が戦いを始めたときから二人は逃げようとしていた。

蒼魔「助けてやったんだから顔くらい見せろっての！」

？「やっ…やめてくださいよ！？」

ガバッ！

そして蒼魔は二人が被っていたフードを無理矢理はがすと

蒼魔「お前らは！？」

そこにいたのは

斗詩「ぐすんっ」

猪々子「見つかっちまったい！」

斗詩と猪々子であった。

91時間目「凍てつく場の戦い」（後書き）

マコラ「デーヴァの一人、猿神マコラだキー。次々と神であるデーヴァが殺られるなんて悔しいぜ！こうなったら俺が全員倒してやるぜ！次回、『弱点』俺様がデーヴァで一番偉いんだっキー！」

92時間目「弱点」（前書き）

一刀「北極にやって来た蒼魔は叔父さんとの修行を思い出していた矢先、突如悲鳴が聞こえたのでいってみるとアンチラが人を襲っていた。そして直ぐ様アンチラと戦う蒼魔はアンチラの力を圧倒するかのごとく追い払うことに成功する。だが蒼魔が助けた二人はデーヴァ復活の原因をつくった麗羽の側近である猪々子と斗詩であった」

92時間目「弱点」

デーヴァが潜む空間

マコラ「ムッキー！＃我らが神であるデーヴァが人間ごときに殺られるなんて悔しいッキー！＃　」

次々とデーヴァが一刀達ドラグーンナイツに殺られていることにマコラは腹を立てていた。

インダラ「数十年前より人間は武力が上がっているのだ。負けるのも無理はない　」

マコラ「黙ってろ！俺は貴様がデーヴァのリーダーだなんて認めないからな！ドラグーンナイツなんて俺が倒してやるぜ！ビカラ、アンチラ一緒にこいっ！　」

サッ

そしてマコラは去っていった。

アンチラ「仕方がないな　」

ビカラ「ボガボガァ　」

ズンズンッ

そしてインダラだけが残ると

インダラ「フンッ！何も知らない馬鹿猿が、我々が倒されることで計画は進んでいくのだ」

不気味な発言をするインダラであった。

聖フランチェスカ学園

一刀「何だって!?デーヴァの封印を解いたのは麗羽だと!?」

猪々子「すみませんっした！」

斗詩「どうか許してください！」

北極にて蒼魔に助けられた二人は全ての事情をドラグーンナイツのみんなに白状していた。

華琳「あの馬鹿ならやりそうなことね、それであの馬鹿（麗羽）はどこにいるの？」

華琳が聞くと

猪々子「それがアタイ達も知らないんすよ」

斗詩「実は電波局に行って妨害した後…」

ここで話はデーヴァが現れた約１０日前に遡る（さかのぼる）。

１０日前

麗羽「おーほっほっほっ！これで誰もわたくしが化け物を解き放ったなんてことはわかりませんわ！」

猪々子「こんなことしていいのかよ（ひそひそ）」

斗詩「今なら素直に白状すれば許してくれるかもしれないのにね（ひそひそ）」

二人がひそひそ話していると

麗羽「お黙りなさい！もし白状したらどんな目に遭わされるかわからないでしょう！とくにあの生徒会長には…」

麗羽の妄想

一刀「麗羽、お前が犯人だったようだな」

カツンッ

麗羽を壁に追い詰める一刀

麗羽「すみませんでした許してください！お金なら好きなだけあげますから」

麗羽が必死に頼むと

一刀「金なんていらねぇよ！絶世の美女であるお前の体で払ってもらおうか」

ガバッ！

麗羽「いやーっ！！」

そして一刀は麗羽に襲いかかった。

妄想終了

麗羽「ってなことになってしまいますわ！」

麗羽が一人で妄想すると

斗詩「会長さんがそんなことするかな？（ひそひそ）」

猪々子「自分で絶世の美女だって言ってるしよ（ひそひそ）」

二人がひそひそ話していると

麗羽「お黙りなさい！＃いいですわねわたくしはこれから万が一のために遠くに逃げさしてもらいます！あなた達とは別行動しますわよ！」

とんでもないことを言う麗羽に

斗詩「そんな！？一人だけ逃げるなんてずるいですよ！？」

猪々子「だいたいアタイ達だけでどうしようっていうんですか！？」

猪々子が言うと

麗羽「自分のことは自分で考えなさい！北極にでもいきなさいな！旅費はわたくしが出しますからねおーほっほっほっ！」

ピューッ！

そして麗羽は猪々子と斗詩を残して去っていった。

斗詩「というわけで私達も麗羽様の行き先は知らないんですよ」

斗詩が言い終わると

猪々子「会長のアニキ、今までのことを全て謝るからせめてアタイ達は見逃してください！アタイ達は麗羽様にムリヤリやらされただけなんです！助けてくれたら斗詩の胸を好きなだけ揉んでくれて構わないからさ！」

斗詩「ちょっと文ちゃん！？／／／」

猪々子「アニキだって斗詩の胸揉みたいだろう？」

一刀「うっ！？」

確かに揉みたい一刀だが

桃香・華琳・蓮華・月・恋・雫『（ゴゴゴッ…！！＃）』

ここで揉みたいなんて言ってしまえばその瞬間一刀の命が亡くなってしまう

欲望と命を天秤にかければさすがにスケベな一刀でも

一刀「わかったよ、君達は無罪！胸は揉まないからね　」

と言うしかなかった。

猪々子「アニキ、ホントは惜しいこと言ったって思ってるんじゃないか？　」

ギクリッ！？

その通りであった。

一刀「と…ともかく！麗羽の件は置いといてデーヴァを何とかしないとな！　」

とりあえず誤魔化す一刀だった。

焔「神なんて所詮俺達の敵じゃなかったようだな　」

蒼魔「俺達が強すぎなんだよ　」

ビリー「歯応え無さすぎで退屈だぜ　」

みんなはあまりにもデーヴァが弱すぎるので馬鹿にしていると

モワァ～ッ！

レイ「何だこの煙は？」

ルイ「不気味ですね」

雫「ダーリン、雫怖いの～慰めてなの～！」

ガシッ！

恋「…一刀に抱きつくのはダメ」

フランチェスカ学園の中を黒い煙が包んでいた。

一刀「この煙は何だ！？」

一刀が不思議がっていると

？「一刀！」

一刀「（ビクッ！？）」

一刀は突然聞こえてきた声に驚いた。

何故なら聞こえてきたその声は…

切刃「あんたって子は～！！＃」

バンッ！

一刀の母である切刃であった。

切刃「少しばかり強くなったと思ったらスケベなところまで強化しちゃって情けない！＃」

一刀「うっ！？」

否定できない点である。

切刃「そんなお前に母からお仕置きです！＃」

スッ

切刃は竹刀を取り出した。

一刀「ゲッ！？それは！？」

一刀は切刃が取り出した竹刀に見覚えがあった。何故ならその竹刀は一刀が小さい頃悪戯をした時にお仕置きとして使用されたけつバット用の竹刀なのだ。それが今でも一刀にとってトラウマになっていた。

切刃「昔は数回叩くだけで勘弁していましたが、大人になったんだから数百回叩きますよ！＃」

一刀「ひっ！？母さんやめてくれー！？」

一刀は叫びまくる。しかし叫ぶのは一刀だけではなかった。

桃香「お母さん！？花瓶割ったのは謝るからダムに落とすのだけはやめて！？」

レイ「寄るな!?来るな!?私はカエルが一番苦手なんだ!?」

焔「やめろ光魔!俺はお前から手を切ったんだ!」

他のみんなもそれぞれ恐怖に怯えていた。

そしてみんなが苦しむ様子を学園の外から見るものがいた。

マコラ「にししっ!人間というのは弱いもんだな。誰でも一つは恐怖という弱点があるものなのさ」

モワァ～ッ!

そして校庭にはデーヴァの三人。マコラ・アンチラ・ビカラがいてビカラの口から黒い煙が吐き出されその煙が学園内に流れていた。

マコラ「ビカラは闇の気を吐き出す力がある。そして闇の気を浴びた者は過去の恐怖を思い出されて苦しい目に遭うのさ、恐怖に怯えたドラグーンナイツを倒すなんて赤子の手を捻る（ひねる）より簡単だからな」

ビカラ「ボガボガァ!」

モワァ～ッ!

ビカラは闇の気を出し続ける。

アンチラ「こんな手を使って倒すのは我々の流儀に反するのでは?

」

アンチラが言うと

マコラ「今さら流儀なんていってる場合かよ！ようは勝てばいいんだよ！」

マコラが叫んでいたその時

バキンッ！

学園のガラスが割れて

恋「…やはりデーヴァの仕業だったか」

中から恋が飛び出した。

マコラ「お前はドラグーンナイツの一人!?何で動けるんだ!?」

マコラの策がうまくいっていれば誰一人として動けないはずだったのだ。

恋「…恋に弱点なんてない」

対人関係では有効にし、嫌いなものがない恋にとって闇の気は効き目がなかった。

マコラ「だが馬鹿な奴め！貴様一人で我ら三人に勝てるとでも思ってるのか！」

ザッ！

マコラ・アンチラが構えると

ダダーッ！

遠くから土煙をあげて恋に向かってくるものがいた。

少将「ガルルーッ！」

駆けつけたものは元デーヴァの一人であり、現恋のペットとして暮らしているショウトラこと少将であった。

スッ

少将は恋の横に並ぶと

少将「恋は俺が守る！」

と発言した。

これを聞いたマコラ達は

マコラ「お前は裏切り者のショウトラ！ちょうど良い、俺は前からお前が気にくわなかったからな俺が貴様を倒してやるぜ！」

スッ

戦闘体勢をとるマコラに対し

アンチラ「元仲間と戦うのは気が進まない」

嫌々戦闘体勢をとるアンチラだった。

92時間目「弱点」（後書き）

一刀「一刀だ。デーヴァの手にかかり恐怖に怯える俺達、だが恋が一人で戦っているのでいつまでもこうして怯えるわけにはいかない！次回、『恐怖を克服せよ！』でもやはり母さんは苦手だぜ」

93時間目「恐怖を克服せよ！」（前書き）

一刀「デーヴァ達が焦り出すなか、俺達は猪々子と斗詩からデーヴァ復活の原因は麗羽にあるということを知る。そして俺達ドラグーンナイツが気合いをいれようとしたところ突如デーヴァ達が出した恐怖という闇の気が学園に流れ出してしまう。ピンチになるドラグーンナイツだが、恐怖心がなかった恋だけがデーヴァに立ち向かうのだった」

93時間目「恐怖を克服せよ！」

学園内

ビリー「お前は昔付き合っていた恋人のジェーン！？浮気したのは謝るから許してくれー！」

ロビン「女王陛下！？すみませんでしたお許しをー！」

ルイ「狼は嫌です～！」

恋を除くみんなはマコラの仕掛けた恐怖に怯えていた。

一刀「母さん、この歳でけつ叩きは勘弁してくれー！」

この恐怖を破る方法はただ一つ、己が恐怖に打ち勝つしかないのだ。

だがみんな恐怖に怯えていてそれどころではなかった。

校庭

マコラ「にししっ！人間ごときが恐怖に打ち勝つなんて無理だキー！並大抵なことで恐怖を消せるものか！」

そして校庭ではマコラ・アンチラＶＳ恋・ショウトラの戦いが繰り広げられていた。

マコラ「このデーヴァの恥っさらしの裏切り者め！お前なんてこの俺が始末してやるぜ！」

少将（ショウトラ）「マコラよ、人間を甘くみるでないぞ」

マコラＶＳショウトラ

恋「…早くみんなを元に戻す！」

ブォンッ！！

超進化した恋は方天画戟をアンチラにふるうが

ガキンッ！

アンチラ「それは無理だ。あの闇の気を当てられた者は外部から話しかけても何にも聞こえない。自分自身が闇の気を取り払わなければ無理だ」

アンチラの宝斧に方天画戟を防がれるのであった。

その頃、学園内

モワァ～ッ！

学園内は今でもビカラの吐き出した闇の気が充満していた。

アルベルト「寄るな！僕に近寄るな！」

蒼魔「くそ親父！俺にまとわりつくんじゃねぇよ！」

みんなは見えない恐怖に怯えていた。だが回りをよく見てみれば恐

怖などなくただみんなが暴れているだけである。

つまりこの恐怖は幻のようなものなのだ。

月「へぅ～！麗羽さん私をいじめないでくださ～い！」

蓮華「姉様、また私の財布からお金を！」

華琳「お父様、もう悪戯しないから押し入れに閉じ込めないでー！」

だが幻とはいえみんな恐怖が食い込んでいるので本物のようにしか見えていなかった。

一刀サイド

切刃「私はそんなエッチな子に育てた覚えはない！お尻が腫れ上がるまで叩くから覚悟しなさい！＃」

一刀「やめてくれよ母さん！もう絶対エッチなことはしないから許してー」

一刀は母である切刃の幻に恐怖を感じていた。

一刀が一生懸命謝っていると

切刃「いいえ！許しませんこっちに来なさい！＃」

一刀「いやーっ！あれっ？」

ここで一刀は一つの疑問を感じていた。

一刀「（変だぞ、いつもの母さんなら…）」

一刀幼少時

切刃「こら一刀！お尻を叩くからまちなさーい！＃」

幼児一刀「いやだー！」

ピューッ

一刀は悪戯をして母に叱られていた。

そして一刀は押し入れに逃げ込むと

切刃「一刀！出てきなさい＃」

幼児一刀「もうしないから許してよー！」

と一刀は言った。

普通ならばさっきのように「許しません！」と無理にでも押し入れを開く人が多いと思うが切刃はそうはせず優しい声で

切刃「一刀、今は許してあげるから出てきなさい」

と言うと

ガラリッ

幼児一刀「ホントに許してくれるの？」

切刃「えぇ、許してあげますからこっちに来なさい」

これを聞いた幼児一刀は

幼児一刀「お母さん！」

ぎゅっ！

切刃に抱きつくが

ガシリッ

幼児一刀「えっ！？」

切刃は飛び付いてきた一刀が逃げないように捕まえると

切刃「さてと一刀、お尻叩くから覚悟しなさい＃」

実は切刃の演技であった。

幼児一刀「叩かないって言ったのに～！」

じたばた

一刀は脱出しようとするが完全に捕らえられているので逃げることができない。

切刃「甘いわよ一刀、今は叩かないけど、後で叩くからね」

幼児一刀「いやーっ！」

その後、幼児一刀はお尻を竹刀で数回叩かれたという。（もはや虐待かもしれません）

そんなことが何回かあり、一刀が逃げても切刃に騙され最後には叩かれるという無限ループの生活をおくっていた。（騙されないように閉じ籠ると切刃が泣き真似をするため何度も叩かれる羽目となった。）

つまり切刃は一刀を叱ろうとすると油断させてから叩くということに決定されていた。

現代

一刀「（あの母さんが油断させずに叩くなんておかしい！）」

そのことに一刀が気付くと

一刀「（ってことはこいつは母さんじゃないんだ！だったら怖くない）」

そして一刀は

切刃「覚悟しなさい一刀！」

ブォンッ！！

叩きに来る切刃に対して

一刀「偽物とはいえ、ごめんね母さん！」

バシッ！

一撃を食らわした。

すると幻の切刃は

スゥ～ッ

あっという間に消えていった。

パッ

そして恐怖に打ち勝った一刀が回りを見てみると

レイ「近寄るな～！カエルが～！」

桃香「お母さんやめてよ溺れちゃうよー！」

一刀「どうやらみんなも俺と同じようだな」

それに気付いた一刀だが、どうすることもできないと知ると

ガキガキンッ！

外から音が聞こえてきたので見てみると

恋「…ハァッ！」

アンチラ「フンッ！」

ガキンッ！

マコラ「くたばれー！」

少将「ふんぬっ！」

ガキンッ！

外で恋と少将がマコラとアンチラと戦っているのが見えた。

一刀「大変だ！？今いくぞ恋！」

ガチャーンッ！

一刀はガラスを割りながら窓から飛び降りた。

スタンッ

地面に降りた一刀は直ぐ様

一刀「超進化！」

パァッ！

聖騎士光龍となると

一刀「恋、無事か！」

ダッ！

直ぐ様恋の元に駆け出した。

恋「…一刀！」

アンチラ「ちっ」

恋はアンチラと戦いながら一刀を見つけると

恋「…あの猪がみんなを悪くしている」

一刀「わかった。ありがとうな恋！」

ダッ！

恋から聞いた一刀は闇の気を吐き出すビカラの元に駆け出した。

マコラ「バカな！？闇の気を食らって立ち上がるやつが他にもいるなんて！？」

少将「人間とはときにはものすごい力を持っているのだ」

ダダッ！

そして一刀がビカラの元にたどり着くと

一刀「面倒だ！さっさと終わらせてやるぜ！」

ジャキンッ！

一刀は究極の光の剣『聖龍光丸』を構えると

一刀「『聖俄龍烈風斬』！」

キュルルーッ！

刀を回転して貫く技で攻撃するが

ボインッ！

一刀「なっ！？」

ビカラ「ボガボガァ？」

ビカラの体に弾かれてしまった。

マコラ「馬鹿な奴め！ビカラの体にはどんな技も武器も弾かれてしまうのだよ！」

それで一刀は弾かれてしまったのだった。

一刀「だったら『朱雀炎』『玄武雷』！」

ゴォーッ！！

バチバチーッ！！

一刀はビカラに炎と雷を当てるが

ビカラ「ボガボガァ？」

ビカラには全然効いていなかった。

一刀「くそっ！なんて体なんだ！？」

逆に一刀は大技の連続で少し疲れていた。

一刀「（相手はどんな技さえも通じないうえに闇の気を吐き出す力がある。どうすればこいつを倒せるんだ？）」

一刀が必死になってビカラ攻略法を考えていると

一刀「これしか手はないな！」

スッ

一刀が何かをひらめいたのか、一刀は闇の気を吐き出すビカラの正面に立つと

一刀「これでダメなら仕方がない！」

ゴォーッ！！

一刀は両手に光の力を溜めると

一刀「『光龍と項羽の気光波（ライトニングドラゴンオーラ）』！」

ゴォーッ！！

一刀は両手から光の波動を出してビカラの口の中に波動を流した。

ビカラ「ボガボガァ！？」

すると当然ビカラは一刀の光の気を口に入れることになり

ビカラ「ボガボガァ！？」

闇の気が好物であるビカラは一刀の光の気を嫌って口を閉じようとするが

一刀「開いた口は塞がせないよ！」

ドゴォーッ！！

更に一刀は光の気を出しまくり

ビカラ「ボガボガァ！？」

ビカラの口が閉じるよりも早くビカラの体の中に一刀の光の気が充満していった。

ビカラ「ボガボガァ！？」

ドッカーンッ！！

そしてついにビカラは光の気を体に入らないくらい受けてしまい爆発した。

スッ！

そしてビカラが死んだことにより闇の気も消滅していった。

マコラ「まさかビカラまで殺られるなんて！？」

アンチラ「人間ってやっぱり油断大敵だ」

闇の気が消滅したことにより

ババババッ！

蒼魔「この猿野郎！よくもやってくれたな！」

焔「たっぷりとお礼してやるぜ！」

ズラリッ

恐怖が消えたドラグーンナイツの十人がマコラとアンチラの回りに立ち並んだ。

マコラ「くそっ！これでは逃げることができん！？」

アンチラ「もうダメかも！？　　」

マコラとアンチラに絶体絶命の危機が迫る！

93時間目「恐怖を克服せよ！」（後書き）

インダラ「インダラだ。猿の浅知恵はわかっていたがやはり失敗したようだな、やつらを倒すにはやはり圧倒的な力が必要だ。ということで我に力を貸せ！次回、『デーヴァリーダー・インダラの実力』我の力を思い知るがよい！」

９４時間目「デーヴァリーダー・インダラの実力」（前書き）

一刀「デーヴァの罠にかかり恐怖に怯える俺達。だが俺は過去の経験からこの恐怖は幻だということを知り見事恐怖に打ち勝つ（？）。そして校庭を見てみると闇の気を吐き出しているビカラを見つけ何とかやめさせるために攻撃を仕掛ける俺だがビカラの体にはどんな攻撃も通じない！困った俺はビカラの口から『光龍と項羽の気光波（ライトニングドラゴンオーラ）』をぶちこんでビカラを爆発させるのだった」

９４時間目「デーヴァリーダー・インダラの実力」

マコラ「くそっ！？」

作戦が失敗してしまいドラグーンナイツに追い詰められるマコラとアンチラ

アンチラ「マコラどうする？」

アンチラが聞くと

マコラ「（ここで逃げるわけにはいかないし、２ＶＳ１０じゃあいくら我がデーヴァのＮｏ．２とはいっても負けてしまう）」

マコラが必死にどうしようか考えていると

ビカッ！ゴロゴローッ！！

突然マコラ達の近くに雷が落ちて

ブワッ！

ビリー「なっ！？」

アルベルト「うわっ！？」

ドラグーンナイツのみんなは雷が落ちた衝撃で吹き飛ばされてしまった。

そして

バチバチッ！

雷が落ちた先には

インダラ「まったく、こんなことになると思っていたぞ」

バンッ！

雷が落ちた先にはデーヴァのリーダーであるインダラがいた。

マコラ「インダラ！？」

アンチラ「何故ここに！？」

マコラとアンチラが突然現れたインダラに驚いていると

インダラ「無論貴様らを助けにきたに決まっているだろう」

バッ！

インダラは一刀達に対して構えをとる。

焔「ふんっ！この数を見てビビらないのはほめてやるが残りのお前が出てきてくれてこっちは好都合だぜ！」

ビュンッ！

焔は考えなしにインダラに突っ込んでいったが

インダラ「人間というものは…愚かなり！」

パチリッ！

インダラが閉じていた目を開いた瞬間！

ゴォーッ！！

レイ「何だこの物凄い気は！？」

一刀「これがやつの本気なのか！？」

物凄い気がインダラの体から溢れだした。

シュンッ

そして気を出すのが終わると

インダラ「力を隠すことができるのは貴様らだけではないぞ！」

バンッ！

そこには馬の四本足、体の色が紫に変わり、背中には得物である宝貝を装備したインダラ（人間形態）がいた。

そしてインダラの手には焔が捕まれていた。

蒼魔「焔！？」

焔「ぐっ…」

インダラ「これぞ貴様らでいう超進化だ。貴様らが使っているのを真似ただけだが戦闘力に換算すると２５０００（二万五千）は確実だがな。アンチラよやつらの数値はいくらだ？」

インダラがアンチラに聞くと

ピコンッ！

アンチラは耳を立てて計測を開始した。

アンチラ「計測結果…
ビリー　１９５００
レイ　１５０００
ロビン　２００００
アルベルト　１６５００
ルイ　８０００
雫　１８０００
恋　２００００
蒼魔　２３０００
焔　２２０００
そして北郷一刀　２８０００」

この結果を聞いたインダラは

インダラ「やはり人間は面白いな、デーヴァリーダーである我より高い者がいるとはな」

マコラ「バカな!?人間が俺より強いだなんて!?」

ちなみにマコラの戦闘力は１８０００である。

この数値から見たらナメック星のネイルさん（戦闘力４２０００）より弱いと思うがこの世界ならば一刀の時点で初期フリーザクラス（最低５３００００）にあたるのだ。

インダラ「だが、我は更に力を上げることができるのだ！」

インダラがそう言うと

ボボボッ！

インダラの回りに今まで一刀達が倒してきたデーヴァの宝具（武器）が出現した。

インダラ「サンチラの宝槍、メキラの宝棒、バサラの宝剣、クビラとシンダラの宝杵、ハイラの宝弓、アジラの宝矢、そしてビカラの闇の力！これら全てよ我に集うがよい！」

インダラが言うと

キュインッ！

宝具はインダラの元に寄っていき、

ガチャガチャンッ！

次々とインダラに装着していった。

そして

ジャーンッ！

マコラの宝玉とアンチラの宝斧、ショウトラの宝鎚以外の宝具を装着したインダラが誕生した。

インダラ「これぞ神なる力、『神合体』だ！」

完全武装したインダラが言うと

マコラ「いいぞインダラ！その力でそいつらなんて倒してしまえ！」

インダラに殺戮を急かすマコラ

だがインダラは

インダラ「まだ力が足りないな」

マコラ「へっ！？」

マコラが驚いた瞬間

ズブシュッ！！

マコラ「がはっ！？」

マコラの体をインダラが投げた宝槍が突き刺さった。

インダラ「役立たずは死して我の力になるがよい！」

マコラ「テメェ！？」

ボカンッ！！

そしてマコラは爆死した。

インダラ「まだ力が足りないな」

じろりっ

インダラはアンチラを見ると

アンチラ「死ぬのは嫌だ！？」

ダッ！

恐怖を感じたアンチラは脚力をいかして逃げようとするが

インダラ「無駄なことを」

スッ

インダラが手をアンチラが逃げていった方向に向けると

バビュンッ！！

インダラの手から宝弓が飛び出し

ズドンッ！！

アンチラ「ぐほっ！？」

見事アンチラに命中した。

アンチラ「インダラ仲間を何故！？」

遠くに逃げたアンチラが死ぬ前に聞くと

インダラ「仲間だと？ふざけるな！負けた貴様らなんぞ捨てゴマにしかならんのだよ」

アンチラ「そんな…！？」

ドッカーンッ！！

そしてアンチラも爆死した。

インダラ「これで残るはショウトラの宝鎚だけだが、それはあとにしてやろう」

スッ！

インダラは殺したマコラとアンチラの宝具も吸収した。

インダラ「すごいぞ！？さっきよりも力がみなぎる！」

ゴゴゴッ…！！

力の計測係がいないのでわからないがインダラの戦闘力は五万を越えていた。

一刀「この野郎…」

ゴゴゴッ…!!

これを見た一刀はとても怒っていた。

一刀「敵とはいえ仲間を犠牲にしてまで力を得ようとする奴を俺は許さない!＃」

スッ

一刀は刀を構えると

一刀「『聖俄龍四神弾』!」

ドゴォーンッ!!

一刀は渾身の力で必殺技をインダラに食らわした。

一刀「どうだこの野郎が!」

一刀は手応えありと感じていたが

ふしゅ〜

爆風が消えていくと

インダラ「今、何かしたのか？」

バンッ！

そこには無傷のインダラがいた。

一刀「（バカな！？俺は今まで以上の力を出したんだぞ、それなのに無傷だなんて！？）」

一刀が驚いていると

インダラ「では今度は我の番だな」

スッ！

インダラは構えると

インダラ「『魔獣十二門撃（まじゅうじゅうにもんげき）』！」

ドゴォーンッ！！

インダラの両手から犬を除いた十二支の気が一刀に襲いかかった。

一刀「なっ！？」

一刀は避けようとするが先の『光龍と項羽の気光波（ライトニングドラゴンオーラ）』と渾身の『俄龍四神弾』をはなった衝撃で思うように動けず

一刀「ぐわーっ！？」

ドドゴォッ！！

蒼魔「一刀！？」

インダラの技を食らってしまった。

９４時間目「デーヴァリーダー・インダラの実力」（後書き）

蒼魔「蒼魔だ。インダラのけた違いの強さに一刀がやられ、ドラグーンナイツにも危機に訪れる。こうなったら奴を倒す策はただ一つだけだ。次回、『奇跡の友情合体』一刀、俺の力を使え！」

９５時間目「奇跡の友情合体」（前書き）

一刀「俺達がマコラとアンチラを追い詰めているとそこへデーヴァリーダーであるインダラが現れた。しかしインダラは仲間の救援に来たどころかインダラは今まで倒してきたデーヴァ達の宝具を身につけ更に力を求めるためにマコラとアンチラまで殺害し、二人からも宝具を奪ったのだった。インダラの行動にブチキレた俺は攻撃を仕掛けるがインダラには全く効かず逆にインダラの技を食らうのだった」

95時間目「奇跡の友情合体」

蒼魔達『一刀!?』

ショウトラの宝鎚をのぞく宝具を全て身に付けたインダラの一撃を一刀は食らってしまった。

衝撃を受ける蒼魔達

そして教室に潜んでいた桃香達は

桃香「一刀くん!?」

華琳「そんな!?」

蓮華「一刀!?」

月「へぅ…!?」

斗詩「そんな会長さんが!?」

猪々子「あんなに強いアニキが殺られたら誰があの化け物を倒すんだよ!?」

衝撃を受けるみんな

インダラ「・・・」

だがインダラは

インダラ「さすがは聖騎士光龍だな。今の一撃を避けるとはな」

全員『!?』

全員が驚いていると

シュンッ！　パッ

一刀「ハァハァ…!?」

突然一刀が現れた。

蒼魔「一刀!?お前生きてたのか!?」

一刀「ギリギリだったよ。攻撃を食らう瞬間、瞬間移動してかわしたんだ。だけど力がなくなりかけていたから一か八かのかけだったけどな」

一刀が言うと

雫「ダーリン生きててよかったの～」

ぎゅっ！

恋「…恋も生きててうれしい」

ぎゅっ！

二人は一刀に抱きつく

一刀「（胸が～／／／）二人とも、今は戦い中だから離れて…」

一刀は言うが

恋・雫『…いや／／／』

ぎゅーっ！二人は離れるのをやめない。

その頃、学園内

桃香・華琳・蓮華・月『（ゴゴゴッ…！！＃＃）』

猪々子「あちっ！？」

斗詩「何だか燃えてるね！？」

一刀が帰ったら多分騒動が起きるかもしれないと感じる二人だった。

インダラ「馬鹿な奴め、早く死ねば楽になったものを」

カチンッ！

この言葉にドラグーンナイツがキレた。そして…

ドラグーンナイツ『超進化！』

パァーッ！

一刀と恋をのぞくドラグーンナイツが超進化をした。

ビリー「俺もマイフレンドである一刀と同意見だ。仲間を道具としか思ってない奴は大嫌いなんだよ！『雷撃波動弾（ライオットブラスト）』」

ドキュンッ！！

ビリーはインダラに攻撃を仕掛けるが

インダラ「雷の力か」

スッ

インダラはビリーの攻撃に対し手を向けると

スゥッ

ビリーの攻撃を吸収した。

ビリー「どうなってるんだよ！？何で攻撃を吸収したんだ！？」

するとインダラは

インダラ「愚か者め、我が吸収したのは宝具だけだと思っていたのか？吸収した奴の能力も手に入れたのだ。ちなみに今のはシンダラの雷撃吸収力だ」

スッ！

そしてインダラは宝棒を取り出すと

インダラ「メキラの棒術！　」

ドカカッ！！

ビリー「ぐはっ！？　」

ドカッ！

ロビン「ビリー！？おのれっ『風牙馬上槍』！　」

ゴォッ！！

ロビンはシルフィースピアを構えて攻撃を仕掛ける。

インダラ「ふんっ！バジラの突進力！　」

ドンッ！　ドカンッ！！

ロビンとインダラは互いに激突しあい

ロビン「ぐわっ！？　」

ロビンが当たり負けしてしまった。

インダラ「クビラの俊足！　」

シュンッ！

レイ「なっ！？　」

インダラはレイの後ろに立つと

インダラ「アジラの力！」

バコンッ！！

レイ「ぐはっ！？」

ズザザーッ！！

インダラから見たら軽く殴った程度であるがレイは遠く吹き飛んでいった。

アルベルト「くっ！？『アタックフォーメーションα』！」

ドキュンッ！！

雫「『最終大蛇水龍（ファイナルアクアオロチ）』！」

ドゴォーンッ！！

雫とアルベルトが同時に攻撃を仕掛ける。

アルベルト「これならいくら奴でも…」

しかし

インダラ「愚か者め」

ズーンッ！！

インダラは宝貝を片手に平然としていた。

インダラ「我が宝貝である宝貝は衝撃を吸収し、跳ね返すことができるのだ」

ドンッ！！

跳ね返された技がアルベルトと雫に襲いかかる。

アルベルト「ぐはっ！？」

雫「きゃっ！？」

バタタッ！

自らの技にやられる二人

インダラ「さてそろそろ宝鎚もいただくとするか」

スッ

インダラが少将（ショウトラ）に目を向けると

少将「（ビクンッ！？）」

あまりのインダラの恐ろしさに動物的本能が作動して危険を察知し怯える少将。

だが

スッ

恋「…恋の家族は恋が守る！」

バンッ！

恋がインダラの前に立ちはだかった。

恋「…『地龍六頭撃』！」

ズゴゴーッ！！

恋は敵わないとわかりながらもインダラに攻撃を仕掛ける。

インダラ「馬鹿め」

パシンッ！

インダラは恋の攻撃を軽くはじくと

インダラ「『魔獣十二門撃』！」

ドドォーッ！！

一刀を苦しめた技をインダラは恋に放った。

インダラの技が恋に襲いかかる！その時！

サッ

ルイが恋の前に立つと

ルイ「『龍門防御陣』」

シュバッ！

結界をはって恋を助けようとする。

インダラ「馬鹿め！完全体に近付いた我にもはやそのような技で防げると思っているのか！」

ピキピキッ！　バリンッ！

ルイのはった結界はむなしくもインダラの技に打ち砕かれてしまった。

ドゴォーンッ！！

恋「…ぐっ！？」

ルイ「きゃっ！？」

ルイが弱めてくれたおかげで何とか即死は免れたものの大ダメージを負った二人。

蒼魔「くそっ！残るは俺一人かよ！？」

インダラ「だが、どうせ貴様も死ぬ運命なのだ。どうだろう自ら降伏しこの地球(ほし)を明け渡すというのなら命だけは助けてやるが」

インダラが言うと

蒼魔「ふざけるな！誰がそんなこと聞くかよ！『氷河千兆撃(ブリザードデストロイヤー)』！」

チュドンッ！！

蒼魔は技を放つが

インダラ「こんなものが通じるものか！」

パシンッ！

インダラに軽く弾かれてしまい

インダラ「くたばるがよい！『魔獣十二門…』」

インダラが蒼魔に攻撃しようとすると

一刀「『聖俄龍鋼重波』！」

ドカンッ！！

インダラ「ぐっ！？」

一刀が放った技によってインダラが一瞬怯んだ。

蒼魔「一刀！？お前」

だが一刀の方は

一刀「ハァハァ！？今ので全ての力を使っちまった。もう聖騎士光龍を保つしか力が残ってない」

今の一刀ではもう攻撃する力が残っていないのだ。（瞬間移動も使えない）

インダラ「馬鹿な奴め！いざとなれば瞬間移動で逃げられたものの、くたばるがよい！『魔獣十二門撃』！」

ドゴォーンッ！！

もはや一刀には避ける力すらも残ってなく、インダラの技は一刀に迫っていく。

蒼魔「ちっ！」

サッ！

蒼魔は一刀を庇うべく一刀の前に立つ

一刀「よせ蒼魔！？早く逃げないと死ぬぞ！？」

一刀は蒼魔に叫ぶが

蒼魔「馬鹿野郎！＃友達（ダチ）を見捨てて逃げられるかよ！」

ドゴォーンッ！！

インダラの魔獣十二門撃が二人に迫る。

蒼魔「（ちっ！この場を打開する方法はあれしかねぇ！）」

蒼魔は北極の修行にて叔父の昴にある方法を教わっていた。

数ヵ月前

昴「蒼魔、お前は大事なものを守るために命を懸ける覚悟はあるか？」

蒼魔「どういうことだよ叔父さん？」

蒼魔は昴に聞くと

昴「今から教える技は『龍合体（ドラゴンクロス）』といって他者と己が融合してさらに強くなる技だ。だが互いに信頼しあってないと合体が不完全な上に己が消滅してしまう恐れがある技だ。お前に命を懸けてまで守りたい奴はいるか？」

昴の問いに蒼魔は

蒼魔「あぁ！そんな奴がいるぜ！」

昴「わかった。ならば教えてやろう！」

そして蒼魔は昴から龍合体を教わった。

現在

蒼魔「一刀、この状況を打開する方法が一つだけあるけど話に乗るか？」

蒼魔が言うと

一刀「お前がそんなに言うなら物凄い打開策なんだろうな。話に乗るぜ！」

蒼魔「わかった。そんじゃあいくぜ！」

インダラ側

インダラ「フフッ！散る覚悟ができたようだな」

インダラが言うと

シュパンッ！！

インダラ「なにっ！？」

インダラの放った魔獣十二門撃がなにかに打ち消された。

ズゴゴーッ！！

インダラが打ち消された方角を見てみると

一刀「・・・」

バチバチッ！

そこにはいつもの白く輝く鎧から銀色に輝く鎧を身に纏った一刀が火花を飛ばしながら立っていた。

一刀「これぞ蒼魔との龍合体、聖騎士光龍・氷龍形態だ！」

バンッ！

一刀が言うと

インダラ「なんという力だ!?もしや我が力を越えているのでは!？」

インダラが思う通り一刀の戦闘力は蒼魔と一刀の合計戦闘力５１００（五万千）であった。

しかもそれよりも戦闘力が高く上がっているのは二人の信頼度が高いからである。（龍合体は信頼度が高いほど力が強くなる）

インダラ「おのれっ！神に逆らうなぞ不届き千万、とっとと死ぬがよい！」

ダダッ！

インダラが接近戦を仕掛けてくる。

一刀「愚か者め」

スッ！

一刀は腰にある『聖龍光丸』と『蒼絶氷雷剣』を抜くと

一刀「『氷俄龍四神弾』！」

ズドォーーンッ！！

インダラ「馬鹿な！？気の無い貴様が何故こんな大技を！？」

一刀「龍合体は互いの気を合わせた分、気を回復できる今の俺は蒼魔の気の分だけ回復したんだよ！」

ズドォーーンッ！！

一刀の放った技がインダラに襲いかかる。

インダラ「馬鹿な！？この神である私が負けるなんて！？」

ビキビキッ！！

パリーンッ！！

全身が凍りついたインダラは砕け散った。

パァーッ

そして一刀は蒼魔と分離すると

蒼魔「やったな一刀！」

一刀「お前だからできた技だよ　」

ダダッ！

そして学園から桃香達が出てきて駆け寄ってきた。

桃香「一刀く～ん！　」

一刀「桃香！？みんな　」

一刀達は長い戦いが終わったと思っていたが

蒼魔「（んっ、インダラの死体がないな。まぁ別にあの体じゃあ何もできないだろうし構わないか）　」

ところがこの時、大変なことが起きようとしていたのだ。

学園外れの森

インダラ「くっ！人間共め、まさかこの私を倒すとはな！？　」

この場所で今にも消えそうなインダラが地面を這っていた。

インダラ「だが奴らは何も知らないのだ自分達がやったことが間違いだということをな…　」

シュンッ！

そしてインダラは消滅していった。

９５時間目「奇跡の友情合体」（後書き）

一刀「一刀だ。インダラを倒してから数日、ついにデーヴァゲームの期限である十一日目を迎えるが一向に父さん達を封じた封印は解けず時間も元に戻らなかった。そんな時いきなり地震が発生し、そこから現れたものは…次回、『神出現！終わらぬ戦い』この地球は俺が守る！」

９６時間目「神出現！終わらぬ戦い」（前書き）

一刀「ショウトラの宝鎚を除く宝具を全て吸収したインダラの強さに苦戦するドラグーンナイツ。そして蒼魔を除くみんながやられてしまい俺達に危機が迫るなか蒼魔が龍合体という秘策を俺に教えて見事成功した。そして合体した力でインダラを倒すのだがインダラは何かを企んでいた」

９６時間目「神出現！終わらぬ戦い」

ついにインダラを倒した一刀達ドラグーンナイツ。

そしてインダラ撃退日から数日が過ぎデーヴァゲーム終了の十一日目を迎えた。その間みんなの傷も癒えたのだった。

一刀「今日を過ぎれば封印されている父さん達は元に戻る。そして止まっていた時間も元に戻るんだよな」

蒼魔「そういやショウトラがまだ生きているけど大丈夫なのか？」

少将（ショウトラ）「大丈夫だ。インダラを倒せば元に戻るようになっている」

それを聞いて安心するみんなだった。

もしデーヴァ全滅が条件なら少将も倒さなくてはならないのだからそしてみんなが話をしているとドッゴーンッ！！

一刀「なんの音だ！？」

焔「何かが校庭に落ちたようだぞ！？」

ダダッ！

直ぐ様落ちてきたものの正体を確かめるべく校庭に急ぐドラグーン

ナイツと桃香達と猪々子、斗詩
そして一同が校庭にたどり着くと
ゴゴゴッ…！！
そこには1台のロケットがあった。
ビリー「おいおい神様の次は宇宙人が攻めてきたのか？」
アルベルト「冗談でもそんなこと言わないでください」
しかし落ちてきたロケットには何だか見覚えがあった。
斗詩「皆さん見てくださいあの尾翼になにか書いてありますよ」
そしてみんなが尾翼に注目すると尾翼には『ＲＥＩＨＡ』と書かれていた。
すると
プシューッ！
ロケットの扉が開いて中から現れたのは
麗羽「おーほっほっほっ！久しぶりの地球ですわね」
今回の事件の原因である麗羽が現れた。
斗詩「麗羽様！？」

猪々子「地球の危機にどこにいってたんですか!?」

二人が聞くと麗羽は

麗羽「決まってるじゃありませんの、地球がピンチならば宇宙に逃げればいい話じゃないですか」

麗羽は地球に危機が迫るなかただ一人自家用ロケットで宇宙に逃げていたのだ。

華琳「あなた何を考えているのよ!それと猪々子と斗詩から聞いたわよデーヴァ騒ぎはあなたの仕業だってね」

麗羽「(ドキンッ!?)二人とも!絶対話さないようにと言ったのに話しましたわね#」

ギロリッ

猪々子「ひっ!?」

斗詩「仕方がないじゃないですかいつまでも隠してなんかいられませんよ」

華琳「さてと地球に災いをもたらしたあげくみんなを置いて逃げ出した悪人に罰を与えなきゃね」

蓮華「募集もしてないのに読者から送られた罰のどれかにしようかしら?」

※送られた罰についてはこの小説の感想を読んでください。

一刀「えぇと、月数万で暮らす。うちの爺ちゃん（刃）に限界があるまで相手をする…ｅｘｔ」

恐ろしい罰の内容を聞いた麗羽は

麗羽「冗談じゃありませんわ!?わたくしはまた去らせてもらいます！」

ダッ！

その場から逃げ出した。

一刀達も麗羽を追いかけようとすると

ゴゴゴッ…!!

急に地震が発生した。

恋「…これ普通の地震じゃない。何かが暴れてる」

その頃、デーヴァが封印されていた東京の地下街では

ゴゴゴッ…!!

どうやらこの場所が震源地らしく大きく鳴り響き

ドッカーンッ！！

地面から何かが飛び出した。

キィーーンッ！

飛び出した何かはフランチェスカ学園めがけて飛んでいき

フランチェスカ学園

キィーーンッ！

麗羽「えっ！？」

ドッカーンッ！！

みんなから逃げるため校庭を走り回っていた麗羽に直撃した。

蒼魔「おいおいこれが罰だなんてやりすぎだろ！？」

桃香「いくら麗羽さんがギャグキャラでも死んじゃいますよ！？」

猪々子「うるさい人を亡くしたものだ」

斗詩「化けて出てこないでくださいね」

みんなが好き勝手言っていると

むくっ

いきなり麗羽が立ち上がった。

蓮華「何とか生きてたようね」

月「死なれたら逆に迷惑ですしね」

ところが

麗羽「これが現在の地球か数十年も経てば変わるものだな」

麗羽はおかしなことを言い出した。

雫「頭打ったんじゃないの？」

みんなが驚いていると

一刀「いや、気の流れが違う。あれは麗羽の体を借りたなにかだ」

一刀が言うと

麗羽「フフフッ！さすがは優刀の息子だなもう我の正体に気付くとは」

一刀「お前は一体何者だ！」

一刀が叫ぶと

麗羽「我の名か？我の名は皇（すめらぎ）、デーヴァの頂点であり地球の神なり！」

ビシッ！

麗羽の体を借りた皇が言うと

ロビン「デーヴァの頂点だと？あいにくだな貴様の部下に当たるデーヴァはほとんど全滅したぞ」

まだショウトラが生きているのでまるきり全滅ではない。

麗羽「フンッ！バカな奴らめ！」

華琳「その姿で言われると余計に腹が立つじゃない！＃私達のどこがバカなのよ！」

華琳が言うと

麗羽「簡単なことだ。デーヴァ共を倒すくらいなら数十年の戦士達にもできたはず。だが奴らはデーヴァを倒さずに封印することにした。何故だかわかるか？」

麗羽が聞いてくると

アルベルト「まさか！？」

アルベルトが何かに気がついた。

麗羽「その通りだ。我はデーヴァが倒されることによって復活するのだ。ショウトラの分はインダラが力を溜めていたおかげで間に合ったからな」

全員『!?』

全員に衝撃が走る。

まさかデーヴァを倒したことによって大変なことが起きるだなんて誰も予想できなかったからだ。

麗羽「このことはデーヴァリーダーであるインダラしか知らないことだからな、まぁもし貴様らがデーヴァを倒せなくても奴なりに何か策があったのだろうがな」

一刀「くっ!?俺達のせいでお前を呼び出したのなら…お前は俺達が倒す!」

バシュンッ!

一刀は一気に超進化して聖騎士光龍になった。

麗羽「バカめ!この肉体がどうなってもいいのか?我が死ねばこいつも死ぬ…」

麗羽が最後まで言おうとすると

一刀「『聖俄龍四神弾』!」

ドゴォーッ!

一刀は容赦なく必殺技を麗羽に放ち

ドカカッ！

技は麗羽に直撃した。

一刀「あいつの根性なら死体になってもすぐ生き返られるだろう」

それにしてもいきなり攻撃はひどいと思うが！？

だが技を食らったはずの麗羽は

麗羽「この程度か？」

一刀「！？」

舞い上がった煙の中から麗羽の声が聞こえ

ビューッ！

煙が晴れると

キラキランッ！

全身に金龍の鎧を身につけた麗羽が立っていた。

麗羽「こんな体だが以外とタフな上に我にどんどん力を与えてくれているのだ。我の鎧を出すくらい楽なものだ」

一刀「まさか麗羽が！？」

その頃、皇に捕らわれた麗羽の精神は

麗羽の体の中

麗羽（精神体）「おーほっほっほっ！皇さん力を与えますからあのブ男さん達を倒してくださいな」

完全に皇の味方をしていた。（別に操られているわけではない、麗羽本人が皇に味方をしているのだ）

麗羽（精神体）「体を乗っ取られたときは驚きましたけどこれは散々わたくしをこけにしてくれたブ男さん達にいい復讐ができますわ。おーほっほっほっ！」

まさに悪の麗羽であった。

校庭

麗羽「さぁかかってくるがよい地球人共！」

今、一刀達と神の戦いが始まろうとしていた。

９６時間目「神出現！終わらぬ戦い」（後書き）

麗羽「皇だ。神である我の力の前では何者でも倒れてしまうのだ。だが何度倒しても起き上がってくるドラグーンナイツと地球人達。こうなったら貴様ら全員を殺してやる！次回、『立ち向かえ地球人』それにしてもこの体は胸が邪魔だ！＃」

97時間目「立ち向かえ地球人！」（前書き）

一刀「デーヴァとの戦いが終わり、ついに封印されていた父さん達が解放されようとしていたその日この事件の黒幕である麗羽が現れた。同時刻、デーヴァが封印されていた東京の地下街では得体の知れない何かが飛び出して麗羽に乗り移った。乗り移ったのは神と名乗る皇でありデーヴァが倒されることによって現れる最悪の敵だった。俺は乗り移った麗羽に攻撃を仕掛けるが麗羽には効いていなかったのだ」

97時間目「立ち向かえ地球人！」

麗羽の体をのっとった（？）皇に一刀の攻撃が効かない！

それどころか麗羽は金龍の鎧を身に纏い（まとい）更に強くなった。

麗羽「人間共めくたばるがよい！」

スッ

麗羽はみんなに手を広げて向けると

麗羽「『絶指砲（ぜっしほう）』！」

ビュンッ！

指先からビームを放ってきた。

桃香「きゃっ！？」

指先から放たれたビームが桃香達に迫る。

蒼魔「あぶない！？」

バババッ！

そしてドラグーンナイツのみんなは桃香達を守るため囲むように並ぶと

ドラグーンナイツ『超進化！』

パァーッ！

一斉に超進化して桃香達を守った。

焔「ぶっ殺してやるぜ！」

キィーンッ！

そして一斉に空を飛んで麗羽に迫るドラグーンナイツ

ビリー「『雷撃波動弾（ライオットブラスト）』」

アルベルト「『フォーメーションα』」

ドガガッ！！

ドラグーンナイツは麗羽に攻撃を仕掛ける（もはや麗羽がどうなろうと構っていられない）が

麗羽「ふんっ！クズ共が」

スッ

麗羽は両手を広げると

麗羽「『龍撃陣』！」

ボォーッ！！

龍の形をしたバリアのようなものを出現させて

ドカカンッ!!

攻撃を防いだ。

ビリー「ちっ!あれを防ぎやがるとはな」

アルベルト「さすがにデーヴァよりも上に立つものだけはあるね!?」

その事に驚いている隙に

麗羽「貴様らは何をしているのだ?」

バァンッ!

いつの間にか麗羽がアルベルトとビリーの後ろに立っていた。

アルベルト「いつの間に!?」

くるっ

アルベルトは急いで振り返ろうとするが

ガシッ!

麗羽に顔を捕まれてしまい

麗羽「人間ごときに龍は必要ない　」

ゴゴゴッ…！！

アルベルトをつかむ手に力が込められると

麗羽「『死の龍撃滅（デスブレイクドラゴン）』！　」

バチバチッ！

アルベルト「ぐわーっ！？　」

アルベルトの体から激しい火花が飛び散ると

シュンッ！

アルベルトの超進化は解けてしまった。

麗羽「まずは一人　」

ポイッ

そして麗羽はアルベルトを投げ捨てた。

一刀「アルベルト！？　」

ガシッ！

だが地面に落ちる寸前のところで一刀に助けられた。

一刀「よかったな助かって…」

ところが一刀が麗羽の攻撃によって破れたアルベルトの服を見てみると

ボィ～ンッ

そこには詠くらいのおっぱいがあった。

一刀「（何でおっぱいが！？）」

もうわかる人もいるであろう。実はアルベルトは男装趣味のある女の子なのだ。

その事を知らない一刀が衝撃を受けていると

ビリー「ぐわっ！？」

シュンッ！

麗羽「これでふたり目だな」

一刀が驚いている間にビリーがやられてしまいビリーの超進化が解けてしまった。

ロビン「よくも二人を！女性とはいえもう容赦しないぞ！」

ジャキンッ！

ロビンはシルフィースピアを構える。

レイ「ロビン、私も手を貸すぞ！」

スッ！

そしてレイもロビンと共に麗羽に接近戦を挑んでいった。

ロビン「『風牙馬上槍』！」

レイ「『白虎蹴撃』！」

バババッ！

そして二人は技を繰り出すが

麗羽「この私に接近戦を挑むとはバカな奴らめ」

スッ

麗羽は両手を前に出すと

麗羽「『死龍合唱（デスドラゴンマーチ）』！」

ボヤ～ッ！

怪音波のようなものをロビンとレイに繰り出して音波を食らった二人は

ロビン「何て音だ!?頭が割れるようだ!?」

さらに

シュンッ！

レイ「超進化が解けてしまった！？」

この音波は超進化を消滅させる力があるのだ。

麗羽「超進化できぬ人間を倒すなど赤子の手を捻るより軽いものだ！」

ブォンッ！！

麗羽が強く腕を振って強風を起こすと

ドビューッ！！

ロビン「うわっ！？」

レイ「きゃっ！？」

ドカンッ！！

二人は吹き飛ばされてしまい校舎に激突した。

一刀「ロビン、レイ！？蒼魔、こうなったら龍合体だ」

蒼魔「わかったいくぜ一刀！」

ダダッ！

蒼魔は一刀と龍合体すべく一刀に近づこうとすると

麗羽「そうはさせん！」

ゴゴゴッ…！！

麗羽は身体中に力を溜め込むと

麗羽「『狙撃龍滅弾（ホーミングドラゴンブレイクショット）』！」

ドドドドドンッ！！

麗羽は身体中からどす黒い弾を飛び出させると

ドドンッ！

恋「…ぐっ！？」

雫「きゃあっ！？」

次々とドラグーンナイツに弾が命中し超進化が解けていった。

そしてついに

ドドンッ！！

蒼魔「ぐはっ！？」

一刀「ぐはっ！？」

弾は一刀と蒼魔にも命中し二人の超進化が解けてしまった。

麗羽「フフフッ！これでドラグーンナイツは全滅だな」

ボロボロッ

麗羽の言う通り一刀達ドラグーンナイツは全滅してしまった。

一刀「くそっ…」

よろりっ

一刀は何とか木刀を杖がわりにして立ち上がろうとするが

麗羽「無駄なことはよせ超進化は強大な力を使うのはわかっている。今の貴様には立ち上がる力すら残ってなどいな…」

麗羽が最後まで言おうとすると

一刀「まだ全てが終わったわけじゃないんだ！人間をなめるなよクソ神め！」

一刀が麗羽をバカにすると

ピキンッ＃

麗羽がキレてしまい

麗羽「よかろうそんなに死にたければ我が手で殺してくれる＃」

ぐっ！

麗羽は一刀の頭をつかむと

麗羽「あの世で我をバカにしたことを後悔するがよい！」

ゴゴゴッ…！！

麗羽は右手に一刀を殺すほどの力を込めて

麗羽「死ぬがいい愚かな人間よ！」

ブォンッ！！

拳を一刀に食らわそうとした。

力が出せない一刀は避けようがない！

一刀に拳が目の前に迫ったその時！？

？「『風狼円斬』！」

ビビュンッ！

突然、気の刃が麗羽に迫ってきて

麗羽「ちっ！」

パッ！

麗羽は一刀を離すと

麗羽「こんなもの！」

バチンッ！

気の刃を打ち消した。

そして気の刃が打ち出された先にいたのは

孤狼「ちっ！あれを打ち消すとはさすがはデーヴァだな！？」

バンッ！

その先には孤狼がいた。

麗羽「まだ邪魔するものがいたとはなだが所詮無駄なことだったようだかな」

麗羽が言うと

孤狼「無駄なこと？神様のくせにバカじゃないのか？」

麗羽「なんだと！」

スッ

麗羽は離した一刀を再び捕らえようと腕をのばすが

パッ

すでに一刀の姿はなかった。

飛琳「ありがとうございます孤狼くん」

バンッ！

そして数十メートル先には一刀を抱いた超進化した飛琳が立っていた。

孤狼「俺の狙いは最初から飛琳が来るまでの足止めだったんだよ」

麗羽「バカな！？」

さすがに麗羽も驚いていた。

一刀「う…飛琳先生」

飛琳に抱かれた一刀が目を覚ますと

飛琳「よく頑張ったなあとは任せておけ」

飛琳は言うが

一刀「ダメだよ！いくら兄貴と飛琳先生が力を合わせてもあいつには…」

一刀が言うと

飛琳「誰が二人だけだと言った？」

一刀「えっ！？」

その直後

バサッ！

九龍「『巨大炎（ギガフレイム）』！」

鳳賀「『雷撃砲撃（プラズマショット）』！」

ゴォッ！！　バチバチッ！

茂みから飛び出した鳳賀と九龍が麗羽に攻撃を仕掛けた。

その隙に

神華「大丈夫か焔？」

焔「神華！？お前まで」

闇華「ボク達だけじゃないよ。まだ取り調べを受けている映者以外デスドラゴンナイツ全員が来てるよ」

神華に続いて闇華も現れると

バババッ！

嵐「全て吹き飛びな！」

地王「ほむたんとしずたんいじめるやつは許さない！」

紫電「しびれちまえ！」

零霧「美しくないものは滅びよ！」

死龍「弟が頑張ってるのに兄の俺が休んでられるかよ！」

デスドラゴンナイツが加勢に来てくれた。

（彼らについては学園対抗武道大会編を読んでください）

さらに彼らだけでなく

バッ！

愛紗「『青龍逆鱗陣』！」

鈴々「『猛虎粉砕撃』なのだ！」

星「『星雲神妙撃』！」

凪「『猛虎蹴撃』！」

霞「『蒼龍神速撃』！」

季衣「『岩打武反魔（いわだむはんま）』！」

ドカカッ！！

駆けつけたフランチェスカの生徒達が攻撃を仕掛ける。

麗羽「ちっ！たかが人間の分際で神に逆らうなど」

ビュインッ！

麗羽は攻撃を避けるべく上空に逃げようとすると

卑弥呼「そうはさせないのじゃー！」

貂蝉「久々に本気出すわよ『天使の抱擁（エンゼルハグ）』」

ギューッ！！

麗羽「ぐぎゃーっ！？」

漢女二人に抱きつかれるのはダメージが一番でかかった。

麗羽が苦しんでいると

斗詩「聞こえますか麗羽様？」

下から斗詩がスピーカーで話しかけてきた。

猪々子「みんなで話し合ったんすけど今謝れば長時間の説教で勘弁

してくれるらしいです」

斗詩「もし謝らなかったら送られてきたお仕置きを執行されるらしいですよ」

二人の声が麗羽に流されると

麗羽の体の中

麗羽（精神体）「（ブルブルッ）あんなお仕置きうけたら死んでしまいますわ!?まぁブ男さんが苦しむ顔も見れたわけですし、ちょっと皇さんわたくしの体を返してくださいな」

ところが

皇「誰が返すものか!もはやお前に用はない。消えてしまえ!」

ギュッ!

麗羽（精神体）は捕まってしまった。

麗羽（精神体）「ちょっと!?これはどういうことですの?誰か助けて～!」

散々利用されたあげく捨てられる。まさに自業自得である。

体の外

次々と駆けつけてくる仲間達を見た一刀は

一刀「みんなが地球を守るためにたとえ勝てないとわかっていても頑張っているんだな」

ぽわーっ

この時、一刀は気付いてなかったが一刀の体を光が包んでいた。

飛琳「（この光は!?北郷はどんどん成長するんだな）」

一刀を抱いていた飛琳以外誰も気付いていなかった。

麗羽「おのれっ！人間ごときが神である我をなめおって！」

シュバッ！

貂蝉「いやんっ」

卑弥呼「強引じゃのう」

麗羽は何とか貂蝉達から脱出すると

麗羽「こうなったらこんな星などもういらんっ！」

バッ！

麗羽は両手を上にあげると

ゴゴゴッ…!!

華琳「何なのよあれは！？」

桃香「いったい何が起きちゃうの！？」

ゴゴゴッ…！！

麗羽は巨大な黒い塊を作り出した。

97時間目「立ち向かえ地球人！」（後書き）

飛琳「飛琳だ。皇は何かを企んでいるようだな、みんなも頑張って皇の企みを阻止しようとするが皇はみんなの攻撃がまるで効かない。そんなときみんなを守るために北郷に新たなる力が！？次回、『超進化を越える力』いよいよデーヴァ編もクライマックスだな」

98時間目「超進化を越える力」（前書き）

一刀「突如現れた神を名乗る皇が麗羽の体を乗っ取り攻撃を仕掛けてくる。迎え撃つドラグーンナイツだが麗羽とは思えない力の差に超進化を消されてしまいドラグーンナイツは全滅してしまった。そして俺は麗羽に頭を捕まれて死を覚悟したとき兄貴（孤狼）、飛琳先生、愛紗達フランチェスカの生徒、鳳賀・九龍、元デスドラゴンナイツのみんなが地球を守るために駆けつけてくれたんだ！」

98時間目「超進化を越える力」

麗羽が両手を上にあげると

ゴゴゴッ…！！

麗羽の両手から黒い塊が現れた。

それを見たみんなは

桃香「華琳さんあれはなんなんですか？」

華琳「私が知るわけないでしょう！」

孤狼「だが一つ言えることといえばあれがすごくヤバイってことだぜ」

孤狼が恐ろしいと感じてみんなが黒い塊に恐れを抱くなか

麗羽「この塊に興味があるようなら教えてやろうこれは我が奥義『黒惑星破壊弾（ブラックスペースバースト）』だ。これを我が放てばこの地球（ほし）は粉々に粉砕される。もうこんな地球なんて興味ないからな！」

バンッ！

麗羽が言うと

蓮華「地球を破壊するだと！？」

月「そんなことすればあなただって無事ではすまないんじゃ」

月が言うと

麗羽「愚か者め！我は宇宙空間でも生きられるのだ。だが地球人である貴様らが宇宙に飛ばされればみな死んでしまうからな、精々その場で無事を祈るよう念仏でも唱えておくがよい」

ゴォッ！！

麗羽は宇宙から地球を破壊するため宇宙空間に行こうとする

孤狼「バカ野郎が！そんな話聞かれて黙っていられるかよ！」

飛琳「絶対に阻止してやる！」

ビュンッ！

飛琳と孤狼が麗羽を止めるべく麗羽の元に向かっていく

孤狼「『狼闇波弾（ろうあんばだん）』！」

飛琳「『焔龍撃』！」

ドカカッ！！

二人は同時に技を仕掛けるが

麗羽「愚か者めが！」

スッ

麗羽は片手で黒い塊を持ちながらもう片方の手を孤狼達に向けると

麗羽「『正義滅殺砲（ジャスティスエンドカノン）』！」

ドカカッ！！

麗羽は二人の攻撃を打ち破り、二人に攻撃を放った。

孤狼「ぐほっ！？」

飛琳「がはっ！？」

ヒューッ！！

そして破れた二人は墜落していく

卑弥呼「こっちに来るのじゃ～！」

貂蝉「私達が受け止めてあげるわん♪」

ガバッ！

二人を助けようと貂蝉と卑弥呼が構えるが

サッ！　サッ！　ドシンッ！

二人は貂蝉と卑弥呼を避けて落ちる道を選んだ。

貂蝉「何で避けるのよん！　」

卑弥呼「恥ずかしがりやじゃのう　」

そういう意味ではないと絶対に思う。

麗羽「無様な人間どもめ！そこで地球が破壊されるのを黙ってみてるがよい！　」

スッ

麗羽は黒い塊を持ったままどんどん上昇していく

鳳賀「飛琳先生と兄貴で勝てないんじゃあもうあいつを止めることはできないかもな！？　」

九龍「というか俺達空飛べない　」

もはやみすみす地球が破壊されるのを黙ってみることしかできない地球人達

一刀「（くそっ！俺が超進化さえできれば…）　」

一刀達ドラグーンナイツは超進化の力を奪われているため超進化できない。

たてえできたとしても皇には勝てないことは一刀はわかっていた。

だがそれでも何もできない自分の無力さを痛感していた。

そんなとき

ドクンッ！

（力が欲しいか人間よ）

一刀「（誰だ！？誰が俺に話しかけてるんだ！？）」

一刀の心の中に誰かが話しかけてきた。

光龍「（お前と話すのは初めてだったな。我は光龍、お前に力を貸しているものだ）」

何と！？一刀に話しかけてきたのは光龍だった。

光龍「（この地球を破壊されたくなければ力を求めるのだそうすればお前は更なる力を手に入れられる）」

光龍が言うと

一刀「（でも力をくれるったって超進化の力は奪われたんだぞ！どうすれば…）」

一刀が弱気になると

光龍「（このたわけ（馬鹿）者が！我はお前がいずれこの地球のみならず別世界をも救ってくれるだろうと思ったから力を貸したのだ。この我を失望させるでない！）」

ドドンッ！！

光龍が一刀に怒鳴ると

一刀「（そうだよな、相手の強さにビビるなんて俺らしくないな。力を貸してくれ光龍！この地球を守り、あいつを倒す力を！）」

一刀が光龍に言うと

光龍「（よく言ったぞ人間、いや一刀よ！我が力を受けとるがよい！）」

パァーッ！

そして光龍から一刀に力が送られていく。

この時、回りから見た一刀の様子は

桃香「一刀くん何かぶつぶつ言ってるけどどうしたんだろう？」

回りから見た一刀はぶつぶつ独り言を言ってるようにしか見えなかった。

そして光龍から力が送られてくると

パァーッ！

桃香「うわっ！？」

一刀の体がいきなり光り出した。

一刀「ウォーッ！！」

そして一刀が叫ぶと

パァーッ！！

光の球体が一刀を包み込んでいき

パキパキンッ！

球体が卵のように割れていくと

ジャーンッ！！

球体の中から上半身は白い鎧に覆われ、足は獣の鎧、背中には紅い翼と白いマント、両手には剣と銃を構え、顔は白い聖なる兜で隠された一刀が現れた。

その光り輝く姿を見たみんなは

桃香「きれい／／／」

華琳「輝いてるわね／／／」

蓮華「眩しすぎて（まぶしすぎて）とても見られないな／／／」

月「へぅ～、かっこよすぎです～／／／」

光り輝く一刀の姿に顔を赤くするものもいた。

一刀「（凄い！全身から力が皆ぎってくるぜ！）」

この一刀の形態は超進化を越えた存在、名付けて究極進化である。

スッ！

一刀は麗羽が飛んでいった上空を見上げると

一刀「待っていろよ皇！」

バサッ！

一刀は背中の紅い翼を広げて

バシュンッ！！

一瞬で飛んでいった。

桃香「一刀くん…」

蒼魔「あとは頼んだぜ一刀！」

その頃、宇宙空間では

麗羽「とうとう宇宙空間に出てきたようだな。しかしホントに地球は青いものだな」

麗羽が宇宙から地球を見ると（麗羽が宇宙でも生きていられるのは皇が乗り移っているからである。）

麗羽「さてとそろそろ地球を破壊させてもらうとするかな」

ゴゴゴッ…！！

麗羽が黒い塊を地球にぶつけようとしたその時！？

キィーンッ！！

麗羽「何だあれは？」

一筋の光りである一刀が麗羽に迫ってきた。

麗羽「バカな！？地球人が宇宙空間にこられるはずがない！？」

宇宙空間には空気がないので宇宙服を着ないまま宇宙に出ると息ができなくて死んでしまうからである。

ピタッ！

そして一刀は麗羽の前に立ち止まると（一刀が宇宙空間でも生きていられるのは気で体を覆っているからである）

一刀「そろそろ決着つけようぜ皇！」

バンッ！

一刀は麗羽の前に立ちはだかった。

麗羽「貴様！？なぜ超進化しているのだ！？超進化する力は我が封じたはずだ！」

麗羽が言うと一刀は

一刀「あいにくだがこれは超進化を越えた力、究極進化だ！お前の封じた力なんて効かないんだよ」

一刀が言うと

麗羽「フフフッ。おもしろい」

シュンッ！

麗羽は黒い塊を一旦消すと

麗羽「相手をしてやるぞ目障りな地球人が！」

スッ

麗羽が構えると

一刀「お前は俺が絶対倒してやるぜ！」

スッ

一刀も構え出した。

この時、ついにデーヴァ編が最終決戦を迎えようとしていた。

98時間目「超進化を越える力」（後書き）

一刀「一刀だ。俺は麗羽と互いに宇宙空間で死闘を繰り広げていた。待ってろよ麗羽、口うるさいお前だが必ず助けてやるぜ！次回、『決戦　究極騎士ＶＳ神』お前は俺が絶対倒してやるぜ！」

９９時間目「決戦　究極騎士ＶＳ神」（前書き）

一刀「地球を救うため仲間達が次々と助けに来てくれるなか麗羽は地球を破壊すべく宇宙から攻撃を仕掛けようとする。俺達は止めようとするがもう麗羽は誰にも止められない！そして俺が絶望になったとき光龍が俺に力をくれて俺は究極進化をして究極騎士光龍と化した。そして俺は麗羽を倒すべく宇宙空間にて決戦を挑むのだった」

99時間目「決戦　究極騎士ＶＳ神」

宇宙空間にて究極騎士光龍と化した一刀ＶＳ麗羽（皇）の最終決戦が開始された。

なお、この戦いの模様は曹操グループが打ち上げた人工衛星により地上にも中継されている。

地上　フランチェスカ学園

桃香「一刀くん、頑張って！」

孤狼「もうお前しかやつに勝てるのはいないんだ！」

華琳「絶対に勝つのよ！」

この場所ではデーヴァ事件に関連しているフランチェスカの生徒達、デスドラゴンナイツ、ドラグーンナイツのメンバーが一刀の勝利を祈りながら人工衛星から写し出された映像を見ていた。

宇宙空間

麗羽「貴様を倒せばもう誰も我の邪魔をするものはいないということだな、ならば貴様を倒して地球人に絶望を与えてやるぜ！」

一刀「神が地球人をなめるなよ！俺はお前を絶対倒してやるぜ！」

スッ

二人は戦闘体勢をとると

ビュンッ！　ビュンッ！

目にも止まらぬ早さで攻撃を開始した。

地上

桃香「早すぎて見えないよ～！？」

蒼魔「くっ！武人である俺達でもようやく見られる程度かよ！？あの二人はどれくらいの速度で戦ってるんだ！？」

二人が早く動いてるように見えるのは全力が速いということもあるが一番の原因は二人が宇宙空間で気を体にまとっているからである。

宇宙空間

一刀「せいやっ！」

ブォンッ！！

一刀が聖剣『究極四神剣』を振るえば

麗羽「させるか！」

ガキンッ！

麗羽は体から産み出した魔剣『魔龍剣』で防ぐという攻防を繰り広げていた。

一刀「（究極騎士光龍でも互角だなんてこいつはなんて強いんだ！？）」

だが実際は一刀が究極進化に慣れていないのと宇宙空間での戦闘に慣れていないだけで本気を出せば麗羽を倒す実力を究極進化は秘めているのだ。

その事に麗羽も気付いていた。

麗羽「（こいつはどうやらまだ力を使いこなしてないらしいな、我がこいつに勝てるとしたら先手必勝しかない）」

この時、麗羽も分かっていた。勝負が長引けばいずれ力に慣れた一刀が自分を越えていくだろうと

それを考えた麗羽は

バッ！

一旦一刀から距離をとると

麗羽「『龍尾撃沈』！」

にゅーっ！

鎧のお尻の辺りから龍の尻尾を生やして

シュバッ！

尻尾が一刀に襲いかかる！

だが

ジャキンッ！

一刀「こんなもの！」

ドキュドキュンッ！

一刀は左手に持つ二頭の龍の形をした銃『龍神銃』をぶっぱなした。
（空気のない真空ではものを投げてもスローになるが一刀は弾丸に気をまとっているので真空だろうがそんなのは関係なかった。）

一刀「一気にいくぜ！」

キィンッ！

一刀は高速で麗羽に迫ると

麗羽「考えてみれば貴様を倒すのにわざわざ技を使わなくても勝てるわ！」

サッ！

麗羽はひらりと避けた。

一刀「ちっ！避けやがるとはな！？」

一刀はすぐに方向転換しようとするが

ギュインッ！

一刀「えっ！？止まらない！？　」

一刀はそのまま走っていった。（これは一刀があまりにも早く動いたため地球の軌道に乗ってしまったからである。つまり今の一刀は人工衛星のように地球を回っているのだ）

麗羽「フッ！貴様は宇宙空間での戦いに慣れていないからな　」

だが一刀はこの場を脱出できるある方法があった。それは

シュンッ！

瞬間移動である。

一刀は一瞬で麗羽の後ろに立つと

麗羽「しまった！？　」

麗羽が驚いているうちに

一刀「『聖俄龍光撃波』！　」

ドカカッ！！

両手から光の気を放った。

麗羽「ぐほっ！？　」

技をもろに食らった麗羽には大ダメージであったが殺すには至らなかった。

麗羽「（やばい！？もう一度技を食らったら確実に殺られてしまう！？）」

さすがの神でも焦っていると

麗羽「（そうだ！やつの力を我が吸収すればいいのだ）」

スッ

すると麗羽は一刀に接近して尻尾を向けると

麗羽「『龍尾吸収（アブソーブテイル）』！」

ザクッ！

一刀「ぐっ！？」

麗羽は尻尾を一刀の体に突き刺した。

麗羽「これだけ接近すれば瞬間移動で逃げることもできまい！貴様のその究極の力をもらうぞ！」

ドクドクンッ！

麗羽の尻尾をつたって一刀の究極進化の力が麗羽に流れていく

シュルルンッ

それにともなって一刀の究極進化が解けていく（最低限体をまとう気だけは残してある）

地上

桃香「いやーっ！」

蓮華「一刀の力が無くなっていく！？」

月「へぅ～！？」

誰もがもうダメだ！と思った。

宇宙空間

麗羽「フハハッ！バカなやつめ！この究極の力はすさまじいまるで体からあふれるよう…」

一刀の究極進化の力を吸収する麗羽だがその時！？

ブチブチンッ！

麗羽「！？」

麗羽の体が突然傷ついた。

麗羽「一体なぜだ！？」

麗羽が驚いていると

一刀「まだわからないようだな 」

尻尾で刺された一刀が喋りだした。

一刀「究極の力はお前じゃ全て吸収しきれないんだよ！ 」

つまり例えで言うと麗羽という瓶は一刀という水を全て吸収しきれずに溢れだしているのだ。

そのため麗羽の体は内側から傷ついているのだ。

一刀「ほら早く力を返さないと体がバラバラになるぞ 」

一刀が言うと

麗羽「くそっ！？ 」

ドクドクンッ！

麗羽は仕方なく究極進化の力を一刀に返却した。

そして

一刀「こんなもの！ 」

ブチンッ！

一刀は体に突き刺さっていた麗羽の尻尾を引き抜くと

一刀「どうやら体も慣れてきたみたいだしそろそろいくぜ！」

ゴォーッ！！　パァーッ！！

一刀は全身に気を流して光り輝くと

一刀「『項羽と光龍の融合突（ファイナルドラゴンフュージョン）』！」

ゴォーッ！！

光り輝く項羽の形と化した一刀はそのまま麗羽に突進を仕掛けた。

麗羽「（まずい！？あれを食らえばいくら我とはいえ消滅の恐れがある！？）」

この時、皇は久しぶりに恐怖を感じていた。

麗羽「我は絶対に負けるわけにはいかんのだ！『龍盾防壁』！」

ドドドンッ！！

麗羽は自分の目の前に三枚の壁を作り出した。

麗羽「（この壁は一枚ごとの強度が違う。我に近づくごとに壁が硬化されているのだ）」

麗羽はこの一撃を避けさえすれば勝てると思っていたが

バキバキンッ！！

一刀は苦もなくあっという間に二枚の壁を破壊した。

麗羽「（なにっ！？だが三枚目はそう簡単には…）」

ところが

バッキーンッ！！

一刀は簡単に三枚目も破壊した。

一刀「くらえ皇！」

麗羽「なにっ！？」

ドグボッ！！

そして一刀は麗羽に突進を食らわした。

麗羽「ぐぼがっ！？」

スゥッ

そして麗羽の口から小さな金龍の皇が飛び出すと

一刀「麗羽！」

ガシッ！

一刀は皇が抜けた麗羽を受け止めて気を流すと

一刀「くっ！壁を破壊していたから威力が落ちたようだな」

そして一刀が皇に止めをさそうとしたその時！？

シュンッ！

突然皇はどこかに消えてしまった。

一刀「（一体どうしたんだ！？気になるけど今は早く地球に帰らなきゃな！）」

ゴォーッ！！

そして一刀は地球に帰還した。

地球

全員『やったー！』

フランチェスカ学園にいたみんなが一刀の勝利を祝った。

シュンッ！

そして一刀が地球に帰還すると

桃香「一刀くん」

ぎゅっ！

一刀「うわっ！？」

桃香がいきなり抱きついてきた。

桃香「うぇ～ん！一刀くんが勝ってよかったよ～」

ギューッ！

一刀「ふごご！（胸が！？）」

一刀は桃香の胸に顔をうめられて息ができなかった。

そして

ギロリッ！

一刀を睨み付ける無数の目

一刀「さらばっ！？」

シュンッ！

桃香「あっ！？」

一刀はその場から逃げるべく瞬間移動で逃げ出した。

華琳「待ちなさい一刀！＃」

蓮華「絶対見つけ出してお仕置きしてやる！＃」

みんなが騒いでいると

麗羽「うぅ～ん　」

気を失っていた麗羽が目を覚ました。

猪々子「麗羽様、目が覚めたんですね！？　」

斗詩「よかったです　」

麗羽「猪々子、斗詩…　」

麗羽は二人が自分が生きていて喜んでいるんだと思っていたが

猪々子「だって生きてくれないとお仕置きできませんからね　」

斗詩「覚悟してくださいよ麗羽様♪　」

麗羽「えっ！？　」

ギロリッ

今度は麗羽にみんなの目線が向けられる。

華琳「この黒幕にはどんな罰を与えようかしらね？　」

蓮華「送られてきた罰のどれにしようか迷うわね　」

月「いっそのことこの小説に二度と出さないというのも　」

それはそれでトラブルメーカーがいなくなって困る気がするが

麗羽「あっ…あの皆さん!?　ぎゃーっ!!　」

その後、麗羽の姿をしばらく見たものはいないという。（罰の内容はそれぞれに任せます。詳しくはこの小説の感想にて）

そしてデーヴァとの一戦後

封印されていた一刀の父・優刀達が解放され

南極に隠れていた一刀は見つかってしまい一刀大好きっ子にお仕置きされてしまい

デーヴァで唯一生き残ったショウトラはそのまま狛犬の姿へと変化して恋の家族となって学園で飼われることになった。

そして消えた皇はというと

異世界

パッ!

皇「ガハッ!?　」

地球とは違う世界に皇が現れた。

皇「おのれ地球人め!神であるこの我をよくも!　」

皇が怒って立ち上がると

？「無様だな皇」

皇「！？」

皇の後ろから声が聞こえてきたので皇が振り向くと

ドォーンッ！！

そこには龍の姿をした渋い男がいた。

？「俺の訓練が嫌で逃げ出した弱虫野郎が人間界で神を名乗るとはな」

皇「そんな！？まさかここは龍界！？」

あの皇が男の迫力におされていた。

？「しかしそれだけならまだしも人間という下等生物に負けるとは龍族の面汚し（つらよごし）め！罰として消えるがよい」

皇「お止めください龍界皇帝皇龍様！？」

パチンッ！

男が指を弾いた瞬間

ボンッ！！

皇の体が爆発した。

皇龍「それにしても人間界に龍族を倒すものがいるとはな、一度攻めてみるのもいいかもしれん」

一難去ってまた一難。地球に再び恐怖が迫ってくるのかもしれない

９９時間目「決戦　究極騎士ＶＳ神」（後書き）

西森「どうも西森です。次回でついにこの小説が１００話をむかえるようになりました。これを記念して次回は以前募集した特別編をします。次回、『１００話記念特別物語』これからも頑張りますので応援お願いします　」

１００時間目「１００回記念特別物語」（前書き）

西森「どうも西森です。今回の話は以前募集した１００回目の話の中から一つを選んで書いてみました。そして見事選ばれた話は「恋との水族館デート」です。他の話はまた機会があれば書いてみようと思います。
この小説も書きはじめて約半年でついに１００話、感想はを４００を越え、お気に入りは１５０を越え、これからも完結目指してがんばります」

１００時間目「１００回記念特別物語」

これはまだデーヴァとの戦いや学園対抗武道大会が始まる前の物語

話の流れで言うなら一刀大好きっ子に凪が加わった４０話頃の話である。

恋「…」

とある日の昼休み、恋は外を眺めていた。

恋「…一刀とちゅーした／／／」

先日、恋は大好きな一刀と動物園でデートしたうえにキスをしたのだ。（３９話参照）

今までセキトや張々とはキスやペロペロしたことはあったが一刀とキスした時は何だかセキト達とは違う気がするのであった。

恋「…一刀のこと思うと胸がドキドキする／／／」

この時から恋は一刀に恋心を抱いていたのだが恋はそのドキドキする原因が恋だとは知らずに

保健室

恋「…一刀のこと思うと胸がドキドキする」

紫苑「はぁ？」

保健室にてドキドキの原因を聞くのであった。

紫苑「（一刀君も罪な男ね）恋ちゃん、そのドキドキの原因はねズバリ『恋の病』よ！」

ズバッ！

フランチェスカ学園保健医であり璃々ちゃんのお母さんである黄忠紫苑先生がズバッと言うと

恋「…鯉の病？」

恋の頭の中には池で泳ぐ鯉が頭に浮かんだ。

紫苑「その鯉じゃなくて恋愛の恋よ。それを静めるには一刀君とデートくらいしなさい！」

恋「…一刀とデート／／／」

ぽわぁ～

いつも無表情な恋の顔が赤くなった。

それから恋は保健室を出ていった後も顔が赤くなっていた。

だが

恋「…一刀とデートしたいけどお金ない」

ショボ～ン

デートに着ていく服は沙和から借りるとして、デートにいくためのお金が恋には無かった。

日頃の大食いがここにきて響いたのだ。

パカッ！

恋は財布を開けてみるが
数日分の食費しかなく恋の頭の中では一刀とのデートか食費で迷いが生じていた。

あの超がつくほど鈍感男な一刀が自分から恋を誘うわけがない。

恋が一刀とのデートを諦めかけたその時

ねね「恋殿～♪」

恋を愛するねねがやって来た。

ねね「恋殿、聞いてくだされこの陳宮、有り金全部はたいてついに水族館のフリーパスを手にいれましたぞ！」

バンッ！

ねねの手には二人分の水族館のフリーパスが握られていた。

それを見た恋は

ねね「これで今度の休みにねねと…」

恋「…ねね、このパス二枚とも欲しい」

ねねの持つパスを欲しがった。

ねね「ダメですぞ。いくら恋殿の頼みでも二枚ともだなんて、これは恋殿とねねが…」

だがどうしても欲しい恋は

恋「…お願い」

うるうるっ

チワワのような綺麗な目をすると

ねね「うぅ…!?わかりましたのです二枚とも差し上げるのです!」

スッ!

ねねは恋の目に負けてパスを二枚とも恋に渡した。

恋「…ありがとうねね」

パシッ!

恋はねねからパスを受け取ると

恋「…これで一刀とデートができる♪」

ルンタッタ♪

スキップしながら走り去っていった。

そして一人残されたねねは

ねね「なんですと～!?ねねが苦労して手にいれたパスをヘボ会長なんかのために!?」

とても驚いていた。

ねね「おのれヘボ会長め!恋殿をたぶらかすなんて許さないのです!#恋殿には悪いですがデートの邪魔してやるのです!」

ねねは一刀と恋のデートを邪魔する気だった。

その頃、漢組では

華佗「一刀、恋が呼んでるぞ」

一刀「わかったよ」

北郷一刀。この時はまだ究極進化はおろか超進化すらもできないただ強い男

一刀「何か用?」

恋に呼び出された一刀が聞くと

スッ

恋はパスを一枚一刀に差し出して

恋「…今度の休みにここに行く。一刀も一緒に」

恋が言うと

一刀「今度の休みなら別に暇だからいいよ♪」

一刀が了承すると

恋「…じゃあ朝８：３０に益洲マリンワールドにね」

恋が時間を決めてきた。

ところがこの会話を盗み聞きしていた人がいた。

及川「（かずピーめ、デートなんてさせへんで絶対邪魔したるからな！＃）」

幸せクラッシャーの及川である。

そして邪魔してくる空気が流れるなか休みの日がやって来た。

益洲マリンワールド

一刀「早く来すぎたかな？」

いつもの学生服を着て待ち合わせ場所に一時間も早くついた一刀

一刀が待とうとしたその時！

恋「…お待たせ～」

タタタッ！

恋が一刀の元に駆け寄ってきた。

一刀「何だ恋も早く着い…」

くるっ

一刀が恋の方を向いた瞬間

キラキラ～ン

そこにはいつもの学生服でなく、戦闘着でもなければ洋服を着た恋が現れた。（容姿は想像に任せます）

一刀「（ぽわぁ～）／／／」

恋の素敵な姿を見ておもわず顔が赤くなる一刀

恋「…？じゃあ行く！」

恋は一刀の様子に？を浮かべるが気にせずにマリンワールドに入ることにした。

だがその時

むにゅっ

一刀「れ…恋／／／！？」

恋は一刀の腕を胸ではさんだ。

一刀が驚いていると

恋「…？沙和がデートの時はこうすれば男が喜ぶと言ってた」

恋は今日のデートのために沙和からレクチャーしてもらっていたのだ。

一刀「それはしなくていいの！」

ちょっと惜しい気もするが恥ずかしいのでやめさせる一刀であった。

そして二人はマリンワールドに入っていった。

そしてそんな二人を見ていた二人がいた。

ガサッ！

ねね「おのれヘボ会長め！＃」

及川「かずピーめ！映像録って桃香ちゃん達に見せたるからな＃」

茂みから一刀に怒りを抱く及川とねねが現れた。

ねね「行くのですぞヘボ2号！二人を追うのです！」

及川「よっしゃ！って誰がヘボ2号やねん！＃」

そして二人も入っていった。（代金は及川もち）

益洲マリンワールド

様々な海洋生物はもちろんのことイルカやアシカショーまである近所では有名な水族館である。

恋「（じゅるりっ！）」

ビクッ！？

恋は水槽のカニを見てよだれを垂らしていた。

恋「…茹でたら美味しそう」

一刀「恋、カニが怯えてるからやめなさい」

ささっ

二人はカニの水槽から去っていった。

さてその頃、

深海魚コーナー

ねね「うぬぬ…マリンワールドが広すぎて恋殿を見失ったのです！ヘボ2号何とかするのです！」

ねねが及川に言うと

及川「何とかできるかい！#それよりなんでわいはグロいもんに好かれるんやろ？」

バババッ

及川の後ろの水槽には及川を好いたのかチョウチンアンコウが群がっていた。

ペンギンコーナー

恋「…お手」

スッ

恋がペンギンに手を差し出すと

ぺしんっ

ペンギンが恋にお手をした。

一刀「ホントに恋は動物に好かれてるんだな」

一刀は恋がペンギンとじゃれあうのを楽しく見るのだった。

肉食魚コーナー

シャーッ！！

及川・ねね『ヒェーッ！？』

ガシッ！

水槽からサメに吠えられておもわず抱き合う二人

ねね「はっ！？」

その事にねねが気付くと

ねね「ねねから離れるのです！ちんきゅうキーック！」

ドカッ！

及川「ぐはっ！？」

ボチャンッ！

ちんきゅうキックで飛ばされた及川はとある水槽に落ちてしまった。

及川「何だか水が温かいけど温泉かいな？しかも小さな魚がいるなんて変わってるな」

もちろん水族館に温泉があるわけがなく小さな魚の正体は…

ガブリッ！

及川「いたーっ!?」

アマゾン川の肉食魚・ピラニアであった。

ねね「ピラニア～、そいつは臭いから噛んだら腹壊すのですぞ～!」

するとねねの言葉が通じたのか

ササッー!

ピラニアは及川から去っていった。

及川「あぶなっ!?尻噛まれたで!?」

さてその頃、一刀達は

ザッパーンッ!

一刀「うわっ!?」

恋「…冷たい」

イルカショーを見ていた。

そして帰りの時

一刀「今日は楽しかったよありがとな恋♪」

恋「…うん　」

だが恋はまだ心の中がドキドキしていた。

とそんなとき

ねね「（見つけましたぞヘボ会長め！）　」

ついに一刀はねねに見つかってしまった。

ねね「（あいつは勘が鋭いからこっそりとちんきゅうキックを食らわしてやるのです）　」

コソコソッ

ねねがこっそりと一刀の後ろに移動していると

一刀「どうしたんだ恋？楽しくなかったのか？　」

恋「…そんなことない！ただ…　」

胸のドキドキが取れていないとはさすがに言えなかった。

一刀「大丈夫か？　」

スッ

そして一刀が恋に近づいた隙に

ガサッ！

ねね「ちんきゅうキーック！」

ドカッ！

一刀「うわっ！？」

一刀はねねのちんきゅうキックを食らってしまい

むちゅっ

そのまま恋と唇を合わせてしまった。

恋「（…／／／）」

一刀「ぷはっ！ごめんな恋！」

一刀が謝ると

恋「…別にいい。おかげでドキドキがとれた。今日は楽しかったからまたデートする」

二度目の一刀のキスによりドキドキがとれた恋であった。

そして恋はその場を去るのであった。

一刀「ドキドキってなんだ？」

一刀が？を浮かべていると

ねね「ちんきゅうキーック！」

ドカッ！

またも一刀はちんきゅうキックを食らってしまった。

ねね「よくもよくも恋殿の唇を奪いやがったですね＃もう許さないのです！」

一刀「やべっ！？」

ダッ！

一刀はねねから逃げ出した。現在なら瞬間移動で逃げられたがこれは過去の話なので瞬間移動できるわけがなく

ねね「待つのですヘボ会長！＃」

一刀「許してくれー！？」

ダダッ！

一刀はねねから逃げるように走るのだった。

一刀「恋、ねねに何か言ってくれよー！？」

ねね「ちんきゅうキーック！＃」

ドカッ！

この後、一刀はねねに数回にわたるちんきゅうキックをうけるのであった。

１００時間目「１００回記念特別物語」（後書き）

一刀「一刀だ。学校に行く途中不思議なロボットを見つけた俺は学園につれていき真桜に見てもらい何とかロボットの修理を終える。その後ロボットは漢組の一員となるがロボットには恐るべし機能がつけられていた。次回、『鋼鉄の友情』今日からお前の名前は安藤（あん）呂井門（どうロイド）だ」

１０１時間目「鋼鉄の友情」（前書き）

９９話目のあらすじ

一刀「皇との最終決戦をつけるため俺は究極騎士光龍となって宇宙空間にいく。互いに攻防が繰り広げられるなかわずかな隙をついて俺は皇にとどめをさそうとするが逃げられてしまうものの無事に麗羽を救いだし、地球の危機を救うのだった」

１０１時間目「鋼鉄の友情」

ついに一刀達は皇を倒し地球に平和が訪れた。

孤狼は皇相手に手も足も出せなかったことに対して怒り修行の旅に出かけ、ドラグーンナイツのみんなは国に帰り、壊された校舎や世界の修繕費は当然のごとく麗羽が弁償し、一刀達ドラグーンナイツの活躍は曹操グループにより隠蔽（いんぺい）され皇との戦いは一部の人のみが知ることとなった。

そして一刀達が新学期を迎えようとした前日の夜の雨の日

Ｄｒ．バイオス研究所

ここは以前光魔に雇われたバイオスが一刀を倒すために作られた研究所でありバイオスが捕まった後は閉鎖されている。

そしてその研究所の奥深くに一台のロボットがあった。

？「ピピピッ北郷倒す」

ガガガッ

ロボットは外に出ようとした途端

ゴロゴローッ！！

ビシャーンッ！！

雷がロボットに命中した。

？「ピピピッ記憶回路破損修繕まで時間かかります」

プシューッ！

そしてロボットは機能停止した。

そしてその後ロボットは風に飛ばされ、人に退かされたという。

そして次の日

一刀「ふぁ～！久々の授業だな」

華佗「とうとう三学期だな」

左慈「色々ありすぎる二学期だったぜ」

いつものように一刀達が登校していると

于吉「おや皆さん見てくださいあそこに何か倒れてますよ」

于吉が指差した先には

ぽつんっ

妙な姿をしたロボットが倒れていた。

及川「なんやこれ?でっかい角はやして体が四角い変なもんやな」

華佗「もしかしてロボットかもな　」

一刀「それじゃあ飛琳先生に見てもらうか　」

そして一行は科学研究部部室に向かうと

真桜「飛琳先生やったら今日は出張でおらへんで　」

目当ての飛琳先生はいなかった。

一刀「仕方がない出直すか　　」

そして一刀が科学研究部部室から出ようとすると

ちらりっ

ロボットの体を見た真桜が

真桜「待ってな会長！そんなもん持ってるなら早く言ってなウチがみたるわ♪　」

真桜の目はあきらかに光っていた。

2年C組　李典真桜。分解が好きで機械を見るとすぐに分解したがる。（ただしもとに戻せないこともしばしば）

真桜「会長お願いや絶対分解した後もとに戻すからウチに任せてえな　」

真桜が言うと

于吉「別に構わないんじゃないですか。ただし分解してもとに戻せなかったら及川と結婚…」

于吉が途中まで言うと

真桜「命がけでもとに戻します！」

やる気になる真桜だった。

及川「なんでやねん！」

それから数時間後

真桜「何とか分解した後もとに戻せたで」

真桜による分解が終わった。

真桜「どうやら昨日の雷で回路がショートしたみたいやで、まぁ時間が経てば直るやろうけどな」

真桜が言うと

ピピピッ

急にロボットの電源が入った。

ロボット「ピピピッ！私の名前を入力してください」

ロボットが言うと

一刀「名前を入力するとはな！？」

華佗「どんな名前にするんだ？」

左慈「ロボットの名前というと…」

于吉「ドラ〇もん、ア〇レ、コ〇助、ガン〇ム、マ〇ンガー、ヤッター〇ンなど色々とありますけどね」

于吉が言うと

及川「こんな四角いロボにそんな名前は似合わへんでもうこいつの名前は『クズ山ボロ助』でええやん」

及川が言うと

ウィーンッ！

ロボットの胸が開いて

ロボット「変な名前をつけるな＃」

ビリリーッ！

及川「ぎょえーっ！？」

ロボットの開いた胸からビームが撃ち出され、及川はもろに食らい

黒こげになった。

左慈「見かけのわりにすごいんだなこいつ！？」

華佗「一刀が拾ったんだから一刀が名前決めろよ」

一刀「そうか、ならば…」

そして一刀が考えた名前は

一刀「こいつの名前は安藤呂井門（ロイド）だ」

名前の由来は聞いての通りアンドロイドからである。

一刀が名前をつけてあげると

呂井門「ピピピッ！私は安藤呂井門！ピピッ」

どうやら気に入ったようだ。

一刀「それじゃあ呂井門、今日からお前は漢組の仲間だ。一緒に教室にいこうぜ」

そして一刀は呂井門を連れて漢組の教室に向かっていった。

真桜「しかしあのロボット分解してみたらウチでもわからへん部分があったな」

真桜はそれを気にしていた。

それからというもの一刀の生徒会長の権限で学園に入学した呂井門は

桃香「あぁんっ！バドミントンの羽根が木の先に　」

鈴々「鈴々が木を揺らすのだ　」

愛紗「ダメだぞ鈴々！むやみに植物を攻撃するんじゃない！　」

桃香達三人が騒いでいると

カタカタッ

そこに呂井門が現れた。

鈴々「こいつは確かお兄ちゃんが生徒にしたあんこドローなのだ　」

桃香「違うよ鈴々ちゃん安藤呂井門だよ　」

桃香が鈴々の間違いを指摘していると

呂井門「ピピピッ！バキュームアーム　」

ガシンッ！

呂井門の右手が掃除機のように変化して

キュイーンッ！！　スポッ

木に引っ掛かっていたバドミントンの羽根を吸い込んだ。

桃香「ありがとう呂井門くん♪」

愛紗「結構役に立つのだな」

鈴々「変態のお兄ちゃん（及川）よりすごいのだ！」

こんなことがちらほらあり呂井門の人気は急上昇であった。

だが呂井門をどうしても憎む及川は

及川「おのれポンコツロボットめ！あいつのせいでわいの人気が下がっとるやんけ！＃」

それは別に呂井門のせいではない。

そして呂井門が生徒になってから一週間が経ったある曇りの日

華佗「おはよう呂井門！」

左慈「今日も元気そうだな」

呂井門「はい元気です」

すっかり漢組の一員になっていた呂井門であった。

ちなみに一刀は適当に安藤という苗字をつけたわけではなく学園の近所に安藤という独り身のお婆さんに説明して呂井門をお婆さんの家に住まわしているのだ。

そんなとき

ビシャーンッ！！　ゴロゴローッ！！

雷が呂井門を直撃した。

一刀「大丈夫か呂井門！？」

一刀が呂井門に近づこうとすると

呂井門「ピピピッ！記憶回路修繕完了ターゲット確認」

ウィーンッ！！

すると呂井門は右手を一刀に向けて

呂井門「マイクロミサイル発射！」

ドドドーッ！！

一刀にミサイルを撃ってきた。

一刀「うわっ！？」

ササッ！

だがミサイルを見事に避ける一刀

華佗「どうしたんだよ呂井門！？」

華佗が聞くと

呂井門「私は呂井門という名ではないＤｒ．バイオス博士によって作られた暗殺兵器９６４（コロシ）号だ」

呂井門が言うと

一刀「呂井門！お前は兵器なんかじゃない漢組の仲間だろ！」

一刀は呂井門を説得しようとするが

呂井門「黙れ！私の使命は北郷一刀を殺すことのみ！意地でも捕まえて殺す！」

バッ！

呂井門は両手を広げると

呂井門「電磁マグネット！」

ビリリーッ！！

両手から電気を流して自分を電磁石にした。

スッ！　スッ！

次々と呂井門に吸い寄せられていく金属。

とそこへ

及川「ポンコツロボット覚悟しろやっ！」

バンッ！

鋼鉄の鎧を着た及川が呂井門を破壊しにやって来たが

スッ！

及川「えっ！？」

ガッチンッ！！

見事吸い付けられてしまった。

及川「何でわいだけこうなるねーん！！」

及川が叫んでいると

ファサッ

及川の顔に何かがくっついた。

その正体とは…

桃香「いや～ん！／／／」

蓮華「ブラが勝手に飛んでいく！？／／／」

何と呂井門の磁力が強すぎてブラのワイヤーまで反応してしまいブ

ラが電磁石目掛けて飛んでいくのだ。

ヒュヒュヒューッ！

次々と飛ばされていくブラの群れ

漢組生徒「まさかパンツが空飛ぶのは他の漫画で見たけどブラが飛ぶとはな」

漢組生徒「感激っす！」

ちなみにパンツが飛ぶのはそら○とである。

飛ばされていくブラに喜ぶ男達。そして必死に胸元を隠す女子達だがそのなかで思春、明命、焔耶、星、恋、霞この六人だけは平然としていた。

及川「うひょひょっ！次々とブラが飛んでくるなんて天国やで♪」

ブラの山に囲まれる及川だが飛んでくるのはブラだけではない

焔耶「鈍砕骨が！？」

桔梗「豪天砲が！？」

季衣「岩打武反魔が！？」

ドゴゴッ！！

この学園はおもに武力が優れているので武器まで飛んでくるのであ

り及川は武器が当たって気絶した。

一刀「やめるんだ呂井門！　お前は同じ漢組の仲間だろ！今まで過ごしてきた一週間を思い出してくれよ！」

一刀が叫ぶと

呂井門「一週間の記憶…」

モワ～ッ

呂井門は一週間の思い出を思い出していた。

卑弥呼「この問題を安藤解いてみい！」

呂井門「答えは3√2です」

卑弥呼「正解じゃ」

一刀「すごいな呂井門！」

みんなと共に勉学を学んできた一週間

バイオスの元では味わえない優しい友情

呂井門「友情…」

プシューッ！

そして呂井門は機能を停止した。

ドッシンッ！！

及川「うわっ！？　」

呂井門が止まったことにより電磁石が解けて及川は解放されたが

及川「うひょひょっ！ブラの山や～♪　」

及川が吸い寄せられたブラの山で泳いでいると

ギロリッ！＃

及川に突き刺さる無数の目

女子達『この変態がー！！＃』

ドガバキッ！！

この後及川は女子全員に攻められてしまい病院送りになったという。

そして呂井門はというと

パタンッ！

飛琳「これで大丈夫♪悪い心は全て打ち消しといたからな　」

出張から帰ってきた飛琳先生に見てもらい悪の心がすっかり無くなった呂井門であった。

それからというもの

及川「なぁなぁ呂井門、また電磁石つくってぇな！」

呂井門「一刀があれはもうダメっていったからダメ！」

及川が呂井門に電磁石を頼む日が増えたという。

１０１時間目「鋼鉄の友情」（後書き）

凪「凪です。最近私の成績が悪いということで私は父上により転校させられることになってしまいました。だがそこへ会長が現れて私を救いだそうと頑張ってくれてます。次回、『楽進家の試練』私は会長のことが大好きです！」

１０２時間目「楽進家の試練」（前書き）

一刀「新学期が始まろうとしていた朝、道端に倒れていたロボットを拾った俺は安藤呂井門という名をつけて漢組生徒の一人にする。しばらくは穏やかな日々が続いていたが落雷を受けたショックで呂井門は本来の目的である俺の抹殺をしようとする。様々な能力で俺を追い詰める呂井門だが最後は友情に目覚めて機能を停止し、飛琳先生によって完全に悪の心を消してもらうのだった」

１０２時間目「楽進家の試練」

ある日の昼休み

バクバクッ！

一刀「ごちそうさんっ！」

カランッ！

そこにはみんなからのお弁当（桃香・華琳・蓮華・天和達・そして新しく加わった月）のお弁当をきれいに平らげた一刀がいた。

華佗「相変わらず一刀の食欲はすごいな!?」

左慈「最初にもらった時より更に強くなったから胃袋まで強化されたんだろ」

左慈の言う通り最初のうちは夜遅くにトレーニングをしてお腹を空かしていた一刀だが相次ぐ戦いのなか一刀の胃袋まで強化され今では七人分の弁当を軽く平らげるくらいになった。

及川「けっ！モテ男くんはうらやましいのぅ」

及川が悔し紛れに言うと

呂井門「（チューッ！）」

及川の前にコーラを飲む呂井門がいた。

及川「呂井門！ロボットがコーラ飲むなや、わいに寄越さんかい！」

パシッ！　ゴクゴクッ！

及川は呂井門からコーラを奪い取って飲み始めた。

ところが

呂井門「それはコーラじゃない、ガソリン」

ブブーッ！

それを聞いた途端及川の口から盛大にガソリンが噴出された。

于吉「お見事ですよ及川！ガソリン飲むなんて眉毛がつながったゴリラの警察官でも多分やったことありませんよ」

それが誰なのかわかる人はいるだろう。

及川「変なとこに感心するなや！ゲホゲホッ！呂井門、お前もコーラの缶にガソリン入れるなや！」

呂井門「雰囲気作りのために」

安藤呂井門（ロイド）…前話から漢組に加わった大きな角が生えた四角いロボット。全身に多くの武器を持つ。

そして場は一刀にうつる。

とまぁいつものように一刀が食堂にて昼御飯を食べていると

ドドドーッ！！

突然地鳴りが聞こえてきて

ガラリッ！

真桜「ちょっとすいまへん！」

沙和「会長はどこにいるの～！？」

勢いよく食堂の扉が開かれて真桜と沙和が入ってきた。

一刀「俺に何か用なの？」

一刀が二人に聞くと

真桜「会長！大変なことが起きたんや！？」

沙和「凪ちゃんが転校してしまうの～！？」

一刀「えっ！？」

とにかく二人を落ち着かせた一刀が話を聞いてみると

真桜「最近凪が学校に内緒で休んでたからおかしい思たんや」

一刀「あの凪が！？」

一刀が驚くのも無理もない。

2年B組　楽進凪。この学園でも一番真面目を絵にかいたような性格（真面目すぎるが）で真桜や沙和ならともかく凪が無断で休むことなんてありえないのだ。

沙和「桔梗先生は『たまには真面目な凪もサボりたいんじゃろう』って言うしー」

何事にも大雑把（おおざっぱ）な桔梗先生らしい言葉である。

真桜「そしたら昨日の夜、凪からウチらにへんなメールが届いたんや！？」

スッ！

真桜は自分の携帯を一刀に見せる。

携帯の画面には

『関羽
金魚
接吻
他
巣
毛
手
』

とおかしな文章が書かれていた。

沙和「沙和はメールが得意だからすぐにわかったの～！これは凪ちゃんからのＳＯＳなの！」

実はこのメールの文章を最初の字だけ読むと

『かん・きん・せっ・た・す・け・て』

沙和「そして接吻をチューに直すと『監禁中助けて』なの！」

真桜「ウチが発明した携帯電波発信器で凪の居場所は自宅やとわかったんや！」

沙和「あとは凪ちゃんを取り戻すだけなの！」

二人が言うと

一刀「だいたい事情はわかったけど、何で二人が凪を助けに行かないの？」

シーンッ

その場が静かになった。

真桜「だって凪のおとんはめっちゃ怖いんやもん！」

沙和「沙和達が助けに行ったら絶対に殺されちゃうの～！」

二人が騒ぎだすと

真桜「その点会長なら相手が鬼だろうが龍だろうが勝てるやろし！」

沙和「凪ちゃんを取り戻してほしいの～！」

二人に頼まれた一刀は

一刀「仕方がない。午後は欠席届け出しとくから何とか凪の父親を説得してみるよ」

仕方がなく了承することにした。

そして午後

ドォーンッ！！

一刀は凪の実家である気伝流楽進道場（学園から1時間の場所）にたどり着いた。

一刀「何とか真桜達からもらった地図でたどり着いたけど、どうやって入ろうか？」

凪を連れ戻しに来たので堂々と玄関から入れるわけがない（瞬間移動は一度行った場所にしか使えない）ので一刀は

一刀「やはり塀から入るしかないな」

ヒョイッ！

塀をよじ登って入ることにした。

その頃、家の中では

凪「父上、私を学園にいかせてください！」

珍しく着物姿の凪と

？「ならぬ！お前を二度とフランチェスカには行かさんぞ！＃」

ドンッ！

凪の父親、楽進巌（いわお）が口論していた。

※容姿は三島平八（鉄拳）と江田島平八（男塾）を合わせたような頑固親父の設定です。

巌「だいたいお前をあの学園にいかせたのが間違いだったのじゃ！お前は別の学園に転校させてやるわ！」

凪「そんな！？」

凪が驚いていると

ガササッ　ザッ！

一刀「あれっ！？」

塀の上から一刀が現れた。

凪「会長何故ここに!?」

巌「お前が生徒会長だと!?」

ジロリッ!

巌は一刀を見つめる。

一刀「(俺って凪の親父さんに何かしたっけ?)」

一刀は自分を見つめる凪の親父に驚いていた。

しばらくして

シーンッ

何とか部屋に入れるようになった一刀だが、場の空気は重かった。

巌「お前はフランチェスカの生徒会長らしいがこれは親子の問題、部外者が口出しするでないわ」

まさに正論であるが

一刀「ですが凪から聞いた話じゃあ理由もなく転校なんてひどいじゃないですか!せめて理由を聞かせてください!」

一刀が言うと

巌「理由だと?よかろう聞かせてやるわ!」

巌は凪を転校させる理由をはなしはじめた。

巌「まず一つ、ガラクタばかりあさる娘とおしゃれというまやかしに興味をもつ低級な友人。二つ目に最近何かと事件が多い学園。最後が…」

巌が転校させる最後の理由を話そうとすると

ビシッ！

いきなり凪の胸を指差して

巌「凪が学園の誰かに恋をしていることじゃ！その証拠にフランチェスカに入学してから凪の胸が大きくなっている！我が娘に恋愛など必要なし！婿はワシが選ぶ！」

バンッ！

最後の理由はアホらしかった。

凪「父上！そんなアホらしい理由で私を転校させようとしたんですか！／／／／」

凪が顔を赤くして父上に反論する。

ちなみに凪の胸が大きくなった理由は一刀にあった。

それはまだ凪が一刀大好き連合に入りたての頃、とある筋から『一刀は巨乳好き』と聞いて胸を大きくしたのだった。（ちなみに情報

源は真桜と沙和である）

巌「アホらしくても理由は理由、絶対に凪は転校させるぞ！」

凪「そんな！？」

何度言っても折れない巌に一刀は

ガバッ！

頭を下げると

一刀「凪の親父さん、生徒会長としてではなく同級生として言います。凪を転校させないでください！」

一刀の必死の説得に巌は

巌「よかろう、ならばお前には楽進家に伝わる試練を受けてもらおうか。それを見事クリアすれば転校は無しにしよう。少し待っておれ！」

スッ！

巌は部屋から出ていくと

一刀「試練って何だ？」

頭に？を浮かべる一刀だった。

しばらくして

ガラリッ！

巌が部屋に入ってきた。

しかも手には鍋を持っている

ガシャンッ！

巌は鍋をテーブルに置くと

巌「この鍋を残さず全て食べれば転校の話は無かったことにしよう！」

巌が言うと

凪「この鍋は！？」

凪が驚く！？

一刀「大丈夫だって凪、こう見えても胃袋には自信があるんだ。こんな鍋くらい…」

パカッ！

だが一刀が鍋のふたを開けてみると

モワ～ッ！！

そこには真紅に染まった麻婆豆腐があり、見ただけで辛そうなものだった。唯一白い豆腐さえも真っ赤である。

凪「やめてください会長！これは我が家に伝わる『火炎鍋』で名の通り火を吐くほど辛いのです。辛党の私ですら退くほどですよ！？」

辛党の凪が退くほどの辛さって一体！？

巌「ならば転校じゃ」

凪「くっ！卑怯ですよ父上！これは今まで父上しか完食できなかったじゃないですか！」

凪が騒いでいると

カチャリッ

一刀はスプーンを手に取り

スッ　バクッ！

激辛麻婆豆腐を一口口に入れた。その直後

一刀「かれ～！？」

ゴォーッ！！

一刀の口から炎が噴き出された。

凪「会長大丈夫ですか!?お水を…」

スッ

凪は一刀に水を渡そうとするが

巌「ダメじゃ!水は一杯でも飲んだらいかんぞ!」

無茶を言う凪の父

だが一刀は

ガツガツッ!

炎を噴きながらも激辛麻婆豆腐を食べ続ける。

凪「会長何故ですか!?何故私のような一生徒のために!?」

凪が聞くと

一刀「俺は仲間（学園の生徒）を守るために頑張ってるんだ!俺が生徒会長である限りは誰も転校させはしないぜ!」

凪「会長／／／」

ポッ

凪の顔が赤くなる。

そしてついに一刀は

一刀「ごちそうさんっ！」

カラーンッ

唇をタラコにしながらも激辛麻婆豆腐を完食した。

凪「会長大丈夫ですか！？お水をどうぞ！」

スッ

凪がお水を一刀に差し出すと

ゴキュゴキュッ！

コップの水はすぐに無くなった。

凪「すいません少なかったですね！？」

ガバッ！

そして凪は洗面器に水を入れて持ってきた。

ゴキュゴキュッ！

一刀「プハッ！ようやくましになったよ！？」

まだ少し唇が腫れているがましになった一刀だった。

そして一刀は

一刀「凪の親父さん、これで転校の話は無かったことになるんですね？」

一刀が言うと

巌「うっ！？」

巌が驚いて黙っていると

？「もういいじゃないですかあなた」

ガラリッ

部屋の中に傷のない髪をほどいた凪のような女性が入ってきた。

凪「は…母上！？」

一刀「母上ってことは凪のお母さん！？」

？「初めまして会長さん。凪の母で楽進波と申します。それとお母さんと呼ばずにお義母さんと呼んでくださいな」

一刀・凪・巌『へっ！？』

波の言葉に驚く三人。

波「あらあなた知らなかったんですか？あの鍋を他の男が残さず完食した場合、我が家の娘を嫁に差し出すという決まりがあるのです

よ」

波が言うと

巌「認めん！＃ワシは貴様を息子だなんて絶対認めんぞ！＃」

波「早く孫の顔が見たいので頑張ってくださいね♪」

一刀「そんな馬鹿な！？凪も何か言ってくれよ！？」

一刀は凪に救いを求めるが

凪「会長と私が結婚／／／（プシューッ！）」

バタンッ！

凪は顔を赤くして倒れてしまった。

そしてこの時、凪の自宅の玄関では

真桜「会長が気になったから授業サボって様子見に来たけど♪」

沙和「いい情報が入ったからみんなに知らせるの～♪」

２年Ｂ組　于禁沙和。おしゃれ好きで噂話が好きな女の子

そして凪と一刀が婚約したということは沙和の噂により学園中に広まってしまい

桃香「一刀くん、お弁当だよ♪」

一刀「おっ！ありがと…」

一刀大好き連合からは

モワ～ッ！

桃香「特製激辛お弁当。残さず食べてよね♪＃」

華琳「奇遇ね桃香、私も激辛お弁当よ＃」

蓮華「私もだ＃」

物凄く辛い激辛お弁当攻撃を一刀は食らったという。

一刀大好き連合『残さず食べてよね♪＃』

一刀「俺が何したって言うんだ～！？」

数日間、タラコ唇で生活する一刀であった。

そして

凪「（会長の奥方となる以上私もお弁当を作らなければ！）」

一刀への弁当がまた一つ増えたという。

１０２時間目「楽進家の試練」（後書き）

桂花「桂花よ。何なのよこの学園は乳お化けの巣窟じゃない！ただでさえ巨乳の比率が多いのに零まで転入してくるんだからたまったものじゃないわ！こうなったら私が独自ルートで購入した『巨乳丸』を使って巨乳になってやるんだから！次回、『北郷一子！？』どうなってるのよこれは！？」

１０３時間目「北郷一子！？」（前書き）

一刀「いつもの通り昼食を食べていた俺は真桜と沙和に凪が家にとらわれていると知り助けに向かう。だが見つかってしまい凪を転校させようとする凪の親父を説得しようとするが聞いてもらえず凪の親父はどうしても話を聞いてほしけりゃ激辛麻婆豆腐を食べろと言い、見事完食した俺だがその代償として凪と婚約の約束を受けてしまったのだった」

１０３時間目「北郷一子！？」

普段は使われていない教室

今この教室で

？『ふふふっ！』

不気味な笑い声がしていた。

桂花「巨乳は死ね！」

シャオ「巨乳は滅びよ！」

朱里・雛里『胸なんて所詮脂肪の塊！』

風「ＺＺＺ～」

この教室で

２年Ａ組　荀イク桂花

１年Ｂ組　孫小蓮

１年Ｂ組　諸葛朱里

１年Ｃ組　鳳統雛里

１年Ｃ組　程イク風

が何かを叫んでいた。（一人除く）

桂花「ったくもう！この学園は魔乳の巣窟よ！」

シャオ「みんなおっぱいでかすぎ～！」

朱里「ただでさえ巨乳の比率が大きいというのに　」

雛里「デスドラゴンナイツのみんなまで編入してきたからね　」

実は一昨日、映者を除く元デスドラゴンナイツのメンバーが転入してきたのであった。

仲間が増えるのは嬉しいことだが彼女達にとってそれは嫌みに等しかった。何故ならば

桂花「特にあの雫は化け物よ！あんな乳もってるなんて反則だわ！　」

シャオ「これで穏とリーの爆乳コンビが雫を入れて爆乳トリオになるなんて～＃　」

２年Ｂ組　陸遜穏
２年Ｃ組　デザーン＝リー
そして新しく１年に入学してきた水上雫。この三人は教師をも上回る爆乳トリオであった。

雛里「あわわ、おっぱいもげろ　」

朱里「そして他にも桃香さん、愛紗さん、春蘭さん、秋蘭さん等々、胸が大きい人が多すぎです！　」

風「ＺＺＺ～　」

実はこの五人にはある共通点があった。それは他より胸がちい…

桂花「うっさいわね！回りがでかすぎるだけよこの全身精液男！＃」

シャオ「それではこれより第１８回貧乳党作戦会議始めるよ！」

この会議は実は一刀が学園に来る前から始まっていたのだ。

彼女達のグループは貧乳党。日々巨乳人達を倒すために作戦を開く組織なのだ。

桂花「我々は今まで胸が小さいという理由で爆乳トリオ（主に雫）からバカにされてきた。だがそんな苦労もすべて消え去る！」

スッ

桂花は懐に手を入れると

桂花「私が極秘で手に入れたこの『巨乳丸』があればね！」

パンパカパーンッ！

桂花は懐から小瓶を取り出した。

桂花「全１０粒。一粒飲めば2時間誰にも負けない爆乳が手にはいる。これを使って爆乳トリオを逆にバカにしてやるのよ！」

ドドーンッ！

桂花が叫ぶと

朱里「さすが貧乳党党首！　」

雛里「考え方が私達と違いましゅ！？　」

シャオ「さすがは先輩だよね！？　」

バババッ！

と言いながら手を広げる三人

桂花「何よその手は？　」

桂花が聞くと

シャオ「何ってもちろんその薬分けてくれるんでしょ？　」

シャオが言うと

桂花「何であんた達にやらなきゃならないのよ！これは私が全部もらうわ！　」

と桂花が言った直後

朱里「はわわ！？それはずるいです！　」

雛里「私達にもよこしてください！　」

シャオ「その薬はシャオのものよ！　」

バババッ！

三人は桂花に飛びかかった。

桂花「誰がやるものですか！」

ドタバタッ！

風「ＺＺＺ～」

四人が薬を巡りあって争いをしていると

ガラッ！

一刀「何騒いでるんだ！」

一刀が音に気づいて叫び出した。すると

パッ

桂花「あっ！？」

ひゅーっ！

一刀の声に驚いた桂花はうっかり薬のふたを開けたまま瓶を一刀の方に投げてしまった。

一刀はとっさに避けようとするが

ズシッ！　　パカッ！

風「お兄さん口を大きく開けなさいなのですよ～」

いつの間にか目覚めた風が一刀の背中にのり、口を大きく開けさせた。すると当然のごとく

ドザーッ！　　ゴックン！

一刀は飛んできた薬を全部飲んでしまった。

桂花「ちょっと何してるのよ風！＃」

桂花が風に怒鳴ると

風「この方が展開的に面白いと思いましてね～」

何をいってるのやら！？

そして一刀はというと

一刀「うっ！？」

バタンッ！

一刀は急に苦しみ出して倒れてしまった。

朱里「はわわ！？大丈夫ですか会長さん！？」

朱里が慌てて一刀の体を起こすと

むくむくっ

朱里「へっ!?」

一刀の胸が騒ぎ出して

ドバンッ！　ブチンッ！

制服のボタンを破りそこに爆乳トリオ以上の胸が現れた。

朱里「はわわ!?男に負けました!?」

雛里「あわわ!?」

シャオ「まさかあんなに大きいなんて!?」

三人が驚いていると

桂花「ちょっとあんた!私の薬をどうしてくれるのよ!#」

ドカッ！

桂花は一刀に蹴りをいれた。

その直後

一刀「ひどいです～、私なにもしていないのにいきなり蹴るだなんて～」

貧乳党『へっ!?』

驚いた貧乳党が再び一刀を見てみると

一刀「ここはどこですか～?」

バンッ!

そこには女になった一刀がいた。

保健室

ガラッ!

桃香「紫苑先生、一刀くんはどうですか!?」

あのあと貧乳党の悲鳴を聞いて女子達が集まり女になった一刀を発見されてしまいみんなは驚いたがみんなで相談しあった結果ホントに保健室で見てもらうことにした。(理由は紫苑が大抵のことに動じないため)

その結果

紫苑「一刀くんのチ○コが無かったから間違いなく女の子ね♪」

見たのかよ!?

桃香「一刀くんが女の子になるだなんて!?」

蓮華「大きなショックだな!?」

大抵の女子がショックを受けるなか

華琳「（一刀が女の子になるなんて嬉しいわ♪結婚はできないけどその分楽しませてもらうわよ♪）」

約一名何かを企んでいた。

一刀「あのぅ、私どうなるんですか？」

一刀が聞いてくると

華琳「そうね、このまま漢組に返したら襲われかねないし、女子の教室に置いときましょう」

この華琳の一言に

沙和「だったらそんな男子の制服じゃなくて女子の制服を着るの～♪」

グイッ！

一刀「えっ！？」

ぴゅーっ！

沙和が一刀を拉致して教室に入ると

一刀「ちょっと沙和さんやめてください恥ずかしいです／／／」

沙和「逃げても無駄なの～！折角だから下着も女の子のに変えてあげるの～！」

一刀「いやーっ！／／／」

ドタバタッ！

教室の中で何が起きているのかは想像に任せよう。

そして数分後

ガラリッ！

沙和「できたの～、沙和の魂をこめた渾身の出来上がりなの～」

教室の中から疲れきった沙和が出てきたあと

キラキランッ☆

一刀「どうですか？／／／」

そこに完全に女装された一刀が現れた。（もちろん下着も着用）

それはまさに天女のように美しく直視した女子達は

桃香「ふぇっ！？／／／」

蓮華「美しすぎる／／／」

月「へぅ～敵いません／／／／」

華琳「今すぐ閨(ねや)に行くわよ！／／／／」

みんなが顔を赤くしながら驚いていた。

桃香「折角だから名前つけてあげようよ♪そうだな～一子(いちこ)ちゃんでどう？」

一刀「私の名前は一子ですか？」

桃香「そうだよ北郷一子ちゃん♪」

こうして女になった一刀は一子と名付けられた。

そして一子は各教室で授業を受けることになった。

2年A組（蓮華のクラス）

祭「女は上品さが大切というからのぅ今日の家庭科は編み物じゃ！好きなものを作るがよい」

そして一斉に編み物を始めるA組生徒達

秋蘭や斗詩は軽くできるのだが

蓮華「ここはどうすればいいのだ？」

蓮華は編み物が苦手だった。蓮華が困っていると

一子「ここはこうするんですよ　」

一子が教えに来た。

蓮華「すまないな一子。でもあなたの分は終わったのか？　」

一子「心配なく、私はマフラー、手袋、浴衣にドレス等々作りましたので　」

ドンッ！

蓮華「そうなのか！？　」

一子の特徴・家庭的

２年Ｂ組（桃香のクラス）

桔梗「今日のテストはとびきり難しいから覚悟しておくがよい！　」

桃香「ふぇ～、桔梗先生テスト多すぎだよ～　」

数分後

一子「あのぅ、できましたけど　」

桔梗「どれどれ　」

桔梗が一子の答案を見ると

桔梗「全問正解じゃ！？　」

一子の特徴・一刀より頭がいい。

2年C組（愛紗・華琳のクラス）

体育の時間

春蘭「どりゃーっ！」

がっきーんっ！

野球の最中春蘭が特大ホームランを打った。

愛紗「くっ！？またホームランか！？」

愛紗が諦めたその時

一子「はっ！」

ぴょんっ！　バシッ！

一子が高く跳んで春蘭のホームランをアウトにした。

一子「これでワンアウトですね」

一子の特徴・爆乳なのにもかかわらず運動神経がいい。

そしてお風呂の時間

一子「いいお湯ですね」

さすがに一子は一人で入らされたのだが

ガラリッ！

桃香「一子ちゃん背中洗ってあげるよ♪」

一子「えぇっ！？／／／」

タオルを巻いた桃香が現れて

桃香「ホント一子ちゃんっておっぱい大きいよね」

むにゅっ♪

一子「や…やめてください恥ずかしいです／／／」

体を洗ったり一子の胸をさわる桃香だった。

そして就寝時間

一子「さてと明日も早いし早く眠らないとね」

一子は生徒会長室で寝ることにし、いつも夜更かしする一刀が早く寝ることになった。

そして次の日

桃香「おはよう一子ちゃん！」

一子「おはよう桃香ちゃん♪」

すっかり一子は女子達にとけ込んだ。

一子「さてと今日もなにか素敵なことが…」

一子が最後まで言おうとすると

一子「うっ！？」

ガクンッ！

一子はその場に倒れた。

桃香「どうしたの一子ちゃん！？」

桃香が心配して一子に近づくと

プシューッ！

桃香「えっ！？」

一子の爆乳が穴の空いた風船のようにしぼんでいき平らになると

一刀「う…う～ん」

一子は一刀に戻っていた。

桃香「一刀くん！？」

一刀「う～ん桃香、俺に何があったんだ?教室が騒がしいから見に行ったのまでは覚えてるんだが」

どうやら一子の記憶は一刀に残らないらしい

だが一刀は服がおかしいのに気づいて鏡を見てみると

一刀「なんじゃこりゃー!?」

今の一刀は女子の制服を着て大きいブラを身に付け、更に女物のパンティまで装着した姿であった。（一歩間違えれば変態である）

一刀「こんなもの!!」

スッ

一刀が制服を脱ごうとすると

華琳「待ちなさい一刀!」

ズラリッ!

一刀の周りに女子達が立ち並んだ。

すると彼女達は

華琳「面白いので写真とるから終わるまで待ちなさい」

バァーンッ!

女子達の手には携帯のカメラやデジカメなどがあった。

一刀「冗談じゃない！こんな姿撮られてたまるかー！」

ぴゅーっ！

一刀がその場から逃げ去ると

華琳「待ちなさい一刀！」

蓮華「みんなで追いかけるわよ！」

ドドーッ！

女子達は全員で一刀を追いかけるのであった。

一刀「何がどうなってるんだよ～！？」

このあと、結局一刀はみんなに捕まってしまい女装姿の写真を気がすむまで撮られたという。

おまけ

桂花「くっ！あの薬が不良品だったなんて、でもあの男が実験台になってくれたおかげで効果はわかったわ！今度こそ爆乳になって巨乳人を見返してやる！」

と叫ぶ桂花だった。

１０３時間目「北郷一子！？」（後書き）

月「月です。明日は１／３０、一刀さんの誕生日です。今まで男子寮メイドをしていた甲斐がありました。皆さんに内緒でこっそり一刀さんと誕生日パーティーを…。というわけにもいかずにバレてしまいました。次回、『Ｈａｐｐｙｂｉｒｔｈｄａｙ』お誕生日おめでとうございます♪」

１０４時間目「Ｈａｐｐｙｂｉｒｔｈｄａｙ」（前書き）

一刀「ある日俺は学園を歩いていると誰もいないはずの教室から声が聞こえてきて教室の扉を開けた途端俺の口に丸薬が流れ込み俺は女になってしまう。女になった俺は女子達とも仲良しになるが途中で薬の効き目がきれてしまい俺は女装姿を恥さらす羽目になったのだった」

１０４時間目「Ｈａｐｐｙｂｉｒｔｈｄａｙ」

今日は１／２９。

この日の月は

月「ふんふふふ～ん♪」

ササッ！

鼻唄を歌いながら掃除していた。

いつも明るい月だがそんなことをすれば怪しまれるものであり

詠「月、何かいいことでもあったの？」

詠が聞いてみるが

月「何でもないよ詠ちゃん♪」

あきらかに何かを隠している様子であった。

そしてその日の放課後

じ～っ

月の様子が怪しいと感じて一刀大好きっ子（桃香、華琳、蓮華、恋、雫、天和、凪）と詠が月を監視していた。

桃香「何だか月ちゃん嬉しそうだね」

華琳「あれは陽気は絶対一刀絡みね」

詠「あのバカチ○コめ！月に何をしたのかしら＃」

そしてみんなで監視を続けていると

月「これで買いたいものはわかったし早く買い物にいかないと！だって明日は一刀さんの誕生日♪二人きりでお祝いしなくちゃ♪」

～月の妄想～

月「一刀さんお誕生日おめでとうございます♪」

テーブルには一刀と月の二人っきり

一刀「ありがとう月♪でも俺のプレゼントはお金じゃ買えないものがいいんだ」

月「それって何ですか？」

月が頭に？を浮かべて聞いてみると

一刀「それはね月だよ♪」

ガバッ！

一刀は月の体を押さえつける。

月「へぅ～／／／」

～妄想終了～

にた～っ

月がにやけた顔をしていると

華琳「なるほどそういうわけだったのね＃」

蓮華「男子寮メイドの立場を利用するとはずるいな月＃」

ゴゴゴッ…！！

月の後ろには一刀大好きっ子が立ち並んでいた。

月「へぅっ！？皆さんいつのまに！？」

月がみんなに気づいて驚くと

恋「…月、ずるい」

桃香「月ちゃん白状しようね～＃」

ゴゴゴッ…！！

睨み付けてくる一刀大好きっ子の迫力に月は勝てず

月「へぅ！？わかりました白状しましゅ！？」

月はとうとう白状してしまった。

しばらくして

華琳「なるほどね、明日の１／３０（１月３０日）は一刀の誕生日だと　」

ちなみに月が一刀の誕生日を知っている理由は男子寮メイドのため寮のみんなのデータを記録してあるからであった。（及川も記録しようとしたら詠に止められた）

華琳「そうだとわかれば　」

ピッ！

華琳は携帯を取り出すと

華琳「お父様、大至急有名パティシエや有名コックを呼んでほしいの。華琳のお願い聞いてくれる？　」

こう言ったら親バカである華琳の父が断るはずないのを華琳は知っていた。

華琳「ありがとうお父様。今度の休みには実家に帰るからね♪　」

もちろんこれは親を喜ばせるための嘘である。

蓮華「こうしてはおれん！私もプレゼントを用意せねば！　」

桃香「どうせなら学園長に頼んで学園で祝ってあげようよ♪　」

雫「雫も久しぶりに美味しい料理つくるなの！」

恋「…ごはん」

天和「私は一刀のために歌を歌おうっと♪」

凪「急いで学園中に知らせなくては！？」

ダダッ！

みんなが騒ぐなか

月「へぅ、せっかく一刀さんと二人っきりでいちゃつく計画だったのに」

ガクッ

一人うなだれる月であった。

そして次の日の1月30日

ダダッ！

一刀「やべっ！？寝過ごした！！」

この日の一刀はいつものように寝坊していた。

一刀「それにしてもセットした目覚ましが破壊されてるなんて寝相が悪かったのかな？」

すでに裏工作はバッチリされていた。

そして一刀がチャイムの鳴るギリギリの時間に校門を潜る（くぐる）と

パンッ！パカンッ！！

一刀「えっ！？」

潜り抜けた直後にいきなり一刀に向かってクラッカーが打ち出された。（※危険ですので絶対マネしないでください）

そして

全員『お誕生日おめでとう一刀！』

バンッ！

そこには武者修行に行っている孤狼を除いた生徒と教師全員が待ち構えていた。

一刀「えっ！？」

突然のことに驚く一刀だが

桃香「一刀くん、１８歳の誕生日おめでとう♪」

桃香の一言で

一刀「あぁそうか！？今日は俺の誕生日だったんだ！？」

本人もすっかり誕生日を忘れていた。

華琳「日頃のあなたの頑張りに感動して学園長に頼んで学園で祝ってもらうことにしたのよ」

蓮華「今日の主役はあなたよ一刀♪」

華琳と蓮華が言うと

一刀「み…みんな」

ほろりっ

恋「…一刀が泣いてる」

天和「一刀でもやっぱり泣くんだね♪」

一刀が涙を流していると

一刀「これは嬉し泣きだよ、みんなありがとう！」

こうして一刀の誕生パーティーが開催された。

講堂

ズラリッ！

講堂にはたくさんの料理が並べられていた。

華琳「これは学園の料理自慢が一刀のために作ったのよ。お腹一杯食べなさい　」

学園の料理自慢

華琳、雫、流琉、祭先生等々

華琳「ただし、食べる以上は残さずせめて一口でも全部食べるのよ！　」

ビシッ！

華琳が言うと

恋「…恋も食べたい　」

鈴々「お兄ちゃんだけあんなに食べてずるいのだ！　」

季衣「ボクだって食べたいよ！　」

食いしん坊トリオがブーイングをする。

雫「ダメなの！ダーリンが一口食べるまで食べちゃダメなの！　」

流琉「我慢しなさいよ季衣　　」

１年Ａ組　典韋流琉。料理が得意で季衣とは親友であり姉がわりでもある。

そして一刀は

一刀「それじゃあ恋達のお腹が減る前に食べるとするか！」

バクバクッ！

すると一刀はものすごい勢いで料理を食べ始めた。

恋「…一刀凄い。恋も負けてられない」

鈴々「鈴々も食べるのだ！」

季衣「チビッ子には負けないもんね！」

１年Ａ組　許緒季衣。大食らいで鈴々とは喧嘩友達

そして数分後

一刀「完食！」

一刀はすべての料理を残さず一口ずつ食べきった。一口ずつといってもその品数は１００を越えていた。

月「一刀さん、誕生日といえば次はバースデーケーキですよ」

月が言うと

ガラガラッ！

巨大ケーキを引っ張って華雄がやって来た。

華雄「こういうときしか出番がないとはな　」

２年Ａ組　華雄郁叉。負けず嫌いで力が強いが他よりは下、影が薄い。

ケーキ担当班

月、朱里、雛里、卵里

卵里「久しぶりの登場でしゅ　」

１年Ｃ組　徐庶卵里。朱里と雛里とは幼馴染み。お菓子作りが得意だが影が薄い。

月「天辺（てっぺん）に特大蝋燭（ろうそく）１８本立てましたからすべて消してくださいね　」

月が言うと

一刀「よっしゃ！　」

バシュンッ！　キィーンッ！

一刀は聖騎士光龍に超進化してケーキの上に飛ぶと

一刀「ふーっ！！　」

ビューッ！！　シュボッ

余程の肺活量がなければ消せない特大蝋燭をすべて消し去った。

全員『わぁーっ！！』

生徒全員から拍手がされる。

そしてお待ちかねのプレゼントタイム

璃々「お兄ちゃんお誕生日おめでとう♪」

スッ

璃々ちゃんはクレヨンで描いた一刀の似顔絵を渡した。

一刀「ありがとう璃々ちゃん」

なでなで

璃々「てへっ♪」

そしてその後も

及川「わいからはこの間発売されたエロ本や後で読みや！（ひそひそ）」

一刀「ありがとな及川（ひそひそ）」

だがこのエロ本は後に月に見つかってしまい隠されるのだった。

麗羽「一応命の恩人ですし、特別にわたくしの純金像を差し上げま

すわ　」

一刀「あ…ありがとな　」

もらっても困るものである。

貂蝉「私達からは抱き枕よん♪　」

卑弥呼「これでバッチリ眠れるぞい！　」

確かにバッチリ眠る（永眠）ことができそうな抱き枕である。

一刀「気持ちだけ受け取っておきます！　」

さすがにあんなものをもらうわけにはいかないので一刀が貰うのを断ると

卑弥呼「残念であるな　」

貂蝉「そうよねん、せっかく抱き枕に定番的な裏面が少しエッチにしといたのにん　」

くるっ！

貂蝉は抱き枕の裏面をみんなに見えるように回すと

貂蝉と卑弥呼以外全員『ぎゃーっ！？　』

全員が絶叫した。

しばらくして

一刀「たくさんもらったな　」

あのあと一刀は星からメンマ壺、桂花から呪いの藁人形、亞莎からゴマ団子、于吉から左慈の秘蔵ブロマイド等々をもらった一刀だった。

一刀「さすがに少し疲れたな。でもこれだけ盛大に祝ってもらえるなんて俺は幸せだな　」

一刀がみんなから離れて座っていると

桃香「まだ終わりじゃないよ　」

ズラリッ！

いつの間にか一刀の周りには一刀大好きっ子が立ち並んでいた。

桃香「はい一刀くんプレゼント　」

ババッ！

そして一刀大好きっ子から一刀にプレゼントが渡された。

一刀「ありがとうみんな　」

一刀は喜ぶが

月「あれ？雫さんはプレゼント渡さないんですか？　」

ただ一人、雫だけは一刀にプレゼントを渡していなかった。

雫「渡す必要ないなの。だって雫からのプレゼントは～…」

雫からのプレゼントはというと

雫「雫ちゃん本人をあげるのなの～♪」

ダッ！

そう言って雫は一刀に抱きつこうとするが

ガシッ！

華琳「あなたのことだからそうだと思っていたわ＃」

蓮華「それはダメだからな＃」

雫の行動を先読みしていた華琳と蓮華に止められた。

雫「冗談なの～、ホントはプレゼントを用意してあるなの～」

もちろん冗談ではなく本気である。

一刀「どれどれ？」

ガサガサッ

さっそく一刀は貰ったプレゼントを開けてみると

桃香からは桃色のペンケース

華琳からは黒色のハイテク腕時計

蓮華からは赤色のハンカチ

恋からは玉将（中華料理店）の炒飯の割引券

雫からは水色のマグカップ

凪からは銀色の水筒

そして天和からは役満姉妹のＣＤが入っていた。

桃香「ホントは手作りにしたかったんだけども時間なかったからね」

桃香達が一刀の誕生日が今日だと知ったのは昨日である。たった一日で手作りを渡すのにはいくらなんでも無理があったのだ。

だが唯一一刀の誕生日が今日だとわかっていた月はというと

一刀「これは！？」

一刀は月からのプレゼントを見て驚いた。

月「夏休みから編んでいたセーター等の防寒着です。サイズがわからないから合うかどうかわかりませんけど」

月が言うと

一刀「ありがとう月、最近は寒いからさっそく使わしてもらうよ」

月「へぅ一刀さん／／／」

いいムードになる一刀と月だが

ギロリッ！

この場にいるのは二人だけではなく

桃香「ずるいな～月ちゃん＃」

華琳「自分だけ手作りなんてねぇ＃」

蓮華「メイドの立場を利用するとはずるいな＃」

ゴゴゴッ…！！

嫉妬の炎を燃やす一刀大好きっ子達

そしてさらに

雫「ダーリンだって人前でイチャイチャしすぎなの～＃」

天和「ホントに一刀は女たらしだよね～＃」

恋「…一刀悪い子＃」

怒りの矛先は一刀にも向けられた。

一刀「月…」

月「一刀さん…」

そして二人は互いに話し合うと

一刀「逃げるぞ!?」

月「へぅ～!!」

ダダッ!!

その場から逃げるべく走り出した。

桃香達『まちなさーい!!』

ドドドーッ!!

そしてその後を追いかける月を除いた一刀大好きっ子であった。

一刀「何だかんだあってもやっぱり今日は最高の誕生日だぜ!」

この直後、一刀はみんなに捕まってしまいボコボコにされるのであった。

１０４時間目「Ｈａｐｐｙｂｉｒｔｈｄａｙ」（後書き）

桃香「桃香です。一刀くんが倉庫の整理をしていると聞いて手伝いに来た私だけど突然本が光り出してしまい気を失ってしまいます。そして目が覚めて回りを見てみればそこは昔な風景でした。次回、『時を越える一刀』この人、お母さんに似てる！？」

１０５時間目「時を越える一刀」（前書き）

一刀「ある日のこと、月が妙に浮かれていた。何故なら明日の一月三十日は俺の誕生日だった。秘密りに誕生日パーティーを企む月だが結局ばれてしまう。そして俺は学園から誕生日を祝ってもらうのだった」

１０５時間目「時を越える一刀」

聖フランチェスカ学園倉庫

ここには俵の地図等あらゆるもの（まるきり役に立たないものを含む）が収納されていて生徒会長である一刀が時おり整理に来ていた。

一刀「それにしても整理を始めてから数ヶ月経つけどまだまだ奥が見えないな」

見た目とは裏腹にこの倉庫はまるで青い猫型ロボのポケットのように広かった。

一刀「さすがに倉庫は危険なものが多いから璃々ちゃんは帰したけれど大変だな」

実は最初は副会長である璃々ちゃんも手伝うと言ったのだが危ないという理由で帰したのだ。

そして一刀が一人で整理をしていると

ガラッ！

倉庫の扉が開いて

桃香「一刀くん♪」

桃香が現れた。

一刀「桃香、何か用か？」

一刀が突然現れた桃香に聞くと

桃香「一刀くんが整理してるって聞いたから手伝いに来たよ♪」

桃香が言うと

一刀「それは助かる！ありがとう桃香」

桃香「どういたしまして♪（ニヤリッ）」

だがこれにはすべて桃香の策があった。

桃香「（後は外から鍵がかかれば♪）」

～桃香の妄想～

鍵のかかった暗い倉庫に二人きりといえば

桃香「ヤダよ一刀くん、どこさわってるの？／／／」

暗がりのなか桃香を押さえつける一刀

一刀「こんなに暗いんだから恥ずかしがることないだろ」

桃香「あ…あんっ」

～妄想終了～

桃香「（な～んちゃって！キャーッ！）」

桃香は桃色妄想するが

現実はそんなに甘くなかった。

第一にこの倉庫は以前麗羽達が侵入したとき（３８話参照）に鍵が壊されてしまいまだ直っていないため鍵がない。

第二にいくらこういう状況になったとはいえ相手が学園最強の鈍感王である一刀ならば無理である。（及川ならば鍵がどうなっていようとも二人きりになった時点で襲っている）

ガラーンッ！

桃香の野望は崩れさるのであった。

桃香「そんな～」

ふらっ　ガツンッ！

そして桃香がショックでよろけてしまい本棚に当たったその時

ガッシャーンッ！

桃香「キャアッ！？」

ドダダーッ！！

桃香は本棚から倒れてきた本の波にのまれてしまった。

一刀「大丈夫か桃香!?」

ポイポーイッ!!

一刀が崩れた本の山をあさると

桃香「ふえ〜ん」

桃香が本の山に埋もれていた。

スッ

桃香「動けないから一刀くん引っ張ってよ〜」

桃香が一刀に手を差し出すと

一刀「わかったよ」

ぎゅっ!

一刀は桃香の手を握った。

桃香「(この手は洗わない♪)」

一刀「それじゃあいくぞ」

ぐぐっ!

一刀が桃香の手を引っ張ってあともう少しで起き上がろうとしたそ

の時

一刀「あれなんだ？」

パッ

一刀が何かに興味を出して桃香の手を離した瞬間

桃香「ギャフンっ！？」

バタンッ！

桃香は再び本の山に埋もれてしまった。

一刀「これって誰だ？」

一刀が落ちていたものに興味を出していると

ガバッ！

桃香「いきなり手を離すなんてひどいよ！＃」

桃香は自力で起き上がって一刀に文句を言った。

一刀「自分で起き上がれるんじゃんか、それより桃香これ誰だかわかるか？」

スッ

一刀は桃香に落ちていた写真を見せる。

桃香「誰だろう?分からないや」

写真には美形な男が立っていた。

一刀「ちょっと汚れていて年代がわからないけどどうやら昔のフランチェスカ学園みたいだな」

その証拠に写真にはフランチェスカ学園にて撮影と書かれていた。

一刀と桃香が写真をじ~っと見ていると

バサッ!バササーッ!

桃香が倒した本のページが風でめくれた瞬間

ゴゴゴッ…!!

一刀「!?」

桃香「どうしたの一刀くん?」

一刀「何だか妙な気配がするんだ」

この一刀の気配は間違いではなく

スゥーッ!

一刀「!?」

桃香「えっ！？」

何と！？本が二人を吸い込んでいたのだ。

桃香「うわーっ！？」

一刀「桃香！？」

キュインッ！

そして二人は本に吸い込まれてしまった。

しばらくして

一刀「う…うん」

一刀が目を覚ますと

一刀「たしか俺は本に吸い込まれて、それよりここはどこだ？」

一刀が辺りを見渡すが暗くて何も見えない。

一刀「それよりも桃香はどこにいったんだ？」

ササッ！

暗いので一刀が手探りで探っていると

むにゅっ♪

何だか柔らかいものをつかんだ。

一刀「これって確か前にも似たようなことが！？」

スッ

そして一刀の目が慣れて触っていたものがはっきり見えてくると

桃香「どうしたの一刀くん？」

一刀の後ろから桃香の声が聞こえてきた。

一刀「えっ！？桃香が後ろにいるってことは！？」

一刀が握っていたものは

ぺにゃんっ

ゴム毬（まり）だった。

一刀「ゴム毬かよ！！」

ポイッ！

一刀はゴム毬を投げ捨てた。

桃香「何だと思ったの？」

一刀「桃香は知らなくてもいいの」

二人が話していると

ガラッ！　ピカッ！

いきなり光が入ってきた。

？「倉庫にいるのは誰だ！　」

一刀・桃香『倉庫！？』

何と！？二人がいたのは倉庫だった。

？「怪しい奴め！出てこい！　」

誰かが倉庫の中に入ってきて

一刀と桃香を引っ張り出した。

一刀「うわっ！？　」

桃香「きゃっ！？　」

バタッ！

一刀と桃香が倉庫の外に出されると

桃香「一刀くん！？あれを見て！？　」

桃香が指差した先には

バァーンッ！

一刀「あれはフランチェスカ学園！？」

フランチェスカ学園の校舎がそびえ立っていた。

？「そこっ！よそ見するな！＃」

ビシッ！

一刀達を外に出した人が二人を叱りつける。

だがその人の顔をよく見てみると

一刀・桃香『冥琳先生！？』

バァーンッ！

何とそこには冥琳先生に似た人がいた。

冥琳「確かに私の名は周瑜冥琳だがお主達何故私の名を知っているのだ？」

そういわれても困るものである。

桃香「どうなってるの一刀くん！？（ひそひそ）」

一刀「そういえば父さんの母さん（一刀の父方の母・祖母）から聞いたんだけど世界のどこかに時間移動できる本があるらしい。たぶんさっきの本だよ！？（ひそひそ）」

一刀の父方の母はあまり知られていないが実は魔法使いなのだ。

そして一刀達は冥琳にどう答えようか迷っていると

？「冥琳よ何の騒ぎじゃ？　」

どこかで聞いたような声が聞こえてきた。

一刀「その古くさくて年寄りみたいな喋り方はさ…　」

一刀が最後まで言う前に

ガツンッ！☆ミ

一刀の頭に拳骨が落ちた。

？「誰が古くさくて年寄りみたいな喋り方じゃい！＃　」

一刀「この拳骨の痛みはまさしく祭先生！？　」

バタッ！

そして一刀は倒れてしまった。

祭「誰じゃこいつらは？　」

冥琳「私にもわからんがどうやら侵入者らしい　」

桃香「うわーっ！？冥琳先生どころか祭先生までいるだなんて！？

」

そして三人が話していると

？「君達どうしたんだい？　」

バンッ！

今度は色黒の美形が現れた。

桃香「あれっ？あの人は確か…」

その男こそ写真に写っていた美男子であった。

祭「おぉ、夕凪ではないか　」

冥琳「どうやら学園に侵入者が入ったらしいんだ」

二人が言うと

夕凪「侵入者だと　」

スッ

夕凪は戦闘体勢をとると

夕凪「侵入者は生徒会長である僕が倒す！」

ビュンッ！

ものすごい速度で桃香に迫ってきた。

桃香「えっ！？ふえええっ！？」

桃香は驚いて避ける暇がない。

夕凪の拳が桃香に当たりそうになったその時！

ガンッ！

夕凪「なっ！？」

一刀「お前、何してるんだよ！」

一刀が夕凪の拳を受け止めた。

一刀「女の子を殴ろうとする奴は俺が許さないぜ！」

夕凪「おもしろい、生徒会長として相手をしてあげるよ！」

スッ！　スッ！

二人は戦闘体勢をとると

一刀「『俄龍光拳』！」

夕凪「『鋼の拳（アイアンフィスト）』！」

ブォンッ！！

互いに拳に力を溜め込んで繰り出し

ドゴッ！　ドゴッ！

お互いに拳を食らいあった。

一刀「なかなかやるなお前　」

夕凪「お前もね　」

バキッ！ドカッ！

そしてそのまま二人は殴り合いの喧嘩を始めた。

桃香「大変だ！？止めないと！？　」

ダッ！

桃香は二人を止めようと近寄るが

？「やめなよあんたじゃ力不足だ　」

桃香を止めたのは桃香に似た桃髪の女の子だった。

桃香「（あれっ？この人なんだかお母さんと同じ感じがする何でかな？）　」

桃香がそう思ったのも無理もない、何故ならこの人は九州から転校してきた後の桃香の母になる劉備桃恵であった。

桃恵「（何でだ?こいつを見てると無性に川に投げ込みたくなる）
」

そして二人が考えている間に

ドカカッ!!　バタッ!

殴りあっていた二人は同時に倒れてしまった。

一刀「お前って強いんだな。俺より強い奴がいたんてな」

夕凪「僕も驚きだよ」

ガシッ!

そして二人に友情が芽生えたという。

だがその時

スゥッ

一刀「えっ!?」

桃香「何でなの!?」

二人の姿がどんどん透けていき

パッ!

一刀と桃香は消えてしまった。

夕凪「そういえば名前聞いてないけど誰だったんだろう？」

夕凪が考えていると

雪蓮「おーい貂蝉！」

今度は制服を着た雪蓮が現れた。

夕凪「雪蓮、貂蝉だと女の子っぽいから名字で呼んでくれと言っただろ」

もうわかっていると思うがこの美少年は後の貂蝉である。（貂蝉のフルネームは夕凪貂蝉）

雪蓮「別にいいじゃない♪それよりも卑弥呼師匠と一緒に学園対抗武道大会にむけて特訓しにいくんでしょ」

雪蓮が言うと

夕凪「あぁっ！絶対に卑弥呼師匠に漢女道（おとめどう）を教えてもらうんだ！」

ぐっ！

燃える貂蝉だが修行から帰ってきた頃には現在の姿になっているとは想像できなかった。

そしてその頃、消えた一刀と桃香は

シュンッ！

桃香「きゃっ！？」

一刀「うわっ！？」

ドシンッ！！

再び倉庫に戻ってきていた。

一刀「帰るなら帰るで優しく下ろしてほしいよ」

スッ

一刀が立ち上がろうとすると

むにゅっ♪

右手が何かをつかんでいた。

一刀「どうせゴム毬だろ」

スッ

そして一刀が右手を見てみるとそこには

桃香「うーんっ」

ババーンッ！

桃香のおっぱいがあった。

一刀「と…桃香！？」

一刀が驚いていると

ギロリッ！＃

一刀は何処からか視線を感じて

ギギギッ…

ブリキ人形のように声のする方に首を回すと

愛紗「貴様、私がいないのをいいことに姉上を襲うとはな＃」

ゴゴゴッ…！！

そこには鬼の角を生やした愛紗が仁王立ちしていた。

愛紗「貴様という奴はー！！＃」

一刀「不可抗力だー！？」

ドタバタッ！

結局のところあの美少年かが誰なのかは誰も知らないため謎になったという。

１０５時間目「時を越える一刀」（後書き）

蓮華「蓮華だ。今日はバレンタインらしいな。というわけで日頃世話になっている一刀にチョコを送らなければならないな。だが回りはライバルだらけで大変だ。次回、『血染まりのバレンタイン』果たしてみんなは誰にあげるのだろうかな？」

１０６時間目「血染まりのバレンタイン」（前書き）

一刀「桃香と倉庫で掃除していた俺はふとした拍子に過去のフランチェスカ学園に飛ばされてしまった俺達。そこで出会ったのは学生時代の冥琳先生と祭先生、そして謎の美少年だった。そこで俺は美少年と戦いを始めるも超進化していないとはいえ互角の戦いを繰り広げるが途中で元の世界に戻されてしまうのだった」

１０６時間目「血染まりのバレンタイン」

今日は２／１４（２月１４日）

聖バレンタインである。

あるものは幸せにひたり、

またあるものは絶望に落ちる。

そして我らが主人公北郷一刀はというと

聖フランチェスカ学園

ざわざわっ

華佗「何だか今日は校門が騒がしいな！？」

この日は他校の女子生徒まで校門に集まってきていた。

及川「みんなわいのためにチョコを…」

左慈「それはないから安心しろ」

漢組のみんなが話していると

バシュンッ！

漢組生徒達『うわっ！？』

突然光が入ってきて

一刀「ふーっ！？」

光の中から超進化した一刀が現れた。

及川「かずピー！教室への瞬間移動は危険やからやめろって言うたやろ！＃」

及川が一刀に怒鳴ると

一刀「悪い悪い、今日は迂闊（うかつ）に外に出られないからさ」

実は校門に集まっている女子はほとんどが一刀にチョコを持ってきた人達なのだ。

一刀「今朝起きたら中学時代の女子からチョコが宅配便で届けられていたんだよ」

ちなみに宅配便で届けられた大量のチョコを見て月が怒りの笑顔をしたのはいうまでもない。

及川「ほ～っ、もて男くんは大変やな～」

一刀「？」

鈍感王である一刀は自分がもてるという自覚がなかった。

及川「さてと」

スッ

及川は窓の側に立つと

及川「女子の皆さん、かずピーは校舎内にいるでー！」

と大声で叫んだ。

すると

女子達『一刀く～ん！』

ドドドーッ！！

大勢の女子達が警備員の制止を振り切って校舎内に侵入していった。

及川「さぁかずピー、地獄の鬼ごっこの始まりやで～（ニヤニヤッ）」

一刀「及川のバカヤロー！？」

ビュンッ！

一刀はすぐさま教室から抜け出した。

華佗「及川、お前って悪だな」

及川「日頃からもてるかずピーが悪いんやんけ」

ちなみに一刀がもてる理由は顔がなかなか良いこともあるが、やはり学園対抗武道大会が一番効いていた。すると当然のごとく他のメンバーも

女子達『日高くん、受け取って～！』

焔「俺はチョコなんて要らねぇよ！」

※焔のフルネームは日高焔です。

女子達『蒼魔く～ん！』

蒼魔「うっとおしいから近寄るなっての！？」

学園対抗武道大会で活躍した人が女子達から狙われていた。

その頃、一刀はというと

シュンッ！

一刀「これで輸送完了だな」

結局一刀は女子達から逃げ切ることができずに捕まってしまいチョコを受けとるはめになってしまった。そして一刀は受け取ったすべてのチョコを寮に瞬間移動で輸送していったのだった。

そして一刀がこれ以上チョコをもらわないために会長室に行こうとすると

紫苑「一刀くん」

バンッ！

一刀の後ろに紫苑先生が立っていた。

一刀「紫苑先生、俺に何か用ですか？」

一刀が聞くと

紫苑「はいこれっチョコレート」

スッ

紫苑先生が一刀にチョコレートを渡してきた。

だがその理由は

紫苑「風邪で休んでいる璃々がどうしても一刀くんにチョコを渡すんだときかなくてね、あと私からいつも璃々がお世話になっているお礼としてね」

という理由であった。

一刀「ありがとうございます紫苑先生」

紫苑「今日はなるべく外に出ない方が身のためよ」

まさにその通りである。

しかし紫苑先生が去った直後

桃香達『一刀（く～ん・さ～ん）！』

ドドドーッ！！

一刀大好きっ子が攻めてきた。

その頃、漢組では

及川「ケッ！何がバレンタインや、元々バレンタインデーは聖バレンタインが処刑された日なんやで、何でその日に愛を誓い合うねん＃」

学園で一番チョコがもらえない男・及川祐がふて腐れていた。

及川「華佗とさっちー（左慈）もチョコもらったていうし、他の男子も一部除いて義理やけどチョコもらえたらしいからな」

もはや学園でもらっていないのは及川くらいとなっていた。

及川「（まぁ左慈命のうっきー（于吉）とカクカクした体の呂井門はチョコもらえへんやろしな）」

及川がざまあみろというような顔をしていると

女子「呂井門くん、この間は無くしたハンカチ探してくれてありがとう、これはお礼のチョコ（ガソリンを固めたもの）だよ」

呂井門「ありがとう」

ズコッ！

及川の近くで呂井門が女子からチョコをもらっていた。

及川「そこのお嬢ちゃん達、わいにもチョコを…」

及川が女子に近寄ると

女子「ゲッ！？変態エロ眼鏡！こっちに来るな！！」

ダダッ！

桂花なみの発言をして女子は去っていった。

及川「そんな！？」

ガーンッ！？

今更ながらショックを受ける及川だった。

及川「まぁいい！まだうっきーがおるんや！」

だが及川はすぐに立ち上がる。だがそれも…

穏「于吉さ～ん、この間は穏の欲しかった本をありがとうございました。これはお礼のチョコです～」

于吉と同じ読書部の穏が漢組に入ってきて于吉にチョコを渡した。

于吉「うちは実家の店に古書店を扱う人が来ますからお安いご用ですよ　」

※于吉の実家はおかまバーである。

そしてとうとうもらっていないのは及川だけになってしまった。

そして及川は

及川「チョコ～！＃　」

ゴゴゴッ…！！

チョコを欲しがる怪物と化した。

及川が暴れている頃、他のみんなは

蒼魔「どうやら撒いたようだな！？　」

蒼魔が女の子から逃げるのに成功して廊下を歩いていると

シュンッ！

蒼魔「うぉっ！？　」

ザクリッ！

いきなり蒼魔にクナイが投げ出されて足元に突き刺さった。

蒼魔「何だよこれは！？」

ザシュッ！

蒼魔がクナイを引き抜くと

ジャンッ！

クナイにはチョコボールが入った袋と手紙がついていた。

蒼魔「何だ？」

バサッ

蒼魔が手紙を見てみると

『私のことについてはありがとうございました。バレンタインですのでお礼をします　天川八雲』

それは学園対抗武道大会の時に蒼魔と出会った天川八雲からの手紙であった。（５０話参照）

蒼魔「八雲／／／」

ポッ

八雲を思い出して赤くなる蒼魔。実はこの二人は学園対抗武道大会で出会って以来結構いい仲になっていた。

蒼魔が赤くなっていると

女子達『蒼魔く～ん！』

蒼魔「やべっ！？」

蒼魔は女子達に見つかってしまいまた逃げることになってしまった。

その頃、焔は

天和「みんな～！私達のチョコが欲しい～？」

男達『欲しい～！』

地和「それじゃあ、ちぃ達からチョコあげるから並びなさ～い！」

男達『並ぶ～！』

人和「欲しい人はお金を払ってくださ～い！」

男達『払う～！』

お金を払ってまでアイドルの義理チョコを欲しがる男達。その中には

焔「天和ちゃんの一番高いチョコをくれ！」

焔の姿があった。

天和「はいっ！十万円で～す♪」

ほとんどぼったくりである。

焔「買った！」

それでも買う天和ファンの焔であった。

数え役満姉妹・会員Ｎｏ．１番日高焔。

そして一刀はというと

桃香「はい一刀くん」

華琳「私が作ったんだから食べなさいよね」

蓮華「初めてだから味はわからんが食べてくれ」

月「美味しいですよ」

恋「…恋、我慢して食べなかった」

凪「なるべく辛さをひかえてみました」

次々と一刀にチョコを送るみんな

だが、チョコを配っている天和はともかく雫の姿がなかった。

すると

配達員「北郷さん、お届け物です」

ドスンッ！

突然配達員が現れて大きな荷物を届けてきた。

一刀「中に何が入ってるのかな？」

一刀が不思議に思っていると

ガタガタッ！

急に箱が動き出して

パカッ！

箱が開いた瞬間

雫「はぁ～いダーリン、雫ちゃんなの～♪」

箱の中から紐ビキニを着た茶色の雫が現れた。

雫「雫ちゃんの体は液体になれるから体にチョコを混ぜた雫をダーリンに…」

雫が最後まで言おうとすると

バタンッ！

華琳達によって無理矢理箱を閉じられた。

蓮華「お前はいつもいつもそんなことを考えているのか！＃」

華琳「南極にでも郵送しようかしら？＃」

雫「待つなの！？ホントのチョコ持ってきたから許して欲しいなの～！」

雫は観念してお色気作戦を諦めるのだった。

そしてその頃、及川はというと

及川「チョコ～！」

女子「キャーッ！？」

女子を見れば襲いかかるようになっていた。

及川「チョコ～！」

及川が暴れていると

ゴチンッ！

何かが及川に投げ出された。

及川「これは！？チョコ！？」

そして及川はチョコが投げ出された方向を見てみると

バァンッ！

そこには何と！？桂花がいた。

桂花「勘違いしないでよね！あんたが華琳様を襲ったら困るから義理チョコをあげただけだからね！／／／」

桂花、意外にツンデレなのかもしれない！？

だが及川は

及川「アホか、お前のような貧乳のチョコなんか誰がもらうかい！」

ポイッ！

せっかくもらった桂花からのチョコをゴミ箱に捨てた。

（ここで及川に対する罰を募集します。採用された罰は後に及川に食らわします）

桂花「なっ！？何してくれるのよバカ眼鏡！＃」

及川「お前のような貧乳なんてわいの好みやないんや！＃」

こんな悪どいことをする及川はほっておいて

あっという間に夜になった。

一刀「まさかこんなにチョコが集まるとはな！？」

ジャーンッ！

一刀の部屋にはたくさんのチョコがあった。

一刀「でも食べないと女の子に申し訳ないな！よしっ！」

そして一刀は一日かけてすべてのチョコを食べきったものの

次の日には鼻血まみれの一刀が発見されたという

１０６時間目「血染まりのバレンタイン」（後書き）

貂蝉「貂蝉よん♪知り合いから赤ちゃんを預かったんだけど何故かこの赤ちゃん私の顔を見ると泣き出すのよん!?そこで出会ったのは通りすがりの一刀くん、私は早速赤ちゃんを一刀くんに預けたわん♪次回、『一刀の子育て日記』次回もよろしくねん♪ブチュッ！」

１０７時間目「一刀の子育て日記」（前書き）

一刀「今日はバレンタイン俺はみんなに会わないよう瞬間移動で登校したが及川にやられてしまい女子から逃げるはめになってしまった。その後女子達からチョコを受け取ったかと思えば今度は桃香達が攻めてきてもう大変！！だが断るわけにもいかずすべてのチョコを夜通し食べた俺は翌日、鼻血を出して倒れているのを発見されるのだった」

１０７時間目「一刀の子育て日記」

ある日のこと

貂蝉「それじゃあいってらっしゃいね小町　」

フランチェスカ学園学園長である貂蝉は藤原保育園にやって来ていた。

尾野「ありがとうね貂蝉　」

尾野小町。貂蝉の友人で藤原保育園の園長をしている。さらに

貂蝉「同じ漢女(おとめ)道を極めたものの頼みなら聞かなきゃならないじゃない　」

尾野「そうね、それじゃあよろしくねんっ♪　」

外見は貂蝉よりはましだが漢女である。

そして小町は去っていった。

貂蝉「さてとん、妹子ちゃんお母さんが出掛けている間お姉ちゃんが遊んであげるからねん♪　」

ギュッ！

そんな貂蝉の手には小町の娘の妹子が抱かれていた。（一才）

フランチェスカ学園

妹子「おぎゃーっ！おぎゃーっ！」

さっきまで寝ていた妹子が起きた途端いきなり泣き出した。別にお腹が空いたわけではなく、おむつも濡れていない。その理由は…

貂蝉「どうして泣いてるのよん？」

バァンッ！！

起きた直後に貂蝉の顔を見たからである。

しかも

ガラッ！

卑弥呼「貂蝉、これから新入生を迎える講演会に行く時間じゃぞ」

貂蝉「あらやだ！？忘れてたわん！？」

貂蝉に用事ができてしまった。

妹子「おぎゃーっ！おぎゃーっ！」

だが赤ちゃんをこのまま残していくわけにはいかないし、講演会にも行かなくてはならない。

貂蝉「どうしましょう？」

貂蝉が悩んでいると

ガラッ！

一刀「学園長、来年の予算案を持ってきました」

生徒会長である一刀が入ってきた瞬間

貂蝉「一刀くんちょうどいいわん♪この赤ちゃん預かってねん」

パスッ

一刀「えっ！？」

一刀がどういうことかわからずに戸惑っているうちに貂蝉は赤ちゃんを一刀に渡すと

貂蝉「その間、授業休んでも構わないからねん」

ダダッ！

貂蝉は直ぐ様出ていった。

一刀「ちょっと学園長！？」

一刀が貂蝉を追いかけようとすると

妹子「おぎゃーっ！おぎゃーっ！」

妹子はさっきよりも高い声で泣き出した。

しかし

一刀「お～よちよち　」

一刀があやすと

妹子「（ぴたりっ）　」

泣き止む妹子だった。

元々一刀は小さい時から忙しい親に代わって妹の一刃の面倒を見ていたので小さな子の相手をするのは得意だったのだ。

一刀「仕方がない、いつ帰ってくるかわからないけど面倒みるしかないな　」

妹子「だっ！　」

一刀は仕方がなく妹子の面倒をみることになった。

生徒会長室

とりあえず赤ちゃんを漢組につれていくわけにはいかないので一刀は生徒会長と一部の人しか入れない生徒会長室に赤ちゃんを連れてきた。

一刀「とりあえずここなら安心かな　」

一刀が息を吐くと

ガチャッ！

璃々「お兄ちゃん遊ぼ～♪　」

突然この部屋に一刀以外で入れる副会長の璃々ちゃんが入ってきた。

一刀「ごめんね璃々ちゃん、今赤ちゃんの面倒見てるから遊べないんだよ　」

一刀が言うと

璃々「赤ちゃん？　」

トテテーッ！

璃々ちゃんは一刀に抱かれている赤ちゃんを見ると

璃々「かわい～い！ちょっとだけ抱っこさして～♪　」

璃々ちゃんはかわいいものに目がなかった。

一刀「いいけど落とさないようにね　」

璃々「うんっ！　」

スッ

璃々は一刀から赤ちゃんを受けとると

妹子「だっ？」

璃々「かわい～い！璃々も妹が欲しいな～♪」

璃々ちゃんが言うと

妹子「ふぇっ…」

ぶるぶるっ！

突然赤ちゃんが震え出した。

璃々「進化するの？」

ポケ〇ンのやりすぎである。

一刀「そうじゃないよ、ちょっとかしてごらん」

スッ

一刀が璃々から赤ちゃんを受け取った瞬間

じょろ～

一刀「あっ！？」

璃々「あっ！？」

赤ちゃんは一刀の腕の中でおしっこをした。

しばらくして

妹子「だっ！」

おしめを替えてもらい妹子はご機嫌だが

一刀「まさか男の子だったなんて！？」

おしめを替えた時に偶然見てしまった結果、赤ちゃんは男の子だった。

璃々「お兄ちゃん、赤ちゃん散歩させようよ」

一刀「確かにいつまでも会長室に入れとくのもかわいそうだし散歩に連れていくか！」

璃々「うんっ！」

一刀は璃々と妹子を連れて散歩に行くことにした。

廊下

妹子を背中に背負い校舎内をうろつく一刀

だが回りの人から見た評価は

男子「誰の子だ？」

女子「桃香かな？華琳さんかな？それとも蓮華？」

いらぬ疑いをかけられる一刀だった。

そして一刀が赤ちゃんを連れているという噂は学園中に広まり

ドドドーッ！！

当然のごとく

桃香「一刀くん！？」

華琳「一刀！」

蓮華「一刀！」

月「一刀さん！」

恋「…一刀！」

天和「一刀！」

雫「ダーリン！」

凪「会長！」

一刀大好きっ子に聞こえてしまった。

桃香「一刀くん、その赤ちゃんは誰の子なの！？」

華琳「返答しだいではただではすまないわよ！＃」

蓮華「はっきりと言え！」

月「怒っていませんからね＃（ニコニコ）」

恋「…ずるい、まだ恋としてない」

天和「ぶーっ！」

雫「浮気は許さないなの～！＃」

凪「会長！正直に言ってください！」

次々と攻めよる一刀大好きっ子に一刀は

一刀「実は…」

正直に話すことにした。

桃香「なぁーんだ、学園長からの預かりものなんだ」

華琳「それならそうと早くいいなさいよね」

蓮華「人騒がせなやつだな」

勝手に騒いだのはみんなの方である。

一刀「みんなが俺をどう思ってるのかよくわかったよ」

もはや一刀は他の人から見れば、女を見れば襲いかかって虜（とりこ）にするケダモノのようなものであった。

そんなとき

妹子「ふぇっ！おぎゃーっ！」

赤ちゃんが急に泣き出した。

一刀「この泣き声はお腹が空いたようだな」

一刀は経験から泣き声で赤ちゃんが騒ぐ原因がわかるのだ。

月「ではミルクですね。すぐ用意して持ってきますからね」

スッ

月がミルクを取りに行こうとすると

雫「それじゃあ間に合わないから雫ちゃんのミルクを飲ませてあげるなの♪」

ぽろりっ！

一刀「うぉっ！？」

雫は一刀がいるにも関わらず胸をさらけ出す。

そして一刀が雫の胸を直視しようとした時

ブスッ！＃

一刀は華琳から目潰しされた。

一刀「ぎゃーっ！？」

ゴロゴロッ！

目を潰されて転げ回る一刀

蓮華「あなた何を考えてるのよ！」

蓮華が平気で胸を見せる雫に注意すると

雫「別に雫はダーリンならおっぱいくらい見せても平気なの♪ダーリンがたのむならあそこだって…」

華琳「やめなさい！この小説を１８禁にする気！」

華琳と蓮華が雫を何とか止めると

桃香「私だって負けないもん！」

ぽろりっ！

恋「…恋も」

ぽろりっ！

天和「じゃあ私も～♪」

ぽろりっ！

凪「皆さんに負けるわけにはいきません！／／／」

ぽろりっ！

普段真面目な凪まで場の空気に流されてしまった。

華琳「やめなさいあなた達！」

蓮華「人が来たらどうする気だ！？」

胸を見せつけるみんなを止める真面目な華琳と蓮華

一刀「いたた～」

そして一刀の目が回復して桃香達の方を向こうとしたその時

ブスッ！

一刀「ぎゃーっ！？」

ゴロゴロッ！

月「見ちゃいけませんよ一刀さん」

またもや目潰しされて転げ回る一刀

結局、赤ちゃんのミルクは月が持ってきた。

またしばらくして

貂蝉「一刀くんありがとねん」

ガシッ！

貂蝉が帰ってきて赤ちゃんを抱いた。

貂蝉「でもどうして目がそんなに腫れてるのん？」

ひりひりっ

一刀の目は目潰しされ過ぎて赤く腫れていた。

一刀「俺にも何がなんだかわからないですよ」

一刀が言うと

貂蝉「まぁとりあえずありがとねん♪さぁ妹子ちゃん帰りましょうねん♪」

スッ

貂蝉が赤ちゃんを抱いて去ろうとすると

妹子「か…」

妹子「かうと～」

まだ喋れないが赤ちゃんは一刀と言ったらしい。

一刀「（元気で育てよ）」

この時、一刀は赤ちゃんが男の子であることをすっかり忘れていた。

１０７時間目「一刀の子育て日記」（後書き）

華琳「華琳よ。最近桂花の馬鹿（及川）を見る目がおかしいわね、何かあるのかと聞いてみたら驚いたわ！？そうだ♪面白そうだし一刀達を誘って桂花と馬鹿（及川）をくっつけてあげましょう♪次回、『及川と桂花』さぁて、二人の仲はどうなるのかしらね？」

１０８時間目「及川と桂花」（前書き）

一刀「知り合いから赤ちゃんを預かった学園長（貂蝉）は世話をしてみるが赤ちゃんは泣き出すばかり、困った学園長は偶然出会った俺に子守りを押し付けてしまう。そして俺が子守りをしていると俺に隠し子がいるという噂を聞いて桃香達が攻めてくるのだった」

１０８時間目「及川と桂花」

ある日のこと

及川「そこのお姉ちゃん、メルアド教えてえな！」

女子「きゃーっ！？」

ドドドーッ！！

いつものように嫌がる女の子を追いかけ回す変態眼鏡及川祐。

ザクザック！

桂花「フフフッ！これだけ深けりゃいくらあの男が超人でも簡単には出られない。いつもいつも華琳様に相手をしてもらって、見てなさいよ北郷一刀！」

桂花が一刀を落とすための落とし穴を掘っていた時

女子「きゃーっ！？」

及川「待ってやー！」

そこに及川が現れた。

ぴょーんっ！

女子は見事桂花の掘った落とし穴を飛び越えるが

及川「待って…って!?」

女子しか見えていない及川は

及川「うわーっ!?」

ドスンッ!

落とし穴に落ちてしまった。

及川「いたた…」

桂花「ちょっとさっさと退きなさいよね全身精液変態眼鏡!＃」

及川の下にいる桂花が言うと

及川「アホかお前は!お前のせいでガールハント失敗してしもうたやんけどないしてくれんねん!＃」

及川は桂花に怒鳴り出した。

桂花「何が私のせいよ!どうせあんたのことだから失敗するのが目に見えてるじゃない!＃」

及川「なんやとこの猫耳貧乳女!＃」

桂花「なんですって!＃」

穴の中で喧嘩をする二人。そしてその様子を

華琳「（じ～っ）　」

華琳がじっと見ていた。

そして昼休み

華琳「桂花、あなた最近あの馬鹿（及川）と接触していることが多いようね。あの馬鹿とあなたにどんな繋がりがあるのかしら？　」

華琳が桂花に尋問すると

桂花「仕方がありませんね、華琳様には話しておきます。実は私とあの馬鹿（及川）は幼稚園の同級生なんです　」

ここで話は数十年前に戻る。

まだ桂花の父が華琳の父の秘書として働く前、桂花は親の仕事により大阪の幼稚園に入園していた。

先生「今日から新しくもみじ組に入ることになった荀イク桂花ちゃんで～す　」

幼い桂花「桂花でちゅ。はじめまちて　」

荀イク桂花。当時五歳、この時から猫耳フードを着けていて男嫌いではなかった。

そんな桂花を現在のように男嫌いにした人物は

幼い及川「よろしゅうな～！」

及川祐。当時五歳、この時から眼鏡をかけていて父の影響により少しスケベだった。

初めは仲がよかったような二人だったが

数日後

幼い桂花「おちっこ漏れる～！」

トタターッ！

幼い桂花がトイレに向かって急いでいると

幼い及川「わっ！！」

幼い桂花「ひぇっ！？」

ビクッ！？

幼い及川に脅かされて

じょろろ～

思わずお漏らししてしまった。

それを見た幼い及川は

幼い及川「なんやねんお前お漏らししたんかいな、みんなに報告や～♪」

幼い桂花「あっ！？」

この日より数日間、桂花のあだ名は『お漏らし』とつけられた。

幼い桂花「ちかたがないわ、お漏らししたわたちが悪いんだもにょ」

幼い桂花は心が広く、簡単には怒らなかった。

ところがだ

ガッターンッ！

幼い桂花「へぅっ！？」

幼い及川「やーいやーい」

ある時は椅子を引かれて尻餅をつき

幼い桂花「きゃーっ！？」

幼い及川「やーいやーい！」

ある時は蛇をしつこく迫られ（桂花が蛇を嫌いになったのはこのせい）

幼い桂花「いやんっ！」

幼い及川「今日のパンツは金魚の提灯(ちょうちん)ブルマ♪」

ある時はスカートめくりをされて、そしてとうとう

ブチンッ！！＃

桂花の何かがキレた。

次の日

先生「桂花ちゃんはお父さんの仕事の都合で転校していきました」

桂花は必死で親に頼んで転校してもらった。

幼い及川「根性ないやつやのぅ　」

だが桂花の及川に対する仕返しはすでに始まっていた。

小学校入学時

幼い及川「わいは及川祐やよろしゅうな！」

及川が挨拶すると

子供「あいつが有名なエロ大王だってよ」

子供「女どころか隙あれば男だって襲うらしいわよ」

幼い及川「？」

そしてその日から及川はクラスどころか学園のみんなから避けられ続けた。

おかしいと思った及川がクラスメートに聞いてみると『パソコンの書き込みに』と言われたので開いてみたら

『大阪府〇〇市〇〇小学校の及川祐はものすごい変態です。小学生ながらエロ本を購入し、こっそりエロＤＶＤを借りています。皆さん、この男には指一本触れないでください！　被害者ＫＪ』

といった書き込みが去年から書かれていた。

幼い及川「なんやねんこれは!?まてよ、ＫＪってもしかして…」

もちろん桂花である。桂花は転校した後直ぐ様パソコンで毎日書き込んでいたのだ。これが桂花が男嫌いになった理由である。

現在

桂花「ということがあったんですよ。そして再び会ったのが去年の時です。その時だって思いっきり口喧嘩しました。はっきり言わせてもらいます！私はあんな奴のことが他の男よりも大嫌いです！＃」

どう見ても及川が悪い！

桂花が言うと

華琳「（面白そうね）」

ニタリッ

話を聞いた華琳はSのような顔をした。

そして次の日

華琳「というわけで桂花の男嫌いを治すため桂花と馬鹿をくっつけるからあんた達協力しなさい！」

一刀・華佗・左慈・于吉『はぁ？』

華琳によって集められた一刀達。もちろん華琳は桂花の嫌がる顔が見たいだけである。

一刀「そんな手はなぁ」

華佗「及川には関わりたくない」

左慈「勝手に一人でしやがれ」

于吉「いきましょう」

ザッ！

一刀達が去ろうとすると

華琳「嫌なら別にいいのよ、そのかわり一刀はこの前のテストで赤点とったことをお母様に報告するし、華佗は紫苑先生の大事な化粧品を勝手に薬の材料にしたことを言うし、左慈はサッカーやってて

ガラス割ったのを学園長に報告するし、于吉は褒美として左慈の生写真あげるわ　」

ピタッ！

華琳が言った瞬間

一刀・華佗・左慈『喜んで協力します！！　』

于吉「もちろんしますとも　　」

自ら従うしかない四人だった。

華琳「ありがとう、桂花は明日カフェテラスに呼んでおくからみんなも来るのよ　」

そして話の展開は早く、次の日・カフェテラス

桂花「華琳様が私を指名するなんて何のご用かしら♪　」

そこには制服ではなく私服の桂花が座っていた。

そしてその近くの茂みには

ガサッ！

華琳「ふふふっ！来たようね　」

華琳と一刀達がすでに隠れていた。

一刀「二人をくっつけるったってどうする気だよ？」

華佗「あの二人は顔を会わせただけで口喧嘩するからな」

一刀達が心配するなか

華琳「それなら大丈夫。この科学研究部から借りてきた変身薬があるからこれであなた達が馬鹿（及川）になればいいのよ」

一刀達『えっ！？』

数分後

桂花「華琳様遅いわね」

桂花が華琳を待っていると

及川（一刀）「よぅ！桂花やんけ」

まずは及川に変身した一刀がやって来た。

桂花「何の用よこの全身精液変態眼鏡男！さっさと私の前から消えるか死になさい！」

早速桂花の毒舌が炸裂すると

及川（一刀）「つれへんこと言うなぁ、わいは可愛い桂花に会いたいちゅうのに」

スッ

桂花「なっ！？／／／／」

及川が桂花の手を握りしめて思わず顔を赤くする桂花。いつも朴念仁の一刀とは思えない台詞が出てくる。

及川（一刀）「（もう少しだぜ）」

ところがだ

ゴゴゴッ…！！＃

後ろから物凄い殺気を感じて振り向いてみると

華琳「（か～ず～と～＃＃）」

嫉妬に燃える華琳がそこにいた。

このままではヤバイと感じた一刀は

及川（一刀）「あっ！華琳が飛んでる！」

桂花「えっ！？どこよ！？」

桂花の目をそらさせた隙に

シュンッ！

物凄い勢いで茂みに戻った。

華佗「二番手は俺だな」

一刀が帰ってきた後、二番手の華佗が出陣する。

そして桂花の目が戻る前に

及川（華佗）「すまん見間違いやったようやわ！？」

何とか戻ってこれた。

桂花「ふんっ！女ばかり見ているから目が悪くなるのよ！華佗のごと…」

桂花が最後まで言おうとすると

及川（華佗）「ちがーうっ！ごとじゃないゴッドヴェイドォーだ！」

桂花「えっ！？」

突然のことに驚く桂花

そして華佗がしまった！？と感じると

及川（華佗）「あっ！華琳が飛んでる！」

桂花「えっ！？どこよ！？」

またも桂花が目を離した隙に

シュンッ！

物凄い勢いで茂みに戻る華佗であった。

左慈「だらしない奴らだぜ　」

スッ！

そして三番手の左慈が出陣する。

桂花「いないじゃないの！　」

そしてまたもや桂花が振り返ってくる前に

及川（左慈）「最近疲れたからなぁ！？　」

息を切らしながらも戻ってきた左慈だった。

及川（左慈）「話は戻るがな桂花　」

桂花「何よ？　」

桂花が聞くと

及川（左慈）「（やはり直球だろ）俺はお前のことが好き…　」

左慈が最後まで言おうとすると

ガサッ！

于吉「ダメですよ左慈！」

突然于吉が茂みから飛び出した。

于吉「いくら演技とはいえ私の左慈が他の人のものにはできません！」

及川（左慈）「落ち着け于吉！？」

二人が騒いでいると

桂花「（及川・ゴッドヴェイドォー・左慈・演技）」

カッチンッ！

桂花の頭の中でパズルが完成した。

桂花「北郷！華佗！そこにいるのはわかってるから出てきなさい！＃」

桂花が叫ぶと

一刀「くっ！？」

華佗「バレてたか！？」

素直に出てくる一刀と華佗

桂花「やっぱりどうもおかしいと思ったら全てあんた達の策略だったのね、この全身精液変態男共！＃」

ダッ！

桂花は一刀達を罵倒すると怒りながら去っていった。

一刀「華琳、だからダメだって言ったろ」

一刀が華琳に言うと

華琳「あら、何の話かしら？」

華琳はとぼけていた。そのすぐ後

桂花「ちょっと！！離しなさいよ！」

桂花の叫び声が聞こえてきた。

そして一刀達が駆けつけると

ヤンキー「ぶつかっておいてそれだけかい＃」

桂花がヤンキーにからまれていた。

一刀「まったくもう！」

スッ！

一刀が桂花のところに駆け出そうとするが

ドドドーッ！！

左慈「何の音だ？」

于吉「遥か向こうから土煙が出てますけれど」

そして土煙の中から出てきた影は

華琳「あれって馬鹿（及川）じゃない！？」

華佗「体育苦手なあいつが何であんなに早いんだよ！？」

ドドドーッ！！

走り出していた及川はそのまま一刀達の前を通りすぎると

桂花「あんた！？」

ヤンキー「何だテメェ＃」

桂花達のところに近づき

及川「そこ退けやぁ！」

ドカッ！☆ミ

ヤンキー「ごはっ！？」

漢組で一番力のない及川がヤンキーをぶっ飛ばした。

桂花「（こいつ、もしかして私を助けに／／／）」

スッ！

そして桂花が及川に近寄ったその時

バキンッ！

桂花「えっ？」

桂花の足の下で何かが割れる音が聞こえたので見てみるとそこには割れたキーホルダーがあった。それを及川が見た途端

及川「あーっ！？アイドルの限定キーホルダーをよくも壊してくれたなこの猫耳貧乳女！＃」

及川は何と数メートル離れたところからキーホルダーを発見し、ヤンキーが踏みそうになったのでヤンキーをぶっ飛ばしたのだった。

それを知った桂花は

桂花「ふざけるんじゃないわよ！たかがキーホルダーくらいで大袈裟よこの全身精液変態眼鏡！＃」

二人は口喧嘩を始めた。

そしてその様子を見ていた一刀達は

華琳「あの二人は結婚するわね」

一刀「まさかぁ」

華佗「ありえないだろう　」

左慈「もし結婚したら俺は一生お前の奴隷になってやるよ　」

于吉「では私は左慈の奴隷に…　」

左慈「ふざけるな変態眼鏡＃　」

だがこの数年後、ホントに及川と桂花は結婚してしまい左慈が華琳の奴隷になってしまうのはまた別の話である。

１０８時間目「及川と桂花」（後書き）

及川「及川や！今日は健康診断の日、隠れて女子の検査を覗こうと思ったらかずピーがわいを止めようと来たで！こうなったら一緒に女子の検査を覗こうやないか♪次回、『天国からの脱出』ここはまさに天国やぁ～♪」

１０９時間目「天国からの脱出」（前書き）

一刀「及川と桂花には実は二人しか知らない共通点があった。それは二人が同じ幼稚園だということである。しかも及川が桂花を苛めていたことが原因で二人の中が悪いことが発覚し、その事を桂花から聞き出した華琳は俺、華佗、左慈、于吉を巻き込んで桂花と及川をくっつけようとする。ところが演技中アクシデントが起きてしまい桂花は怒って去ってしまうがヤンキーに絡まれてしまいそれを及川がたすけるのだが二人は直ぐ様口喧嘩をするのだった」

１０９時間目「天国からの脱出」

一刀「（突然ですが皆さん、この小説の主人公である北郷一刀です。えっ、なんで普通に話さないのかって？それはですね…）」

今、一刀がいる場所は

保健室のロッカーの中である。

及川「（かずピー誰と話しとんねん？）」

しかも隣のロッカーには及川がいた。

それならばロッカーから出ればいいと思う人もいるだろうがそれはできない！何故ならば…

桃香「愛紗ちゃん、全裸になれば１キロは減るかな？」

愛紗「姉上、はしたないからやめてください」

今、保健室では学園の女子の身体検査が行われているため出るわけにはいかないのだ。

及川「（そもそも何でこうなったんや！？）」

一刀「（お前のせいだろうが！＃）」

こうなった原因は数分前に遡る（さかのぼる）。

数分前

華佗「身体検査おわったな　」

男子の身体検査は女子の身体検査が始まる前に終わっていた。

于吉「何々、左慈の体重は去年より2キロ増えて…　」

めりっ！

左慈「人の検査表を見るんじゃねぇよこの変態が！＃　」

左慈は于吉を壁にめり込むくらい蹴飛ばした。

一刀「俺は身長が前より1センチは伸びたな　」

お昼をたくさん食べる一刀だが、体重はさほど去年と変わっていなかった。（食べた分運動しているため）

そして及川は

及川「ほな、みんなわいは出掛けてくるわ！　」

スッ

及川が漢組から出ようとすると

一刀「どこいくんだよ及川？　」

華佗「まだ女子の身体検査が終わっていないから終わるまでの間男

子は自習だって卑弥呼が言ってただろ」

もちろん漢組では自習といっても休み時間とかわりない。

及川「何を言うてんねん！身体検査いうたら覗くのが基本やろ♪」

まったく基本ではない

左慈「お前、まさか女子の身体検査覗く気かよ！？」

于吉「バレたら今度こそギャグキャラでも死ぬかもしれませんよ」

みんなが言うと

及川「大丈夫♪絶対バレへん秘策があるんや！そんじゃさよなら～♪」

ダッ！

及川は漢組から出ていった。

一刀「待てよ及川！？とりあえず及川を止めにいってくるぜ！」

何だかんだ言っても一刀も覗きたいらしい。

そして一刀が漢組から出ようとすると

華佗「一刀、覗きにいくならこれを持っておけ」

シュッ！　　パシッ！

華佗は一刀にひとつの袋を渡した。

一刀「これは？」

華佗「万が一ヤバイと思ったらその薬を飲むんだ。それで少なくとも命だけは助かる（かも）」

一刀「わかった。ありがとな華佗！」

ダッ！

薬を受け取った一刀は及川の後を追っていった。

左慈「お前、何の薬を渡したんだ？」

華佗「それは後で教えてやるさ」

そして一刀が及川の後を追っていった先は

バンッ！

保健室の隣にある体育用具室

及川「何やねん色々言うたかて結局かずピーも覗くんやんけ」

一刀「馬鹿いえっ！俺はお前を止めるために来たんだよ！／／／んでこの体育用具室に来てどうする気だよ？」

一刀が及川に聞くと

及川「よくぞ聞いてくれました！実はこの体育用具室にある二つのロッカーは保健室のロッカーと繋がってるねん！」

ガチャッ！

及川がロッカーを開けると

一刀「確かに保健室のロッカーと繋がっているな！？」

及川「飛琳先生を騙して作ってもらったんや♪これならロッカーから保健室の様子が見れるで！」

だが実際は飛琳は及川の企みを知りながらも面白そうという理由で作ったのだった。

及川「さてとそろそろ女子の来る時間やしロッカーに隠れるでかずピー！」

一刀「おいっ！？」

グイッ！

及川は一刀を無理矢理ロッカーの中に入れた。

そして

ガラリッ

きゃぴきゃぴっ！

保健室に下着姿の1、2年女子全員が入ってきた。（普通は体操着でやるのを西森は知ってながら下着姿でしています）

そして女子の中にはもちろん

桃香「（体重が心配だよ～）」

蓮華「（お尻が大きくなってなければよいが）」

華琳「（バストUP！）」

当然のごとく桃香達もいた。

及川「（ここはまさに宝石箱や～♪）」

一刀「（お前はひ〇麿かよ！）」

※一刀達は覗きをしているため声を口に出してはいません。

一刀「（もういいだろ及川、下着姿見たんだしさっさと帰ろうぜ）」

だが及川は

及川「（何言うてんねん！今回は胸囲の測定が行われるんやで、すなわち生おっぱいが見れるんや！おっぱい見るまでわいは帰らへんで！）」

実際一刀は桃香と蓮華と月と恋の生おっぱいは見ているのだが（※詳細はこの小説をよく読んでください）

欲望に忠実な及川が言うと

一刀「（馬鹿野郎！もしこのまま隠れてて見つかったらどうなるか考えてみろ！）　」

及川「（どうなるか…）　」

及川は足りない頭で考えてみた。

隠れてて見つかった場合

…死刑（マジで危険）

及川「（嫌やっ！ここで死にとうない！）　」

一刀「（だろっ、さっさと帰るぞ）　」

スッ

一刀は体育用具室側から出るべく開けようとするが

一刀「（あれっ？）　」

及川「（どないしたんや？）　」

一刀「（扉が開かない！？）　」

及川「（何やて！？うわっ、こっちも開かへんで！？）　」

さっきまで開けられるはずだった扉が急に開かなくなった理由、それは…

飛琳「さてと、面白くなってきたな　」

飛琳先生が体育用具室側のロッカーの鍵をかけたからであった。

そして冒頭に至る。

一刀「（このままいたらいずれ見つかってしまう！？）　」

一刀が慌てていると

及川「（そやかずピー、瞬間移動でこの場から脱出するんや！）　」

及川は提案するが

一刀「（ムリだ！瞬間移動は超進化しなきゃできないしロッカーで超進化したらすぐにバレてしまう）　」

超進化すると体が光るためすぐにバレるのだ。

一刀「（とりあえず女子が出るまで何もするな！気配を消すんだ！）　」

及川「（わかった！）　」

二人は静かにすることにするが

ぷる～ん♪　ぽよ～ん♪

目の前に素敵な花園があるのに及川が黙っていられるわけがなかった。

及川「（あ～、わいは今幸せや～）　」

一刀「（馬鹿野郎！何も考えるな！）　」

だが

紫苑「では皆さん、次は胸囲を計りますからブラを外してくださ～い　」

女子達『はーい　』

サササッ

紫苑先生に言われてブラを外す女子達

及川「（サクランボの収穫祭や～！！）　」

一刀「（見ちゃダメだ～！）　」

ちらりっ

と言いながらも、ちら見する一刀だった。

華琳「ちょっと雫、あなた羞恥心はないの！？／／／　」

華琳が雫に向かっていう。その雫は

雫「雫ちゃんはおっぱい大きいから別に恥ずかしくないなの♪」

バァーンッ！

手で隠さず堂々と胸を見せていた。

雫「雫はダーリンなら全裸でいてもいいなの♪」

及川「（かずピーお前～！！＃）」

一刀「（全裸か、それもいいかもな）」

ところがここで雫は爆弾発言をする。

雫「おっぱい小さい人は見せられないなんてダメな人なの～」

ピキンッ＃

これを聞いた数人の女子は

桃香「私だって大きいもん！／／／」

蓮華「私だって／／／」

華琳「負けてられないわ／／／」

ババババッ！

一斉に胸を見せていた。

そしてついに

及川「もうダメや～！我慢できへん！」

バッ！

一刀「（あっ！馬鹿！？）」

及川は我慢できずロッカーから飛び出した。

その結果

女子達『あっ』

及川「あっ！？」

ロッカーから飛び出した及川は女子達と目があってしまい

女子達『この変態ー！！！＃』

ドガガガガッ！！

及川「ぎゃーっ！？」

おそらくこの小説で初めてであろうものすごいお仕置きを繰り出した。

一刀「（及川、哀れだな）　」

だが一刀も安心はできない。何故ならば

及川「待ってぇな、かずピーが隣のロッカーにおるで　」

ババーンッ！！

及川がロッカーに一刀が隠れていることをバラしたからだ。

一刀「（及川の馬鹿野郎！）　」

漢組　及川祐。他人をはめてでも互いに制裁を受けたがる男

ズラリッ！

そしてロッカーの前に並び立つ女子達（もちろん下着着用）

桃香「一刀く～ん＃覗きはいくらなんでも犯罪だよ～　」

華琳「私の胸を覗き見して覚悟はできてるわね＃　」

蓮華「さっさと出てくれば半殺しで勘弁してやるぞ～＃　」

ゴゴゴッ…！！＃

怒りの炎を燃やす女子一同

一刀「（いくら半殺しでもあんな大勢なら死んでしまう！？こうなったらこのままロッカーに潜んで…）　」

ところが

ギギギッ

一刀「（ひっ！？）」

外からものすごい力で扉が開かれていく

一刀「（ヤバイっ！？）」

ガシッ！！

一刀は扉を開けさせまいと力を込めるが

華琳「往生際が悪いわよ一刀！開けさせないなら扉を破壊してあげるわ！＃」

ジャキンッ！！

女子達は一斉に武器を取り出した。

一刀「（下着姿のどこに武器を取り出せるんだよ～！？）」

こういう状況でも突っ込む一刀だった。

華琳「攻撃開始！」

一刀「（こうなったら華佗が渡してくれたこの薬、でもどこかで見たような？って気にしている場合じゃない俺は華佗を信じるぜ！）

」

バクンッ！　ゴクンッ

一刀は華佗から渡された薬を飲み込んだ。

その直後

バキンッ！！

女子達『覚悟しろ北郷一刀！＃』

ロッカーの扉を破壊して女子達がロッカーの中を見てみると

一子「ここはどこですか～？」

そこには一子がいた。（一子については１０３話参照）

漢組

華佗「そろそろ一刀が薬を使ったとこかな？」

左慈「一体何の薬をやったんだ？」

左慈が聞くと

華佗「前に朱里から聞いて作った巨乳丸を参考にして作った薬だ。
一刀が薬を飲む直前の記憶まで消す効果をつけてある」

友達思いの華佗だった。

保健室

桃香「一子ちゃん!?久しぶりだね♪」

一子「桃香ちゃんも久しぶりです」

さっきまでの怒りはどこへやらさすがに女の子をボコボコにするわけにはいかなかった。

華琳「ちょうどいいわ、今身体検査してるから一子も計ればいいわ」

一子「えっ!?でも…」

蓮華「お前も私達女子の仲間なのだから遠慮するでない」

こうして一子も身体検査に加わることになった。

検査が終わって数分後

ボンッ!

一刀「俺、何してたんだ?　身体検査が終わって教室にいたはずなのに」

一子は一刀に戻り、保健室の騒動についてはすっかり忘れていた。

よって一刀は無罪になったが

及川「ぎゃーっ!?助けてー!?　」

貂蝉「女子の下着姿を覗くなんて悪い子ねん♪　」

卑弥呼「そんなに見たいならわしらのすべてを見せてやるぞい♪　」

ぼろりっ

及川「ひぎぃぃーっ!?　」

記憶が消されるまでボコボコにされたあげく世にも恐ろしいものを見てしまい踏んだり蹴ったりな及川だった。

そして一刀はというと

桃香「はい一刀くん　」

スッ

一刀「これは身体検査の用紙じゃないか!?しかも名前が北郷一子って誰!?　」

後日、一刀の元に一子の記録用紙が渡されたという。（一刀は一子のことを知らない）

１０９時間目「天国からの脱出」（後書き）

一刀「夜遅く隣町までエロ本を買いに行った俺は帰りの途中で小さい子が倒れているのを発見して飯をご馳走する。だけどもその子からは今まで感じたことがない強い気を感じていた。その子はご飯を食べ終わるとすぐに出ていった。そして次の日、学園では…。次回、『龍の襲来』次話より龍界編が始まるぜ！」

１１０時間目「龍の襲来」（前書き）

一刀「身体検査のある日、及川の女子の身体検査覗きを阻止するためにいった俺だが何故か及川と一緒に覗きをするはめになってロッカーに入れられた。すぐに出ようとするが外から鍵がかけられているので開けることができない！？しばらくおとなしくしようと思っていたが及川が興奮して隠れていたことがバレてしまった。そして俺に命の危機が迫った時、華佗から渡された薬によって命は助かったのだが桃香から渡された身体検査の用紙に書かれている北郷一子って誰だ？」

１１０時間目「龍の襲来」

現在時刻・ＰＭ９時

ここはフランチェスカ学園の最寄り駅から急行で５駅ほど離れた駅の本屋

店員「ありがとうございました」

ガラーッ！

その本屋から現れたのは

一刀「よしっ！エロ本Ｇｅｔだぜ！」

ぐっ！

パッと見、誰だかわからないくらい変装をした一刀がそこにいた。

一刀「フランチェスカ学園近くの本屋だと知り合いに見つかる確率が多いかもしれないからなだからこうして変装してまでエロ本買いに来たわけだぜ♪」

一刀はもう１８歳なので大抵のエロ本を買えるようになっていた。

一刀「おっと、急いで帰らないと電車に間に合わなくなるな」

こっそり寮を抜け出してきたので瞬間移動で帰るわけにはいかなかったのだ。

そして何とか電車に乗り込んでフランチェスカ学園の最寄り駅にたどり着いた一刀

一刀「さて、急いで帰ってエロ本を拝見するとしますか」

ダダッ！

そして一刀が急いで寮に戻ろうとすると

一刀「おやっ？」

ポツンッ

女の子が倒れているのを発見した。

一刀「大丈夫かきみ！？」

ガバッ！

一刀が倒れていた人を抱き上げると

ぐぅ～～っ！！

一刀「えっ？」

？「お腹…空いた…」

しばらくして

ガツガツ！！　もぐもぐ！！

倒れていた女の子は一刀の部屋に連れていかれてご飯を食べていた。

一刀「お味はどうかな？」

一刀が聞くと

？「美味しい♪」

忘れている人もいると思うが一刀の料理の腕は神の舌をもつ華琳が満足するような料理の達人である。

かたんっ！

そして女の子が料理を食べきると

一刀「俺は一刀、きみの名前は？」

一刀が女の子の名前を聞いてみると

狐々「狐龍（こりゅう）、だけど一刀なら狐々（ここ）って呼んでもいい」

一刀「そうか、それで狐々ちゃんはあんなとこにいたけどどこから来たの？」

もしかしたら家出少女かもしれないので一刀が聞いてみると

狐々「お兄ちゃんとはぐれた。それだけしか言えない…」

まだ狐々には何か秘密がありそうだが深くは聞かない一刀だった。

狐々「ご飯ありがとうもう帰る　」

ガタンッ！

そして狐々が帰ろうとすると

一刀「おいおい、もう夜中の１１時だよ。一晩くらい泊まれば？　」

だが狐々は

狐々「近くにお兄ちゃんの気配感じるからダメ。それじゃあ　」

ダッ！

狐々は玄関に向けて走っていった。

狐々「ご飯のお礼にひとつ教えてあげる。この地球（ほし）から早く逃げた方がいいよ　」

ダッ！

そして狐々は走っていった。

一刀「狐々ちゃん、それにしても気を計る力がおかしくなったのかな？あんな璃々ちゃんくらいの背丈の子が皇より高い気の持ち主だなんて　」

それが一刀が感じた妙な違和感だった。

だがこの時一刀が気付いていれば後に起こる大きな戦いが起きなかったのかもしれない。

そして一刀の部屋を出た狐々はというと

タタッ！

狐々「ハァハァッ」

夜中の町を急いで駆けていた。そんなとき

スッ

狐々の前に見知らぬ男が現れた。

狐々「鬼龍!?」

現れたのは狐々の弟である鬼龍だった。

鬼龍「ココさん、どこにいっていたんですか心配しましたよ!」

狐々「ごめんなさい」

狐々が鬼龍に謝ると

鬼龍「まぁいいでしょう、それにしてもこんな戦闘力が低い星を狙うなんて兄上は何を考えているのやら?まぁ兄上のことだから何か考えがあるのでしょう。でも油断しないでよココさん、人間の中で

も北郷という奴はしたっぱながら皇を倒すほどの実力者だそうですので」

狐々「大丈夫！龍界に恐怖を招く奴は狐々が倒す！」

狐々は北郷が一刀ということを知らなかった。

そして次の日

フランチェスカ学園

ズーンッ！

学園の前に鬼龍と狐々が立ち並んでいた。

鬼龍「ここが北郷の通うフランチェスカ学園か」

狐々「確かに他の人より強い気がごろごろしてる」

鬼龍「だが我ら龍族の前ではその力もカトンボ同然ですがね」

二人が言うと

及川「そこにいるかわいこちゃん♪転入生かいな？」

及川が狐々に話しかけてきた。

狐々「鬼龍、この人誰？」

鬼龍「わからないけど戦闘力がものすごく低いね」

ちなみに及川の戦闘力は僅か1である。（〇ラゴン〇ールでいうなら農家のおじさんが2なのでおじさんより低いのだ）

及川「あんたがこの子の家族ですか？わいにください！」

ペコッ！

及川が鬼龍に頭を下げると

鬼龍「うせろ！」

及川「へっ？」

ドグボッ！！　ズシャシャーッ！

鬼龍は及川の顔の横をおもいっきり蹴飛ばした。

普通の人間ならば首がとれているのだが

及川「痛い蹴りですね」

ガクッ！

及川は生きていた。

狐々「地球の奴らってみんな頑丈なの？」

鬼龍「わかりません」

及川にしかできないことである。

蒼魔「おいっ！そこのお前！」

鬼龍「んっ？」

呼ばれた鬼龍が振り向くと

蒼魔「お前一体何者だ！人間じゃねぇな！」

バンッ！

そこには蒼魔、焔、恋が立ち並んでいた。

ちなみに鬼龍と狐々は見た目でバレないよう人間に近い姿にしている。

鬼龍「ほぅ、あなた達は人間だというのに僅かながら龍の気配がしますね」

蒼魔「いいから質問に答えやがれ！テメェらは何者だ！」

蒼魔が聞くと

鬼龍「我が名は鬼龍、龍界より来た者です」

狐々「狐々は狐龍、同じく龍界から来た者」

バンッ！

二人が名乗ると

恋「…龍界ってどこ？」

焔「んなこと知るかよ！」

蒼魔「ただわかっているのはあいつらをほっておいたら何かヤバイことが起きるってことだ！いくぜ超進化するんだ！」

パァーッ！

鬼龍「ほぅ、人間が超進化できるとはね。ココさんは下がっていてくださいあなたの出る幕じゃない」

狐々「わかった」

蒼魔「いくぜーっ！」

そして戦いが開始された。

その頃、一刀は

一刀「やべぇ遅刻だ～！」

結局一刀は一日中エロ本を読みまくり途中で眠ってしまい目が覚めたら朝になっていた。

一刀「今日遅刻したら宿題倍だってのに最悪だぜ」

クイッ！

そして一刀が学園に入るための曲がり角を曲がって学園に入ると

一刀「！？」

一刀は驚いた。何故ならば…

バンッ！ババンッ！

そこには蒼魔達が倒れていたからだ。

一刀「どうしたんだみんな！？」

ガバッ！

一刀は一番近くにいた蒼魔を抱き起こすと

蒼魔「一刀、遅いじゃねぇか」

一刀「そんなことより何があったんだよ！？」

一刀が聞くと

鬼龍「ほぅ、あなたが北郷一刀ですか」

バンッ！

声が聞こえた先には鬼龍と狐々がいた。

一刀「お前らは何者だ！」

鬼龍「はじめまして、我が名は鬼龍。カイザー軍三大龍将軍の一人です」

狐々「狐々は狐龍。同じくカイザー軍三大龍将軍」

スッ

一刀は狐々を見ると

一刀「君は昨日の少女!?何で君が!?」

狐々「あなたが北郷一刀だなんて知らなかった。けどお兄ちゃんの命令だからあなたを殺す」

スッ

狐々は飛び出そうとするが

鬼龍「ココさんやめなさい。あなたが暴れたらこの星が壊れてしまいますので私がいきますよ」

スッ

鬼龍が構えると

鬼龍「さて、皇を倒したその実力を見せてもらおうか！」

シュンッ！

一瞬のうちに鬼龍が消えた。

一刀「瞬間移動か！？」

鬼龍「ちょっと違うよ」

シュンッ！

いつの間にか鬼龍が一刀の後ろに立つと

鬼龍「くたばりな！」

ブォンッ！！

鬼龍は一刀に拳を繰り出した。

だが

シュンッ！　スカッ

鬼龍「ほぅ」

パッ

一刀もすぐに超進化して瞬間移動で避けたのだった。

一刀「（こいつ、強い！？）」

一刀が驚いていると

鬼龍「言っておきますが我が兄でありカイザー軍皇帝の皇龍は私よりも強いぞ！」

！？

それはすなわち鬼龍にすら勝てなければ皇龍を倒すことは不可能に近いのだ。

シュンッ！

そして一刀が驚いている間に鬼龍が一刀の前に現れると

ドグボッ！！

一刀「ごはっ！？」

鬼龍は一刀の腹に膝蹴りをおみまいした。

鬼龍「この程度の奴に皇が負けただなんてあいつはやはり龍族の恥さらしだな」

だが一刀も終わってはいない

一刀「そんなに見たけりゃ見せてやるよ」

鬼龍「？」

鬼龍が？を浮かべていると

一刀「ハァーッ！！」

ゴゴゴッ…！！

ものすごい気が一刀の体を包み込んでいき

ジャキンッ！！

一刀「究極騎士光龍」

バンッ！

一刀は究極進化した。

鬼龍「まさか人間が究極進化するなんて！？」

さすがの鬼龍も驚く。

一刀「『聖俄龍光撃波』！」

ズドォーンッ！！

一刀の両手から光の気が放たれて鬼龍に直撃した。

だが

鬼龍「なるほど、皇を倒した実力は本物のようだな」

鬼龍は少し服が破けただけで怪我ひとつしていなかった。

一刀「バカな!?俺はフルパワーでやったんだぜ!?何故無傷なんだよ!?」

一刀が驚いていると

鬼龍「ココさん、兄上に報告するために一旦帰りましょうか？」

狐々「帰る」

スッ

そして二人は空中を飛んだ。

鬼龍「北郷一刀、近いうちに我々龍族はこの地球をいただきます！阻止したければ龍界に来ることですね」

シュンッ！

そして二人は消えていった。

一刀「龍界だと!?」

１１０時間目「龍の襲来」（後書き）

優神「どうも一刀の祖父の優神だ。いきなり一刀が現れて龍界について聞いてきたので私は一刀に龍界について教えることにした。そして全てを話した私は龍界の門を開くとことにしたのだが…。次回、『龍界と聖龍騎士団』一刀、頑張れよ」

１１１時間目「龍界と聖龍騎士団」（前書き）

一刀「夜遅くエロ本を買った帰りに俺は倒れている少女を見つけて寮に連れていきご飯をあげる。狐々というその少女は食べ終わるとすぐに出ていった。そして次の日、寝坊した俺が学園に入ってくるとそこには蒼魔達が倒れていた。そして蒼魔達を倒した二人組の中になんと狐々ちゃんが！？攻撃を仕掛けてくる鬼龍の隙をついて俺は究極進化の一撃を食らわすが鬼龍には傷一つつかず鬼龍と狐々は龍界と呼ばれるところに去っていくのだった」

111時間目「龍界と聖龍騎士団」

鬼龍・狐龍の二人が去ったあと

一刀「あいつら確か龍界から来たって言ったよな。昔どこかで聞いたことがある」

シュンッ！

一刀は究極進化を解くと

ザッ！

そのままどこかに行こうとする

蒼魔「待てよ一刀、どこいくんだよ？」

倒れている蒼魔が聞くと

一刀「ちょっと九州に行ってくる。学校は休むから言っておいてくれ」

ダッ！

そして一刀は空港の方に駆けていった。

一刀が去ったあと

蒼魔「くそっ！何やってんだよ俺は！一刀は俺が守るって決めたの

にいつまでたっても足手まといじゃねぇか！」

蒼魔が悔しがると

恋「…恋ももっと強くなってみんなを守りたい」

焔「俺だって同感だ！龍だかなんだか知らねぇがこのままなめられて引き下がる俺じゃねぇ！」

恋と焔も強くなりたいと願うと

飛琳「どうやらみんなも強くなりたいようだな」

バンッ！

そこに飛琳先生が現れた。

蒼魔「飛琳先生！？」

飛琳「あの二人相手によく生きていたものだな」

焔「お前、あの龍のことを知ってるのか？知ってるなら教えろ！」

焔が飛琳先生に聞くと

飛琳「こうなったら全てを話してやろう。龍界についてをね」

飛琳先生はみんなに龍界について話すことにした。

その頃、一刀は

一刀「おえ～っ！！　」

陸から離れた乗り物に乗ると吐いてしまう一刀は九州に向かう飛行機の中で吐いていた。

何故瞬間移動で帰らないのかというと

さっきの鬼龍との戦いで瞬間移動する力がなくなったからである。

そして九州　翠川家

この家は一刀の父である優刀の実家である。

じょろろーっ！

その家の庭で一人のおばあさんが水やりをしていると

ダッ！

一刀「婆ちゃんただいま　」

そこに一刀が訪ねてきた。

？「おやまぁ一刀かい　」

このお婆ちゃんは優刀の母であり一刀の祖母の翠川美幸（年齢５０代だが見かけは若い）である。実は近所には内緒にしているが魔法使いなのだ。

一刀「婆ちゃん、爺ちゃんいる？」

一刀が美幸に祖父の優神のことを訪ねると

優神「俺ならここにいるぞ　」

バンッ！

いつの間に現れたのかそこには一刀の祖父である翠川優神（年齢５０代だが見かけは若い）が現れた。

一刀「優神爺ちゃん、聞きたいことがあるんだよ！」

一刀が聞くと

優神「わかっておる。龍界のことについてだろう。お前ももうそんな歳になったとわな、よかろうお前に全てを話してやろう」

ちなみに一刀が何故優神の家を訪ねたのかというと

小さい頃、この家に遊びに来た時に屋根裏部屋にて龍界について書かれた書物を見つけた一刀は読んでみたがまだ幼い一刀は字が読めず、優神に聞いてみてもいずれ話してやると言われたのだった。

優神「龍界とは人間界とは異なる時空を越えた世界。普通は人間が龍界に入ることが出来ぬよう結界が張られておる。龍界からは上級の手練れは人間界に入れぬようになっておる。じゃが数十年前、大地震が起きたせいで結界が緩んでしまい一人の邪悪な龍が人間界に入ってしまった。そいつがお前が倒した皇だ」

衝撃の事実である。

優神「皇は龍界での修行が嫌で逃げ出したやつじゃがその力は当時の優刀が仲間と力を合わせてようやく封印したくらいじゃ」

ちなみに当時の一刀の父である優刀の実力は今の一刀より断然上のくらいである。

優神「まぁ、あやつはデーヴァとの戦いを避けるために封印の道を選んだが戦っておれば優刀一人でも勝てたかもしれんがな」

優神「じゃが皇は封印されながらも時を待ち、大晦日の日にお前達がデーヴァを全滅させてしまったがゆえ皇は復活してしまった」

知らなかったとはいえ皇が復活した原因は一刀にも責任があるのだった。

優神「まぁ皇は一刀によって倒されようとしていたが奴は無理矢理仲間の手を借りて逃げたのはお前もわかっておろう」

一刀「あぁ、止めを刺そうとした瞬間急に消えたから覚えてるよ」

※９９話目参照

優神「恐らく奴は龍界へと連れていかれてしまったのだろう。そしてお前の力が龍界に伝わるきっかけとなり、やつらが攻めてきたのだ」

優神が言うと

一刀「待てよ!?優神爺ちゃんさっき龍界の上級の奴は結界があるから人間界には入れないって言ったじゃんか!?現れたあの二人は究極進化した俺でも倒せないやつなんだぜ!?そんなやつでも上級じゃないの!?」

一刀が聞くと

優神「確かに一刀の言う通り人間界に現れた二人の龍は確実に最上級レベル。結界があるから入れないはずじゃがどうも最近結界が緩んできておるのじゃ。そのため再び龍界から人間界に来る道に結界を張るつもりじゃがお前はどうする?結界を張り直したところでまた出てくる確率がないとも言えんぞ。ほっておけば人間界に恐怖がやって来るかもしれん!そうなれば力量はわからんがおそらく俺や優刀が本気でかかっても勝てぬかもしれん」

何故かというと龍界に張られた結界が解かれて龍が浸入した場合、結界という重荷が消えて龍がフルパワーになってしまう。

更に昔は最強と言われた優刀と優神も老いという人間には避けられないものには勝てないのだった。

一刀「そこまで言わなくてもわかってるよ爺ちゃん、攻められる前に攻めろって言いたいんだろ!俺が龍界に行って何とかしてみせる!」

一刀が言うと

優神「それでこそ俺の孫だ。だが今のお前は究極進化を使いこなしていない。龍界の結界を開いて一時的にお前を送り込むのは十日後、

それまでの間俺がバッチリ鍛えてやるから覚悟しておけ！」

一刀「おうっ！」

ホントは優刀と優神も龍界に行って一刀の力になりたいのだが龍界に入れるのは25歳までと決まっている。（龍界人は平気。それ以上が入ると時空崩壊の危険がある）

そして一刀が龍界の門に入ることを決意すると

？「俺は反対ですよ優神さん」

何処からか声が聞こえてきた。

優神「隠れてないで出てこないか一龍」

優神が言うと

スッ

赤目の黒い鎧を身に纏い、白いマントと龍の兜をつけた男が現れた。

優神「一刀、こやつは龍界の結界を自在に操ることができる聖龍騎士団の一人、黒騎士一龍だ」

一龍「フンッ！いくら優神さんの孫とはいえこんな俺より弱い奴を龍界なんかに連れていくのは反対だね。それに生真面目な紫龍さんも反対するに決まってる」

一龍が言うと

優神「紫龍には俺から言っておく。それに一龍よ、一刀はいずれお前をはるかに越える時が来るぞ」

一龍「優神さんも冗談がきつい、龍界の皇帝に敗れて力を失ったとはいえこんなやつに負けるほど俺は弱くありませんよ」

一龍が言うと

優神「なら一刀の力を試してみるか?制限時間は1時間、その時間内にお前に一撃でも傷を与えられたなら一刀を少しは認めてやれ!もし傷を与えなければ一刀を連れていくことは却下する。一刀もそれでいいな」

優神が一刀に聞くと

一刀「何だかわからないけどそいつが強いのは確かだ。一龍に勝てなければ龍界に行っても役たたずなのは分かった!受けてたつよ」

一刀が言うと

一龍「優神さん、後で連れていけと言っても聞きませんからね」

何故さっきから優神のことをさん付けしているかというと、聖龍騎士団には若い時の優刀も初代隊長として在籍していた。(その後、切刃と結婚して寿退団)つまり優刀の父である優神は聖龍騎士団にとって偉大な人物である。

そして舞台は修練場へ

優神「これより戦いを始める！負けた者は素直に従うこと、双方ともよいな！」

優神が言うと

一刀「分かった！」

一龍「いつでもいいぜ！」

優神「では両者構えて」

スッ

一龍「おい、ハンデとして超進化してから来いよ！今のままじゃ確実に俺が勝つからな」

一刀「それはありがとよ」

パァーッ！

そして一刀は超進化して聖騎士光龍になった。

優神「それでは始め！」

そして一刀と一龍の戦いが開始された。

１１１時間目「龍界と聖龍騎士団」（後書き）

一龍「一龍だ。優神さんも孫には甘いな、こんなやつの攻撃を避けるくらい俺には簡単すぎだぜ。だが以外とやるじゃねぇか！？次回、『いざ龍界へ！』お前には負けないぜ！」

１１２時間目「いざ龍界へ！」（前書き）

一刀「鬼龍と狐々が去ったあと、俺はあることを思い出して一人九州の爺ちゃん家に向かった。そして着いた先で優神爺ちゃんから龍界について聞かされた俺は龍界に行くことを決意するがそれを気にくわない聖龍騎士団の一龍と戦うことになったのだった」

112時間目「いざ龍界へ！」

一刀が龍界に行くことに納得のいかない聖龍騎士団の一龍は一刀に戦いを挑んできた。

制限時間は1時間、それまでに一刀が一龍に一撃でも与えなければ一刀が龍界に行くことを諦めなければならない。

優神「それでは始め！」

一刀の祖父である優神が審判をつとめるなか、試合が開始された。

一刀「ハァッ！」

シュンッ！

超進化した一刀は先手を決めようといきなり瞬間移動して決めようとするが

ガキンッ！！

一刀「なにっ！？」

その一撃は一龍に止められた。

一龍「これが瞬間移動だとは笑わせてくれる。これなら鈍間移動と名付けた方がいいぜ！」

ブォンッ！！

一刀「うおっ！？　」

一龍は剣に一刀を受けたまま投げ捨てた。

一龍「そもそもお前のような弱い奴が優刀さんの息子だってのが気にくわない　」

聖龍騎士団の隊長であった一刀の父・優刀を一龍は尊敬していた。

それはまだ学園対抗武道大会が始まる前の日のこと

一龍「優刀さん、聖龍騎士団はあなたがいなくてはいけません！寿退団だなんて言わず戻ってきてください！　」

一龍が優刀に聖龍騎士団に戻ってきてくれるよう頼んでいた。

優刀「確か一龍君って言ったよね。悪いけどもう僕に戦う気はないよ　」

一龍「そんなこと言わないでください！先輩達から聞きました。あなたのように強く優しき人は他にはいません俺はあなたを尊敬してるんです　」

一龍が聖龍騎士団に入団したのは三年ほど前である。（現在一龍は高二の１８歳）

一龍「お願いします！是非とも俺に修行をつけてください！　」

ガバッ！

一龍は必死に頭を下げるが

優刀「そんなに強くなりたいのなら君と年が近い僕の息子の一刀と戦って強くなるといい、一刀は僕より強くなるよ。それに一刀と戦えば何かわかるかもしれないしね」

ダッ！

そして優刀は一龍の前から去っていった。

一龍「（優刀さんはあぁ言っていたが俺はそうとは思えない！だがこいつと戦って勝ちさえすれば優刀さんは俺に修行をつけてくれるに違いない！）」

ジャキンッ！

そして一龍は剣を構える。（ちなみに今は二人とも鍛練用の木刀を使用）

一龍「でいやっ！！」

ブォンッ！！

一龍は剣を勢いよく降り下ろしてその衝撃で強風を巻き起こした。

一刀「うおっ！？」

ビュゴーッ！！

強風に飛ばされてなかなか思うように動けない一刀

一龍「今だ！」

その一瞬の隙を一龍は見逃さなかった。

シュンッ！

一龍は素早く一刀の懐に入ると

一龍「『龍の気の魂（ドラゴンズ・オブ・ソウル）』！」

ドゴゴーッ！！

必殺技を一刀に食らわした。

一刀「ごはっ！？」

そして技をもろに食らった一刀はぶっ飛んでいき

ドガガッ！！

壁を破壊して外に出てしまった。

一龍「どうした？まさか今のでくたばったんじゃないだろな？俺はまだ全力を出していないぜ」

一龍が言うと

ガバッ！

一刀「冗談じゃねぇぞ！」

瓦礫（がれき）の中から一刀が出てきた。

一刀「俺だって今まで死ぬ気の戦いを何度か繰り広げてきたんだ！こんなとこで負けるかよ！」

バシュンッ！

そして一刀は気合いを入れ直して究極進化した。

一龍「究極進化したからって偉そうにするなよ！お前の力はまだまだひよっこなんだよ！」

究極進化の力を十段階で表すなら、一刀の力は2である。

一刀「それくらいわかってるさ！だけど俺は龍界に行かなければいけないんだ！」

バシュンッ！

一刀は高速で一龍に迫っていく

一龍「なめるなよ！」

ザッ！

一刀を迎え撃つため構える一龍

だが

一刀「せいやっ！」

ドシュンッ！

とっさに一刀は地面めがけて攻撃すると

モワァーッ！！

物凄い煙が舞い上がった。

一龍「目眩ましのつもりかよ！こんなものがなんだ！」

バシュンッ！

バサーッ！！

だが一龍は煙を簡単に吹き飛ばしていった。

ところがだ！？

一龍「あいつの姿がいない！？」

土煙が晴れていくと一刀の姿が消えていた。

きょろきょろっ

辺りを探す一龍だが一刀の姿は見当たらない。

一龍「どこいったんだ？」

一龍が消えた一刀を探していると

ボコッ！

急に一龍の足元が崩れて

一刀「おりゃーっ！！」

そこから一刀が奇襲を仕掛けてきた。

一龍「なっ！？」

サッ…

一龍はとっさに避けようとするが

ザシュッ！！

一龍「！？」

一刀の木刀が一龍の頬をかすった。

その瞬間

優神「それまで！」

審判である優神が試合を止めた。

優神「一龍よ、時間は４９分じゃ。文句はないな」

ほんの少ししか時間が経っていない気がするが実はすごく時間が経っていた。

一龍「完敗です。まさか俺がこんなやつに一撃を食らってしまうなんて」

一龍が残念がっていると

一刀「いや、今のは運だ。俺もまさか当たるとは思ってなかったしな、それにしてもあんた強いなまた修行したら対戦しようぜ」

ニコッ

一刀が笑顔で返すと

一龍「（優刀さんが言っていた一刀と戦えば何かわかるかもしれないとはこの事だったのか。俺はしばらくの間、戦いは勝つことのみだと考えて楽しんでいなかったがこいつのように楽しむのもいいかもしれないな）」

一龍が一刀を認めた瞬間だった。

一刀「優神爺ちゃん、俺はまだまだ弱いから龍界に行くまでの間、修行をつけてくれ！」

一刀が優神に言うと

優神「よかろう。バッチリしごいてやるから覚悟しておくがよい。それと一龍、一刀だけでは心配だからお前も行け 」

優神が一龍に言うと

一龍「わかりました優神さん！ 」

元気よく返事を返す一龍だった。

そして月日が経つのは早く、龍界に出発する日

優神「一刀、お前は更に強くなった。だが慢心するなよ！龍界にはお前より強い奴がたくさんいるからな 」

一刀「わかってるよ優神爺ちゃん 」

優神「それと、これは俺からの餞別だ。受けとるがよい！ 」

パシッ！

優神は一刀に胴着を投げ渡した。

優神「それは我が一族に伝わる免許皆伝の証の胴着だ。簡単には破れないからな 」

一刀「ありがとう優神爺ちゃん 」

翠川優神　同じ一刀の祖父でも刃とは月とすっぽんの差がある。

一龍「一刀、いくぞ 」

一刀「あぁ、今いくぜ」

そして二人は旅立っていった。

結界のある竜神山

聖龍「ようこそいらっしゃいました。私は現聖龍騎士団隊長の聖龍です」

紫龍「私は聖龍騎士団の紫龍だ」

銃龍「同じく俺は銃龍」

鎧龍「俺は鎧龍」

紅龍「同じく紅龍」

白龍「俺は白龍」

美龍「私は美龍。よろしく頼む」

そこには聖龍騎士団のみんなが一刀を出迎えてくれた。

聖龍「話はすでに優神さんから聞いています。こちらにどうぞ」

そして案内された先は

ゴゴゴッ…！！

一刀「これが龍界と人間界をつなぐ門かよ!?予想外だぜ!?」

さすがの一刀も門の力が恐ろしいと感じていた。

一龍「そろそろ結界を一時的に解くが仲間に別れの挨拶はしなくていいのか?」

一龍が一刀に聞くと

一刀「みんなに言ったら絶対止められるから言わない方がいいんだよ」

と一刀が言うと

?「バ~カ、誰が止めると言った?」

!?

一刀は聞き覚えのある声を感じて声の聞こえたところを見てみると

バンッ!

蒼魔「よっ!」

一刀「蒼魔!?何でお前がここに!?」

蒼魔「俺だけじゃねぇよ」

スッ

そして蒼魔が指を指した先には

ジャンッ！

桃香達フランチェスカ学園の生徒と教師達（オリキャラ除く）

華佗、左慈、于吉、鳳賀、九龍、ついでに及川

ドラグーンナイツ（イワン除く）

飛琳先生　　そして…

孤狼「今回は俺も参加させてもらうぜ！」

孤狼も来ていた。

一刀「みんな!?なんで!?」

一刀が驚いていると

蒼魔「お前は水くさいんだよ！」

焔「貴様が龍界とやらに行くのなら俺も奴らに借りを返さなくては気がすまなくてな」

桃香「一刀くん、危険なのはわかってる。でも、そんな危ないところに一刀くんが行くなら私だっていくもん！」

ビリー「俺達ドラグーンナイツもいかなきゃな！」

飛琳「すまないね、事情を話したらみんなも行きたいと言ったからな。私も観察者として龍界に行くけどね」

みんな龍界にいく気満々である。

だが数名は欲望まみれで行く気だった。

及川「（龍界には狐龍ちゃんのようにかわいい娘が他におるかな？）」

麗羽「（龍界のお宝は全てわたくしがいただきますわよおーほっほっほっ！）」

しかし断れない一刀は

一刀「ありがとうみんな、一緒にいってくれるなんてな」

涙ぐむ一刀であった。

聖龍「それでは結界を開きます」

そして一龍を除く聖龍騎士団が結界の回りに並び立つと

聖龍・紫龍・銃龍・鎧龍・紅龍・白龍・美龍『結界解放！』

聖龍騎士団が言うと

ゴゴゴッ…！！

さっきまで張られていた物凄い結界が消えていった。

一刀「それじゃあ行くぜ！　」

全員『おぅっ！　』

スッ

そして一刀が龍界への第一歩を進もうとした時

璃々「璃々も行く～♪　」

ダッ！

紫苑「璃々！？　」

紫苑と手を繋いでいた璃々ちゃんが一刀の方に走っていき

コテンッ！

璃々「あ～！？　」

スッ

転んだ拍子に門の中に入ってしまった。

一刀「ヤバい！？璃々ちゃん！？　」

スッ！

そして璃々の後から門に入り込む一刀だった。

112時間目「いざ龍界へ！」（後書き）

桃香「桃香です。龍界か～、かわいい龍がいるのかな?でも着いた先はグリーンランドっていうまるで焼け野原のよう、そんなとき偶然出会った龍族の親子と友達になった私達。だけども…次回、『第一の国グリーンランド』龍界っていうからやっぱり龍がたくさんいるね」

１１３時間目「第一の国グリーンランド」（前書き）

一刀「龍界に行くため俺は一龍と戦うことになった。一龍の強さは超進化した俺をはるかにしのぐ力であり究極進化しても敵わないくらいだったが隙をついて攻撃し俺は龍界に行く権利を得た。そして数日が経ち俺が龍界に行くために門がある場所に行くとそこには桃香達や蒼魔達がいた。そして仕方なく俺はみんなを龍界に連れていくのだった　」

１１３時間目「第一の国グリーンランド」

一刀「璃々ちゃん！？」

スッ！

龍界に通じる門に入ってしまった璃々の後を追って門に入る一刀。

桃香「一刀くん！？」

蒼魔「俺達もいくぜ！？」

ススススッ！

そして後を追うように入り込む仲間達

飛琳「それでは行ってくるぜ！」

貂蝉「みなさん、教師として頼んだわよん♪」

卑弥呼「年齢制限があるのではわしらは入れんからのう」

龍界に入るには年齢制限があるため貂蝉と卑弥呼は残ることになった。（それならば紫苑、桔梗、祭先生は…）

ドグボッ！！

紫苑「さっさと行きましょうか」

桔梗「久々に暴れてやるか！」

祭「腕がなるわい！」

ススススッ！

冥琳「まったく、我々は喧嘩しに行くわけではないのに」

雪蓮「いいんじゃないの！それより私達も行くわよ！」

ススススッ！

そして向かう全員が入った後

聖龍・紫龍・銃龍・鎧龍・紅龍・白龍・美龍『結界・封！』

ゴゴゴッ…！！

再び門に結界が張られた。

貂蝉「頼むわよんみんな」

そして龍界に行ったみんなはというと

龍界

及川「まさか驚いたわ～、龍界に入った思たら着いた先がいきなり…」

龍界に入った途端、着いた先は

ヒューンッ！！

及川「はるか上空なんてあんまりや～！」

現在、一刀達は空から落下していた。

一刀「大丈夫か璃々ちゃん！？」

璃々「お兄ちゃん！」

ギュッ！

璃々は一刀に抱かれていた。

もちろんパラシュート類なんて持ってきているはずがない

一刀「仕方ない！ドラグーンナイツは超進化してみんなを抱えて空を飛ぶんだ！」

ドラグーンナイツ『わかったよ！超進化！』

パァーッ！

一斉に超進化するドラグーンナイツと飛琳先生

※超進化すると飛行能力が追加されるのだ。

一刀「それじゃあいくぜ！」

ところがだ…

ズッシリ！

一刀「何で俺に集まるの！？　」

一刀に群がるのは当然のごとく一刀大好きっ娘のみんな

桃香「だって一刀くんなら安心だし　」

華琳「あら、私を助けないっていうの？　」

蓮華「私は一刀の一番近くにいたからな　」

月「へぅ～、お願いします　」

天和「どうでもいいじゃん♪　」

凪「重くないですか？　」

璃々「お兄ちゃん！　」

まだ空を飛ぶことができない人はよかったが

恋「…恋も　」

雫「じゃあ雫ちゃんもなの～♪　」

超進化して空を飛ぶことができるはずの恋と雫も一刀に抱きついていた。

一刀「ぐおっ！？」

いくら一刀でも十人も抱けるわけがない。どんどん降下していく

さらに重量オーバーなのか他のみんなも落ちていった。

左慈「このままじゃ墜落しちまう！？于吉、札を使え！」

左慈が言うと

于吉「左慈の指示ならば」

スッ

于吉は懐から数枚の札を取り出した。

于吉「軟化の札！」

シュシュシュッ！

そして于吉は札を地面に投げると

ぽよんっ♪

いきなり地面が柔らかくなった。

ボインッ！ボインッ！

そして地面に着地するみんな

及川「ウッキー（于吉）こんなことできるなんてすごいやん！？」

于吉「普段はあまり使いませんけどね」

及川が于吉を誉めていると

一刀「ここが龍界か」

バァーンッ！

着いた先は広大な大地

華琳「空気は人間界より美味しいわね」

真桜「せっかくやし、着いた記念にみんなで写真とろか～♪」

スッ

真桜はデジカメを取り出すが

真桜「あれっ？おかしな壊れとるで！？」

デジカメは壊れていた。

一龍「この龍界では特殊電波が流れているから人間界の電子機器（デジカメやケータイ）は使えないぞ。そんなことよりここは緑あふれるグリーンランドのはずだが全然緑がないな」

回りはどうも焼け野原のようだった。

焔「何だよお前龍界の案内人のくせに知らないのかよ」

一龍「誰が案内人だ！＃」

そしてみんなが騒いでいると

凪「あれっ？」

沙和「凪ちゃんどうしたの？」

凪「何かがこちらに向かってくる」

気を感知できる凪は気配を読むことも可能なのだ。

一龍「ヤバいな巻き込まれたら龍界の奴らに俺達が来たことがバレちまうぜ！？」

一龍が困ると

左慈「于吉、隠蔽（いんぺい）の札を使うんだ」

于吉「了解ですよ左慈」

スッ

于吉は懐から札を出すと

于吉「隠蔽の札！」

パッ！

一刀達の体が急に見えなくなった。

及川「ウッキーすごいやん！今度一緒に更衣室覗きに行こうやないか♪」

于吉「興味ありません。それにこの術は声まで消せませんから静かにしてください！」

一刀「于吉って案外すごいやつなんだな！？」

華佗「学園対抗武道大会に出なかったのが不思議だぜ！？」

みんなも于吉のすごさに驚いていると

凪「静かにしてください！そろそろ来ます！」

シーンっ

凪の指示で普段口うるさい麗羽も黙り全員が静かになる。

そしてやって来たのは

ブルンブルンッ！！

妙なバイクのようなものに乗った龍人であった。

龍人「おかしいな、確かにこの辺で強い気が発生したと聞いたんだがな」

龍人「通信計測部の間違いだろう。それよりも早く村に行って村龍から食料と金を奪わなければ！」

ブルンブルンッ！！

そして龍人達は去っていった。

龍人達が立ち去った後

于吉「解！」

パッ！

于吉は術を解いた。

及川「何やねんあいつらは！？まるでボウケンジャーに出てくるジャリュウ一族やんけ！？特撮スタジオにでも入ったんとちゃう！？」

華佗「そんなわけないだろ！」

桃香「誰なのあの人（？）達」

桃香が聞いてくると

一龍「確かあいつらは火龍軍の奴らだ。戦闘力はだいたいプロレスラーが三人がかりでようやく倒せるほどの実力だ」

一龍が言うと

一刀「とりあえずあいつらを追ってみようぜ。何かわかるかもしれないしな」

ダダダッ！

とりあえず気付かれないよう後をつける一刀達

そして着いた先は村であった。

華琳「何か言ってるようだけどここからじゃ遠くて聞こえないわね」

蓮華「こういう時こそ明命、あなたの出番よ！」

明命「わかりました！」

１年Ａ組　周泰明命。猫が大好きな彼女は隠密であり読唇術（唇の動きで何を話しているかわかる術）が得意であった。

さっそく読唇術で会話を聞いてみる明命

龍人「お前ら！さっさと金と食い物を寄越しやがれ！」

龍人「この世界が平和なのはカイザー軍の一員である七天皇将軍の一人火龍様のおかげだろうがよ！」

ざわざわっ

龍人の暴力に怯えまくる村龍達

ところが

？「何が火龍様のおかげだよ！」

朱里くらいの背丈で黄緑色の体と青目で赤い翼を生やした小さな龍が龍人に抗議していた。

村龍「やめなさい小龍（コドラ）！龍人に逆らったらどんな目に遭わされるか！？」

村龍が止めようとするが小龍は

小龍「嫌だい！みんなはお前達が怖いから言えないけど僕は言ってやる！火龍がこの世界をおさめた途端、緑豊かだったこの世界を焼け野原の『フレイムランド』に変えやがって！こんなことする奴を誰が認めるものか！」

小龍が言いたいことを言い終えると

龍人「このガキーッ！！＃将軍侮辱罪で死刑にしてやるぜ！＃」

ジャキンッ！！

龍人は剣を構える。

それを遠くから見ていた一刀達は

桃香「大変だよ！？あの子を助けないと！？」

バッ！

桃香が飛び出そうとするが

一龍「待て！あれが龍界では普通なんだよ！逆らえば自分が殺られる偉い人には逆らえない。それが龍界の掟だ。それに今出ていってもし見つかったら…」

一龍が言うと

月「あの～、一刀さんと蒼魔さんの姿が見えないんですけど」

いつの間にか一刀と蒼魔がいなくなっていた。

その二人はというと

龍人「死にやがれくそガキがーっ！！」

ブォンッ！！

小龍「！？」

龍人の降り下ろした剣が小龍に当たりそうになったその時！

ぽんっ！

？「おいっ」

龍人「何だよ！＃」

くるっ

急に肩を叩かれた龍人が叩かれた方を向いた瞬間

ドグボッ！！　　ドサッ！

龍人はいきなり殴られてぶっ飛ばされた。

龍人「貴様らは何もんだよ！？」

味方を殴られた龍人が殴った人を見ると

一刀「正義の味方その１参上！」

蒼魔「同じくその２参上だ！」

バンッ！

そこには一刀と蒼魔がいた。

一龍「あの馬鹿どもが！？」

鳳賀「まぁあれが二人のいいとこでもあるけどな」

九龍「困っている人（？）見過ごせない！」

ダダッ！

そして鳳賀と九龍も一刀と蒼魔の元に向かう。

孤狼「待ちやがれ！俺の分も残しとけよ！」

焔「ここで修行の成果を見せるのも悪くないな！」

バババッ！

そして次々と駆けていくみんな

一龍「あーもうっ！どうなっても知らないからな！」

そして一龍も駆け出していった。

その頃、別世界にある皇龍の城・皇帝神魔城では

皇龍「鬼龍に狐龍よ、人間界はどうであった？」

龍界皇帝皇龍が人間界に出向いていた鬼龍と狐龍から話を聞いていた。

狐々「…普通」

鬼龍「兄上、多少強い奴はいましたが我々の敵ではありません。皇を倒した北郷一刀という人間も対したことありませんでしたよ」

皇龍「ほう、そうか」

皇龍が返事を返すと

ビーッビーッ！

突然城に連絡が入った。

皇龍「この信号は火龍のフレイムランドからか、鬼龍回線を繋いでくれ」

鬼龍「わかりました兄上！」

パチッ！

鬼龍は城とフレイムランドの回線を繋いだ。

火龍「皇帝陛下、こちらフレイムランドの火龍です」

皇龍「わざわざこの私を呼ぶだなんて何の用だ？」

皇龍が聞くと

火龍「実は部下が人間に苦戦しているという情報が流れましたので映像を見てみましたら陛下が興味を持つ人物がいましてね」

皇龍「誰だ？」

皇龍が聞くと画像が送られてきた。

火龍「皇を倒した北郷一刀という男です。いかがなさいます？」

報告を聞いた皇龍は画像を見つめると

皇龍「鬼龍、七天皇将軍全員に伝えろ！北郷一刀ならびに仲間全員を殺したものには望みを叶えてやるとな」

鬼龍「御意！」

皇龍「北郷め、まさか龍界に乗り込んでくるとはな、だが貴様は私が殺してやるぜ！」

早くも皇龍のターゲットにされた一刀達だった。

１１３時間目「第一の国グリーンランド」（後書き）

蒼魔「蒼魔だ。龍人をやっつけていたら奴らの親玉が現れて俺らと戦うことになった。だが数で攻めるのは嫌なので分かれて戦うことになり見事その一人に俺が選ばれたのだった。次回、『炎と氷の激突』俺はもう二度と炎には負けないぜ！」

１１４時間目「炎と氷の激突」（前書き）

一刀「龍界に入ってしまった璃々ちゃんの後を追って龍界に突入した俺達。だが着いた先は遥か彼方の上空に出てしまいこの高さから落下したら確実に死んでしまうが于吉の手によりそれは免れる。その後、龍人を見つけた俺達は後を追うと村に着き、龍人が村龍を傷つけようとしているのを見た俺と蒼魔は我慢できずに龍人達と戦ってしまうのだった」

１１４時間目「炎と氷の激突」

火龍が皇龍に連絡する前、一刀達は龍人と戦いを繰り広げていた。

一龍「（おいおいマジかよ!?）」

一龍は驚いていた。何故なら龍人の戦闘力はだいたいプロレスラー三人がかりでようやく倒せるというものである。そういう相手を

一刀「おらっ！」

蒼魔「そらよっ！」

一刀達はたいして苦戦もせずに倒していた。（しかも超進化すらしていない）

それどころか

愛紗「ハァーッ！」

ズバッ！

春蘭「だりゃーっ！」

ズバッ！

一刀達だけでなくフランチェスカの生徒達も龍人を倒していた。

みんなだって一刀が九州に行っている間、常日頃から鍛練を繰り返

し、その結果現在の実力は一刀と初めて出会った時より大幅に変化していた。

ところが

及川「くらえっ！『及川スペシャルサンダーストームナックル』！」

麗羽「わたくしの一撃を食らいなさい！」

ブォンッ！！

二人も龍人に攻撃を仕掛けるが

パシッ！

及川・麗羽『えっ！？』

二人の攻撃は簡単に受け止められてしまい

龍人「こいつら弱いぞ！やっちまえ！」

ドカカッ！

及川「ぎゃーっ！？」

麗羽「このわたくしをボコボコにするなんて後で覚えておきなさい！＃」

軍師達とこの二人は龍人には勝てなかった。

美羽「七乃～、いつまで隠れてればいいのじゃ？」

七乃「お嬢様、戦いは野蛮な人達に任せればいいんですよ。私達はこうして岩になって隠れればいいんですからね～♪」

1年B組　袁術美羽。麗羽のいとこで蜂蜜好き

1年A組　張勲七乃。美羽の世話係でその忠誠心は本来なら桃香達と同じ2年のはずだが留年してまで美羽と一緒の学年になるほど

この場合この二人の方があっているのかもしれない。

そしてあらかた龍人が倒された時

龍人「こいつら何て強さだよ！？人間ってのは俺達龍人より弱いんじゃないのか！？」

一刀達は例外である。

龍人「中でもあいつは怖いよ！？」

じっ

龍人達は孤狼を見つめる。

孤狼「おらおらっ！どうしたんだよ売られた喧嘩は買うのが普通だろうが！」

龍人「ぎゃーっ！？」

孤狼はいとも簡単に龍人をボコボコにしていた。

龍人「もうダメだ！？こんな奴らに勝てるわけねぇよ！」

龍人「逃げるが勝ちだ！」

ダダッ！

残った龍人達は逃げようとするが

ゴゴゴッ…！！

ピタッ！

何かの気配を感じて立ち止まる龍人達

龍人「この気はまさか！？」

そしてそこに現れたのは…

バァーンッ！！

赤い姿で金色の瞳をし、翼を生やした巨大で純粋な龍。七天皇将軍の一人である烈焔の火龍であった。

ビビンッ！

一刀「（あいつからものすごい気を感じるな）」

一刀は気の強さで相手の力量が分かるのだ。

龍人「あの…火龍様どうしましたか！？」

火龍「貴様らが人間相手にふがいないからわざわざ俺が来たんだ。それにしても…」

ガシッ！

龍人「ぐえっ！？」

火龍は目の前にいた龍人の頭をつかんで持ち上げると

火龍「貴様、俺の軍のくせに逃げるとは恥さらしめ」

めききっ！

龍人「お…お許しを！？」

火龍の頭をつかむ力がどんどん強くなっていき龍人が許してもらうよう頼むが…

火龍「俺は戦場で逃げ出す奴はいらないんだよ」

ボォッ！！

火龍が言うといきなり火龍の腕から炎が出てきて掴んでいた龍人を焼きつくす

ばらっ

掴まれていた龍人はあっという間に消し炭と化した。

蓮華「ひどい！？　」

華琳「仲間をなんだと思ってるの！？　」

火龍の虐殺行為にほとんどが恐怖を感じる。

火龍「さてと　」

くるっ

そして火龍は一刀達のいる方を向くと

火龍「貴様ら意外と強いな。我が軍に欲しいくらいだ　」

火龍が言うと

一刀「誰がお前なんかの軍に入るかよ！　」

蒼魔「一刀の言う通りだ。お前の軍には死んでも入らん！　」

かっこよく言う一刀達に対し、

及川「時給いくらですか？　　」

簡単に裏切ろうとする及川だが

火龍「貴様はいらん　」

すぐに断られるのだった。

一刀「そんなことよりはっきり言いやがれ！何しに来やがった！　」

一刀が聞くと

火龍「決まってるだろうがお前達と戦いに来たんだよ！　」

スッ

そして構えをとる火龍

一刀「上等だ！修行の成果を見せてやるぜ！　」

バッ！

一刀も構えをとるが

蒼魔「待て一刀、こいつは俺にやらせろ！　」

孤狼「いいや、俺が相手になるぜ！　」

焔「炎使いなら俺の出番だろが！　」

次々とみんなが出ようとする。

火龍「仕方ない。龍界の掟に従い、ドラゴンライトで決めようじゃないか　」

一刀達『ドラゴンライト？』

一刀達が何なのかを聞くと

火龍「お前達の中からランダムに出場者五人が選ばれる。そっちは俺を倒せば勝ちだが、俺は五人を倒せば勝ちというわけだ。貴様らの方がいい条件だろう」

火龍が言うと

及川「何言うてんねん！こっちは五十人以上もいるんやで数減らされてたまるかいな、なぁかずピー！」

しかし一刀の答えは

一刀「いいだろう。受けてたつぜ！」

提案をのる答えだった。

及川「何でやねん！こっちは五十人以上もいるんやで圧倒的に勝利やんけ！」

及川は最後まで言うが

蒼魔「お前わかってるのか？五十人以上いるといっても戦えないやつ（軍師達や及川、麗羽、璃々）がいるんだぞ！それにそんな卑怯な手は使いたくない」

確かに正義の味方が五十人がかりで一人の敵に挑むのは卑怯である。

及川「卑怯もらっきょうもあるかいな！多人数で攻めた方がいいと思う人手をあげて！」

バッ！

及川は元気よく手をあげるが

ガラーンッ

他には誰も手をあげてなく、手をあげていたのは及川だけだった。

ちなみに理由は

桃香「大勢でかかるのは卑怯だよ」

正論派

孤狼「増えたら俺が戦う場がなくなる！」

武道派

麗羽「このわたくしがブ男さんに賛同するはずないでしょう」

及川を嫌う派に分かれていた。

火龍「どうやら話はまとまったようだな。言っておくがライトで誰が選ばれるかは俺にもわからんぞ」

一刀「御託はいいからさっさと始めやがれ！」

火龍「威勢がいいようだな。ではライトスタート！」

パチンッ！

火龍が指を弾くと

パパパッ！

五つのライトが転々とみんなを照らしていく。

火龍「ストップ！」

ピタッ！

そして選ばれたメンバーは

バンッ！

蒼魔、鳳賀、九龍、猪々子、稟の五人であった。

蒼魔「よっしゃ！いくぜ」

鳳賀「三人揃って戦うのは久しぶりだな」

九龍「俺、たくさん暴れる！」

猪々子「何であたいなんだ？」

稟「この話が１１４話目だから１１４（猪々子）で考えた西森の都合でしょう」

何のことだかわからない！？

火龍「それではメンバーが決まったところでさっさと戦うとしよう。言っておくが他の奴が参戦した場合」

ガシッ！

龍人「へっ！？」

火龍は近くにいた龍人の頭をつかむと

ポイッ！

戦いの場であるフィールドに投げ捨てた。すると…

ビリリーッ！！

龍人「ぎゃーっ！？」

プスンッ！

火龍「このように高圧電流より強い電流が流れて入ったものはもちろん、中にいる仲間にも危害が加えられるのさ」

火龍が言うと

蒼魔「またお前は仲間を粗末に扱いやがってぶっ殺してやるぜ！＃
」

ゴォーッ！！

火龍の残忍さに再び蒼魔がキレる。

一刀「蒼魔、無茶するなよ　」

一刀が蒼魔を心配すると

蒼魔「一刀、一つ言っておくぜ。究極になれるのはお前だけだと思うなよ！　」

一刀「えっ！？　」

その言葉に一刀は驚いた。

そして出場者がフィールドに立ち並ぶ

鳳賀「九龍、暴れようぜ！　」

九龍「俺、たくさん暴れる！　」

猪々子「まぁ選ばれちまったから仕方ねえよな　」

稟「何故私は選ばれたのでしょう？　」

蒼魔「（絶対にこいつを倒す！）　」

闘志が燃え上がるメンバー達。そして今、戦いが始まる。

１１４時間目「炎と氷の激突」（後書き）

鳳賀「鳳賀だ　」

九龍「九龍だ！　」

鳳賀「ついに始まった火龍との戦い、だが七天皇将軍の実力は俺達の予想を超えていて危機に陥ってしまう　」

九龍「だけどその時、蒼魔が新たなる力を解放した　」

鳳賀・九龍『次回、『究極の友情』

１１５時間目「究極の友情」（前書き）

一刀「龍界にて龍人相手に暴れまくる俺達。逃げ出す龍人が出てくるなか現れたのは七天皇将軍の一人である烈焔の火龍であった。火龍の逃げ出す部下を容赦なく焼き殺す態度に俺達は腹を立て、戦うことを決意した。そして龍界に伝わる選手選びドラゴンライトにて蒼魔・鳳賀・九龍・猪々子・稟が選ばれたのだった」

１１５時間目「究極の友情」

火龍と蒼魔達五人（蒼魔・鳳賀・九龍・猪々子・稟）による戦いが繰り広げられようとしていた。

一刀「負けるなよ蒼魔！」

及川「せやかてかずピー、相手は龍やで普通に勝てるわけないし別に負けたってどうにも…」

火龍「いい忘れていたがもしこいつらが負けた場合、貴様ら全員殺してやるから覚悟しておけ」

火龍が言った直後

及川「蒼魔！絶対勝ちやー！」

応援にやる気のでる及川だった。

蒼魔「及川なんかに言われなくてもわかってるっての！大丈夫だぜ一刀、俺の実力はお前が一番よくわかっているだろ」

中学時代　蒼魔の実力は一刀の次に強かった。（孤狼〉一刀〉蒼魔の順）

一刀「そうだったな。頼むぜ蒼魔！」

蒼魔「おうっ！」

ガツンッ！

二人は拳を合わせる。

鳳賀「おいおい、出るのは蒼魔だけじゃないんだぜ」

九龍「俺達も出る！」

そこに鳳賀と九龍がやって来ると

一刀「そうだったな。二人も頼むぜ！」

鳳賀「何だかおまけのような感じだが」

九龍「気にしない！」

ガツガツンッ！

二人も一刀と拳を合わせた。

一方、他では

麗羽「猪々子、わたくしの恥さらしにならないようにしなさい！」

斗詩「文ちゃん、死なないでね！」

猪々子「斗詩…、この戦いが終わってアタイが生きてたら結婚し…」

斗詩「それはダメ！」

言おうとした瞬間拒否られる猪々子だった。

華琳「稟、この戦いであなたが活躍したら私からあなたにご褒美をあげるわ」

稟「ご褒美というと…ブハッ！」

妄想していきなり鼻血を噴き出す稟

風「おやおや～、いきなり大量出血で大丈夫ですかね～？とんとんしますよ～」

倒れた稟を風が介抱するのであった。

桂花「ホントにこの戦いに私達の命が関係しているなら何だか全身精液変態男達以外のメンバーに不安を感じるわ！？」

男嫌いな桂花は蒼魔達ですら変態呼ばわりするのだった。

火龍「それではそろそろ戦いを始めようとするか！」

スッ

火龍が戦場の真ん中に立つと

火龍「バリアウェブ、スイッチオン！」

パチンッ！

火龍が指を弾くと

ウィーンッ！

何処からか謎のアンテナ型の機械が出現し、

パァーッ！

機械から何かが放出され

ウィーンッ！

戦場の直径一キロにバリアのようなものが広がっていった。

及川「何やねんこれ？」

そろ～っ

及川が触れようとすると

一刀「バカ！触るんじゃねぇよ！触ったら一瞬で黒こげだぞ！？」

及川「ひぃっ！？」

サッ！

それを思い出して慌てて手を引っ込める及川だった。

火龍「ではゴングを鳴らせ！」

火龍が龍人に言うと

ゴォーンッ！

ゴングの音が鳴り響いた。

蒼魔「いくぜ鳳賀！九龍！　」

鳳賀・九龍『おうっ！』

パァーッ！　サッ！

ゴングが鳴った瞬間、蒼魔は超進化し、鳳賀と九龍は火龍に向かっていった。

鳳賀「『電撃砲撃（プラズマショット）』！　」

九龍「『巨大炎（ギガフレイム）』！　」

ビリリッ！　ゴォッ！

二人は必殺技を火龍に食らわそうとする。だが

火龍「この程度とはな　」

パシンッ！

火龍は片手で技を弾いた。

鳳賀「それも計算のうちさ！　」

九龍「俺達のほんとの狙いは…」

シュバッ！

そして二人が火龍から離れると

キィーンッ！！

氷の刃と化した蒼魔が突っ込んできた。

蒼魔「『最終龍撃牙（ファイナルブレイク）』！」

ドカッ！！

三人の考え通りに技は火龍を直撃！だが…

火龍「今、何をしたんだ？」

技を食らった火龍は無傷だった。

蒼魔「バカな！？」

鳳賀「蒼魔の最強技を食らっても平気だなんて！？」

九龍「タフにもほどがある！？」

ちなみに蒼魔の一撃は普通ならばダイヤすらも貫く破壊力である。

ガシッ！

火龍はぶつかってきた蒼魔をつかむと

火龍「己の無力を呪うがいい！」

ゴォッ！！

いきなり火龍の手から炎が噴き出してきた。

蒼魔「ぐわーっ！？」

氷の使い手である蒼魔に炎は大ダメージである。

鳳賀「蒼魔！？」

九龍「この野郎！」

バッ！

二人は蒼魔を助けるため飛び出すが

火龍「雑魚は消えろ！」

ゴォーッ！

鳳賀・九龍『ぐわーっ！？』

もう片方の手から火炎放射が噴き出して鳳賀達を襲う！

蒼魔「鳳賀、九龍！？」

火龍「人のことより自分を心配するんだな」

ゴォーッ！

蒼魔「ぐわーっ！？」

蒼魔に食らわせる炎がますます強くなっていく

それを見た村龍達は

村龍「やはり七天皇将軍に逆らうなんて馬鹿げてるんだ」

村龍「皇帝には逆らわない方がいい」

すでに諦めムードであった。

小龍「（やはりダメなの、力のないものは強いやつには勝てないの）」

さすがの小龍も諦めていると

一刀「まだだ！まだ終わってない！」

一刀だけは諦めていなかった。

及川「せやかてかずピー！あんな炎食らったらいくら蒼魔でもヤバイで！？」

及川が言うと

一刀「焔、同じ炎の使い手として火龍はどうだ？」

一刀が焔に聞くと

焔「つまらねぇこと聞くんじゃねえ。あんなちんけな炎なら俺があいつ（蒼魔）と戦った時の炎の方が強いぜ！」

飛琳「確かに、焔を鍛えた俺から見てもあんなのは炎とはいえないな」

炎の使い手である二人が言うのだから間違いないのだろう。

一刀「蒼魔！苦しがる真似はそこまでにしておけ！」

一刀が言うと

火龍「何言っているんだ？こいつはもう虫の息…」

ところがだ！

蒼魔「それはどうかな」

炎の中から燃やされながらも蒼魔が話しかけてきた。

蒼魔「確かにお前の強さが強いのは認めてやるよ。前の俺（デーヴァ戦時）だったらとっくにお陀仏だったろうさ。だけどな…」

モワ～ッ

蒼魔が話しかけている間に火龍の回りが煙におおわれた。

火龍「これはまさか水蒸気か！？」

水蒸気とは知っての通り水が高熱により気体となったものである。そして氷が溶けたら水になる。蒼魔は自分の冷気を水に変えて水蒸気を作り出していたのだ。

蒼魔「悪いが俺は普段なら武官だが頭も切れる方でな。あんたの足元をよく見てみな」

火龍「なにっ！？」

火龍が足元を見ると

びしゃっ！

氷が溶けていつの間にか足元には水溜まりができていた。

蒼魔「水蒸気はお前の目を誤魔化すためだよ」

コォーッ！！

蒼魔は右手一本に冷気を溜め込むと

蒼魔「『氷塊針（ツンドラニードル）』！」

パキパキンッ！！

火龍の足元にある水溜まりを一瞬のうちに凍らせて針山にし、

ブシュシュッ！！

火龍の足を貫いた。

火龍「がはっ！？」

パッ

足が貫かれる痛さにたまらず火龍はつかんでいた蒼魔を離す。

シュンッ！

その隙に蒼魔は火龍から逃げ出した。

火龍「おのれ！たかが下等生物の分際で龍族に逆らうとはもう容赦せんぞ！＃」

今の蒼魔の一撃で火龍は完全にキレてしまった。

蒼魔「こうなったら仕方がねぇ！最後の方で使うつもりだったが！」

ビュゴーッ！！

桃香「寒っ！？」

及川「この寒さは何やねん！？」

辺り一面が謎の冷気でおおわれていた。

その実態は

一刀「（この冷気、もしかして蒼魔のやつ究極の力を!?）」

辺りを漂う冷気の正体は蒼魔の究極進化の影響であった。

そして…

蒼魔「氷龍よ!俺に力をくれ!究極進化」

パァーッ!!

パキパキンッ!!

蒼魔の体が氷山の一角のように凍りつくと

パカーンッ!

氷の中から全身が蒼く、金色の鎧と武器を装備し、背中には巨大なサイボーグの翼を生やし、蒼い龍の兜をかぶった蒼魔が現れた。

蒼魔「これが俺の究極進化、究極武装氷龍だ!」

バァンッ!!

火龍「究極進化がどうしたというのだ!」

スゥ〜ッ!

火龍は大きく息を吸うと

火龍「『ドラゴンブレスファイヤー』！」

ゴォーッ！！

口から強力な炎を吹き出した。

焔「あの炎、俺の『日輪の龍の息吹（ドラゴンブレスアポロ）』に似てやがる！？」

そして蒼魔は

蒼魔「究極進化の試運転にはちょうどいい技だな」

ジャキンッ！！

蒼魔は右腕につけられた龍の形をした銃『究極龍王銃』を構えると

ポゥッ…

力をため始めた。

九龍「蒼魔、俺達の気も分けてやる！」

鳳賀「猪々子と稟も活躍したいなら蒼魔に手をあてな！それだけで気を送れるからよ！」

猪々子「何だかわからないけど…」

稟「やるしかありませんね！」

スッスッスッスッ！

そして鳳賀・九龍・猪々子・稟が蒼魔に手を当てると

ポポポッ！！

蒼魔「パワー満タン！ターゲットロック！」

ジャキンッ！

蒼魔は銃の狙いを火龍にさだめると

蒼魔「『アルティメットランチャー』！」

ズドゴォーーッ！！

銃からものすごい一撃が放出され、

ザシュンッ！！

火龍「なっ！？」

火龍のドラゴンブレスファイヤーを撃ち破り！

ズドゴォーッ！！

バキンッ！

火龍の体を直撃し貫いた。

この直後！

火龍「この私が人間ごときに負けるなんて！？」

ドカーンッ！！

火龍の体は爆発を起こした。

１１５時間目「究極の友情」（後書き）

風「風ちゃんですよ～。火龍を倒した我々は次の世界に行くことになったのですよ。そこは空一面が夜のように暗くて思わず風も…ＺＺＺ～」

宝ケイ「嬢ちゃんが寝たから俺が言うぜ！次回、『眠りの国ナイトメアランド』！」

風「宝ケイ！風のセリフを言っちゃダメですよ～！」

１１６時間目「眠りの国ナイトメアランド」（前書き）

一刀「とうとう蒼魔達と火龍の戦いが始まった。蒼魔・鳳賀・九龍はコンビネーションのとれた行動で火龍を攻める！だが火龍には全く効かず逆に窮地にたたされてしまう。だが蒼魔はわざと敵の技を食らい、隙をみて脱出する。そして蒼魔は新たなる力、究極進化をして仲間達から力をもらい火龍を打ち砕くのだった」

116時間目「眠りの国ナイトメアランド」

火龍「まさかこの七天皇将軍の一人であるこの俺が負けるなんて！？あり得ないのだー！」

ドッカーンッ！！

そして火龍は爆発していった。

ウィーンッ！

そしてバリアウェブが解かれると

一刀「大丈夫か！？」

ダダッ！

蒼魔達に駆け寄る一刀達

蒼魔「一刀、しかしまぁあと少しあの炎を食らっていたらヤバかったぜ」

一刀「お前はいつも無茶しすぎなんだよ」

一刀にだけは言われたくないセリフである。

麗羽「猪々子、あなたは結局何をしていましたの！＃」

猪々子「えーっと、手を出した？」

猪々子が言った瞬間

ギューッ！＃

猪々子「いはいれふよへいはしゃま！？（訳：痛いですよ麗羽様！？）」

麗羽に頬を引っ張られる猪々子だった。

稟「すみません華琳様、なんの活躍もできず…」

稟が華琳に謝ると

華琳「まぁ軍師にしてはよくできた方だし、帰ったら閨（ねや）に来なさい♪」

稟「華琳様と閨／／／…ブフーッ！！」

ブバッ！！

華琳との閨を妄想して勢いよく鼻血を噴き出す稟

みんなが蒼魔達の勝利を喜んでいると

龍人「ふざけるんじゃねぇ！＃」

龍人達がいきなり騒ぎ出した。

龍人「こんな勝負なんて無効だ！ここにいる奴ら全員血祭りにあげ

てやるぜ！＃」

龍人が言うが

及川「あんたアホちゃうか？これだけの精鋭揃いに勝てるちゅうんかいな？」

一刀を含めたフランチェスカのみんな（総勢５０人以上）の実力は武官ならば龍人を軽く越える実力を持っているのだ。

だが龍人達は

龍人「んなことわかってるんだよ！」

ガシッ！

村龍「ひっ！？」

龍人は村龍に剣を突きつける。

龍人「お前達が一歩でもこっちに来たらこいつの命はないぞ！」

龍人達は村龍を人質にしているのだ。

及川「なぁみんな、あいつは赤の他人なんやから別に動いても…」

及川が言うと

じと～っ

５０人以上の瞳から及川に対して軽蔑の眼差しが向けられた。

及川「じょ…冗談やんか！？んな目でワイを見つめやんといてや！？」

冗談にも限度があった。

龍人「動くんじゃねぇぞ！」

こうしている間にも龍人が村龍に剣を向ける。

だがそんなとき

ボカンッ！☆ミ

龍人「いてっ！？」

いきなり龍人は後ろから殴られた。

龍人「誰だ！」

他の龍人達が殴った人物を探す。するとそこには

ズラリッ！

木の棒を持った村龍達がいた。

村龍「俺達はもうあんたらなんかにはビビらない！」

村龍「人間だって七天皇将軍に勝つくらいなんだから俺達だって龍

人くらい倒さなくちゃな！」

先の蒼魔の戦いで村龍達は勇気を取り戻し龍人に反逆する決意をしたのだ。

龍人「（ヤバイ！？奴らの数は俺らの四倍以上だ！？）」

最初はそうでもなかったがほとんどが一刀達に倒されてしまった。

ギロリッ！

たくさんの村龍達の視線が龍人達を睨み付ける。

孤狼「まだやる気なら俺が全員相手にしてやるぜ！」

焔「待てあんまり暴れなくてイライラしてるんだ。俺に任せろ！」

どちらが相手をしても龍人達は生きて帰れないだろう。

そして龍人達は

龍人「今日はこのくらいにしてやる！覚悟しておけよ！」

ダダッ！

負け犬のように逃げていった。

小龍「ありがとう氷の兄ちゃん！兄ちゃんのおかげで村龍達に勇気が戻ったよ！」

小龍が蒼魔に近づいてお礼を言うと

蒼魔「俺はただ気にくわない奴と喧嘩しただけだよ村龍達には何もしてないさ。それよりボウズ、お前の勇気もなかなかのものだぜ小さいのにすごい奴だな！」

ポンッ！

蒼魔は小龍の頭に手を置く

小龍「てへへっ♪／／／兄ちゃん、俺はいつか兄ちゃんがピンチになったら助けにいくから待ってろよ！」

蒼魔「その時はよろしく頼むぜ！」

カンッ！

蒼魔と小龍は互いに拳を打ち合う

その時！

桃香「ちょっと！？あれ見てよ！？」

桃香が指差した先は火龍が消えた場所。そしてその場所には

パァーッ！

謎の光が出ていた。

及川「この展開ってまさか！？新たな敵が出てくるんか！？ワイは

一足先に逃げさしてもらうで！」

ダダッ！

及川は誰よりも早く逃げようとするが

一龍「落ち着け！あれはそういうもんじゃない！」

一龍がそれを制止させた。

一龍「あれは次の世界へと行く光だ！」

一龍が言うと

鈴々「にゃにゃっ！？龍界ってここだけじゃないのかなのだ！？」

一龍「そんなわけないだろ、他にあと６つの世界が龍界にあるんだよ」

一刀「そういうことならすぐにいこうぜ！」

一刀はすぐ次の世界にいこうとするが

鳳賀「待ってくれ一刀」

鳳賀が一刀を呼び止める。

鳳賀「すまないが俺と九龍はここまでのようだ」

九龍「俺達は蒼魔のように超進化していないからさっきの火龍の一

撃で大ダメージを受けたからな、この先に進んでも足手まといになるだけだ。だったらこの世界で待つ」

二人が言うと

蒼魔「すまないな一刀、俺も二人を残して先に行くことはできない」

蒼魔も残るような発言をする。

一龍「まぁ光を通ればいつでも俺達のいる場所に行けるぜ、どうするんだ一刀?傷が回復するまで残るか?」

一龍が言うと

及川「なに言うてんねん!こっちには医者の華佗がおるんやで傷くらいすぐに…」

誰もが及川と同じことを考えていると思うが

蒼魔「馬鹿野郎!華佗の治療は自身の気を使う、つまり無限に使えるわけじゃないんだよ!こいつらだってほんとは行きたいんだ。でも、仲間を犠牲にしてまで先に進みたくないんだよ!」

華佗「・・・」

蒼魔の言う通りである。華佗のゴッドヴェイドォーは自身の気を使って足りない分の気を補うようなもの、つまり治療した分華佗の気が減るのだ。

一刀「わかった。あとから必ず来いよ！待ってるからな！」

蒼魔「あぁ、必ず追い付いてやるぜ！お前も皇帝なんかすぐに倒しちまえよ！」

ダダッ！

こうして一刀達は蒼魔・鳳賀・九龍を残して次の世界に向けていった。

猪々子「麗羽様も残った方がいいんじゃ？」

麗羽「何をいってますの！龍界のお宝は全てわたくしの…あらっ？この石は何かしら？宝石？」

麗羽は道に落ちていた赤い宝石のような石を拾い

麗羽「この世の宝石は全てわたくしのものですわ」

スッ

一刀達には知らせずに懐に仕舞う麗羽だった。

そしてその頃、一刀達が光を通って抜け出た先は

どよ～んっ

まるで夜のように暗かった。

桃香「もうそんな時間なのかな？」

華琳「でもまだお昼ぐらいの時間よ 」

一龍「この世界に朝はない。何故ならこの世界は永遠に夜が続くナイトメアランドだからな 」

一龍が言うと

風「通りで風は眠いと感じたのですよ～ 」

美以「みぃも寝るのにゃ 」

璃々「璃々も～ 」

コテンッ！

お子さま三人組は夜だとすぐに眠ってしまった。

紫苑「あらあら璃々ったら、こんなとこで寝たら風邪ひきますよ 」

華琳「風も行儀が悪いから起きなさい 」

ミケ・トラ・シャム『大王しゃま起きるのにゃ～ 』

しかし

風・美以・璃々『ＺＺＺＺＺ～ 』

起きろと言われてなかなか起きない三人だった。

一刀「仕方ない風は俺が背負うから紫苑先生は璃々ちゃんを、美以

は桔梗先生お願いします」

紫苑「仕方ないわね」

桔梗「世話がやけるのぅ」

ひょいっ

一刀達は三人を背負う

桃香「ところで一龍さん、この世界にいるっていうボスキャラはどこにいるの？」

桃香が一龍に聞くと

一龍「この世界の支配者は月明の黒龍という奴なんだがさすがに場所は知らないな」

及川「役立たずやんけ」

及川が言うと

ゴチンッ！！☆ミ

及川は一龍に殴られた。

及川「焔かて似たようなこと言ったやんけ～！」

一龍「お前に言われると腹が立つんだよ＃」

一龍の気持ちはよくわかる。

一刀「場所がわからないんじゃ仕方がない。手分けして探すしかないな」

そして一刀達が分かれて探そうとすると

？「七天皇将軍の居場所なら俺様が知ってるぜ」

何処からか声が聞こえてきた。

蓮華「みんなあそこに見て！」

そして蓮華が指差した先には

ブラーンッ！

逆さ状態の龍がいた。

バットル「俺様の名はバットル。コウモリ型龍さ」

単に龍といっても様々な姿をした龍が龍界にいるのだ。

一刀「あんたさっき言ってた七天皇将軍の居場所を知ってるってホントか？」

バットル「ホントだとも！俺様は嘘が大嫌いなんだからよ。あんたらの噂はこっちの世界にまで伝わってるんだ。だから俺様もあんたらに協力したくてね、こっちにいるから付いてきな」

バササッ！

バットルは翼を広げて飛びまくる。

華琳「あんなの信用できないわよ」

一刀「でもアイツしか知らなそうだしな」

焔「もし奴が嘘をついたとしても奴を殺せばいい話だ」

ダダッ！

一刀達はとりあえずバットルを信じて飛んでいった方角を追いかける。

そしてついた先は

モワッ！

不気味な花が咲く花畑だった。

朱里「ウツボカズラ（食虫植物）に似てますけどこんな花みたことありませんね？」

雛里「龍界の新種かな？」

ところがそこには城らしきものは何もない

焔「この野郎うそつきやがったな！焼き殺してやるぜ！」

ボォッ！

焔が力をためていると

バットル「騙される奴が悪いんだよ、あんたらはすぐ黒龍様の食料になるのだからね！」

パチンッ！

そしてバットルが指を弾くと

もわ～っ！

花から出てきた花粉が一刀達にふりかかる。

一刀「何だよこの花粉…ＺＺＺ～」

バタバタンッ！

そして一刀達は全員眠ってしまった。

バットル「ギャハハッ！バカな奴らだぜ！その花はネムリカズラ（架空植物）といって花粉を吸うと眠ってしまい、黒龍様を倒すまで目が覚めることはないのさ！さて後は俺様の隠れ家に連れておいて黒龍様に連絡するとするかな」

一刀達はバットルの罠にかかってしまったのだった。

１１６時間目「眠りの国ナイトメアランド」（後書き）

飛琳「飛琳だ。バットルの罠にかかり窮地に立たされたみんな、だけども私を含めて無事だったものが他に４人いたのだ。（誰かは次話までナイショ♪）そして隙をみて脱出した我々がどうしようかと悩んでいると、黒龍が現れてしまい私が黒龍と戦うことになった。次回、『飛琳先生の本気（マジ）！』教え子を守るのが教師の役目だ」

１１７時間目「飛琳先生の本気（マジ）！」（前書き）

一刀「蒼魔達の活躍により火龍を倒した俺達。だが、戦闘により鳳賀と九龍が深手を負ってしまい二人は残ることになってしまい、蒼魔も二人と共に残ることになった。そして蒼魔達を置いて俺達は次の世界へと向かっていった。ついた先は夜が続くナイトメアランド。早速俺達が七天皇将軍を探しているとバットルというコウモリが教えてくれるということだが実はバットルは黒龍の手下であり、俺達は罠にかかって眠らされてしまうのだった」

117時間目「飛琳先生の本気（マジ）！」

バットルの住み処

バットル「よいしょっと！　」

ごとんっ！

バットル「しかしなんて重い奴らなんだ運び込むのに苦労したぜ　」

一刀「ぐおーっ！　」

ここにはバットルの罠にはまり眠らされた一刀達がいた。

バットル「早く黒龍様来ないかな？こいつらを捕まえたんだから確実にご褒美もらえるだろうな♪　」

バットルがウキウキしながら待っていると

ゴゴゴッ…！！

バットル「ひっ！？　」

何処からか恐ろしい気が流れ出してきて

バァーンッ！

そこに姿は人間のようだが巨大で、背中には四枚のコウモリの羽を生やし、龍の仮面をつけた七天皇将軍の一人である月明（げつめい）の黒龍が現

れた。

バットル「こ…黒龍様！？」

黒龍「バットルよ、ご苦労だったな。それで皇帝様に逆らう愚か者はどこにいるのだ？」

黒龍が聞くと

バットル「こ…こちらでございます！？」

黒龍の覇気にびびりながら案内するバットル

そしてバットルは住み処を黒龍に案内した。

バットル「どうです？この通り全員捕まえてるでしょう」

バットルは眠る一刀達を黒龍に見せる。

黒龍「確かに主な顔ぶれは揃っているが…」

ひー、ふー、みー…

黒龍が数を数えてみると

黒龍「バットルよ」

バットル「はい？ご褒美ですか？」

バットルはご褒美がもらえると思っていたが

黒龍「貴様は全員と言ったのに五人いないのは何故だ？」

バットル「へっ？」

黒龍の言葉に驚くバットル

黒龍「皇帝から始末するよう言われた奴らは全部で人なのだが五人いないではないか」

黒龍が言うと

バットル「そんなまさか！？確かにネムリカズラで眠らしといたのに！？でもたかが五人くらい…」

バットルが最後まで言おうとすると

黒龍「貴様、この私に逆らうのか？＃」

ゴゴゴッ…！！

黒龍からものすごい覇気が流れ出していた。

バットル「いえいえ滅相もありません！？まさか黒龍様に逆らうだなんてそんなバカなことするわけが…」

黒龍から流れ出す覇気にびびりまくるバットル

黒龍「だったらさっさと残りの五人を探してこないか！＃」

ドォンッ！！

そして黒龍が怒鳴ると

バットル「わかりました！？少々お待ちを！？」

バサバサッ！！

バットルは五人を探しに急いで飛び立とうとする。

黒龍「もし1時間以内に連れてこなければ貴様を『将軍偽証罪』で八つ裂きにするから覚悟しておけ！」

バットル「ひぃーっ！？」

バサバサッ！？

バットルは大慌てで飛び立った。

森の中

バットル「まったく黒龍様も神経質すぎるんだよな、たかが五人くらいいなくたって皇龍様だって怒りはしないのに」

黒龍のいないところでは悪口を言うバットルだった。

バットル「それにしても逃げた奴らはどこいったんだ？」

きょろきょろっ

バットルが辺りを探しているとバッ！飛んでるバットルの上にある木の枝から何者かが飛び降りて？「ニャーッ！」ドシンッ！！バットル「うわっ！？」バットルにのしかかった。ギュッ！のしかかった何かはバットルの翼を押さえる。すると当然のごとくバットル「こらっやめろって！うわぁーっ！？」ズザザーッ！翼を封じられたバットルはグライダーのように落ちるしかなかった。バットル「いててっ！？一体何が乗ってるんだ？」バットルが背中をみてみると

美以「ニャーッ！」

バットルの背中には美以が乗っていた。

バットル「お前は！？」

驚くバットルの前に

風「コウモリさんも驚きのようですね～」

璃々「ね～」

バンッ！

風と璃々ちゃんが現れた。

バットル「お前ら何で動けるんだよ！？ネムリカズラで眠ったはずだろ！？」

バットルが聞くと

風「フフフ～、実はあの時風達はすでに眠っていたので効かなかったのですよ～」

ネムリカズラは寝ている者には効かないのだ。

風「まさか風達を捕まえようとは思っていませんでしたがね～」

バットル「ちょっと待てよ！？逃げた奴は五人って聞いたぞ！あとの二人はどこだよ！？」

バットルが聞くと

華佗「その一人が俺さ！」

バンッ！

木の後ろから華佗が現れた。

バットル「お前は何で動けるんだよ！？話を聞くと寝てないはずだろ！？」

バットルが聞くと

華佗「あいにく俺は医者でな、お前の瞳孔（どうこう）の開き具合で嘘ついてるのがバレてたんだよ。だから俺は花粉を吸う前に気絶のツボを押しといたのさ」

医者である華佗にしかできないことである。

バットル「だったらあとの一人はどこだよ！？」

華佗「あとの一人なら…」

その頃、バットルの住み処

黒龍「バットルの奴め、たかが五人探すのに何を手間取っているのだ。まぁ、もし見つけて来てもあいつは用済みで処刑するがな」

黒龍が言うと

？「やはり悪党の考えることはえぐいな」

何処からか声が聞こえてきた。

黒龍「誰だ!?出てこい!」

黒龍が言うと

バッ!

飛琳「始めまして七天皇将軍の一人である黒龍さん」

飛琳先生が現れた。

黒龍「バカな!?バットルの話では全員眠ったはずだぞ何故貴様は起きているのだ!?」

黒龍が聞くと

飛琳「あまりなめないでほしいな、うちのクラス（漢組）は問題児が多くてね、おまけに卑弥呼先生がパソコン苦手なせいで俺が反省文の用紙を用意しなきゃいけないせいで眠る暇がなくてね。今では自分が寝ようと思わなきゃ眠れない体になってしまったのさ」

かわいそうな飛琳先生である。

飛琳「まぁみんなが眠って俺が起きてるっていうのはおかしいから寝たふりしてみたらコウモリがみんなを運んでいたので少し待ってみたらお前を呼んでいたのでお前を倒すチャンスだと思ったわけさ。

ちなみに生徒達は逃がしたけどね　」

黒龍「つまり貴様は私を倒すために残ったというわけか　」

飛琳「そゆこと　」

飛琳先生が言うと

黒龍「人間とは愚かだな。さっさと逃げておけばいいものをわざわざ死に戻ってくるとはな　」

飛琳「お前こそ逃げるなら今のうちだよ　」

バチバチッ！

早くも火花を飛ばす二人だった。

飛琳「それでは…いくぜ！　」

バシュンッ！！

超進化を極めた飛琳先生は他のみんなと違い叫ばなくても超進化が可能なのだ。

紅蓮炎龍に超進化した飛琳先生は

飛琳「まずは実力を見せてもらうよ！『三頭の舞改』！　」

ドドォーッ！！

炎の散弾を黒龍に繰り出した。

対して黒龍は

黒龍「『アンデットウィップ』！」

ジャキンッ！

気を鞭に変えると

カキカキンッ！！

飛琳の散弾を打ち消していった。

黒龍「どうした？それが全力なわけがなかろう」

黒龍が言うと

飛琳「さすがは七天皇将軍の一人、簡単には倒させてくれないか。
ではお言葉に甘えて少し本気を見せてやるよ！」

スッ

そして飛琳は構えると

飛琳「うぉーっ！！」

ドゴゴゴォーッ！！

飛琳の体から炎が噴き出し、

ゴォーッ！！

炎が飛琳を包み込む。

そして炎の中から現れたのは

ジャキンッ！！

体は紅い龍の鎧、普通より二倍ほど大きく、髪は金髪ロングで龍の兜を身に付けた飛琳が現れた。

飛琳「これが俺の究極進化、名付けて烈火炎龍。見せるのはお前がはじめてだけどね」

黒龍「甘い奴め！究極進化ごときにこの私がビビるとでも思ったか！」

バッ！

究極進化した飛琳に突っ込んでくる黒龍

飛琳「別にビビらせようなんて思っちゃいないさ、ただ…」

スッ

飛琳は溶岩をも操る新たな愛剣・聖炎紅蓮龍神丸を構えると

飛琳「お前をムキにさせてこちらに来させるのが狙いなのさ！」

ゴォーッ!!

飛琳は全身を炎の龍で纏うと

飛琳「『烈火龍神撃』！」

ズブシュッ!!

黒龍「がはっ!?」

ゴォーッ!!

黒龍を貫いた飛琳の剣は炎を発しながら黒龍を燃やし続ける。

その頃、華佗達は

バットル「バカじゃねぇの!?黒龍様に勝てるわけないだろ!」

風「それはどうですかね～?何せ飛琳先生は高い実力者ですからね～。今頃黒龍を倒してるかもしれませんよ～」

風が言うと

バットル「んなわけありえないんだよ!」

華佗「どういうことだ?」

バットルの言葉に華佗が聞くと

バットル「だってあの人は!?」

飛琳サイド

飛琳「さてと、華佗達を探しにいくとするか」

飛琳がバットルの住み処から出ようとすると

ドシュッ!!

飛琳「なっ!?」

いきなり何かに背中を貫かれた。

そして飛琳が振り向いてみると

黒龍「油断したな人間め」

バンッ!

そこには倒したはずの黒龍が立っていた。

華佗サイド

バットル「だってあの方は不死身なんだよ!?誰が来たって負けないさ!?」

１１７時間目「飛琳先生の本気（マジ）！」（後書き）

華佗「華佗だ。不死身の黒龍相手に懸命に戦いを続ける飛琳先生。だが黒龍には効かずついに黒龍は飛琳先生を倒して俺達に向かってくる。次回、『不死身の理由』残る男は俺だけなのだから守らなくてはな！」

１１８時間目「不死身の理由」（前書き）

一刀「バットルの罠にかかり眠ってしまった俺達。そこへ黒龍が現れて全滅かと思いきや数が五人足らないことに不満を感じた黒龍はバットルに探すことを命じる。そして探すバットルだが逃げ出していた華佗達に捕まってしまう。一方その頃、飛琳先生が黒龍の相手をし、最大の一撃を黒龍に食らわしたのだが！？」

１１８時間目「不死身の理由」

飛琳「バカな！？確実に焼き殺したはずなのに！？」

倒したはずの黒龍が立ち上がり飛琳を後ろから襲撃したことに驚く飛琳先生

黒龍「あいにくだったな。私は不死なのだよ」

黒龍が言うと

飛琳「へぇ、それは…」

ドカッ！

黒龍「ぐっ！？」

飛琳はいきなり黒龍を蹴り飛ばすと

スッ！

構え直す飛琳先生

飛琳「どれくらいで死ぬか試しがいがあるね」

黒龍「ほぅ、私が不死だとわかっていても挑むなんて余程のバカのようだな」

スッ！

飛琳が構えたのを見て黒龍も構え出した。

飛琳「ハッ！」

黒龍「フンッ！」

そして同時に飛び出す二人

さてその頃、バットルを捕らえた華佗達は

美以「不死身だってにゃ！？」

璃々「不死身ってなぁに？」

風「何をしても死なないということですよ～」

バットル「そういうこった。貴様らが何人いても黒龍様は倒せない。何故ならあのお方は不死身だからな」

バットルが言うと

華佗「何かあるんだろ？」

バットル「えっ！？」

華佗「俺の親父が言っていたからな、この世に不死などないってな。つまりお前は黒龍の弱点を知っているが話さないといったところだろ？」

華佗がバットルに聞くと

ドキッ！？

あきらかに何かを隠している様子であった。

バットル「フンッ！確かにあの方だって弱点があるが死んでも言うもんか！」

風「ほほ～、やっぱり弱点がありましたか～」

言わなくていいことまで言ってしまったバットルだった。

華佗「死んでも言わないか、だったら死なずに白状させるしかないなぁ～」

コキコキンッ！

華佗が腕をならすと

バットル「何する気だよ！？」

驚くバットルに対して

華佗「俺は医者だから人体については詳しいほうでな…」

スッ

華佗は懐から針を取り出す。

華佗「体のどこをやれば痛がるのかわかるつもりだぜ　」

ジャキンッ！

今の華佗の顔はまるでマッドサイエンティストのような顔だったと見ていた風と美以は後に語る。（璃々ちゃんには目に毒だったので目隠しされていた）

バットル「バ…やめて！？…ギャーッ！？　」

しばらくして

バットル「わかったよ！言うよ！　」

そこにはボロボロにされたバットルがいた。※何が起きたかは想像に任せよう。

バットル「あの方の弱点は太陽だ。日の光を浴びると攻撃を受けるんだよ！　」

バットルが言うと

美以「なんだ♪簡単なことじゃにゃいか♪　」

璃々「朝になったら倒せるね　」

ところがそう簡単にはいかない。

バットル「これだからガキは気楽でいいぜ！この世界には太陽なんて無いんだよ！つまり黒龍様は不死身なんだよ！　」

バットルが言うと

？「その通りだバットルよ　」

バットルの後ろからいきなり声が聞こえてきた。

バットル「へっ？　」

くるっ

バットルが声の聞こえてきた方を向いてみると

バァーンッ！

そこには黒龍がいた。

バットル「こ…黒龍様！？　」

華佗「こいつがか！？飛琳先生はどうした　」

華佗が聞くと

黒龍「飛琳？あぁ、あの男のことか人間にしてはなかなか強い分類だったが…　」

バットルの住み処

この場所には

バァーンッ！

傷付いた飛琳先生が倒れていた。

森

黒龍「不死身の私の前では足元にも及ばなかったようでな、先程始末したよ」

華佗「なっ！？」

華佗が驚くのも無理もない。

飛琳先生はメンバーの中でも強いクラスである。その人がやられるとなれば残ったメンバー（華佗、風、美以、璃々）に勝ち目はなかった。

黒龍「それにしてもバットルよ」

ガシッ！

バットル「ひぃっ！？」

黒龍はバットルの頭をつかむと

黒龍「私の弱点を話すとはいい度胸してるな＃」

めきめきっ！！

バットル「ギャーッ！？お許しを～！？」

黒龍はバットルの頭を潰そうとする。

華佗「（今だ！）」

その瞬間、華佗は

ガシッ！

璃々を脇に抱えると

華佗「風、美以！この場から逃げるぞ！」

風「その方が良さそうですね～」

美以「逃げるのにゃ！」

ダダッ！

四人は急いで逃げようとするが

黒龍「逃がすものか」

スッ！

黒龍は構えて力を溜めると

黒龍「『ファイナルダークネスバースト』！」

ドゴゴゴォーッ！！

ものすごい気が華佗達めがけて迫ってくる。

風「このままじゃやられてしまうのですよ～！？」

美以「もう逃げられないのにゃ！？」

そして気が華佗達に近づいた時

華佗「風！璃々ちゃんを頼む！」

パシッ！

華佗は璃々を風に渡すと

華佗「せいやーっ！」

バッ！

華佗自らが気にぶつかっていった。

華佗「俺だって一刀達ほどではないが気が多いほうでな、俺の気でこの技を相殺してやるぜ！」

だが、そんなことをすれば華佗だって無事でいられるわけがない。

まさに命懸けである！

バチバチッ！！

ぶつかり合う華佗の気と黒龍の気

だがやはり華佗程度では七天皇将軍である黒龍に勝てるはずがなく、
徐々に華佗の気が押し負けてきていた。

華佗「（このままでは風達まで巻き添えになってしまう!?こうなったら…）」

スッ！

華佗は指を立てると

華佗「『五斗米道流究極奥義・気力解放壺（ソウルオーバーポイント）』！」

ズビシッ!!

華佗が自らの壺をついた途端

ドゴォッ!!

華佗の気が何倍にも膨れ上がった。

この技は本来持つ自分の気を限界以上に引き出す危険な技で大手術のときにしか使われない。何故なら下手をすれば命を落としかねないのだから

シュンッ！

華佗の気が膨れ上がったことにより何とか黒龍と互角の気になったことで互いの気は相殺された。

だが

華佗「がはっ！？」

バタンッ！

何とか一命はとり止めたものの、力の一部しか使っていない黒龍と力を限界以上使った華佗ではダメージの消費が違いすぎたのだった。

風「華佗さん！？」

美以「華佗！？」

璃々「華佗お兄ちゃん！？」

タタッ！

すぐさま倒れた華佗に近付く三人

華佗「バカ…早くにげろ…」

もはや華佗には立ち上がる力すらも残っていなかった。

華佗が言うと

風「バカなのは華佗さんの方なのですよ！」

美以「美以も戦うのにゃ！」

璃々「璃々もやるもん！」

逃げようとせずに黒龍と戦おうとする三人
だが三人の力ではたとえ倍になっても黒龍に勝てるはずがない。
黒龍「さて残りはチビ共か！」
ジャキンッ！
黒龍はバンパイアウィップを取り出すと
黒龍「無力なものは消え去るがよい！」
バッ！
風達三人に迫っていく！
このまま攻撃を食らえば三人の命はない！？
華佗「早く逃げろ！？」
華佗は何とか叫ぶがもう逃げたところで遅すぎる。
黒龍「消し飛ぶがよい！」
シュンッ！
黒龍の繰り出したバンパイアウィップが三人に迫ろうとしたその時！
ガキンッ！

バンパイアウィップは何かに弾かれた。

黒龍「誰だ　」

黒龍が探していると

飛琳「俺だよ！　」

バンッ！

そこにはボロボロの姿になった飛琳先生がいた。

飛琳「うちの生徒に手を出すな！　」

先生なら大抵言いたいセリフを飛琳先生が言うと

黒龍「死に損ないが！今度こそ殺してくれる！　」

バッ！

黒龍が飛琳先生に迫っていく！

飛琳「（カッコつけてみたけど、もう残ってる気は大技を繰り出すのみ、もし外しでもしたら俺の敗けだ！？）　」

さすがの飛琳先生も悩むしかない。そして黒龍が飛琳に迫ったその時！

華佗「ハァハァ…『五斗米道流・鈍足壺（スローポイント）』！　」

シュシュッ！

華佗が残った力を振り絞って黒龍に針を投げていき

ブススッ！

黒龍に針が刺さった瞬間

黒龍「な～～～っ！？」

急に黒龍の動きが鈍くなった。

華佗「俺の力じゃあせいぜい３０秒くらいしか鈍くできないが、それくらいあれば大丈夫だろ先生！」

華佗が言うと

飛琳「確かに、ありがとう華佗君」

ゴゴゴッ…！！

黒龍の動きが鈍くなっている間に飛琳の炎の熱がどんどん上昇していく

風「飛琳先生～、そいつの弱点は太陽なのですよ～」

風が黒龍の弱点を飛琳先生にバラすと

飛琳「太陽か…ちょうどいい」

スッ！

飛琳は炎のエネルギーを右手一本に集中させると

ドゴゴゴォーッ！！

右手がまるで太陽のように真っ赤に燃え上がった。

飛琳「さっきはよくもボロボロにしてくれたな。でも俺は優しいから一発殴るだけで勘弁してあげるよ」

黒龍「ひ～～っ！？」

一発とはいっても弱点の太陽を食らえば黒龍はおしまいである。

飛琳「『太陽拳（コロナナックル）』！」

※決して三つ目人間の得意技ではありません

パッ！

黒龍「ようやく戻ったか！？」

そして黒龍がまともに動けるようになったときには

ゴォッ！！

すでに目の前に飛琳先生の拳が迫っていたという。

ドグボッ！！

黒龍「がはーっ！？」

飛琳の太陽拳を食らって今度こそ燃え尽きる黒龍だった。

１１８時間目「不死身の理由」（後書き）

鈴々「鈴々なのだ！黒龍を倒した鈴々達は傷付いた飛琳先生と華佗のお兄ちゃんを置いて先に行ったのだ。そして次の世界にいった鈴々達は熊さんにこの世界を平和にしてほしいと頼まれたのだ。次回、『第三の国ファクトリーランド』鈴々も早く戦いたいのだ！」

１１９時間目「第三の国ファクトリーランド」（前書き）

一刀「飛琳先生が黒龍を倒したかと思いきや、不死身の黒龍には全然効いていなかった。だが飛琳先生は諦めることなく黒龍に立ち向かっていく。その頃、華佗達がバットルから黒龍の弱点が太陽だと聞き出した後、黒龍が現れて華佗達を攻撃する。何とか黒龍の攻撃を防いだ華佗だが黒龍が次の攻撃を仕掛けようとしたとき、飛琳先生が現れて華佗の針で動きの鈍くなった黒龍めがけて黒龍の弱点である太陽拳を繰り出したのだった」

１１９時間目「第三の国ファクトリーランド」

ジュジューッ！！

飛琳の繰り出した太陽拳を食らった黒龍は溶けてしまった。

その直後

パチッ！

一刀達がバットルの住み処で目を覚ました。

一刀「何で俺達こんなとこにいるんだ？」

焔「わからねえな、確かコウモリ野郎に騙されたのまでは覚えてるんだが」

紫苑「あらっ、璃々がいませんわ！？」

ミケ「大王もいないのにゃ！？」

星「華佗殿と風と飛琳先生もいませんな」

この場にいないメンバーのことを気にしていると

風「おやおや～、ようやく目が覚めるなんてみなさんお寝坊さんですね～」

美以「美以達のことが言えないのにゃ」

バッ！

そこにいなかったメンバー（飛琳、華佗、風、美以、璃々）が集まっていた。

一刀「華佗！？そんなにボロボロでどうしたんだよ！？」

華佗のボロボロになった姿を見て驚く一刀

華佗「いやなに、少しばかり無茶をしすぎてしまってな」

そんなところに

バットル「いや～、みなさんお強いですね」

バットルが現れた。

バットル「まさかあの七天皇将軍である黒龍を倒すなんて皆さんはご立派ですね～、あっしは惚れ惚れしましたよ」

バットルはみんなに媚びようとするが

焔「テメェよくも騙しやがったな！＃焼き殺してやるぜ！！＃」

孤狼「待ちな！俺が千発殴る！＃」

バットル「ひぃっ！？」

どちらにしても死は確実である。

ガシッ！

そしてバットルの頭を二人がつかんだ瞬間

飛琳「やめろ！」

飛琳先生が止めに入った。

飛琳「こいつだって黒龍に言われたからやったもんだし、殺すのは教師としてよくない」

バットル「あんた…」

飛琳先生の優しさにおもわず涙を流すバットル

だが…

飛琳「殺るんだったら死ぬ直前まで痛め付けないとね＃」

ゴゴゴッ…！！

バットル「ひぃっ！？」

漢組の副担任・神龍　飛琳（フェイリン）。普段は植物を愛する優しい性格だが、一度怒れば修羅と化する。

飛琳「こいつの始末は先生に任してもらうよ＃それでいい？」

焔「は…はいっ！？」

孤狼「どうぞご自由に！？」

さすがのこの二人も怒りの飛琳先生には逆らえなかった。

華佗「すまないがこんなボロボロでは足手まといになるのが目に見えてるから俺は残らせてもらう。後から行くから先に進んでくれ」

一刀「あぁ、あとは任しとけ！」

ガツンッ！

そして一刀達はボロボロになった華佗とバットルにお仕置きするために残った飛琳先生を置いて次の世界に向かうべく黒龍が倒された跡に出現した光の柱に入っていった。

その道中

麗羽「あら、また宝石を見つけましたわ♪」

スッ

麗羽は黒龍が倒れた場所から黒い宝石を見つけて再びみんなに内緒で懐にしまうのだった。

そして光の柱を通り抜けた一刀達が出た場所は

一刀「何だよこれは！？」

バァーンッ！

そこは見るからに工場だった。

一龍「変だな?ここは獣型の龍が住む平和な世界のはずなのに?」

この世界を誰よりも知る一龍が不思議がっていると

ガシンガシンッ!

何やら足音が聞こえてきた。

一刀「誰か来るぜ、みんな隠れるんだ」

ババッ!

一刀の指示で全員が隠れる。

すると現れたのは

ガシンガシンッ!

ブリキロボの兵隊だった。

及川「呂井門(ロイド)の親戚かいな?」

左慈「んなわけねえだろうが」

安藤呂井門…漢組の一員。外見は大きな角を生やした四角いロボット。全身に様々な武器を持つ

みんながロボットの話を聞いてみると

ロボット「この世界に侵入者が現れたらしいな」

ロボット「火龍様と黒龍様が殺られたらしいぜ」

話の内容は一刀達の噂で持ち切りのようだった。

そんなとき

ロボット「いたぞ！」

一刀「（見つかったのか!?）」

ところが見つかったのは一刀達ではなく

ロボット「そこの龍、待て！」

ダダーッ！

一匹の龍がロボットに追いかけられていた。

そうとも知らず

ガバッ！

及川「もうおしまいや～!?」

及川が叫んでしまったため

ロボット「見つけたぞ！　」

一刀達まで見つかってしまった。

及川「へっ？　」

左慈「この馬鹿野郎が！！＃　　」

一刀「とりあえず逃げるんだ！？　」

ダダッ！

一刀達は一先ず逃げることにした。

ロボット「逃がすものか！　　」

しかしロボット達も追いかけてくる。

桃香「このままじゃ捕まっちゃうよ！？　」

誰もが諦めたその時

？「こっちだ！　」

角の道から声が聞こえてきた。

一刀「今は信じるしかない！　」

ダッ！

迷わず角の方に行く一刀

及川「信じてええんか！？」

焔「仕方ねぇだろ！」

ダッ！

そして一刀の後に続いてみんなも角の方に行く

ロボット「バカめ！その先は行き止まりだ！」

ダッ！

ロボット達も角の方に行くと

パッ！

そこに一刀達の姿はなかった。

ロボット「どこいった？」

ロボット「さぁ？」

一刀達はどこに消えたのかというと

下水道

麗羽「何で高貴なわたくしがこんな汚いところにいなきゃいけませんの！」

猪々子「しーっ！静かにしてくださいよ麗羽様　」

斗詩「あのまま捕まるよりましでしょう　」

一刀達は角にあったマンホールを通って下水道に隠れたのだ。

一刀「さっきは助けてくれてありがとうな　」

一刀達を下水道に呼んだ者は

ベアード「困ったときはお互い様よ！　」

熊型龍人のベアードだった。

桃香「臭いから早く行こうよ～　」

蓮華「地球より汚れているな　」

華琳「龍界って空気がきれいな場所ってわけじゃないのね　」

華琳達が言うと

ベアード「昔はこんな汚染された場所じゃなかったんだ。それもこれもすべて七天皇将軍であるあいつのせいなんだ！　」

一刀「あいつって誰のことだ？　」

一刀が聞こうとすると

ベアード「この下水道を抜けてから話してやるよ」

しばらくして

ギィッ！

下水道の先は街外れの森に通じていた。

孤狼「ようやく出れたな」

シャオ「体が臭いよ～！」

みんながそれぞれいっているとと

一刀「それであいつって誰のことだ？」

一刀はベアードに聞いてみた。

ベアード「俺はかつてこのビーストランドを納めていたベアードって言うんだが、七天皇将軍である森精の木龍がいきなり現れて『この世界は私のものだ！』と言ってビーストランドを玩具（おもちゃ）と兵器の国、ファクトリーランドに変えやがったんだ！」

ベアードが言うと

及川「それであんたらはみすみす国を明け渡したわけやな。わかるでそりゃ相手が皇帝の部下なら大人しく引き下がるしか…」

この及川の発言に

ベアード「とんでもねぇ！　＃　」

ベアードが怒ってきた。

ベアード「龍界に住んでいる奴全てが皇帝に従っていると思ったら大間違いだ！なかには俺達のように皇帝に反旗を翻す（ひるがえす）奴だっているんだぜ！　」

鈴々「じゃあ戦ったのかなのだ！？　」

鈴々が聞くと

ベアード「もちろん戦ったさ、だけど相手が悪すぎた。ロボット達だけならともかく七天皇将軍である木龍がいるせいで俺達は数を減らされたんだ。今残っているのは俺と偵察にいっている鹿型龍人のディアと狼龍だけで他のやつらは傷付いたのさ　」

どよ～ん

ベアードの言葉に場が暗くなる。

そんなとき

？「大変だーっ！？　」

遠くから声が聞こえてきた。

ベアード「あの声はディアの声、何かあったのか！？　」

ドシドシンッ！

ベアードは声のする方に向かっていく。

一刀「俺達も行くぞ！」

ダダッ！

そして一刀達もベアードの後に続いていった。

すると

ディア「大変だぜベアード！？」

鹿型龍人のディアが現れた。

ベアード「どうしたんだよディア！？」

ディア「俺っちと狼龍がファクトリーランドの状況を覗いていたら狼龍の相棒の犬龍がファクトリーランドに入ったんだよ！？」

ベアード「何だと！？」

二人が驚いていると

蓮華「もしかしてロボット達が騒いでいたのって！？」

孤狼「その犬龍って奴が見つかったに違いないぜ！？」

一刀達が騒いでいると

ベアード「こうしちゃいられねぇ！俺が助けにいかねぇと！」

ディア「待てよベアード！木龍相手じゃあいくらお前でも勝てないぜ！」

ベアード「馬鹿野郎！＃だからって犬龍を見捨てる気かよ！」

ベアードが叫ぶと

一刀「ベアード、その犬龍を助けるのは俺達に任せてくれないか？」

一刀がベアードに言うと

ベアード「バカ言うんじゃねぇ！俺達龍人にすら勝てない奴を人間が勝てるもんか！気持ちは嬉しいが大人しく…」

一刀「俺達は（一部を除いて）強いぜ！『助けてもらった恩は必ず返す！』父さん（優刀）から教えてもらった言葉だ！」

バンッ！

一刀が言うと

孤狼「そういうこった」

焔「こうなったら仕方がないな」

やる気になるみんなに対し、

及川「恩を仇で返すって言葉もあるけど…」

及川が言うと

じと～

みんなから白い目で見られる及川だった。

ベアード「そこまで言うなら仕方がない！人間よ、この世界と犬龍を助けてくれ！」

一刀「任しておけ！」

こうして犬龍救出作戦が決行されることになった。

１１９時間目「第三の国ファクトリーランド」（後書き）

霞「霞やで♪犬龍の救出にいく抽選に選ばれたウチら（霞、恋、華雄、ねね、鈴々）は狼龍とともにファクトリーランドに潜入したんやけど、中は意外と大変な道のりで苦労の連続やで、そしてウチらがたどり着いた先におったのは！？次回、『玩具の障害』早く地球に帰って酒飲みたいわ～」

１２０時間目「玩具の障害」（前書き）

一刀「華佗の捨て身の攻撃と飛琳先生の一撃により黒龍は倒され、俺達は二人を置いて次の世界にいった。そしてついた先は機械都市ファクトリーランド、この街でロボット達に追われた俺達は熊型龍人ベアードのおかげで何とか助かる。だが今度はベアードの仲間が七天皇将軍のひとりである木龍に囚われたため俺達が救出しに行くことになったのだった」

１２０時間目「玩具の障害」

ファクトリーランド

カタンッ！

この国にあるマンホールの蓋が開いて中から現れたのは…

霞「どうやら見張りはおらへんらしいな」

霞だった。

しかも霞だけではなく

華雄「そんなことより早く出てくれ！臭くてたまらん！」

ねね「恋殿を早く出すのです！」

鈴々「臭くて鼻が曲がるのだ～！」

恋「…せまい」

ドンッ！！

全員『うわっ！？』

ドバッ！

恋が無理矢理押し出したことにより、霞達（霞、恋、華雄、ねね、

鈴々）も押し出された。

霞「アホかい！見つかったらどないすんねん！＃」

霞が怒鳴ると

ねね「恋殿は悪くないのです！悪いのはさっさと出ない霞なのです！＃」

喧嘩を始める二人を

？「いい加減にしなさい！」

誰かが止めに入る。

止めに入った人（？）は

？「ハァ～、まったくこんなメンバーで大丈夫なのかしら？」

恋達についてきた人物（？）は

茶髪の髪を結わえて緑目、短いジーパンと鎖骨が出てる服を着て（ノーブラ）、背中には龍の翼と狼の耳を持ち、巨乳でスタイルのいいお姉さん的な人間の姿をした犬龍の相棒である狼龍だった。

おもわずため息をつく狼龍。ちなみになぜこのメンバーが選ばれたのかというと

数時間前

一刀「それじゃあ行ってくるぜ！」

最初は一刀だけで行こうとするのだが

焔「まて一刀、俺が行く」

孤狼「俺に戦わせろ！戦いたくてうずうずしてるんだ！」

武道派のこの二人が許してくれるはずがなく

桃香「一刀くんが行くなら私も！」

蓮華「あっ！ずるい！私だって」

華琳「あら私の方があなた達より武力は上よ」

恋「…恋はそれより上」

一刀大好きっ子まで許してはくれなかった。

一刀「かといって全員で行くと目立つしな」

数人減ったとはいえまだ５０人はいるのだ。

普通単なる救出作戦ならば隠密である思春や明命が行くべきなのだろうが

みんなの頭に血がのぼっていたため考えてなかった。

一刀「仕方がない、時間もないしくじで決めよう！いきたい奴は手

をあげてくれ！」

サササッ！

ほとんどが手をあげるなか

及川「（アホくさ、何であんな危険な場所にガキを助けにいかなあかんねん。ワイは手をあげんとこ…）」

別に来なくても構わないのだが及川が手をあげないでいると

ベアード「犬龍を探すならこいつも連れていってくれ」

スッ

ベアードが指した先には

モワ～ン♪

美女のお姉さんがいた。

狼龍「アタシの名は狼龍（ろうりゅう）よ、よろしくねん♪」

話し方は貂蝉に似ていたが色気なら月とすっぽん、紙つぶてと隕石のごとく差がありすぎた。

そして狼龍を見た及川は

及川「（あんなお姉ちゃんと行けるなんて天国や！）ワイも行くで！」

シュッ！

欲望丸出しで行く気満々だった。

そしてくじの結果…

恋達が選ばれることになった。ちなみに出掛ける直前

狼龍「一刀くんって言ったわよね。帰ったらアタシがサービスしてあげるわん♪」

一刀「はいっ！／／／」

一刀が狼龍にデレデレしていると

ギュギュギュッ！！＃

一刀「いははっ！？（いたたっ）」

一刀は恋を除く一刀大好きっ子におもいっきり頬を引っ張られたという

そして現在に至る

華雄「しかし、この広い街でどうやって探すというのだ？」

それが問題なのだが

狼龍「それなら大丈夫。この街については仲間で調べあげてるの、

犬龍が囚われたのならこの街の中央にある塔にいるはずよ」

スッ！

狼龍が指差した先には大きな塔があった。

鈴々「あそこまでだいたい３ｋｍってとこなのだ」

霞「しかも見張りがおるかもしれへんから行くのが大変やで！？」

かといって今さら思春や明命をつれてくるわけにはいかない。

ねね「仕方ないからねね達だけで行くのですよ」

と決めた瞬間

恋「…ちょっと待って」

恋が止めに入った。

恋「…その前に」

全員『その前に…！？』

全員が恋に注目する。

ぐぅ～っ！

恋「…お腹空いた」

ズコッ！

ねね「今、ご飯を用意しますぞ！」

ねね以外のみんながずっこけるのだった。

しばらくして

ガシンガシンッ！

ロボット「異常ないか？」

ロボット「異常なしだ」

ロボット達が街を巡回するなか

カランッ！

ロボット「あっちで音がしたぞ！」

ロボット「いくぜ！」

ガシンガシンッ！

ロボット達が音のする方に向かっていくと

ひょこっ

物陰から霞達が現れた。

霞「プフフッ♪やっぱ機械は単純やな物音する方に向かってくなんて今時の人間でも引っ掛からへんで♪」

ダダッ！

そして霞達はロボット達を無事に通り過ぎた。

華雄「あいつらに見つかったら厄介だからな」

狼龍「だけどもこの先はもっと大変だよ。この街は塔に近づくほど困難になるんだ」

しばらくして

鈴々「ロボットを抜けたと思ったら今度はなんなのだ？」

恋達の前には黒い橋が立ち並んでいてしかも

ゴポゴポッ！！

恋「…下は熱そう」

霞「当たり前やん、下は溶岩やねんから！？」

ねね「罠かもしれないけど渡るしかないのです」

タタッ！

そして仕方なくみんなが橋を渡っていると

鈴々「にゃっ？変なボタンがあるのだ」

鈴々が『押しちゃダメ』と書かれたボタンを見つけた。

鈴々「こう書いてあったら…」

ポチッ！

押してしまうのが鈴々だった。

そして押した瞬間…

ゴゴゴッ…！！

地鳴りがしたかと思うと

ガラガラーッ！

橋が後ろの方から崩れ出してきた。

実はこの橋はドミノ倒しのドミノでできているのだ。

ガラガラーッ！

霞「何の音や？」

前を歩いていた霞が後ろを振り向くと

ドダダーッ！！

鈴々「みんな、急いで走るのだ～！？」

鈴々が崩れる橋の上を急いで走っていた。

霞「何やってんねん！？」

華雄「とにかく今は逃げるのが先だ！ねねは私に捕まれ！？」

ガシッ！

ねね「どうせなら恋殿がいいのです～！」

華雄「つべこべ言うな！？」

ダダーッ！

みんなは一斉に走り出した。

霞「へんっ！『神速の張遼』と呼ばれたウチやで！こんな障害屁でもないわ！」

2年C組　張遼霞。馬術部で脚が早く陸上部からも勧誘される関西人。初めて出会った時以来、愛紗に片思いしている。

そして何とか全員走り終えたのだった。

恋「…考えてみたら、恋が超進化して飛べばよかった」

全員『あっ！？』

今さらそのことに気づくみんなだった。

そして最後の通路にある門

狼龍「ここを通れば塔にたどり着くよ　」

鈴々「もうこうなったら鬼でも蛇でも出てくるのだ！　」

スッ！

そして鈴々が門を通ると

ひょこっ♪ひょこっ♪

くまのぬいぐるみが歩いていた。

鈴々「熊なのだ～♪　」

ぴょんっ！

子供のように熊に向かっていく鈴々

華雄「まったく、これだから子供はダメだな。なぁねね　」

華雄がねねの方を向くと

ねね「ホントに鈴々は子供なのです　」

ぷるぷるっ

と言いながらもホントは遊びたいねねだった。

だがそんなとき

シュッ！

熊のぬいぐるみから鋭い爪が出てきたかと思うと

ブォンッ！！

鈴々「おわっ！？」

ガキンッ！！

とっさに熊の攻撃を防いだ鈴々

そして熊達が一ヶ所に集まると

くま「我々は癒しのハンター、名付けてプリティベアズ！この我々の癒しの顔の前では誰であろうと攻撃できないのさ！」

ところがだ

ドグボッ！！

くま「グホッ！？」

ドサッ！

一人のくまが恋にブッ飛ばされた。

くま「何故我々の癒しが効かないんだ！？」

くまが驚くと

恋「…悪いくまは嫌い」

いくらかわいいものが好きな恋でも悪い奴は許せないのだった。

ゴゴゴッ…！！＃

そして恋から流れ出る覇気に

くま達『うわーっ！？』

ダダーッ！

熊達は逃げていった。

華雄「あれのどこがきついんだ？むしろ他の障害より簡単ではないのか？」

狼龍「さぁ、相手によって違うんじゃない？」

ねね「さすがは恋殿なのです！」

それぞれが反応を示すなか

霞「んじゃ熊達も逃げたことやし、塔の中に入ろうか」

そしてみんなは塔の中に入っていった。

塔の中

霞「罠だらけかと思ったけど中は意外と普通なんやな」

華雄「こうも何もないと逆に不気味だ」

そして塔の中を突き進んでいくと

バンッ！

一つの部屋にたどり着き、部屋の中には檻があった。

そして檻の中には

狼龍「犬龍！？」

ボロボロの姿になった狼龍の相棒である犬龍がいた。

タタッ！

すぐさま檻に近づくみんな

だが体をよろけながらも立ち上がった犬龍は

犬龍「狼龍、来ちゃダメだ！これは罠だ！？」

犬龍は必死に叫ぶがもう遅い

ガチャンッ！

鈴々「なっ！？」

恋達が入ってきた扉がいきなり閉められた。

華雄「しまった！？罠だったか！？」

誰が見てもわかるであろう

狼龍「でもいいんだよアタシは犬龍さえ救い出せればさあ、早くこの檻から出してあげるからね」

スッ

そして狼龍は懐から短剣を取り出す。

犬龍「ありがとう狼龍お姉ちゃん！でも檻は切らなくてもいいよ」

狼龍「何でだい？」

狼龍が聞くと

犬龍「だって…」

ジャキンッ！

犬龍「檻があろうがなかろうがこいつなら関係ないからさ」

ドキュンッ！

そして犬龍は懐から取り出した矢を狼龍めがけて撃った。

１２０時間目「玩具の障害」（後書き）

恋「…恋。いきなり襲い掛かってきた犬龍は実は偽物だった。そして恋達が攻撃すると本性を現してきた。非常な敵に恋は怒って究極進化したけどなかなか強い奴に恋達は苦戦する。次回、『董卓防衛陣・猪鹿蝶！』恋は絶対にこいつを許さない！」

１２１時間目「董卓防衛陣・猪鹿蝶！」（前書き）

一刀「犬龍を助けるためファクトリーランドを探しまくることになった恋達五人と狼龍は犬龍が囚われている街の中央の塔を目指し度重なる障害をなんとか越えて塔に入る。そして檻に捕らえられていた犬龍を見て狼龍は犬龍に近づくが助けに来た狼龍に対して犬龍は弓を射つのだった」

１２１時間目「董卓防衛陣・猪鹿蝶！」

ブシュッ！

犬龍が射った弓は狼龍を直撃した。

狼龍「なんで！？」

バタリッ！

その場に倒れこむ狼龍

それを見た恋達は

恋「…お前、犬龍じゃない」

霞「正体バラさんかい！＃」

ジャキンッ！

あきらかに犬龍の様子がおかしいと感じてねね以外の四人は武器を犬龍に向ける。

犬龍「弱者ってのはもろいもんだよね。仲間を見つけた途端油断するなんてバカのすることだよ」

キュルンッ！

そして犬龍が一回転すると

バンッ！

そこにいたのは人間と妖精が合わさった姿で、両腕にはボーガン、背には龍の翼と巨大な弓、紫ロング髪の妖精の龍であり七天皇将軍の一人である森精の木龍が現れた。

華雄「貴様、本物の犬龍はどこだ　」

華雄が聞くと

木龍「本物だったら…　」

シュバッ！

そして木龍は囲んでいた包囲網から抜け出すと

木龍「ここにいるさ　」

バンッ！

木龍は壁の中に隠していた犬龍を見せつけた。

木龍「言っておくけどこいつは本物だからね　」

霞「本物だろうが偽物だろうが別に気にせんわい！＃　」

恋「…お前、絶対に許さない！＃　」

バシュンッ！

恋は超進化して構えていた。

木龍「やれやれ、さっさと逃げたらいいものを」

スッ

木龍は再び犬龍を壁に入れると

木龍「人間って奴はよほどの実力知らずらしいな

ジャキンッ！

木龍はボーガンを持って構える。

木龍「死ねやバ～カ♪」

ドキュキュキュンッ！！

無数の矢を恋達に放ってきた。

恋「…フンッ！」

ブォンッ！！

だがほとんどの矢が恋が方典画戟を振るったときの衝撃波で落とされてしまう。

ねね「へんっ！恋殿がお前なんかに負けるはずがないのです！恋殿はへぼ会長（一刀）より強いのですぞ」

ねねが言うと

木龍「確かにそいつの強さは認めてやるよ。だけどね人間には分かっていても攻撃できないものが一人はいる。親、恋人、そして…」

スッ

木龍が顔を隠すと

バッ！

木龍「親友とかね」

バンッ！

恋「…月!?」

木龍の顔が月に変化した。

木龍「どうやらお前達にとってこいつは攻撃できない人物のようだな」

月の顔をした木龍が言うと

パッ！

木龍「他で言うとこいつかな？」

そして今度は詠の顔に変化したが

霞「詠ならかまへん！」

華雄「くたばれっ！」

ブンブンッ！

詠の顔になった途端切りかかってくる二人

その頃、森にいる一刀達は

詠「なんでなのよ！＃」

月「詠ちゃん、急に怒鳴ってどうしたの？」

詠「何だか知らないけど怒鳴りたくなったのよ」

ということが起きていたという。

ファクトリーランド

木龍「ちっ！こいつの顔は役に立たない！？」

スッ！

木龍は顔を詠から再び月に戻す。

ピタリッ！

案の定、動けないみんな

木龍「ここで貴様らはくたばる運命なんだよ！」

ドキュキュキュンッ！！

木龍は動けない恋達に向かって矢を連射してくる

恋「…ねね、危ない！」

サッ！

恋はこの場で唯一非戦闘員のねねを庇うためねねの前に立つと

ドシュシュンッ！！

恋「…ぐはっ！？」

ねね「恋殿！？」

恋はねねを庇って矢を食らってしまった。

鈴々「ぐはっ！？」

霞「ぐはっ！？」

そして他のみんなも次々とやられていく

木龍「フフフッ！人間というものはマヌケだな。他人をかばうなんてバカのすることだ！」

木龍がみんなを馬鹿にすると

華雄「ならば目を離した貴様も馬鹿というわけだな」

木龍「何だと!?」

木龍が声のする方を向いてみると

バンッ!

そこには犬龍を抱えた無傷の華雄がいた。

木龍「貴様!?いつの間に!?」

木龍が驚いていると

霞「そうか!わかったで」

霞が何かに気づいたようだ。

霞「木龍!華雄はな原作のキャラで二番目に影が薄いんやで!(ちなみに一番は白蓮)萌将伝でも最後の方に一回しか出とらんからな!」

つまり華雄の存在感が薄いおかげで犬龍を救出できたうえに、矢も狙いから外されたのだった。

華雄「情けない話だが意外と役に立つ力だな」

だが、華雄の目からほろりと涙が流れていた。

華雄「そんなことより、ねね！」

ブォンッ！！

ねね「おわっ！？」

ガシッ！

ねねは華雄から投げ飛ばされた犬龍を受けとる。

華雄「お前が一番元気だからそいつをつれて逃げろ！」

ねね「そんなことできないのです！」

ねねが言うと

恋「…ねね、早く逃げる」

恋が言った瞬間

ねね「恋殿の命令ならば逃げるのです！」

恋の言葉なら大抵のことは聞くねねだった。

木龍「そうはさせるか！」

ジャキンッ！

しかし木龍はねねを逃がしてはくれない。

ボーガンの標準をねねにあわせようとする

だが

鈴々「そうはさせないのだ！」

ガシッ！

鈴々が木龍の腕にしがみつく

木龍「こいつ！離せ！」

ブンブンッ！

鈴々をつかめばすむ話なのだが木龍の両腕はボーガンになっているためそれができない。

木龍「こいつめっ！」

ブォンッ！！

鈴々「にゃにゃ～っ！？」

そしてようやく木龍が鈴々を振りほどいたときには

し～ん

すでにねねは逃げていた。

木龍「おのれ貴様らよくも邪魔しおって！こうなったら貴様らを殺して皇帝様に褒美をもらうまでだ」

ウィーンッ！！

木龍は背中にある巨大な弓を恋達に向ける。

だが今の恋は

恋「…お前、絶対に許さない！＃」

ゴゴゴッ…！！

いつもは大人しい恋が人質を取ったあげく、騙し討ちまでした木龍に対して物凄い怒りを感じていた。

霞「この恋は久しぶりやで！？」

華雄「確か前に怒ったのは黄巾高校に殴り込みに行ったときだったな」

数ヶ月前、ねねは黄巾高校にいじめられてしまい怒って黄巾高校に向かった恋は襲い掛かってきた黄巾高校生３万人を返り討ちにしたのだった。

しかも今回はそれ以上の怒りである。

そして恋の怒りは地龍にも感化され

地龍「（あやつは許せん！ワシが力を貸してやろう！＃）」

地龍が言うと

こくんっ

恋「…お願い　」

恋はコクりと頷いた（うなづいた）。

そして

ゴゴゴッ…！！

ヒューッ！！　ガガガッ！

恋の周りに散らばっていた瓦礫（がれき）が宙に浮いたかと思うと、一斉に恋に向かってきた。

霞「何が起きとるんや！？　」

華雄「恋は大丈夫なのか！？　」

霞と華雄が心配するなか

ドッカーンッ！！

いきなり瓦礫がブッ飛び、その中心にいたのは…

バァーンッ！！

姿は獣騎士地龍に狼の兜を装着して鎧も頑丈な龍の防具を身に付け、背中には紅い翼、細長い龍の尻尾をはやした姿をした恋だった。これぞ恋の究極進化、究極獣人地龍である。

木龍「フンッ！究極進化したくらいでびびる俺ではないぞ！」

スゥーッ！！

木龍は背中にある弓に力を溜め込む

木龍「この技を食らえば貴様らなんて即死だ！攻めてきたらすぐに放つぞ！」

迂闊に攻められない恋達

しかも

ヨロッ

恋「…体がおかしい！？」

いきなり恋がよろめきだした。

霞「どないしたんや！？ウチまでくらくらするで！？」

華雄「お前達どうしたんだ！？」

唯一普通に動けるのは華雄だけだった。

木龍「今ごろ気づくとは馬鹿な奴らめ！矢に毒を仕込むのは常識だ

ろうが！その毒は俺を倒さぬ限り消えることはないのさ」

なんということであろう！？

普通に動けるのは矢を食らっていない華雄だけだった。

恋「…一撃ならおもいっきり食らわせられるのに動けないから悔しい」

華雄「悔しいが私の力ではあいつは倒せぬ！？」

負けず嫌いの華雄にしては珍しい台詞である。

とそんなとき

霞「だったらあれをやってみいへんか？月を守るために編み出した合体陣形を」

霞が言うと

華雄「確かにあれならば恋が動けるし奴に大ダメージを与えられるな」

恋「…今、やるしかないならやる」

霞「よっしゃ！決まりやな」

そして恋達は一ヶ所に集まると

ガシガシンッ！！

上から順に恋、霞、華雄という順番に肩車していった。

木龍「何する気かは知らんが何をしても無駄なことだ　」

キュイーンッ！！

そうこうしている間にも木龍の力が溜まってしまい放出されようとしている。

そして

華雄「いくぞっ！　」

ダッ！

一番下にいた華雄が二人を担ぎながら木龍に迫る。

木龍「もうお前らは終わりなんだよ！『ザ・ファイナルショット』！　」

ドキュンッ！

とうとう背中の弓が発射され華雄に迫ってくる。

だが

霞「そりゃっ！　」

ピョンッ！

二番目にいた霞が恋を背負いながら華雄から飛び離れる。

そして華雄は

華雄「私の力を甘く見るなー！！」

ガキンッ！！

得物の斧・金剛爆斧で矢を受け止める。

だがやはり力の差がありすぎてしまい

ボキンッ！！

華雄「ぐはっ！？」

金剛爆斧は砕け散ってしまい華雄も飛ばされてしまった。

木龍「馬鹿なやつだぜ！」

木龍が華雄を馬鹿にすると

霞「馬鹿は…お前や！」

ビュンッ！！

跳んでいた霞は背負っていた恋を木龍にむかって投げた。

木龍「ぶつけようってか？そんなの避けたらおしまい…」

サッ…

木龍が避けようとすると

霞「そうは…させるかい！　」

ビュンッ！！

今度は飛龍偃月刀を木龍にむかって投げる霞

木龍「フンッ！食らうかよ！　」

サッ！

木龍は見事偃月刀を避けるが

恋「…かかった　」

バンッ！

木龍「なっ！？　」

木龍が逃げた先には恋の着地地点だった。

しかも木龍は驚いてしまいすぐに動けそうにない

恋「…お前、絶対に許さない！＃　」

ジャキンッ！

究極進化した恋は方典画戟を構える。

そして

恋「…『陣円風龍刃』！」

ズバッ！！

恋は方典画戟で木龍をおもいっきり切り裂いた。

１２１時間目「董卓防衛陣・猪鹿蝶！」（後書き）

雫「雫なの♪木龍を切り裂いた恋は犬龍を連れて戻ってきたなの、そして次なる世界に向かった雫達を待ち受けていたのは水がきれいな未来風の街。おもわず泳いじゃったなの♪次回、『第四の国アクアランド』ダーリン（一刀）も一緒に泳ごうなの♪」

１２２時間目「第四の国アクアランド」（前書き）

一刀「木龍の化けた犬龍に不意打ちをくらって倒れた狼龍。そして弓使いである木龍と戦いを繰り広げる恋達、だが木龍の力は想像を越えていて苦戦するが華雄の能力（？）によって無事に本物の犬龍を救出する。そしてあまりの木龍の残忍的な性格にキレた恋は究極進化をする。だが恋はダメージが大きくまともに動けなかった。そこで霞の発案により合体陣形で木龍にきつい一撃を食らわしたのだった」

１２２時間目「第四の国アクアランド」

木龍「バカな！？この私が負けるなんて…あり得ないのだー！？」

ドッカーンッ！！

究極進化した恋の一撃を受けて木龍は爆発した。

恋「…やった　」

勝利を喜ぶ恋だが

よろりっ　　バタンッ

毒で体力が消耗されてしまい恋はその場に倒れてしまった。

もちろん恋だけではなく

霞「ウチももうあかんわ　」

華雄「タフがうりな私でもさすがにもうダメか　」

バタバタンッ！

恋を投げた霞、そして木龍の一撃を必死で止めた華雄も疲れて倒れてしまった。

華雄「それにしてもさっきの陣形はよかったな　」

恋「…今までで一番のできだった　」

霞「そうやったな～、ウチらの最強陣形・董卓防衛陣・猪鹿蝶は無敵やで！まぁ今までは華雄が耐えきれへんかったから失敗しとったけどな♪　」

華雄「仕方がなかろう。今まで命を懸けるほどの戦いがなかったからな　」

恋「…ぶっつけ本番でいい感じだった　」

三人が話をしていると

ねね「恋殿～！！　」

ダダッ！！

逃げていたはずのねねがやって来た。

恋「…ねね　」

恋はねね来たことに驚いていると

一刀「大丈夫か！？　」

バババッ！

ねねに続いて一刀達も現れた。

霞「何で来たんやい！？　」

霞が聞くと

焔「そこのパンダチビ（ねね）が助けを呼びに来たんだよ」

ねね「ねねはチビじゃないのです！＃」

雛里「あわわ～！そんなことより傷の手当てをしませんと！？」

雛里達は華佗から預かった薬で五人（恋、霞、華雄、鈴々、狼龍）を治療する

そんなとき

美羽「おやっ？」

キランッ☆

美羽が木龍が倒れていた付近に宝石が落ちているのを見つけた。

美羽「きれいなのじゃ～♪妾の宝物にするのじゃ～♪」

美羽は宝石を拾い上げると

麗羽「おーほっほっほっ！美羽さん、それは持っていると蜂蜜を腐らせる呪いの宝石ですわよ」

美羽「なんじゃと！？」

麗羽「美羽さんの大事な蜂蜜を腐らせるわけにはいきませんからそ

れはわたくしが処分しておきますわ」

美羽「ありがとうなのじゃ～」

スッ

美羽は麗羽に宝石を渡した。

麗羽「（これだから美羽さんは扱いやすいですわ）」

まんまと美羽から宝石を奪い取った麗羽だった。

そして一刀達は光を通って次の世界に進もうとすると

ベアード「お前達には感謝している」

ディア「絶対皇龍を倒してくれよ！」

一刀達を励ますベアード達

狼龍「確か恋って言ったね。犬龍を助けてくれてありがとう」

犬龍「恋お姉ちゃんありがとう！いつかお礼にいくね♪」

二人がお礼をいうと

恋「…待ってる。それと…狼龍って呼びにくいから明（アカリ）って呼ぶけどいい？」

恋が狼龍に聞くと

狼龍「明か、気に入ったからいいよ♪」

狼龍の名前が明になった。

そして一刀達は次の世界に向かっていく、ついた先は

パァーンッ！

そこは辺り一面が水に囲まれていて未来都市のような町並みだった。

一龍「どうやらここはアクアランドみたいだな」

一龍が言うと

ぶるぶるっ！！

いきなり雫の体が震え出していた。

一刀「どうしたんだ雫？」

及川「進化かいな？」

二人が雫に近寄ると

雫「もう我慢できないなの～♪」

バサッ！

一刀「うおっ！？／／／」

及川「うひょーっ！／／／」

いきなり雫が服を脱ぎ出したことに興奮する二人

そんな二人には当然のごとく

ゴツンッ！！☆ミ

乙女達からの鉄槌がくだされた。

華琳「あなたいったい何してるのよ！」

そして下着姿になった雫は（雫はノーブラ）

雫「だって～、こんなにきれいな水なんだし～少しばかり泳いでくるなの～！」

バシャッ！

そして雫は水に飛び込んだ。

焔「まぁ雫の奴は水泳が得意だから心配要らないだろ」

及川「しかし平和な国やな～、いつもやったらそろそろ敵の軍隊が出てくるのに一向に出えへんなんて」

及川が言うと

一龍「確かにおかしいな。確かこの世界には魚類型龍人が住んでい

るはずなのに住民どころか兵隊すら出ないなんて」

一龍が言った直後

ポロポロポロロンッ♪

蓮華「この音はなんだ？」

冥琳「ハープのようだが何処から聞こえてるんだ？」

そして音の場所を探ってみると

？「皆さんようこそ」

バッ！

そこに現れたのは水色のロング髪で白スーツを着た美男子だった。

蛟（みずち）「僕の名前は蛟、あなた達の噂は聞いていますよ。龍界の七天皇将軍を三人もやっつけた強い人物だとね、よかったら記念に握手してくれませんか？」

スッ

蛟が握手を求めると

一刀「こりゃあどうも」

スッ

握手をしようとする一刀
だが
パシンッ！
その手は焔に弾かれた。
一刀「何するんだよ！」
焔「お前バカか？似たような手口でコウモリに騙されただろうが！」
※時間目参照
焔「こいつだって見かけは弱々しいが信用できる奴じゃないだろうが！」
焔が言うと
蛟「ひ…酷い！僕はただ単に握手したいだけなのに」
ほろりっ
蛟の目から涙がこぼれ出す。
焔「嘘泣きしたって俺は馬鹿正直な一刀と違って騙されないからな」
焔が言うと

一刀「待てよ焔！そんなに疑っちゃダメだろうが！」

焔「だからお前はバカなんだよ！そんなんじゃいずれ死ぬぜ！」

一刀「何だと！！＃」

焔の言葉に一刀は激怒した。

焔「やるってのか？俺は別に構わないぜ！＃」

すぐにでも喧嘩をしそうな二人に

桃香「二人共やめてよ！私達が争ったってなんにもならないじゃん！」

喧嘩を止めようとする桃香

焔「うるせぇ！女は黙っていろ！これは俺と一刀の問題だ」

桃香「孤狼さんも止めてくださいよ！」

桃香はこの中で唯一二人を止められそうな孤狼に助けを求めるが

孤狼「・・・」

孤狼は何も話さなかった。

そしてついに

焔「俺は前からお前のような奴が気に食わなかったんだよ！」

一刀「それはこっちの台詞だぜ！」

ブンブンッ！

二人は殴り合いの喧嘩を始めてしまった。

桃香「どうしてみんな止めないの！？」

そして桃香以外の誰もが二人を止めようとしなかった。

主な理由として

・この二人を止められるわけがない

・好きにやらせろ

・このまま二人がいなくなればわたくしがリーダーになれますわ

であった。（勿論一番下は麗羽である）

蛟「二人共僕のことで喧嘩なんてやめてください」

スッ

二人を止めようと蛟が入ろうとすると

焔「くたばりやがれっ！」

一刀「お前こそな！　」

蛟「やめてください！　」

ブンッ！！

二人が殴り合おうとした途端、蛟が輪に入ると

一刀・焔『にやりっ　』

蛟「えっ！？　」

くるっ！　　ドガッ！！

蛟「がふっ！？　」

二人は拳を急に止めて狙いを互いから蛟に変えて蛟をぶん殴った。

蛟「な…何するんです！？　」

蛟がいきなり殴った理由を聞くと

焔「もう芝居はやめにしろ　　」

一刀「とっくにバレてるんだよ悪人さん　」

バンッ！

二人が言うと

桃香「どういうこと！？　」

わけがわからず一人驚く桃香

焔「こいつは俺達を騙し討ちしにきた悪人なんだよ　」

一刀「お前が怪しいことなんて出会った時から気の色でわかっていたからな　」

気にも色がある。

悪い奴は黒
良い奴は白
腹黒い奴は灰色といった感じなのだ。

これを見切れる人は数が少ない

バットルに騙された一刀は一応気の色で悪人かどうか確かめるようにしたのだ。（ちなみに気の色を消すのは余程の熟練でしか不可能である）

気の色で蛟が悪人と判断した一刀は信じる振りをして焔を怒らせ、とっさにアイコンタクトで焔に連絡し、ひと芝居をしたのだ。

孤狼「（見事だぜ一刀、焔）　」

この事を孤狼は知っていたのであえて手を出さなかったのだ。（もし知らずにいたら孤狼も喧嘩に混じっていただろう）

一刀「焔、お前の色は白だぜ！多分昔は黒だったかもな　」

焔「うるせぇ、お前なんかと数ヶ月いたら俺も丸くなるもんだぜ」

そして全てをバラされた蛟は

蛟「フフフ…さすがは七天皇将軍を三人も倒した奴らだ、騙し討ちは効かないようだな」

さっきまでの態度が嘘のように蛟の性格が急変した。

蛟「私の名前は蛟なぞではない！皇龍様の配下、三大龍将軍の配下の中でも一番信用が高い七天皇将軍の一人、水神の水龍様なのさ！」

バンッ！

水龍「貴様らのことは皇龍様から聞いていたからな、聞けば七天皇将軍を三人も倒したらしいが私を他の三人と一緒にしない方がいい！なぜなら私は皇龍様から一番の信用を得てるのだからな」

及川「他と違うと言っておきながら騙し討ちとは卑怯な奴やで」

及川が言うと

ビシュンッ！！　ザシュッ！

水龍の指先から水鉄砲が発射されて水鉄砲が及川の頬をかすって少し切った。

水龍「役に立たないブ男は黙っていろ」

及川「は…はいっ！？」

じょろ～っ

水龍の迫力に少しちびる及川だった。

水龍「さてと、私と戦うのは誰だ？本来なら貴様らは五人だが何人でも構わんぞ」

水龍が言うと

焔「俺にやらせろ！テメェなんて俺一人で十分だ」

亞莎「では軍師として私もいきます」

秋蘭「ああいう奴は嫌いなタイプでな、私もやらせてもらうぞ」

天和「面白そうだから私もやるよ♪」

出場者の四人が決まりあと一人という時に誰かが手を挙げようとした瞬間

ザッパーンッ！！

いきなり水飛沫（みずしぶき）が噴射されたかと思うと

雫「話は聞いたよん♪雫もやるなの♪」

水の中から雫が現れた。

及川「（ハッ!?雫ちゃんはノーブラで水に入ったってことは…）
」

カチャッ！

及川は直ぐ様カメラを用意して雫を撮ろうとするが

バンッ！

雫「んっ？」

すでに雫は超進化していたため鎧を身に纏っていた。

ガーンッ!?

及川「ショックやんけ！きっと読者も雫ちゃんの裸を期待しとったのに！」

わけのわからぬことを叫ぶ及川だった。

１２２時間目「第四の国アクアランド」（後書き）

焔「焔だ。俺がまさか一刀とあんな手を使うとは思わなかったぜ！普段ああいうのは蒼魔の役目だしな。あんな奴はこの俺が焼き殺してやるぜ！と言いたいところだが、場所が水中じゃあ炎が使えねぇよ！？次回、『水中大決戦！』せっかく天和ちゃんがいるんだからいいとこ見せてやるぜ！」

１２３時間目「水中大決戦！」（前書き）

一刀「木龍を見事撃破した俺達は次の世界に向かった。向かった先はアクアランドという水の世界であり俺はそこで出会った蛟と仲良くなろうとするがそれを焔が拒否し、俺と焔が戦いを始めようとした。だが実はその戦いは蛟をはめようとした俺達の作戦で作戦は見事に成功した。そして正体を現した蛟は本来の名である水龍になり俺達に戦いを挑むのだった」

１２３時間目「水中大決戦！」

アクアランドにて戦う選手（焔、雫、秋蘭、亞莎、天和）が決まり、いよいよ戦いが始まろうとしていた。

焔「お前みたいな騙し討ちする卑怯もんは俺が焼き殺してやるぜ！」

雫「あんなナルシストな奴なんてどっかの奴を見ている気がして嫌なの～」

その理由は二人が在籍していたデスドラゴンナイツのなかに天宮零霧という男好きのナルシストがいたからだ。

水龍「それでは準備ができたようだし、戦いを始めようとするか」

パチンッ！

水龍が指を弾くと

ゴゴゴッ…！！

いきなり水が割れてきて

バッシャーッ！

水中へと続く道が開かれた。

水龍「これが私の戦場、名付けてアクアドーム怖じ気づいて逃げる

なら今のうちだぜ！」

水龍が言うと

焔「悪いが逃げる奴なんて一人もいないんだよ」

秋蘭「貴様のような奴は一度痛い目を見た方がいいからな」

亞莎「ゆ…許しません！」

天和「私だって頑張っちゃうもんね～♪」

やる気満々の五人

水龍「そんなに早く死にたいのなら別に構わないさ、ギャラリー（観客）は邪魔しないように上にいってね」

水龍「それではバトルスタンバイ！」

パチンッ！

水龍が指を弾くと

ザッパーンッ！！

回りからいきなり水が流れ出してきた。

亞莎「何が起きてるんですか！？」

天和「溺れちゃうよ～！？」

しかし何故か観客席の方には水が現れず闘技場だけが水だらけになってしまった。

孤狼「どうなってるんだよ!?」

地和「姉さんは大丈夫なの!?」

その頃、闘技場では

亞莎「あれっ!?」

天和「水の中なのに息ができるよ!?」

秋蘭「どういうことなのだ?」

水龍「フフフッ!この水は普通の水ではない!時水(じすい)という龍界にしかない水だ!」

時水…普通に触れても指定された時間が来ない限り水の感触（冷たさ等）が現れない水、時間が来る前なら水の中で呼吸も可能

水龍「だがあと一時間もすればこの水は普通の水と化する。つまり一時間以内に私を倒さなければ貴様らは溺れ死ぬのさ!」

水龍が言うと

及川「何言っとんねん!こんな水、わいが助けたるで♪」

この時、及川は泳げないのを忘れて飛び込もうとする。

だが

水龍「言っておくが、この闘技場には戦いが終わるまで選手以外の奴ははいれん！おまけに入ろうとすればそいつは死ぬ！」

水龍が言うと

及川「やっぱ邪魔したあかんよな～！？」

飛び込むのをやめる及川だった。

焔「へっ！一時間なんて要らねぇよ！テメェなんて奴は五分で片付けてやるぜ！」

バシュンッ！　ボッ！

超進化した焔は拳に炎を出すが

シュボッ！

焔「なっ！？」

その炎はすぐに消えてしまった。

水龍「バカめ忘れたのか！ここは呼吸はできても水の中なのだぞ水中で炎が作れるわけなかろうが！」

そのことをすっかり忘れていた焔だった。

秋蘭「ならばこの場は任してもらおうか！」

ぐぐっ！　ヒュンッ！

秋蘭は水龍に弓を放つが

のろ～っ！

秋蘭「なっ！？」

弓の早さはいつもより確実に遅かった。

春蘭「秋蘭よ！遊んでいる場合じゃないぞ！」

春蘭は叫ぶが別に遊んでいるわけではない

水龍「ここは水中だよ。物を投げたところで早さが遅くなるのは当たり前じゃん！」

おまけに遅くなるのは弓だけではない

亞莎「動きにくいです～！？」

水中では体の動きも遅くなるのだ。

水龍「それじゃあこちらからいかせてもらう」

スッ！

水龍は構えだす。

焔「バカかあいつ、さっき自分で水中では遅くなるって言ったばかりじゃねぇか」

確かに普通なら焔の言う通りなのだが

水龍「この私を貴様らと同じだと思うなよ！」

ギュンッ！　ドグボッ！！

焔「ごほっ！？」

水龍は驚くべき早さで魚雷のように焔に突進してきた。

水龍「これが私の『魚雷突撃（トーピードタックル）』だ！私は水中ならば陸の三倍ほどの速度で移動可能なのだよ！」

観客席

孤狼「あいつ、自分に得意なフィールドにしたってわけかよ！？」

及川「騙し討ちしたり回りを水にしたりとほんまに卑怯もんなやっちゃで」

及川が言うと

ビシッ！

水龍「そこのブ男！こいつらを殺したら次は貴様の番だから覚悟しておけ！」

及川を指さす水龍

及川「だそうですよアニキ　」

孤狼「俺のどこがブ男だ！＃明らかにお前だろうが！　」

孤狼になすりつける及川だった。

焔「なめるなよ！テメェの動きが早いからってなんだよ！悔しかったらこっちに来やがれ！　」

水龍を挑発する焔

水龍「そんなに早死にしたいならすぐに殺してやるぜ！　」

スッ

水龍は構える。

水龍「『魚雷突撃（トーピードタックル）』！　」

ギュンッ！！

ものすごい早さで焔に向かっていく水龍

ドグボッ！！

焔「ごほっ！？　」

そして水龍は焔に激突した。

だがこれこそが焔の狙いだったのだ。

ガシッ！

水龍「なにっ！？」

焔は水龍をガッチリ掴むと

焔「確かにテメェの早さは認めてやるよ。だが一度捕まえれば…」

ジャキンッ！

焔は水龍を取り押さえながら大剣・邪魂大蛇丸を取り出すと

焔「身動きとれないだろうが！」

ズバッ！！

水龍「ぐはっ！？」

焔は大剣で水龍の胴体を切り裂いた。

焔「どうだこの野郎が！」

今の一撃で勝利を確信した焔だったが

水龍「な～んちゃってね」

焔「なにっ！？」

焔は水龍が平気な顔をしているのに驚いていると

ぐにゃぐにゃっ

何と！？斬られたはずの胴体がくっつき始めたのだ

パァーンッ！

そして水龍の体が元に戻ると

水龍「残念だったね、私は自分の体を水にすることができるのだよ。切り裂かれる寸前に液体化したのさ」

秋蘭「液体人間（？）だと！？」

亞莎「斬られても平気ならどうやって倒せばいいんですか！？」

水龍の能力に驚くみんな

そんなとき

天和「あれっ？雫は？」

天和がさっきから雫がいないことに気づいた。

雫はどこに消えたのかというと

雫「フフフッ！水の中ならば…」

何処からか雫の声が聞こえたかと思うと

もわ～っ

雫「雫ちゃんの得意なフィールドなの！」

シュッ！

いきなり水龍の後ろから雫が出現し、水龍にチョップを食らわせようとする。

実は超進化した雫は水の中ならカメレオンのように体を一体化させて消えることができるのだ。

水龍「フンッ！私に不意打ちがきくものか！」

サッ！

しかし銃が主体の雫ではチョップの早さが遅すぎてしまい食らわす前に逃げられてしまった。

だが

ガシッ！

水龍「なんだこいつは！？」

いきなり水の人型が現れて水龍を捕らえる。

雫「フフフッ！その子は雫の分身体アクエリアンなの♪それじゃあ止めを指してあげるなの♪」

にょろりっ

いきなり雫の舌が伸び出した。

実は雫の舌は蛇のように長くすることができるのだ。

舌を伸ばした雫は身動きのとれない水龍の首を絞めようとする。

水龍「おのれっ！七天皇将軍の一人であるこの水龍様をなめるなよ！」

ぐぐっ！

捕らえられながらも水龍は雫に指を向けると

水龍「『スプラッシュプレッシャー』！」

ドキュンッ！！

水龍の指から強力水鉄砲が撃ち出され

ブシュンッ！！

雫の胸を貫いた。

雫「がはっ！？」

ばたっ！

雫はその場に倒れる。

水龍「手強い奴だったが所詮私の敵ではなかったようだな」

観客席では

及川「おのれーっ！！よくも雫ちゃんの巨乳を撃ちやがったなー！！わいが相手するからかかってこいや！＃」

いつになく怒る及川

一刀「待てよ及川、お前が行ったところで勝てる相手じゃない！」

一刀が及川を止める。

及川「放せやかずピー！『男にはたとえ勝てなくても逃げちゃいかん時がある。それは…女体を汚されたときだ』って鼻の長い嘘つき男が言ってたやんか！」

確かに似たような台詞をいっていたがそれは仲間の夢を笑われたときである。

一刀「落ち着け及川！雫は無事だ！」

及川「何言っとんねん！心臓を撃ち抜かれたんやで！心臓が別のとこにあるちゅうんか！」

一刀「いいから落ち着いて闘技場を見てみろ！」

一刀に言われて及川が闘技場を見てみると

水龍「さて、残った貴様らカスを殺すのにあまり時間をかけたくないのでな、まとめてかかってこい！」

くるっ

水龍が雫から目を離した瞬間

ドキュンッ！！　ピュッ！

水龍の後ろから水の弾丸が撃たれて水龍の頬をかすった。そして水龍の後ろには

バァーンッ！

雫「残念だったなの、雫ちゃんも体を水に変えることができるなの♪」

無事な姿の雫がいた。

及川「雫ちゃ～ん！生きとったんかいな！？」

一刀は前に雫が水になれることを見て知っていたのでたいして驚かなかったのだった。

そして顔を傷つけられた水龍は

水龍「私の美しい顔が！？」

ぷるぷるっ！！

水龍の体が震えだすと

水龍「貴様ら、絶対殺してやるー！！＃」

ボゴッ！！　めきめきっ！！

水龍が叫んだあと、水龍の体が変化していき

バァーンッ！

最後には醜い姿の巨大龍と化した。

１２３時間目「水中大決戦！」（後書き）

秋蘭「秋蘭だ。真の姿である醜い巨大龍へと化した水龍は我々の想像を越えた力を振りまくってくる。対する我々にはやつに対抗できる手段がない、もしその手があるとすれば…次回、『炎と水の龍合体（ドラゴンクロス）』それより姉者はいつ出るのだろうか？」

１２４時間目「炎と水の龍合体（ドラゴンクロス）」（前書き）

一刀「水龍と戦うメンバーが決まり、いよいよ戦いが始まるが水龍は場を自分の得意なフィールドにして優位に進めていく。焔も負けじと戦うが水の中では炎が使えず苦戦する。だが水の中で優位なのは水龍だけではなく雫も優位に進めていき雫が隙をついて水龍の頬に傷をつけた。だがその時水龍に異変が起きたのだ」

１２４時間目「炎と水の龍合体（ドラゴンクロス）」

雫に頬を斬られた水龍は美しい顔を斬られた怒りから

メキッ！　ゴボッ！

ジャーンッ！！

真の姿である醜い巨大龍に変化していった。

水龍（真）「私は醜いものが嫌いなのだが私の顔を傷つけた罪だ！貴様らは私が殺してやる」

真の姿になった水龍が言うと

雫「フンッ！でかくなった分、的が当たりやすくていいなの♪」

ドキュドキュンッ！

雫は愛銃・海龍で水龍を撃ちまくる。

だが

カキカキンッ！

水龍には全く効いていなかった。

水龍（真）「無駄なことを、真の姿になった私にそんなものが効くと思っているのか？水がある限り私は無敵なのだ！」

ブォンッ！！

雫「！？」

巨大龍になった水龍が尻尾を鞭のように雫を狙う。

桃香「雫ちゃん！？」

華琳「あのままじゃ直撃するわ！？」

驚くみんな

だが一人だけ例外がいた。

及川「大丈夫やでみんな、雫ちゃんは水になって攻撃防ぐっちゅう能力があるんやから」

雫の能力を知る及川がみんなに説明をする。

及川「なぁかずピー」

くるっ

及川が後ろにいる一刀の方に振り向いてみると

一刀「ヤバイな！？」

いつになく真剣な表情の一刀が現れた。

及川「何がヤバイっちゅうねん、雫ちゃんは水になれるんやから攻撃食らわへんから無敵やんけ」

及川が言うと

一刀「だったら何で雫は水龍を傷つけたんだ？」

及川「へっ？」

確かに水龍も雫と同じように水になれるのだから頬を斬られるのはおかしい

孤狼「あっ！そうか！？」

及川「なになに！？」

この中で一番頭のいい孤狼がその答えを見つけた。

そして孤狼が言う前に

ドカッ！！

雫「ぐほっ！？」

水龍の尾は雫に直撃した。

孤狼「どんな力にも時間がいるんだよ、一度水になったらまた水になるのに時間がかかるんだ！？」

孤狼の言う通り一見無敵に見える雫や水龍の能力には弱点があった。

それは能力の連続使用ができない点である。

一度水になったら再び水になるのに時間がかかるのだ。

水龍（真）「たとえ水になれたとしても私の一撃は食らっていただろうがな」

ちなみに真の姿になった水龍には連続使用ができないという点がなくなっている。

焔「野郎っ！」

スッ！

焔は水龍に不意打ちを食らわせようとするが

水龍（真）「このバカが！」

ドカッ！！

焔「ぐはっ！？」

水龍（真）「水の中で私に勝てるものなんていないのだよ！」

今は息ができるがここは水の中である。

おまけに

天和「ごぼっ！？」

亞莎「い…息が！？　」

実はすでに戦いが始まってから三十分が経過していてあと三十分もすればこの場は呼吸のできない普通の水になるのだ。

桃香「ヤバイよ～！？このまま戦いが長引けばこっちが不利だよ～！？　」

頭の悪い桃香にもわかる現状である。

だがそんなとき

及川「まぁ大丈夫やろ、焔！出し惜しみしてへんでさっさと究極進化してそんな奴ぶっ殺したれや！　」

これまでの七天皇将軍との戦いでは蒼魔・飛琳先生・恋といった究極進化ができる人達がいた。だから焔も究極進化するよう焔にいう及川だが

焔「（うるせぇ！しないじゃなくてできないんだよ！）　」

焔は究極進化しないのではなく、できないのだった。

焔「（一応やり方は飛琳の奴に聞いていたんだが…）　」

ここで話は数日前、龍界に行く前に遡る（さかのぼる）。

数日前、鬼龍と狐々にやられた焔は飛琳先生の元を訪ねていた。

飛琳「究極進化のやり方を教えろだって？」

焔「あぁ、アンタなら知ってるはずだぜ！一刀にだってできたんだから俺にだってできるはずだろ」

焔が飛琳先生に聞くと

飛琳「その方法なら簡単だ。超進化ができる人ならいつかはできるものだからな」

焔「いいから教えろ！」

焔が究極進化のやり方を聞くと

飛琳「お前も知っての通り、超進化は龍がほんのちょっと力を貸してようやくできる形態だ。そして龍が５０％力を貸してできる形態だと言った方が簡単だ。更に龍が１００％力を貸すと究極進化を越える力を手に入れることができる。まぁ俺は究極進化までだけどね。つまり龍が力を貸すか貸さないかで強化できるのさ、だから究極進化できる人とできない人がいても別におかしくない」

焔「つまり俺の中の龍が力を貸せば究極進化できるわけだな」

飛琳「そういうこと」

そしてそれから焔は幾度となく龍に話しかけてみるが龍は答えてくれなかった。

よって焔は究極進化ができないのだった。

焔「（究極進化ができない以上俺達が奴に勝てる策は一つしかない！）」

スッ

焔は雫に近づくと

焔「おい雫、頼みがある！」

雫「何なの？」

雫が聞くと

焔「俺と合体してくれ！」

バァーンッ！

焔が言った瞬間！

雫「この変態！」

バチンッ！

焔「ぐへっ！？」

焔は雫に頬を叩かれた。

亞莎「こんなときに何を言っているのですか／／／」

天和「焔って案外スケベなんだね」

秋蘭「貴様だけは真面目だと思っていたが幻滅したぞ」

訳がわからず焔の評価が下げられていく。

一刀「何で合体って言っただけであああなるんだ？」

鈍感な一刀もどうしたのかわからなかった。

及川「ホンマにかずピーはニブチンやな～、ええか合体ちゅうのは…」

及川が最後まで言おうとするが

華琳「やめなさい！それ以上言ったら１８禁になるわよ！」

華琳に止められるのだった。

雫「雫ちゃんが合体したいのはダーリンだけなの！焔のスケベ！」

焔「なに勘違いしてやがるんだ！俺だってお前より天…とにかく！俺が言っているのは龍合体（ドラゴンクロス）のことだ！」

龍合体（ドラゴンクロス）…簡単にいうと○ラゴン○ールのフュージョンみたいなもの、互いの力を合わせることにより二人の力を合わせた最強の戦士が誕生する。だが失敗すれば体に負荷がかかる諸刃の剣なのだ。

焔「お前と俺で龍合体するしかあいつに勝つ方法はない！」

雫「でも、あれって危険なんでしょ無理なの～」

前に一刀と蒼魔が龍合体した時はたまたまいけただけで一歩間違えば危険だったのだ。

くずる雫に

焔「馬鹿野郎！いつまでたってもなよなよしてんじゃねぇぞ！そんなんじゃ俺を越えるなんて一生無理なんだよ！＃」

ドクンッ！

焔の叫びを聞いた雫は何かを思い出していた。

それは今から数十年前、焔達デスドラゴンナイツが光魔の経営する光魔幼稚園に入園していたときのこと（デスドラゴンナイツのみんなは死龍を除いて幼稚園の頃から教育させられていた）

雫「うぇ～ん！」

水上雫。五歳　このときはまだ本来のおとなしめな性格（今のエロい性格になったのは一刀が原因）

映者「何でお前がナンバー４で俺が１０なんだよ！」

映者が雫をいじめていると

焔「やめろよ映者！」

日高焔。六歳　この時から強い

映者「ゲッ!?ナンバー1の焔じゃん逃げろ!」

慌てて逃げる映者

雫「しくしくっ!ありがとう焔くん。けどいいな焔くんは強くて、あたしも焔くんのように強くなりたい!どうすればいいの?」

雫が聞くと

焔「まずはそのなよなよした性格を直しな!それができたらいつか俺を越えられるぜ!」

そしてこの日を境に雫はなよなよが少しはおさまったのだった。

その事を思い出した雫は

雫「仕方がないなの、ホントはダーリンと合体したかったけど焔で我慢してあげるなの」

焔「ありがとな!ベースは俺に任せとけ!」

龍合体をする時、どちらかの体が基本ベースになるのだ。(選択は自由)

雫「任せるなの!」

スッ

雫は焔の手に手を重ねる。

だがその隙を見逃す水龍ではない

水龍（真）「何をする気かは知らないが隙だらけだぜ！」

スッ

水龍は構えると

水龍（真）「『ドラゴンタイフーン』！」

ゴォーーッ！！

水龍の口から巨大な水の竜巻が放たれ焔と雫に襲いかかる。

だがその時！

シュシュッ！　ドカカッ！

水龍（真）「！？」

水龍に弓と手甲がぶつかり

ぐらっ

水龍の攻撃が焔達からそれた

秋蘭「これくらいしかできないからな」

亞莎「今のうちです！」

水龍に攻撃した二人がいうと

焔・雫『龍合体！』

パァーッ！

そして二人の体が合わさっていき

焔「合体完了！」

ジャキンッ！

焔と雫は合体し、炎龍の兜、赤と青の鎧を身に纏い、邪魂大蛇丸と海龍を得物にした炎と水の合体戦士

その名も炎流騎士紫龍が誕生した。

水龍（真）「まさか合体するとはな！？だが水の中で私に勝てるわけがなかろう！」

焔「確かに水の中ならな、だがこうすりゃ別だぜ！」

ゴォーーッ！！

炎と水が合わさった紫龍は水の中でも炎を出すことが可能なのだ！

紫龍が出した豪炎は周りの水をすべて蒸発させていく

水龍（真）「バカな！？」

焔「水がなくなればお前なんてまさに『陸に上がったカッパ』だ」

スッ

そして紫龍になった焔は構えると

焔「『スチームフルバースト』！」

ゴォーーッ！！

水龍（真）「ぐおーっ！？」

ピシピシッ！

焔の放った熱風は水龍の体をどんどん干からびさしていき

バッキーンッ！

水龍の体が崩れていった。

１２４時間目「炎と水の龍合体（ドラゴンクロス）」（後書き）

愛紗「愛紗だ。水龍を撃破したものの焔は龍合体の後遺症で動けなくなり雫を除くドラグーンナイツも残ることになった。そして我々が次に光を通って出た先はいきなり海の上、そして渦に巻き込まれてしまい危機に陥る。次回、『第五の国パイレーツランド』ヤバイな！？確か姉上は泳ぎが得意ではなかったはずだ！？」

１２５時間目「第五の国パイレーツランド」（前書き）

一刀「雫に頬を切られ、激怒した水龍は真の姿である醜い巨大龍に変化していった。その圧倒的力に苦戦するメンバー達、頼みの綱である焔は究極進化ができないためさらに苦戦が迫ると思ったが、焔は雫との龍合体（ドラゴンクロス）を提案し二人は龍合体して炎と水の戦士である炎流騎士紫龍へと龍合体し見事に水龍を倒すのだった」

１２５時間目「第五の国パイレーツランド」

ピシピシッ！

水龍（真）「まさかこの皇龍様から一番の信頼を得ていた私が負けるなんて！？」

ピシピシッ！

龍合体（ドラゴンクロス）した焔の技を食らった水龍の体は干からびていき（水龍の体が水でできているため）

ぱっきーんっ！

最後には崩れていった。

パァーッ！　ヴィンッ！

焔「ふぅっ」

雫「ようやく元に戻れたなの♪」

そして二人の龍合体が解けた瞬間

ズキンッ！

焔「ぐおっ！？」

焔の体を激痛が襲う！

一刀「大丈夫かよ焔!?」

一刀が焔に近付くと

焔「やっぱそう簡単には強くなれないようだな、体が痛くて動けないぜ」

前に蒼魔と一刀が龍合体した時にはなんら影響がなかったが、普通ならば焔のようにベースとなった人間に激痛が走ってくるのだ!

焔「残念だが俺はここまでのようだ。先にいきやがれ!」

一刀「でも…」

一刀が焔を残して先に行くことに対して渋っていると

焔「いいからさっさといきやがれ!#お前は皇龍を倒すことだけを考えればいいんだよ!さっさと行きな!」

焔が強く言うと

一刀「わかった。回復したらすぐ来いよ待ってるからな」

ダッ!

そして一刀が先に進もうとすると

ビリー「待ってくれマイフレンド一刀」

ドラグーンナイツの一人であるビリーが一刀に話しかけてきた。

一刀「どうしたビリー？」

一刀が聞くと

ビリー「残念だがさっきの戦いを見て気づいたことがある。俺達ドラグーンナイツは力不足だから残ることにする」

ビリーが言うと

レイ「確かにビリーの言う通りだ。悔しいがいまの我々ではこの先の戦いでは足手まといになるのがわかる」

アルベルト「いまの君たちの実力を見ても超進化できたって対して実力が変わらないからね」

ロビン「というわけだ」

ルイ「（コクリッ）」

ドラグーンナイツのみんなが言うと

及川「やっぱ西森が考えたキャラやから他のやつより弱いからな～」

空気を読まない及川に対し

ガツンッ！☆ミ

孤狼「お前に言われたくないんだよ！＃」

及川「いった～！？」

孤狼が鉄槌を食らわした。

焔「だけどな、いまは負けているが必ず俺は貴様を越える力を手に入れてやるから覚悟しておけ！」

焔が言うと

一刀「わかったよ！あとの戦いは俺達に任せてくれ！」

ダッ！

そして一刀達は水龍が倒れたところに現れた次の世界に通じる光の柱に入っていった。

焔「頑張りな一刀！」

そしてその時

スッ！

麗羽「ちょっとお待ちなさいな！」

麗羽が焔の前を通りすぎると

焔「（あいつの腰に吊るしてある袋の中身は何だ？）」

またも倒れたところに落ちていた宝石を拾う麗羽だった。

そして一刀と雫を除くドラグーンナイツ（焔、ビリー、レイ、ルイ、アルベルト、ロビン）を残して光の柱を通った一刀達は

ウィンッ！

出口のゲートを通ると

一刀「えっ！？」

着いた先は…

ドボンッ！！

海の上だった。おまけにここで問題が発生する。

及川「あっぷっぷっ！？」

朱里「はわわ～！？」

雛里「あわわ～！？」

麗羽「溺れますわ！？」

この場にいた数名が泳げなかったのだ。

一刀「とりあえず泳ぎが得意な人は泳げない人を助けるんだ！」

ババッ！

みんなが一刀の指示通りにすると

季衣「んっ！兄ちゃん、あっちの方に何かあるよ」

目のいい季衣が何かを見つけた。

見つけたものは…

ゴォーーッ！！

大渦だった。

左慈「ヤバイぞ、あのままぶつかったら全滅だぜ！？」

一刀「みんな！急いで渦と逆方向に泳ぐんだ！」

バシャシャーッ！

一刀の指示通り動くみんなだがもう間に合わない！？

一刀「こうなったら渦を攻撃して威力を弱めるしか…」

一刀が渦に攻撃しようとしたその時！

シュルッ！

いきなり上からロープが落とされると

？「早くそのロープに捕まりな！」

いきなり声が聞こえてきて

一刀「どうなるかわからないけど渦よりましだ！」

ギュッ！

一刀がロープをつかんだ瞬間

桃香「一刀くんが信じるなら私も♪」

月「へぅ～っ！私もです！　」

及川「ここで死んだらハーレムランドを作るというワイの夢のためや！　」

ガシッ！　ガガシッ！

みんなも一斉にロープをつかんだ。

そして全員がロープをつかむと

ググイッ！！

ロープは引き上げられ一刀達は渦に飲み込まれずにすんだ。

沙和「助かったなの～！？　」

翠「何とか助かったな！？　」

蒲公英（タンポポ）「でも何が起きたんだろう？　」

スッ

蒲公英がロープの先を見てみると

バァーンッ!!

そこには龍を船首にした巨大な海賊船があった。

真桜「でっかい船やな～!?こんなでっかいの見たことないで!?」

真桜が驚くほど巨大な船はガレオン船と呼ばれる船の中でも大きな船だったがその中でもこの船は巨大だったのだ。

そして引き上げられた一刀達が看板にあがると

?「お前さん達無事でよかったな!」

ズンッ!

大柄の黄金の鎧を装着し、人間のような顔と筋肉、龍のかぶりものをした海賊の龍が出てきた。

一刀「助けてくれてどうもありがとう」

一刀がお礼を言うと

?「礼なんていいってことよ!海の男は人助けしなくちゃな!」

心が広い人物だった。

賊龍「俺の名は賊龍、この船の船長をしている」

賊龍が言うと

一龍「（賊龍だと!?確か七天皇将軍の一人で金剛の名で有名じゃねぇか!?）」

賊龍という名前を聞いて一龍は驚いた。

賊龍「それにしてもお前さん達このパイレーツランドでは見ない顔だがどこのどいつだ?」

賊龍が聞くと

一龍「俺達はよその世界から間違ってこの世界にやって来たんだよ!」

賊龍「なるほどねぇ」

嘘をいう一龍

一刀「（何で嘘をいうんだよ!）」

一龍「（こいつは七天皇将軍の一人で金剛の賊龍という将軍の中でも力自慢のやつなんだ!この場で正体を明かしたら俺達が勝てる相手じゃない!）」

一龍が一刀に説明していると

船員「船長！大変です　」

一匹の船員の龍がやって来た。

賊龍「そんなに慌ててどうした？　」

船員「皇龍様より連絡が入りました！この世界に侵入者が来たらしいので始末するようにと！　」

賊龍「侵入者だと！？　」

すでに一刀達がこの世界に来たことはバレていた。

船員「船長！おそらく七天皇将軍を四人も倒したやつらですよ！　」

賊龍「そうかもしれないな。あんたらよそから来たなら知らないか？　」

賊龍が一刀達に聞いてくると

一龍「俺達が知るわけないじゃんなぁ！？　」

及川「せやせやっ！わいらがその侵入者だなんて口が裂けても言えるわけ…あっ！？　」

うっかり及川がバラしてしまった。

その瞬間

船員「やっぱりお前らだったか！」

船員「首を斬って皇龍様への手土産にしてやるぜ！」

ジャキンッ！！

一斉に剣を抜く船員達

麗羽「自分からバラすなんてあなた馬鹿じゃありませんの！＃」

及川「馬鹿に馬鹿と言われとうないわ！＃」

愛紗「口喧嘩している場合か！」

孤狼「こうなりゃ俺が全員殺してやるぜ！」

ジリジリッ

そしてジリジリと船員が一刀達に近寄ってきたその時

賊龍「やめろ野郎共！」

賊龍が船員達を止めた。

船員「何で止めるんですか船員！？こいつらを仕留めれば俺達の名が上がりますよ！」

船員が言うと

賊龍「名なんて上げなくてもいいんだよ！お前ら、ここは龍界らし

く戦いで決着つけようじゃねぇか！お前らの中から五人出な！俺と戦って勝てたら見逃してやる！」

賊龍が言うと

恋「…あいつ良いやつ」

孤狼「戦いで決着だなんていいじゃねぇか！俺が出てやるぜ！」

孤狼が出ようとすると

一刀「待ってくれ兄貴！ここは俺がいく！」

一刀が出ていこうとする。

一刀「爺ちゃんとの特訓の成果を試すにはもってこいの相手なんでな」

孤狼「しかたねぇな、その代わり負けたら承知しねぇから覚悟しておけ！」

孤狼も納得して一刀が出ることになった。

一刀「一人目は俺だ！」

バンッ！

一刀が賊龍の前に出ると

賊龍「（なかなか強い気の持ち主じゃねぇか）んじゃ早く他のやつ

を決め…」

賊龍が最後まで言おうとすると

一刀「あとのメンバーはあんたが決めてくれ！」

バンッ！

一刀のこの一言に

及川「何を言ってんねんかずピー！？」

麗羽「このブ男の言う通りですわ！もし華麗で可憐なわたくしが選ばれたらどう責任とってくれますの！」

ブーイングをする二人

一刀「大丈夫だ！こいつは弱いやつを選んだりしない奴だ！」

及川「何でわかんねん！？」

及川の言葉に一刀は

一刀「さっきからこいつの気の色を見ていたんだが黒じゃないからそういうだけさ」

気の色がわからないみんなには意味不明な言葉だが

賊龍「（こいつ、下等な人間にしては良い心じゃねぇか欲しくなっちまったぜ！）よしそれじゃあ…」

そして賊龍が選んだメンバーは

賊龍「お前らだ！」

ビシッ！

愛紗、思春、凪、詠が選ばれた。

月「詠ちゃん頑張って！」

蓮華「頼むぞ思春！」

桃香「愛紗ちゃんファイトだよ！」

沙和「凪ちゃん頑張るなの～！」

真桜「愛しの会長にエエとこ見せるチャンスやで！」

出場選手にエールを送るみんな

詠「絶対勝つからね！」

思春「お任せください蓮華様！」

愛紗「精一杯頑張るとするか！」

凪「何を言っているんだ二人とも！／／／」

そしてエールに答える選手達だった。

一刀「（修行の成果、見せてやるぜ！）」

そしていよいよ試合が始まる。

１２５時間目「第五の国パイレーツランド」（後書き）

思春「思春だ。賊龍との戦いは船にあるものならば何でも使用可能というパイレーツデスマッチで決着をつけることになり船内での戦いが始まる。そして我々はチームワークがうまくいかず苦戦をするのであった。次回、『パイレーツデスマッチ』鈴の音が聞こえた時は貴様の最後だ北郷！」

１２６時間目「パイレーツデスマッチ」（前書き）

一刀「龍合体をして見事水龍を倒した焔、だが龍合体の代償として焔の体は傷ついてしまい雫を除いたドラグーンナイツのみんなも力不足を感じて残ってしまう。そして次の世界に向かった俺達だが着いた先は海の中、おまけに大渦が発生しいきなりの危機に陥るなか船からロープが下ろされてなんとか救出される。助けてくれたのは七天皇将軍である金剛の賊龍であった。賊龍の恐ろしさを知っている一龍は俺達のことを隠そうとするがうっかり及川がバラしてしまう。だが心の広い賊龍は俺達に戦いを挑むこととなり俺と仲間が選ばれることになったのだった」

126時間目「パイレーツデスマッチ」

賊龍「試合のルールは簡単だ！海賊ならではの戦い、その名も『パイレーツデスマッチ』でいくぜ！」

一刀「パイレーツデスマッチ？」

及川「おっぱい列ケツマッチ？」

一刀達はパイレーツデスマッチを知らないため意味がわからなかった。

賊龍「パイレーツデスマッチというのはこの船の中にあるものなら何でも使用可能というデスマッチさ！海に落ちた奴は失格！お前ら全員が海に落ちたら俺の勝ち！お前らが俺を倒せばお前らの勝ちだ！」

賊龍が説明すると

一刀「なるほど、この船の中で戦うわけか！」

賊龍「そういうこと、では戦いの開始だぜ！」

そして賊龍と一刀達（一刀、愛紗、思春、凪、詠）の戦いが始まろうとしていたのだが

及川「あれっ？そういえば　」

及川が何かに気がついた。

及川「かずピー！確かお前船に乗ると船酔いするんやなかったかいな？」

及川が一刀に言った直後

一刀「オエーッ！！」

一刀は急に吐き出した。

忘れている人もいると思うが一刀はひどい乗り物酔いで船はもちろん飛行機、潜水艦、熱気球など陸から離れる乗り物に乗って陸から離れた直後に吐き出すのだった。

一刀は戦いの前だったのでその事を思い出さないでいたのだ。

孤狼「馬鹿野郎！余計なことを言いやがって！＃」

于吉「左慈まで酔っちゃったじゃないですか！」

左慈「オエーッ！！」

ちなみに左慈も一刀と同類の乗り物酔いである。

及川「だってこう言わな疑問に思った読者から感想で送られるかもしれへんやん！？」

及川が何を言っているかはわからない

凪「会長大丈夫ですか！？」

さすりっ

凪が優しく一刀の背中をさする。

愛紗「ふんっ！だらしのない奴だ！」

思春「役立たずが！」

詠「こうなったらあのバカ抜きでやるしかないわね！」

一刀に冷たい態度を取る三人

何故ならこの三人は日頃から一刀のことをよく思っていないのだ。

（理由は姉、主君、友達が一刀にホの字だからである）

仕方がないので一刀抜きで戦うことにする三人

賊龍「五人で戦っていいのに三人で来るとはな！まぁ別に構わないぜ！誰かゴングを鳴らしな！」

賊龍が指示すると

ゴォーンッ！！

甲板にある巨大ゴングが鳴らされて試合が開始された。

愛紗「（あのでかい図体（ずうたい）なら懐に入れば攻撃できまい！）」

思春「（あのでかい図体なら早く動けまい！）」

と同時に思った二人は

ビュンッ！！

試合開始と共に走り出すと

愛紗・思春『（もらった！）』

ブォンッ！！

同時に攻撃を仕掛けるが

ガキンッ！！☆ミ

愛紗・思春『なっ！？』

同じ場所を狙ったため二人の武器がぶつかり合ってしまった。

愛紗「何でここを攻撃するのだ！？」

思春「貴様こそ！」

そして二人がもめている間に

詠「何やってるの二人とも！前を見なさい」

愛紗・思春『えっ！？』

詠に言われて二人が前を見ると

グォンッ！！

目の前に賊龍の拳が現れ

ドグボッ！！

不意を突かれた二人は避けることもできずに攻撃を食らってしまった。

この戦いを見ていたみんなは

星「チームワークがとれていないな」

穏「あれじゃあうまく攻撃できませんね～」

誰が見てもわかるような答えを出していた。

朱里「肝心の一刀さんはまともに動けませんし」

朱里の言うように一刀は

一刀「オエーッ！！」

まだ吐いてまともに動けずにいた。

一刀「凪、俺のことはいいから愛紗達を助けてやってくれ」

凪「そんな！会長を置いておくなんてできません！」

一刀の元から離れない凪に一刀は

一刀「自分のことは自分で何とかするから頼む凪！」

ガシッ！

一刀が凪の手をつかみながら言うと

凪「（この手は洗えないな！）わかりました！／／／」

ダッ！

凪は賊龍に向かっていった。

その様子を見た一刀大好きっ子は

桃香「（凪ちゃん一刀くんと手をつないでいいな～）」

華琳「（後で凪と手を繋げば間接握手ね）」

蓮華「（次は私が！）」

月「（凪さん羨ましいです）」

雫「（雫も後でダーリンと握手しちゃおっと♪）」

天和「（一刀が握手会に来るように仕向けなきゃ！）」

と考えていた。

そして考えている間にも戦いは繰り広げられていたが

愛紗「邪魔だ！」

思春「貴様こそどけ！」

詠「ちょっと退きなさいよ！」

互いが互いに脚を引っ張りあっていたため賊龍にまともな一撃は当たらなかった。

賊龍「『バイキングアックスブーメラン』！」

ブンッ！！

賊龍が口論しあっている三人目掛けて斧を投げつけてくる！

だが三人は口論していて迫ってくる斧にまったく気付いていない！

愛紗・思春・詠『！？』

そしてようやく三人が気づいた時にはもはや避けられる時間がなかった。

だがそんなとき

凪「ハァッ！！」

ドンッ！！

駆けつけた凪が気弾を斧にぶつけて弾いた。

愛紗「ありがとう凪　」

思春「恩にきる　」

詠「助かったわ！？　」

みんなが凪にお礼を言うと

凪「今は口論している場合じゃありませんよ！　」

凪が言うと

愛紗「確かにそうだな！　」

思春「口論している場合では無さそうだ！　」

詠「ここは協力しなくちゃね！　」

さっきまで口論していた三人が協力するような言葉を言った。

凪「（会長ならきっとこう言うと思ったから言ったのだが効果覿面だな）　」

そして本来その台詞を言うべきだった一刀はというと

一刀「オエーッ！！　」

未だに吐き続けていた。

一刀「くそっ！こんなに乗り物酔いになったのもクソジジイ（刃）がむかし色々な乗り物に乗せてもらった時に無茶な運転したからだ」

一刀は幼少期祖父である刃に様々な乗り物に乗せてもらったのだが、飛行機に乗れば連続アクロバット！船に乗れば高速蛇行運転！などをされたため酷い乗り物酔いになってしまっていた。（最後に車の運転をしようとしたが両親に阻止された）

そして戦いの方では

愛紗「ハァッ！」

ブンッ！

思春「ふんっ！」

シュッ！

詠「おりゃっ！」

ドカッ！

凪の一括で互いを邪魔しあうことが徐々になくなってきていた。

だが賊龍が攻撃を防いでいるためまともに一撃を食らっていない！

愛紗「だがこのまま攻めこめば我らが有利に違いない！」

確かにこのままいけば数で押す愛紗達の方が分があったのだが

ぐらりっ！

愛紗「なっ！？」

この場は船なので時折揺れることがある。

小さな揺れもあれば…

ぐららっ！！

思春「なっ！？」

詠「うわっ！？」

船に慣れている思春ですらぐらつくほどの大きな揺れもある。そして受け身がとれないほど体がぐらついた瞬間

賊龍「おりゃーっ！」

ドカッ！！

思春「ぐふっ！？」

大きな揺れに慣れている賊龍が優位に戦えるのだ。

詠「思春！？」

凪「こんなに揺れていてはうまく戦えません！？」

慣れない足場に苦戦するみんな

そして外野から見ていたみんなは

于吉「この場は賊龍に優位すぎますね！？」

及川「かずピーは空飛べるやろ！どないしたんや！？」

確かに一刀は超進化ができるので空を飛ぶことができるため揺れようが関係ない！だがその一刀は

一刀「きもちわる～！？」

未だに吐き続けていた。

及川「なにいつまでも吐き続けてんねん！？」

孤狼「お前が余計なことを言ったからだろうが！＃」

確かに及川が余計なことを言わなければこのようなことは起きなかったのかもしれない

桃香「頑張ってよ一刀くん！このままじゃ愛紗ちゃん達が危ないんだよ！」

そして桃香が一刀に叫ぶと

よろりっ

一刀「仲間は助けないとな…」

一刀はよろよろの体で助けにいこうとするが

ぐらりっ！

一刀「オエーッ！！」

すぐに吐くためろくに動けなかった。

華琳「こうなったら…一刀、これを見なさい！」

華琳が一刀を呼ぶとあるものを見せる。それは…

ジャーンッ！

糸のついた5円玉。すなわち

華琳「ここは陸よ～、早く立ち直りなさ～い」

ゆらゆらりっ

華琳は一刀に催眠術をかけていた。

及川「そんなもんが効くわけ…」

ところが

一刀「ここは陸だ！」

シャキンッ！

一刀は完全に華琳の催眠術にかかっていた。

乗り物酔いが激しい一刀だが脚が陸に触れた途端復活するのだ！

一刀「今いくぜ！」

ジャキンッ！！

催眠術にかかった一刀は一気に究極進化すると

キィーンッ！！

飛行しながら賊龍に向かっていき

ドカッ！！

賊龍「ごふっ！？」

賊龍の腹に頭突きを食らわした。

凪「会長！？」

愛紗「あいつに一撃を食らわせるとはさすがだな！？」

みんなが一刀の登場に驚いていると

スタッ！

地面に降りた一刀は

一刀「ここが陸なら平気だ！そろそろ本気を出してやるぜ！」

ビシッ！

賊龍に向かって言うと

賊龍「俺を吹っ飛ばすなんてたいした奴じゃねぇか、気に入った！俺が勝ったらお前を仲間に加えさせてもらうぜ！」

１２６時間目「パイレーツデスマッチ」（後書き）

詠「詠よ！ついにあのバカがましになったわね。まったく、ボク達を危ない目に遭わせるんじゃないわよ！だけども賊龍もバカ（一刀）を仲間にするために本気を出してきたから大変ね！？次回、『修行の成果』バカ○ンコ！とっととそんな奴倒しちゃいなさい！」

１２７時間目「修行の成果」（前書き）

一刀「賊龍と戦うことになった俺と仲間達（愛紗、思春、凪、詠）。だが俺は忘れていたのに及川が余計なことを言ったせいで乗り物酔いになってしまいまとめに戦えなくなり愛紗達が戦うことになったのだがチームワークが無茶苦茶なせいで苦戦する。何とか俺の言うべき言葉を凪が代わりにいってくれたおかげでチームワークは多少よくなったがなかなか一撃を食らわせることができない。そして乗り物酔いで苦しむ俺は華琳の催眠術によって体調がよくなり戦いに復帰するのだった」

１２７時間目「修行の成果」

一刀「俺を仲間にだと、いいぜ俺に勝ったら仲間になってやるぜ！」

賊龍の勝ったら一刀を仲間にするという言葉に返答する一刀

桃香「（ありえないけどもし一刀くんが負けたら海賊になっちゃうわけだからそうなったら海賊の奥さんになるわけか、でも私魚苦手だから大変だろうな！？）」

桃香が勝手な妄想をふくらませる

バシューッ！！

一刀「爺ちゃん（優神）との修行の成果を見せてやるぜ！」

一刀は今までに出したことのない気を放出させた。

凪「（この気は前に皇を倒した時以上の気だ！？）」

愛紗「（こいつはどこまで強くなるのだ！？）」

二人が一刀の気に驚いていると

賊龍「大した気じゃねぇか、それなら俺も本気で戦えそうだぜ！驚くなよ俺が本気で戦うのは七天皇将軍最強である陽龍以来だからな！」

ドゴォッ！！

賊龍も負けじとすごい気を放出させた。

凪「（恐ろしい二人だ！？この気の量は私をはるかに越えている！？）」

仮に凪の気の量を１００だとすると二人の気の量は一万を越えるほどすさまじいのだ。

そして実力の差がありすぎると感じたのは凪だけではない

愛紗「（実力が違いすぎる！？）」

武人である愛紗も二人の実力に驚いていた。

そして二人のとるべき行動は

スッ！　スッ！

ガシッ！　ガシッ！

思春「なっ！？」

詠「えっ！？」

愛紗は詠を、凪は思春を担ぐ（かつぐ）と

愛紗「一刀！必ずそいつを倒せ！」

凪「会長！負けたら火炎鍋（１０２話参照）１００杯食べてもらいますよ！」

二人の戦いの邪魔にならないよう

スッ！　ザボンッ！！

自ら戦いを辞退するため海に落ちるしかなかった。

一刀「あぁ任せとけ！」

二人の気持ちを受け取った一刀はますます勝たなければいけない気になった。

スッ

そして一刀は構える。

そして構えた瞬間

ビュンッ！！

賊龍「！？」

及川「かずピーが消えおった！？」

孤狼「いや、消えたんじゃねぇよ！？」

孤狼の言う通り一刀は消えたのではなく

キィンッ！！

ドカッ！！

賊龍「ぐほっ！？」

ものすごい早さで移動しているのだ。

もはやこの早さを見切れるものはこの場には数人しかいなかった。

実は修行の間、ずっと一刀は早さを鍛えていたのだ。一刀の祖父の優神いわく長所を伸ばせのこと

そして見事に一撃を決めた一刀だが

賊龍「それで本気か？」

賊龍にはあんまり効いていなかった。

ガシッ！

賊龍「早く動く奴だってこうして動きを封じれば…」

賊龍は一刀を捕まえると

賊龍「意味ねぇんだよ！」

ドガッ！！

賊龍は一刀に頭突きを食らわした。

船員「船長の頭突きをくらったらおしまいだぜ！下手すりゃ頭蓋骨が砕けちまうからな！」

及川「何やて！？いくらかずピーでもんなもん食らったらお終いやんか！？」

及川が一人驚くなか

孤狼「馬鹿かお前は！て言うか馬鹿だったな。お前は半年以上も一刀と一緒にいて気付いてないのかよ！この小説を毎回見ている人なら気づいてるぜ」

及川「へっ？」

孤狼の言う通り一刀の取り柄は早さだけではない！この小説を見ていたらわかるが一刀はいままで瓦礫が当たってもほとんど平気だったり、トラックにはねられたり、ジェット機が激突しても大したダメージを受けないくらい頑丈なのだ。

そのため普通なら頭蓋骨が砕けるほどの賊龍の頭突きを食らっても

一刀「けっこう痛かったな！？」

多少の血が出るだけで平気だったのだ。

賊龍「大した奴だぜ、俺の頭突きを食らっても平気だなんてなますます欲しくなったぜ！」

一刀「俺もあんたみたいなタフな奴は久し振りだぜ俺の拳を受けて

も平気だった奴は兄貴（孤狼）以来だからな」

そして二人は互いに距離をとると

一刀「『聖俄龍斬撃刃』！」

ギィンッ！！

賊龍「『バイキングトマホーク』！」

ブォンッ！！

ドガキンッ！！☆ミ

一刀は剣を突きだし、賊龍は斧で攻撃してきた。

一刀「やるな！」

賊龍「お前こそ！」

スッ

そしてまた二人は互いに距離をとると

賊龍「俺は時間をかけるのが嫌いでな、さっさと勝負を終わらせようぜ！」

一刀「挑むところだ！」

シュンッ！！

そしてまた一刀は高速移動する

一刀「この戦いは船にあるものなら何でも使用可能だったよな！だったらあれを使っても文句ないだろ」

一刀が高速で向かった先は

バァンッ！！

大砲である！。

賊龍「なるほど大砲の勢いでお前のスピードを上げて俺に攻撃するつもりだな！」

一刀は自慢のスピードにさらに加速をつけようとしているのだ。

賊龍「だが俺の計算ではお前が加速したところで俺を倒す威力はないぜ！」

一刀「やってみなきゃわからないだろ！」

スッ

そして一刀は大砲に入り込んだ。

及川「無茶やでかずピー！？倒れるかの前にあいつが避けたらどないすんねん！？」

孤狼「馬鹿かお前は！そこで逃げたら奴は男じゃねぇよ！」

及川「男やないって、あいつあんな姿してても実は女とか？」

ガツンッ！！☆ミ

つまらないギャグを言う及川を殴る孤狼

孤狼「（だが確かに賊龍の言う通り普通にいったってそいつは倒せない！？かといって大砲突撃をやめて他の手を使えば一刀が男じゃなくなってしまう一か八かの賭けかそれとも…！？）」

この先は孤狼でも予想がつけなかった。

そしてついに二人が激突しようとする

ドッカーンッ！！

一刀「おりゃーっ！！」

一刀の入った大砲から一刀が発射され

一刀「『項羽と光龍の融合突（ファイナルドラゴンフュージョン）』！」

ゴォッ！！

一刀は全身から光の気を出して突進を仕掛ける。これが究極進化した一刀の最強技なのだ！

賊龍「向かってくるなら迎え撃つまでだぜ！」

スッ！

賊龍は斧を構えて一刀を迎え撃とうとする。

だが

ギュルルーッ！！

一刀は賊龍に向かう途中で体を回転させた。

一刀「『項羽と光龍の融合突・螺旋（ファイナルドラゴンフュージョン・トルネード）』！」

ドガガーッ！！

バチバチーッ！！

体を回転して突撃した一刀は賊龍の斧とぶつかり合って凄まじい火花を飛ばしまくる。

孤狼「やるじゃねぇか一刀！体を回転させて螺旋力をプラスするとはな！？」

簡単に言うと普通の槍では貫けないものでも回転させれば貫けることである。

賊龍「（ぐっ！？急に体を回転させて威力を高めるとはな！？だがこの技はこいつにも危険なはず！？）」

何故なら一刀は体を極限まで回転させているのでそんな状態で突進

を続けていたら硬い鉄板にドリルを無理矢理押し込むようなものでありそんなことをすればドリルが壊れるように一刀の命が危ないのだ。

一刀「うぉーっ！！」

ギュルルーッ！！

だが一刀はそんなことお構い無しとばかりにますます回転力を上げていき

ピシッ！

賊龍の斧にヒビが入ると

ガッキーンッ！！

賊龍「なっ！？」

賊龍の斧を砕き、そして…

一刀「うぉりゃーっ！！」

ドガガーッ！！

賊龍「ごふっ！？」

賊龍の腹に一撃を食らわした。

そして一刀の一撃を食らった賊龍は

ぐらりっ！

その巨体が崩れるくらい揺れると

ガクンッ！

足を滑らせて海の方に落ちていく！

及川「やったで！あいつが海に落ちればかずピーの勝ちや！しかも落ちた先には尖った岩があるから串刺しやで！」

喜ぶ及川だが

ガシッ！

一刀は落ちそうになった賊龍の腕をつかんだ！

賊龍「なんの真似だ！？」

賊龍が聞くと

一刀「俺はこんな形でお前を死なせたくないだけさ」

ぐいっ！

そして一刀は賊龍の体を引き上げると

一刀「さぁ！戦いの続きしようぜ！」

さっきの技の衝動で体が痛みながらも戦おうとする一刀に対して

賊龍「ガハハッ！今の一撃で俺も動けねぇ！俺の敗けだ！」

賊龍は素直に敗けを認めた。

一刀「何言ってんだあんた！？まだ終わってないだろ！」

賊龍「俺の敗けだよ！海賊ってのは自分の武器を壊された時点で敗けなのさ！龍界でも硬い金属を砕いたお前の勝ちだ！」

一刀「賊龍…」

賊龍「お前なら必ず皇龍を倒してくれると信じてるぜ」

賊龍が言うと

及川「はっ！？おっさん皇龍の手下やんけなんでんなこというんや？」

桂花「あんた馬鹿じゃないの！前に熊がいってたでしょ！『龍界の奴全てが皇龍に従っているわけじゃない』って！まぁあんたの頭じゃ忘れてても仕方ないけどね」

及川「なんやと！この猫耳貧乳！＃」

桂花「全身精液変態馬鹿男のあんたに馬鹿にされたくないわよ！＃」

口喧嘩している二人は置いといて

賊龍「俺は今の龍界が嫌いだ！支配なんてつながりはいらねぇんだよ！だから俺はお前達に味方してやるぜ！」

一刀「賊龍…」

スッ

賊龍の気持ちを聞いた一刀が手を差し出すと

賊龍「仲良しの握手ってわけか！」

スッ…

賊龍が手を差し出そうとしたその時

ズドンッ！！！！！

賊龍「がはっ！？」

バタッ！

何かが賊龍の心臓を貫いた。

１２７時間目「修行の成果」（後書き）

孤狼「孤狼だ！優しき賊龍の死を悲しむ一刀を連れて次の世界に来た俺達。だがそこは砂だらけの砂漠だった。おまけにみんなが蠍（さそり）の毒に苦しみ出しやがった！？次回、『第六の国サンドランド』みんなは必ず俺が助けてやるぜ！」

飛琳「飛琳先生と軍師達のキャラ紹介コーナー♪」

朱里「はわわ！？いきなりなんでしゅか！？」

飛琳「感想の中にキャラ紹介をしてほしいとあったのでねみんなの紹介をすることになったんだよ！これを読めばこの小説のキャラが大体わかる！もちろんプライベートも大公開！原作キャラは大抵同じだけどね♪」

朱里「それはブライバシーの侵害ですよ！」

飛琳「だったら朱里ちゃんならいいわけだね♪え～っと、好きな八百一は…」

朱里「はわわ～！？わかりました許可しますよ～！」

飛琳「よろしい！では第一回目はもちろんこの人！」

北郷一刀　漢組　２年　１８歳

武器・木刀

本作の主人公。原作では兵隊クラスの力だがこの小説では最強クラス。まだまだ強さは成長する。

好きなもの：ごちそう、美女、強くて良い奴

嫌いなもの：残虐な悪い奴、卑怯もの、祖父の刃

弱点：女への攻撃、陸から離れた乗り物（船や飛行機）、怒った時の母さん

体の固さは本作一！刃譲りのスケベな性格、フランチェスカの生徒会長、逃げ足も早い

超進化と究極進化が使える人間

翠川優刀と北郷切刃の長男、妹に一刃がいる。

多くの女子に好かれているが本人は鈍感

飛琳「まだあるかもしれないけどとりあえずここまでだね」

朱里「はわわ～!?私も一刀さんに好いたらメインヒロインの一人になれるかも」

飛琳「まぁ回りの敵は多いけどね」

朱里「はわわ～!?」

１２８時間目「第六の国サンドランド」（前書き）

一刀「華琳の催眠術により船酔いが復活した俺は賊龍と戦うことになる。お互いに激闘を繰り広げるなか、俺は最後の力を振り絞って賊龍に一撃を仕掛けようとする。対する賊龍は俺を迎え撃とうと構える。そして攻撃に回転を加えた俺は防ごうとした賊龍の斧を粉砕し賊龍はブッ飛ばされ海に落ちてしまう。だが俺は賊龍のようないい奴をほっておけず助けてしまうと賊龍は思わず笑ってしまい俺達に味方してくれると言う。そして俺と賊龍が握手をしようとしたその時！」

１２８時間目「第六の国サンドランド」

賊龍「ぐふっ！？」

バタッ！

賊龍が自ら敗北し、一刀に味方すると言った直後、何かが賊龍の心臓を貫いた。

一刀「賊龍…」

スッ

倒れた賊龍に近づく一刀

一刀「しっかりしろよ！こんなことで死ぬお前じゃないだろう！？」

いつもは冷静な一刀が取り乱す

仲間達はただそれを見つめるばかり

そんなとき

？「七天皇将軍のくせに私にそむくとは馬鹿な奴め」

一刀「誰だ！」

突然声が聞こえ、声の出所を探す一刀

蓮華「ちょっとあれを見て!?」

そんなとき蓮華が空に怪しげな雲があるのを見つけた。

ザザザッ…

そしてその雲がまるでスクリーンのように何かを写し出す。

パッ!

そして写し出されたのは

皇龍「はじめまして人間界の諸君」

一龍「そんな馬鹿な!?」

写し出された人物に一龍は心当たりがあった。

及川「おいおいなにを驚いてんねん、あんな渋顔のおっさんがどないしたんや?」

及川が言うと

皇龍「渋顔のおっさんで悪かったな!私の名は皇龍、この龍界の皇帝だ!」

及川「皇帝?冗談もほどほどに…って、えーっ!?」

今さら驚く及川だった。

一刀「あいつが皇龍!?」

桃香「すごく大きいよ!?」

みんなが皇龍に驚いていると

皇龍「貴様達、下等な人間にしては七天皇将軍を五人も倒すだなんてすごいじゃないか、どうだその力を私に貸せば命だけは助けてやるぞ」

皇龍が言うと

及川「私は皇龍様に仕えます!」

ビシッ!

あっさり裏切る及川

桂花「あんた裏切るなんて最低ね!#」

及川「やかましい!わいは強いもんの味方なんや!皇龍様、わいの命だけでも助けてちょうだいな♪」

皇龍「貴様のような雑魚なんて必要ない!とっととうせろ!」

あっさり切り捨てられる及川だった。

皇龍「貴様は確か北郷一刀とかいったな、お前の実力ならば賊龍の代わりの七天皇将軍として出迎えるがどう…」

皇龍が最後まで言おうとすると

一刀「…るな」

皇龍「んっ？」

一刀「ふざけるな！！＃仲間を大事にしない奴なんて俺は大嫌いなんだよ！＃待ってろよ皇龍、お前は必ず俺が倒してやるぜ！」

ドォーンッ！！

皇龍に堂々と宣戦布告する一刀

皇龍「フフフッ！私を倒すなんて人間とはすごいことを言うものだな。いいだろう皇帝神魔城にて貴様を八つ裂きにしてやるから覚悟しておけ！」

フッ！

そして映像が消えると

孤狼「見事だぜ一刀！俺がお前でも同じこと言ってたろうよ」

孤狼が言うと

？「やっぱりたいした奴だなお前は…」

！？

一刀が声の聞こえてきた方を見てみると

バンッ！

そこには心臓を貫かれて死んだと思われていた賊龍がいた。

一刀「賊龍、お前無事だったのか！？」

一刀は賊龍に近づくが

賊龍「悪いがタフが売りの俺でもあと数分しか生きられねぇよ。それにしても皇帝に宣戦布告するなんてやっぱりお前はすごい奴だぜ…ぐふっ！！」

喋りながら口から血を出す賊龍

賊龍「絶対皇龍を倒してくれそれが俺の最後の望みだ！それとこれを持っていけ」

スッ

賊龍は懐から黄色の宝石を一刀に渡した。

一刀「いらねぇよ宝石なんて」

賊龍「これはただの宝石じゃないドラゴンジュエルと言って七天皇将軍が一人一つずつ持つ王の証だ！必ずお前の役に立つから俺の代わりに連れていってくれ！」

スッ

賊龍は一刀にドラゴンジュエルを渡すと

賊龍「生まれ変わったら俺は一刀の仲間になりてぇな…」

ガクンッ！

一刀「賊龍…」

そして賊龍は力尽きた。

一刀「…」

賊龍の死を悲しんで黙り混む一刀に

桃香「一刀くん、先にいこうよ！賊龍さんのためにも皇龍をぶん殴らなくちゃさ！」

華琳「桃香の言う通りよ一刀、立ち上がりなさい！」

蓮華「お前がそんなに悲しんでは死んだ賊龍が悲しむぞ！」

桃香達が言うと

一刀「あぁそうだよな」

スッ！

一刀は懐にドラゴンジュエルをしまうと

一刀「賊龍！お前の仇は必ずとってやるぜ！」

スッ！

賊龍が死んで出現した光の柱を通って次の世界に向かっていった。

麗羽「（まさかブ男（一刀）さんに宝石を奪われるなんて！それにしてもこの宝石が王の証だなんて驚きましたわ！？だったら全てわたくしが持っていればわたくしは龍界の王になれますわねおーほっほっほっ！）」

麗羽も不気味に何かをたくらんでいた。

そして光の柱を通り抜けたみんなが次についた世界は

ドォーンッ！！

月「辺り一面が砂だらけですね」

詠「これじゃ砂漠じゃない！？」

一龍「どうやらここは砂漠の国、サンドランドみたいだな。この辺りには気の流れを邪魔する砂嵐があるから気の探索は不可能だぜ！」

一龍の言う通り

凪「確かにさっきから皆さんの気が読み取れませんね！？」

気の使い手である凪ですら探知できないほど砂嵐が邪魔をしていた。

そんなとき

桃香「ねぇねぇ、みんな見てよ！」

桃香が何かを見つけた。

桃香「龍界ってやっぱりすごいんだね砂漠にザリガニがいるんだもん♪アメリカザリガニ？いやここは龍界だからリュウカイザリガニかな？」

桃香は見つけたザリガニに言うが

一龍「アホッ！いくら龍界だからって砂漠にザリガニがいるかよ！そいつはな…！？」

当然のごとくそれはザリガニではなく

一龍「龍界の毒蠍（どくさそり）、ドラゴルピオだよ！？」

蠍だった。

ワサワサッ！

そして蠍達は一刀達に迫ってくる！

及川「この虫め！殺虫剤でも食らいや！」

プシューッ！

及川は殺虫剤を蠍に吹き掛けるが

人間界の殺虫剤が龍界の生物に効くわけがなくしかも…

孤狼「馬鹿野郎！蠍は虫じゃねぇよ！」

及川「そうやったん！？」

※蠍は足が八本あるので虫ではなく蜘蛛と同じ節足動物です。

一刀「だが大丈夫だ！動きが遅いからすぐ逃げられる！」

確かにドラゴルピオは動きが遅いので見つかったとしてもすぐ逃げられるのだが

ズシリッ！

一刀「えっ！？」

急に一刀の体が重くなり、足が砂にめり込んでいく

いや、一刀だけではない

桃香「きゃっ！？」

左慈「うぉっ！？」

みんなが砂にめり込んでいるのだ。

愛紗「これではまともに動けない！？」

シャオ「ヤバイよ！？蠍が来ちゃうよ！？」

そしてそんな状態で逃げられるわけがなく

ワサワサッ！

一刀「くっそー！」

ブスブスッ！

みんなは蠍に刺されてしまった。

そして刺されたみんなは

沙和「体の調子がおかしいなの～！？」

美羽「七乃～、苦しいのじゃ蜂蜜水を用意するのじゃ～！？」

七乃「私も苦しいから無理です～！？」

いきなり体がしびれて苦しみだした。

一刀「（おかしいぞ！？体が苦しむだけならともかく気まで練れないなんて！？）」

普通は体がボロボロになっても少しの気ならば練れるのだがそれすらできないのだ。

そんなとき

？「フフフッ！ドラゴルピオの猛毒に手も足もでないとはな」

砂の中から声が聞こえてきた。

左慈「誰だ！出てきやがれ！」

すると

ザバッ！

砂の中から黒髪ロング、ねずみ色の鎧を着た龍が飛び出してきた。

砂龍「はじめまして人間界の諸君、我が名は七天皇将軍一の非道の策略家『重神の砂龍』だ」

砂の中から出てきたのは七天皇将軍の一人だった。

砂龍「我の得意技は重力を操ること、貴様らはまんまと我の重力波にかかって動きが鈍くなったところを…」

スッ

砂龍は蠍を手のひらにのせると

砂龍「この龍界一の猛毒の持ち主、ドラゴルピオに刺されたというわけさ！」

体の動きがおかしくなったのは砂龍のせいだったのだ。

砂龍「貴様らが二十歳未満の学生集団でよかったよ。何故ならドラゴルピオの猛毒は二十歳以上には効かないからな！ほっておいても貴様らはあと1時間もすれば死ぬ運命なのさ！」

もちろん一刀達が学生集団だと知っていて砂龍はドラゴルピオを仕掛けたのだった。

砂龍「おや～、戦いを始めようというのに貴様ら全員が戦えないのでは我の不戦勝のようだな～。これでは我の持つ解毒薬も手に入れられないわけか～」

一刀「この野郎…！」

こんな悪どい奴はブン殴らなければ気がすまない一刀だが体がしびれていては戦うこともできない。

だが砂龍には一つだけ誤算があった。

それは…

孤狼「なるほどな、大人には効かない毒か！」

砂龍「なっ！？」

すくっ！　すくっ！

この場には二十歳以上が数名いたことを砂龍は知らなかったのだ。

砂龍「貴様ら、倒れたふりをしていたのか！？」

孤狼「その通り、あわよくばお前が解毒方法を教えてくれると思ってな」

この場で立ち上がったのは孤狼の他に

雪蓮「まさかホントに解毒方法を教えてくれるとはね♪」

冥琳「案外馬鹿なのかもしれないな」

祭「わしは初めて年をとってよかったと思ったぞ」

桔梗「意外と役に立つものだな」

紫苑「璃々、しっかりしなさい」

教師であった冥琳、祭、桔梗、紫苑と女子寮管理人の雪蓮だった。

ちなみに孤狼は学年は3年だが修行によって出席日数が足りなく留年を繰り返していたため年齢は二十歳を越えていたのだった。

一刀「兄貴、すまない」

孤狼「気にするな！お前達は休んでいてくれ、あいつは俺が倒すからよ！」

そして無事な孤狼達が砂龍に挑むことになったのだが

紫苑「私は璃々を見なくてはいけませんので」

桔梗「わしは他のやつらの看病せねばいかんからのう」

紫苑、桔梗が降りることになり

雪蓮「となると私達４人で戦うことになるのね」

祭「まぁ、わしらにかかればあんな奴軽く倒せるじゃろうて」

冥琳「在学時代最強トリオと呼ばれた実力を見せてあげましょう！」

孤狼「よっしゃ！いくぜ！」

４人で挑もうとするのだが

実はこの場にもう一人無事な奴がいた。それは…

及川「ようやく重力から解放されたで！」

全員『えっ！？』

みんなは及川が無事なことに驚く

砂龍「貴様、ドラゴルピオに刺されても平気なのか！？」

砂龍が聞くと

及川「こいつほんまに蠍なんか？刺した途端にこいつの方からくたばりおったで」

ぶら～んっ

及川の手には死んだドラゴルピオがぶら下げられていた。

一刀「そういえば寮に蚊が入ってきた時も及川を刺した蚊は死んでいたな！？」

恐るべし及川の体！？

ちなみにさっきまで重力波が張られていたので動けなかっただけである。

孤狼「仕方ねぇ」

グイッ！

及川「へっ！？」

孤狼は及川の襟をつかむと

孤狼「数あわせだ。お前も少しは人の役に立ちやがれ！」

及川「な～っ！？」

孤狼は及川を無理矢理戦いに参加させるのだった。

１２８時間目「第六の国サンドランド」（後書き）

雪蓮「はぁい雪蓮よ♪まさか連続女子寮覗き魔の及川くんが選ばれるなんて驚きだわ！？そして砂龍と戦おうとする私達の戦いが始まる。次回、『最強のメンバー？』私達は無敵のメンバーよ！」

飛琳「飛琳先生と軍師達のキャラ紹介コーナー」

飛琳「はじめに言っておきますがこちらに書かれている情報は現在までの情報だから後に変わることがあるので注意しようね」

桂花「フンッ！だったら最初から書けばいいのよ！それで今回は誰なんですか？」

飛琳「第二弾はこの人です！」

及川（たすく）祐

漢組　２年　１８歳

武器・武器マニアのおじさんから借りた武器

好きなもの：美女、爆乳

嫌いなもの：オカマ、性格の悪い女、桂花、イケメン

弱点：オカマのキス

この小説の脇役であり一刀の親友でその仲はエログッズを借りあう

ほど、長編が始まると相手の攻撃を受けるが不死身なため死ぬことはない。体が臭くおまけに毒もあり、及川を食べようとしたピラニアを退かしたり、蠍に刺されても返り討ちにするほど。桂花とは幼稚園からの付き合いだが犬猿の仲。相手の幸せを破壊する幸せクラッシャーの異名を持つ。女には好かれようとしているが墓穴を掘ってしまい学園女子全員から嫌われている。メスゴリラやチョウチンアンコウによく好かれる。頭が悪く成績は漢組最低。
家族はゴジラ似のおかんと成績優秀な弟がいる。武力はない
大阪出身

飛琳「どうかな桂花？」

桂花「どうって…みんな私が知ってることよ！」

飛琳「ほほぅ、徹底的に調べあげていると」

桂花「ちがーう！＃」

１２９時間目「最強のメンバー？」（前書き）

一刀「賊龍を無惨にも殺したのは龍界の皇帝である皇龍だった。皇龍の仲間を仲間だと思っていない態度に腹を立てた俺は必ず皇龍を殴ると宣言した。その時、賊龍は死ぬ寸前に懐からドラゴンジュエルという宝石をもらい次の世界に向かう俺達、そしてたどり着いた先は砂だらけの砂漠の世界サンドランド。そして俺達はついて早々蠍に襲われそうになり逃げようとするも急に体が重くなり蠍に刺されてしまう。そして蠍の毒により動けなくなった俺達の前に七天皇将軍の一人、砂龍が現れる。実は体が重くなったのは砂龍の能力のせいだった。非道な砂龍に怒る俺だが体が毒で動けず悔しく思う。だが蠍の毒は歳上である兄貴（孤狼）、雪蓮女子寮管理人、冥琳先生、祭先生が戦うことになるが残りの一人は蠍の毒が効かなかった及川が選ばれたのだった」

2021

１２９時間目「最強のメンバー？」

龍界での戦いに偶然生き残った及川が選ばれたのだが

及川「嫌やーっ！わいはかずピー達と違ってか弱い普通の人間やねんであんな龍なんかと戦ったら死んでしまうがな～！？」

どうしても戦いたくない及川

孤狼「蠍（さそり）の毒が効かない奴のどこがか弱い人間だよ！お前も男なら覚悟決めやがれ！」

孤狼が戦うよう言うが

及川「男やから戦えというならチ〇コ切って女になったる～！？」

孤狼「この野郎！この場で死にたいようだな！＃」

戦いを嫌がる及川にキレた孤狼が殴ろうとすると

于吉「こ…孤狼さん、殴る必要ないですよ。及川、ちょっとこっちに来てください」

蠍の毒に苦しむ于吉が及川を近くに寄らせる

及川「なんやねんうっきー？悪いがわいは戦いなんてごめん…」

及川が最後まで言おうとすると

于吉「あなた何を考えてるんですかせっかくのいいチャンスですのに（ひそひそ）」

及川の耳元で于吉が何かを話していく

于吉「考えてもみてくださいよ！この場にはあなたの好きな巨乳美女がたくさんいるんですよ（ひそひそ）」

フランチェスカの女子生徒は一部を除いて他校の男子から告白されるほどの美女揃いである。

于吉「肝心の一刀が動けない今がチャンスですよ！ここで及川が活躍するようなことがあれば！（ひそひそ）」

及川「わいが活躍…」

モワ～ッ

～及川の妄想～

及川「この砂龍め！このわいが成敗してくれる！」

ドカッ！

砂龍「ぐほっ！？まさかこの我が殺られるとは！？どうやら貴様らの中で一番強いのは北郷ではなく貴様のようだったな…」

バタッ！

及川の拳を食らって倒れる砂龍

その直後…

桃香「及川くんすっごーい！」

蓮華「一刀と比べたら月とすっぽんの実力だわ！」

華琳「私をあなたの奥さんにして！」

ドドドォーッ！！

次々と及川に迫り来る女子達

及川「がっはっはっ！これでわいの夢であるハーレムランドの完成や！」

～妄想終了～

この妄想を思い浮かべた及川は

及川「わいの力を見せたるで！」

ドォーンッ！！

急にやる気を出した。

左慈「お前、及川に何を言ったんだ？」

于吉「秘密です♪」

漢組　于吉武人

言葉巧みに人をその気にさせる達人

砂龍「それじゃあ数が揃ったところで始めよう」

パチンッ！

砂龍が指を弾くと

ザザザーッ！！

孤狼「なんだこりゃ！？」

雪蓮「どうなっているの！？」

バンッ！

砂でできた外壁が砂龍と孤狼達を囲んでいき、上空を残して外壁の中が見えなくなってしまった。

砂龍「我を倒さねばここから出ることはできんぞ！さぁ孤立無援のデスマッチの始まりだ！」

孤狼「なるほど俺達以外の誰かの助けが借りられないわけか、その方が好きに暴れられるぜ！」

雪蓮「戦いだなんて久しぶりね」

冥琳「策なら任しておきなさい！」

祭「腕がなるのぅ！」

やる気が入る四人に対し

及川「（やっぱ逃げときゃよかった！？）」

びびりまくる及川だった。

外壁の外

左慈「あのメンバーで大丈夫かよ！？絶対及川が足を引っ張るぜ」

一刀達が外壁の中にいる孤狼達を心配していると

蓮華「まぁ姉様達がいるから大丈夫だろう。姉様は普段は女子寮管理人室でせんべい食べながらテレビを見ているぐうたら者だが、戦いになれば最強クラスだからな！」

シャオ「冥琳先生だって頭脳なら在学時代は三年間学園トップの秀才児だったし、祭先生は弓道の達人だしね」

亞莎「あの三人は在学時代人よんで『紅の三流星』と呼ばれる最強トリオだったわけですし」

その三人と強い孤狼がいれば勝利は確実だろうが

一刀「いや、及川も自分もわかってない秘技があるんだ。それを使えば奴は俺より強いぜ！」

一刀が及川を誉めるような発言をすると

桃香「その秘技ってなんなの？」

一刀「それはだな…」

その頃、外壁の中

砂龍「さて、お前達に一つ教えておこう。我が操れるのは重力だけではない！」

スッ！

砂龍が手をあげると

ゴゴゴッ…！！

いきなり大きな岩が浮かび上がった。

砂龍「ご覧の通り我は重力だけでなく岩や砂を操ることができるのだよ」

砂龍が自分の能力を教えると

及川「自分の能力教えてくれるなんてあんたいい奴やな～！」

及川が砂龍を誉めるが

砂龍「そりゃ当然さ、これから死ぬ奴が疑問を感じて死ぬなんて大変だからな」

及川「なるほど、これから死ぬ奴…ってわいらのことかい！？」

今頃気づく及川だった。

孤狼「お前の中では俺達が倒されるみたいだがあいにく俺達は簡単には殺られねぇぜ！」

砂龍「それは結構、難易度が高いほどゲームは面白いものさ！」

ブォンッ！！

砂龍は浮かべた岩を孤狼に投げつけてきた。

冥琳「危ないぞ避けるんだ！」

だが孤狼は

孤狼「こんなの避けるまでもねぇよ」

ガシッ！

及川「えっ！？」

孤狼は及川を襟首をつかむと

孤狼「及川、お前の出番だぜ！」

ブォンッ！！

及川「なーっ！？」

何と！？孤狼は岩めがけて及川を投げ飛ばした。

そして当然

ドグボッ！！ガッシャーン！

孤狼が全力で投げたことによりスピードがついた及川は岩を砕いたが

ボロッ　　ぼてっ

及川の顔がおかしくなってしまい、そのまま及川は落ちていった。

砂龍「フンッ！皇龍様に『仲間を大事にしない奴は許さない！』と言った奴の仲間が仲間を大事にしないんじゃおかしいな」

砂龍は孤狼を馬鹿にするが

孤狼「その場合は仲間が死んだときに使われるもんだ。だが見てみろよ」

スッ！

孤狼が指差した先には

がばっ！

及川「いきなり何すんねん！＃」

バァーンッ！！

血が流れているが無事な及川が起き上がり自分を粗末にした孤狼に怒鳴っていた。

砂龍「どうなって！？…ははん、さては急所をうまく外したようだな。だったらこれでどうだ！」

パチンッ！

砂龍が指を弾くと

ザバッ！

及川「えっ！？」

及川の足元にあった砂が及川を動けないよう捕らえる。

砂龍「さっきはうまく急所を外したようだが今度はそういかんぞ！」

スッ！

そして砂龍が及川に近寄ると

砂龍「『サンドバッグ』！」

ドカカカーッ！！

及川「ぐほほーっ！？」

身動きのとれない及川は文字通りサンドバッグと化して砂龍に殴られ続ける。

冥琳「貴様よくも！」

スッ！

冥琳が及川を助けにいこうとするが

雪蓮「よしなさいよ冥琳、あなたあの子の力を知らないの？」

冥琳「ハッ？」

冥琳が？を浮かべていると

砂龍「フィニッシュ！」

ドグボッ！！

及川「ぐほっ！？」

ばたりっ！

及川は砂龍の連続パンチを受けて倒れた。

砂龍「今度こそ動けまい！」

ところが

雪蓮「及川くん、冥琳の胸が丸見えよ♪」

ガバッ！

冥琳「なっ！？／／／」

雪蓮が冥琳の胸元を広げると

すくっ！

及川「おっぱい～！」

すでにボロボロなはずの及川がゾンビのように立ち上がった。

砂龍「こいつ一体！？」

砂龍が及川はホントに人間なのかと驚いていると

雪蓮「この子はね、不死身の体をもっているのよ、女体を見れば死ぬ寸前でも復活するのよ♪」

ちなみに死なない理由は及川がギャグキャラだからである。

今まで及川は焔、デーヴァ、鬼龍の攻撃を初めに受けてきたが少し入院するだけだったのだ。（常人なら死んでいます）

そして雪蓮が説明したあと

ガツンッ！☆ミ

雪蓮は冥琳に殴られた。

雪蓮「痛いじゃないの冥琳！」

冥琳「何が痛いだ！人の胸を勝手に見せるな！＃」

雪蓮「おっぱいくらい見せたって減るもんじゃないしいいじゃない！」

冥琳「だったらお前が見せろ！」

雪蓮「それだと面白くないじゃない♪」

二人がギャーギャー騒いでいると

砂龍「何を騒いでるんだ？」

さすがの砂龍も呆れていた。

そして砂龍が油断したとき

祭「戦場では…」

グッ！

祭「油断は命取りじゃ！」

ヒュンッ！　ザクッ！

砂龍「ぐふっ！？」

雪蓮と冥琳の口論を見て油断した砂龍は後ろからきた祭の気配に気づかず祭の弓を食らってしまった。

及川「お前ホントに七天皇将軍か?はっきり言うと弱いんやで♪」

確かに今までの敵と比べたら何かが物足りない

だが

ピキッ!#

強い孤狼ならともかく一番弱い及川にバカにされた砂龍は怒る。

砂龍「遊びはこれまでだ!我の真の力を見せてやる!」

スッ!

砂龍は両手をあげて

砂龍「『ヘヴィグラビティ』!」

ブォンッ!!

おもいっきり下げると

ズシンッ!!

雪蓮「何なのよこれ!?」

孤狼「体が重いぜ！？」

五人の体は立てないくらいになってしまい倒れてしまった。

砂龍「フフフッ！我は重力を操ることができると言っただろう。貴様らの重力を千倍にしたのさ！直に貴様らはせんべいのように潰れてしまうのさ！」

砂龍が言うと

及川「砂龍様、わいは砂龍様に仕えますからわいだけでも助けて…」

砂龍「貴様はいらん！この際だから貴様の体がどこまでもつのか実験してやろう」

ズシンッ！！

及川「ギャー！？」

砂龍は及川にかけた重力をさらに強くした。及川の自業自得である。

そんなとき

孤狼「フフフッ…」

砂龍「何がおかしい！」

孤狼が潰されながらも笑うと

孤狼「前のデーヴァの戦いには参加できなかったがこの龍界に来て正解だったぜ！見せてやるよ俺の新たな力を！」

１２９時間目「最強のメンバー？」（後書き）

冥琳「冥琳だ。及川のせいで本気になってしまった砂龍の相手をすることになった孤狼、そして孤狼は修行によって会得した新たな力を見せるのだった。次回、『孤狼の超進化』頼むぞ孤狼！」

飛琳「飛琳先生と軍師達のキャラ紹介コーナー」

雛里「あわわ、今回は誰が出るんでしゅか！？」

飛琳「今回はこの人だ！」

華佗（げんか）元化漢組２年

武器・針

好きなもの：五斗米道を正しく発音できる人、いい骨並び、健康な人

嫌いなもの：医術を悪用する人、解明できない病気、不潔な人

弱点：大鎌（前に華琳の診察をして殺されそうになりそれ以降トラウマに）

一刀達の中では比較的真面目な生徒。五斗米道武術を使え、医術も完璧！実は一日に二回お風呂に入るほどきれい好き。女を見る時は外見より内面（骨格）を見るタイプ。ゴッドヴェイドォーと正しく発音しないとキレる。

飛琳「それでは雛里ちゃんも五斗米道を言ってみよう♪」

雛里「えっ!?ごと…」

華佗「ちがーう!ゴッドヴェイドォーだ!」

雛里「あわわ~!」

１３０時間目「孤狼の超進化」（前書き）

一刀「みんなの看病をするため残った紫苑先生と桔梗先生以外のメンバー、兄貴（孤狼）、雪蓮、冥琳先生、祭先生、そして及川が砂龍と戦うことになった。戦いを嫌がる及川（理由は死にたくないため）をどうにか于吉が言葉巧みに騙し混んで戦いが始まった。そして砂龍は外部から影響を受けない舞台にして岩を投げつけるが兄貴は岩を及川で防いだ。だが死なない及川を不思議に思った砂龍は及川に攻撃を繰り出しまくるが不死身の及川には効かず、さらには雪蓮達にからかわれる戦いが続くなか及川が砂龍をバカにした発言をした途端、砂龍は兄貴達に重力攻撃を仕掛けたのだった。だが重力で潰されるなか兄貴は新たな力を見せてやると言うのだった」

１３０時間目「孤狼の超進化」

孤狼「俺の新たな力を見せてやる！」

孤狼が砂龍の重力で潰されながら言うと

及川「さすがは兄貴、黒神の力を越えたんやな！」

孤狼よりさらに強い重力をかけられた及川が言うと

孤狼「バ～カ♪黒神の力は捨てちまったよ」

孤狼が言うと

及川「えーっ！？何で捨てんねん！？もったいないことを！？」

孤狼「仕方ねぇだろう、強い力を求めるには今ある力を捨てなきゃならない時もあるんだよ！」

二人が話していると

砂龍「ほぅ、ならばその力を見せてもらおうか、でも見せる前に我の重力で潰れてしまうがな！」

ズシンッ！！

砂龍はさらにみんなにかけている重力を強めた。

冥琳「くっ！？体がもうもたない！？」

雪蓮「これ以上重力かけられたらおっぱいつぶれちゃう～！？」

及川「わいなんて死んでまう～！？」

みんなより強い重力をかけられている及川は他のみんなより潰れそうだった。

そんななか

ゴゴゴッ…！！

孤狼だけは潰されまいと耐えていた。

砂龍「我の重力に耐えきれるとは流石に大口をたたくだけはあるな。だが、いつまでもつかな？」

ズシンッ！！

砂龍は孤狼にかけている重力を及川以上にかけた。

だが孤狼は

孤狼「こんなもん！屁でもねぇよ！」

足元が少し砂に埋もれながらも必死に耐えていた。

孤狼「（俺はこんなところで負けるわけにはいかねぇんだ！俺がもし負けるとしたら相手はただ一人、一刀のみなんだよ！）」

ここで話は昔に戻る。

今から二十年ほど前

ワォーンワォーンッ！

一軒のうどん屋にて狼の鳴き声が聞こえたかと思ったら

孤狼母「赤ちゃんが生まれたよ　」

孤狼親父「おぎゃーっ！ではなく狼の鳴き声とはな！？こいつの名前は孤狼にしよう！　」

楠舞孤狼　生まれる

孤狼は同時期産まれた子に比べて歩いたり話すのが早かった。

そして小学校高学年にて高校初期の問題が解けたことにより周りから神童と呼ばれる日々が続いた。

だが孤狼は周りから天才と呼ばれるのが嫌で

ドカッ！

男「ぐほっ！？　」

孤狼「あんたが売ってきた喧嘩だろ、さぁ早く立てよ！　」

喧嘩に明け暮れる日々が続いていた。（当時中１）

だが孤狼が相手をしてきた相手は悪人が多かったため孤狼は学園の救世主になったのだが

孤狼「この県には俺より強いやつがいないから他県にいって相手をして来るぜ！」

と言って毎月修行の繰り返しをしていた。（そのため出席日数が足りなく留年の繰返し）

そんなある日、孤狼が修行にいっている間に一刀達四天王が学園最強と呼ばれるようになっていた。

孤狼「（面白いじゃねぇか！相手にとって不足はないぜ！）」

そして一刀達に挑む孤狼だった（６４話参照）

そしてその結果、孤狼と一刀達に友情が芽生えて

孤狼「俺のことは兄貴って呼びな！」

一刀達『はいっ兄貴！』

その実力と心から一刀達に兄貴と呼ばれるようになった。

孤狼「（あの日から決めたんだ！俺は一刀達のために強くなるってな！）」

孤狼「（そのために俺は今まで苦労して手に入れた黒神の力を捨ててまで新たな力を手に入れたんだ！）」

ここでまた話は過去に戻る。

デーヴァとの戦いが終わった時の頃

ドラグーンナイツから超進化の話を聞いた孤狼は超進化の力を手にいれるため自力で竜宮神殿にたどり着いていた。

竜宮神殿

白龍「なんじゃお前は!?どうしてここにおる!?」

竜宮神殿の主人・白龍（パイロン・正体は項羽）

孤狼「んなことはどうでもいい、俺に超進化の力を寄越せ!あんたが力をくれるってロビンから聞いたんだよ!」

エドガー・ロビン…ドラグーンナイツの一人。イギリスで女王警護をしていた時に孤狼と遭遇

孤狼が白龍に聞くと

白龍「超進化を得るかどうかはわしが調べることじゃ!だが、お前に龍はやどれんよ」

孤狼「何故だよ!自分で言うのもなんだが力には自信あるぜ!」

白龍「馬鹿者!力だけで超進化できるならすでにお前の学園の生徒ほとんどができるわい!」

確かにその通りなのかもしれない

白龍「確かにお前には力ならば十分なくらいある。だがお前の中に闇の力がある、闇の力を持つものは超進化できん！超進化は光の力だからな！」

ビシッ！

白龍「（闇の龍なら一匹だけいるがあいつは危険だ！？）」

孤狼相手に白龍が言うと

孤狼「だったらよう、俺は今まで手に入れた闇の力を捨てても構わねぇ！超進化の力をくれ！」

バンッ！

孤狼が叫ぶと

？「変わった人間だな」

何処からか声が聞こえてきた。

声の出所を探してみると

？「うす汚ねぇ人間のなかにもお前のように自分よりも他人を守るために強くなろうっていうやつがいるとはな」

ドォンッ！！

声は黒くデカイ檻の中から聞こえているようだ。

？「人間よ、お前に宿る闇を払うっていうのなら手を貸してやるぜ！」

檻の中の誰かがいうと

白龍「馬鹿者！お前は闇の心を持つがゆえに封じられた身だぞ！勝手なことをいう…」

白龍が最後まで言おうとすると

孤狼「面白い！いいぜとりあえずお前の言う通り今まで手に入れた黒神の力を捨ててやる！新たな力を手にいれられるのならな！」

ビシッ！

孤狼が言うと

覇龍神「よかろう人間よ、我が名は覇龍神！共に暴れてくれようぞ！」

そして孤狼は黒神の力を捨ててまで超進化の力を手に入れたのだった。

現在

孤狼「こんな重力なんて屁でもねぇよ！」

バチンッ！

砂龍「なにっ！？」

孤狼は自力で砂龍のかけた重力を解き放った。

孤狼「見せてやるよ！俺の新たな力をよ！」

ゴォッ！！

そして孤狼の体を黒い気と白い気が包み込んでいく。

及川「（あれじゃまるでかずピー達がつかってる超進化やんか！？）」

そして気の中から

バッキーンッ！！

孤狼「これが俺の超進化…」

孤狼「闇覇龍神だ！」

バンッ！

超進化した孤狼が現れた。

砂龍「フンッ！それくらいで我が驚くとでも思っていたのか、超進化ごときでは我らに勝てないことを忘れたのか！」

確かに超進化で七天皇将軍を倒せるのなら焔だって楽に倒せたはずだ。

孤狼「それくらいわかってるんだよ！だったらさらに力をあげるしかねぇだろ！」

ボンッ！！

孤狼はさらに力を高め！姿は身体全体に龍の鱗、右手に黒い龍、左手には白い龍を構え、背中には灰色の翼と黒白の二本の尾を生やした姿になった。

孤狼「これが俺だけにしかできない力、一刀達でいう究極進化ってところか、名付けて『二重超進化』ってわけだ！」

バンッ！

なんと孤狼は二体の龍と超進化しているのだ。

覇龍神「孤狼よ！あとは任しておけ！」

そして孤狼の中には覇龍神と

混沌龍「我ら二人が手を貸してやるぜ！」

龍界に来るまえに手に入れた混沌龍が宿っていた。

孤狼「いくぜ野郎共！あいつをぶっ倒すぜ！」

覇龍神・混沌龍『うむっ！』

砂龍「バカなやつだ！超進化でさえ一つ間違えば身を滅ぼすような

もの、二体もいれば身体がバラバラになるぞ！」

砂龍が言うと

孤狼「俺はどうなっても構わねぇ、たとえ死んだとしても仲間を守って死ぬなら本望だ！」

シュンッ！

砂龍「なっ！？」

孤狼は砂龍にも見えないくらい高速移動すると

ドカカカカーッ！！

孤狼「『混沌狼乱打』！」

いきなり現れた渾身の拳の連打を食らわした。

そして

砂龍「ぐほっ！？」

バタッ！

砂龍は倒れた。

孤狼「一刀の高速移動に比べたらまだまだのようだな」

及川「兄貴つえーっ！？」

雪蓮「（強い男は好きよ♪一刀もいいけど年下はちょっとね）」

※この小説の雪蓮は一刀より歳上です

孤狼は砂龍に勝利し、みんなにかけられていた重力も解放された。

孤狼「さてとあとはこいつから解毒剤を手にいれて…」

孤狼が砂龍から解毒剤を取るために触れようとすると

孤狼「ぐほっ!?」

バタッ！　シュンッ

孤狼は二重超進化を解いて血を吐いて倒れた。

冥琳「どうした孤狼!?」

祭「怪我でもしたのか!?」

だがあの戦いで孤狼は砂龍から攻撃を受けた様子は全くない

孤狼「（やっぱ早期決戦つけるためとはいえあの力はまだ身体が馴染んでいないようだな、ずきずき痛みやがるぜ!?）」

それでも孤狼は砂龍から解毒剤を取ろうと身体を動かす。

だがそのとき

ガシッ！

砂龍「七天皇将軍はただでは死なん！」

倒れたと思われた砂龍が孤狼をつかむと

砂龍「我が負けたのだからおとなしく解毒剤は渡してやろう。だが貴様はここで死ぬのだ！」

ゴォッ！！

そして砂龍は右手からブラックホールのようなものを作り出した。

１３０時間目「孤狼の超進化」（後書き）

麗羽「おーほっほっほっ！麗羽ですわ。砂龍は孤狼と共に消え去ってしまいブ男（一刀）さん達は次の世界に向かいましたの、次の世界はきれいなオーロラの輝くサンシャインランド。ついた私達は地元の龍に案内されたどり着いた先は…次回、『第七の国サンシャインランド』ところで何故わたくしが予告をしてますの？」

飛琳「飛琳先生と軍師達のキャラ紹介コーナー」

稟「今回は誰なのですか？」

飛琳「今回はこの人だ！」

左慈元放（げんほう）

漢組　２年

好きなもの：強いやつの相手、格ゲー、サッカー

嫌いなもの：あまえっ子、弱いやつ、世界史

弱点：于吉、赤子

一刀が来る前までは漢組の中でも実力は高い方だった。足技が得意。女には興味がなく中学時代に助けてから于吉にまとわりつかれている。父親は武者修行の旅に出ている。

飛琳「稟ちゃん想像してごらん、左慈と于吉が裸で抱き合っている

姿をさ　」

稟「左慈と于吉が裸で抱き合う…ブホーッ！！」

１３１時間目「第七の国サンシャインランド」（前書き）

一刀「兄貴が新たな力を見せると宣言し驚く及川、だが兄貴が手に入れた力は更なる黒神ではなく超進化だった。兄貴が超進化を手に入れるきっかけを思いだし兄貴は超進化をする。だが兄貴の超進化は並のものではなく、二重超進化と呼ばれる超進化を進化させたものだった。そして二重超進化した兄貴に敵はなく砂龍を簡単に倒したのだが倒したと思っていた砂龍は何かを企んでいた」

１３１時間目「第七の国サンシャインランド」

ガシッ！

砂龍「我は七天皇将軍一の非道な策略家、こんなところで負けるわけにはいかんのだ！」

倒されたと思われた砂龍が孤狼が逃げられないよう手をおもいっきり掴む

孤狼「この野郎、何する気だよ離しやがれ！？」

ぐいぐいっ！

孤狼は砂龍から離れようと手を引っ張るがなかなか離れない。

普段の孤狼ならば楽に抜けられるのだが先程の二重超進化の影響で体に痛みが走りダメージができていたため簡単には抜けなかった。

砂龍「我と共にくたばろう！」

シュッ！

ブォンッ！！

砂龍は手からブラックホールのようなものを作り出した。

砂龍「これは我の重力で作り上げた『重力空間（グラビティゾーン）』。この中に入ったが最後、最大級の重力で潰されるのさ！さぁ、我と共に死のう」

ズズズッ…

重力空間は砂龍と孤狼を引きずり込んでいく

孤狼「ちっ！俺と共に死のうってわけかよ、だがな！」

グイッ！

孤狼は砂龍の懐に手を入れると

シュッ！

孤狼「これだけは渡してもらうぜ！」

バンッ！

孤狼の手にはドラゴルピオの解毒剤が握られていた。

砂龍「貴様！？自分を犠牲にしてまで他人を助けようというのか！？」

砂龍が孤狼の行動に驚くと

孤狼「犠牲？馬鹿いうんじゃねぇよ！俺は必ず帰るんだ！仲間が待っているからな！」

そして孤狼は

孤狼「雪蓮、あとは頼むぜ！」

シュッ！　　ポトッ！

雪蓮「孤狼！？」

雪蓮の近くに解毒剤を投げると

孤狼「一刀に言っといてくれ！必ず俺の分まで皇龍の奴をぶん殴ってくれってな！」

ギュオンッ！

そして孤狼と砂龍は重力空間に吸い込まれていった。

雪蓮「孤狼ーっ！？」

そしてその時

ゴゴゴッ…！！

ドドドォーッ！！

砂龍の気配が消えたことにより砂の外壁が消滅した。

左慈「見ろよ！？外壁が消えていくぜ！？」

鈴々「ということは孤狼のお兄ちゃん達が勝ったのだ！」

孤狼達の勝利を喜ぶみんな

だが

ズランッ！

五人いるはずの人影が四人しかなかった。

愛紗「あの変態（及川）は死んでしまったか」

于吉「及川、普段は鬱陶しい（うっとうしい）人ですが人は死んで初めて価値がわかるようなものなんですね」

及川「生きとるわいっ！＃」

冥琳「そんなことより早く解毒剤を！」

ゴクゴクンッ！

桃香「体がやっと回復したよ～♪」

華琳「まだ少しふらつくけどましな方ね」

蓮華「ところで姉様、孤狼はどうしたんですか？」

蓮華が雪蓮に聞くと

雪蓮「孤狼は…」

雪蓮は孤狼がどうなったのかを説明すると

星「なんと！？あのような強きものが！？」

雛里「自分を犠牲にしてまで他人を助けようなんてさすが男でしゅ～！」

桂花「全身精液変態馬鹿丸出し眼鏡男（及川）には絶対できないことだわ」

及川「うっさいわい！この貧乳猫耳女！わいだって頑張ったんやで！」

確かに及川は砂龍の攻撃に耐えまくっていたが及川が砂龍を挑発しなければあんなことにはならなかったかもしれない。

一刀「…」

孤狼の最後を聞いた一刀は黙り混んだ。

桃香「（一刀くん可哀想、兄貴って慕っていた人が亡くなったんだから仕方ないよね、慰めてあげよう♪）」

と思いつつちゃっかり一刀の好感度をあげようとする桃香

だが一足遅く

月「一刀さん元気出してくださいよ」

ズコッ！

月が先に一刀を慰めていたことにずっこける桃香

月「一刀さんがそんな調子じゃあ何のために孤狼さんが命を捨てたと思ってるんですか！しっかりしてくださいよ！」

月が一刀を慰めていると

一刀「…ガハッ」

月「？」

一刀「ガーハッハッハッ！」

月「へぅっ！？」

突然大笑いする一刀に驚く月

詠「ちょっとアンタ！月が慰めているのに何笑ってるのよ！＃」

そのことに対して詠が一刀に怒ると

一刀「ごめんごめん、でも俺だって兄貴が死んだなんて思ってないさ、だって兄貴は約束は必ず守る人だから兄貴が帰るって言うなら帰ってくるのさ！」

一刀が言うと

一刀「ありがとう月」

ぎゅっ！

一刀は月にお礼として月の手を握った。

その瞬間

ボンッ！！

月「へぅ～／／／／」

月の顔が瞬間湯沸し器のように真っ赤になり

詠「このバカチ○コ！なにどさくさ紛れに月の手を握ってるのよ！＃」

桃香「（その役は私の役だったはずなのに～！）月ちゃんだけずる～い！私も手を握ってよー！」

華琳「一刀、私を断る気じゃないでしょうね」

蓮華「わ…私の手も握ってもいいぞ！」

恋「…恋の手も握る」

凪「会長！自分も是非！／／／／」

雫「雫の手も握るなの～！」

天和「私の手も握って♪」

いつものように騒ぐ一刀大好きっ子達

左慈「いい加減にしやがれ！＃砂龍が消えたおかげで次の世界への

道が開けたんだぞ！もたもたするんじゃねぇよ！」

于吉「そうですよ。まぁ私は一刀より左慈と握手を…」

ドグボッ！！

于吉は左慈に蹴られた。

于吉「これぞ左慈の愛情表現…」

左慈「一編死にやがれ！＃」

少々ややこしいことが起きたものの、次の世界に続く光を通る一刀達

そんなとき

麗羽「（あれはどこかしら？）」

麗羽が砂龍が消えたと思われる辺りで何かを探していると

猪々子「麗羽様、何してるんっすか？」

斗詩「もうみんな先に行って残るは私達だけですよ」

二人が呼びに来た。

麗羽「ちょっと待ちなさい！コンタクトレンズを落としてしまいましたのよ！？」

猪々子「コンタクトレンズ？」

斗詩「麗羽様そんなのしてたっけ？」

麗羽「ともかく！あなた達が近づいて割ってしまったら弁償ですからね！」

猪々子「はいはい」

斗詩「わかりましたよ」

麗羽は何とか二人が来ないように言うと

麗羽「ありましたわ！」

バッ！

麗羽は砂龍のドラゴンジュエルを見つけて懐に入れた。

麗羽「フフフッ！これで5つ、あとはブ男さん（一刀）の持つ一つを奪ったあと、ブ男さん達が最後の龍を倒せば解決ですわ！おーほっほっほっ！」

猪々子「麗羽様、なに高笑いしてるんですか？」

斗詩「コンタクトレンズは見つかりましたか？」

麗羽「（はっ！？いけないいけない！）見つけましたわ、少しお待ちなさい！」

斗詩「早くしてくださいよ！もうみんな先に行っちゃったんですか

ら」

猪々子「まぁどうせアタイ達には関係ないだろうけどね」

そして麗羽達が騒ぐ前

一刀達は次の世界にたどり着いた。

一刀「何だよここは!?」

キラキランッ☆

桃香「空に光のカーテンがかかってるなんて素敵だね♪」

華琳「あれはオーロラよ、でも普通は寒いとこにしか出ないのに変わってるわね!?」

華琳が驚いていると

一龍「ここはどうやらサンシャインランドみたいだぜ、そしてこの国には最後の七天皇将軍であり、七天皇将軍最強の陽龍がいる」

一刀「（七天皇将軍最強!?）」

ザザッ!

蓮華「んっ?」

ずらりっ!

一刀達が色々言っている間に周りはたくさんの龍人兵に囲まれてしまった。

及川「完全に囲まれてるがな！？」

左慈「こんな大勢なら相手にとって不足はないぜ！」

多数相手に迎え撃とうとする一刀達

だがその時！

龍人兵達『我々に貴様らと戦う意思はない！』

龍人兵達が言うと

龍人兵達『我らが主君、陽龍様の使いで来た！』

スッ！

龍人兵達『あそこにあるサンシャインキャッスルにて我が主君、陽龍様がお待ちだ！さっさと行くがよい！』

ビシッ！

龍人兵達が指した場所は確かに城らしき物があった

及川「絶対罠やて、信じない方がいいで！」

及川が言うと

一刀「いや、どうやらホントのようだぜ!?あの城から物凄い気を感じる!?俺はいくぜ！」

スッ！

そして一刀が向かうと

桃香「一刀くんが行くなら私もいく！」

一龍「俺もいくぜ！」

一刀に続いていくみんな、そして

及川「ちょっとみんな!?わいだけ置いてかんといてな!?」

バッ！

及川もあとに続いていった。

その数分後

ドッシーンッ!!

麗羽達『いたっ!?』

一足遅く光を通って麗羽達がサンシャインランドに到着した。

斗詩「一刀さん達はいませんね」

麗羽「まったく!このわたくしを置いていくなんて何を考えてます

の！」

猪々子「麗羽様がコンタクトレンズを探していたからじゃないですか」

※猪々子達はドラゴンジュエルを探していた麗羽をコンタクトレンズを探していたと思っています。

三人がみんなの行方を探していたその時！

麗羽「あらっ、あのキラキラ輝くお城は…」

麗羽が陽龍のいるサンシャインキャッスルを発見すると

麗羽「気に入りましたわ！あの城をわたくしのものにしてみせますわ！おーほっほっほっ！」

2年C組　袁紹麗羽。欲しいものがあったらどんな手を使ってでも手に入れようとするわがまま女

麗羽「ほら猪々子、斗詩、あの城にレッツゴー！ですわ！」

猪々子「待ってくださいよ～！？」

斗詩「ちょっと待って～！？　」

麗羽達がサンシャインランドに着く前、サンシャインキャッスルにたどり着いた一刀達は

キラキラッ☆

華琳「部屋の中までキラキラだなんてね！？」

及川「陽龍って奴は悪趣味な奴やな」

及川が言うと

？「失礼、これは私の趣味でね」

！？

いきなり何処からか声が聞こえてきた。

声の場所を探してみると

？「こちらだよ」

バンッ！

一刀達の後ろにその人物がいた。

陽龍「ようこそ皆さん、私の名は陽龍。よろしくね」

そこにいたのは金髪ロングの水色の瞳をした男だった。

及川「ほんまにこいつが七天皇将軍最強なんか？何だか弱々しい感じでわいでも勝てそうやで！」

軽く言う及川だが

一龍「お前のように気を感じれない奴は幸福者だぜ！？」

及川「？」

一龍「一刀、お前ならわかるだろ陽龍の恐ろしさを」

一刀「あぁ、こいつに比べたら今までの七天皇将軍なんて弱いものだぜ！？」

陽龍「ほぅ、私をそれだけ評価してくれるとはさすがは皇龍様を殴ると言った人間だ。そうでなくては…」

ゴゴゴッ…！！

陽龍の力が増すと同時に

バァンッ！！

陽龍「倒しがいがないというものだ！」

陽龍の姿は本来の姿である獅子のような凛々しい顔立ち、赤い鎧を身に纏った二足歩行の獅子型の龍に変身した。

１３１時間目「第七の国サンシャインランド」（後書き）

桃香「桃香です。陽龍と戦うことになった私達だけど陽龍は強い者しか相手にしない主義だと言って一刀くん、一龍さん、恋ちゃん…そして志願した私ともう一人は！？次回、『最強の七天皇将軍』私だって頑張るんだもん！」

飛琳「飛琳先生と軍師達のキャラ紹介コーナー」

穏「私このコーナー大好きです～♪皆さんのことが色々と知れて…ハァハァ…もう興奮しちゃいます～」

飛琳「とにかくスタート！？」

于吉武人（たけひと）

漢組　２年

武器：術札

好きなもの：左慈！、漫画の執筆、サンドイッチ

嫌いなもの：左慈をバカにする人、

弱点：編集者のいうボツ、ピクルス

むかし左慈に助けてもらって以来左慈命の男。実はすごい実力の持ち主だが左慈の言うことしか聞かない。読書部に所属して実は月刊誌で連載している。父はオカマバーの経営者。左慈に蹴られても一

種の愛情表現だと思っている。

穏「ハァハァ…また一段と興奮しちゃいました～。飛琳先生、この興奮を解放させてくださ～い！」

飛琳「嫌だーっ！？」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9887r/

真・恋姫†無双 聖フランチェスカ学園物語

2011年11月22日02時55分発行